KAIZO

改造

十二月號

1927

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山本有三著

戯曲集 西郷と大久保

四六版 上製 定價一圓五拾錢 郵税十八錢
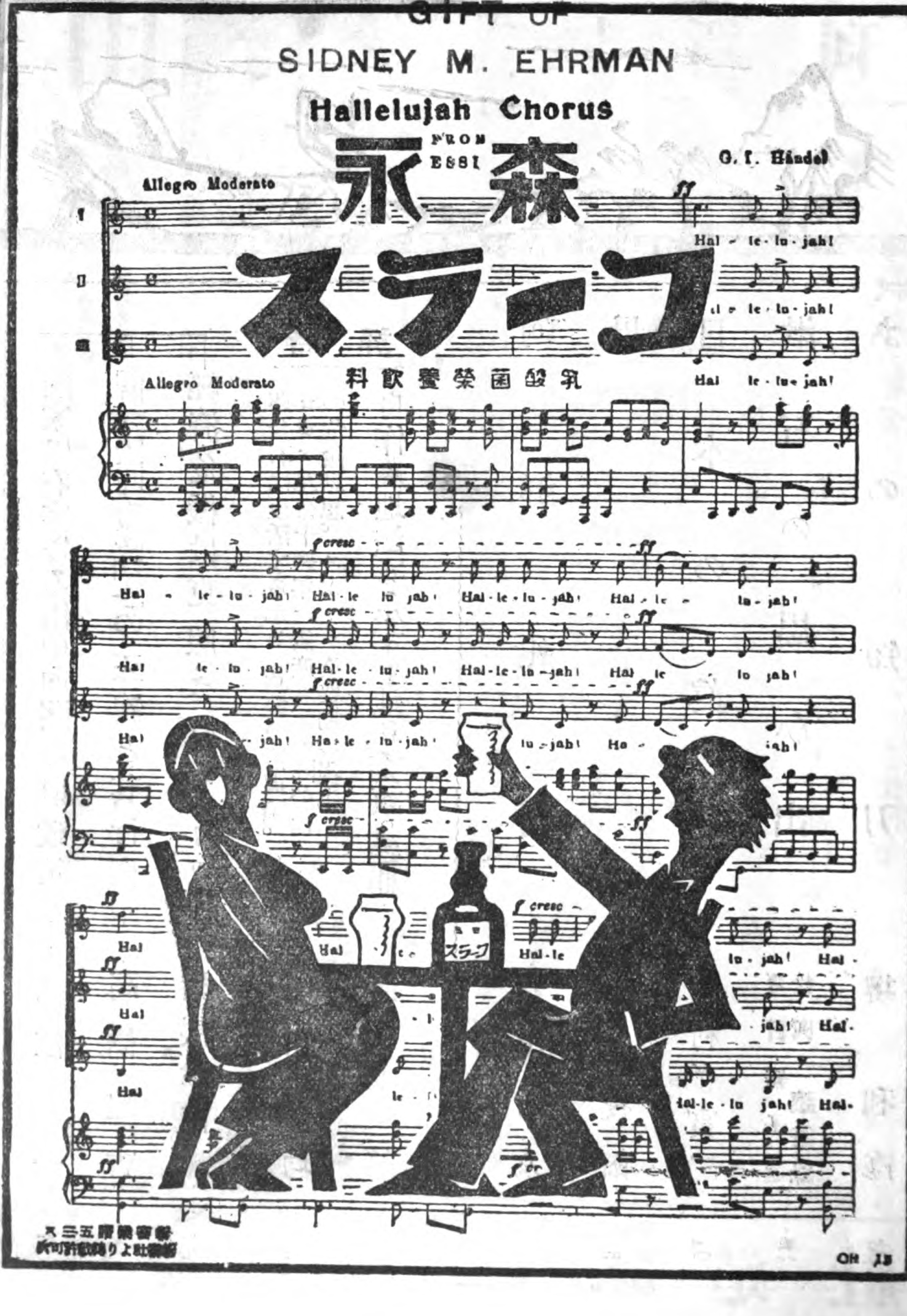
最新刊

精進、精到、よく一年一作と自重し、定石を踏み、戯曲界の雄を以つて鳴る山本氏の近作「西郷と大久保」「嘉門と七郎右衛門」「大磯がよひ」「父親」「雪」を收む。一言一字の裡にも大事をとる氏の作品が、そして史實に則したるこれ等の鉅篇が讀書子に呼びかける力と情味とは決して常鱗凡庸の作と軌を一にせず、燦然創作壇に獨歩す。亂作揃ひのこのごろ本戯曲集の如きは萬人顧愛の第一に屈せらるべき傑作集。

發兌 東京市麹町區内幸町一ノ二 振替東京八四〇〇番 改造社

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

GIFT OF
SIDNEY M. EHRMAN



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

九州帝大農學部教授
澤村康著

小作法と自作農創定法

自作農創定問題とは何か？

◆菊判布製
◆定價 送料書留

刻下問題の書

最近資本主義經濟の行詰りと共に、農民の急激なる無産階級化は、平和なる農村に各種の悲劇を醸しつゝある。農村をしてこのまゝに放任することは座して農民の自滅を待つのみだ。農村に於ける階級鬪爭の深刻化は、實に此處に原因する。されば近時政府に於て立案されつゝある農村に關する各種法案は、之等の悲境を救濟するの意圖に出でたるものに外ならぬ。しかし政府に於て立案されたる自作農創定法の如きが果して眞に農村を救濟し得るか。吾等は農村の實状を究明すると共に、法の實施との諧調を見出さねばならぬ。著者はこの點に就き獨創的な見解を有する新進の學究、小作農・自作農の今日に至る歴史的變遷を說き、英國、伊太利、米國の進歩せる法律を對照し、我國に於ける土地政策、「自作農創定の諸問題」「農林省の自作農創定維持補助規則に就て」「小作法案の要項批判」の諸論文を收め、以つて物議紛々たる農村に關する各種法案の解決に學究的熱情を吐露す。現下必讀の要書である。

東京市麴町區内幸町
東京ビルデイング一階
振替東京八四〇二一番

改造社

眞山青果著

（四六版上製）

定價壹圓五拾錢
送料二拾錢

盲魚

最新刊

自然主義の山河に育成し、漂蕩し、亦沈潜し、「盲魚」よく未梢に動ぜず、風雪を中樞に感得して實在の底をかき捜る。集纂二十篇の小説と二篇の戯曲とは、青果氏五十年の全面容を窺ふ可く、その獨自の藝術境より、その人生の深底より、紅鱗を曳かしむる絲となり、餌となる。この渦紋の擴大するところ全文壇の驚異となり、贊歎となり、現下文壇の原流に巢食ふ深刻な哀歡・苦悶を一層愛惜し、尋ねることであらう。

内容

小説——南小泉村。あの家この家。お灸屋の兄弟。茗荷畠。卓上。不產女の一生。盲魚。家鴨飼。久本氏。鬮。乳母。紫。馬（童話）。敗北者。弟の碑。男柱。男五人。壁の花。小春日。癇腫。

戯曲——第一人者。生れざりしならば。

發兌

東京市麴町區內幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二一番

改造社

地租委譲と自作農創定

かりに百歩をゆづりて地租委譲が公約より一年おくれて昭和五年度より實施さるるとして、それによりて我大衆の負擔が果して輕減さるるであらうか。また、自作農が創定されたとして現時以上に中農以下に潤ひが出でてくるであらうか。そして却つてそこに幾多のいまはしい政黨的弊害が浸潤して農村を危機に導くことはなからうか、否、自作農にもなり得ぬいくたの細民階級にどんな影響を投げかけるか。政友會は地租委譲を一枚看板として立てる政黨だけに、此問題のみには深い準備と計畫とがあらうと思はれたが、今回はしなくもそれはただ選擧に對する一時の便宜手段であつて、財源の見當もつかねば、諸法制の準備もなく、おまけに黨と政府との脈絡も全くなかつたことが暴露せられた、我々は今更ながら彼等の老猾巧智に驚かされるのみである。今年の議會切拔けさへどうかと危ぶまれる無氣力、無經綸の田中内閣が今後三年持續しようと誰が思ふものぞ。我が大衆はこの行きあたりばつたりの出鱈目に對していかに對應すべきか、加之、政略鐵道の言質は至るところに與へられ、つぶれてもをしくなき銀行、會社には多額の融資さへ傳へられてゐる。それ等の裡にいかなる魂膽が藏せられてゐるかを思ふとき我々は悚然たらざるを得ないのである。この經濟危機、財政危機に當面して窮乏にふるへながら辛うじて納稅の義務をはたす細民の多きを思ふとき、そして血と汗による粒々の辛苦さへ酬いられずに衣食にありつけぬ幾十萬の人々の昨今を思ふとき地租委譲や、自作農創定以上に緊急な問題が介在し、それに要する莫大の費目が他に轉換すべきものであることを痛切に感ずるものだ。我々としてはこの二案が延期されようが、削減されようがそこに多大の關心をもち得ないことを一言しておく。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日米不戰條約

高柳賢三

A　此の夏布哇で開かれた太平洋會議では日米不戰條約の問題が討議されたさうだな。

B　然うだ。ショットウエルと云ふコロンビヤ大學の歷史の先生が『恒久平和條約案』と題する一種の日米不戰條約案を會議に提出したのでね、それを中心としていろ〳〵の議論が出たよ。

A　全體君は、日米間に將來戰爭に導くやうな衝突の危險性があると思ふかね。

B　うん、大にあると思ふね。勿論現在のところでは日米間の大きな係爭問題と云へば移民問題位のもので、日本政府も又日本國民も移民問題を旣決の問題とは考へてゐないが、それかと云つて移民問題で日米開戰など考へてゐる奴は日本人では先づ在るまいね。然し將來世界の政局の中心が漸次太平洋に移り、勞農ロシヤ、支那、米國などの複雜な關係が絡まり、又日米間の商業關係が密接になつてくればくる程、兩國間に於ける利害の衝突も隨分起る機會が多いだらうよ。そして此等の衝突を戰爭に訴へずに解決する對策が豫め講ぜられて居らない限り、戰爭の危險性は除去されないね。だから日米兩國の關係が割合に良好な現在に於て、何んとか戰爭をしないで爭を解決する途を考へて置くことが兩國に取つて賢明だらうね。殊に現行日米仲裁條約も來年の八月に滿期と成るのだから、時期から云つても今が一番此の種の案を考へて置くのに適切だと思ふよ。

A　成程ね。然しショットウエル氏の提案なるものは例の月並の恒久平和論で、實行不能ぢやないのかね、第一主權論を眞向うから振り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

濟して、國際聯盟に加入することを拒絕する米國上院が承知しまいよ。

B　ところがね、右の提案は丁度其反對で無遠慮と思はれる程現實的だよ。

A　然うか。それならば日米不戰條約案なるものゝ大體を話して吳れないか。

B　よろしい、それならお話しよう。ショットウエル案を說明するに就ては二つの方面に分けて見ることが便宜だね。第一に日米間の恆久平和を齎らす爲の積極的な方策、仕組に關する部分で、第二は之に對する米國の留保とも見るべき部分だよ。其處で先づ第一の方面からお話しよう。ショットウエル案の骨子は「政策手段としての戰爭」を否認する點にあるので、第一條に「亞米利加合衆國及ビ…國ハ如何ナル場合ニモ他ノ一方ヲ攻擊又ハ侵略セス又ハ之ニ對シ戰爭ニ訴ヘサルコトヲ約ス」とあるのは此の主旨を言明したものだね。只相手方が此の規定に違反して攻擊、侵略、戰爭をしかけて來た場合に、之に抵抗することだけは正當防衛權の行使として除外例を認めて居るんだ。即ち第二條に「前條ノ規定ハ左ノ場合ニハ之ヲ適用セス(一)正當防衛權ノ行使即チ前條ニ定メタル約定ノ違反ニ抵抗スル場合」と云ふ除外例を置いて居るのがそれだ。

A　其點はロカルノ條約と同主旨だね。

B　然うだ。ロカルノ條約その儘さ。それで此の條約案が一名アメリカン・ロカルノと呼ばるゝわけだ。グロチウス以來戰爭を分つて、「正當なる戰爭」と「不當なる戰爭」と云ふ漠然たる區別が國際法上認められて居つたが、ロカルノ式條約の下に於ては此の分類は捨てられて、「正當防衛に基く戰爭」とそれ以外の戰爭と云ふ分類に代るわけだ。正當防衛權の行使であるかどうかは締約國の一方が決めるので、其處には無論濫用の餘地が存するが、それでも從來の「正當なる戰爭」よりもずつと範圍が狹くなつて來て居る。殊に本條約案では「但シ攻擊ヲ受ケタル一方ハ直チニ紛爭ヲ平和的處理手續ニ附シ又ハ仲裁問若シクハ司法的判決ニ從フコトヲ申出ツルコトヲ要ス」と云ふ但書がつけ加へられて居るから、正當防衛權の行使がなるべく一時的の性質を持つように、制限されて居るのだ。

A　不戰主義を原則として認めるとしても、正當防衛に就て例外を認めるのは止むを得まいね。法律秩序の完備した一國内の法律でも、正當防衛だけは認めて居るのだからね。

B　さうだ、國際法が發達して國際社會が充分法律秩序化される時代が來たとしても、此の例外だけは取れまいね。無論「人若し汝の頰を打たば他の頰も之に向けよ」と云ふ絕對的無抵抗主義の時代が來るとすれば別論だがね。それから戰爭を否定する右の主義の下に、二方面の平和維持及びその增進の方法が講じられて居る。第一は國際紛爭に關係なく積極的に平和の維持と增進とを講ずるので、その一つは國際法の漸次的法典化の促進と云ふことだ。即ち第四條に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「平和維持ニ就キ一般ニ承認セラレタル法規ノ重要ナルコトニ鑑ミ兩締約國ハ本條約ニ定メタルガ如ク政策上ノ手段トシテ戰爭ヲ否認スル基礎ノ上ニ國際法ノ漸進的法典化ノ促進ニ努ムヘキコトヲ約ス」とあるのはそれだ。その二は軍備の漸進的制限の促進で、第五條に「本條約ニヨリ達成セラレタル安全保障ノ增進ニ鑑ミ兩締約國ハ軍備ノ漸進的制限ヲ促進スルタメ相互ニ協力シ且之ガタメニ軍備制限ノ國際會議ヲ定期ニ開催シテ妥當ナル手段方法ヲ研究スヘキコトヲ約ス」とあるのがそれだ。

A　戰爭否認に依る安全保障があつて、初めて軍備制限の國際的協定の實現可能性があると云ふロジックだね。

B　さうだ、他國から戰爭をしかけられる危險性が多い國際社會で、只軍備丈を制限しろと云つても、それは注文する者の無理と云ふものだ。戰爭否認と明確な國際法規が確立して、初めて莫大な國費を軍備に費すのが自然と愚かに見えるやうになるのだ。安全保障と軍備縮少とは相提携して進まなければ實現は出來ないね。又軍縮會議を「定期」に開くことにした處に意味がある。思ひ出した樣に軍縮會議を開いて劇的な効果を求めんとするよりも、着々と少しづゝ研究して行かうと云ふのだよ。第三は締約國間に紛爭が起つた場合に之を戰爭に訴へずに解決する手段に關する規定だ。即ち第六條に「兩締約國ハ本條約次條以下ニ定ムル處ニ從ヒ相互ノ間ニ生スヘキ紛爭ヲ仲裁々判司法的解決又ハ調停ニ附スヘキコトヲ約ス」と云ふ一般原則を置き、第七條で「法律問題又ハ兩締約國間ニ現存スル條約ノ解釋ニ關シ兩締約國間ニ生シ外交上ノ手段ニヨリ解決スルコト能ハサリシ紛爭ハ海牙ニ設置セラレタル常設仲裁々判所又ハ常設司法裁判所ニ附託セラルヘキモノトス但シ右ノ紛爭ニシテ右締約國間ノ緊切ナル利益獨立若シクハ名譽ニ關シ又ハ第三國ノ利益ニ關係アル場合ニハ此ノ限ニアラス」とし、第九條で「亞米利加合衆國政府及ビ日本國政府ノ間ニ生スヘキ一切ノ紛爭ハ其性質ノ如何ヲ問ハス若シ普通ノ外交上ノ手段ニヨリ解決スルコト能ハス且兩締約國ガ之ヲ仲裁々判ニ附セサル場合ニハ次條ニ定ムル方法ニヨリテ構成セラレタル常設國際調停委員會ノ審査ニ附シ其ノ審査及ヒ解決ニ關スル勸告ヲ求ムヘシ」とし、第十四條で「調停若シクハ仲裁々判ノ手續又ハ司法的手續ノ進行中（一）相手方ニ對シ兵力行使ニ訴ヘス且苟シクモ紛爭ヲ重大ナラシメ又ハ之ヲ擴大スルカ如キ一切ノ行動ヲ爲サザルコト（二）調停委員會又ハ裁判所ノ判決ノ執行又ハ其ノ決議シタル協定ニ有害ナル影響ヲ及ス虞アル一切ノ措置ヲ取ラサルコト」とした。即ち海牙に設置された常設司法裁判所による司法的解決、常設仲裁々判所による仲裁々判並に新に設けらるべき常設國際調停委員會による調停と云ふ三つの方法を併用し、此等の手續が終る迄は戰爭其他の手段に出ることを止めて、兩國に惹起された戰爭熱を冷却せしむると云ふ仕組なのだ。

A　仲裁々判と司法的解決に就て兩國の緊切なる利益獨立若くは名譽

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に關する紛爭を除外したのは、結局此等の解決方法を骨拔きにするのではないかね。戰爭でもしようと云ふ紛爭にでもなると、大抵の場合は緊切なる利益とか、名譽に關するとか云ふ理屈がつくだらうからな。

B　それは御說の通りだ。從て最近締結される仲裁條約には此の種の但書を設かないことになつて居る。從て純理上から云へば此の但書の無いことを希望するね。然し日本の締結した仲裁又は司法的解決を目的とした條約に關する限りは常に此の種の但書を置いて居るので、一九二四年の日瑞（西）條約でも日本政府側から但書を入れることを要求したそうだからな。從て此の但書を削除することは寧ろ日本側から反對が出ようよ、それから又日米間の問題とすれば現行仲裁條約通りと云ふことになるので、只仲裁々判の外に司法的解決方法か加はると云ふだけに過ぎないのさ。

A　調停と云ふのは近頃日本でも大分流行で、借地借家調停とか、小作調停とか、商事調停とか、いろ〳〵の調停手續が出來るようになつたが、國際關係でも流行するようになつたのかね。

B　さうだ、調停は國際紛爭の解決に就ての新しいテクニックだ。一九二〇年頃から調停條約が結ばれ、今では五十以上も調停條約が存在するやうになつたので、先づ以て大流行と云ふ形だ。但し日本は未だ此種の條約を結んで居らないがね。司法的解決や仲裁々判と異り、紛爭國が調停委員會の勸告に從ふと否とが其自由に任されて居るところに特色がある。國際調停制度の萌芽は、一八九九年の海牙條約で認められた國際審査委員會制度及び米國が一九一三年以來各國と締結した所謂ブライヤン條約の中に認められた國際審査委員會制度にあるのだが、此等の國際審査委員會の權限は事實の審査のみに限られてゐる反し、國際調停委員會は更に進んで紛爭解決の勸告をなす點で更に一步を進めたのだ。此の點では從來認められた所謂居中調停に似て居るが、居中調停の場合には調停者は第三國であるが、調停にあつては調停委員會と云ふ常設機關か審査報告の任に當るのと、居中調停は之に附すると否とは紛爭國の任意であるに反し、調停は之に附する義務を認める點、又居中調停のやうに調停者が紛爭國相互の談判に參與し之を指導するのではなく、事件を取上げて委員會が獨立に之を審査し、解決案を求めるのである。又調停手續の期間中は紛爭國に於て戰爭を爲さゞる義務を紛爭國に負はしめる點に於ても居中調停とは異つて居るんだ。更に併國際紛爭の平和的處理に關する新しいテクニックとして將來益々用ひられるだらうよ。元來法律學の理論から云へば拘束力の無い調停の如きものは本筋ではないとも云へるが、國內法でも調停制度が盛に用ひられるようになつたと同樣な理由で、國際間にも其機能を持つようになつたのだ。殊に調停委員會の勸告が拘束的でない爲に、當事國は司法的解決や仲裁々判の場合のやうに緊切なる利益、獨立、名譽等に關する除外例を認めずして調停にかけ得ると云ふ長所がある。又同

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

停戰繼續の存續する期間內紛爭國は暴力行爲に出づることを禁止されて居るのだから。其間に兩國民が冷靜に紛爭の眞相を考慮する期間が與へらるゝ點は其長所だ。元來紛爭の場合には紛爭當事國の政治家や外務當局が事實を曲枉し、又は虛僞の事實を捏造して國民をして事實の眞相を誤解せしめ、國民が冷靜に判斷する前に既に戰爭が勃發して居るやうなことが多かつたのを防止する効果があるのは其特色だよ。

A　ショットウエル案の大體の仕組は分つたから、所謂米國の留保の問題に進んで見れ給へ。

B　それでは第二の米國の留保の問題に移るが、本條約案で米國の留保條件と見らるべきものが三つあるね。何れも皆米國の外交を支配して居る米國上院の意嚮を顧慮して入れたものらしいよ。云ひ換へると、此の條約案が米國上院を通過する可能性に鑑みて書き入れられたものだ。第一はモンロー主義に關する留保、第二は侵略國に對する制裁に對する留保、第三は所謂專屬國內管轄事項に關する留保だ。先づ第一のモンロー主義の問題から始めるが、第一條の戰爭の否認に關する原則の例外として、第二條に正當防衞權の行使と並べて「南北亞米利加大陸ニ關スル亞米利加合衆國ノ傳統的政策ヲ遂行スル亞米利加合衆國ノ行動」とあるのがそれだ。然し但書を置いて「但シ合衆國ハ亞米利加大陸ノ國ト亞米利加大陸以外ノ國トノ間ノ紛爭カ仲裁々判又ハ調停ニ附セラルヽ爲ニ最善ノ努力ヲ竭スヘシ」とした。

A　モンロー主義を遂行する亞米利加の行動を正當防衞權の行使と同列に置くのは少し我儘勝手ではないかね。モンロー主義も、歐羅巴諸國の神聖同盟に對抗した十九世紀の初期に於ては一面歐洲諸國の帝國主義的意圖に對抗して南米諸國の獨立運動を助けると云ふ義俠的精神と、それから又米國自身の防衞の必要から云つても大にその意義を認めることが出來たが、近頃では漸次內容が變つて來て、米國自身の經濟的帝國主義を遂行する政策と變つて來たやうで、殊にキユバ、サント・ドミンゴ、ヘイテイ等に對する政策となると、內政干涉と云ふ程度まで行つたのだからな。

B　それはその通り。モンロー主義は米國の一方的宣言で、國際法上認められた原則でないことは無論さ。又米國の政策として見ても、其中には亞米利加自身を防衞する必要と云ふ合理的要因と、亞米利加自身の經濟的政治的覇權を南北亞米利加に確立せんとする要因とが不可分離的に融合されて居る。殊に南米諸國が獨立國として完成するに至ると、前者の意義は失はれて後者のみが強く表はれて來ることにならうよ。從てモンロー主義が世界平和の確立に就て將來意義を有するかどうかは一大疑問だね。

A　假りに一歩を讓つてモンロー主義を認めるとしても、防衞的政策の部分と經濟的帝國主義を實現せんとする政策の部分とを分けて、亞米利加の意圖は前者に在るので後者に無いのだと宣言する條項を

入れて貰ふことは出來まいかね。米國の東洋に對する政策としては極力門戸開放主義を主張して居り、日本も亦之を承認して居るのだから、南北亞米利加に對する米國の意圖は經濟的に門戸開放の原理と矛盾するものではないことを宣言して貰ひたいね。

B　理論は誠に其通りだけれどもそれは亞米利加が承知しまいね。

A　それなら不戰條約などを認めるのは御免だね、餘り蟲が好すぎるからね。

B　一寸待ち給へ、此の問題に就ては又別の見方があるよ。國際聯盟規約第二十一條には「本規約ハ仲裁々判條約ノ如キ國際條約又ハモンロー主義ノ如キ一定ノ地域ニ關スル了解ニシテ平和ノ確保ヲ目的トスルモノノ效力ニ何等ノ影響ナキモノトス」と云ふ規定が置かれ、日本も之を認めたのだからね。それから又此の條約が締結されないとしても米國はモンロー主義を遂行するであらうから、條約を結ばなかつた以前と少しも異らないことになるので、云はゞ現狀維持と云ふことになるだけさ。それから又モンロー主義を遂行する米國の行動は此條約に依て國際法上の「權利」として認められるやうになるのではなく、單に「免責事由」となるに過ぎないのだと思ふよ。從つて相手國がモンロー主義を否認して行動した場合でもそれは米國に對しては國際法上の權利侵害とはならないので、米國に對して侵略的戰爭をしたものとはなるまい。只之に對して米國がモンロー主義に基いて或る行動を取つた場合に、それが侵略的行爲でないと云ふことを認めるだけさ。從つて實際上から云へば、現狀維持即ち政策遂行の手段としての戰爭を此の點に就てだけ其儘承認すると云ふことに成るだけさ。

A　成程其主旨は好く分つたが、更に何不徹底だね。

B　うん不徹底に違ひない。然し此の條項が無いと、結局此の條約案は米國側でうんと云はないから潰れてしまふね。

A　現實の問題として日米間にモンロー主義で爭が起ることがあるだらうか。

B　それは無いとは云へないね。例へばメキシコに於ける日本の利益や、ブラジル移民等に關聯してね。然し此等は此の條約があつてもなくても起るので、此の條約があつた爲に日本の利益が特に害せられることにはならないのだと思ふよ。

A　それから先刻君の云つたあの但書は無意味だと思ふがどうかね。「亞米利加大陸以外ノ國」と云ふのを締約國以外の國と解釋し、例へば獨逸とメキシコとの間に紛爭が起つた場合に、亞米利加合衆國に於て其紛爭が仲裁々判又は調停に附せらるゝ爲に最善の努力を盡すと云ふことを日米間の條約で締結するのは意味を爲さないし、又亞米利加大陸以外ノ國」を締約國例へば日本を指すものとし、日本とメキシコとの間に紛爭が生じた時之を仲裁々判又は調停に附するのは兩國の自由で、何も米國の御世話にならないでも出來るぢやないか。それを米國に於て仲裁々判又は調停に附せらるゝ爲に最善の努

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

力を竭すと云ふのは、米國の親切顔を示すものに過ぎまい。此等無用の條項だから削除すべきだね。

B　それは君の條文の讀違ひと思ふよ。右の但書は前項のモンロー主義の規定を受けて來て居るので、之に關聯して讀まないと可けない。モンロー主義が問題となる場合は常に三角關係の場合で、此但書中の「亞米利加以外ノ國」と云ふのは締約國の一方、例へば日本の如き國を指すので、日本とメキシコとの間に紛議が生じ、米國がモンロー主義に依て干渉して來ると云ふ時に問題になるので、米國が斯かる場合之を暴力に訴へず、「紛爭カ仲裁々判又ハ調停ニ附セラル、爲ニ最善ノ努力ヲ竭スヘシ」と云ふのは決して意味をなさない條文ではないよ。勿論それは「最善ノ努力ヲ竭スヘシ」と云ふに止まり、義務として斯かる紛爭を平和的處理に委すると云ふのではないがね。然し此の條項に基いて米國がモンロー主義關係の紛爭を仲裁々判又は調停に附する慣行が發生する伏線となり得るからね。從て僕は此の條項を全然無用なものとも考へないし、削除說にも反對するね。

A　米國がモンロー主義を持ち出すなら、此方は滿蒙に於ける日本の特殊利益を持ち出したらどうかね。

B　それは駄目だらうね。日本政府は度々支那に於ける門戸開放主義を聲明して居るのだからな。元來仲裁條約締結に當つて、各國政府の外交政策の方針を著しく變更せしめようとするのは無理だ。現狀を成るべく維持する基礎の上でなければ仲裁條約は成立しないよ。從て此條項が一方的の外觀を呈することがいやならば、聯盟規約第二十一條に倣つて、「一定ノ地域ニ關スル了解ニシテ平和ノ確保ヲ目的トスルモノ」位に變更することには亞米利加側でも承知しようよ。然し之に依て滿蒙の特殊利益を認しめんと考へては間違だと思ふよ。さう云ふ大きな政策上の變更を仲裁條約で認めしめんとするところに無理がある。

A　第三の留保と云ふのはどんなものかね。

B　それは本條約以外の條約等に依て不侵略義務を負ふて居る國が、その義務に違反した場合に於ける本條約兩締約國の態度に關するもので、第三條に「本規約以外ノ義務的ノ國際紛爭平和的處理ニ關スル條約又ハ規約ニ對シ違反アリタル場合ニハ締約國ノ何レノ一方モ右條約違反國ヲ幇助セサルヘキコトヲ約ス右條約的違反國カ締約國ノ何レカ一方ナル場合ニハ締約國ハ之ニ對シ完全ナル行動ノ自由ヲ回復ス右ノ場合ニ取ルヘキ措置ハ亞米利加合衆國ニ就テハ其政府ノ行動ニヨリ……國ニ就テハ其現存條約上ノ義務ニ從ヒ之ヲ決定ス」とあるのがそれだ。

A　それは米國が不援助義務を負ふことになるので、米國の留保と云ふのは可笑しくはないか。

B　一見可笑しいかも知れないが、此の規定を聯盟規約又はロカルノ條約に於ける制裁規定と比較して見ると、それが米國の留保である

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

點が分るのだ。元來此の條項は侵略國を幇助しないことに依て世界平和を增進すると云ふ考と同時に、又米國を現在の米國の狀勢が許す限り國際聯盟に結付けようとする考に基くのだ。條文は隨分分り難いが、大體三つの場合に分けて考へると明瞭になると思ふね。第一の場合は、此の條約の締約國が此の條約の第一條に違反した場合で、例へは、日本が米國を侵略するとか、又は米國が日本を侵略する場合さ。此の場合は此處に云ふ第三條の適用はないので、先に述べた第二條の正當防衛權の行使に關する規定の適用があるのだ。勿論此の場合でも、例へば、日本が此れと同一內容の條約を第三國と結んで居れば、其第三國は其條約の第三條に依て侵略國たる米國を幇助せざる義務が其條約の效果として出て來よう。又日本が紛爭を國際聯盟の理事會にかけた場合、米國が聯盟規約第十七條第三項の紛爭を見する如く「聯盟國ノ負フヘキ義務ノ受諾ヲ拒ミ」聯盟國たる日本に對して戰爭してゆく場合には、日本は聯盟規約第十六條に基いて他の聯盟國の米國に對する經濟的又は武力的制裁を求め得る樣な場合も起り得るであらう。然し兎に角此の第一の場合は本條約案第三條の適用される場合ではないのだ。第二の場合は、本條約以外の他の義務的國際紛爭平和的處理條約を締結して居る第三國が其條約に違反して侵略國となつた場合、日米兩國は之に對して如何なる行動に出づべきやの問題で、それは第三條前段で規定を置いて居る。本條約が無ければ自由行動に出られるのを、第三條の規定に依て消極的ではあるが不援助義務を負ふとになる。此の場合日本の方は或は聯盟規約に依て、更に進んで經濟的又は武力的制裁の途に出づる義務が發生するかも知れないが、それは本條約から發生するのではなくして、聯盟規約から發生することになるわけさ。此の場合米國が日本と同一の義務を負ふことになれば、米國が國際聯盟に入つたのと同一の結果になるだらうが、米國としては其處迄は行き難いので、侵略國を幇助せざる程度に留保したのさ。第三の場合は、本條約の締約國が本條約以外の強制的國際紛爭平和處理條約に違反して侵略國となつた場合で、第三條後段がこの場合を規定して居る。例へば、米國が本條約と同一の條約を加奈陀と結び、之と違反して加奈陀を侵略したとか、又は日本が國際聯盟の規定に違反して侵略國となつた場合に關するのさ。米國が侵略國となつた場合には日本は聯盟規約第十七條第三項の規定に依て米國に對して經濟的又は武力的制裁を加へる義務が發生するかも知れない。處がその反對に日本が米國を侵害した場合、米國が日本に對して同樣の手段、殊に武力制裁に訴へると云ふことを條約で決めることは米國の憲法論から喧ましい議論が出て來る。其處で「完全ナル行動ノ自由」を回復する程度に止めて、如何なる措置に出づるかは米國政府の行動に依て決定さるると云ふ事にしたのさ。此の點も亦米國の留保と見られないこともないね。何れにしても第三條は米國の國情の許す限り國際聯盟規約の精神に步み寄つたわけさ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

A　隨分複雜して居つて頭の惡い位には好く考へないと混亂させられてしまふな。然し細いことは後で好く考へるとして、要するに侵略的戰爭をやる國を制裁するに就て、現在米國の與論が許す限度迄は行かうと云ふのだね。

B　先づ然うだ。僕好く考へて見給へ。

A　それでは第三の留保の方へ進んで貰はふか。

B　第三の留保と云ふのは所謂專屬國內管轄事項を平和的處理方法、即ち仲裁々判、司法的解決又は調停に附せられないやうにしようする條項だ。即ち第六條に「但シ右紛爭カ國際法上締約國ノ一方ノ國內管轄ニ專屬スル場合ハ此ノ限ニアラス」とあるのがそれさ。

A　例の移民問題を除外しようと云ふ計みだた。

B　先づ然うだらうね、然し國際法の問題とか又はフイリピンの獨立問題とか云ふやうなことも含まれようね。又此條項はあながち米國丈の留保とも見られないので、日本側で云へば朝鮮の內政問題とか、支那移民の取扱問題等も入つて來るかも知れないね。それで國內の問題の是非が國際的に公式に論議され判定されるのがいやだ、と云ふ心理は一應了解出來るよ。

A　一體國際法上專屬國內管轄事項と云ふのは明瞭なのかね。例へば、一九二四年米國移民法の差別待遇條項に關する日米間の紛爭に就て米國の行つたことは、國內專屬事項だと斷言し得るのかね。

B　國際法上專屬國內管轄事項が何んであるかは、國際司法裁判所が嘗て述べたやうに、「それは根本に於て相對的の問題で、國際關係の發達の情勢に依て定まるのさ。帝大の立博士は「國內問題トハ國際法規ニヨリ原則トシテ一國ノ專ラ管轄スヘキコト明白ニ認メラレタル事情ニ關シ且國際法規上又ハ條約上ニ於テ他國ニ對スル特別ナル國際法上ノ義務又ハ責任ノ關係ヲ存セサル問題ナリ」と云ふ風に概念の構成をされて居るが、極めて穩健な見方だと思ふよ。其處で此見方から移民法制定を考へて見ると、現在の國際法では一國の移民規律權は原則として「一國ノ專ラ管轄スヘキコト明白ニ認メラレタル事項ニ關するものと云へるだらう。駐米埴原大使が幣原外相の訓令の下に國務長官ヒユースに向つて發した抗議書の末段に、「根本論トシテハ各國ノ版圖內ニ於ケル移民入國ノ制限及ヒ取締カ國家固有ノ主權內ニ屬スルコトハ此際ニ之ヲ否定セントスルモノニ非ス」と言明したのは、日本政府が移民規律權は原則として一國の專ら管轄すべきこと、明白に認められた事項であると承認したものと見られようね。只差別待遇條項となると「國際法規上又ハ條約上ニ於テ他國ニ對スル特別ナル國際法上ノ義務又ハ責任ノ關係ヲ存セサル問題」であるかどうかが問題となると思ふよ。云ひ換へると、差別待遇條項は國際法の認めた「國家平等の原則」に違反しないかどうか、又「國家の相互尊重權」に違反しないかどうかが問題となるね。若しも違反するものと認定されゝば問題は自ら專屬國內管轄事項の範圍を脫するわけさ。然し此等の事項は國際法上明確を缺く部分だね。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

A　一體特定の事項が專屬國內管轄事項だと認定するのは誰がやるのかね。若しも兩締約國が認定するのだとすれば、平和的處理方法に委せたくない事件は勝手に專屬國內管轄事項だと云つて頑張りはしまいかね。

B　それは其通りだ。此の點では國際聯盟規約第十五條第八項に「紛爭當事國ノ一國ニ於テ紛爭ガ國際法上專ラ該當事國ノ管轄ニ屬スルモノナルコトヲ主張シ聯盟理事會之ヲ是認シタルトキハ聯盟理事會ハ其旨ヲ報告シ且之ガ解決ニ關シ何等ノ勸告ヲモ爲サザルモノトス」と規定し、專屬國內管轄事項は認めても、其決定を理事會に委託して居るのに較べて不完全だと思ふよ。現在の實際上の運用上から見ると、當事國が專屬國內管轄事項だと主張すれば理事會は大抵之を認むる傾向のやうだがね。例へば支那の關稅自主權や治外法權などの問題に國際聯盟が關係しないのは、支那が之を以て國內問題だと主張するからださうだよ。

A　更に角所謂專屬國內管轄事項からも國際紛爭が起る現在の狀勢で、之を平和的處理方法に附さないのは頗る逆轉的だね。殊に司法的解決や仲裁は先づ以てよいとして、調停にも附さないと云ふのは隨分ひどいね。

B　それは正論だ。日本政府は例の平和議定書の際にずつと進んだ態度を表明し、安達大使は專屬國內問題をも平和的處理方法に附すべき事を主張した。それは結局朝鮮問題でも支那移民問題でも國際紛爭と成つた場合には、之を國際的に處理しても好いと云ふところまで行つた事になるのだが、米國の輿論は其處迄進んで居らないのだよ。例へば移民法に關する日米紛爭の如きは、どんなことがあつても國際的な解決方法には任せまいよ。此の條項は此種の輿論を顧慮して挿入したのだらう。

A　平和的處理方法に附せない紛爭は結局どうなるのか、戰爭かね。

B　ところが戰爭は出來ないことになつて居る。即ち第六條第三項に「第一部ノ規定ハ右ノ場合ニモ總テ適用セラル」とあるからな。そして第一部の規定は不戰の約束を含んで居るからな。

A　結局泣寢入りだな。

B　つまりさうだ。只移民問題に就ては日本の地位は現在以上不利益とはなるまいがね。現在と雖日本は亞米利加が自發的に右の條項を撤廢するのを氣長に待つて居るのだからな。然し平和的處理方法を許さず、戰爭も認めないと云ふのでは其處に、ギャップがあるから、少くも調停位には附し得るものにしたいものだ。然し亞米利加が現在のところ之に承諾を與へるかどうかは疑問だね。

A　それで大體ショットウエル案の內容は分つたが、ワシントンで締結された四國條約との關係はどうなるのかね。

B　四國條約か、あれは只太平洋方面の島嶼だけに限るのでね、日・英・米・佛の間に於て「太平洋方面ニ於ケル其島嶼タル屬地及ヒ島嶼タル領地ニ關スル其權利ヲ尊重スヘキコト」を約束し、締約國間に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

紛議ガ起リタル場合、締約國ハ共同會議ノ爲メ締約國ヲ招請シ當該事件全部ヲ考量調整ノ目的ヲ以テ其議ニ附スヘシ」と云ふ約束と、「前記ノ權利カ別國ノ侵略的行爲ニヨリ脅威セラルルニ於テハ締約國ハ右特殊事態ノ急ニ應スル爲共同ニ又ハ格別ニ取ルヘキ最モ有効ナル措置ニ關シテ了解ヲ遂ケムカ爲充分ニ且隔意ナク互ニ交渉スヘシ」ることを約束したのに過ぎないのさ。適用範圍が島嶼だけに限るのだから、ショットワエル條よりもずつと範圍が狭いわけさ。

A 我國が加入して居る國際聯盟との關係はどうなるのかね。

B それは國際聯盟規約の規定にも精神にも違反はしまいよ。一九二五年の國際聯盟第十六總會の決議の中で、「聯盟規約及ヒ平和議定書ノ精神ニ一致シタル相互安全保障ノ仲裁々判條約ヲ締結シ國家間ノ相互信賴關係ヲ回復スル努力ハ衷心之ヲ歡迎スル」主旨を宣言して居るからね。ショットウエル案も此の主旨に合致するわけさ。又他面から見れば米國をして聯盟に引入れる一の連鎖となるかも知れないよ。

A それで大體は分つたが、大局から見ると此條約に依て米國は現狀を其儘維持し、他國の武力を全部封じて仕舞ふと云ふことになるのではないのかね。元來現在世界の領土の分配等は著しくアングロサクソン國民に都合の好いやうに出來上つて居る、しかも此の分配は世界經濟、人類の福利と云ふ理想からすれば著しく不當で、われわれの正義觀念に矛盾するやうに見える。それを何處迄も現狀維持で行かうと云ふのは米國の巧妙なる外交手段ぢやないのかね。うつかりその手に乘ると日本等は永久浮ばれないことになりはしまいかね。其處に僕は大きな疑を持つのだ。

B それは一應尤だ。然しそれかと云つて、われわれの正義心に合致しないと感せらるゝ此世界の情勢を打破するのに、武力に依らねばならぬとするのは暴論だと思ふよ。又武力を用ひたとしても、それに依て實現される世界が果して現代よりも正義に合致した國際社會であるかどうかは疑問だからね。又武力に依る現狀打破の可能性も今の處疑はしいからね。元來平和と正義の問題は極めてデリケートな問題でね、僕も消極的な内容しかもたぬ平和と正義との絶對價値論にたれはむしろ正義を選ぶのだ。然し國際社會に正義に基いた秩序を實現するには、其基礎工事として先づ平和の保障が築かれねばならないと思ふのだよ。暴力が最後の判定者として横行しないで、人間の理智が社會關係を規律し得る樣な、統一的秩序の基礎の上に國際的正義の實現が眞に可能となるのさ。國内法の發達に就ても先づ平和的基礎が出來て、其上に正義への合理的な戰が永久に、營まれて居るのだ。それは少しく透見力を以て法律の歷史を眺めて見れば分ることだよ、現在の國際關係は原始時代の法律狀態に似て居る。相爭ふ大小の血族團體の間に平和を齎すと云ふことが原始法の努力であつたのだ。正義實現への前提は、血族團體に優越する統一的秩序としての國家が成立して後實現が容易になつたのだ。現代の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國際關係に就ても兎に角一應平和の基礎を確立することが必要だね。正義への戰はその後に續くのだ。それは暴力に依る戰ではなくむしろ理智の戰だ。魂の戰だ。然しそれにはまづ國際的平和の基礎工事をして置かなければ駄目だよ。それは法律の歴史がわれ〳〵に與へる叡智と云ふものさ。

A　大分之は君の氣焔に當てらるね。僕はさう云ふ高遠な理想よりも、寧ろ手近な日本の將來が心配なのだからな。それには更に此の條約案が日露關係、日支關係、日英關係等に就てどう云ふ影響を及すかを細く考へて見ないと贊否何れとも決しかねるね。

B　それは御尤だ。今日の議論は只糸口だけを示したゞけさ。更にいろ〳〵な方面から充分に深く考へて見ようぢやないか。然し今日はもう大分遲いから此の位で打切りにしようかね。

A　うん、さう願はう。

（一、一一、六稿）

附錄

亞米利加合衆國及……國間恒久平和條約案

第一部　戰爭ノ否認

第一條　亞米利加合衆國及……國ハ如何ナル場合ニモ他ノ一方ヲ攻撃又ハ侵略セス又ハ之ニ對シ戰爭ニ訴ヘサルコトヲ約ス

第二條　前條ノ規定ハ左ノ場合ニハ之ヲ適用セス

（一）　正當防衞權ノ行使即チ前條ニ定メタル約定ノ違反ニ抵抗スル場合

但シ攻撃ヲ受ケタル一方ハ直チニ紛爭ヲ平和的處理手續ニ附シ又ハ仲裁的若シクハ司法的判決ニ從フコトヲ申出ツルコトヲ要ス

（二）　南北亞米利加大陸ニ關スル亞米利加合衆國ノ傳統的政策ヲ遂行スル亞米利加合衆國ノ行動

但シ合衆國ハ亞米利加大陸ノ國ト亞米利加大陸以外ノ國トノ間ノ紛爭カ仲裁々判又ハ調停ニ附セラルルタメニ最善ノ努力ヲ竭スヘシ

第三條　世界平和促進ノタメ兩締約國ハ左ノ事項ヲ約ス

本規約以外ノ義務的ノ國際紛爭平和的處理ニ關スル條約又ハ規約ニ對シ違反アリタル場合ニハ締約國ノ何レノ一方モ右條約違反國ヲ幇助セサルヘキコトヲ約ス右條約違反國カ締約國ノ何レカ一方ナル場合ニハ他ノ締約國ハ之ニ對シ完全ナル行動ノ自由ヲ回復ス

右ノ場合ニ執ルヘキ措置ハ亞米利加合衆國ニ就テハ其政府ノ行動ニ依リ・國ニ就テハ其現存條約上ノ義務ニ從ヒ之ヲ決定ス

第四條　平和維持ニ就キ一般ニ承認セラレタル法規ノ重要ナルコトニ鑑ミ兩締約國ハ本條約ニ定メタル如ク政策上ノ手段トシテノ戰爭ヲ否認スル基礎ノ上ニ國際法ノ漸進的法典化ノ促進ニ努ムヘキコトヲ約ス

第五條　本條約ニヨリ達成セラレタル安全保障ノ增進ニ鑑ミ兩締約國ハ軍備ノ漸進的制限ヲ促進スルタメ相互ニ協力シ且之カタメニ軍備制限ノ國際會議ヲ定期ニ開催シテ適當ナル手段方法ヲ研究スヘキコトヲ約

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ス

第二部　仲裁及調停

第六條　兩締約國ハ本條約次條以下ニ定ムル處ニ從ヒ相互ノ間ニ生スヘキ紛爭ヲ仲裁々判司法的解決又ハ調停ニ附スヘキコトヲ約ス
但シ右紛爭カ國際法上締約國ノ一方ノ國內管轄ニ專屬スル事項ニ關スル場合ハ此ノ限ニアラス
第一部ノ規定ハ右ノ場合ニモ總テ適用セラル

仲裁々判

第七條　法律問題又ハ兩締約國間ニ現存スル條約ノ解釋ニ關シ兩締約國間ニ生シ外交上ノ手段ニヨリ解決スルコト能ハサリシ紛爭ハ海牙ニ設置セラレタル常設仲裁々判所又ハ常設國際司法裁判所ニ附託セラルヘキモノトス但シ右ノ紛爭ニシテ兩締約國ノ緊切ナル利益獨立若シクハ名譽ニ關シ又ハ第三國ノ利益ニ關係アル場合ハ此ノ限ニアラス

第八條　各場合ニ於テ兩締約國ハ常設仲裁裁判所又ハ常設國際司法裁判所ニ訴フルニ先立チ係爭事項ヲ明瞭ニ確定スル特別協約ヲ締結スヘキモノトス右係爭事項カ常設仲裁裁判所ニ附託セラルヘキ場合ニ於テハ右特別協約ハ仲裁々判官ノ權限及ヒ仲裁法廷ノ構成ニ就キ定ムヘキ期間並ニ手續ノ各階段ヲモ確定スヘキモノトス
右ノ特別協約ハ亞米利加合衆國ニ就テハ上院ノ協贊ヲ經テ大統領之ヲ締結ス

調停

第九條　亞米利加合衆國政府及……國政府ノ間ニ生スヘキ一切ノ紛爭ハ其性質ノ如何ヲ問ハス若シ通常ノ外交上ノ手段ニヨリ解決スルコト能ハス且兩締約國カ之ヲ仲裁々判ニ附セサル場合ニハ次條ニ定ムル方法ニヨリテ構成セラレタル常設國際調停委員會ノ審査ニ附シ其報告及ヒ解決ニ關スル勸告ヲ求ムヘシ但シ第六條ノ條件ノ制限ヲ受ク

第十條　國際調停委員會ハ左記ノ方法ニヨリ選任セラレタル五人ノ委員ヲ以テ之ヲ構成ス卽チ各政府ハ二人ノ委員ヲ指名シ其中一人ニ限リ自國國籍者タルヘシ最後ノ一名ハ合意ニ依テ指名セラレ且既ニ委員會ニ代表者ヲ有スル國ニ屬セサルコトヲ要ス議長ノ職務ハ右ノ者之ヲ行フ
最後ノ委員ノ選任ニ付キ兩政府ノ合意成立セサルトキハ他ノ四名ノ委員ヲシテ之ヲ指名セシム右委員間ニ於テ協定成立セサルトキハ一九〇七年海牙條約第四十五條ノ規定ヲ適用ス
委員會ハ本條約ノ批准交換ヨリ六ケ月以內ニ之ヲ構成ス
委員ハ一年ノ任期ヲ以テ之ヲ選任ス但シ重任ヲ妨ケス委員ハ交代或ハ再選アルマテ又ハ其任期滿了ノ當時從事セル事務ノ完了ニ至ルマテ其職務ヲ行フ
（死亡辭任又ハ身心ノ故障ニヨリ）缺員ヲ生シタルトキハ最初ノ選任ノ際用ヒラレタル方法ニヨリ成ルヘク短キ期間內ニ之ヲ補充ス
兩締約國ハ委員選任ニ先チ委員ノ手當ニ關スル協定ヲナスコトヲ要ス委員會ノ會合ニ伴フ費用ハ兩締約國均等ニ之ヲ負擔ス

第十一條　兩締約國間ニ生スル紛爭ニシテ通常ノ方法ニ依リ解決セラレ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

サル場合ニハ各當事國ハ何レモ其審査ヲ國際委員會ニ附託シ其報告ヲ求ムル權利ヲ有ス通告ハ國際委員會ノ議長ニ對シテ之ヲナス議長ハ直チニ之ヲ各委員ニ通達ス

右ト同一ノ場合ニ於テ議長ハ委員ト協議シ其過半數ノ同意ヲ得タルトキハ兩締約國ノ各々ニ對シ委員會ノ勞務提供ヲ申出ツルコトヲ得前項ノ規定ニ從フ委員會ニ依ル事件ノ受理ニハ兩政府ノ中何レカ一方カ右申出ヲ受諾スルノ意志ヲ表示シタルコトヲ以テ足ル

會合ノ場所ハ委員會之ヲ定ム

第十二條　兩締約國ハ各自委員會議長ニ對シ紛爭ノ内容ニ就キ意見ヲ陳述スル權利ヲ有ス右兩締約國ヨリノ陳述ハ參考トシテ提供セラルヘキモノニシテ右陳述ノ相違ハ委員會ノ行動ヲ拘束セス

紛爭ノ原因タル一定ノ行爲カ既ニ爲サレ又ハ將ニ爲サレントスル場合ニハ委員會ハ成ルヘク速ニ各當時國ノ權利ヲ保全スルタメ其報告ノ提出アルマテ暫定的ニ執ルヘキ措置ニツキ其適當ト認ムルモノヲ指示スヘシ

第十三條　委員會ノ踏ムヘキ手續ニ關シテハ委員會ハ成ルヘク一九〇七年海牙條約第一ノ第十條乃至第三十四條及ヒ第三十六條ニ定ムル規定ニ從フ

兩締約國ハ委員會ニ對シ其審査及報告ニ必要ナル一切ノ手續及ヒ便益ヲ提供スルコトヲ約ス

委員會ノ事務ハ事件ノ受理ヲナシタル日ヨリ一年以内ニ完成スルコトヲ要ス但シ兩締約國カ之ト異リタル期間ヲ定ムルコトヲ約シタルトキハ此ノ限ニアラス

委員會ノ決定及ヒ其報告ノ條項ハ多數決ニヨリテ之ヲ採擇ス議長ハ職務上ノ資格ニ於テ報告書ニ署名シ之ヲ各締約國ニ送附ス

兩締約國ハ委員會ノ報告及ヒ解決ニ關スル勸告ニ對シ取ルヘキ行動ニ就キ完全ナル自由ヲ留保ス但シ第一部ノ規定ニ從フコトヲ要ス

手續進行中ノ措置

第十四條　兩締約國ハ左ノ事項ヲ約定ス

調停若クハ仲裁々判ノ手續又ハ司法的手續ノ進行中

（一）相手國ニ對シ暴力行爲ニ訴ヘス且荷モ紛爭ヲ重大ナラシメ又ハ之ヲ擴大スルカ如キ一切ノ行動ヲ爲ササルコト

（二）調停委員會又ハ裁判所ノ判決ノ執行又ハ其提議シタル協定ニ有害ナル影響ヲ及ス虞アル一切ノ措置ヲ取ラサルコト

第三部　批准

第十五條　本條約ハ亞米利加合衆國ニ就テハ合衆國上院ノ協贊ヲ經テ亞米利加合衆國大統領之ヲ批准シ……國ニ就テハ……國憲法ニ從ヒ之ヲ批准ス

本條約ハ批准交換ノ後直チニ其效力ヲ生シ締約國ノ何レカ一方カ之ヲ廢棄スルノ意志ヲ相手國ニ通告シタル時ヨリ十二ケ月ノ期間ヲ經過スルマテ其效力ヲ存續ス

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名捺印ス

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

千九百――年――月――日ワシントンニ於テ作成ス

附記

本條約案の飜譯は既に青木節一君が昭和二年十月一日發行の外交時報中に之を試みられた（同雜誌九六頁乃至一〇一頁）。此處に掲げた飜譯は私が更に青木君と協議の上試みた改譯である。然し責任は全部自分に在る。

尙本條約案に就て更に硏究を試みんとする讀者は原文たる A draft treaty of permanent peace (published by The Inquiry 129 East 52d street, New York city, N. Y. U. S. A) を參照されたい。尙資料としては靑木節一「日米間平和保障條約の提唱」（外交時報昭和二年十月一日）信夫淳平「日米間平和保障條約試案」（外交時報昭和二年十月十五日）同氏「軍縮問題と日米の將來に關する考察」（國際知識第七卷第六號）、同氏「日米の紛爭平和的處理方法再言」（國際知識第七卷第八號）參照。

* * * * * *

右執筆後時事新報の夕刊（十一月六日）を手にすると左の如き電報が倫敦（ワシントン?）聯合四日發として掲げられて居る。「豫て內交渉であつた米佛間の戰爭防止に關する條約交渉に關して大統領クーリツヂ氏の解するところでは目下歸國中の駐佛米國大使メイロン・ヘリツク氏が三週間以內に巴里へ歸任する筈であるから同大使の到着後直ちに佛國政府との間に交渉が開始せられることにならう」と。

右の電報は此處に論じたるが如き條約が米佛兩政府の間に締結せられんとしつゝあることを示すものである。本條約案の執筆者ショットウエル敎授は本年三月佛のブリヤン外相と會見し、此の問題に就て意見の交換を行つたのであつた。そしてブリヤン外相は四月六日の米國大戰參加滿十週年紀念日に際して、米國聯合通信員を通じて米國々民に對し米佛不戰條約を提議した。此のブリヤンの提議に基いて二三の條約案が米國で發表されたが、此處に掲げたショットウエル案は其一であり且その尤も優れたものである。そして此の案は米佛のみならず英・獨・日との間にも適用せられ得るやうに起草されて居る。同敎授が本年七月ホノルルに開かれた太平洋問題調査會第二回總會に之を提出したのは主として日本國民の之に對する意嚮を探り、此の方面の共同硏究を促さんとしたものである。或見方からすれば、佛・米間よりも、寧ろ日米の間に於て此の種の不戰條約の締結がより緊切であるとも云はれよう。

まてりありすむす・みりたんす

土方教授の『配分史觀』なるものゝ克服
土方教授の唯物史觀批評の反撃

大森義太郎

『東京帝國大學經濟學部に經濟原論の講座を擔當する』土方成美氏の存在は、今日、僅にたゞマルクス批評(?)家としてのみ我々の注意を惹く。

氏は、價値學説を始めとしておよそマルクス主義のあらゆる領域に渉つて、反對の意志を表明し、これを「やつつけ」たるかのごとき恰好を示さんことに腐心せられつゝある。いはゆる唯物史觀についてもまたいふまでもない。

わたしはこの試論でこれに答へようと思ふ。ところで、教授は最近にいたつて、そのいはゆる配分經濟學になぞらへて新たに編み出された『配分史觀』なるものをもつて史的唯物論に對立せしめらるゝにいたつた。従つてわたしの如上の課題は當然にこの新『史觀』の批評を企てることを命じる。

一　『配分史觀』の『正體を見極め』る

まづ『配分史觀』を見よう。これの見すぼらしさを知ることは、やがて、教授の唯物史觀批評がいかに無根據な、その場かぎりのものであるべきかを推しはかるにたるであらうから。

教授が『配分史觀』を、曲りなりにも體系だつて説かれたのは、その論文、『一つの經濟(配分)史觀』(『經濟研究』、卷四、號一)である。そこでわたしはこれをば中心にして、教授の他の諸著書、諸論文に渉ることゝする。

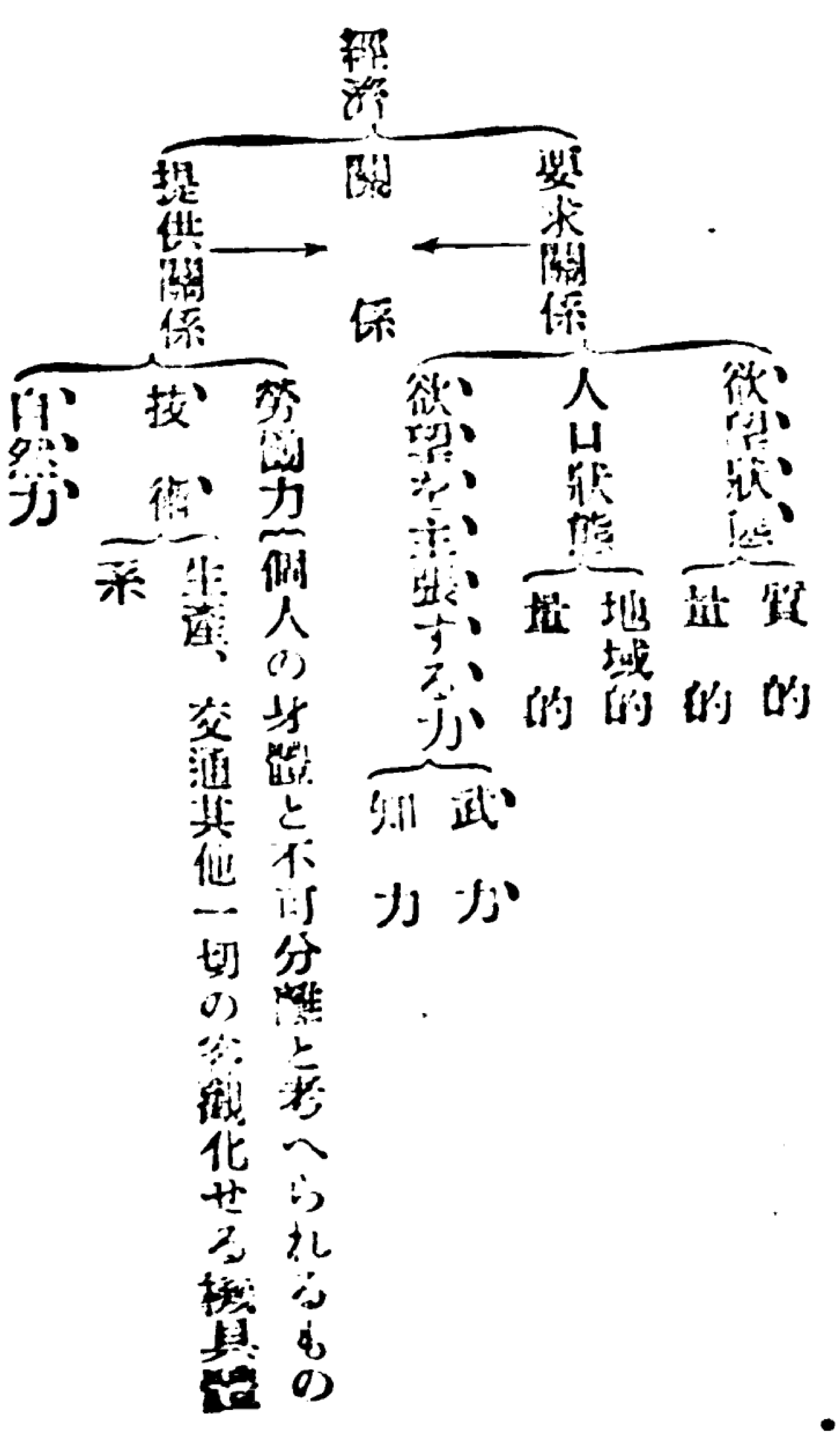
『經濟關係、經濟狀態の變動原因を何に、換言すれば如何なる要素に歸すべきや、』(上掲論文頁一、傍點——大森、以下同じ)——これが土方教授の取扱はれたる問題である。これに對して氏は一應一般的に答へられる、——『……經濟關係、經濟組織(經濟組織、經濟狀態、經濟關係がなんの區別もなく並列されてゐることを注意せよ——大森)の變遷は之を經濟關係の均衡を維持する要素の變動に歸すべきものであると思ふ。』(頁四)なにゆゑに? 氏は『かく主張する根據』として、二つを擧げられる。第一に、『……如何なる經濟關係以外の要素、例へば宗教思想、政治思想等も必ずや一度は之等の要素の變動を通して後

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

經濟狀態を動かすものである』（頁四）から。第二に『……若し或經濟上の推移を時として、宗教思想、政治思想等（すなはち、經濟關係以外の要素」、――大森）に歸して行くとすれば其の結果は或場合に經濟史の連續的なる說明が中斷せられる虞がある』から（頁五）。だからして、――繰りかへしていへば――『常に經濟の變動の原因を經濟の均衡を維持する要素に歸すべき』（頁六）である。では、『何が經濟關係であるか』？（讀者諸君！　これを聞いて、まるで狐に撮まれたやうだなど、こゝではすでに不平をいふのは、まだ少し早いでせう！）『經濟とは何であるか』？　こゝで土方教授はその有名な（ことはつておくが、有名といふことは傑れたといふこととの同義語ではない）『配分』概念を展開される。どのやうに？　經濟は『吾人の要求に對して不充分なる物を通じてする欲望充足である』といふ、『吾々が疑もなく經濟であると考へる現象を精細に分析』（頁七）することから出發されて、教授は漸次にいろんなものを、例へば『消費行爲それ自身』、技術としての生產、いはゆる經濟的原則などをば、『明かに吾人の認識と矛盾する結果を來す』（頁九）ものとして拔き去つて行かれる。何が殘るか？　教授によれば、『欲望充足に際して吾人が或物の支配を他人に移し、他人の物の支配を獲得する關係』（頁九）である。これが『配分』概念の內容である。それゆゑ『經濟は配分』である、と土方教授は主張される。しかし、『配分』概念のさらに精密なる規定には『全體對部分の關係』（『社會經濟體系』、卷一、頁一〇）が重要なる要件であるといふ。が、その點は、わたしの關するかぎりでは詳しく紹介する必要がない。ともかく、『經濟は支配移轉に關する行動であるが、單に支配移轉を個々別々の行爲として見るときは經濟行動ではないが、全體の支配の小い一部の支配の移轉と見るとき經濟現象と見られ、經濟は配分である』（前出、『經濟研究』、頁一一）

經濟すなはち『配分』、これが明になつたのだから、我々は『經濟の均衡を維持する要素』を舉げることができる筈である。こゝで土方教授は、『配分』には配分さるべく『提供する』側と、配分されて『獲得する』側を區別しうるとして、『配分』を二面に分ける。『即ち一面に於て提供關係であると同時に要求乃至獲得關係である。』（同上、頁一四）

そこで、土方教授が最初に置いた問題は、この提供と要求の關係を構成する要素を明かにすることによつて解決される、と云ふ。では、その要素は、氏はこれを表にして示される。この表たるや、我々にとつて極めて重要である。



（同上、頁一五、傍點—大森）

かくして我々は土方教授の『配分史觀』の結論とするところのものに到達しえた。『今一定の經濟狀態經濟組織に於て、關係の均衡が維持せられてゐるとする。然るに提供側乃至要求側に於ける或要素の變動によつて以上の關係の均衡が破壞せられたとすれば、玆に經濟狀態の變動が齎らされる。』(同上、頁一七)

これが『配分に立脚する經濟史觀』、『配分史觀』である。

この『配分史觀』の『正體』は何か? 我々はそれを究めねばならない。

それに先きだつて、土方教授の『配分史觀』の論構を要約しておくことは無意義ではなからう。それは次のごときものである。(一)經濟の變動は經濟の均衡を維持する要素に歸せしめねばならぬ。(二)こゝで經濟とは何かゞ問題になる、――それは『配分』である。(三)從つて、經濟の均衡を維持する要素は『配分』のさまざまな『關係を構成する要素』である。(四)その種々なる要素の羅列。

我々の批判はかゝる氏の論構を追究することによつて、もつとも簡單に、かつ、的確に成し遂げえられるであらう。

まづ、第一の命題を見る、これには二つの『根據』がついてゐたこと、わたしの紹介したとほりである。この『根據』を檢することから始めよう。そのひとつは『經濟關係以外の要素』が經濟狀態に變化を與へるのは、『經濟關係』、或は單に『經濟』の『均衡を維持する要素』を必ず通じてゞある、といふにあつた。なによりも怪しげなのは『均衡を維持する』といふ言葉である。いま『均衡を維持する』といふことを暫く保留してみる。いふまでもなく、經濟に孤立して存するものではなく、他の政治、法律、宗教、科學、藝術等と相俟つてひとつの社會に統一されて在るものである。そこで、このかぎりでは、これらすべての要素が『經濟の均衡を維持する要素』である。それどころか、自然もまた、明かにこの意味では、『經濟關係』にとつてその『均衡を維持する要素』に屬する。あらゆるものが『均衡を維持する要素』である。しかし土方教授がこれをば『經濟關係以外の要素』に對立してゐられるところからみれば、これは普通にいふ經濟の構成分子、經濟的な要素の意味と解するよりほかなからう。そこで上の土方教授の『根據』の第一を云換へると、どういふことになるであらうか? 非經濟的な要素が經濟關係に影響を與へるには經濟的な要素を通じることを必要とする、――からである。讀者諸君! これはなんですか? こゝで經濟的な要素といふのは――上で明にしたやうに――經濟の構成分子の意味である。これと、たゞ經濟といふこととの差異は、前者が部分に分析したのに對して、後者がこれを全體に綜合して見てゐるといふだけである。この差異はこの場に關するかぎりでは問題にならない。また、非經濟的な要素といふのは、同樣に、經濟以外のものといふのと差異はない。そこで土方教授の稱される『根據』を一度云ひ直して見よう。曰く、――經濟以外のものが經濟に影響を與へるには、經濟を通じることが必須である。讀者はこの『根據』の無意義さを十二分に了解されたであらう。それは結局經濟以外のものが經濟に影響を與へると云ふ至極わかりきつたことを云つただけである。同語反復(タウトロギー)以外の何物でもない!

しかし、これにも增して滑稽なのは、その第二の『根據』である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『經濟上の推移』を『經濟關係以外の要素』に歸すれば、經濟史の連續的な說明が中斷される處があるといふのか、この『根據』であつた。こゝで問題は、ひとへに、『連續的な說明が中斷される』といふことに懸つてゐる。『中斷される』とは何の意味か？ なんのゆゑの『處』か？ 土方教授はこゝで『經濟關係以外の要素として』宗教思想や政治思想を擧げられるが、我々はもつと明白に經濟關係以外の現象である自然的なものをとつて來ようではないか。『過般の大震災』の結果、『之に應じて米の無償の配給が行はれ、日銀による震災手形の割引、政府の其損失補償が行はれる』といつたふうの『經濟上の推移』が起つたことは土方教授みづからの認められるところである（前出『社會經濟體系』、頁一五）この場合、これらの結果をば、震災といふ自然現象、すなはち經濟以外の要素に歸せしめたのでは、『連續的な說明が中斷せられ』てしまふ、――から土方教授は云はれるのである！ わたしは、讀者と共に、ではどうしたらよいのですかと、謹んで土方先生にお訊ね申しあげるよりほかない。かういふことか『中斷』なら歷史はほとんど無限に『中斷』してゐる。かういふことを『處』れてゐたのでは、我々はさしづめ自殺するよりほかなからう。

ところで、かくのごとくに、無根據な『根據』の上に立つものが、實に、『常に經濟の變動を經濟の均衡を維持する要素に歸すべきであり』、といふ『配分史觀』の論構の第一の命題である。それはいまや明かであるやうに、二重の誤謬を含む。もし、經濟關係以外の要素の影響は結局なんらかの經濟の構成分子の上に現はれねばならないといふことを、單に意味するのであれば、――『根據』の第一において指摘したごとく、――それは、全くの同語反復であるか、たゞ戯言（ナンセンス）である。經濟の要素が原因となつて經濟の變動を喚び起す事實にかゝはらずたゞ說明の『中斷』の『處』のゆゑをもつて、この『要素』に置き換へるに無理にも『經濟の均衡を維持する要素』をもつてすることを意味するのであれば、明かに現實の曲歪である。許し難き『背理』である。いはゆる『配分史觀』なるものは、すでに此處で、全的に覆滅する。それはこれ以上の批判を必要としない。しかしわたしは教授の所說をなほ進んで追はうと思ふ。それは教授の『以上の所論が』、『假に』も(！)『容認せられると』考へるからではない。上に指摘した教授の誤謬がいかに擴大され、新たなる誤謬を生み來たるかを突きとめんがためである。

我々の批判は『配分』概念に移る。この概念がいはゆる『經濟生活の基本概念』、『經濟學の中心概念』として、いかに支持し難きものであり、いかに拙劣極まるものであるかは、すでに他の人々によつて充分に暴露されてゐる。わたしにとつては、此處では『史觀』に關するかぎりにおいて、『配分』概念の無意義さを明かにすれば足りる。『經濟は配分である』、――これが土方教授の主張であつた。しかし、それは、『配分』は經濟である、といふことである。なにゆゑ？ すでに上でわたしが土方教授の『配分』概念の決定にいたる道行きの紹介で觸れたやうに、『配分』はいはゆる經濟の諸領域のうちで純粹の消費と技術的意味における生產とを含まないだけであつた。このことは土方教授の他の說明を併せ聞くと、一層に明瞭である、『……私の云ふ配分は……少くとも生產物の分配はかりでなく、生產手段の分配をも包含

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する。』さらに『價格取引によるものばかりでなく、租稅其他の過程によるものをも包含するのである。』『消費は如何と云ふに。』『消費が經濟に觸れる點は獲得の爲に代價を支拂ふ點、卽ち賣買、交易の諸問題である。之は交互提供乃至獲得として當然配分に包含せられる。』のみならず、『交換は交換以外の配分過程と並んだ一つの配分過程に外ならない』し、『所謂分配論は獲得關係として之亦當然配分に包括せられる』のである。（『生產關係と配分關係』、『經濟往來』、卷二、號六、頁七）すなはち、土方教授の『配分』は、生產手段の分配（技術的意義を除いての生產）、交換、分配、消費（『經濟學の消費論でも實際取扱つてゐるところ』のもの。前出『社會經濟體系』、頁一〇）の全部を含む。土方教授は明言される、——『かくして從來經濟學に於て論述せられる事項であつて、當然（我々の「體驗」、「常識」から見ての意味！——大森）經濟學が包括すべしと考へられるものは配分概念は一も之を排除しないのである』

つまり、『配分』は經濟であるではないか！『配分』は普通にいふ經濟と全く一致する。勿體ぶつた『配分』の說敎を長々とした揚句が、『經濟の均衡を維持する要素』といふ場合の『經濟』は、普通にいふ、我々が『常識』で知つてゐる經濟と大して變りないといふことだけが出てきた。かういふのをこそ「泰山鳴動して鼠一匹」といふんである！

問題は一歩も進んでゐない。なぜなら、これら種々の經濟の領域のいづれが全體としての經濟に對して決定的であるかは少しも明かにされてゐない。こゝで讀者に注意しておくならば、『配分』が全體としての經濟に決定的だなどゝいふことは斷じて云ひえないのである。『配分』は經濟と同じものであり、從つて、もし上のごときことを云はうとすれば、經濟が經濟に對して決定的であるといふ無意味な命題に陷るから。かうした土方教授の所論の馬鹿らしさは、我々がこれをマルクスの說明と對比するとき、一層に明かになる。マルクスは云ふ、——『我々の到達した結果は、生產、分配、交換、消費が同一だ、といふことではなくて、それらが總て一個の總體性の成員を、一の統一の內部における差異を、形成するといふことである。生產は、生產の對立的規定における生產自身を包攝すると同樣に、他の諸模機をも包攝する。過程は常に生產から新たに始まる。交換と消費とが包攝者でありえないことは、おのづから明かである。同樣にこの事は生產物の分配としての分配にも當てはまる。しかし生產要因の分配としては分配自體が生產の一模機である。だから生產の一定の形態は、消費、分配、交換の一定の形態を規定し、これら種々なる諸模機相互間の一定の關係を規定する。』（傍點は原文のまゝ）見よ！土方教授にあつては、雜然と何の連絡もなく、『配分』なる木函のなかにたゞ抛りこまれた經濟の諸領域は、マルクスにあつては、整然と區別され、適當なる相互の關係に置かれてあるのみならず、これら諸『成員』を、また全體の關係を決定するものが何であるかを、その役割を務めるものが狹義の「生產」であることを、完全に明かにしてゐる。（土方教授はその『生產關係と配分關係』において、『經濟學批判序說』をあぶなつかしく引用しつゝ——然り、土方教授がいまや自白することを餘儀なくされたごとく（『マルクスに對する無理解とは何か』、『經濟研究』、卷四、號四、頁三一）誤謬を包含しつゝ——この點に關するマルクスの所論に對して何事か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が云つてをられる。しかしそれはすでに他の人によつて指摘されたとほり、マルクスの生産概念の種々なる意義に對する無知と盲目を表白する以外の意義をもたない。乞ふ、出直されよ！）

さらに、我々がいま一歩を進めるならば、土方教授の混亂はまことに收拾すべからざるものとなつてくる。

讀者は、直ちに、上に掲げた土方教授の表——經濟變動の要素を羅列したる——を見られよ。そして、わたしが傍點を附した項目に眼をとゞめられよ。そこには『要求關係』のもとに『欲望狀態』、『欲望を主張する力の狀態』として『武力』、『知力』があり、『提供關係』のもとに『技術』、『自然力』がある。

我々はこれについて何を見るか？　土方教授の『背理』は二重の意味においてまさに頂點に達してゐる。

それは、なによりも、はなはだしい自己矛盾である。土方教授が經濟とは配分であるとして經濟を規定せられたことは、我々のすでに見たところである。その際、我々は、純粹の消費、技術を經濟にあらずといふので除外されたことを、確めた。しかるに、いまはいかに？技術についてはあらためて云ふ必要はない。『欲望狀態』は論ずるまでもなく、純粹の消費に屬する。いな、そのもうひとつ奥に存する。してみれば、經濟に屬さない筈であつた上の二つのものが、こゝでは、經濟といふ字の下に（表を見られよ！）いつのまにか書きこまれてゐるわけである。それのみではない。『經濟變動の原因』を『經濟關係の均衡を維持する要素』に歸せしむべきであるといふのは、土方教授のもつとも大切な主張ではなかつたか？　そして、その際『經濟關係以外の要素』として排斥されたものは、——土方教授自身によれば——『政治法律宗教の現象』、『所謂觀念形態』（『經濟研究』、卷四、號一、頁六）ではなかつたか？　しかるにこの表では？　そこには、まづ『武力』、『知力』がある。しかも土方教授の説明によれば、『武力』とは『源平二氏が』『天下の政權を握』らんがために行使したごとき武力である。（同上、頁一六）これが、『政治』と密接に結びついた、從つてその意義において同じ意義をもつたものであるとは、讀者が直ちに首肯せられるところであらう。さらに、知力とは、——これも同じところの説明によれば——『無産大衆が、知力の發達によつて生存權の要求をなし理論的に自己の要求の正當を認められんとするが如きは之である。』この知力がイデオロギー（『所謂觀念形態』）に屬さないといふのか？　最後に『自然力』！　これが『經濟關係以外の要素』ではないといふのか？　かくして、『經濟の變動を經濟の均衡を維持する要素に歸す』といふ『配分史觀』の根本要求は、土方教授自身によつて見事に拋棄されてゐる。

かくのごとき自己矛盾を平然として敢てしつゝあるのが、『東京帝國大學經濟學部に經濟原論の講座』を擔當される土方教授である！

しかし、我々はかうした自己矛盾を數へあげることを——涯しがないから——止めよう。土方教授の誤謬は單なる自己矛盾以上に深いものがある。

我々は、この表を一瞥することによつて、ありとあらゆる『要素』が、『經濟關係の均衡を維持する要素』になつてしまつたことを見る。わたしはさきに、『經濟の變動を經濟の均衡を維持する要素』に歸する

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ことは一個の同語反復にすぎないことを明かにした。しかるに、いまやその要素が經濟にいくらかなりと關係する要素と置き換へられるにおよんで、同語反復はますますその面目を發揮するにいたつた。『提供側乃至要求側に於ける或要素の變動によつて以上の關係の均衡が破壞せられたとすれば、遂に經濟狀態の變動が齎らされる、』といふやうに、以上の夥しい要素が區別なく取りあげられるにおいて、さらにもその輝しさを（？）增しつゝ。

この節は、殘りなく追求しておく必要がある。土方教授によれば『配分』には『提供關係』と『要求關係』とが區別された。前者は配分さるべく『提供』するのであり、後者は配分されたものを『獲得』することであり、またそれを『要求』する意味であることは、わたしの說明したごとくである。讀者諸君！この小むづかしい字面を離れて中實を考へて御覽なさい。それはたゞ、いはゆる需要・供給といふのと髮ひと筋の違もないではないか！需要・供給といふことが、それだけでは無內容なことは、あらためて說明するまでもない。こゝで、教授の大掛りな『經濟の均衡する要素』といふ言葉の眞意は、『正體』は隈なく暴露される。それは、『經濟關係』は需要・供給の『均衡』によつて維持される、需要・供給に關係するかぎりなんでもかが『均衡』を維持する要素だ、といふことにすぎない。なんでもが、このかぎりは經濟變動の原因だ！

そこで、何が明かになつたか？『經濟の變動』は、その變動に關してくるかぎりのあらゆる要素によつて、といふことである。見よ！『經濟關係、經濟關係の變動原因を何に、如何なる要素に歸すべきやの』土方教授の設問は、最後に、經濟の內なると外なるとを問はずおよそこれに關係するあらゆる要素に、と答へられたではないか？これ以上に無意義な同語反復を考へ出すことは、我々普通の人間には不可能である？だがしかし、それが土方教授の『配分史觀』である

二　とりとめもなき唯物史觀批評

讀者は、土方教授が、上のごときぐうたらな『史觀』を武器に、いつたい正氣で、史的唯物論に立ち向ふのかと、驚かれるといふのか？まつたくだ！しかし、ともあれ、土方教授はその錆びついた鈍刀を史的唯物論に向つて振翳されるのである。

もとより當然のことであるが、教授の批評は全く斷片的である。史的唯物論のごとき一個の巨大なる建物に對して、聯系なき斷片批評を加へること自身が、すでに無意義である。のみならず、氏は唯物論的辯證法に對して一瞥すらもされたことがない。唯物論的辯證法こそは史的唯物論の基礎である。これを無視して史的唯物論を云爲するのは、たゞ、評者が史的唯物論、唯物史觀に對して必要なる知識をもたないことを告白するものである。

この點はしばらく措く。讀者はいはゆる唯物史觀の『公式』の次の句を熟知せられるであらう。『人類は、彼等の生活の社會的生產に於て、一定の、必然的の、彼等の意思より獨立せる關係を、即はち彼等の物質的生產力のある一定の發展段階に適應するところの諸々の生產關係を、與へられたものとして受取る。これらの生產關係の總和は、その社會の經濟的構造、即はち法制上の及び政治上の上層建築がその

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上に立ち、一定の社會的意識形態がそれに適應するところの、現實の土臺をなす。』土方教授はこれに疑問を呈される。『…世人(?――大森)は經濟生活は社會生活の眞實の土臺であると云ふ。眞實の土臺とは如何云ふことを意味するであらうか。』(前出『社會經濟體系』、頁一四)そして、詰問される、――『…他の生活の變化が因となつて經濟生活を變化せしむることはないといへるか。』(『經濟生活の理論』、頁二一)『經濟狀態の變動は法律關係の變動を齎すことは認めなければならないが、同時に法律、政治狀態の變化或思想が經濟狀態に變化を及ぼす事も否定するを得ない。』(『經濟研究』、卷四、號一、頁四)土方教授によれば、あだかも史的唯物論はたゞ經濟からの一面的な影響のみを認めて、他の上層建築、社會的意識形態から經濟への作用を否定するかのごとくである。虚構もはなはだしい! 『…上部構造自體は又經濟的關係及び生産力に影響を及ぼすか。上述した處に據つて夫が影響せねばならぬことは明かである。夫は發達促進力であり得るし、――一定の事情の下では――發達の制動機ともなり得る。然し何れの場合にも夫は常に逆に經濟的土臺並びに生産力の狀態に作用するのである。換言すれば、種々の社會現象間には相互作用の、不斷の過程が存在する。原因と結果とが其他位を代るのである。』(ブハーリン、傍點――原著者)かくのごときが眞の史的唯物論の主張である。

土方教授の論理は醉ひどれの足どりにも似てまことに「醉歩蹣跚」である。跡つけるだけでも容易ではない。氏はこゝで別の理由を出してこられる。教授によれば『經濟法制・經濟政治は經濟狀態の推移と共に變動することは明かである。』が、『慣習法が成文法の形態を採り、專制政治が民衆政治に推移する等こそ寧ろ眞の意味の法律政治の變動ではなからうか。而も之等がすべて經濟狀態の推移によつてのみ說明し得るとは何人も主張し得ないであらうと思ふ。』(前出『經濟研究』頁四)まづ見よ! 土方教授の「主張」の唯一の據りどころは、いまや、『何人も主張し得ないであらうと思ふ』、といふ土方教授の想像である。土方教授の『思ふ』をもつてマルクス・エンゲルスの全理論に對抗しようといふんである! しかしそれよりも。土方教授の史的唯物論に對する無識の程度は、こゝにおいて、まさに完全無缺である。例へば、『封建的の』『經濟社會構成』に基く『專制政治』がいかにして、『近代資本家的の』『經濟社會構成』に據る『民衆政治』に移つたかの經濟的說明は史的唯物論のもつとも輝かしい仕事ではなかつたか? いな、一般に『政治的秩序は副次的要素であつて、市民社會、即ち經濟關係の王國が決定的要素である。』(エンゲルス)ことを明かにしたことこそ史的唯物論のある意味においてもつとも主要な功績である。これらの諸文獻を全く知らずして、たゞ『思ふ』といふのが、土方教授の批評(!)である。具體的に例を擧げる。マルクスの「ルイ・ボナパルトの霧月十八日」を見られよ! これは『經濟政治』には決して屬しないボナパルトのクーデタといふ政治的事件を取扱つたものである。しかもそれはマルクスのもつともすぐれた歷史的文獻として、史的唯物論のもつともよい具體的適用としてあまねく認められてゐるものである。土方教授よ! たゞ『思ふ』などゝ云ふのをやめて、ひとつこの著作の批評をでも携げて我々に向はれてはどうですか?

ところで經濟が法律、政治等に影響することは認めるが、逆に法律や、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政治などが經濟を動かすことも認ねばならんと、わざわざ唯物史觀に向つて訓へられた土方教授はさらにその饒舌を續けられる。『……各個の生活がお互に影響し合ふ場合に、一つが常に窮極原因であると主張しうるためには他の法律政治宗教等が單に經濟の推移によつて其内容を變ずると云ふだけでは駄目である。』（前出『社會經濟體系』、頁二五）なぜ『駄目である』？　しかし、それを追求する前に、わたしは、上に見たやうに、『種々の社會現象間には相互作用の不斷の過程が存在する』ことを主張する我々は、單なる「相互作用」を云ふのではなく、この過程の『窮極』の決定者が何であるかをさらに明かにするものであること、――そのことは今日すでに我々の確立したところであることを、讀者に告げておかねばならない。『如何なる與へられる瞬間に於ても、社會の内的構造は此社會と外界自然との相互關係に依つて、即ち社會の物質的生産力の狀態（從つてまた、社會の「經濟的構造」――大森）に依つて規定され、而して其形態の變化は生産力の變動に依つて規定される……』（ブハーリン）

さて、立戻つて、どうして駄目であるかを土方教授にお訊ねして見よう。土方教授は上の『駄目である、』に續けて云はれる。『經濟と云ふことから法律も政治も宗教も出て來る。經濟を通さずして法律等は出て來ないと云ふことが主張出來なければならない。』『之等（法律等の――大森）の樣式が經濟によつて影響を受けると云ふことゝ之等の關係其物が經濟から生じて來ると云ふことゝは同一ではない。』しかるに土方教授の見るところをもつてすると、『法律の總て殊に法律其者は經濟なくしては出て來ないとは到底主張出來ないと思ふ。』（また、思ふ、ですか――大森）『武士道精神、忠義と云ふやうな思想が、封建經濟、即ち或意味で專制經濟の所産（すなはち經濟を通つて出てき！――大森）であると云へるとしても、現在例へば忠義が善なりとする倫理觀念其者が經濟の所産であるとは云へまい（と思ふ？――大森）。』（前出『社會經濟體系』、頁二五）『……法律、政治、宗教が經濟の創造する所であると主張することは到底不可能であると信ずる。』（たゞ信ずる？！――大森）』（前出『經濟研究』、頁三）我々はこれで土方教授の云はれるところを、ともかく、理解することができる。史的唯物論は、經濟其者が法律其者その他を創造することを主張せねばならない、しかしそんな主張は到底できない筈だ、――これだけである。

おそらく、こゝで土方教授は經濟を鷄に見たて、法律や政治を卵に見たてられ、經濟が法律やなどをひり出すと考へられたわけであらう。なるほど童話としてはよい思ひつきである。だがしかし、こんな童話を「理論」だと眞面目に思ひこんでゐるのは、古今東西を通じて土方教授だけだ？　マルクスやエンゲルスはもとより童話作者ではない。『哲學に於ては、例へば經濟的の影響が（多くは政治的その他の扮裝をなして始めて作成する）先人から傳へらるゝ、既存の哲學的材料に對して働き掛けてゆく。經濟はこの場合、直接に何物をも自分自身で創造して了ふものではなくして。唯既存の思考素材の變革（傍點―原著者）と發達の仕方（傍點―同上）を決定する。』（エンゲルス）

では、史的唯物論は何を主張するか？　それは、一定の經濟過程が一定の政治、法律等の諸過程を決定（この意味で創り出すといふ言葉を用ゐてもいゝ）することを主張する。例へば、土方教授の例をとる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ならば、封建經濟といふ一定の經濟が武士道といふ一定の倫理を決定するといふやうに。また、資本家的經濟過程が現今存するやうな一定の法律過程を決定するといふやうに。これで明白に唯物史觀は原因＝結果の關係を、經濟が『常に窮極原因』であることを云つてゐる。これ以上を求めるのは童話作者、土方教授の幻想にすぎない。我々が經濟が法律等を決定するといふ場合は、たゞ上のことの抽象的ないひとしてにすぎないのである。讀者はこゝでも、土方教授の批評なるものが、いかに唯物史觀に對する無識と虚構の上に築かれてゐるかを、看取されたであらう。

わたしは先を急がう。いつたい、どこにでも數限りなくある教授の不滿足の論理を仔細に檢して、そこから必然に生れ出てくる教授のたぐひ稀なる道化姿を讀者に示すことは興味のないことではないが、すでに與へられた紙數を大分に使ひつくしたわたしはこの切角の仕事を割愛して、たゞもつとも主なる教授の出鱈目を明かにするにとゞめる。

教授は「物質的生產力」の意義が廣狹二樣に解されてゐることを（おえらいですな！）述べ立てゝ、一見巧妙らしい批評を試みられる。すなはち、いかに狹く解釋しても『一元的』の說明たりえぬし、いかに廣く解しても不充分である、と。こゝで「物質的生產力」の正しい意義などを土方教授に向つて說くことは、豚に眞珠を投げることである。いづれにしてもその批評が無意義であることをいへば足りる。教授の意味される『一元的』とはどういふことかを見よう。『或る說明が一元的なりと主張しうるためには、其原因、原動力と稱せられる槪念の內容が單純にして、更に一層の分析を不可能ならしめる如きものでなければならない。「物質的生產力」を狹く「生產技術」と解した場合にも、その『生產技術は更に分析を致すべき複雜なる內容を含むことは否定しえない』。（前出『經濟研究』二一頁）讀者諸君は、こゝで『分析』といふことが、全く抽象的に解されてゐるのを見るであらう。この意味では、例へば經濟學上の說明においても、純粹物理學における最高の物質概念にまで溯らないかぎりは『一元的』でないのである。政治や法律についても同樣であらう。かくして、そこでは社會と自然との對立も、經濟と政治や宗教の區別もなくなつてしまふ。かゝる分析は無益であるばかりでなく有害である。いま、史的唯物論が社會現象、社會の構成の全體をその對象とするかぎり、その分析には限界がある。その意味で「物質生產力」はこゝで最後のものである。そこでこの說明が一元的であるかどうかを決するのには『更に一層の分析を不可能ならしめる』か否かを抽象的に論じるがごときは無意義極りない。

それでは、廣く解して不充分だといふことは？　土方教授は昂然として云はれる、――『…如何に廣義に解しても物質的生產力の發展の槪念中には要求關係の變化を包攝せしめることは困難である』（同上）わたしはこの點にすでに答へておいた。こゝでの土方教授の批評が成立するためには、『要求關係』が經濟變動の決定要素に屬するといふことが證明されてゐなければならぬ。その證明は？　それは『配分史觀』の成立に懸つてゐる。しかし、この『配分史觀』なるものが『史觀』でも何んでもない一個のたは言にすぎないことはわたしのすでに證明したところではないか！　問題はこれで決定してゐる。

この批評に續いて土方教授は「物質的生產力」と「生產關係」の矛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

盾についてたはいもない攻撃を試みられる。『凡そ或矛盾が生ずると云ふならば、物質的生産力の發展が實現を要求する所の生産關係と何等か他の關係とが矛盾すると云ふことでなければ意味をなさない』（前出『經濟研究』頁二四）こゝでの土方教授の醜狀はほとんど見るに堪へない。

わたしはまづ、土方教授のこの批評の對象に該當するマルクスの言葉を掲げよう、――『社會の物質的生産力は、その發達のある一定の階段に於て、從來それが其の内に活動してゐたところの現存の生産關係、或はたゞその法的表現に過ぎざるところの所有關係と、衝突するに至る。』これに對して、土方教授は、矛盾は關係と關係といふやうな同じもの〻間でなければ『意味をなさない』といふ三百代言式な云ひ草をもつてマルクスの揭足をとらうと試みられたのである。しかし、土方教授以外のすべての讀者は、上のマルクスの言葉を讀んでその意味を直ちに了解されたであらう。もし土方教授が特に御所望とあれば、『物質的生産』の一定の發展段階に應ずべき（例へば共產主義の）生產關係が『他の關係』（例へば『現存の』資本主義の）と矛盾するにいたるといつてもいゝ、たゞマルクスはこんな間拔けな表現をしなかつたまでだ。

この點に關する土方教授の理解の不可能は、もうひとつあるやうである。氏は云はれる、――『物質的生産力は發展せんとし、生產關係は之を抑止すると云ふことは直ちには考へ難い。』上に見たやうな自己矛盾と同語反復の專門家たる、ひとりの土方教授において『直ちには考へ難い』といふことは、この際問題にならない。讀者諸君・資本主義を例にとらう。そこに見られる帝國主義時代の戰爭と恐慌とは、いかに『物質的生產力』の發展が私有財產制を基礎とする資本主義の『生產關係』によつて抑止されてゐるかを、白日のもとに暴露するものではないか！

土方教授は、なほこのほかに、階級闘争の問題、『經濟組織の變遷と政權の推移』（經濟革命と政治革命）の問題についても、また斷片的に二三の言辭を費してをられる。しかし、前者については『精細なる（？――大森）考察』を『他日に讓』られてゐるがゆゑに、後者に關しては、――すでにいつたやうに――史的唯物論が夥しい具體的適用（例へばフランス革命、ロシヤ革命について）と理論を提供してをり、たゞ『思ふ』一天張りの批評から土方教授が數歩前進されるのでなければ、我々は對手にとる忍耐さをすでに喪つたがゆゑに、いづれも觸れないでおく。

とまれ、土方教授の唯物史觀批評はかくのごとくにとりとめもないものである！

三　支離滅裂！自己矛盾！理論的能力！

我々は上の土方教授の『配分史觀』と唯物史觀批評とから何を知りえたであらうか？

その驚くべき自己矛盾はすでに充分に見た。さらに氣づかれることは、その論理の救ひ難き支離滅裂である。そのいくつかをわたしは上で摘示したが、こゝで。觸れずにおいたいまひとつの（重要！）なものを取りあげて見よう。讀者は『配分史觀』の當初の設問を想起されたい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そこには『經濟關係・經濟狀態の變動原因を何に……歸すべきや』とあつた。また『經濟史の連續的なる說明が中斷せられる處』といふ言葉を讀者は記憶されるであらう。これらによつて見るならば、問題は單に經濟にのみ關係するかのごとくである。しかるに、他方では、教授はこの『配分史觀』をもつて『マルクス主義社會學』（ブハーリン）たる唯物史觀に對立せしめられる。また、『歷史の說明方法、史觀の中で』（前出『社會經濟體系』頁二一）といふ言葉がある。のみならず『配分史觀』といふ言葉からして、問題はひとり經濟史にだけではなく歷史全體に、たゞ經濟のみにではなく、社會全體に關することを示してゐる。全體としての社會を對象とするものと、その一部たる經濟を中心にするものと、いつたい、そのいづれであるのか？ 土方教授は、二つのもの〻間を、あてどもなく、彷徨はれる。まことに慘憺たるものである。かうした支離滅裂とさきの自己矛盾と――それはほとんど土方教授の句を追ひ、行を追ふて指摘することのできることである。――は土方教授がいかに理論的に無能力であるかを語るものではないか！

さらに、例へば唯物史觀批評におけるマルクス・エルゲルスの駁擊の最後の根據が、『信ずる』『思ふ』であり、『考へ難い』であつたことは、讀者のすでに見られたごとくである。そしてこれとならんでのいまひとつの根據は『吾人の體驗』『あまりに顯著た現實である』といふことであつた。マルクス・エンゲルスの理論は事實から出發して、これをその本質にまで掘り下げたものである。しかも、これに對抗するに、事實の現象の皮殼の斷片とみづからの想像とをもつてするのが土方教授である。これ、その理論的無能力を語るものではないか！

土方教授は理論的に全く無能力である！

この意味において、櫛田民藏氏が土方教授に對して、その無理論をあげて『この排論（土方氏のマルクス價値論の批評を指す――大森）の如きが、資本家の代辯だと思はれると思つて心配するなどは最も無用な心配であらう』（櫛田民藏氏『マルクス價値論の排擊』、『我等』卷九、號八、頁四六）と云はれてゐるのは皮肉としてまことに痛烈である。

しかし、皮肉を別として、無理論の理論家土方教授は、いま刻々に擴大し、深化しつ〻ある階級鬪爭においてなんらの役割をも眞實に務めないであらうか？ 務める！ では、いかなる意味において？ わたしは進んでそれを明かにせねばならない。理論は理論として存するものではない。必ず社會的根據を、階級的な基礎をもつ。土方教授の無理論の理論もまたさうである。我々は土方教授の『配分史觀』の、唯物史觀批評のこの最奥の根據――社會的根據を暴露することなしには、これを眞に克服しえないであらう。

四　土方教授の社會的根據、配分學の階級性は何か？

我々は、土方教授の所論の社會的根據を突きとめるに先きだつて、社會科學の階級性の問題そのものの前にしばらく立ち停まらねばならない。土方教授は我々が社會科學の階級性を云ふや戰慄し、畏怖し、たゞ周章狼狽される。『近來社會科學の階級性が一部の人々によつて稱へられ、社會科學は其屬する階級によつて立場を異にし、各人は何れか其屬する階級の立場に立たなければならない。階級以外の立場はな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いと云ふことが稱へられる。然らば各人の云ふ所が此立場立場に捕れてゐて、其の云ふ所が何れも一面的であると云ふのかと思ふと、無産階級の科學の方が正しいと云ふ。』(『マルクス價値論の排撃』、頁二三五—六)かういふ議論は、土方教授がなんとしても打破らねばならないものである。そこで苦しまぎれに次のやうなことを口走られる、——『正しいと思ふ自分の立場に立つものが、一度も他人の立場に立つことが出來ないならば、他の立場のものが倒立ちしてゐるとどうして云へるのであるか。』(同書 頁二三七)噴飯に價するとはかういふ議論である。譬へば、わたしが角兵衛獅子の鯱立ちを見てゐたとする。そのときわたしが「あゝ、逆立ちしてるな、」といつたとしよう。すると隣にゐられた土方教授は憤然として、「どうしてあれが逆立ちしてゐることがお前にわかるか、お前は一度も角兵衛獅子の立場に立つたことがないぢやないか、」とわたしを呶鳴りつけられるのである。もし讀者諸君がこの立場に居合せられたなら、諸君は、なにはさておき、土方教授を狂人病院に送り込むべく、交番に駈けつけられないであらうか?

無産階級は、有産者社會における有産階級の地位を明白に認識することができる。わたしが土方教授の地位を認識するのと、同じ明白をもつて。またそれみづからの地位をも。そこで、無産階級は、この地位のいづれが、對象を『人間認識とは獨立に存在するところの客觀的現實態』(レーニン)をより正しく認識せしめるに適するかを決定することができる。こゝから有産者科學と無産者科學のいづれが正しいかを確立しうるではないか! しかし、この無産階級の認識、決定に對して有産階級に同意しないといふのか? ある人、また人々が同意すると否とは認識の客觀性にとつて問題にならない、かくして、土方教授の云はれる『共通の立場があると前提すればこそ、何れが正しい正しくないと云ふ議論も出來るのではないか』といふことは全く無用な饒舌である。有産階級でもなければ無産階級でもない、兩者に共通の立場などゝいふ變挺なものを、この問題のために『前提す』ることを少しも必要としない。

しかしながら、この問題に關する土方教授の所論において、我々の見逃してならない點はほかにある。讀者は次の土方教授の言葉を注意深く讀まれよ!『かくの如き背理(社會科學の階級性の主張を指す——大森)が公然あらゆる論壇に雜誌に著書に大聲叱呼せられて、人々が怪しまない今の世を人は何とか見る。敢て世の識者の三思を要求して止まないのである。』(同書、頁二三八)見よ! 理論において克ちえないことを知つた土方教授は問題の解決を『識者』(!?)に愁訴するにいたられたではないか! こゝで『識者』とは誰か? 恐らく讀者は直ちに了解されるであらう。敢て云ふまでもない。たゞわたしは上のやうな階級性を主張する思想をもつとも好まないものは反動團體と×××であるといふ事實を告げておけばよい。

ところで土方教授の理論の社會的根據は?

冒頭に述べたごとく、土方教授の存在の唯一の理由は、そのマルクス『排撃』にある。そこで、この點を中心に考察を進める。教授は、そもそも、なんのためにマルクス批評を試みられたか?『私は自分の云ふところが如何に非阿世的なる(みづから非阿世的だと名乘るほど阿世的なことはなからう!——大森)理論であるにもせよ、非論理と

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思ふところは之を非論理として指摘しなければならないと感し、從來マルクス勞働價値學說に對する疑問を敍述して來た。」(「マルクス價値論の排擊」頁一五六)なんと學問に忠實なことか！　だが、我々はこの法衣の下を見る必要があらう。氏は櫛田教授の駁擊に答へようとして云はれる、――『私一身の事情としては自分の企圖しつゝある著書の刊行に寸暇を惜みたいのであるが、論難を加へられて默視するは、其駁論を肯定するものとの誤解を招く虞がある。(たゞその虞のために答辯?――大森)』(『社會科學研究』卷一、號二、頁二)また、『東京帝國大學經濟學部に經濟原論の講座を擔當する私としては(威嚴の手前?――大森)、迅速なる答辯の責任を感せざるを得ない』(同上)讀者諸君！法衣の下に何が見えましたか？

この「何」は我々が土方教授のマルクス批評の態度を顧るにいたつてやうやく明かになる。讀者は、さきにわたしが教授の唯物史觀批評を駁した際に、數多くのマルクス、エンゲルスその他の引用を掲げたことを煩はしく思はれたでもあらう。しかし、わたしはそれによつて眞の史的唯物論の片鱗をなりと示さうと考へたのである。と同時に、わたしは、土方教授がいかに虛構をもつて史的唯物論を歪曲されたかを指摘しようとしたのである。實際、土方教授の批評は、史的唯物論の決して主張しないことをあだかも主張してゐるかのごとき虛構の上に立つ。のみならず。一歩深く史的唯物論を研究するならば直ちに了解されるものを、その勞を惜しんでの『排擊』である。また、史的唯物論が充分に展開しつゝある說明、理論を無視しての批評である。一言でいへば、それは史的唯物論のなんたるを決して採らうとはしない、字義どほりの『排擊』にほかならない。我々はこゝに何を見る。たゞ一途に唯物史觀に、およそマルクシズムに向て攻擊の辭を放たうとする、灼くがごとき熱意である。ひたすらなるマルクシズム討伐の志向ではないか？

これらのことをいま一段と裏書きするものは、社會主義に對する土方教授の徹底的なる無理解である。土方教授は、最近、人口論においても、そのマルクス『排擊』者たる本分を忠實に果されてゐるが、そこで河上博士の所論に抗して次のごとき言辭を弄される。『……資本主義が機械力の發達を導き社會主義には機械力の應用が行はれざるものとすればそれは大きな問題である。我々が人口問題に惱むゆゑんは少くとも各人が現在の生活程度を維持して行き更に向上せしめようといふ所にある。萬人が平等の分配に預り機械力の應用も借らず何等生活の向上を圖らず原始的生活に甘んずるとせば問題は自ら異つて來る。(土方成美氏『人口問題と資本主義』、『東朝』十月七日)土方氏によれば、河上教授が、マルクシズムが說くところの社會主義においては『機械力』が用ゐられず、人間が『原始的生活』に甘んずるかのごとくである。わたしは一言の辭を費すの必要もない。たゞ、土方教授が、奇蹟によつて、社會主義者になられた場合にのみ、かゝる珍妙な社會主義を現實に聞くことができよう。何人も、これが社會主義に對する無理解、また誣告である點において稀に見るものなることを、疑はぬであらう。

それでは、これと對比して、土方教授に資本主義をいかに見られつゝあるか？

『私有財産制度が、恰も維新當時封建制度が天下の浪人、輕蔑の武士

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

によつて呪はれたやうに、多くの人々の呪咀の標的になつてゐるかどうか（これに疑がある？――大森）其然らざることを希望するが、私有財産制度も部分的に本來の趣旨と矛盾する多くの事實を産み出してゐることだけは争はれない。（『經濟生活の理論』序五）また、『…現在の經濟組織を其儘（！）永久に存續せしむべしとの意見も樹立し難いと同時に、又少くとも現在の組織が不斷（！）に變革されつゝある事實を否定するを得ない。』（『經濟研究、』卷四、號三、頁一六九）

『現在の經濟組織を其儘永久に存續』せしめよう（おゝなんと大それた！）とするものではないといふ土方教授の主張は、一見、資本主義を、、するかのごとき觀を與へる。しかし讀者諸君、安心（？）されよ！今日、資本家側の『其儘』の『存續』を主張する者は一人もないのである。もつとも反動的な資本家といへども變化を認めるし、またむしろ希望する。自由競爭の資本主義から獨占資本主義への轉移、また國家資本主義の完成等は資本家の決して非認するところではないし、またなかつた。もつと具體的な例を擧げる。最近、我邦資本主義の、「合同」を中心とするいはゆる「整理過程、」――この變動は實に資本家にあつて要求され、試みられつゝあるものではないか！

では、土方教授のいはれる「變革」は――これ以上に出でるか？斷じて否。教授にあつては資本主義そのものは、――土方教授の言葉をそのまゝ用ゐれば――『私有財産制』はたゞ『部分的に（只！）是認を拒まれるのみである。教授は、『現在の組織が不斷に變革されつゝ』あるといふ。讀者諸君！　我々の見る『事實』は何か？　資本主義は厳として存し、たゞその枠内において許されるかぎりの變化が行はれてゐるといふことではないか！　重ねていふ、土方教授の認められる『變革』はこれのみである。

同時に、我々はこゝにおける土方教授の悪意に充ちた手品を見落してはならぬ。教授はこの變化をもつて、「變革」眞の意義を抹消し去らうとするのである。このことは『配分史觀』においても見られた。そこで個々の『經濟状態の推移』と『經濟組織の變動』とが、等しなみに取扱はれ、なんの區別も與へられなかつたことは、讀者の記憶されるところであらう。

さらに、我々は、その科學的な粉飾を脱落せしむべく、土方教授を現實問題の前に立たせて見ようではないか！　氏の『川崎救濟問題の再論』（『改造』卷九、號八）は、川崎を救濟すべきか否かについて、たゞ世上に行はれる救濟說の論據を抽象的に批評するにとゞまり、はたして諾か否かの積極的な主張と論據とを少しも示さない點において、はなはだ珍なるものである。が、それはしばらく措く、氏は最後に、『重役の私財提供』の叫びに激せられて絶叫される、――『…世間が重役に私財提供を強要するが如きは、有限責任の主義で經營せられてゐる株式會社企業の本旨に反することはないであらうか。…一應有限責任の前提によつて行はれたことに對して、外部から私財提供を強要するのは當を得ないのではなからうか。（上掲論文、頁二二）こゝで土方教授が憐れなる重役のために辯ぜられる、たつたひとつの根據は、『株式會社企業が有限責任であるといふことだけである。この制度そのものゝ批評のごとき、土方教授にとつて思ひもよらぬことである。許

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本家の作りあげだ制度に對する猫のごとき柔順さ―（讀者はこゝでさきの土方教授のマルクス『排撃』への異常なる熱意を思ひ合はされよ。）

かくして、我々は何を見たか？　土方教授の理論的無能力と、資本に聲援を與へんとする、從つてマルクシズムの『排撃』者たらんとする止み難き希求である、――その理論がはたして、有産階級の階級利益を眞に理論づけ、有效なる辯護の學的武器となりうるか否かは問題ではない、たゞ、その止み難き希求である。この兩者は別々に存するものではない。理論的に無能力なるがゆゑに、その理論家の地位を支持するには理論以外の特別な努力をせねばならない。資本主義を、無理であらうとなんであらうと聲援しようとするがゆゑに、その理論はますます支離滅裂のものとなる。我々はかゝる背景においてはじめて、土方教授の唯物史觀批評と、またそのためにする『配分史觀』とが、なにゆゑに上に見たやうな具體的な形をもつたかを、理解しうるであらう。

これが階級鬪爭の今日の狀勢において客觀的に何の役割を果すといふのか？　讀者はスポートにおける應援團を知つてをられるであらう。それは決してスポートの技に錬達してゐるわけではない、彼等はただ、旗を振り廻し、叫喚して味方を聲援する。そして對手の妨げ――たちのよくない應援團である――を試みる。この應援團は味方にとつてなかなか大切である。支配階級の理論的應援團！　もし土方教授を何物かになぞらへやうとすればこれであらう。

最後に、わたしは以上の所論に對して、別に土方教授の答辯を要求しない。なぜなら、教授がこれに答へえようとは思はないからである。しかし土方教授は答辯を試みられるかもしれない。なぜなら、その背後にかの、きらびやかな鞭の音の響くとき、土方教授は我を忘れて驅け出さざるをえないからである。よしそれならば、わたしは幾たびたりとも筆を執つてこれを粉砕するであらう。これこそ我々の「戰鬪的（テリリスムス）唯物論（ミリタンス）」の任務であれ！

新刊紹介

◆**東洋和漢醫學實驗集** 上卷（渡邊熙著・定價七圓・大阪市東區高麗橋一ノ六・東洋和漢醫學研究會）

◆（感想集）**壷上の石**（久門正雄著・定價一圓六拾錢・大阪市東區北久太郎町四丁目・柳原書店）

◆（詩）**北方の曲**（大谷忠一郎著・定價一圓八拾錢・東京市本郷區本郷四丁目・文武堂）

◆**普選ポスターと新戰術**（國民新聞社政治部編・定價四拾錢・東京市京橋區日吉町・民友社）

◆**偶成詩集**（百田宗治著・定價六拾錢・東京市麹町區下六番町四八・厚生閣）

◆**怪奇美の誕生**（関穎三著・定價二圓五十錢・大阪市西區靱上通一丁目・創元社）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

アリストテレースの『流通の正義』

＝マルクスの其解釋に關する疑（其一）

附　河上博士等譯資本論中或重要なる不正確又は誤謬について

福田德三

（一）

マルクスは、其の『資本論』第一卷の一八六七年刊第一版の序文（七―八頁）に於いて、左の如く云つてゐる。

Aller Anfang ist schwer, gilt in jeder Wissenschaft. Das Verständnis des ersten Kapitels, namentlich des Abschnitts, der die Analyse der Waare enthält, wird daher die meiste Schwierigkeit machen. Was nun näher die Analyse der Werthsubstanz und der Werthgrösse betrifft, so habe ich sie möglichst popularisirt. Anders mit der Analyse der Werthform. Sie ist schwerverständlich, weil die Dialektik viel schärfer ist als in der ersten Darstellung. Ich rathe daher dem nicht durchaus in dialektisches Denken eingewohnten Leser, den Abschnitt von p. 15 (Zeile 19 von oben) bis Ende p. 34 ganz überschlagen, und statt dessen den dem Buch zugefügten Anhang: "Die Werthform" zu lesen. Dort wird versucht, die Sache so einfach und selbst so schulmeisterlich darzustellen, als ihre wissenschaftliche Fassung erlaubt. Nach Beendigung des Anhangs kann der Leser dann im Text wieder fortfahren mit p. 35.

『すべての始めは困難であるとの諺は、何れの科學に於いても適用する。從つて、(本書)第一章――殊に、商品の解剖を論ぜる節――の諒解は、最も多くの困難を與ふるであらう。其の中について、價値の實體及び價値の大いさの解剖については、私は、これを出來る丈け通俗化した。ところが、價値形態の解剖については、左樣でない。これは難解である。何となれば、(此部分に於ける) ヂアレクチック

は前者に於けるよりも、遙により鋭いから。されば、私は、ヂアレクチック的思惟に十分慣れざる讀者に忠告する。第十五頁（上から第十九行）から第三十四頁の終までを、全く飛ばして、而して、其の代りに、此書に附載した附錄『價値形態』の節）を讀まんことを。此附錄に於いては、其の科學的表現が許す限り、事柄を簡單に而して學校教員的にさへ、說明すべく努めてある。此附錄を讀了して後、讀者は、再び本文に戻り第三十五頁から讀みつゞけてよろしい。』其の附錄の『價値形態』論は、右第一版本の第七六四頁から第七八四頁に渉つて、細字でのせてある。

玆にマルクスが問題としてゐる『價値形態』論は、第一版刊行のときに於いて、マルクス自ら其の甚だ難解のものであることを認め、特に、讀者に右の如く、親切に注意を促がしてゐるのであつて、而して、其れは、一八七二年刊の第二版が、右の第一版に比して、最も著しく面目を異にする部分に屬するのである。

今私は、文獻史的に、『資本論』第一、第二兩版の比較考究を企てんとするものでないから、詳しいことを述べるのは略して、唯だ其の大要をあげて見れば、第二版に於いては、其の第二十一頁の第三項までは、大體に於いて、第一版を追從し、唯ところ〲項を置き換へた斗りであるが、其れより以下は、第二版は第一版の當該部分を全く削除してあるのである。マルクスは、右の序言に於いて、第一版第十五頁の上から十九行目から飛ばせと注意してあるのであるが、第二版に至つては、其加除は、モット溯つてゐる。卽ち第一版の第十二頁の第三項までで止めて、以下は、改めてゐる。しかし、其差し換へに入れた部分には、第一版から若干項を取り入れてゐる。一二の例をあげれば、第二版二五頁の脚註は、第一版一六頁の脚註を取り、第二版二九頁の第二項は、第一版一四頁の第二項を、同第三項は、第一版一四頁の第四項を、同第四項は第一版二五頁の第二項を、第二版三〇頁の第二項は、第一版一五頁の第三項を、第二版三三頁の脚註は、第一版二三頁の脚註を取り入れたるが如きこれである。

而して、右等の場合を除く外は、第二版の『價値形態又は交換價値』中第二二頁の初から第四七頁第四項迄——高畠氏改譯（改造社本）一七頁終から第二行から四一頁第十四行まで、河上氏等譯本六〇頁から一〇四頁第二行までが、此部分に該當する。——は處々修正を加へつゝ大體に於ては、第一版の附錄文を其まゝ取り入れてある。而して第二版四七頁の最終項『四、商品の魔術性と其の秘密』以下は第一版第三五頁の第一項に該當してゐるのである。

私が、今、此さゝやかな論文に於いて問題とせんとするところは、此の最難解の『價値形態』論に關するものであつて、其れは斯く、第一版に於いては本文中に見出されず、附錄に收載せられて居り、第二版に至つて、若干の修正の下に、本文中に榮位を與へられた其部分中に存してゐるのである。其れは、獨逸版資本論で云へば、一八九〇年の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第四版一四頁の初から三七頁第三項の終まで、一九一四年の第七版同上、カウツキー編の民衆版（第三版一九二〇年）で云へば、一四頁の初から三五頁第一項終迄に當つてゐるのである。

こゝに問題たる第二版に於ける修正については、我々は、マルクス自らが、第二版の跋文中に、次の如く云つてゐることを見出す。

『第一版の讀者に對して、私は先づ、第二版においてなされた變更について報告しなければならぬ。（中略）本文そのものに關する最も重要な變更は次の諸點である。

（略）第一章の三、價値形態）は全部書き變へた、これは第一版に於ける二重の叙述［第一版には『價値形態』と題する附錄がついてゐた。二重叙述とは、本文と附錄とのそれを指す――譯者］が既にこれを必要ならしめてゐたのである。――序に云つておくが、この二重の叙述はハノーヴアーに於ける私の友人クーゲルマン博士の勸めによつて、書いたものである。一八六七年の春、私が彼れを訪問して彼れの客となつてゐたとき、最初の校正がハンブルグから屆いた。そして彼れは、多くの讀者のために補遺としてもつと講義的な價値形態の説明を加へることが必要であると云つて、私を説服したのである』（河上博士等譯本一七頁）

こゝに、河上博士等が『全部書き變へた』と邦譯せられたのは、事實相違であることは、私の以上の記述で明であらう。而して、右一句の其邦譯は、マルクス文の邦譯としては、正確、親切、若くは、詮索を缺くものではあるまいかと思ふ。マルクスは、第一版の其部分を全部削り去つて、而して第一版附錄文に多少の修正を加へて、此れと差し換へたのである。其附錄文は、決して、全部書き變へられなどはして居らぬ。否、大體に於いては、全く第一版其儘なのである。マルクスの原文は gänzlich umgearbeitet とある。此語は場合によつては、『書き變へた』としても强ち差支ないのであるけれども、マルクスの用ゐた此場合には、其れでは、不正確であり不詮索であり、又は不親切ではあるまいか。原意を正確に言ひ表はすには、『全部入れ換へた』『全部差し換へた』とすべきであらう。河上博士等は、第一版に、附錄文のあることは、明かに、わざ〳〵［譯者註］を入れて、其の詮索の細密さを示めしてゐるから、其附錄が、書き變へられなとしてゐないことも、また、知つて居られるべき筈である。しかるに『書き變へた』と譯出するは、少くとも、不正確、不親切、若くは、不丁寧の評を免れまい。若しまた知らなかつたと云はれるなら、其れは、少くとも不詮索の難を免れないように思ふ。

多分第一版を見る便宜を有つてゐなかつたらうと想像せらるゝ人々が、其れを『書き變へられた』としたものとするならば、殆んと、問題とするに足らぬ一些事たるべきであらう。――例へば、高畠氏邦譯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

資本論の底本は流俗版第六版で、其れには、右の跋文は、序文と改題し、初めの部分を省いてのせてある。此「書き變へた」云々の見出される部分は、其省かれたものに屬する。從つて此一句は、右の譯本には存しない――第一版は、今では、希覯本となつて仕舞つてゐるから、多くの人は、其れを見る便宜を有たぬのである。見得ざるものについては、如何とも爲し難い。然るに、河上博士は、第一版を見たことを、右註記以外にも、而して、餘程久しい以前から、時々公言して居られるし、たしか、第一版の或部分を、何かの雜誌に譯出して居られたようにも覺へてゐる。而して、右譯本の序言には『讀めば讀むほど底の知れぬ著作といへば、經濟學の領域では、この「資本論」を措いて外にない』と公言して、底の知れぬほど讀んで讀んで讀みこなされたことを示し、また『原著者の遺志を最高度に尊重せんことを期する譯者たち』と自稱して居られる。此譯者たちが、『書き變へた』と、事實相違のことを平然と記してゐるのは、『マルクスが文字についてもつてゐた關心は、決して考證學的のものではなかつた。彼れの著作の譯出につき、吾々もまた彼れに倣ひ、つとめて文字の末に拘泥すると同時にまたこれに拘泥せざるの態度をとつた』云々とある、其の拘泥せざる一例に屬するかも知れないが、私は之れに與し得ないものである。但し、此類の不詮索や不正確は、今、私の問題とするところではない。

（二）

閑話休題。マルクスは、更らに、第二版の跋文中にいふ。

『私は、今や、パリで公けにせられつゝあるフランス譯（それは一八七二年の春から一八七五年の春にかけ、順次パンフレットとして刊行された――譯者）を校閲するに當つて、ドイツの原本の多くの部分が、或る場所ではより徹底的な改作を、或る場所ではより大なる文體上の訂正を、或はまた所々に散在してゐる間違のより綿密なる除去を、必要としたことを見出した。だがそのための時間がなかつた、といふのは、私は一八七一年の秋、他の緊急な仕事の眞最中に、はじめて、この書が賣り切れとなつたこと、それから第二版の印刷は一八七二年の一月に早くも始めねばならないこと、の報知を受けとつたからである』　河上博士等譯本一八頁

今茲に私が問題とする價値形態の部分については、右マルクスの辭は當つて居ないといへよう。但し、マルクスの意は第一版の附錄を單に若干の修正を加へたのみで、大體は、第一版の儘を、唯だ、附錄から本文へ轉置したに止ることをも、含んでゐるのかも知れない。用意周到な而して本當の意味に於いての正確忠實を生命としたマルクスとしては、多分左樣であつたらうと思はれるのである。

ところが、此の用意周到なマルクス自ら一々綿密に校閲して出版したフランス譯の『資本論』の右問題の個所に關する修正については、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

竝に、少し解に落ち兼ぬることがある。否、フランス譯本の全體について、些か要領を得難いことが見出されるのである。

資本論第二版は、一八七二年——ウンターマンの英譯米國版第一版の序九頁には、一八七三年に刊行としてある——に刊行されてゐる。而して右に引いた其跋文は、一八七三年一月二十四日の日付をのせてゐる。フランス譯文は、河上博士等の註記によれば、一八七二年の春から、一八七五年の春にかけて、順次パンフレットとして刊行されたものである。不幸にして、私は、其のパンフレット本を見たことがない。私の架上にある本は、出版者はラシアトルとせず、Librairie du Progrès. Paris. 11, rue Bertin-Poirée. 巴里、ベルタン・ボアレー町十一番地『進歩書院發行』出版年記載なき三百五十一頁の本である。其書題は Le Capital par Karl Marx. Traduction de M. J. Roy, entièrement revisée par l'auteur. 『カール、マルクス著資本論、ジエー・ロア譯、全部原著者校閲』とある。此書の卷頭には、マルクスの肖像、出版者ラシアトル氏宛倫敦一八七二年三月十八日付のマルクス書翰の二つが、寫眞版として載せてある。河上博士等の譯本には、此の書翰を『フランス譯への序文』として其の三三頁に譯出してある。河上博士の見られた其のパンフレット本には、此書翰のことを序文 Préface としてあるか否か、其本を見る能はざる私の知らざるところであるが、一冊の定本として刊行された此書には、其れは、明かに序文ではない。原著者が出版者ラシアトル氏へ宛てた私信として、マルクス自筆の書翰を、寫眞版で複製して掲ぐるに止めてある。而して、別に、第一版序文 préface de la première édition なるものが、マルクスの署名、倫敦一八七五年七月二十五日の日付を以つて、四頁に渉つてのせてあるのである。——カウツキーは、此序文のことを、其民衆版序中に言つて居らぬ。而して、彼は右の私信と、後にあぐる『讀者に告ぐ』とは、ドイツ文序文と並んで、資本論の向後の版に掲げる價ありとは云つてゐるが、其れよりも、遙かに重要な此の本當の序文を重刷する必要のあることについては、一言もしてゐない。而して、河上博士等も、全く同樣である——『フランス譯への序文』とあれば、マルクスの意では、無論此文のことを指さればならぬものである。出版店主人宛の私信を、マルクスの『フランス譯への序文』とするは、誤であらう。——カウツキーも、其民衆版序文一六頁に、此文のことを Vorwort と記してゐる。更らにまた、後に云ふところの『讀者に告ぐ』の日付一八七五年四月二十八日を同二十五日と誤記してある。河上博士等は、或はカウツキー丈けを見て、實物を見ぬ爲めに、彼の誤を其儘受つがれたのでもあらうか。——これは、不正確、若くは不詮索の他の一例ではあるまいか。何となれば、パンフレット本には、如何樣にあらうとも、私が、今見つゝある本こそマルクスの公にした定本としてのフランス譯書であらうと思ふから。カウツキーは、其の民衆版に於いて、エンゲルスが、フランス譯の刊年を、一八七三年とするは誤謬若くは誤植であると明言してゐる。但しエンゲルスの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

誤を指摘した彼は、其日付を誤記してゐる。

ところが、マルクス其人にも、少し暗に落ち兼ぬることが見出される。河上博士等は、此の暗に落ち兼ぬるマルクスの僞瞞を、最高度まで飾正せんことを期する爲め、私信を序文に昇格することを試みられたのか、或はまた、其れほどの深い意味はなく、實物を見ず、單にカウツキーの不精密な叙述を、其儘受け入れられたのか。

其の暗に落ち兼ぬることといふは、次の如くである。

單に『第一版序文』とあるから、ドイツ原本の第一版を見ぬ人は、其れを、其のドイツ文序文のフランス譯と連關するかも知れない。乍去其れは、明かに連斷である。ドイツ文第一版の序文は、一八六七年七月二十五日附のものであり、此フランス譯定本の其れは、右云ふ如く、一八七五年七月二十五日附――『讀者に告ぐ』の日付は、同年四月二十八日である――のものである。而して、兩序文を一見すれば、兩者は、決して、同一文でないことは、直ぐ知り得られるのである。

然るに、マルクスは此のフランス譯本がドイツ原本第一版と、如何なる點に於いて異るかを、右序文中に於いては、説明してゐないのである。從つて、此序文を讀むに止つて、兩者を比較する便宜を有たない讀者は、フランス譯本は、ドイツ原本（第一版）其儘の譯本であると考へんかも知れないのである。ところが、事實は左樣でないのである。

マルクスが、此フランス譯文の序文を起草したときには、ドイツ原本の第二版は、疾くに刊行されてゐたのである。前者は一八七五年七月の起草にかゝり、後者は、一八七二年（月は明記なしウンターマンによれば、一八七三年）に刊行されてゐたのである。――但し、玆に、更に不可解なことは、刊年は一八七二年となつてゐ乍ら其、第二版の卷尾にのせた跋文の日付は、前記の如く、一八七三年一月二十四日となつてゐること、これである其は或は分冊刊行の爲めかも知れない。從つて、忠實、正確の上からも、否、『資本論』其もの〻使命の上から云つても、フランス譯本は、ドイツ原本の第二版其ものを底本とすべき筈であるは、言ふまでもないところであらう。

然るに、フランス譯は、第一版を底本としたか、第二版を底本としたかを判然と示めしてないのである。殊にマルクスがドイツ原本の第二版跋文に於いては、『この書の篇別がより概觀し易くなつたことは、すぐ分かる』と云つてゐるが、フランス譯に於いては、目次は大體依然として、ドイツ原文第一版の『概觀し易くない』篇別其儘になつてゐて、唯た本文中に、細別が――其れは、第二版と必ずしも同じでない――してあるのみと、最後の部分とが、修正されてゐるに止るのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私が、腑に落ち兼ねると云ふのは、此事である。

わざ〳〵序文まで起草して定本とし刊行するフランス譯が、三年も前に刊行されてゐる第二版との關係が、前後區々であり、また、決して明瞭に現はされてゐないといふことは、河上博士等の所謂『文字の末梢にまで神經の敏感性を有し』たマルクスの著述としては、私には、聊か腑に落ち兼ねるものである。

但し事實は恐らく次の如くであつたらうと思はれる。パンフレットとして、一八七二年春から一八七五年春までに刊行したフランス譯本は別に改修せられることなく、其儘合册せられて、一の定本として、一八七五年かまたは其以後――刊行の記載なき故、其れが何年の事であるかは、此講丈けについては、分からない。ウンターマンは、其の米國版英譯資本論の序第九頁に、ドイツ版第二版同樣、一八七三年に刊行されたと、明記してゐる。これはエンゲルスの記事同樣、明かに誤謬である――に於いて、刊行せられ、唯マルクスの序文が一八七五年七月の日付を以つて、卷頭寫眞版二葉の後へ加へられるに止まつたのではあるまいか。パンフレット本を見る稀有の幸福を有せらるゝ如く見ゆる河上博士等こそ、此の疑問を釋くべき人々である。其便を有せぬ憐れなる私共には、其れは不可能なことである。

（三）

私が、以上の如く推測するのは、必ずしも全く據り所がないわけではない。其れは、右フランス譯定本の卷尾に、『讀者に告ぐ』Avis au lecteur と云ふ倫敦一八七五年四月二十八日付のマルクス署名の一短文――カウツキー序文十六頁に所謂跋文 Nachwort なるもの――と、ドイツ原文第二版跋文拔萃 Extraits de la postface de la seconde édition allemande なるものが、誤植訂正表と共に揭げてあるからである。

其の『讀者に告ぐ』中の諸項を、順次に左にあげて見る。――カウツキー民衆版一七――一八頁に其ドイツ譯がのせてある――

M. J. Roy s'était engagé à donner une traduction aussi exacte et même littérale que possible ; il a scrupuleusement rempli sa tâche. Mais ses scrupules mêmes m'ont obligé à modifier la rédaction, dans le but de la rendre plus accessible au lecteur. Ces remaniements faits au jour le jour, puisque le livre se publiait par livraisons, ont été exécutés avec une attention inégale et ont dû produire des discordances de style.

『ジェー・ロア君は、出來る丈け正確な而して、逐字的にさへした翻譯を與ふべく努力された。君は、愼重――カウツキー譯、良心的に――其の任を果された。しかし乍ら、君の愼重――カウツキーは、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

良心性及び忠實と譯してゐる——其のものは、讀者により受入れ易いものとせん目的の爲めに、私をして、君の譯文を變更すべく餘儀なくした。此の改修は、此譯書が、定期分冊で刊行されたが爲めに、決れ〲時を異にして爲されし——カウツキーは、急いで爲されたと譯す。原文とは意が違ふ——從つて、不均整なる注意を以つて遂行せられた。而して、文體の諸々の不調和を生ずることを免れ得なかつた。』

此項は、主として、ロア氏の譯文をマルクス自らが修正したことに關するのであつて、其中、定期分冊による刊行の爲めに被つた缺點に關するマルクスの告白は、注意に値すると思ふ。何となれば一八七二年のマルクスの私信、即ち河上博士等の所謂『フランス譯への序文』では、マルクスは『資本論の飜譯を定期分冊で出版するといふ貴方（ラシアトル）の考へを、私は喜ぶ。かゝる形式においてこの著作は勞働階級に一層近づき易きものとなるであらう、そして私にとつてはこの考慮が凡ての他のものに勝つて大切なのである』（河上博士等譯本三三頁）と云つてゐる。河上博士等は、更らに、其れに裏打をして、『原著者はこの書のフランス譯——福田註、原本第二版も、カウツキーによれば（民衆版序の一六頁）分冊で顯はれたとある——が、この日本譯と同じやうに分冊で發行された折、それに序して（前出）と言つてゐる。この譯書が今の日本において實現されうる最廉の價格で發行せらるゝことは、原著者の遺志を最高度に尊重せんことを期する譯者たちにとつて、また一つの喜びである』（右譯本三、四頁）と云つて居られる。今の日本において實現されうる最廉の價格で發行せらるゝことが、マルクスの遺志を最高度に尊重することでありとするならば——マルクスは、其の私信に於いては、定期分冊と云ふ形式のことを言つて居るので、實現されうる最廉價云々のことは、何とも言つてはゐないのである——其れは、事實として、『この日本譯』たる河上博士等の資本論によつては必ずしも、實現されたとは、斷言出來まい。從つて、マルクスの遺志なるものが、實現し得られる限り最廉價云々と云ふことにあつたとするならば——其は、マルクスの右言中には見出されない、マルクスが、此譯者たちの夢枕に立つて告げたのでもあらうか——其意志の最高度までの尊重云々は些の意味を持たぬと云ふ可きであらう。

マルクスの遺志が、左樣であつたか否かを知らぬ私共に取つては、右一事は、何等の問題とならない。之れに反し、明かに、マルクスの意を知ることの出來る他の點について、私は、其れが必ずしも河上博士等によつて、最高度にまで尊重せられてゐないことを認めざるを得ないのである。其は別事でもない。定期分冊刊行の初め——であらう、私はよく知らない——一八七二年三月十八日には、定期分冊刊行のことを頗く喜んだ發言を爲したマルクスは、定期分冊刊行の終——であらう。私は、よくは知らない——たる一八七五年四月には、右の如く、定期分冊刊行に伴ふ不均整、其れから生じた諸々の不調和を公認して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐるのである。河上博士等が、自己の譯書の分册刊行を喜ぶが爲めに、カウツキーの誤訳を利用して——と考へられる——特にマルクスの私信を序文に昇格して、其譯書に譯出されたは、用意誠に周到なものであつた。しかるに、其れと共に、分册刊行の缺點を公認してゐるマルクスの右『讀者に告ぐ』をも、はたまた、彼れの公認した本當の序文をも譯出してないことは、何の理由に基くものであらうか。只管に、最廉價云々をマルクスの遺志と忖度し、其一事を高唱せん爲めに、分册刊行の他の方面卽ち其缺點に關するマルクスの公言を、殊更に削り取つた一種の周到なる用意の爲めであらうか。兎にも角にも初めに分册刊行を喜んだマルクスは、終りには、其れより生じた他の缺點を公認してゐることは、河上博士等によつて省略に附されて居るに拘らず、明白なる事實であるのである。若しも、マルクスの意を、最高度まで尊重せんと期したといふことが事實であるならば、其の公認を省略に附することは他の點からは、如何に用意の周到を見るべしとするも、正確、親切、丁寧と云ふ點から見ては、爾かく公言する此譯者たちの措置としては、決して、當を得たこととは考へ得られぬ。

次に『讀者に告ぐ』の第二項に移る。其前半は左の如くである。

Ayant une fois entrepris ce travail de révision, j'ai été conduit à l'appliquer aussi au fond du texte original (la seconde édition allemande), à simplifier quelques développements, à en compléter d'autres, à donner des matériaux historiques ou statistiques additionnels, à ajouter des aperçus critiques, etc.

『かく一度、修正の業を企てた以上、私は、同時に、若干の開展(敍述)を單純化し、他の其れらを完成し、追加的の史的又は統計的資料を與へ、批評的摘要を加ふる等の爲めに、其の修正の業を、(同時に)また、原本文(ドイツ語第二版)の根柢へも加ふ可く——カウツキー譯。擴張すべく——導かれた。』

此一項は、ドイツ原本と、此フランス譯書との關係についての、マルクスの唯一の發言として、注意に値するものである。何となれば、其れは、間接に、私が前に述べた推測を裏書するものと認め得られるかと思ふから。卽ち、フランス譯には、マルクス自らロアの譯文に朱を加ふると共に、其の斧鉞の仕事は、更らに、これを擴張して、ドイツ原本第二版の草稿にもこれを加へたものであることを述べてゐるのである。

此く解釋して見ると、玆に起る疑問は、然らば、其のドイツ原文第二版の草稿なるものは如何なるものであつたらうか、これである。其れは、第一版其ものを指すのではないことは、疑を容れない。而して、其れは、最も晩くとも、一八七二年の何月かには、既に存してゐたもの、否、右云ふ改修の業を加へられ終つて存してゐたものなるべき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は明白である。何となれば、一八七二年の日付を以て公刊されてゐるから。——但し跋文が一八七三年付なるを以て見ると、公刊は一八七二年でなく、一八七三年に入つてのことであつたかも知れぬ。ウンターマンは左様に斷言してゐる——しからば、何故に、マルクスは、フランス譯の一八七二年の何月からかの後の定期分冊のフランス譯に、其れを確定的に底本として採らなかつたかが、稍重要な疑問として殘る。フランス譯の分冊發行の初めに當つては、右云ふドイツ原本の第二版は未だ完成して居なかつたから、これを確定的底本としなかつたといふ説明は爲し得るであらうが、其れが出來上つた一八七二年の何月かの後に刊行されたフランス譯分册が、依然として、第二版とは正確に、同じものでないといふことは、私には、聊か腑に落ち兼ねる事である。

（四）

想像を旋らして見れば、次のようにも考へられ得る。成程フランス譯本の分册刊行は、一八七二年春から一八七五年の春まで三ケ年を閲しては居るが、ロアが該譯の業に從事し、またマルクスが校閲訂正のことを企てたのは、最終の部分、殊に、第六篇資本の蓄積行程を除ては一八七二年春よりも、長くか短くか前のことに屬してゐた、從つて、其底本としては、正確に、第二版のドイツ原文を採ることが出來なかつたと云ふこれである。此の想像にして當れりとすれば、然らば、何故に、マルクスは、其事を、此の『讀者に告ぐ』中に、一言を以つて斷つて置かなかつたか、これまた聊か腑に落ち兼ねることである。

更らに、腑に落ち兼ねることは、右に私が譯出した節に於ける『原本文（ドイツ語第二版）の根柢』fond du texte original—カウツキーの獨譯 Grundlagen des Textes は original を脱す—なるものが、果して如何なるものであるかゞ、少しも示されてないことこれである。殊に其の『根柢』（草稿の意ならん）なるものとドイツ原本第一版との關係、並びにそれとフランス譯本との關係が、示されてないことは不可解である。

私は右の一句を一讀したとき、殆んど、其意を捕捉することが出來なかつた。普通の讀み方を以てすれば、右の一句は次ぎの如くに解せらるべきと思ふ。『此のフランス譯の底本は、ドイツ語第二版の草稿これである。ロア氏は其を忠實、愼重に譯出した。しかし、氏が餘りに忠實愼重であつた爲め、讀者に分り惜いところが彼是あつた。よつて、私はロア氏の譯本に朱を加へた。此訂正の業は定期分册として刊行した爲め、一擧にこれを爲さず分册刊行毎に、其分丈け之を爲した。其の爲め時を隔てゝの加筆の結果として、私の注意が不均整たるを免れず、而して、文體の上にも、色々不調和が生じた。さて、一度此く

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

フランス譯について、修正の筆を始めた私は、更らに其飜譯の底本たるドイツ語第二版本の草稿にも、同樣に修正を加ふ可く導かれた』これが、誰人も認める解釋ではあるまいかと思つた。しかし、其れでは、實際の事實とは、正確には合しないこと、前申す通りである。

ソコデ、此の『原本文（ドイツ語第二版）の根柢』てふ一句が、甚だ難解のものとなつた。私は試みに、わざ〱此の書を携へて、私の甚だ敬服する巴里大學出身文學士たる佛人P教授に、以上の事實を少しも語らず、唯此一句について其の判讀を求めた。P教授は、丁寧に『讀者に告ぐ』の全文を一讀過して答へられるよう。此句は、別に難解ではない。其れは『修正の業をフランス譯文に加へると同時に、其の底本たる原本文即ちドイツ語第二版にも、其業を加へることになつた』との意である。如何なるフランス人が讀んでも、必ず左樣解釋するであらうと。乃ち、私は、私の讀み方に間違のないことを確め得たのである。

かくて、文字上の疑は解けたが、其反對に事實上の難解が生ずる。而して、此の難解を含むところの此の『讀者に告ぐ』の一文が、河上博士等によつて、默殺又は省略に附せられたことが、前述以外更らに、稍々重要な意義を有つこととなる。

しかし、他面に於いては、フランス譯と原本第二版との關係は、右

の一句によつて、——其れは、無論、私がP教授の教示を得て、下した解釋を正しいものと前提として——極めて朧ろげではあり、また甚だ間接的ではあるが、マルクスによつて、說明せられてゐると考へ得ることになるのである。卽ち、フランス譯は、第一版其儘では、無論ない。また、同じく改修の對象とはなつたが、第二版とも同一のものでもない。兩者の中間に立つて、獨自の存在を有つものであると云ふことこれである。

此の推測は、私を以て見れば、右譯出の第二項前半につゞく、其の後半によつて確められるように考へられる。後半の文左の如し

Quelles que soient donc les imperfections littéraires de cette édition française, elle possède une valeur scientifique indépendante de l'original et doit être consultée même par les lecteurs familiers avec la langue allemande.

『此のフランス版の文章上の不完全——カウツキー譯。缺點——は如何樣ありとも、其れは、原本とは獨立的な——カウツキー譯。原本と相並んで、一の特殊的な——學術的價値を有つ。而してドイツ語に通ずる讀者といへども、またこれを參照せねばならぬものである。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

右の『原本とは獨立的』の原本とは、第一版の其れを指すか、第二版の其れを指すか明瞭でないが、兎に角フランス譯は、第一版とも第二版とも異るものであることは確である。其れが、第一、第二版以外に立つ獨立的な學術的價値を有つか、否かは一概に斷定は出來ないが、ドイツ語に通ずる讀者といへども參照すへきものであることは、疑ない。殊に、資本論を翻譯しようとする學者たちに於いて然ることは明白である。カウツキーは、此フランス譯か、より分り易いことを、其特點としてあげてゐる。私は、全く、其說に同ずる。恐らく、何語の譯本よりも此フランス譯は、より分り易くこなされてゐるものと云ふべきであらう。

學術的價値の上から云へば、第一版のみしか存せぬならば、此のフランス譯は、第一版原本とは獨立的な學術的價値を有つこと、勿論であると思ふ。左樣でなく、既に第二版原本が刊行せられて三年も經つに、わざ〳〵別に刊行を要するほどの獨立的學術的價値を、此フランス譯本が持つてゐるか否かは、私に於いては、判じ兼ぬることである。第一、第二兩版の原本と異なるものであるといふことと、其れらとは獨立的な學術的價値を有すると云ふこととは、元より同一事でないは、言ふまでもないことである。從つて、其れが、特に刊行を要する理由については、我々は著者マルクスから一應の說明を聞きたいと希ふものであるが、マルクスは一向其說明を與へず、また、其が第一版に對して如何なる點に修正を施つてゐるかを明示してゐないのである。此事、實に、私に於いて、腑に落ち兼ぬるのであつて、著者としてのマルクスの用意の十全を疑はざるを得ぬ次第である。

第一版其儘では無論なく、さりとて、第二版其儘でもないフランス譯を、『全部原著者校閱』と記したのみで、他に、何等の斷り書きを附せずして刊行するとは、抑もフランスの讀者に對して、忠實、親切なる態度と云へるであらうか否か。ドイツの讀者に對しては、第二版の跋文に於いて、『第一版の讀者に對して、私は、先つ、第二版においてなされた變更について報告しなければならぬ』とて、親切、丁寧に逐一報告したマルクス其人が、フランスの讀者に對する此態度は、親切、丁寧、正確、忠實などの上に於いて、殆んど同一人と思へぬほと、異なつたものであることは、これを否定するを得ざるところであらう。

其れは、此の『讀者に告ぐ』てふ一文につぐに、マルクスは、原本第二版跋文の拔萃を揭げて、ドイツに於ける經濟學の發達と、『資本論』中に用ゐた方法とを紹介する勞を執る爲めに二頁餘の紙幅を充てゝ居ることを考へ合せると、更らに、確められるように思はれる。

以上、何れも、私の此小論文に於いて、當面の問題とするところではないけれども、私の問題とするところを含む部分に、密接の關係を有する事柄であるから、私は、管々しくも、私の小やかなる疑を開陳して置く必要ありと考へたのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(五)

さて、私が當面の問題とすることに關しては、フランス譯本第一版序文——河上博士の所謂序でない本當の序文——は、此論文の最初に開題文として掲げた原本第一版の序文とは、著く異るものである。其文左の如し。——此文カウツキー民衆版にも、英譯本にも、河上博士等邦譯本にもなし——

Dans toutes les sciences le commencement est ardu. Le premier chapitre, principalement la partie qui contient l'*analyse de la marchandise*, sera donc d'une intelligence un peu difficile. Pour ce qui est l'analyse de la *substance de la valeur* et de sa *quantité*, je me suis efforcé d'en rendre l'exposé aussi clair que possible et accessible à tous les lecteurs.

La *forme de la valeur* realisée dans la *forme monnaie* est quelque chose de très simple. Cependant l'esprit humain a vainement cherché depuis plus de deux mille ans à en pénétrer le secret, tandis qu'il est parvenu à analyser, du moins approximativement, des formes bien plus complexes et cachant un sens plus profond. Pourquoi? Parce que le corps organisé est plus facile à étudier que la cellule qui en est l'élément. D'un autre côté, l'analyse des formes économiques ne peut s'aider du microscope ou des réactifs fournis par la chimie; l'abstraction est la seule force qui puisse lui servir d'instrument.

Or, pour la société bourgeoise actuelle, la *forme marchandise* du produit du travail, ou la *forme valeur* de la marchandise, est la *forme cellulaire économique*.

Pour l'homme peu cultivé l'analyse de cette forme parait se perdre dans des minuties, mais comme il s'en trouve dans l'anatomie micrologique.

A part ce qui regarde la *forme de la valeur*, la lecture de ce livre ne présentera pas de difficultés. Je suppose naturellement des lecteurs qui veulent apprendre quelque chose de neuf et par conséquent aussi penser par eux-mêmes.

......Préface de la première édition. pp. 9—10.

『すべての科學に於いて、始めは骨の折れるものである。(本書)第一章、主として、商品の解剖についての部分は、これを理解するに、少し困難であらう。(其中)價値の實體及び其の分量の解剖に於いては私は、其の說明を出來る丈け明晰に而してすべての讀者が受け入れ得るように、為すべく力を盡くした。

貨幣形態に於いて實現せられた價値の形態は、甚だ單純なものなのである。しかるに、人間の精神は、二千年餘り以來、——福田註。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

これは、アリストテレース以來と云ふ意であらう。從つて、此一條は、私の主題に、直ちに密接の關係を有つ。——徒勞をつくして、其の秘密中に探り入らんとつとめた。しかるに、其れは、兎ゝ角接近的に、遙かにより複雜な而してより深い意味を秘くしてゐるところの諸形態を解剖するところまで到達し得たに止まる。何故に？何となれば有機體中の要素たる細胞を研究するよりも、有機體其ものを研究する方が、より容易いから。他方に於いて、經濟上の諸形態の解剖は、顯微鏡や、化學が供する反應料の助けを藉ることが出來ない。抽象のみが、其補助具として役立ち得る唯一の力である。ところが、現實のブルヂオア社會に取つては、勞働の產物の商品形態、又は商品の價値形態は、經濟上の細胞形態である。修養少き人に取つては、此の形態を解剖することは、瑣細なことに巳れを忘るゝ底の（徒勞の）如くに見える。無論、其れは、事實に於いて、而して必然的に、瑣細である。乍去、其瑣細とは、微學的解剖に於いて見出さるゝ其れの如きの謂である。

價値の形態に關することを除いては、此書を讀む者は、何等の困難をも感じないであらう。元より、其讀者とは、何物か新しきものを學び、而して、從つて同時に、自分自ら思索せんと欲する讀者を指して云ふものなることは、勿論である。』

此の言は、原本第一版にも第二版序中にも見出されず、而して、

私が今問題とするところの價値形態、就中、等價形態に關するアリストテレースの『流通正義』論の一部分についての、マルクスの解釋に關して可なり關係の深い語言なのである。其はカウツキーが、資本論の新版に譯揭するに値すると云つて、自ら評言を下して其自序中にかゝげた二文よりも、更らに、譯揭に値するものと、私は信ずる。

ソコデ、フランス譯本中價値形態に關する部分が、第一版原本と如何に異つてゐるかを確むべく、其第一章の初めの部分から、兩本を彼是對照して見ると、大略左の如くになつてゐるのである。

フランス譯本 第一章（一）	底本（原本第一版）
一三頁 第一項	第一頁 第一項
〃 第二項	〃 第二項
〃 第三項	〃 第三項
〃 第四項	第二頁 第二項
一四頁 第二項	〃 第三項
〃 第三項	第三頁 第二項
〃 第四項	〃 第三項
〃 第五項	〃 第四項
〃 第六項	〃 第五項
〃 第七項	第四頁 第四項
一五頁 第八項	第六頁 第二項

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

〃　第九項	〃　第三項
第一章（二）	
一六頁　第二項	第七頁　第二項
〃　第三項	〃　第三項
〃　第四項	〃　第四項
〃　第五項	〃　第五項
〃　第六項	第八頁　第二項
〃　第七項	〃　第三項
〃　第八項	〃　第四項
〃　第九項	第九頁　第二項
〃　脚註	〃　脚註
一七頁　第二項	九頁　第三項
〃　第三項	〃　第四項
〃　第五項	十一頁　第二項
〃　第六項	〃　第三項
〃　第七項	十二頁　第二項
〃　第八項	〃　第三項
一八頁　第二項	十二頁　第四項
〃　第三項	〃　第二項
〃　脚註	缺之
〃　第四項	十三頁　第三項

以下第一章（三）價値形態

ドイツ文原本で云へば、第二版は、第一版の一三頁第一項の終りまでが、彼是相當り、其次に、第二版では、一項が置かれてあつて、扨て二二頁の初から、第一版の附錄文と差し換へてある。フランス譯は、右表の示す通り、一三頁の第三項までを取り入れてあり、以下（三）價値形態論となつてゐるのである。

其の（三）價値形態論は、ドイツ原本第二版に於けると同じ樣に、ドイツ原本第一版の附錄文に、若干修正が加へられたのみで、大體は、其まゝ差し換へられてゐるに止るのである。從つて、以下、私が論ぜんとするところについては、此のフランス譯本と原本第二版とは、殆ど、これを、同一に取扱ひ得るものである。

かくて、私が、以下に問題として、此小さき論文に於いて、取扱はんとするところは、ドイツ原本第一版の附錄文、フランス譯本の一八頁第五項以下、ドイツ原本第二版の二二頁以下につゞく若干頁中に、見出されるのであつて、而して、其中でも、等價形態の節中に見出されるのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さて、アリストテレース倫理學中、マルクスの其れについての解釋の正確さ、又は當否を、私が疑ふ部分は——而して、其れは、同時に、河上博士等の邦譯本中に於ける、或重要なる不正確又は誤謬を含む部分である——アリストテレース倫理學のE（普通これを第五篇と稱す）の前半にのせられてあるのである。此のEは、普通、これをニコマホース——ニコマコスではない——倫理學に屬するものとせられてゐる。しかし、之れには、異説がさまぐ＼あつて、現に英國學者の手に成るアリストテレース倫理學註釋の現存の權威者たるグラント氏の本には、ΗΘΙΚΩΝ（ΕΥΔΗ ΜΙΩΝ）Ε.『ユウデーモス倫理學第五篇』[1] としてあるのである。其中、グラント氏の章別によれば、第五章、ベッカーの其れによれば、第八章トイブナー古典文庫版（ズーセミール校第三版アペルト複校一九一二年刊本）によれば第五章、而して、何れも、ベッカー頁にては（アリストテレースの著書は、今日ではベッカー版頁によつて引くことが、一般に行はれてゐるから）一一三二頁b、第二十一行以下に、屬するのである。

1) The Ethics of Aristotle illustrated with essays and notes by Sir A. Grant. 4. ed. Vol. II. p. 98 et seq. London 1885.
2) Aristotelis Opera edidit Academia Regia Borussica. Vol. II. Berolini a. 1831.
3) Aristotelis Ethica Nicomachea recognovit Fr. Susemihl. editio tertia curavit O. Apelt Lipsiae. 1912.

私が、特に、此の小やかな論文に於いて問題とするところは、アリストテレースの其の倫理學第五篇に於いて取扱つてゐる正義論中、殊に『流通の正義』τὸ δίκαιον τὸ ἀντιπεπονθός (ἀλλῳ)(justitia commutativa, contractoria, catallactica) について論じてゐるところに關してゐるのである。

アリストテレース倫理學に關する文獻は、可なり豐富なものであつて、其重なるものは、トイプナー版右掲本に Notitia litteraria と題してのせてあるし、又た、アリストテレース文獻志の最高權威たるシュヴァブの書 Bibliographie d'Aristote par Schwab, Bibliothécaire à la Bibliothèque nationale Mémoire couronné par l'Institut de France. Paris 1896. ——此書は謄寫版にて刊行せる外、印刷本はなし——には其第三二五頁以下に、數十の書目がかゝげてある。また、右掲ぐるところの伯林學士院版アリストテレース全集の附卷として刊行せられてゐる古註釋集には、倫理學の希臘文註釋書丈けでも、四種收錄されてゐる。其目左の如し。

Commentaria in Aristotelem Graeca. Vol. XIX. Partes I II.

1) Aspasii In Ethica Nicomachea quae supersunt commentaria.

2) Heliodori In Ethica Nicomachea Paraphrasis.

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Ditto Vol. XX.

3) Eustratii et Michaelis et Anonyma In Ethica Nicomachea Commentaria.

Ditto XXII. Pars III.

4) Michaelis Ephesii In Librum quintum Ethicorum Nicomacheorum Commentaria.

右の中、最後のものは、特に、正義論をのせた第五篇のみの註釋にかゝるものである。しかし、私が今問題とするところのことは、其中に註釋されてなく、最初にかゝげたもの即ち第十九巻後半に收めたヘリオドロスのパラフラシス(解説)中に、甚だ綿密な解説がのせてあるのである。これはグスタフ・ハイルブット氏の編纂にかゝるもので、一八八九年刊のものである。私は續論第一に、此書に據つた。

近世の文献中では、左が重なものであらうと思ふ。

5) G. Hartenstein, Ueber den wissenschaftlichen Wert der aristotelischen Ethik. Leipzig 1859.

6) M. Heinze, Ethische Werte bei Aristoteles. 1909.

7) K. Hildenbrand, Geschichte und System der Rechts-und Staatsphilosophie. Leipzig 1860.

8) H. Richards, Aristotle's Justice in Exchange. Classical Review VII. 1894. pp. 11—14.

9) L. Spengel, Ueber die unter dem Namen des Aristoteles erhaltenen ethischen Schriften. Abhandlungen der bayerischen Akademie. III. München 1841. S. 439 et seq.

10) ———, Aristotelische Studien. I. Nikomachische Ethik. 2. Eudemische Ethik. Grosse Ethik. München 1863—65. (Zuerst in Abh. d. bay. Ak. X. S. 71 et seq.).

11) A. Trendelenburg, Ueber einige Stellen im 5. Buche der Nikomachischen Ethik. Monatsbericht der Akademie der Wissenschaften, Berlin. 1852.

12) F. Wagner, Die Verdienste des Aristotelischen Ethik um das Prinzip der Persönlichkeit. Jena 1895.

13) M. Wetzel, Die Lehre des Aristoteles von der distributiven Gerechtigkeit und die Scholastik. Warburg 1881.

14) Prantl, Aristoteles. in Bluntschli's Staatswörterbuch. Bd. 1. SS. 342 ff.

15) Fechner, Ueber den Gerechtigkeitsbegriff bei Aristoteles, 1855.

16) E. Zeller, Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwickelung dargestellt. II Teil, 2 Abteilung. Aristoteles unddie alten Peripatetiker.

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

4. Aufl. (Obraldruck) Leipzig 1921.

17) F. J. Neumann, Die Steuer nach der Steuerfähigkeit; ein Beitrag zur Kritik und Geschichte der Lehren von der Besteuerung. Conrad's Jahrbücher. 35 Bd. (Neue Folge Bd. I) Jena 1880. SS 511 ff. bes. S. 534 f.

18) J. Burnet, The Ethics of Aristotle. London 1900.

19) A. Grant, The Ethics of Aristotle with essays and notes. 2 vols. 4. ed. 1884-5.

20) G. Ramsauer, Aristoteles' Ethica Nicomacheum. Leipzig 1878.

21) J. Bywater, Aristotelis Ethica Noicomacheum, Recognovit. Oxonii 1894. 1901.

22) W. D. Ross, Aristotle. London 1923. p. 209 et seq.

23) The Works of Aristotle translated into English under the editorship of W. D. Ross. Vol. IX. Ethica Nicomacheatranslated by W. D. Ross. Oxford 1925. pp. II29a et seq.

右は、何れも、私が現に見るを得たものであり、中二三を除いては、今私の坐右に置かれてあるものである。其外私は一六〇五年刊の希拉對譯のアリストテレース全集[1]を始め、一五六四年刊の拉譯倫理學[2]、伯林學士院版全集（第二卷中の原文並に第三卷のラムビヌスの拉丁譯）牛津版ベッカー小大全集、巴里ヂドー版希拉對譯全集[3]、ドイツ本哲學文庫中のアリストテレース獨譯、ランゲンシアイト全集版獨譯、バルテレミー・サン・イレール佛譯全集、第二卷（巴里一八五六年刊）ガルヴェの獨譯倫理學（ブレスラウ一八〇一年刊）リークヘルのニコマホース倫理獨譯、チェーズの英譯同上、チリースの英譯同上、ブラウンの英譯同上などを左右に置いて、マルクスの讀み方と解釋し方、河上博士たちの譯し方等に關する私の疑惑について商量する資料に充てたのである。其他猶私の架上には、アリストテレース關係文献の册子（學士院報告、ギムナジウム年報、學位論文など）百五六十種があるが、今其等について、一々精査する暇を有ち得ぬことを遺憾とする。兎に角、以上にかゝげたものに據つて、僅か斗り考へ得たところを、開陳するにすぎない。從つて、其れは、他日、無論、著しく是正せられなければならぬ極めて暫行的の吟味たるにすぎない。唯だ、マルクスの解釋についての疑に關しては、私は、粗ぼ今日まで渉獵したところ以上には、さまで、資料が得られないし、また、其れ以上に、吟味の歩を進める必要は、さまで存しないかと思ひつゝあるものである。（以下嗣出）

1) Operum Aristotelis. Tomus II. Librorum Aristotelis qui non extant. Fragmenta quaedam &c. Petrus de la Roviere 1605. P. I et seq.

2) Aristotelis ad Nicomachea filium de Moribus, quae Ethica nominantur, Libri decem. Nicolao Gruchio interprete. Parisiis 1564.

3) Aristotelis Opera Omnia. Graece et Latine. Vol. II. Parisiis. 1921.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大衆講座

マルサスの人口論

高畠素之

1.『人口論』の由來及構造

人口論の元祖はマルサスで、マルサスが『人口法則』の著者であることを知らぬ人は少ないが、その人口論の內容は案外世間に知られてゐないらしい。新マルサス主義者と稱する連中は、産兒の制限といふことを唱導するから、マルサスの人口論も多分そんなことを主張するのだらうと考へてゐる人々もあるやうだ。これは甚だしい無知で、マルサスの人口論は決してそんなものではない。成るほど産兒制限といふ方策は、マルサス人口論から引き出せるけれども、それは澤山ある方策の中の一つに過ぎず、しかもマルサスの意向とは反對の方向にあるものである。その理由はあとで分るが、何にしろマルサス人口論の眞價は、かやうな方策の方面にあるのではなく、それらのものゝ依つて來る根本原理に存するのである。で、茲にその根本原理の大略を最も簡單明瞭に解說しようとするのだが、この仕事はマルクスの『資本論』を解說する場合のやうに困難ではない。といふのは、マルサスの人口原理そのものが、非常に單純明瞭だからである。

しかし、本題に入るに先だつて、マルサス『人口論』の生れた機因と、その論文の構造とを一寸述べて置かう。

マルサスは『人口論』初版の序文の中で、この論文はもとゴッドウヰン氏の論文の主題即ち氏が『研究錄』の中に述べてゐる貪慾と浪費とについて、私が一友と交換した會話に由來するものである、といつてゐる。その一友とは、彼の父ダニエル・マルサスのことである。この親父は金もあり、ハイカラな思想も持つてゐる申分のない紳士で、生前ルツソーと親交があり、フランス大革命の種を蒔いた改革思想の共鳴者であつた。ところが、息子のマルサスはフランス流の革命思想には大反對で、殊に一七九三年一月におけるフランス革命黨の國王死刑の暴擧及びその後に引續いた恐怖政治を見て、その反感を深めたのである。この父子の論爭を惹起したウヰリアム・ゴッドウヰンと

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いふ人は、英國における無政府主義の開祖とも見做される人物で、一七九三年に『政治的正義』を、一七九七年に『研究録』を著はし、當時の思想界に非常な反響を呼び起した。ゴッドウヰンはロックやヒュームやルッソーなどと同様に、人間の道念といふものは外部からの印象の産物に外ならないといふ前提に立つてゐた。人性は本來白紙の如きものであつて、境遇次第でどうにでも變るものである、だから、社會的環境と制度とを改良すれば、罪惡と不幸とは世界から跡を絶ち、人間は完全の域に達すると彼は考へたのである。マルサスの父はこのゴッドウヰンの思想を受け容れたが、マルサスは大いにこれに反對で、父との論爭から、彼れはその主張を文章に現はして世に問はんと思ひ立ち、遂に一七九八年に匿名を以つて『人口論』の第一版を公けにした。

　この人口論第一版は、その目的からして當然論爭的な調子が濃く、性急と偏頗とを免れなかつた。マルサス自身も後にこの缺點を認め、一八〇三年に出した第二版では、それを修正し、その上になほ新らしい内容も豐富に加へて、第一版とは全然面目を異にするに至つた。その後マルサスの生前に『人口論』は第六版まで出たが、いづれも第二版の内容と大差なく、各版毎に多少の增補修正を重ねただけであつた。そして現今世間に行はれてゐるのは、その第六版である。

　ところで『人口論』の構造だが、この書物は全四編より成り、第一編では人口の一般原理を述べて、過去現在の各種の社會の人口制限の觀察に及び、最低段階の人間社會から始つて、アメリカインディアン、南洋諸島土人、北歐古代の住民、近世の牧畜民、アフリカ諸地方、南北シベリア、トルコ諸領及びペルシア、インド及びチベット、支那及び日本、古代ギリシア、古代ローマ等の住民間における人口制限の實例を面白く述べてゐる。第二編では第一編を承けて近世ヨーロッパの諸國民の人口制限について觀察を下し、幾多の統計を利用してゐる。第三編ではゴッドウヰン及びコンドルセーの平等主義を反駁し、移民政策及び救貧法を論し、重農主義、重商主義、農商並行主義などを論じ、穀物法を論じ、社會の富の增加と貧民狀態との關係を論じてゐる。そして第四編では、道德的抑制の義務を力說し、貧民の狀態を改善せんとする各種の提案に批評を下し、自己の改善案を提出してゐる。

2. 罪惡と貧困の根本原因

　ゴッドウヰンやその他の理想主義的社會思想家は、社會に罪惡と貧困が存在するのは、社會に正しからぬ制度が行はれてゐるからだと認めたが、マルサスはこの說に反對して、罪惡と貧困の眞の大原因は他に存し、これに比べれば社會制度の如きは水に浮ぶ一枚の羽毛のやうなものだと言ふ。では、その眞の大原因とは何かといへば、人間は準備された食物以上に增加しようとする不斷の傾向を持つといふことである。マルサスは先づ二つの前提から出發する。

一、人間は食物がなくては生存し得ない。

二、男女間の情慾は古來變化がなかつたし、將來も亦變らないであらう。

　第一の命題は、勿論何人も異論がないであらう。しかし、第二の命題は、必ずしもさうでない。現に、人間の文化の程度が進むに隨ひ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

欲望の種類が多くなつて、性慾方面に支出されるエネルギーの量が減殺されるといふ説も相當に行はれてゐる。ゴッドウキンも性慾不變說には反對で、性慾は將來減退するだらうといひ、性慾をこき下ろすために、性慾から一切の附屬物を取り去れ、さうすればそれは輕蔑すべきものになるだらうといつた。マルサスはこれに對して、ゴッドウキンの言草は、樹木から一切の枝葉を取り去れ、さうすれば裸柱に何の美があるかといふに等しい。我々は單なる女といふものに惹きつけられるのではなく、優雅な擧措や、つゝましい心情や、美しい姿をもつた彼女に惹きつけられるのだといつて、一矢酬ゐてゐる。そして、人間は清い愛情に刺戟されてゐる時ほど、道德的になり、英雄的になる場合は滅多にないといひ、男女間の情慾の必要を主張してゐる。マルサスは罪惡と貧困との原因を人口の增加に求めるのだから、男女間の情慾を排斥するのだらうと推量されるかも知れないが、それは誤りである。

男女間の情慾が不變であるとすれば、結婚の形式は如何にあらうとも、當然子供が生れて來る。女が二十歲前後で結婚すれば、一生のうちに五六人位は子を產む。もつと早く結婚すればもつと多く產むし、晚く結婚すればそれだけ少なく產む勘定だ。が、兎に角、一組の夫婦は、自分達よりも數の多い人間をこの世に送り出すから、人間の頭數は次第に殖える一方である。ところで、この殖える人間を養ふべき食物の方は何うかといへば、食物も勿論增加して行くが、マルサスの主張によれば、人間ほど速かに增加する力は持たない。そこで、人間は生れて來た者に食物を宛がつてやることが出來ぬといふ、苦しい破目に陷らざるを得ない。

この惱みはひとり人類だけが持つものでなく、すべての生物に共通してゐる。マルサスの引用してゐるフランクリン博士は、動植物は群集して相互の生活資料を犯すため蕃殖を制限されるが、それ以外に彼等の蕃殖性を制限するものはない、といひ、また若し地球上に他の植物が存在しないと假定すれば、例へば茴香の如き一種類の植物が次第に蕃殖して遂には全土を覆ふに至るだらうし、また他の國民がゐないと假定すれば、ただ一つの國民、例へば英國民といつたやうなものが僅かの間に全地球を埋めてしまふだらうといつた。これは爭ふ餘地のない眞理であるが、すべての動植物はその生存上必要な場所と養分とを無限には持つものでない。それで、その無限の蕃殖力は、場所と養分の許す範圍内でしか發展することが出來ず、その範圍以上に出る部分は何かの形で抑壓を受けねばならない。

植物と人間以外の動物との場合には、問題は簡單である。彼等は全く盲目的に生殖本能を働らかせ、生れた者が場所と養分を得られるか何うかを顧慮しない。だから、ひまさへあれば蕃殖力が作用し、そしてその作用の結果多過ぎるものが生れて來れば、生れた後に場所と養分の缺乏のため死滅する。

しかし、人間の場合はさう簡單には行かない。人間には將來のことを慮る理性といふものがある。だから、人間も、動植物と同樣に強力な生殖本能を有するけれども、理性はこの本能の自由な活動を牽制し、子供が生れたとき自力で扶養し得るか否かを反省せしめるのである。そこで、結婚を見合はせたり、結婚後育兒を制限したりする方法

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がとられるが、それには屢々罪惡が伴ふ。しかし、斯ういふ豫防的の制限は、將來は兎も角、過去現在の社會では不充分にしか行はれないので、人間も動植物と同樣に生れた後に食物缺乏で制限されることになる。人口が食物の分量よりも多くなれば、社會のどこかの部分に食へない人が出來る。平等主義者の主張するやうに、食物をすべての人に平等に分配すれば、すべての人間が食物不足に苦しむことになる。しかし、財產私有の行はれる社會では、運の惡い連中が食物不足に苦しむことになる。

3、食物增加率と人口增加率

人間は食物がなければ生存し得ず、食物增加のない所には人口增加もあり得ない。ところで、人口の增加率が食物の增加率よりも速かなことは過去現在の各種の社會を觀察して見れば分る。しかし、さうしないでも、最も都合のよい條件の下で人間はどの位の速度で增加するか、といふことを考へ、また人間が最も都合のよい事情の下で働らくとして、土地の生產物はどの位な速度で增加するだらうかと考へて見れば、問題は明白に了解される。

マルサスは、人口增加が妨害されなかつた場合の增加率を推定する便宜として、アメリカ合衆國の實例を採用してゐる。アメリカの北部諸州に於いては、近世歐洲の諸國に比べて、生活資料はヨリ豐富であり、人民の風俗はヨリ純朴であり、隨つてヨリ容易に早婚が行はれたので、人口が二十五年毎に倍加した。しかも或る都會では死亡率が生產率に超過した場合もあつた位だから、平均の上で、この缺損を埋め合はせる所の田舍の出產率は、ヨリ高かつたと見ねばならぬ。實際、農業が唯一の仕事とし、惡習や不健全な職業のない奧地の方では、人口が十五年間に倍加した事實さへ知られてゐる。しかし、この異常な增加率でも、恐らく人口增加力の頂點を示すには足りない。アメリカ移住民たちは、處女地を開拓してその食物を增加したのであるが、處女地の開拓は非常に骨の折れる勞働だ。さういふ勞働は、一般に生命を縮める傾がある。そして彼等は、時々猛惡なインディアンの襲擊も受けたらうし、その結果、何程かの人命が奪はれ、或は兎に角、收穫を荒らされたに相違ないのである。

サー・ウヰリアム・ペテーは、人口は僅かに十年といふ短期間に倍加し得ると想像した。しかし、マルサスは、以上の實例に基づいて人口倍加の期間を二十五年としたら、最も內輪な安全な斷定であらうといつてゐる。

ところで、土地の生產物はどの位の率で增加するか。マルサスはこの問題の考察上、一の重大な經濟學說を認めた。それは即ち、收穫遞減の法則といふもので、彼れはこの法則を明確な形では言ひ現はさなかつたけれども、次のやうに述べてゐる。曰く、耕地が次第に擴張され遂にすべての肥沃な土地が占有されるに至れば、食物の年々の增加はどのみち既耕地の改良に俟つほかはないが、この資源は、すべての土壤の性質からして、遞增しないで遞減して行くと。

人間が殖えるに從ひ、從來顧みられなかつた荒蕪地でも耕作が行はれるやうになる。日本のやうな人口稠密な國では、山の上にまでソバ、粟などいふ粗末な食物を植ゑてゐる。しかし、斯ういふ荒地からは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

労働と資本とを多量に投じても、その割合に多くの食物がとれないことは分り切つてゐる。無暗に荒蕪地を開墾するよりも、その労働と資本とを肥えた既耕地に投じた方が割りに合ふことが認められてゐるが、さうすれば前述の『收穫遞減の法則』が働らき出す。つまり、既耕地の改良や施肥などのために、今年或る分量の資本と労働とを追加して五石の收穫増加を得たとしても、來年更らに同一量の資本と労働とを追加しても五石といふ收穫増加は得られず、その翌年の追加資本及び労働は更らに少量の收穫増加しか齎らさない。土地の生産物は斯ういふ性質を持つてゐるから、一定面積における土地生産物の増加率は、人口増加率のやうに斷定することは出來ない。しかし、マルサスは次のやうな説明を與へてゐる。

イギリスの農業は大變發達してゐるけれども、まだ〱進歩の餘地はある。そこで、假りに、最善の政策を採用して、大いに農業を奬勵することにより、この島國の平均産物が二十五年で二倍になると假定する。これは、合理的に考へ得る最大の増加だらう。その次の二十五年間に、生産物が四倍になると考へるのは、土地の性質に關する我々の知識に反する。そこで、今假りにこの島國の生産額は二十五年毎に、現在の生産額に等しい分量だけづゝ増加して行くものと假定する。如何に熱心な空想家でも、これ以上の増加を想像することは出來まい。ところで、この増加が行はれるとすれば、數百年のうちにこの島國は隅から隅まで花園のやうになつてしまふだらう。若しこの假定を全地球に適用し、地球の與へる人間の生活資料が現在の産額に等しい分量だけづゝ二十五年毎に増加して行くと認めるならば、それは人間の努力で作り得る可能な増加率よりも、遙かに大きな率であらう。それ故、地球の食物産出量は、人間が働らくに最も都合のよい事情の下にあつても、等差的に増加するに過ぎないと斷言してよい。

斯くして、人口は等比的に増加するのに、食物は等差的にしか増加しないといふことになる。即ち、人口は一、二、四、八、十六といふ風に乘算で増加するのに、食物は一、二、三、四、五といふ風に、一單位だけづゝしか殖えて行かないのである。

以上二個の増加率をつき合はせて見ると、大變な結果が現はれて來る。イギリスの人口を一千一百萬とし、現在の生産額はこの人數を容易に養ひ得ると假定しよう。最初の二十五年間に人口は二千二百萬となり、食物も亦倍加する。次の二十五年間には人口は四千四百萬となり、食物は唯だ三千三百萬の人口を支へるに足るだけとなる。その次の時代になると人口は八千八百萬となり、食物は丁度その半分の人口を支へるに足るだけになつてしまふ。そして百年後には、人口は一億七千六百萬となるのに、食物は僅かに五千五百萬の人口を支へるに足るだけとなり、一億二千一百萬の人口は全然食物を與へられないことになる。

イギリスといふ島國を離れて、全世界を眼中に置く段になると、移民による過剰人口の處分などは問題でなくなる。假りに、現在の世界人口が十億であると假定すれば、人類は一、二、四、八といふ率で増加し、食物は一、二、三、四といふ率で増加するのだから、二世紀の後には人口對食物の比が二五六に對する九となり、三世紀後には四〇九六に對する一三となり、二千年も後にはこの差は殆んど測定も出來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぬほど大きくなつてしまふ。

右の通り人口増加の勢は、食物増加の勢よりも優勢なのであるが、人間は食物なしには生活は出來ない。そこで、この優勢な人口増加力は、必ずや何等かの制限作用によつて、食物増加の速度と歩調を一致せしめられねばならない。

4. 人口に對する制限の種類

前述のやうに人口増加は、人口と食物の増加率に差異のあるため必然的に生ずる所の食物不足によつて制限される。しかし、この窮極的の制限は、飢饉といふ場合を除けば、直接的には現はれるものでない。人口はこの絶對的な制限を受ける以前に、種々の原因から直接的の制限を受ける。この直接的制限をなすものは、生活資料の不足から生ずると思はれる一切の習慣と疾病、それからこの不足とは關係がないけれども人體の衰弱と死亡を早める所の一切の道德的物質的原因である。

これらの人口制限は、强弱の差こそあれ、如何なる社會にも作用してゐて、人口を生活資料の水準に抑止するのであるが、大別して積極的制限と豫防的制限とに分けることが出來る。即ち、生れ來る人口を阻止する防禦的の制限と、既に生れてゐる人口を減らす積極的の制限に分類し得る。

積極的制限の中には極めて澤山の種類が含まれ　罪惡から起るものにしろ、貧困から起るものにしろ、兎に角、人間の自然的壽命を縮める一切の原因がこれに屬する。だから、この制限の中には、すべての不健康な職業、苛酷な勞働や寒暑の害、極端な貧乏、小兒の養育不良、大都會、凡ゆる種類の不節制、凡ゆる普通病及流行病、戰爭、傳染病、飢饉等を擧げることが出來る。

豫防的制限は、それが有意的である限りでは人間に特有のもので、將來を慮る人間の優れた理性に基づくものである。しかし、この制限は、人間の自然的欲望を抑制するのであるから、その抑制に罪惡が伴はぬと假定しても、人間にとつて一の害惡には相違ない。この抑制に罪惡が伴ふ段になると、そこから生ずる弊害には甚だ著しいものがある。性道德の頽廢が社會に瀰漫すると、その結果、必然に家庭の幸福が亂され、夫婦親子の情愛が弱められて、社會一般の幸福と道義とが大いに損はれる。殊に私通は、色々な他の罪惡を招く。

以上の積極的豫防的の人口制限は、これを別の見方で分類すると、道德的抑制、罪惡、貧困の三者に分れる。豫防的制限の方面では、變則的な性慾滿足を伴はずに行はれる結婚の抑制が、道德的抑制に屬する。亂婚、不自然な情慾滿足、夫婦の性冒瀆、私通の結果を隱蔽する不正手段等は、明らかに罪惡に屬する豫防的制限である。

積極的制限についていへば、自然の法則から必然的に來るやうに見えるものは、いづれも貧困に屬するといつてよい。そして戰爭、不節制の如く、明らかに人間自身が作り出すもの、その他、人力で避け得る多くのものは、混合的性質を持つてゐる。即ち、それらのものは、罪惡によつて齎らされ、その結果は貧困を生ずるのである。

5. 人口制限の作用方法

以上に擧げた積極的豫防的の諸制限に寄り集つて、人口に對する直

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

接的制限を形成する。人口の増加力が充分に現はれてゐない國、即ち二十五年以内に倍加するやうな増加速度を示してゐない國には、必らずこれらの諸制限中の何づれかゞ、何等かの程度で作用してゐる。しかし、この作用があるにも拘らず、人口が生活資料の範圍以上に増加する不斷の傾向を持たぬ國は殆んどない。この不斷の傾向が、絶えず下層社會を窮困に陷れ、彼等の境遇の目立つた永久的の改善を妨げてゐるのである。

現在の文明社會の狀態では、右の結果は次のやうな過程に隨つて生ずる。今、或る國の生活資料は丁度その人民を支持して行くに足るだけあるとする。人口増加の不斷の傾向は、この場合にも、生活資料の範圍を超えて人民の數を増加させる。そこで、以前に千五百萬の人口を支持した食物は、今や千六百萬の人口に分配されねばならぬことになる。隨つて貧乏人は益々貧乏となり、その多數は非常な困窮に苦しまねばならぬ。勞働者の數は市場に於ける所要勞働量に比し多過ぎることになつて、勞働賃銀は下り、一方では食料品の價格が騰貴する。隨つて、勞働者は前と同じだけ儲けるのに前よりに餘計に働かねばならぬことになる。かういふ困難の時期には結婚數は減少し、家族を扶養することは困難になるから、人口の増加は緩漫となる。その一方では勞働賃銀が安く、勞働者が餘る程あり、勞働者が一層情勤をはげむといふ事情が相俟して、やがて農業家をしてヨリ多くの勞働者を雇傭して新らしい土地を開墾せしめ、既耕地を改良せしめることになり、遂には人口と生活資料との割合が最初と同じ比例になる。さうなれば、勞働者の境遇は再びかなり良くなつて、人口に對する抑制は或る程度まで弛められる。かうして、人民の幸福に關する逆轉進轉の運動が繰り返されるのである。

以上の說明は大體に於いてマルサスの說明をその儘移したのであるが、この說明はかの獨逸の社會主義者ラッサレに依つて『賃銀鐵則』と名づけられた所の經濟學說の萌芽と見做し得る。この學說はマルサスと同時代の經濟學者、デヴヰッド・リカルドも說いた所であるが、マルクスは『資本論』の中、産業豫備軍を論じてゐる場所で、この說を論駁してゐる。

餘談はさて措き、再びマルサスへ歸らう。右に述べた進轉逆轉の運動は、あまり判然と人の目に映らない。それには色々な原因がある。在來の歷史が、單に上層階級の歷史に止つて、この進轉逆轉の運動が主として起る下層社會の歷史的事實につき、信賴するに足る說明材料を我々は殆んど持たない、といふことも、その原因の一つなのである。それから、變動の時期そのものが、色々な介在的原因によつて不規則にされるといふ事情もある。その介在的原因といふのは、例へば或る製造業の勃興又は衰退、農業上の企業的精神の盛衰、年の豐凶、戰爭、流行病、救貧施設、移民、その他類似の諸原因である。

殊に、この變動を曖昧ならしめる重大な原因は、勞働の名目上の賃銀と實質上の賃銀とに差異のあることである。勞働の名目上の賃銀が一般的に下落するといふことは、極めて稀れにしか起らない。しかし、食料品の名目上の價格が高くなつてゐるにも拘らず、勞働賃銀の方は何時までも同じでゐるといふ現象は屢々見る所だ。これは實質上からいへば勞働賃銀の下落であつて、かういふ狀勢が續く間は、下層社會の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

境遇は漸次に惡くなる。だが、資本家の富は、勞働の實質上の賃銀が低廉なために益々膨脹する。資本が膨脹すれば、益々多數の勞働者を雇ふことが出來る。しかし、人口の增加は、實質賃銀が安く家族扶養が困難なために妨害されるから、一定の期間を過ぎると勞働の需要は供給に超過し、需要供給の法則に隨つて勞働賃銀は騰貴することになる。この樣に、勞働賃銀は名目上少しも變動しないのに、實質賃銀が、隨つて下層社會の狀態が、進轉逆轉の運動を行ふといふことも有り得る。

賃銀勞働などゝいふもの丶存在しない野蠻社會にも、右と同じ性質の變動が行はれることは疑はれない。人口が殆んど食糧の極限まで增加すれば、あらゆる豫防的並びに積極的の制限が活動を開始して、性に關する惡風が流行し、捨兒や嬰兒殺しが增加し、戰爭と疫病の發生する機會が多くなり、またその慘害程度も甚だしくなる。そして、人口に對するこれらの制限作用は、人口が食物の水準下に減ずるまで繼續するが、そのために食物が幾らか豐かになると、再び人口の增加が始まる。そして、一定期間を過ぎると、再び前のやうな原因でその增加が阻止される。

以上の理論はどう考へても明白確實であつて、これを否定する理窟は思ひ當らない、とマルサスは主張する。そして、彼れは、その理論を次ぎの三つの命題に約した。

一、人口は必然的に生活資料によつて限定される。

二、人口は、非常に有力且つ明白な制限によつて阻止されない限り、生活資料の增加に伴つて必らず增加する。

三、これらの制限、及び優勢な人口增加力を抑壓してその結果を生活資料の水準に抑止するすべての制限は、道德的抑制、罪惡、貧困の何づれかに歸屬する。

マルサスは、この命題の第一は說明するまでもないことであり、第二と第三とは、過去現在の社會における直接的制限を觀察することによつて充分確證され得るとなし、最低段階の野蠻社會から始めて、順次に各種の社會の歷史的統計的研究に進んでゐる。

この歷史的統計的研究は非常に克明で、詳細を極めてゐるが、結局、次のやうな結論に達する。男女間の情慾といふものは、いつ如何なる社會でも、殆んど同じ強さのものであると思はれる。然るに、その結果たる人口增加に對しては、常に必らず色々な方法で制限が加へられて來たのである。野蠻人の社會に於いては、戰爭が最も有力な制限であつた。そして、野蠻の域を脫した、かなりに文明程度の進んだ社會でも戰爭は時々起り、そして下層民の間には絕えず周期的に流行病と飢饉が起つて、これらのものが最も有力な人口制限をなした。社會の進步につれて戰爭の機會は少なくなり、衞生施設は發達し、都市は改善され、更らにまた土地生產物の分配法も改善されたために、流行病、飢饉の慘害も大いに緩和されて昔ほどは頻發でなくなつた。そして、その代りに豫防的制限が盛んに行はれるやうになつた。

しかし、現在の狀態では、この豫防的制限には屢々罪惡を伴つてゐる。結婚延期の期間中道德を守るといふ道德的抑制の部類に入る豫防的制限は、現在では男子の間にはあまり行はれてゐないが、それも社會の進步とともに段々行はれるやうな傾向を示してゐる。女子につい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ていへば、近世の文明國では生涯のかなり長い期間を道德的抑制を守りつゝ送る者の割合が、昔に比べて、或は文明の遲れた國々に比べて、遙かに多くなつてゐることは確かである。兎に角、結婚の結果を考慮して、結婚を延期するといふ一般的意味における豫防的制限は、文明になればなるほど有力に作用し、積極的制限は漸次に驅逐されるといつて差支ない。これは喜ぶべき傾向で、家族扶養の見込が充分に立つまで結婚を見合はせ、而もその間、嚴格に道德的行狀を守るのは、神と社會とに對する人間の義務である。

6. マルクスのマルサス說批評

最後に、マルクスのマルサス說批評をつけ加へて、この稿を畢ることにしよう。マルクスは『資本論』の中で、かなり激越な口調を用ゐてマルサスを罵倒してゐる。マルクスは動植物界における生存競爭は認めるが、人間界には、マルサスの主張する如き人口原理は適用しないといふ。各時代の生產事情はおの／＼特有の人口法則を持つもので、永久不變の抽象的な人口原理などといふものはない。現代における人口過剩の現象は、資本主義經濟の所產であるとマルクスは主張する。

マルクス說の立場からすれば、現代の過剩人口には二た通りの意義がある。第一は資本主義經濟そのものに直接相伴ふところの恒久的過剩人口、他は資本主義經濟に必然相伴ふ現實的投資の伸縮によつて增減せしめられる所の一時的過剩人口である。

資本主義の下における產業の發達は資本の蓄積と表裏してゐる。蓄積とは社會全體の資本がヨリ大となることである。生產力の發達はヨリ大きな資本の充用を意味し、ヨリ大きな資本の充用は生產力の發達をも意味する。ところで、資本が擴大されて生產力が增進するといふことは、資本中の生產機關（機械、建物、原料）に充用される部分（マルクスの謂はゆる不變資本）が增大して、勞働者雇傭に充用される部分（マルクスの謂はゆる可變資本）が相對的又は絕對的に減少することを意味する。即ち、資本の蓄積が進み、生產が發達するに從つて、勞働者の雇傭に投ぜられる資本部分はます／＼減少して來る。これがため、雇傭されない、職を得られない不斷の勞働者人口が造り出される。資本主義の發展とともに機械經營が發達して、熟練技術の必要を驅逐するといふ傾向も、この過剩勞働者群の擴張に貢獻する。なぜならば、この場合には、勞働が容易になつて、未熟の婦女、幼童も一人前の勞働をなし得るやうになり、勞働軍の範圍が擴大されるからである。斯くして、恒久的の過剩勞働者群が造り出される。この勞働者群は軍隊の豫備軍のやうなもので、資本家は必要に應じて自由にこの豫備軍の中から勞働者を召集し、不用になれば自由にこの豫備軍中に放り込む。けれども、この過剩人口は、マルサスの謂ふ如く人口が食物以上の急速力で增殖する結果ではなく、反對に物資の生產力が勞働者雇傭に充用すべき資本部分以上の急速力で增大する結果なのである。

第二種の過剩人口は、現實的投資の伸縮につれて增減する。現實の投資は、產業界の景氣の如何に應じて、絕えず伸張したり收縮したりしてゐる。それが伸張した場合には勞働需要も殖えるが、需要の殖える割には賃銀は昂騰しない。殖えた需要は先づ恒久的豫備軍を以つて充たし得るからである。この豫備軍の全部を以つてしても尚、ただし得

ないといふ程に勞働需要が殖えることは、戰時その他異常な場合を除いては滅多にない。投資が收縮して、勞働需要の減少した場合には、過剩となつた勞働者は無造作に豫備軍の中へ放り込まれる。要するに、現代の過剩人口といふものは、實際に生活資料が不足だから生ずるのではなく、資本主義經濟がこれを造り出してゐるのである。

このマルクスの人口論が、どの點まで眞實で、どこまで無理があるか、その判斷は讀者に任せるとして、茲にはただマルサス人口論紹介の尻尾を飾るために、マルクスの言ひ分をザッと掻い摘んで置くに止める。尚、マルクスの、人口論については、拙譯資本論（改造社版）第一卷六〇二頁以下を見られたい。

次號は　アダム・スミスの富國論　土方成美

白熱せる現下農村問題解決の鍵！

九州帝大農學部教授　澤村康著

小作法と自作農創定法

最近資本主義經濟の行詰りと共に農民の急激なる無產階級化は、平和なる農村に各種の悲劇を醸しつゝある。かくて放任せば農民は自滅を待つのみだ。然らば政府に於て立案された自作農創定法の如きが果して眞に農村を救濟し得るか。吾等は農村の實狀を究明すると共に法の實施との諧調を見出さねばならぬ。著者はこの點に就き獨創的見解を有する新進の學究、小作農自作農の今日に至る歷史的變遷を說き、英國伊太利米國等の進歩せる法律と對照し、我國の土地政策「自作農創定の諸問題」、「農林省の自作農創定維持補助規則に就て」「小作法案の要項批判」等の諸論文を收め、以つて物議紛々なる農村に關する各種法案の解決に學究的熱情を吐露す。現下必讀の要書として薦む。

改造社新刊（菊版布裝）　定價四圓八拾錢　送料書留廿七錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

經濟危機と財政危機

國家に有害なる田中內閣の財政策

堀江歸一

三土藏相の無力

政友會員中に財政家として、識見手腕の備はれる人があつて、今日の時局に臨んで、財政を處理し、眞に國家の發展を促し、國民の生活を豐にする政策を講じたならば、啻に政友會內閣の興望を高からしめるのみならず、國家全體を利するもの〻多きは、吾人の疑を容れざる所である。然も同會所屬の上下兩院議員を通じて、一人の財政家を以つて目するに値する者なきか、休業銀行の開業問題と云ひ、十五銀行復活の問題と云ひ、川崎造船所救濟問題と云ひ、財政當局者の實際に試み來つた政策にして、一の效果を奏したものなく、盡く半途に挫折するか、然らずんば實行前に早くも世間の非難を招き、甚だしきに至つては、內閣の內部に於てすら反對を惹起して、實行の步を進める能はず、空しく世間に物笑の種子を遺したものなしとしない。田中內閣組織の當初藏相の職に就いた高橋是清氏が今日まで其地位に居つたとしても、尙ほ財政的施設に幾多の停頓を來し、失策を招いたであらうと云ふことは、從來多くの機會に於て、高橋氏の示した手腕に徵して、吾人の想像を下すに苦しまざる所である。此邊の困難を推察した爲めか、高橋氏がパニック救濟を一段落として、早く責任の地位を去つたのは、流石に處世に老巧を極めたものと稱するを憚らない。而して氏に代つて、藏相の地位に就いた三土忠造氏に就て考ふるに、氏は既往幾年かの議員生活中豫算に關する數字を研究し、財務統計に關する演說を試みたことはあるが、此以外に財政に關し、經濟に關して、氏に如何なる識見があり、又抱負があるか、殆ど其一端すら世間に示されたものはない。斯る人が卒然藏相の要職に就いたのは、要するに政友會內部の情實殊に高橋前藏相の忠實なる一隨從者であると云ふ緣故に依つた次第であつて、就職當時閣僚內にすら異論のあつたのに徵しても、氏が藏相として任に適せざることが窺はれる。即ち三土氏の如き、藏相として施す可き何等の政策を持たず、經綸を懷かず高橋氏の推擧

を一個の力瘤として、危くも其地位を擁して居るに過ぎない。閣僚の間に推重されないのは勿論、民間の金融業者や、實業家に向つて、能く彼等を指導し、以つて自家の爲す所を助けしめるの威信を備へない、現に川崎造船所救濟問題に關聯して、一の日本興業銀行すら利用するを得なかつた次第であつて、此一事が三土氏の手先を傷け、爾來氏のすることゝ爲すこと、悉く失敗に終始し、無爲無能の甚だしきを示して居る。パニック以來金融市場はパニックの惨害を免かれたには相違ないが、單に其れだけであつて、毫も其以上に活躍するを得ず、日銀特別融通法も亦完全に運用されず、休業銀行中聊か目星しきものは今日に至るまで、一として開業の運びと爲らず、市場を擧げて、依然たる沈滯の狀に居ることの如き、一に三土大藏大臣の政治家として、財政家として無力の致す所に之を歸しなければならない。

明年度の豫算編成難

斯る無力の大藏大臣が財政の局に當る以上は、昭和三年度の豫算案編成に際して、田中內閣が一大困難に逢着し、其編成上幾分にても合理的方針を取れば、閣議に大紛亂を來して、收拾困難の狀と爲る可く、閣僚の意見を重んじて、無理に豫算案の編成を企ふすれば、財政方針をして支離滅裂の狀に陷らしめる可く、田中內閣としては、左しても、右しても、結局醜狀を天下に曝すに至ることを免がれないと想像されたのである。而して明年度豫算案の編成に關して、田中內閣は今日如何なる狀況を示して居るか、經費査定、財源調達に就て、閣議の開かれること、數回の多きに及んだに拘はらず、容易に閣僚間の議を纏める能はず、一旦査定した歲入の見込をも改定し、復活し得られる限りの經費要求額を復活し、加ふるに財政の基礎に於ける堅實すら、犧牲に供して、以つて收支の辻褄を合はせることに血眼と爲つて居るやに傳へられる。思ふに田中內閣に列する諸閣僚の如き、財政上の根本方針に就て、定見を有する次第でない一方に、閣員の地位に就て、大なる執着を持ち、如何にしても一日一刻の命脈を永くすることに就て、肝膽を碎いて居るのであるから、豫算閣議に於ても、各自の意見を固持して、互に讓らず、遂に決裂を來すが如き眞劍味はなく、結局有耶無耶の裡に閣議を成立せしめるに至る其代りに、不合理なる豫算案の編成されることは、吾人の想像に難からざる所である。而して斯る豫算編成難は何故に起つたかと云へば、第一の原因は三土藏相の無力、能く閣僚の要求する經費を削減するを得ず、經費膨脹の勢をして其甚だしきに至らしめることであり、第二の原因は政友會年來の積極政策が時を得顏に世間に現はれ來り、與黨を動かし、閣僚を制し、相誘ひ、相促して、以つて、經費膨脹の勢を盛ならしめたことであり、更に第三の原因は田中首相の無識、能く一定方針の下に、閣僚を指導して、閣議に統一を保ち、財政策をして時勢の要求に副はしめる能はざることに存するものと認められるのであつて、今や政友會は積極政策に依つて、自繩自縛の窮境に居り、更に無識の首相や、無能の藏相を其地位に置くことに依つて益々窮境を深くした次第である。

積極政策の功罪

政友會が財政上に傳統的政策とする所は所謂積極政策なるものであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。原内閣の時代に盛に之を主張し、實行し、都鄙到る所に國家の力を以つて、事業を起し、港灣と云はず、河川改修と云はず、學校增設と云はず、苟も國家の手に依つて、起し得られる事業は之を起して、經費を膨脹し、斯く膨脹した經費を四方に撒布することに依つて、一時世間の人氣を刺戟し、斯くて積極政策の行はれる限り、經濟社會の繁榮は維持し得られるものであると云ふが如き淺薄なる考へは原敬氏以下政友會に屬する政治家に依つて、世人を欺瞞する用に供された。原内閣時代の如く歐洲戰爭の影響に依つて、我國の經濟社會が空前の好景氣を告げて居つた際であれば、此好景氣と積極政策とを結び付けて、積極政策を辯護することも出來たし、積極政策に要する財源も亦比較的容易に公債募集に依つて、調達されるを得たのである。然も大正九年の恐慌以來經濟社會の面目一變するや、積極政策の進行、斯の如く爲るを得ず、公債發行の困難、公債發行に依る金融の壓迫等は次第に著しきを加へ、原内閣の後を承けた高橋内閣の下に、窮境の大なるを加へた。(近頃高橋是清氏が公債增發を不可なりとし、經費緊縮を必要とする意見を述べた旨を新聞紙上に散見したが、高橋氏にして既往を懺悔する誠意ある以上は、此種の言を爲すのが當然であらう。)茲に於てか高橋内閣に次いで起つた加藤(友三郎)内閣の如き、一般施設の方針に就ては、政友會の意嚮を尊重した跡のあるに拘はらず、財政上には經費の節約と繰延とに依つて、消極政策の實現を期したし、續いて護憲三派の聯立に依つて、加藤(高明)内閣の成立するや、消極政策の實行愈々急なるものあり、相當の經費緊縮が行はれ、而して當時政友會を代表して、此内閣の閣僚であつた高橋氏等亦實に消極政策に服從せざるを得ざるに至つたことの如き、即ち積極政策の内閣の情勢に於て實行不可能と爲つた結果に外ならない。

即ち震災前から其後に亙つて、積極政策の實行を不可能とした我國の經濟的狀勢には其後に至つて、何等か趣きの異なれるものがあつたかと云へば、私は決して其然るを認めるを得ない。不景氣の勢は愈々酷烈に國民生活を壓迫して居る、官業官有財産の收入は勿論、租稅の收入も亦減少することを免かれない、此際に增稅に依つて、國庫の增收を期するが如きは、絕對に不可能であり、さればと云つて、公債の募集も容易に行はれると見られない、斯る場合には財政上に於ける消極政策に依つて、姑く國民經濟に對する壓迫を緩和し、民力の休養を謀る外に、取る可き道はないのであつて、英米兩國が歐洲戰後に於て、消極政策の下に、經費の緊縮を謀つたのも、實に同一の事情に左右されたのである。

無謀なる田中内閣

然るに政友會員なり、彼等に推されて閣僚と爲つた輩の如きに至つては、積極政策を盲信する病弊に罹れるの觀きものがあり、如何なる場合に臨んでも、積極政策さへ實行したならば、以つて黨勢の擴張に資し、黨利の發揚を助け、併せて當今の不景氣を挽回するを得ろが如くに考へ、各官廳共に明年度の豫算案編成に際し、殆ど相競ふが如き態度の下に、莫大の經費を要求して、已まない。斯くて諸官廳の新規要求に係る經費の總額は實に三億三千餘萬圓の多きに上り、之を昭和三年度の基準豫算に於ける經費十六億五千八百萬圓に加へるときは、三年

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

度の經費は實に十九億八千萬餘圓を上るに至るのである。田中內閣が積極政策に加ふるに、産業立國策を標榜し、之を豫算案に實現しやうとする以上は、斯の如き經費の膨脹も亦已むを得ざる所であるかも知れない。然も之に對する財源は如何にして案出されるであらうか。經濟社會の不振は昨今殆ど言語に絕する有樣であつて、自然增收の望まれ難きと共に、剩餘の依賴す可きもの亦多しとするを得ず、進んで公債を募集するにも、相當の困難がある。三土藏相にして大藏大臣に適する手腕抱負の外に、閣僚を壓する威力の盛なるものがあつたならば、大鉈を揮つて、諸官廳の經費に思ひ切つた削減を加へ、進んで行政整理を斷行して、經費削減の實現を行はれ易からしめる可き道理であり、斯る大藏大臣の在任こそ、今日の時局に於て、吾人の最も多く希望する所であるが、無力無能の三土氏に斯の如きことは期待されない、斯くて三土氏は自己の職務に於ける實驗に據り、積極宗から、消極宗に變改するの已むを得ざるに至つたものゝ、各官廳の經費要求に對して充分の削減を施すことを許されない、田中首相亦財政經濟には甚だしく盲目であつて、藏相を助けて、其主張を貫徹せしめるが如き力を持たない。斯くて十月四日の閣議に於て、財源捻出策として、既定經費に對して、五分の節約を加へる必要が大藏大臣に依つて、主張された。經費の新規要求を抑へるを得ず、既定經費に就て、取捨を施す能はず、纔に後者に對する經費中、契約義務に屬するものを除いた殘餘に五分の天引を施して、財源を調達しやうとするが如き、無力なる大藏大臣の案出した最後の窮策であつて、誠に窘窮した狀が窺はれるのである。

然も此機會に於て、積極政策を行はんとする閣僚は容易に五分天引の要求に聽從せず、結局節約と繰延とに依つて、三千三百十五萬圓を捻出する、然も此內の純節約額は一千萬圓であつて、他は繰延に係るのである。財源の調達斯の如く困難であり、而して節約繰延以外に之を求むるの道は殆ど八方塞りの有樣であるとすれば、新規事業の計畫を思ひ止まる可きであるが、其所が年來積極政策を標榜した手前、引くに引かれぬ破目と爲り、繰延節約以外に何とかして財源を捻出せざる可からざる行掛りと爲り、結局(一)震災復舊費中普通財源の支辨に依るものを公債財源の支辨に振替へ、斯くて四千萬圓の餘裕を生ぜしめ、(二)明年度に於て、國庫に繰入れるを得る剩餘金を五千五百萬圓と見積り、外に電信電話等の生産事業に要する經費を公債財源に求めて一千萬圓の收入を求め、(三)關稅增收、獨逸賠償金の繰入等にも依賴するが如き、苟も收入として利用し得るものは總て之を利用して、以つて新規要求の經費に應ずるの窮策に出でんとしつゝあるのである。

斯の如くして明年度豫算案に於ける收支の辻褄が計數的に彌縫され、豫期の一部分であるとしても、若干の新規事業費が認められたならば、田中內閣や、政友會の輩は之を以て積極政策を貫徹するを得たとか、時代の要求に適する豫算案を編成したとか稱する次第であらうが、私は決して其然るを信ずるを得ない、第一經費の節約繰延は既定經費の五分を標準として勵行されたとしても、物價が昨年來相次いで低落して居る現狀から云へば、決して滿足するを得ないのに、僅に二分弱に過ぎざる三千三百萬圓の繰延と節約とに止まるに於ては、田中內閣の財政整理に對する誠意に乏しきことは此一事に依つて表白される。田中大將の先輩桂公が往年第二次內閣を組織するや、首相自ら嚴

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

稱を兼備して、當時世人の期待した程度よりも遙に大なる經費の延繰節約を行ひ、之を財源として、公債整理を遂行したことは、今日尙ほ人の記憶に存する所である。而して始め桂公が藏相を兼攝すると定まつた際、世間には一介の武辨、能く何事を爲すを得るであらうかとして、輕侮の念を以つて、之を迎へる者なしとしなかつたのである。固より公債整理以外の財政策に至つては、非とす可きものゝ多々あつたことは論を俟たないが、兎に角世人の想像して居つたよりも、大なる程度の財源を緊縮繰延に依つて、調達したことは事實であつて、結局桂公は財政にも一隻眼を具へて居ると稱された次第であつた。畢竟首相自ら藏相の職に居つて、經費の緊縮に就て、閣僚に充分の威壓を加へたことゝ、當時の狀況に於て、財政を緊縮せざる可からざる事情に就て、正確なる理解を有したとゝが相重なつて、桂公をして藏相としての第一步に成功を收めしめた所以であつたと解されるが、財政に何等の理解なく、興味なく、「肥料の分配」以上に經濟的知識を有せざる田中首相に至つては、財政の事は一切人任せであり、而して斯く財政を托された當面の藏相三土氏が無力無能とあつては、節約繰延に依つて、些細の財源しか捻出されず、而して新規要求の經費は積極政策の手前から、之を承認しなければならない爲めに、收支の不適合を來して、此不適合が徹頭徹尾明年度の財政計畫を不確實ならしめるものと認められる。

公債政策の濫用

第二、然らば田中內閣は斯る收支の不適合に處して、何を以つて其均衡を求めやうとするのであるか、財政上に無力なる者が一方に經費の增加を抑止するを得ず、他方に確實なる收入を調達する道を得ざる場合には、借金政策に依賴することを以つて、唯一の手段とするのであつて、田中內閣の財政策亦之と軌を一にする。即ち震災復舊費の財源として、電信電話等生產的事業費の財源として、將た又鐵道事業の財源として、其れ〳〵公債の發行される結果、明年度の公債發行高は一般並に特別會計を通じて、二億圓に上る計算と爲つて居る。憲政會內閣の財政方針として、所謂非募債政策なるものが認められた。然しながら其所謂非募債政策は單に公債を市場に於て、公募しないと云ふだけのものであつて、一般並に特別會計を通じて、年々一億五千萬圓の公債の預金部引受、郵便局賣出等特別發行法の下に、市場に出で來り、其供給を過剩にして、市價を壓迫することを免かれなかつた。消極政策を標榜する憲政會內閣の財政策に此事のあるのは、政策の徹底を缺くものとして、世人の不滿を感じた所であつた。

今や震災手形の處理其他に關聯して、公債の交付されるものあり、パニック善後策に伴つても、亦日本銀行の損失を補償する爲めに、公債の交付されるものゝある其上に、憲政會內閣時代の非募債政策は田中內閣に依つて、一議に及ばず、破棄されて、續々幾多の名目の下に公債發行の行はれんとするに至つた。我國の金融市場は果して能く之に應募し、又之を消化し、財政に依つて、金融の壓迫される窮狀の生ずることなきを得るであらうか。財政と金融との關係は今や漸く切迫した問題と爲り來つたのである。

由來積極政策と公債政策とは離る可からざる關係を有する。固より積極政策の財源として、租稅の增收に依賴して、可なりとされ、又揮

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らずとされる場合のあるに相違ない。然しながら積極政策の下に、行はれる事業が當然二三年を期して完了するものであつたり、一時に巨額の經費の支出を必要としたり、其經營と共に確實なる收入を國庫に與へたりするものであれば、公債の發行に依る收入を以つて、財源とするの當れるを見るのである。即ち積極政策と公債政策との間に密接なる關係を生ずる所以は斯の如くして理解されるのであるが、積極政策の下に、公債政策を運用する場合には、公債が金融市場を壓迫せずして、發行される見込みの確實なるものがなければならない。今日は果して、其時であるかどうか。此事は財政策の將來に關して、攷究を要する所である。

金融の實狀と公債政策

今春のパニック以來我國の金融市場には種々の變態が生じて居るが、其變態の内に於て、特に著しきものは、金融の緩和であつて、殊に最近市中諸銀行の預金利子引下と爲り、日本銀行の金利引下と爲つた。斯くて各種證券の市價は一般に騰貴して、利廻りの低下したことも、事實に相違ないが、然も斯る趨勢は今後如何に永く、又如何なる强さを以つて、繼續するものであらうか。金融緩漫の現狀を誘致するに至つた最大原因はパニック以來中小銀行の預金が大銀行に集中し、斯くて大銀行の手元を潤澤ならしめた一事であつて、三菱、住友、第一諸銀行に吸收された預金は少なからざる高を數へ、諸銀行をして資金の運用に困惑せしめる趣きすらなしとしなかつた。玆に於てか彼等の對應策として案出したものは、第一は公債買入れであり、第二は過般の預金利子引下であつた。政府は是等兩者の政策を眺めて、金融緩和の實勢、確實に出現し、公債に對する應募力が旺なるに至れるものと考へ、公債政策の遂行に就て、意を安んずる所あるが如くであるが、私を以つて見れば、今日の所謂金融緩漫の實勢には大に疑を挾む可きものがある。蓋し今日の金融緩漫たる、中小銀行から引出された預金が大銀行に集中し、大銀行自ら之を運用するに困難を感ずる所から起れる一の變態的事相であつて、大銀行の間には、金融緩漫の事相の著しきものがあるとしても、中小銀行の手元は必ずしも然らざるものがある。現に過般の預金利子引下に臨んで、前者と後者との間に引下の程度に就て區別の設けた一事に徴しても、此般の事實が窺はれる。最近市場に於ける國債の需要聊か振興し、市價に騰貴を來しつゝあるが如き、大銀行に於て潤澤と爲れる資金の利用法の國債購入に求められた結果に過ぎない。隨つて之を以つて將來に繼續する事實であるとし、公債發行の容易に行はれることを推測して、財政計畫の一端に充てやうとするが自ら求めて財政策の根柢をして危險ならしめるものと云はざるを得ない。

公債增發と金融市場

公債は單に資産家の投資を吸收する目的物たるに止まらず、銀行に依つて積立金として、一般資産として、保險會社に依つて、責任準備金として所有されるもの少なしとしない。公債市價の騰落が金融上の動靜に大なる關係を持つのは、實に此點に繋るのであつて、市價の騰貴は自ら是等機關の資金融通力を大ならしめるに反して、公債市價の低落は資金融通力を小ならしめざるを得ない。加ふるに公債市價の低落

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は公債を所有して、資金融通の目的物に充てやうとする者に取つては擔保價格の低落であつて、其れだけ資金の融通を受ける便宜に減損を招かざれば已まない道理である。

右の如き道理があるからと云つて、人爲的に公債市價を騰貴せしめるが如き殊に公債市價昂進策として、無理なる方法を取るが如き、財政上なり、經濟上なりから云つて、得策とするを得ない。一般財政窮乏したり、不良の稅目の國民に負擔を及ぼすものがあつたり、財政上若干の公債を發行する必要のあつたりする場合に、公債整理を理由として、公債の償還を試みた所で、到底大なる效果の期せられない所以であつて、私が往年減債基金制度の我國に設けらるるに當り、又其基金として編入される金額の增加されるに當り、之に反對した所以であるが、若しも公債の償還にして極めて自然に、又他に大なる負擔を及ぼすことなくして行はれる以上は、其償還に依つて、公債現在高を減却することは極めて望ましき所と云はざるを得ない。若槻內閣の藏相片岡氏は今春のパニックを誘導した發頭人として、世間に大なる非難を招いた人であるが、公債政策に關しては、新生面を開き、前年度剩餘金の四分の一を次年度公債償還資金に充てる制度を實現し、公債償還の歩を急速ならしめることを期した。此事たる、片岡氏の藏相在職中に於ける唯一の善政を以つて見るを得べきものであらう。然も田中內閣の如く、公債增發を意とせず、之に依つて積極政策を遂行しやうとする以上は、公債は今後市場に汎濫し、市價の低落を來すのは勿論であつて、大銀行に於ける預金の集中とか、斯くて生ずる金融の一時的緩漫とか云ふが如きことは、公債市場の低落を阻止するに就て、何等の效果ありとするを得ないであらう。從來政府の公債政策の濫妄と爲るや之に對して反對を表するものは銀行業者の團體であつて、時に此種の反對は政府の政策を掣肘するを得たこともあつた。然るに今、右の如き濫妄なる公債政策の下に、公債が增發され、市價の低落することの顯著なるに至つた際、銀行業者の間に、之に對する反對の聲の起らず、運動の催されざるは何故であるか。思ふに此事たる、今日の銀行業者に自家の職務を尊重する誠意に乏しく、財政に壓迫されて、損失を蒙つたとしても、何等か政府に縋つて利益を收めやうと云ふ卑劣なる依賴心の存する一方に、過日のパニック以來銀行業者が金融上の動靜に就て恐怖心を懷くもの甚だしく、政府の政策に反對して、權力者の嫌忌する所と爲つたならば、他日經濟社會の動搖に依つて、營業上に窮地に陷つた際、政府の援助を蒙るに難く、如何なる困難に接するやも知れない、觸らぬ神に祟りなしと云ふ訓言に從ひ、政府が如何なる政策を施しても、默々裡に之を看過し、政策上の犧牲と爲つて蒙る損失は政府を通じて、或る利益を獲得し、以つて彼此相償はうとするのが當今銀行業者の懷抱する策略であり、鳴りを靜めて、政府の所爲を傍觀するものとすれば、彼等の狡智憎むに堪へたりとす可きである。

地租委讓に及ぼす危害

上述の如く田中內閣に至つては、公債政策に就て極めて濫妄であつて、財源の要するものがあれば、直に公債を取つて、之に充てやうとする。若しも斯る政策が單に一年を限りとして行はれるものであれば、之を恕するを得るかも知れないが、地租委讓の關係から、更に財

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政狀態を不良ならしめる因數の減す可からざるものがある。地租委讓の如き、今日の時勢並に財政狀態に於て、之を行はざる可からざる必要は何れの邊に存するか、吾人の了解に苦む所であるが、兎に角現內閣としては、之を一枚看板の政綱として居る以上は、是非を問はず、其實現を謀らなければならない。然も其實現に就て直接當面に現はれる問題は地租委讓に依つて、國家財政に生ずる收入の缺損六千七百萬圓を塡補するに如何なる方法を以つてするかの一事である。若しも地方團體に委讓される地租に代つて、適當なる財源が國家財政に見出されるならば、地租の如き伸縮不自在なる稅目を失ふことは、國家財政の見地に於て、絕對に不可なりとする道理はない、然るに田中內閣の爲す所を見るに、震災復舊費に充てられた普通財源を公債財源の支辨に振替へることに依つて生じた財源を昭和三年度に於て新規事業の經費に充當し、更に昭和四年度以後に於ては鐵並に木材輸入稅の增率に依つて生ずる增收と共に地租委讓の爲めに生ずる收入の塡補に充てやうとするものであつて、要するに公債財源を唯一無二の種子として、財政上の手品を行はふとする次第に外ならない、帝國財政の安否は一に公債財源の確實に調達されると否とに繫がるのであつて、財政の危機は日に國民の眼前に迫り來れるの感なきを得ないのである。

更に此上に明年度の財政と金融との關係を危險ならしめるものは、明年度中期限の到來する公債の三億五千萬圓に上る一事である。期限が到來したからと云つて、固より償還される可きでなく、借換の行はれることを以つて當然とするが、頻々たる借換の續行は間斷なき公債の發行と相俟つて、金融市場を壓迫する所以と爲る。目先き幾月かの間は國庫に取つて、有利なる條件を以つて、借換が行はれるとしても金融の狀勢一變して高利借換のやむを得ざるに至つた場合には、市場を壓迫する弊の著しきを免かれざる道理である。

景氣恢復の見込如何

茲に於てか政府に取つて、最も希望する所は我國の經濟社會が近き將來に於て、景氣の恢復を告げ、好景氣の下に、租稅其他の收入の增加する一事である。始め不景氣を理由として、收入の減少す可き見込みの下に、緊縮を主張した三土藏相は新規要求に係る經費を承認せざる可からざるに至るや、掌を飜すが如くに、明年中に景氣の恢復する結果、國庫に增收の見込まれるものあつて、此方面から新規要求の經費に對する財源の調達されることを公言するものゝ如くである。瞬時の間に所說を變更し、昨非今是の態度に出づる三土氏の輕薄なる態度は吾人の唾棄する所であるが、實際問題として明年中に我國經濟社會に景氣の轉換されることが期待されるであらうか。如何にも昨今の狀勢を以つてすれば、貿易に於ける輸入超過の勢は減退し、本年中の入超は一億圓臺に止まる有樣であり、一方に貿易外の收入や、外債發行に依る收入等を計算すれば、入超から金融市場に及ぼす壓迫は僅に除却されたと見られるし、一方に內地の金融も亦或る方面のみに就て見れば、緩漫であると云へる。卽ち之を以つて景氣恢復の資料とする所以であるかも知れないが、然らば之を基礎として、資本家は盛に新事業に投資するか、斯る計畫された新事業は漸々其緒に就いて、勤勞や、物資を需要するか。斯る投資や需要が起つてこそ、經濟社會に活氣を告げ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

景氣の恢復を期するを得るのであるが、其れには金融市場に於ける緩和の狀勢が確實に繼續し、世人が之に對して意を安んずる一方に斯く緩和した金融を利用して、會社と云はず、個人と云はず、總て債務を負ふ者が高利の舊債を整理して、利子の負擔を免がれ、銀行亦有價證券市價の値上りに乘じて、資産の價格を確實にして、融通能力の豐富を期することを必要とする。諸會社が昨今頻りに社債を發行して、高利社債の借換を行ひつゝあるが如き、正に整理恢復の途上に居るものとす可く、而して銀行の如きは、此途上に至らざる間に早くも過般のパニックに襲はれたのであつて、其影響を受けたゞけ、整理が後れ、整理の後れるだけ、景氣恢復に資する力に乏しきものと云はざるを得ない。三土氏其他の官吏等が今やパニックの影響は政府の努力に依つて、一掃された、隨つて景氣の恢復を促すに就て、何等之を妨げるものはないと云ふが如き世人を欺く一場の詭辯であつて、其信賴に値せざるは、恰も大正九年三月の恐慌直後政友會の總裁原氏を始めとして、高橋是清氏等が恐慌の影響は兩三月にして去る可しと述べたのと同巧異曲の言であつて、後者の誤まれるが如くに、前者にも亦何の撰る所なしとす可きである。

殊に政府の財政策が今日の如く事の宜しきを失し、公債の濫發を惹起するが如きものであつたならば、今後多少なりとも民間に遊資の生ずるに隨つて、其遊資は國庫の吸收する所と爲る一方に、公債市價の低落を通じて、金融の圓滑なる運轉を妨げる。斯くて金融の緩漫なる現時の狀勢の如き、一瞬の夢であつて、公債政策の歩の進められると共に、金融梗塞の境に陷ることとなしとしない。政府が明年度に於て、景氣の恢復を見る可しとして、之に顧るの不可なるは論を俟たないと共に進んで景氣の恢復を促進す可しとして、或る種の小策を講ずるが如きに至つては、更に事態を紛糾せしめる嫌なきを得ない。政友會が總選擧を目前に控へて、世間の人氣の有利に政友會に向つて展開し來らんことを希望し、日本銀行を始め特殊銀行をして放漫なる資金の貸出を行はしめやうとか、金利歩合を低廉ならしめやうとか、國庫の資金を濫出せしめやうとかするのは、毎度の慣用手段であつて、今や是等の點に於ける彼等の妄動は或る程度まで成功したものゝ如くである。然も經濟社會の根柢には整理改善の實の備はれるものなく、單に金利歩合の人爲的低廉に依つて、資金が聊か市場に放出されたとした所で、斯くて生ずるものは、虚業家の跋扈と市場景氣の誘致とのみであつて、眞の景氣の立直りを來すものとは考へられない。我國の景氣恢復には事の國內に關するものと國外に關するものとある。前者に就ては諸種の事業が整理未完成の上に、今後財政上の壓迫の加へられるに於ては、果して何時になつて、景氣恢復の條件の備はるに至るや、不定の觀なきを得ないし、後者に就ては、北米合衆國にせよ、支那にせよ、印度にせよ、盛に我國の物資を需要し、我國の事業家や、輸出業者をして輸出增加に伴ふ利益に浴せしめるを得るものとは考へられないのである。

事情の斯の如き場合に、濫に景氣恢復の近きに居ることを想像して、國庫收入の增加を見込み、財政上に依賴する所あつたならば、求めて財政の基礎を不確實ならしめるものである。明年度の豫算案が斯る浮薄なる見込みを參酌して、編成されて居るとすれば、益々我國財

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政の信用を減損するものであつて、其罪大なりとす可きである。流石に財政當局者も各種租稅や、官業に關しては、明年度豫算案に於て、増收を見積るを得なかつたが、煙草專賣の増收は之を見越して、專賣局益金に若干の増收を計上することに決定したと云ふ。他の收入は不景氣の爲めに、盡く減少を免かれないのに、煙草專賣の益金のみ獨り増加すると云ふのは、如何なる根據に出づるものであるか。或は政府は明年中に、或は煙草の專賣價格を引上げるとか、或は煙草の品質を粗惡にするとか、特殊の方法を講じて、以つて増收の目的を達しやうとするものではあるまいか。豫算の施行に關聯して、更に國民の負擔を増加す可き何等かの計畫の祕められて居るものはないであらうか、吾人の疑を懷く所である。

ラモントに嘲けらる

近頃合衆國モルガン商會の番頭ラモントなるものゝ來朝するや、朝野の人士殊に政府の代表者や實業界に籍を置く者は恰も國賓を迎へるが如き禮を以つて、此商賈を遇し、歡待至らざるものなきの趣きであつた。畢竟モルガン商會を通じて、有利なる條件の下に、募債を行ひ、以つて我國現下の資金難を救はうとする一種の乞食根性が凝つて、事の玆に出でたものと想像され、吾人は唯貧乏國の憐れを感ずるの外はなかつた。而してラモントは我國を去るに臨んで、如何なる言を以つて、是等官僚並に實業家の厚遇に酬いたかと云へば、實に日本は金輸出解禁に向つて、精進せよとの一言であつた。之に對して我國財政當局者なり、實業家なりは如何なる感を懷いたであらうか。歐洲戰時並に戰後に於ける彼等の爲す所又は行ふ所の宜しきを得なかつたればこそ、戰後の反動的狀態に我國の苦しめられるもの甚だしく、今日に至つて、尙ほ金輸出解禁を爲す能はず、ラモント風情に斯る忠告を受けて、忸怩たらざるを得ざるが如き、誠に醜態の甚だしきものとす可きである。然も彼等は今日に至つて、未だ悟る能はず、政友會は依然たる政權擴張慾に支配されて、積極政策を以つて、財政に臨み、財政の膨脹、國民經濟に對する壓迫を甚だしからしめやうとし、實業家の如き却つて之に反對せず、寧ろ政府に阿附して、若干の利益に與からうとする。他日ラモントの如き者が再び來つて、何と我國の財政經濟を評するであらうか。外國金融業者の批評の如き、深く吾人の介意せざる所である。唯斯る財政策の繰返される間、國力の疲弊し、國民生活の困憊する一事こそ、吾人の忍ぶ能はざる所である。要するに事の斯の如きに至つたのは、政友會の積極政策に執着し、經濟的環境の如何を辨別せずして、之を濫行しやうとする惡癖の閣僚間に強烈なるものがあり、三土藏相が無力無能であつて、國庫收入の狀況より、斯る要求を掣肘する能はず、加ふるに田中首相が財政經濟上に無識であつて、適當の裁斷を下すに難きことを以つて、重なる原因とする。一家の興るのも、亡びるのも、人に在るが如く、一國財政の整理宜しきを得るのも、紊亂如何ともする能はざるに至るのも、亦人に依つて定まる。若槻内閣に於て、片岡氏の藏相としての手腕に缺ける所のあつた爲め、遂に彼のパニックの起ることを早からしめ、而して内閣の潰滅を導くに至つた。田中内閣亦財政に臨むに今日の如き有樣であつたならば、遠からず内閣の倒壞する運命は此點から來るものと觀察されるのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「財界回復政策」の正體と其行衛

高橋龜吉

一

去る四月の金融大恐慌のドサクサにまぎれて、憲政會内閣はモロくも毒殺され、政友會内閣が之に代つた。新内閣當面の使命は、云ふまでもなく、金融大恐慌の跡始末であつた。大正九年以來の彌縫に破綻した我が財界を、如何に收拾し、之を如何にして再起せしむるかであつた。

これより前、政友會は、當時に於ける不景氣を以て憲政會内閣の「消極政策」の結果であると非難し、旺んに「積極政策」の必要を絶叫してゐた。されば、政友會が新に内閣を組織するや、財界はその「積極政策」に由つて財界回復手段の實現されるべきを期待した。則ち、政友會は、一方に金融大恐慌の跡始末をやり、一方に財界回復の積極政策をやらねばならない位地に立つたわけだ。去る四月二十日、大將田中内閣が成立して以來今日に至る政友會の財界政策は、要するに、右の立場を基にして、之に色々の黨利情弊が結び合はされたものである。

さて、いよいよ舞臺の幕が開かれると、政友會内閣は如何なる政策を携げて登場して來たかと云ふに、先づ彼れは、巧妙にも、金融大恐慌のドサクサにまぎれて、その善後策に必要だと云ふの口實で、大枚七億圓の大金を、僅々數日の臨時議會で、國民の懐から、、取つて了つたのである。所謂五億圓の「日本銀行特別融通資金補償法」及び二億圓の「臺灣融資補償法」が即ちそれだ。斯樣にして、政友會は、その「積極的財界回復政策」の手品の種と、蜜の甘きに蝟集する利權屋や政黨屋を操縦する財源とを、そのポツケットの中にシマヒ込むことが出來たのであつた。その上に、憲政會内閣が、散々苦心して喰へ込んだまゝで、未だ手を付ける暇のなかつた二億七百萬圓の震災手形處理法(春の本議會で通過)が、ソツクリそのまゝあつたのだから、總計九億七百萬圓と云ふ、日本の政黨屋どもの嘗て夢みたこともない程の大金が、政友會の自由な「活用」の下に置かれたわけだ。政友會の「積極」内閣にとつては、實に、鬼に金棒だ。

去る四月、政友會の組閣以來、政府の名によつてバラマかれた正不正の金穴はすべて茲にある。露骨な資本家救濟や、貴族に對するオツピラの、、(十五銀行救濟)やの、すべての手品の種はこゝに在る。尤も、政友會は、一定の範圍以外の使途に對しては多少の制限ある右の「金穴」を以ては不自由とし、乃至は不足として、その外に、尙は預金部の金にも手を延はさんとした。だが、この野望は、手個の犬位

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に甘く見てゐた小野興銀總裁の頑強な反對にあつて遂にその横車を、中途で放棄せざるを得なかつた。しかし、政友會は、それで、預金部の金の「利用」を斷念したかと云ふに無論さうではなく、後述するやうに、**他の抜け道を通じて、之にも極力魔手を延ばしてゐるのである。**

二

こゝで、一寸振り返つておく必要のあることは、いつたい、政府や資本家達が云ふやうに、金融恐慌前後の我が財界の行詰を打開し、各産業の活動を再開せしむるためには、總計九億七百萬圓の巨額に達する大金を、國民の懐から絞り上げて、之を資本家に惠與する外に他に策が無かつたか、どうかと云ふ點である。こゝに、私が「他に策があつたか否か」と云ふ意味は、無論、當時直ちに實行し得る方法についてモノを云つてゐるのであつて、「理想」の社會の實現せられた後に始めて實行し得る策についてモノを云つてゐるのではない。他の言葉で云へば、政友會としては、あゝする外に仕方がなかつた、と云ふやうに、すべての人を肯かしめ得る唯一の方法でそれがあつたか否かと問ふてゐるのである。これにつき、資本家や既成政黨（政友、憲政、政本ともに）は何れも之を唯一の方法であつたかの如くに公言してゐる。

しかし、事實は決してさうではない。

そもそも、あの金融大恐慌前後の我が財界が、何故に、斯の如く二進も三進も出來ない窮狀に陥つたかと云ふに、無論それには根本的な原因もあるが、しかし、之を金融大恐慌を出來した原因、並びにその金融大恐慌の善後策として爲し得られた方策に就いて見る限り、當時の我が財界の「癌」は、要するに餘り多額の借金を背負つてゐたと云ふこと、乃至は餘り巨額の損失を内蔵してゐたと云ふことに在つた。だから、當時の、而して又金融大恐慌後の、資本家的對策は、專ら、**この「借金」又は「損失」を如何にして片付けて了ふかに現に限られてゐる。その方法として、彼等は國民の懐から九億七百萬圓の巨額を絞り取つて、之を資本家に與へ、斯くして、その「借金」を支拂はしめその損失の穴を埋めしめたのである。**

だが、右の目的を達するには、必しも、國民の懐から、九億七百萬圓の巨額を絞り取らなくとも、之を、（その關係資本家から醵出させて「事業」を再び甦生せしめる方法もないではないのである。例へば、その株主資産を以つて損失を埋め、債權者の權利を、その事業の支拂ひ得る能力の範圍に止め（或は元金の切捨て、或は利子の引下げ等に由りさへすれば、それで解決が出來るのだ。此のためには、新に一厘の資金も必要としない。已に、その事業に注ぎ込まれてゐる資本を、帳簿上で、その實際の資産價値にまで切り下げれば、ザッツオールである。かくて、事業も死なずに、生存し獨行し得ることが出來るのだ。唯だ、その事業の所有者が必要の場合には變るだけで……。而して、この方法は、いま私が、机上で空論してゐることではなくて、現に米國あたりでは實行してゐることだ。例へば、三土藏相は之を次の如き言葉で語つてゐる。「……アメリカの如く銀行が破綻した時は、政府の管理に移し、さうして全財産を差押へて之を處理することが出來れば宜しいが、日本の法律はさう出來ない」（十月五日東京朝日新聞社講堂に於ける講演筆記）三土藏相は、こゝには「銀行」のみについて云つて

ゐるが、しかし、銀行以外の「會社」についても、個人事業又は商店についても同様なことが行はれ得るのである。

なる程、三土藏相の云ふやうに、現在の日本の法律は斯様なことを強行し得るやうに出來てゐない。だが、當時未曾有のモラトリヤムを布いて日本經濟の全體を一時痲痺せしめるやうな非常手段をとる勇氣のある政府ではないか。又、、、、、、國民の懐から九億七百萬圓と云ふ大金を絞取つて、之を資本家に贈與すると云ふが如き非常の立法すら急造した凄い腕をも持つてゐるのではないか。若し、資本家や政府にして、その意志さへあれば、當時、それに必要な法律の改廢新設をやつて、イクラでも米國の現にやつてゐる方法を採ることが出來た筈だ。尠くとも、財界の整理はこの方法に由つてやることに定め、財界人心の不安を鎭めるためには、一流銀行及び日本銀行の連帶責任による支拂保證の聲明を出さすべきであつた。

所が、政府も資本家も、斯かる方法に對しては、厘毫も努力を拂はなかつた。何故なれば、斯かる方法によるときには、資本家階級——それもその問題の事業又は銀行に關係ある者のみ——自ら、素裸になつて、その尻拭ひをやらねばならないに反し、現に採用したるが如き方法に由るときには、資本家の不始末は之を國民に尻拭ひさせながら、資本家は國民の懐から九億七百萬圓の巨額を絞取つて、之を自己の懐中に入れることが出來るからである。

私は先きに、政友會が金融恐慌のドサクサにまぎれて、七億圓の巨額を國民から、、取つたと云つたが、資本家自らが當然尻拭をやるべきものを、金融恐慌のドサクサに乘じて、その尻拭を、何も知らぬ國民にナスリ付けながら、何かしら一角の手柄でもやつた如くに國民を、、してゐるわけは、以上に由つて、改めて説明するを要せないであらう。斯様なわけで、之を資本家階級から云へば、あの金融大恐慌は一大災難ではなくて、（金融の動揺で中小商工業者が少からぬ金融難のため打撃を受けたと云ふことはあつたが）寧ろ、或る意味に於て、棚からボタ餅であつたのだ。蓋し、斯様な大動亂なくしては、七億圓と云ふ巨額を到底國民から絞り取ることは出來ず、従つて、その尻拭は早晩資本家自ら之をやらねばならなかつた筈のものを、あのドサクサに之を國民に轉嫁することが出來たのであるから……。斯様な意味に於て、あの金融大恐慌は、文字通り、我が瀕死の資本家の多くを蘇生さした。たまたま、その飛つちりで倒れたものは、あの事件があつたが故に倒れたのではなくて、それがなくとも早晩倒れざるを得なかつたもので、就中、ヒドかつたものゝ少數が、申わけのやうに、全體の中から犠牲にせられて破滅したに過ぎなかつたのである。さうして、他の大多數の資本家階級は、國民の痩せ衰へた懐から七億圓と云ふ巨額の膏血を絞り取つて、自らの肥大した懐中に於ける資産の減ずることを防いだのである。しかも驚くべきことには、この大怪事が、當然のことを行ふが如き口吻と態度とに於て、自黨、既成政黨の全會一致で以て行はれたのである!!

三

試に、いま、あの金融大恐慌で倒れた鈴木商店を見よ、川崎造船所を見よ、臺灣銀行を見よ、十五銀行を見よ、村井、中井等々の大小

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

幾多の銀行を見よ。何れも、假令あの恐慌がなくとも早晩倒れる外に途のなかつたものばかりである。念のため、その內容が數字的に發表せられた二三のものについて見よう。

第一に臺灣銀行は、拂込資本金及諸積立金總計四千百十四萬千圓の資產を以て、三億五千六百萬圓（震災手形法で補償せられた四千六百萬圓を加算して）の缺損をしてゐる。即ち、百圓の資產しかない者が八百六十五圓の損をした割合になる。どうして之れでやつて行けることが出來やうぞ。又村井銀行並に中井銀行について見るに、左表の通り、村井銀行は約千八百四十萬圓の資產しかないのに對し負債は五千百萬圓あると云ふ有樣だ。又、中井銀行は資產約千五百萬圓に對し負債約三千萬圓を背つてゐると云ふ始末だ。これではやつて行ける筈がないではないか。（尤も、この中から重役の私財提供や、震災手形の政府補償等で實際缺損として預金者の負擔に歸する分は表示の如く更に減少してゐるが）

	村井銀行	中井銀行
純資產	一八、三九一 千円	一四、八七六 千円
純負債	五一、〇〇〇	二九、九四〇
差引欠損	三二、六〇九	一五、〇六四
內、重役私財提供	二、六七七	二、五三〇
震災手形政府補償	一四、四一八	二、三〇一
同上利子同上	五九二	—
再差引欠損	一四、九二二	一〇、二三三

あの金融恐慌が假令無くとも、現に休業したり破綻したりした銀行會社等は、遲からず倒れる外に仕方がない狀態にあつたと云ふことは、更らに又、他の點からも之を示し得る。例へば、村井銀行の借用金について調べた「東洋經濟」は之を左の如く云つてゐる「六月三十日現在の諸借用金並に支拂承諾見返は五千二百六十五萬二千圓を算する、然るに此內三千七百三十萬九千圓、即ち約七割一分又休業前の三月十九日現在の諸借用金並に支拂承諾見返六千三百二十一萬三千圓に比しても五割八分五厘強に上るものが、全く死んだ債權なりとは驚くべき事實である。……それにしても、之だけの死んだ債權を持つて、よくも村井銀行は半期二百四十萬圓近くの經費（支拂利息とも）を支拂ひ營業を繼續し得たものである。蓋しその秘密は、同行にも每半期二百五十萬圓乃至三百萬圓の預金增加があつた、其一部を累期喰つてゐた、事にあるのであらうか、大藏省は其情を知りながら、何うして今春まで營業を許したか實に不可解である……」

更にまた、三土藏相は、去る十月五日の東京朝日新聞社講堂に於ける講演に於て、あの金融恐慌の直接の動因となつた臺灣銀行の休業と云ふものを假令防ぎ得たとしても、あの動亂は恐らく免れ得なかつたらうと云ふことを述べ、休業銀行の倒れたのは必然だと云ふことを他の點から述べてゐる。例へば、三土藏相は之を次の如き言葉で語つてゐる。（同上講演筆記、東朝紙所載）「… 世間一部の人々は、もしその當時樞密院がこの二億圓の緊急勅令を通過せしめて置いたならば、以來、財界の動亂は起らなかつたやうに考へてゐる人もあるやうでありますが、今日、休業後の各銀行の狀態を見ますると、なかなか臺灣銀行の二億圓の補償案が通過して居りましても、この動亂は恐らく免れ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なかつたらうと思ひます」以て、金融恐慌を動因として倒れたる銀行會社の眞の破綻原因が、金融恐慌ではなく、あの金融恐慌なくとも遠からず、破綻を曝露する外に仕方のなかつた根因の他にあつたことを容易に看取し得るであらう。則ち、私が先に、——金融恐慌は資本家にとつては、棚からボタ餅であつて、そのために、多くの資本家は浮び上り、その中、ドウしたつて引つ張り上げやうなく、遠からず沒落の運命にあつたものだけが、申わけのやうに、破綻したに過ぎなかつたと申したわけである。兎に角、以上によつて、資本家は損どころか、七億圓を儲けたと云つた意味が御分りになつたことゝ思ふ。

四

さて、政友會內閣は、金融恐慌のドサクサと憲政會內閣の置土産とに由つて、棚からボタ餅式に手に入れた九億七百萬圓の手品の種をドウ云ふ風に使つたか。いま、指標的にその中の最も代表的な臺灣銀行と十五銀行に對するやり方について見よう。先づ、臺灣銀行に對しては、いかなるやり方をやつたかと云ふに、その缺損額二億五千六百萬圓の仕末をつけるに方り、政府は右の手品の種を次の如く「活用」してゐる。

一、約一億八千五百萬圓　臺灣金融補償法により政府負擔
一、四千六百萬圓　震災手形法により　政府負擔
一、約四千萬圓　日銀特別融資補償法により政府負擔
以上合計二億七千壹百萬圓

即ち、二億七千百萬圓の巨額を國民から絞取つて之を臺灣銀行にやつて了つたのだ。(その上に、尚ほ預金部の金(郵便貯金の金と見てよい)を、タダの樣な安い利子で五千萬圓も融通してゐるが姑くこれは措かう)さて然らば、その結果はどうなつたかと云ふに、第一に、いつたいならば臺灣銀行の株主は、その資本金四千五百萬圓と積立金百七十餘萬圓との全部を吐き出して素裸にならねばならない筈の所を、右の政府の援助の御蔭で、株主の吐き出したものは合計二千八百一萬六千圓に過ぎず、差引千八百七十五萬圓は株主の財布に殘してもらつたのである。何も知らぬ國民に二億七千百萬圓の大損をヒッかけ乍ら、自分の財布にはコレだけの大金をソット殘したとあつては、サゾかし寢ざめが惡いであらう。が、ソレが白晝公々然と行はれたのである。

また、右の國民の尻拭ひで臺灣銀行の債權者預金者はどうなつたかと云へば、これは、キレーサッパリと一厘も損をしなかつた。その中には一億二三千萬圓のコールがある。その債權者は全部銀行で、その重なるものは安田金融王だ。それが、國民の尻拭ひで一厘も損をしなかつたのだ！　思へ、粒々辛苦して、不時の病氣のために、老後のために、子女の教育のために……と預金した市井や田舍の預金者は、その預金の五割內外しか手に戾らないと云ふのが休業銀行一般の例だ。だのに、然り、だのに、安田金融王その他の大資本家の債權(それは預金よりも尙ほ保護する理由の薄いものだ)は、一億二三千萬圓が、そのまゝソックリ返金せられたのだ！そも〳〵、これで、、、、、、、、、、、、、、、、、思つてゐるのか?!

更に、いま一つの代表的なものとして十五銀行に對するやり方を見

よう。所で、十五銀行の缺損がどの位に上るかは、未だ、公表せられてをらぬ。だが、例へば「郷案」として傳へられるものは一億五千萬圓大藏省調査として傳へられるものは一億九千三百萬圓である。而して、十五銀行蹉跌の根因たる松方一族への貸出は、雜誌ダイヤモンドの調べに從ふと左の通りであつて、その何れもが「不良貸」であり回收困難のものである。

松方幸次郎氏關係　約四千萬圓
松方五郎氏　關係　約六千萬圓
松方正熊氏　關係　約千五百萬圓
同上雜　約千五百萬圓
合計　約一億三千萬圓

而して、いま、十五銀行の資産負債を洗ひザライして了ふと、その實際の資産は約五千萬圓しかないにも拘らず、その外部への負債は二億三千萬圓からに達する。(ダイヤモンド社調査に出る)即ち、株主がその拂込資本金四千九百七十五萬圓、積立及繰越金計三千四百六十三萬圓、總計八千四百三十八萬圓の全部を吐き出して素裸になつても、尚ほ、一億八千萬圓不足する。そこで、株主は、法律上、この不足分を補ふために未拂込金五千二十五萬圓を更に新に提供せねばならない。それでも尚ほ、預金者其他は一億三千萬圓からを不足する。之を現存の債務約三億二千萬圓に割宛てると、預金者その他債權者は、各千圓につき約四百圓の損失を負擔せねばならない。以上の如きが、十五銀行の實情だ。

所が、周知のやうに、十五銀行は華族銀行である。その株主に華族が多く、其の預金者に華族が多數だ。例へば、昨年六月末現在の株主名簿によると、華族株主は三百四十五人で(華族總數の三分一强に當る)其の持株は四十萬六百二十九株を算し、十五銀行總株數の三分ノ一强を占めてゐる。而して、若し、未拂込株金でも徵收せられると、華族から新に提供せねばならぬ高は總額一千七百四十三萬圓に達すると云ふ。その外に、いくらあるか詳細は分らぬが、兎に角、多額の華族預金がある。だから、若しも、十五銀行を倒せば、「華族の總破産」とでも云つたことになる。現に、その中でも筆頭株の島津家に於ては、これ迄何百人か召使つて來た人々を已に三分ノ一以下に減じたと云はれる「落魄」ぶりである。

これこそ、「御家の一大事」だ。そこで、貴族院の勢力が動き出した。「四ノ五ノ云へば次の議會で御返答するぞ」と云ふ凄文句を裏に隱して、「十五銀行を何とかして與れ」とユスリ出した。何しろ、政友内閣の手には千兩箱が九億七百萬圓も積み上げられてゐるから仕末が惡い。だが、「國民の手前」さう露骨なことは出來不申、マア〱と云ふわけで、第一にデッチ上げられた秘策は、川崎造船を「國防事業」の名で救濟することであつた。そこで、周知のやうに、預金部の金三千萬圓を川崎造船に「與れ」ようとする案が生れたが、これは、小野興業銀行總裁が頭を竪に振らないので、流石の「名案」も中途で引込められた。若しも、これが旨く行けば、所謂郷男の聰明によると、政府其他の援助の下に、十五銀行の株主は單にその拂込資本の中の四分ノ三を失ふだけでその四分ノ一を生かし、且つ未拂込五千二十五萬圓の追徵を免かれ、預金者は一厘も損をせずに濟むと云ふ筋書であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所が、川崎造船の救濟案が遂に旨く行かなかつたので、折角の名案もメチヤ〳〵になつた。斯くて、政府當局者は、公開の席に於てすら、十五銀行の單獨整理は困難だと云ふことを繰返し聲明すると云ふ有様だつた。だが、此間、陰密の間に、貴族院一派の策動は猛烈を極め、今度は、預金部の國際汽船會社(松方系)に對する債權二千九百二十萬圓の元利の一部を棒引きにして、十五銀行の同汽船會社に對する債權を間接に生かし、或は、日本銀行特別融資補償法に特別の手加減を加へる方法を講ぜしむる等々の手段に出つて、再び、十五銀行單獨開業可能の由が、最近新聞に傳へられるに至つた。所謂第二次「鄕案」及び「日銀の承諾案」なるものによると、その筋書の骨子をなすものは、特別融資補償法によつて、特に日本銀行から七千五百萬圓を低利で貸與し、外に日銀が已に十五銀行に貸出してゐる中で、擔保力なき貸出二千四百萬圓は無利子十ヶ年賦償還のことにし、この計約一億圓の注射を原動力にして、乃至はそれを喰物にして、株主に對しては、拂込資本の五分ノ四と、未拂込壹千萬圓徴收の負擔を荷はすだけに止める。即ち、この結果株主は五千萬圓(全資本金の半額)の負擔を免除せられる仕組である。又、預金者はどうなるかと云へば、千圓以下の預金者は全額の拂戻を受け、千圓以上のものは、其の二割を即時拂に、四割を無利子十年賦に、四割を二分利十年据置後一時拂ひを受ける筋書きである。云ふまでもなく、預金者、株主ともに大なる利益を受けるわけだ。

以上の中、日本銀行が特に貸出す七千五百萬圓(十五銀行にその償還が出來ない時は日本銀行が損をするのではなくて、國民が尻拭ひさせられるのだと云ふことを忘れてはならぬ)の裏に、多大の無理が隠され、貴族院勢力の飛躍が織込まれてあるべきや云ふまでもない。之を具體的に云へば、それだけの巨額を貸與する資產なきにも係らず、それだけの資產があるかの如く糊塗せられてゐるのだ。顧るに、他の休業銀行の整理に方つては、日本銀行は少からぬ非難を犯して、その資產の評價を嚴しく、ために、之を引繼ぐ筈の昭和銀行は、プレミアムがつくと云ふ有様だ。それだけ、一般の預金者や株主は嚴格な犧牲を強いられてゐる。然るに、十五銀行の株主や預金者は、その大部分が「華族」なるの故に、上陳の如き特別待遇を受けてゐるのだ。云ふまでもなく、一般の預金者よりも華族のそれの方が餘裕もあり、その犧牲にも耐え得る力を以てゐる。然るに、政府のやり方は、一般預金者の保護を薄くして、却つて、華族の預金者を厚く保護せんとしてゐるのだ。國民から絞取つた七億圓の金は、貴族院の政治勢力の跋扈のために、斯の如く、一部、、、、、、、、、、やさすために、、せられてゐるのだ！しかも、斯くの如くにして、漸く一本立ちを約束せられたる十五銀行は、現在の鄕案の如き虫の良い案なる限り、將來、銀行としての社會機能を果し得る見込なく、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、外なしと見られてゐる。蓋し、斯の如き、、、、、、、、、、、、、、、、するものは極めて限らるべしと考へられるからである。再生しようと云ふには、世人をして安心せしむるだけの、徹底的整理をやらなくては駄目だ。

五

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

以上代表的に掲げた事實によつて容易に推想せられ得るであらうやうに、國民から絞取られた九億七百萬圓の千兩箱は、我が産業の回復のために活用せられてゐると云ふよりも、寧ろ、專ら、資本家階級の損失を輕減し、彼れ等の財産を保護するために、「活用せられてゐる。たま〳〵、斯樣にして「資本家」の私腹を肥やさすことが、間接に、いくらかの程度に於て、産業を回復せしめる作用をなすと云ふことはあるけれども……。

しかし、九億七百萬圓の千兩箱が、結局、斯樣な使途に使はれるであらうと云ふことは、斯樣な案を通過さした當初から、已に豫定せられたことであつた。蓋し、若しも、眞に、産業の回復のために所謂財界の癌を除去しようとするならば、他に採るべきより良い手段があつたこと已述の通りであるからだ。だが、それにしても、國民の膏血から成る九億七百萬圓だ。いま少し、眞の産業回復のために、之を活用する方法は幾多もある。だが、我が資本家階級や既成政黨のなし得る所は、要するに、以上の如く、資本家の私腹を肥やさすために、之を湯水の多く濫用する以上のことは遂になし得なかつたのである。

尤も、こゝに、國民の膏血九億七百萬圓を絞取つて資本家に與へたと申しても、その結果が、國民の苦痛として現に國民に感ぜられてゐるかと云ふに、未だそれはホンのその尖端しか感ぜられてゐない。だが、この苦痛は、今後休業銀行の整理が進捗するに從ひ、而して我が財界が金融恐慌後の動搖期を脱するに從ひ、いよ〳〵その壓迫を國民の上に及ほして來るであらう。その壓迫の表現の第一形式は、公債の増加による利子負擔の増加だ。第二は通貨の膨脹による物價騰貴のため、國民全般の生活が苦しくなつて、それだけ資本家を助けることだ。第一の壓迫がいよ〳〵その全量を現はすには十年後を待たねばならぬ。だが、第二の壓迫は恐らく、來年か再來年初め頃までには、可なりの重量を現はして來るであらう。現に、日本銀行の通貨膨脹は潛在的には已に五六億圓を算し、十五銀行其他の休業銀行の整理の進行するにつれ、更に二億圓内外を増加するの傾勢に在る。而して、この日本銀行が已にインフレーションをやつた力は、遠からずその作用を發揮するに違ひない。

この時に於て、資本家階級は「財界の景氣の回復」を謳歌するであらう。蓋し、物價が上がれば資本家は儲かるのが資本主義の常法だから……。だが、この景氣は、要するに、インフレーションと云ふアルコール中毒の空景氣に過ぎない。その醉のさめるに從ひ、更に深刻なる「不景氣」の來襲し、國民生活難の壓迫は、今日よりも更に加重する日の遠からず來襲することを覺悟せねばならぬ。その時に於て、いま、既成政黨や資本家の採れる政策、即ち、國民の膏血九億七百萬圓の金を以て、財界の景氣を煽る燃料と化せんとするが如き政策は、その反動の全量を發現し來り、我が經濟は更に〳〵強大なる生活難に見舞はれるであらう。然り、いま、我が既成政黨及び資本家階級の辿りつゝある「財界回復政策」は、要するに、國民の膏血九億七百萬圓の美酒に芳醉して、破滅の噴火口上に亂舞しつゝあるものである。否、その方向に、いま、彼等は徒らに突進しつゝあるのだ！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

經濟危機は克服されたか？

猪俣津南雄

最近の「東洋經濟新報」は書いてゐる―

「大恐慌後における我が財界の經過は、大體順調といへる。物價にも株價にも、恐れられた程の急暴落は來らず、危機通貨の回收は極めて良好にして、金融緩漫金利低落は豫想通り實現した。この際、貿易の萎縮は止むを得ぬ所として、併しながら出超（輸出？）は寧ろ期待を越え、入超尻は近年になき少額に減少した。而してたとへ資金の偏在と、有力市銀極度の警戒とに基く狀態であるとしても、市場金利が、コール六、七厘から一錢、擔保附手形が一錢五厘で割引かれ、社債に六分パーを實現せることは、刮目するに足る事實である。」

かうした事實と見解とは、「財界」に關心をもつ人々の間に早くも景氣の好轉を豫想せしむるに至つた。まことに無理もないことである。だが、無產階級の立場から、日本資本主義の發展過程を觀察する吾々にとつては問題は單に、景氣が直るか、直らないかにあつてはならない。問題は、景氣の變化が、プロレタリア及びセミ・プロレタリア大衆を、如何なる事態におとしいれるかにある。進んでは、此の大衆の戰線を、景氣の變化に應じて如何に展開せしむべきかにある。だが、吾々は暫く、ブルジョア的觀察者の水準に身を置いて、吾々の考察を進めて見よう。それはやがて問題の相違と、見解の相違とを明かならしめる所以である。

一　樂觀論の典型

景氣轉換のブルジョア的豫想者のあひだにも、謂はゞ悲觀論者があり、樂觀論者がある。例へば、本誌前月號にあらはれた青木得三氏の論說の如きは、想ふに樂觀論の典型であらうか。

青木氏は、「トレード・サイクルの理法」の信者なることを告白されただけあつて、その樂觀論の根據もまたトレード・サイクル論に基いてゐる。曰く、「物價が低落しないでは、景氣恢復は覺束ないといふのが私の確信であつた。然るに其の物價低落も終に來た」曰く、「私は現今の我國の物價が明治三十三年十月を基本として其の二倍に達してゐることは、我國力の發展、人口の増加、國民生活の向上等に照して決して過當ではないと考へる。」また、「私は我國の物價が低落の極端に近づいたことを考へるのである。」そして、それは「今日の財界(が)不景氣の極端に到達したことを」意味し、かやうに「我が財界が不景氣の極

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

端に到達すれば、必ず轉廻するものと信ずる。』――まことに、單純にして明白ではないか？

　しかしながら、悲觀論者は、青木氏が、日本現在の物價を、明治三十三年の日本の物價との比較を示すに止まり、戰前より現時に至る英米佛の物價カーブと我國のそれとの比較を避けてゐることを指摘するであらう。更にまた、氏が、我國の「物價」と「財界」の景氣の關係にとつて最も特殊の重要性ある金輸出禁止の問題には一言も觸れてゐないことを指摘するであらう。周知の如く、戰前を基準とする我國の物價指數は、英米佛のそれに比して尙ほかなりの高位にあり、それが主として金輸出禁止に基づいてゐること、――それを無視して景氣の好轉を論斷することは出來ない筈である『有力市銀の程度の警戒』といふ事實もまた、もちろん、金解禁の問題と密接に結びついてゐる。

二　希望か、事實か？

　金融緩漫の事實もまた、青木氏にあつては、劣らず無雜作に樂觀論の根據となされてゐる。曰く、『一部の論者は、現在の金融緩漫は變態の金融緩漫であつて、決して喜ぶべき現象でない』を唱へるが、しかし『第一流銀行が遊資の多きに苦しんでゐることは、やがて此等の銀行が確實なる新事業に投資する前提であると信ずる。』では、そうした新事業はあるか？　青木氏は敬虔な期待を述べられる、――『各種の教育機關は年々新しき卒業生を極めて多數に出しつゝある。私はその中から未だ何等の創痍を受けざる大志を抱いて細心なる新實業家の出づることを期待する。』吾々は此の「極めて多數の」白面の「卒業生」が、サラリーマンから出發して一かどの、實業家となる迄では――我國の資本主義が青木氏の所謂隱れたる前提の如く、順風に帆をあげて發展するとしても――氏のトレード・サイクルは一週し、二週し、三週するのではないかと恐れる。しかし、氏の推論はテキパキと進む――『新時代の傾向を察し得る新たなる實業家に依つて計畫せらるべき新事業は確に日本に在る。過去の財界變動の爲めに倒壞した企業に代るべき同種の企業のみを數へても相當な數には上るのである。』

　だが、悲觀論者は、玆でもまた、金融緩漫の變態性と、金解禁問題の不安とが、如何に有らゆる新事業から確實性を奪つてゐるかを指摘するであらう。青木氏にあつては、正に解決されねばならぬ問題が、既に解決されたものとなつてゐる。樂觀の樂觀たる所以か？

　最後の樂觀材料は、入超減退である。氏は曰ふ、『抑々景氣不景氣と輸出入超過とは如何なる關係を有するか。いふ迄もなく、輸出超過は好景氣の一原因、輸入超過は不景氣の原因である。』まことにその通りでもあらう。しかし、氏の指摘する輸入超過の減退は、もちろん、輸出超過そのものではない。本年度において、輸入の著しき減少と、輸出の僅少の增加とより生じた變態的な入超減退が、果して「好景氣の原因」として輸出超過にまで轉じ得るか否か、――それこそが問題なのではなかつたか？　かくして、爭點はまたも物價と、金解禁に逆戻りする。

　之を要するに、青木氏の樂觀論は、悲觀せんが爲めの樂觀論に過ぎない。宜なり、氏は論を結ぶに當つて言はれる。『大なる悲觀は大なる樂觀と一致する』と。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三　悲觀的樂觀論

だが、此の藤村操氏の「巖頭の感」の一句を憶ひ浮べることによつては、如何にしても採算點を見出し兼ねるであらう多數の悲觀論者は、我國の物價が尙ほ金輸出禁止によつて人爲的に高位を保持してゐるといふ事實と共に、靑木氏が殆んど問題にしなかつたところの「財界の整理」が出來てゐないといふ事實を最も強調する。靑木氏も認めてゐる如く、「我國の企業家には、本年春破綻した關西地方の某大商店の如く、內部に絕大の資產の缺陷を包容して居つて、尙表面を糊塗してゐるものが未だ少くない。而して其の企業家の中には相當大規模をなしてゐるものがある」といふことが、如何に「一流銀行」をして極度の警戒をなさしめてゐるかは、今や公然の秘密である。更にまた「中外財界」は、「現に一部の事業會社は、下半期の決算に於て、配當率を維持し得るやうな勘定面を合せるにしても、肝腎の配當金を何うして調達するかに就て、今から惱んでゐると云ふではないか」と言ひ、「いかに金融が緩漫でも、日銀が利下げを斷行しても、事業界は、その固定資本に比例する生產の活動と所得の增進とに惠まれない限り、到底景氣づくを得ないからである」と論じてゐる。

金融緩漫金利安の變態的性質と、物價運動の前途に橫はる金解禁の難問題と、整理未濟の大企業の殘存とを承認する之等の悲觀論者は、いま整理の促進に一切の希望をつないでゐる。論者等はひそかに、整理の促進は、一切の暗雲を一掃するであらうことを信じ、また整理の促進に可能であると信じてゐる。かくて、論者等の悲觀論は、結局、ブルジョア的悲觀論であり、落ちつく所は樂觀論である。

だが、希望は希望、事實は事實でなかつたか？　信ずる者か奇蹟を見たのは昔のことである。

四　經濟危機は克服されたか？

「財界」の前途に對するブルジョア的觀察者の見解が、悲觀論にあつても結局樂觀論に落ちつくのは、整理の困難の過少評價に基づくと同時に、市場の問題、購買力の問題を問題としないからである。それはクサイものとしてそつと蓋をしてある。だが、吾々は、我國における「事業界整理」の特殊の困難を認識すると同時に、戰後の日本資本主義にとつての市場の問題における特殊の困難をも認識する。從つて吾々は、一切の「樂觀材料」にも拘らず、金融恐慌後の六ヶ月間にわたるブルジョア的努力が旣に經濟危機を克服し得たものと信ずることは出來ない。

中小商工業者の利益に特別の關心を有する東洋經濟新報はかう書いてゐる——『井上日銀總裁は、休銀整理を通して親しく中小商工業者の金融の實相を知るの機會に接したが、隨分危險の多いものゝ如く、恐慌及其後の金融杜絕の結果、彼等は實際何うなつてゐるだらうかといふてゐる。』また『銀行のこの警戒が續く限り、中小の商工業方面は今後尙當分火の消えた景況を續けるものと見る外なからう。』そして、『中小の商工業者に至つては、今尙ほ困難の底にもがいてゐる。思ふに今後こゝに、一大整理が行はれて、ほゞ其の完成を見た曉でなければ財界に眞の立直りの期は來り得ぬのではなからうか』。かくして、

先づ、廣大な小ブルジョア層を含める中小商工業者の購買力が極度に低下してゐることは明かである。次には、購買力の減退において決して中小工業にひけをとらぬ農村大衆がある。都市勞働者の賃銀は、統計の數字上は低下の性質を示してはゐないが、失業は增加しつゝある。然らば、我彼等の購買力が增加しつゝあると論じ得る者はあるまい。國人口の大多數を占むる之等の諸層の大衆の購買力は、如何にして回復されるであらうか？

樂觀論者は、大銀行に集中された資金が確實な新事業に投ぜられることによつて好景氣への運動が開始されると說く。だが、現狀はまさに購買力に對し、市場に對する生産能力の過剩、設備、資本の過剩に特徴づけられてゐるのである。新事業の設立は、若干の購買力をつくり出す。しかし、ヨリ以上に生産能力をつくり出す。そうである限り、新資本の放下は、過剩資本に累加するに過剩資本をもつてするのみであらう。そしてそれが正に、九年恐慌より本春の金融恐慌に至るまでの我國の資本蓄積過程の一般的特質なのであつた。

五　トレード・サイクルの變質

好景氣が頂點に達して恐慌となり、その後の不景氣が極度まで進むと自づからまた好景氣に轉ずる、といふトレード・サイクルは、資本主義經濟の開花期を代表する産業資本主義の自由競爭時代の理法であり、現象であつた。あの時代には、（一）生産設備、生産能力が大衆の購買力（市場の力）を超えて增加しても其程度は著大でなく、（二）資本の集中が進まずして、企業の規模が尙ほ狹少であつたから恐慌後の整理が容易であり、（三）資金需要の萎縮に基づく金融緩慢金利安の刺激の下に擴張され新設される諸事業は、增大した生産能力に照應する新しき市場を見出すのに容易であつた。何故なら、當時の資本主義はまだ、一方では新しき生産技術の競爭的採用によつて絕えず製品原價を引下げることが出來、他方では國內の農業を發展せしめることにより、また手工業生産を工場生産に、小規模生産を大規模生産に引上げることにより、（農家及び小市民の一部を絕えずプロレタリア化しつゝも）、農民及び小ブルジョア層全體としての購買力をば、增加せる工業生産力に追隨せしめることが比較的容易であつたからである。しかるに現代にあつては、トレード・サイクルは二つの理由からもはや古典的な形態をもつて現はれることが出來ない。理由の一は、資本主義經濟が既に、その凋落期を代表する金融資本主義の獨占時代に入込んだからである。一國の資本主義が自由競爭の段階から獨占の段階に進入すれば、國內市場の開拓は既に行詰つてゐるのである。農業の發展は停滯し、殘存の手工業や小規模生産は發展の見込なき産業部門として多くは大企業に從屬し依存するものとなる。かくして、農民及び小ブルジョア層全體としての購買力は、增加はしても其の程度は、恐慌後の不景氣が生み出した金融緩慢金利安の刺激の下に事業の擴張新設の爲めに投ぜらるべき資本によつて增大する生産能力には到底追隨することが出來ない。加ふるに、代表的な大工業の製品の價格は、新技術の競爭的利用によつて低下する代りに、カルテルやトラストや合同と共に生ずる獨占によつて却つて價値以上に釣り上げられる。更にまた今や、資本の集中は進み、企業の規模は尨大となり、固定資本の割合が大き

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く、恐慌後の整理は至難である。しかも、恐慌後に整理を要する資本の額は著大である。けだし、生産設備、生産能力が、大衆の購買力（市場の力）を超えて増加する程度は、前代のそれと比すべくもないから。

では、獨占時代の資本主義は、如何にして發展し得たか？ 曰く、海外への膨脹、就中資本の放下域を植民地及び半植民地國に求めることによつて。だが、しかし、帝國主義的侵略によつての發展は、諸國の間に均衡を缺き、各國の生産力と、それに對する市場との矛盾は却つて激化する。かくて、此の矛盾に打克つ爲めの帝國主義戰爭は必然となり、トレード・サイクルの規則正しき繰返しもまた必然的に不可能となつた。一九一三年—一七年の世界大戰は、帝國主義戰爭の最も典型的なものであり、此の戰爭と共に、世界の資本主義が全體として沒落期に入込んだことは、私の屢々論證したところである（拙著「帝國主義」參照）かくしてまた、トレード・サイクルの崩壞は必然であり、私がさきに、二つの理由によつてと言つたその一つは即ち、此の事實を指したものに外ならない。戰爭以來、各國の資本主義經濟のトレード・サイクルは全く亂調子となり、恐慌の頻發することは周知のことである。ひとり米國のみが、急速にもまた多大なる資本輸出によつて今日まで恐慌の再發を避け得た。

英、佛、獨におけるトレード・サイクルが亂調子を呈する主因としては、（一）戰爭による生産力の破壞、（二）それを回復せんとする資本家的努力の過程における社會的政治的不安定、（三）戰前に形成された資本主義世界體系の崩壞（例へば爲替相場の亂調子にあらはれてゐる）（四）就中、植民地及び半植民地諸國の獨立乃至は革命的反抗、（五）ロシアにおける社會主義國家の發展、（六）各國の經濟的發展における著しき不均衡、等をあげることが出來よう。これらすべては、國際市場を深き不安におとし入れねばならない。

六 我國における恐慌の克服は何故に至難であるか？

日本の資本主義は、世界大戰以來、沒落期世界資本主義の連鎖の一環となると同時に、大戰時代における飛躍的發展によつて獨占の段階に突入した。それは、恐慌を克服して發展する爲めに、——言ひ換れば景氣を回復して「順調な」發達を續ける爲めに、海外への膨脹が瞬的な必要となつて來た恰度その時に、海外への膨脹が極めて困難となつて來たことを意味した。その困難はわけても、資本主義沒落期の最も顯著な現はれの一つとして隣邦支那に反帝國主義の革命運動が勃發し、展開しつゝあることに見られる。

我國の資本主義は、もはや以前とは質を異にする資本主義となつた。今度の不景氣の時代に限つて、代表的な事業部門が悉く協定による生産制限を實行してゐるではないか。以前にはそういふことはなかつた。各事業部門に屬する企業の數が減り、現存の企業はみな大きいから、以前ならば生産能力過剩不景氣の時代に倒れるべきものも容易に倒れない、その代りに協定して各自の生産高を制限し、市價を維持して利潤をひねり出してゐる。また、今度の不景氣時代に限つて、莫大な額に上つた銀行の「固定貸」が問題になつたではないか。そして未曾有の金融恐慌は、大銀行と中小銀行との力の差を決定的なものにしてしまつたではないか。資本の集中が、獨占の成立を必然ならしめる程度にまで進めば、銀行資本と産業資本とは融合して金融資本となり、互

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大銀行の優越が壓倒的なものとなつて金融寡頭支配が成立つ。更にまた、我國の産業の發展は行詰つてゐないであらうか？　モラトリアム以來の金融梗塞の下に今徹底的に「整理」されつゝある中小經營の中で生き殘るものゝ多くは、或は直接に、或は銀行を通じ、或は商業關係により獨占的な大資本に從屬し依存するものとならぬであらうか。

かゝる事態下において、現時の金融緩漫に刺激されて起るであらうと期待される新事業が、如何にして大衆の購買力の增加に基礎づけられた限界ある市場を見出し得るかを吾々は知らない。市場は海外に見出され、つくり出されなければならぬ。また、事實において我國の諸事業は、「海外販路の概して不振なるに拘らず、外國に賣らぬと難局の凌駕が出來ぬから、無理にも輸出に活路を求めつゝある」ではないか。（東洋經濟新報一二七一號八頁）「財界危機の克服と景氣の好轉は、ひとへに、海外における市場獲得の成否にかゝる。」だが、何故に「海外販路は不振」なのであるか？　吾々はそこに沒落期世界資本主義のあらゆる樣相を見る。「難局凌駕」の死活的必要は、帝國主義政策の強行を命じてゐる。トレード・サイクル一點張りの悲觀論は、歷史の車輪を二三十年前に逆轉させる時にのみ成立つであらう。

七　唯一の血路

我國の資本主義を市場難に陷らしめた原因と同じ二つの原因によつて整理の困難が異常に大なるものとなつてる事情については私は、以前の論稿に詳述して置いたから茲に說かない。（拙著、「現代日本ブルジヨアジーの政治的地位」に收めたる「我國資本主義の安定の型、沒落の型」を參照）

本位の金融寡頭支配以來、過剩資本の大たる部分が切捨されたことは疑ひない。しかしながら、多數の企業は尙ほ採算點を回復することが出來ず、大資本の或者は危殆に瀕し、他の者はその沒落を促進して自己の獨占的地位を強めようとしてゐる。だが、一般に、整理を徹底せしめることは種々なる理由によつて至難である。同時に一方、五億六千萬圓の非常貸出は、コールの返戾により、また預金の移動を通じて、今や巨大な資金を二三の最大銀行に集中せしめた。かくして生じた變態的な金融緩慢がもし、事業投資を促進するならば、恰もかの震災手形政策その他に基因したインフレーションが架空な資本の增設を促したと同じやうに、もう一度過剩資本を累加せしめるところの「中間景氣」を實現させるばかりであらう。かゝる景氣は、幾ばくもなく恐慌に爆發するであらうことは覩易い。吾々は、我國の資本主義が尙ほ金解禁の難關を控へてゐることを忘れてはならない。

これまで、我國の資本主義はしばしば意外の僥倖を拾つた。一つの可能性としてはもちろん、一切の有利な條件の有利な結びつきになつて、實質的な海外市場が突如として我國の資本の前に現はれるといつた場合も考へ得られる。かゝる僥倖の出現は、暫くのあひだ、我國の資本にとつての殆んどすべての問題を解決するであらう。が、しかし、そうしたことは單なる可能性に止まり、今のところまだ蓋然性らしい何物さへもない。世界資本主義は最近に至つて更に相對的安定への一歩を進めたことは事實である。だが、それは、日本の資本にとつては、暫く影をひそめてゐた古き強敵の再現をも意味する。

我國の資本主義を安定せしめんとする努力は、必然に、帝國主義的進出となつて現はれる。植民地の「經營」と半植民地國への喰ひ込み

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

となつて現はれる。「滿蒙積極政策」は、一政友會の政策ではない。一切の對支積極政策は、我國の資本主義が命ずる政策である。此の點において、支那革命の發展が、資本主義日本にとつて有利な方向に轉じ來たれることは最も注目に價ひする。帝國主義的進出が、國際的對立を尖銳化しつゝ、一國の資本主義を如何なる危機に導き入れるかは、多くを語らずとも明かであらう。

いづれにせよ、我が無產階級は、モラトリアム以來の我がブルジョアジーの努力が、「財界」危機を克服し得たと認むべき理由をもたない。しからば、今後も尙ほいよ〳〵强烈となり行くであらうところの同じ努力は、我が無產階級及び被壓迫大衆に對して如何なる作用をなすであらうか？

先づ、資本を「整理」し、經營を「合理化」して生產費を切下げんとする努力は、一方では解散、減資、合同、工場整理等の遂行となつて多數の勞働者を失業せしめ、他方では賃銀の切下げ若しくは同一賃銀に對する勞働時間の延長や勞働强度の激化を來たさしめるであらう。此の傾向は、我國の資本が永いあひだ勞力の安さによつて高率の利潤をあげ來たり技術上の改善を怠れることとの故に、今次の「合理化」の主要方向を技術の方面に求めるための準備がない所からして特に顯著に現はれずにはをらない。次には、市場難と整理難とが現實なる限り、操業短縮その他の方法による生產制限によつて、失業者乃至半失業者を出すか若しくは實收賃銀を減少せしめるであらう。同時に賣價協定、保護關税その他によつて高められた獨占的價格は、直接間接、消費者としての大衆の所得を實質的に低下せしむるであらう。第三には、公課の名の下に大衆より取り立てる政府の收入の大なる部分は、失業者救濟その他一切の大衆の利益のために使用される代りに、却つて或は失業者を生ぜしめ、或は預金を失はしめ、或は消費者の犠牲に於て儲けるところの資本家わけても大資本家を救濟し、保護し、補助する爲めに費されるであらう。此の傾向は、我國のブルジョア政府が保護主義を傳統とする所からして特に顯著であるであらう。最後に、帝國主義的進出は、ブルジョアジーの利益のために、最も苛酷なる負擔を被壓迫大衆に課するであらう。そして大衆の反抗を抑壓すべく×××××××××××××××。

しからば、無產階級はこれら一切に對して如何に鬪爭すべきであるか、――その問題は稿を改めて論ぜねばならない。

八　三つの見解

だが、更に一言を加へて置きたい。――以上に展開したところの、我國の資本主義經濟の現狀及び前途に關する見解は、三つの見解として對立する。その一は、世界資本主義が全體として既に沒落期にあること、我國の資本主義が既に獨占の階段に入れることとの認識を缺き、單純なるトレード・サイクルの觀點から、物價、金利、貿易の趨勢を觀察して、景氣の前途を論定したる見解である。それは、樂觀的なると悲觀的なるとを問はず、ブルジョア的限界と視野の範圍を出でないブルジョア的見解である。

その二は、我が國の資本主義は既に根本的に「行詰つた」と看へ、その「一原因」を、日本に對する新興支那の資本主義的競爭や我國における「資源の缺乏」に歸し、それが爲めに我が資本主義は自働的「崩壞」の、我がブルジョアジーは自滅の過程にあるものとなし、從つて我が無

商階級は、ブルジョアジーと階級鬪爭を敢行したくとも、若干の「對策」を講ずることによつて「行詰り」を一打開し一直ちに社會主義社會を實現し得るものとする見解である。これは、改良主義的な小ブルジョアの願望と視野の範圍を出でざる日和見主義者的見解の一變種に過ぎない。かゝる見解は近來、一つの發展を遂げ、我國の資本主義が獨占の段階に入込んだことを否定し、且つ日露戰爭以來の我國の帝國主義政策が、論者の謂はゆる「行詰り」の原因―實は資本主義的矛盾の激化）の故にいよ〳〵强烈化せねばならぬ今において、それが帝國主義政策であることを否定するに至つた。そして、日本資本主義の發展の特定段階の故に增大した過剩人口を、「資本主義とは無關係（！）な農村過剩人口」なるものによつて說明し、日本の無產階級は此の「人口問題」を解決する爲めに英米佛と戰爭すべきであるとなすに至つた。改良主義から排外主義への發展である。しかるにまた最近には、小ブルジョア意識を脫し切らないマルキスト志望者の或者は、此の面妖な農村過剩人口論のコップ・ウェッブにひつかゝり、「人口問題」の欺瞞を徹底的に見拔く代りに、「人口問題」の「現實」性を認めんとするに至つたやうである。日和見主義には常に社會的基礎がある。此の點は後に論ずる機會をもつであらう。

第三の見解は、我國の資本主義が現に「强烈なる沒落過程」にあるとなすものである。これは、「資本主義の沒落」なる概念に盲目なるか現實を分析究明する能力を缺くか、さもなければ不知不識、自己の願望を事實のうちへ讀み込んでゐるものに過ぎない。かゝる讀み込みは、最も正しき、だが最も困難なる鬪爭を回避して最小抵抗線に向ひつゝある自己を、自己に向つて辯解し得んがために、鬪爭の相手方を過當に弱く評價せんとする心理的過程にしば〳〵起る。現在は、相手方の弱さを强調して氣勢をあげやうとする心理の產物である。その場合にはそれは、浪曼的極左翼の見解の一典型に過ぎない。

吾々は、資本主義日本が至難なる恐慌克服過程にあり、深大なる經濟的及び政治的矛盾を内包し、矛盾は激化しつゝあることを認める。そして、矛盾克服のブルジョア的努力は、强烈な帝國主義的進出を必然ならしめ、しかもその進出こそが、、、、、、を招來するであらうことを認める。從つて吾々は、我が無產階級の鬪爭が何に向つて集注されねばならぬかを知つてをり、正しき目標に向けられた果敢なる鬪爭は極めて有利に展開すべきことを知つてゐる。だが、吾々は上記の二つの見解において信じられるように、それほど我國の資本主義が脆弱であることを知らない。それに内包される現在の諸矛盾は、無產階級の力が現在の程度である限り、資本主義的發展に必然なる程度には克服され得る矛盾であり、その程度の克服は現に行はれつゝあるが故に、不景氣にも拘らずかなりの速度における資本蓄積の進行がある。吾々は、世界資本主義が全體として沒落過程にあることを最も明確に認識する。だから吾々は、その過程が、主として、各國の發展の不均衡と、從つて生ずる矛盾の激化、對立の尖銳化に現はれることを知つてをり、現在の我が日本は、下降ではなく昂騰によつて矛盾を激化し、對立の尖銳化する一要因をなしてゐることを知つてゐる。例へば一九一五年を基準とし、日本を英國と比較せよ、國内的にも國際的にも、日本資本主義の地位は上つてをり、英國のそれは下つてをる。その傾向は、特に東洋における帝國主義的地位について顯著である。

（一九二七・一一・五）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時評

蔣介石は復活するか？

山川均

蔣介石は復活するだらうか？

私はいま、マッチをすつて、一本の卷烟草をくゆらせてゐる。この卷烟草は、復活するだらうか？　たしかに復活する。それは紙くさい煙と灰殼とになつて、復活する。いまでこそ失脚の人ではあるが、かつては國民革命運動の中心人物として輝やいてゐたわが蔣將軍もその通りに、私は必ず復活するだらうと思ふ。

蔣介石は入京と同時に、『謹んで日本國民に告ぐ』るステートメントを發表した。このステートメントは『日本國民』に呼びかけたものである。しかしその內容は、日本の帝國主義的外交家や軍閥が傾聽するに適したものであつた。蔣介石はこのステートメントの中で、一般的には『列國の政府が能く我が黨の主張を理解し、之に妨害を加ふるが如きことなくんば、革命運動は決して今日の如く停頓の狀を呈せず、』或は既に成功を告げたるやも知れない』と云ひ、時にわが國については、『一時の利害のために動かされず、國民の擧つて痛憤措かざる萬惡の軍閥を利用して之を阻碍するが如きことなきは、卽ち我が國民革命運動に莫大なる助力たると同時に、又た兩國親善の根本的要圖たることを知らねばならぬ』と敎へてゐる』。

このステートメントを讀んで、蔣介石はけしからぬ、國民革命運動失敗の責任を、列國の干涉に轉嫁しようとするのは不屆きである、といきり立つた人もある。なるほど蔣介石のステートメントは、この點ではずいぶん手酷びしい無遠慮な忠告にはちがいない。しかしこの忠告を無遠慮な言ひ分として多少の感觸を傷づけられた人々は、少なくともこの忠告によつて、自分がたしなめられる覺えがあつた人々であるにちがいない。

支那の國民革命運動が、帝國主義列國の公然或は陰險の干涉によつて妨げられたことは、疑ひの餘地なき事實であつた。また『一時の利

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

害のために動かされ、國民の擧つて指摘措かざる軍閥な利用」したもののゝあることも、爭ふことのできない事實であつて、これは蔣介石の聲明によつて、尊嚴を傷づけられたと感ずる人々のあることが、何よりもよくこれを證據だてゝゐる。けれども支那の國民革命運動は、帝國主義強國の干渉のためにのみ、今日、停頓の狀を呈するにいたつたかの如く考へるのは、誤つてゐる。帝國主義強國の干渉が、漸やく露骨になつて來た瞬間に、蔣介石自らが、この帝國主義的勢力と徹底的に抗爭する決意を失つてゐたことが、革命運動の「停頓」は外からの妨害の結果であると同時に、內からの崩壞の結果であることを、最もよく物語つてゐるのである。

「國民革命は、民族歷史上からいふも、革命精神の上からいふも、また世界思想の上よりいふも、必ず完成し得るものにして、如何なる強權をもつてするも、永久に之を抑除阻止し得るものではない。」蔣介石は同じステートメントのうちに、かう述べてゐる。彼は國民革命を歷史的な必然として、その完成に、大なる信念を持つてゐるかの如くに見える。蔣介石はまた、他の機會における談話では、國民革命運動は今日停頓してゐるかの如くであるが、その間にも、着々として進行してゐるのだと語つてゐる。

この見解は、或る意味では固より正しいが、或る意味では誤つてゐる。誰れが國民革命を完成するか？　そして今日以後において、國民革命を遂行するものは、如何なる勢力であるか？　といふことを別問題とすれば、支那の國民革命は歷史の必然であつて、帝國主義列強のいかなる強權をもつてするも、これを永久に阻止抑壓することのできないものである。

これに反して今日の國民黨、ないしは蔣介石の復辟を迎へた國民黨の指導する今日の謂ゆる（今日は、もはや「謂ゆる」といふ形容詞をつけなければならぬ）國民革命運動なるものが、支那における國民革命を完成する——ことに帝國主義列強のいかなる強權とも抗爭して、必ずこれを完成する——といふ意味に解するなら、それが純眞な信念にもとづいてゐればゐるほど、それだけ大きな幻影だといはなければならぬ。歷史の必然は、何ら左樣のことを、わが蔣介石に約束はしなかつたからである。

わが蔣介石とその率ゐる運動とが、眞實に國民革命の完成を目的とするところの、眞實の國民革命運動であつたことに、私は少しの疑をもさしはさまぬ。しかしながら或る一つの勢力が、いかなる條件の下にも、同じ力として存續するものではない。或る力は、或る一定の條件の下においてのみ左樣な力であつて、他の條件の下においては、おのづから他の力に變化する。それはしばしば、反對の作用をする力に變化することさへも珍らしくない。いま現に反動的な役割をしてゐる勢力も、あらゆる條件の下において、同じように、また同じ程度において、反動的な勢力として止まるものではない。それは或る條件の下では、進步的役割をすることさへもある。いはゆる「萬惡の軍閥」的要素さへも、蔣介石の統率の下に國民革命軍の一翼となつて、「萬善」な役割をしたではないか。ちようどその通りに、國民革命の成就と達成とを目的として起こつた國民革命運動は、一度び「國民革命運動」と刻印せられたから、いかなる形勢の變化の下においても、同じように

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國民革命を達成し、あるひはこれを促進しつゝある運動だと考へるのは、最も正直な、しかしながら最も欺くことの大なる見解なのである。それは一度び十八カラットの刻印を受けた金の容れ物は、いかなる天候の日にも十八カラットの金分を含んでゐる、といふようなわけのものではないのである。

、、は階級の專業である。或る階級は、或る一定の社會的關係においてのみその他の階級勢力と一定の關係においてのみ、、、の勢力である。酒石酸水は、重曹との關係において沸騰する。しかし一度び泡立つてしまへば、この炭酸瓦斯の散發してしまつた水は、再び重曹との關係においては泡立たぬ。いふまでもなく、そのうちに含まれてゐた革命的性質が中和せられてしまつたからである。今日、國民黨とその謂ゆる國民革命運動とが代表してゐる社會階級と社會勢力とは、もはや中和せられた革命の勢力である。これらの社會勢力は、或る社會的形勢との關係において（たとへば國民革命軍中の軍閥的要素は、他の軍閥的要素との勢力均衡狀態との關係において）は、革命的な性質をもち、革命的な役割をした。けれども、この革命的性質は、今では殆んど中和し盡されてゐる。それは容れ物に貼り附けられたレッテルのために依然として炭酸水と呼ばれてゐる。けれどもそれは炭酸瓦斯を發散し終つたあとの炭酸水なのである。

蔣介石の率ゐる國民革命運動が、漸次に革命的性質を中和せられていつた徑路は、その運動の發展のおの〳〵の段階に、明白に現はれてゐた。帝國主義強國の干渉と誘惑とに對する屈伏、勞働者と農民との武裝の解除、武漢南京兩勢力への分裂、共產黨の排除を條件とする國民黨左派合同の實現（即ち農民勞働者の社會階級を代表する共產黨との決定的の分離）、反北方的要素の大同團結と北伐再開の步揃ひ、南京新政府の反帝國主義と北伐續行の新宣言――國民革命運動がかうして再び起ち上がらうとした時に、ちようどその腑が拔けてゐたのであつた。

今日の支那には、もはや軍閥的勢力と國民革命運動とが對立してゐるのではなくて（蔣介石は依然として、この空ビンのレッテルの文字を暗誦してゐるが、）いま南北二大勢力が對立してゐるのでさへもなくて、かような形勢が崩潰し去つた跡には、たゞ軍閥的諸勢力の抗爭對峙が殘つてゐる。國民革命運動がその革命的性質を中和し盡されたこと、そして、軍閥的勢力と國民革命運動との對峙の形勢が、軍閥的諸勢力の抗爭に崩潰轉落したことを正式に告げ知らせたのが、わが蔣介石の失脚であつた。

その通りに、今日あるものは資本主義強國の帝國主義との抗爭ではなくて、たゞ「諒解」なのである。

列國の帝國主義の壓迫と誘惑とが、國民革命運動のかような變質と推移を促がす有力な働きをしたことは、爭ふことのできない事實であつた。また傳へられるが如き共產黨側の戰術上の誤謬、ないしは不充分もまた、この作用の進行を早熟的に助けたかも知らぬ（たゞ私はそれは有り得ることゝは考へるが、明確な批判を下だすだけの智識がない）。この點において、資本主義列國の帝國主義政府は、蔣介石の指摘したように、支那の國民革命運動を妨害した責任を免かれ得るものではない。

けれども蔣介石は、この帝國主義と抗爭することこそが、彼れの國

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

民革命運動の最も重要なプログラムの一つであつたといふ事實を忘却した、さゝたる失念をしてゐるのである。資本主義列國の帝國主義と決定的な抗爭をする決意を失つた國民革命運動は、すでに變質した國民革命運動にすぎぬ。この意味では、蔣介石が國民革命運動の停頓を、ひとへに帝國主義列國の妨害の責任に轉嫁したのを見て、けしからぬと云ふ人にも、半分の道理がある。支那の國民革命運動を妨害したものは、疑ひもなく列國の帝國主義的干渉であつて、反軍閥反帝國主義の革命的運動から、さうでないものに變質し推移したのは、國民運動そのものなのである。この變質と推移とは、列國の帝國主義に解釋を求むべきものではなくて、國民革命運動そのものゝ内部に求めねばならぬ。そしてこれに對する唯一の解答は、國民革命運動の主たる根據となつてゐた社會的勢力が、革命的勢力としての作用を失つた、といふ事實に求めねばならぬ。

支那の國民革命運動は更生するだらうか？　支那の國民革命は、『必ず完成』せられるであらうか？　歴史的必然は、必ずこれを完成せしめずには措かない（帝國主義列國の強權による妨害と、蔣介石らの裏切りとに拘らず）といふ點においては私は蔣介石の見解に完全に一致する。しかしながらこれは支那の國民革命運動は、今日この革命運動を裏切つた階級と社會的要素、今日すでにその革命的性質を發展し盡したところの階級と社會的要素とを根據として、再びその上に更生するといふ意味ではなくて、歴史の必然は、より低い社會階級とより廣い社會層とに掘り下げて、そのところに新しい根據と新しい力とを求めて、國民革命運動を更生せしめるといふ意味である。それはもはや中産階級と軍閥的要素ではなくて、農民と勞働者と、すべての被搾取被抑壓大衆の運動としてのみ、よく眞實に更生するのである。

わが國のブルジョアジーは、政治的自由を確立しなかつた。それはこの鬪爭の半ばにおいて、すでにそのうちに藏してゐた革命的性質のゼンマイが、戻つてしまつたのであつた。それ故にこの任務は、今日なほ、より低い階級とより廣い社會層との任務として殘つてゐる。ちようどその通りに、國民革命の中途において、中産階級がその革命的性質を中和し終つた支那においては、國民革命の遂行は、さらにより低いより廣大な社會層にその力の源泉を見出さねばならぬ。

蔣介石は復活するだらうか？　恐らくは――或は確かに――復活するだらう。けれどもそれは國民革命の指導者として復活するのではなくて煙と灰殼――互ひに相抗爭する軍閥的舊勢力の一要素――として復活するのである。

この煙と灰殼への復活は日本の帝國主義にとつても、決して危險なものではない。それは『一時の利害のため』ないしは多年の利害のために『利用』し得べき一つの要素にすぎないものである。田中首相は、支那は當分、南北に分れた現狀を維持するものと見極めをつけ、近く蔣氏との會見において、彼れの南京復歸を切に慫慂するであらうと新聞は傳へてゐる。この會見の内容については、私もその後、何事も報導せられて居らぬ。けれども私は、田中首相が單なる政治家的お世辭の意味合ひからではなしに、眞實に蔣氏の復歸をすゝめ、ないしはその復活を助けるといふことさへも、極めて有り得べきことだと考へる。今日蔣氏の復活を助けることは、國民革命の遂行を助けることで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もなく、帝國主義との抗爭を助けることでもなく、張作霖の討滅を助けることでさへもなく、それはたゞ新しい形を取つた『萬惡の軍閥』利用にほかならぬからである。この利用の競爭において、『早いものが勝ち！』である。

蔣介石のステートメントは、日本の朝野が、『國民革命運動に對して徹底的諒解を持つ』ことを求めてゐる。少なくとも日本の帝國主義政治家は支那の國民革命運動の變質を、徹底的に諒解してゐるように思はれる。蔣介石はまた、國民革命運動に對する、日本側からの妨害を恐れてゐるらしい。この點においては、國民革命運動に對する蔣介石の洞見は、はるかに日本の帝國主義政治家の それに劣つてゐる。國民革命運動そのものが、軍閥的舊勢力間の抗爭對峙にまで分解した、今日はこの運動との關係における日本の帝國主義もまた、一定不變の一勢力ではなくて、勢ひ變化するところの性質だからである。

新裝の攘夷論

問——『男子の中等教育に關し、改善を要する事項、並びにその方案如何？』

答——『實生活科目を殖やし、英語漢文の時間を半減』等々々々。

この種の諮問に對する『申答』といふものは、だいたいにおいて、諮問者が得たいと考へてゐる通りの答が與へられるのが原則となつてゐる。そこで若し、この場合も右の原則が有効にはたらいてゐるものとせば中等教育の學科課程については、喧嘩兩成敗の法則にのつとり、英語漢文兩方とも、現在の教授時間を半減するといふのが、文政當局者の考へらしく思はれる。

漢文は時間の浪費を意味する無用の學科（或る意味では有害な學科）であつて、これは一と思ひに、中等教育の課程から一掃せらるべきものである。これは有らゆる點から見て、異論の餘地のないほど明らかなところであつて、たゞ明治の初年に愛惜の丁髷を斷ち切つたことを、今なほ殘念がつてゐる人のみが、これに反對するのである。

ところが中學校長會議では、『漢文廢止の議があるが、我國の三千年の文化及び國民性から考へて、これには大反對である』といふ意見の『開陳』があつたといふことである。わが國三千年の文化と國民性とをどう考へると、このような『意見』が出てくるものかは、この簡單な報導では明らかでない。しかし三千年といへば、ともかく悠久の昔である。日本の建國からざつと一千年の昔、われ〱の祖先は、どこで、どうしてどのような因緣を漢文との間に結んでゐたらうか？　これは中學校の歷史の教科書を開いてみても、どこにも何とも書いてない。われ〱の祖先が、、、、、、、て來たかは明らかでない。けれども少なくとも、虫喰ひだらけの漢學の本の間から生まれて來たのでなかつたことだけは、恐らく明らかであらうと思ふ。

漢文を教へることは、實用上に何らの益がない。漢文は外國語であるといふこと以外に、外國の死語である。支那の現代語を學ぶことはそれよりも遙かに意義があり必要があるが、それさへも、一般の中等教育の一科目とするかどうかは問題でない。漢字の使用が全廢せられぬ限りは、漢字を知ることは必要であるが、その漢字にしても、今日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は出來得る限りこれを制限する必要が認められ、現に或る程度まで實行せられてゐる。そしてこの實用上の程度に漢字を知るためには、これを漢文として學ぶ必要は少しもない。たゞに必要がないばかりでなく、漢文を教へることは、漢字制限の傾向に逆行し、その實現を妨げる。吾々は國語を學ぶことだけにも、驚くべき時間の浪費をやつてゐる。そしてこれは全く漢字のお蔭である。そしてこれがまた、わが國の教育の能率を衰れなものとしてゐる主要な理由の一つである。漢字に支拂ふ貢税は、これだけでもすでに十分であつて、なほその上に漢文と名づける死語を學ぶために、吾々の生涯の一部分を浪費することは、あまりに贅澤すぎる贅澤である。

尤も、中等教育の課程から漢文を除くことに反對する人々は、實用上の理由よりも、むしろ精神上の理由に重きをおいてゐるようである。わが國三千年の文化と國民性！　それは一とへに漢學の興廢にかゝつてゐるといふのが、これらの人々の信仰である。これは『わが國三千年の文化と國民性』とは、借物の漢學思想の所産であるといふことであつて、ことに『外國思想の崇拜』を極力非難する國粋主義者の口からこのような主張の出てくることは、いかにも不思議なことである。日本魂は丁髷のうちに宿つてゐる、この丁髷を斷ち切つたなら、日本魂が一緒に飛んでしまふと云つたなら、少なくとも昭和二年の今日は何人も本氣で相手になる者はないだらう。ところが或る國粋主義者のいふところによると、彼らの誇りとする日本魂は漢學の中に宿つてゐるかのようである。

漢學思想によつて、國民精神の作興する必要が、日本において叫ばれてゐる時に、かんじんの本家本元の支那はどうだらう。支那民族が國民的に更生しようとする運動は、一面から見れば、漢學思想から解放せられようとしてゐる運動なのである。

今日はたいていの新聞は、すでに漢字の制限を實行しつゝある。これこそは、もはや議論の時代ではなくて實行の時代である。少なくとも日本の新聞は――國粋主義者の主張に從へば――『國民精神』を三千字程度に制限してゐるのである！

支那から外來した漢學思想は、日本魂の根源であり、わが國の文化を培かう肥料であり、國民精神を作興するカンフル注射液であるが、英語は――恐らく左書きの横文字であるため――に『外來思想』の保菌者であり、事大思想の象徴物であり、外國崇拜の偶像である！　なるほど漢文と英語とを、同じく外國語であるといふ單純な理由によつて、同一の分類に押し込むことは間違つてゐる。漢文は、過去の文化と亡びた勢力とを代表する言葉であつて、それは決して日本の資本帝國主義の行く手に立ち塞がり、或はこれと競爭しようとするいかなる現存勢力をも代表するものではない。これに反して英語にいたつては、現に國際資本主義の脊椎骨をなすところの、恐るべき帝國主義的競爭勢力と關聯する。

それ故に、漢文は國民精神の根底であつて、英語は外來思想であり、外國崇拜であり、夷狄であり、黑船である。

昭和二年の排漢論は、おのづから、時代の特質によつて染め出されてゐる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ロシア革命十週年

『あと十日で、吾々はパリ・コムミュンだけ持ちこたへるのだ…』。

レーニンはかう云つて同志を勵ました。

一九一八年の一月、ペトログラードに開かれた第三回全露サヴエート大會における演説の冒頭にも、彼れはかう叫んだ。『同志よ、パリ・コムミユンが七十日の間つゞいたことを考へよ。吾々はそれよりも、二日間長く持ちこたへた！』。

何人が、ロシア革命が必然的に、永久の基礎をすえると保證し得たらうか？ レーニンといへども――否なレーニンこそ――固よりこれを保證し得なかつた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、を約束するものではないからである（これに反してわが國には、無産階級運動の一切の過誤を、『、、の必然』の責任に歸して、平然としてゐる『マルクス主義的』宿命論の學派がある！）。

ロシアの社會的條件と、國際的形勢とを與へられたる數量とすれば、ロシア革命が永久の基礎をすえ、プロレタリアの決定的勝利として固形したことは、、、、、、、、、、、、結果に歸しなければならぬ。

かうしてパリ・コムミユンよりも二日間長く持ちこたへた十一月革命は、この時からさらに十年の間持ちこたへた。

この間に、世界の形勢は幾變轉をへた。一九一八年は、全ヨーロッパにおいて、革命的形勢が最高の潮汐點に達せんとした時であつた。各國のプロレタリアは、毅然として首をあげてゐた。しかるに一九二一――二年になると、ヨーロパの資本主義には徐々とではあるが、安定への徴候が現はれだした。資本は沮喪した勇氣を取りかへし、次第に陣容を立て直ほして、漸次に攻勢に轉じてきた。ヨーロパの數ヶ國には、反動主義の獨裁政治が榮えてゐる。かつては、ロシアにおし樹てられた萬國無産階級の優勝旗が、このところに翻へるであらうと思はれたドイツはどうなつたか。そこでは、革命は完全に、ブルジョアジーのために簒奪された。ドイツのブルジョアジーは、その誇とした祖國を國際金融資本の殖民地にすることによつて、その奴隷――プロレタリア――の主人たる地位を、僅かに保障せられてゐる。

かつては國際無産階級の希望の目は、イギリスに向けられてゐた。英國資本主義の凋落は、勞働階級を著しく鬪爭的にした。しかし今日はどうだらう？ 總同盟罷業の敗北による勞働階級の退却と後走とは、いま尙ほ續いてゐる。

あらゆる戰線において擊破され粉碎せられた國際プロレタリアは、首を垂れてゐる。この間にたゞロシアのプロレタリアの勝利のみは、荒寥たる曠野のうちに全世界の被抑壓民族を導びく火の柱のように輝やいてゐる。

ロシアにおけるプロレタリアの勝利が、一時的な事變ではなくて、資本主義から新しい社會制度に推移する一定の社會形態として確立せられたことは、第一には、この社會進化の方向と過程とが、、、、、、、、、、、、、されたことを意味してゐる。蛹が蝶々に變形するように、經濟的必然の殼にとぢこめられた陰鬱な舊るい社會は、、、、、、、、、、い社會に變形しようとする。そしてこの變形の、、、、、、

が、いま吾々の肉眼の前で進行し展開せられてゐるとしたならば、これは萬人にとつての最高の、、、、、でなければならぬ。ロシアの建設事業は、いま吾々の前に、この、、、、、、、、、、、を展開してゐるのである。のみならず、、、、、、が初まつてこの方、その一章といへども、その一節といへども、いなその一行たりといへども、ロシア革命とその建設の事業とに見るような、人間の明確な、、、、、、とによつて書きおろされたことがあるだらうか。今日まで、、、、、、、として、人間に押しつけられてゐた。であるから人間の意識から見れば、、、はその九割九分までは偶然であつた。過去の、、に現はれた一切の社會的變革は、みなその通りであつた。、、、、、、、階級のうちで最も進んだ階級意識に達したブルジョアジーの場合でさへも、その革命は、、、、、、せられた革命ではなかつた。ロシア革命とその建設の事業とにおいて、吾々は初めて、、、、、、、、、、、、、、、に書かれてゐる事實を見たのである。人類は、、、、、、から解放されて、すぐに、、、世界の門前に立つてゐる。

ロシア革命が、一定の社會形態として確立せられたことは、第二には、國際資本主義の體系は、もはや永久に片輪になつたことを意味してゐる。それ故に勞農ロシアの存在は、世界の資本主義にとつての癌であり、たゞそれが存在してゐるといふその事そのことだけで、資本主義列國にとつての脅威となるのである。

この脅威から免れようとする止みがたき試みは、あとからあとから色々の形で繰り返へされてゐる。初めには、武力によつて癌腫を取り除からとした。次には經濟的封鎖——斷食療法！——によつて消滅しようとした。その次には、資本主義列國の努力は、少なくともこの癌腫の擴大を防止するために、謂ゆる對露防壁を築つくことに集中された。今もなほこの努力が續けられてゐる。そして英國保守黨内閣の謂ゆる金融封鎖は、最近に發明せられた最新の療法なのである。

かように異端のロシアを、世界の交際から破門しボイコットしようとする執拗な試みが不斷につゞけられてゐる一方に、自ら築ついたこの對露防壁を自ら穿たうとする努力がまた、列國によつて絶えず行はれてゐるのであつて、これはロシアをその體系から失つた世界資本主義の包みきれない苦悶を告白したものである。

この努力は、一方には資本主義各國が、ロシアから經濟上の利益を得るよりよき機會を得ようとする競爭となつて現はれた。それ故に資本主義國の大部分が今日は『プロレタリア獨裁』の政府をもロシア國民の正式の政府として承認するに至つてゐる。そしてかうした必要を滿たすためには、資本主義の各國は、申し合せたようにロシア國民がどのような政府を選ばうとも、それはロシア國民の自ら決定すべき事柄であつて、吾々はもとより、ロシアの内政には干渉せぬ、といふのである。彼らは一方には、この内政に干渉するために對露防壁を築づきつゝ、他方には、この防壁に大きな穴を築いてゐるのである。英國の保守黨政府は、かつて結ばれてゐた對露通商條約を勇敢に破棄したが（保守黨政府は、あらゆる方面に勇敢である！）、なほかつ事實上の通商の繼續を願つてゐる。この執政に應じて、事實上の通商關係を斷絶しようとしてゐるのは、勇敢な保守黨の英國ではなくて、却つてロシアである。英國に反動主義の蹂躪をロシアの身に卷きつけて、力ま

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かせに引張らうとする。彼れはその麻縄の他の一端が自分の頸に卷きついてゐることを忘れてゐた。

しかるに他方においては、この努力は、資本主義列國の國際的な談合に、ロシアを參加せしめようとする試みとなつて現はれてゐる。ロシアの參加せぬ國際聯盟は、常にその片輪であることを痛感せざるを得ぬ。ことにこの國際聯盟が、事實においてヨーロパ聯盟であればあるほど、その間に占めるロシアの參加の重要さは、その割合を增大する。ロシアのないヨーロパ聯盟は、たゞに手足のない片輪ではなくて胴體のない片輪である。その通りに、ロシアを除外した經濟會議は、もとより何等の結論にも達することはできぬ。

最近には、ロシアが正式に、來るべき軍縮會議への參加を決定したことが報ぜられてゐる。かように一方では、ロシアに對して防壁を築づき、ロシアを世界——なかんづくヨーロッパ——の交際からボイコットすることが、資本主義國際政治の勝利と考へられてゐる。しかるにこれと同時に他方では、ロシアをヨーロッパの仲間に引張り出すことが、同じく資本主義國際政治の成功と見做されてゐる。ロシアのあることはヨーロッパ資本主義の存在にとつての、不斷の脅威である。その通りに、ロシアの無いこともまた、ヨーロッパの資本主義の存在にとつての不斷の脅威である。

レーニンはロシアの民衆と、社會的實驗のために、活きながら解剖臺に上ぼせてゐるものだ！　ブルジョアの世界は、かつてロシア革命の上にかういふ非難を浴びせてゐた。ブルジョアの世界ばかりでなく、社會民主主義の陣營の內部からさへも、この種の非難が放なたれた。ロシアにおけるプロレタリアの勝利が確立され、歴史における最初の社會形態として十年間の生長をつゞけたことは、この種の批評家を、徹底的に沈默させた。ロシアの民衆が不幸にして、（或は幸福にして）社會的實驗の材料に使はれてゐるとしたならば、この實驗をしてゐるのは、レーニンではなくて、、、、、と社會進化の法則であつた。

無產者運動陣營內の危險思想

日本の無產階級の經濟上の戰線は、組合の支離滅裂に近い分立狀態であつて、全國的統一の曙光はいづれのところにも見出だすことができぬ。これはわが國の資本主義經濟の安定をさらに鞏固にする仕事を、比較的容易ならしめてゐる。

政治戰線の方面では、無產政黨と名づける全國的黨派が四つある。（もちろんそのうちには、無產階級の政黨と呼ぶことには、大なる疑ひの餘地のあるものもある）。政治戰線の滅裂は、經濟戰線のそれと選ぶところがない。そして今日は、これを鞏固な統一戰線に形成しようとする努力は、何らの形においても、まだ現はれて居らぬ。

これに反して、かような支離滅裂な政治的戰線の現狀を、そのまゝに固定せしめようとする努力の方は、いづれの方面にも現はれてゐる。對立政黨はその存立のために、出來得る限り、その對立の溝を深めようとする。かように今日は、無產階級の政治的統一戰線を實現しようとする困難な努力の代りに、この分裂抗爭の現狀を維持し固定せしめるためには、『無產階級運動發展の現段階』『對立の社會的根據』『わ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が國の特殊性にもとづく必然」等々のような、理論めいた道具がかつぎ出されてゐる。一切の努力は、現在の分裂對立を、最も尤もらしく（いふまでもなく、自分自身の立場にとつて）理論づける競爭に集中せられてゐるかの觀がある。

今日各國の無産者運動を見渡すと、統一戰線の實現を執拗に妨害してゐるものは、どこでも右翼主義者である。彼らは、左翼の影響を恐れてゐる。彼らはその指導を維持する最も安全な方法として、分裂の現狀を維持することによつて、左翼との間に防壁を築いておかうとする。そこで左翼の任務は、右翼の分裂主義に打ち勝つことである。

わが國においても、右翼主義者が勢ひ統一戰線の妨害者であることには、固より何らの不思議もない。たゞ不思議なことは、最も尤もらしい——時としてはマルクス主義めいた——理論づけによつて、この分裂狀態を固定させようとする最も「執拗果敢」な努力が、謂ゆる左翼の間にあることである。そしてこの不思議は、「日本の特殊性」と「歷史的必然」とで說明せられてゐる。たしかに、「日本は特殊な國」である！

かような對立抗爭と、これを意識的に強める努力とは、おの〳〵の政黨のランク・エンド・ファイルの間に、階級的意識の代りに、強烈な宗派的意識を植えつけてゐる。

この宗派的意識が、いまや無産階級運動の最も進んだ部分にまでも、いかに浸透してゐるかといふことは、左翼の指導機關と認められてゐる『無産者新聞』の態度の上に、最も露骨に現はれてゐる。無産政黨間の對立と敵愾心——政黨愛國心！——とは、最初の地方總選擧に臨んで勢ひ白熱した。この總選擧を終つて、左翼指導機關をもつて任じてゐるわが『無産者新聞』が、先づ第一に爲したこと、先づ第一にしなければならぬと感じたことは何だつたらう？ それはブルジョアジーとブルジョア政黨とに對して凱歌を擧げることではなくて、無産派競爭政黨に對して、凱歌を奏することだつた。『假面非無産諸黨に對する勞農黨の輝ける勝利』！ これが『左翼指導機關』（！）の凱歌であつた。

無産派諸黨の成功は、必ずしも誇るに足るものではない。けれども勝利は小さくとも、なほかつこの小さな勝利なりとも、ブルジョアジーに向つて凱歌を奏しなければならぬ。ことに無産派諸黨の間において、左翼黨が比較的の成功を收めたといふことは、左翼黨を最惡の敵として彈壓したブルジアジーに對して、少なくとも先づ第一に勝利を感じなければならぬ。階級的意識と階級的良心とは、かくの如く要求する。

しかしながら『わが無産者新聞』は、この凱歌をブルジョアジーに向つて擧げないで、勞働者と農民とをその背後に有する民衆黨と、日勞黨と、農民黨とに向つて擧げたのである。この凱歌と勝利の誇りとは、彼らはブルジョアジーを敵として戰つてゐたものではなくて——少なくとも、ブルジョアジーを第一の敵として戰つてゐたものではなくて——同じく勞働者と農民とを背後に持つところの競爭無産政黨を敵として——少なくとも第一の敵として——戰つてゐたのであつたといふこと、彼らの敵愾心は、ブルジョアジーには向けられないで、これらの競爭政黨に向つて燃やされてゐたのだといふことを、遺憾なく暴露したものであつて、階級的意識と階級的良心とが、宗派的意識のために、いかに蔽はれてゐるかを物語つてゐる。その勝利がいかに

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『導いて』ゐようとも、それは眞實に階級意識の上に立つ者の心を疑ちせたにちがひない。

かように分裂主義は、わが國における無産者運動の、あらゆる戰線を支配しつゝある。そしてこの分裂の形勢を固定せしめることに歸着するといふ一點においては、謂ゆる左翼主義者――即ち極左主義者――の行動は右翼主義者のそれと一致してゐるのである。

それにも拘らず、政治戰線の統一に對する大衆のやみがたき要求は、無産政黨のランク・エンド・ファイルの間に、『澎湃として』起こつてゐると傳へられてゐる。私はもちろん、この要求が『澎湃として』起こつてゐるか否かを知らぬ。けれども最近、政治的統一戰線――その具體的の現はれは、政黨の合同論となる――の主張に對して、極左主義者が焦燥的の態度を示してきたことは、恐らくは彼ら自身の脚下にさへも、政治戰線の統一に對する要求が、急速に生長しつゝある事實を反映したものでなければならぬと思ふ。勞農黨から分離した要素によつて、日勞黨が形成せられた瞬間には、この兩黨の即時無條件の合同が主張せられたことがある。この時以來、實際の形勢は變化した。それと同時に、勞農日勞兩黨の合同は、明確な理論的根據の上に立つ正式な主張としては、今日にいたるまで未だかつて一度も提起せられたことがない。それにも拘らず、極左主義者は躍起となつて合同論の排撃に浮身をやつしてゐる。（最近に開かれた勞農黨の東京聯合會大會においても、議長の就任の挨拶は、徹頭徹尾、合同論の排撃演說たる奇觀を呈したといふことである）。今日、極左主義者の陣營からは、統一的政治戰線の主張は、無産階級運動内の、最悪の危險思想と見做されて居り、かりそめにも合同論に歸向するが如き考へは、無意味な頑固と理論めいたノンセンスとの一齊射撃によつて、徹底的に彈劾され排撃せられてゐる。それはちようどわが國の『、、、、、』が、危險思想をその萌芽のうちに刈り取らうとするように、無産階級運動内の『絶對專制政治』は、合同論の危險思想を、生長に先だつて刈除するために、血眼になつてゐるかのようである。

何ら明確な合同論が正式に提起せられて居らぬ今日、これは的なきに放たれてゐる矢のようである。もしこれは何らかの標的があるとしたならば、それは彼ら自らの脚下に（よし澎湃としてゞはないにせよ！）漸次にかつ急速に生長しつゝある、政治的統一戰線に對する大衆の深刻な要求でなければならぬ。この事實が、彼らをして、合同論に對する脅迫感を抱かせる。それ故に彼らは合同論のないところに、自ら合同論の怪物の姿を描いて、半ば狂亂のていで一齊射撃を試みてゐるのである。

大衆はいま、彼らのとぢこめられてゐる宗派的意識の殼を打ち破つて、階級的政治闘爭にまで進出しようとする。分裂主義者はその理論めいたノンセンスと政黨愛國心とによつて大衆の進出をいつまで、阻止することができるだらうか？　彼らはいつまでも、これを阻止しようと試みることができる。たゞ大衆は、彼らの宗派心と政黨愛國心とを『蹴飛ばして』（これが彼らの愛用の言葉である！）眞實の階級的政治闘爭に進出するだらう。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

スポーツ全盛期の現出

小住宅地の夕方の散歩の度びに、あちらの家からもこちらの家からも、謡ひの呻なり聲の聞えた時代があつた。彼らの多くは官吏や俸給生活者であつた。そして官吏と俸給生活者とは、最も従順を要求せられる階級であつた。謡曲は、生活の不平から呻なり出される彼らのうめきを調節して、これを自己催眠劑に變質させる特殊の作用をもつた、安全瓣であつた。

圍碁や謡曲が、彼らの不平の安全瓣の作用をつとめた時代は過ぎ去つた。現實に喰ひ入られた彼らの氣分は、もはや謡曲によつて、百年の昔に遡還させることができなくなつた。そこで今日は、もつと近代的なスポーツが、これに代はる役割を演じてゐる。大工場や大會社には、たいていテニスコートやグラウンドの設備がある。この安全瓣を必要とするものは、今日は、ひとり官吏と俸給生活者のみではない。すべての青年はこれを必要とする。

明治神宮體育大會における田中首相の祝辭は、體育の第一義は、『品性の陶冶』にあると云ひ、内相の祝辭は『國民精神の作興』にありと云ひ文相の告辭は『精神の修養』にあると述べてゐる。體力の競爭によつて作興せられる『國民精神』なるものがそもそもどのような『國民精神』であるかは暫らく別問題として、今日のスポーツなるものが、もはや單なるスポーツではなくて、青年をして、或る一定の心理を持たしめることを主要な目的としてゐることは爭はれぬ。それは支配階級の手にあつては、たゞ單に、青年をして考へしめないための消極的な役割（考へしめないことも、思想的支配の一つの形態である）とするばかりでなく、積極的に、青年の思想を或る一定の方向に導びかうとするところの思想的支配の方法にほかならぬ。

ブルジア反動勢力の結成を特徴としてゐる今日、スポーツ全盛の時期を出現したことは、決して單なる偶然ではないのである。

自作農地法案の坐礁と地租委譲の延期

河西太一郎

○

政友内閣成立最初の臨時議會に於て所謂田中大將は「公平なる肥料の分配」を以てその農村振興策を片付けた。が愈々具體的に政策を決定する段になると仲々そう簡單には片付かぬことになつた。即ち今や臨時議會を前に控へたる昨今の豫算閣議を中心として政府と與黨とが紛糾又紛糾を重ねてゐる。その原因に所謂積極政策の自縄自縛にある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

就中その二大重要政策と呼號し來つたものの中、先づ山本農相がその進退を賭して閣議に提出したと傳へられる所謂自作農地法案が計らずも閣僚の包圍攻擊を受けて正に坐礁せんとし、更に殘れる一枚看板たる地租委讓の實施が國民への所謂公約を無視して延期に決定されんとし、與黨幹部が躍氣となつてそれに反噬を試み、御家騷動を起してゐるのが昨今の有樣である。政友內閣は何が故にかくも政策の破綻を來たし、醜態を天下に曝露しつゝあるか、これについては勿論いろ〳〵の理由を擧げ得るけれども、窮極するところ財政難にその根因を有することは疑ひない。財政、稅制の根本的改革に手を觸れ得ない立場にあるブルジョア內閣である以上、如何に陸軍大將を首班に戴くと雖も今の難局によくその積極政策を貫徹し得るものではない。肥料の公平なる分配は肥料の豐富なる存在を前提とする。財政難と積極政策とは凡そウラハラ的存在である。政友內閣の悲喜劇はこゝから始まる。

○

先づ問題の自作農地法案が此の機會に又々朝野の批判の對象となりつゝあることは、何れにしても有意義なことと云はねばならぬ。筆者は本誌前月號に於て自作農主義批判の見地から此問題を論じ、自作農創定が決して小作人を解放する所以でもなければ、又農業の發達に資し得るものでもないことを述べ、而もブルジョア政府が敢て之れを行はんとする所以は之れによつて地主の歡心を得、自作農には繁榮可能の幻影を抱かせ、更に小作人を自作農とすることによつて之れを保守的陣營に誘導し、かくしてその揺がんとする、、の維持に備ふるものであることを指摘して置いたのであるが、此際今回の自作農地法案に對し閣議その他に於て捲き起つた反對意見を一瞥するに、こゝにも興味ある進化的推移を認めることが出來るやうである。今反對意見として新聞紙に傳へられてゐるものの中重なるものを拾へば次の如くである。その一は財政經濟の見地よりするものであつて、今回の農地金庫法案によれば、その發行する債券は每年八千萬圓を限度とし、發行した債券の現在高は最高十八億圓、三十五年間に累計二十八億圓まで發行出來ることになつてゐる。ところで農地金庫及び農地委員會の經費は一切國庫で負擔し、債券額面と發行價格との差額をも國庫が農地金庫に補給することになつてゐる。而してこれが爲めに要する國庫の負擔は昭和三年度(八ヶ月分)には百三十五萬一千圓であるが、三十五年間には八億六千百萬圓に達するのである。その上小作人が完全に償還金を納付せざる場合には政府がその損失を負擔しなければならぬから國家の負擔が過重であるとする財政的反對意見、及び農地債券の受理者は之れを賣つたり、處分したりするに違ひないから、金融界を非常に壓迫する虞れがあるとする經濟的反對意見が之れである。その二は社會的見地よりするものであつて、即ちかくの如き農地債券を發行して大規模に自作農の創設計畫を實施することは、一面に於ては採算不利なる耕地の賣却に焦慮しつゝある地主を救濟する所以であるが、更に他面に於ては耕地賣價の低減を目的として小作爭議を企圖するものの續出を見るべき虞れがあり、更に小作人が年賦償還を實行せざる場合には勢ひ政府がその相手方となるのであるから、小作爭議が小作人對國家の關係となり、由々しき大事となるとする反對意見である。その他に尙法理上の見地よりするものもあるが、最後に、農業經營の不

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

和よりする自作農創定の効果を疑ふ說がブルジョア階級の間より出でつゝあるのは注目に値する。即ち自作農は現在でも採算不引合で最近十ヶ年間に年々一萬人近くが減じつゝある、然るを五分の利子を付けて三十五ヶ年間に年賦償還せしむる如きは果して可能であるかとする反對說である。以上の反對論には何れも夫々妥當とせらるべき理由があるが筆者の最も興味を引くのは最後の點である。元來自作農が不引合であつて、その經營と家計とは漸次困難を加え、抵當負債の虜となり、結局沒落の運命を辿りつゝあることは顯著なる事實であつて、從來ブルジョア政治家達が之れに目を蔽ふてゐたのは寧ろ不思議としなければならなかつた位のものである。實際のところ彼等の從來の態度は農民を馬鹿にするにも程があつたと云はねばならぬ。全く小作人を自作農とし、よくその位地を保持せしめんが爲めには餘程の特典と組織とを彼等に與えなければならないのである。眞實に彼等を味方に得んとするならばこゝまで決心しなければならぬ。唯徒らに自作農を推賞して土地を賣り付け、僅かに地租の免除位で農民を買收せんとするが如きは餘りに白々しき僞瞞である。深刻なる財界の不況に伴ふ財源難がブルジョア政治家をして此の事實を直視するの止むを得ざるに至らしめ、自作農創定政策に一の轉機を與ふることともなれば、意外の收穫とも云へやう。

が自作農創定政策の行詰は明かに彼等の農村政策の行詰である。かくて農村政策がブルジョア政府の手におえない難物であることが愈々明確となり行く。

ブルジョア政治家達が今漸やく自作農主義の批判に到達したことは明かに彼等の一進化である。が此の進化は彼等をして唯徐々ヂレンマに陷し入るゝのみである。

自作農創定政策が相當大規模に且つ有効に實施されんが爲めには相當根本的の施設を要すること前述の如くである。歐洲に於て此政策に實績を擧げゝあるのは何れも一種の非常手段によつたもののみであるのを見ても思ひ半ばに過ぎるものがある。が我國のブルジョア政治家にとつては之れは確かに荷が重過ぎる。ブルジョア政府は、比較的大規模な農地金庫法案を坐礁せしめたる後は恐らくは從來の型の自作農創定政策でお茶を濁して行くの外はあるまい。

○

次に地租委讓は、衆知の如く、政友會年來の主張であつて、その政權獲得後、昭和四年度を以て之れを斷行すべきことを屢々天下に公言し、來るべき總選擧の前哨戰たる去る府縣議選擧戰に於ても之れを殆んど一枚看板の如く持ち歩いたものであるが、愈々之れを具體的に決定するに當り突如として實施手續の複雜にして到底間に合はないと云ふのを理由として五年度への延期說出で、閣議の大勢を制したと傳へられ、之れに對して與黨側では猛然起つて之れに反對し、飽く迄四年度斷行を主張して止まず、若し與黨幹部の此の要求が閣議に容れられざるに於ては政治道德上現幹部は總辭職を爲して國民に對する違約の責を負ふの外はないと痛論し、閣僚の中にも之れを支持する者があつてヤツサモツサをやらかし、例によつて田中大將を困惑に陷らしめてゐるが如くである。その結末がどう落着くかはもとより我等の知らざるところであるが、此機會に地租委讓が如何なる社會的、經濟的意義

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を有するかについて若干の考察を加へて置きたい

もと政友會の地租委譲論の表面の理由は地方自治體に獨立の財源を與えて之れが振興を計るにありとせらるゝのであるが、之れは他の半面に於て地租が國税として最早殆んど重要なる位地を占めてゐないと云ふ事實よりの歸納に外ならぬことは確かである。元來資本主義經濟の發達の幼稚なる時代に於ては農業が一國經濟の重心であるから當然地租が國家の財政收入の基礎を爲すけれども、資本主義の發達と共に商工業の繁榮、その租税能力の增進する一方、農村の疲弊に伴つて、地租の如きものを主要財源とすることが無用且つ不可能と爲り來るのを常とする。我國に於ても明治初年に於ては國家の財政的收入は殆んど全く地租に依つて居り、地租は當時の政府の全收入の九〇%以上を占めて居つたのであるが、其後の資本主義的發展と共に地租は次第にその重要性を失墜し來り、日清戰爭を經たる明治卅年には地租は租税收入總額の三九・九%、歲入總額の一四・二%に下り、引續き低下の傾向を續け、日露戰爭終了後の明治四十年には租税收入總額の二六・八%歲入總額の九・九%となり、更に世界戰爭後の大正十年には租税收入總額の九・四%、歲入總額の三・一%となり、本年(昭和二年)度豫算に於ては租税收入總額八八三、二五七、四五三圓の中地租額は六六、九四四、一七三圓であつて即ち前者の僅かに七・五%、更に歲入總額一、七三〇、〇五八、七六八圓の僅かに三・八%に過ぎないのである。かくの如く國税としての地租の地位は甚だ貧弱なものとなり、從つて之れを地方に委譲するとも最早中央政府の財政に重大なる財源的缺陷を齎らすものではなくなつてゐるのである。

翻つて農村の立場より之れを見る。資本主義の發展と共に一般に農民の窮乏、農村の疲弊が進行するのであるが、その原因の一に租税關係の存在することを看逃す譯にはゆかぬ。と云ふのは資本主義社會に於ては一般に公租負擔は都鄙間に均衡を得ず、商工業者に比較的輕く農業者には比較的重い。我國の如きにありては農業者の租税負擔は通常商工業者のそれに二倍三倍する割合になつてゐること調査の示すところである。其上に農業者の基本的課税物件たる土地は所謂隱匿の不可能なるものなるに反し、商工業者の場合にはその生產品又は營業品について隱匿を行ふことが比較的容易であり、又事實それが行はれてゐるのであるから眞實の比率には更に大なる懸隔が存する譯である。而も財政的施設に至つては、今日の社會に於ては、納税率とは逆比例をなして、實に都會を本舞臺とし、農村へは極めて僅かな割合に於てしかその恩惠が及ばないのである。ところで地租の委譲がかゝる不衡平を緩和するに與つて力あるものなることは疑ひない。

尙其外課税技術の上より見るも、地租の賦課標準たる賃貸價格の調查乃至認定は地方毎に行ふことが確實且つ公平を得る所以である。

かくて地租の地方委譲は歷史的にも、社會的にも、理論的にも妥當とせらるべき理由がある。けれども現實の問題として政友會の地租委譲政策を批判の對象とする時には更に步を進んで一層具體的なる批判と考察が附け加へられなければならぬ。

第一に問題となるのは此の委譲政策の效果如何の問題である。之れによつて、政友會の高調するが如く、果して地方自治の伸張、ひいては農村の振興を招來し得るであらうか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思ふにそれは甚だ疑問である。近年我國の全市町村費は十億圓を超えてゐる。それに對して僅かに六千七百萬圓の財源を持つて來たところで全く燒石に水位の效果しか持ち得ないであらう。年々膨脹する經費負擔の始末に困つて、無理な戸數割や附加税をいくらかけても追つかず、破綻に破綻を暴露しつゝある市町村の續出しつゝある今日これが、救濟と振興のための大政友會唯一の看板政策の實效がこれだけとあつては寧ろあきれたものとも云へるであらう。

が政友會の睨ふところは恐らくは更にその奥にあるであらう。政友會は地租委讓後の市町村財政の指導方針については何等言及してゐないから不明であるが、政友會の地盤及び獲得せんとする地盤關係の上より見て恐らく次の如き秘策が藏せられてゐるかとも考へられる。それは即ち依つて以て農村の負擔の輕減を圖ること、これを實質的に云へば、土地所有者階級の負擔の輕減を圖ること、之れである。今大正十四年度に於ける市町村税收入を觀るに、

市税收入	一二五、五四八、四五五圓	市地租附加税	五、〇三五、七一四圓
町村税收入	二五四、九五四、八八六圓	町村地租附加税	三八、九七五、五二〇圓
計	三八〇、五〇三、三四一圓	計	四四、〇一一、二三四圓

であるから、地租額六千七百萬圓を以てすれば、先づ地租附加税四千四百萬圓を輕減するも、尚二千三百萬圓を殘す勘定になる。此邊が恐らく政友會の狙ひ所であらう。而も地租委讓の財源として差し向き問題となつてゐるのは震災復舊費のやり繰りと關税改正とであるが、殊に後者の如きが無産消費階級の生活壓迫となるべきは勿論である。これが即ち政友內閣積極政策の特色である。

かくの如く政友內閣は無産者の犠牲に於て土地所有者階級に些少の恩惠を施し、以て選擧戰に大魚を獲得せんとしてゐるのである。而もその選擧戰が最早明年に迫つてゐる此際その實施年度の延期の止むなきに立ち到つて、昨今周章狼狽を極めてゐるのである。大藏大臣は之れを手續上の困難に歸し、財政的理由でないと云つてゐるやうであるが、之れは恐らく所謂語るに落ちるものであらう。財界の行詰りは深刻にして財源は極度に枯渇してゐる。而も帝國主義的政策の爲めに多くの財源を當てねばならぬ。茲に於てか遺憾ながら强壓力の少ない土地所有者に對する恩惠政策を延期することになつたのではあるまいか。こゝにもブルジョア內閣のヂレンマが横はる。

○

以上に述べ來りたるが如く、政友會の代表的政策たる自作農地法案にしても、地租委讓政策にしても、地主階級を霑ほすことある以外には殆んど全く農村の振興に資するものではないのである。之れが現政權を掌握せる政友會の呼號する積極政策であり、積極的なる農村振興政策なのである。而も此の二個の重要政策が揃ひも揃つて根本的には深刻なる財政難の爲めに行詰つてゐる。かくては大政黨の姿も餘りに慘目ではないか。

がこれはひとり政友會の無力を、明するものではなく、一般に我帝國主義的資本主義經濟の行詰の反映に外ならない。唯政友會が此期に際しても依然として、積極主義を高調するドンキホーテ的態度がより多く彼自身を苦しめ又醜態を世間に曝露する結果となつてゐるだけの話である。(十一月九日)

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

マルクス著・高畠素之譯（全譯一行も省略なし）

資本論

豫約募集

申込順により十月四日より配本開始・第一巻第一冊五百三十六頁

急告

徹底的廉價版發行

全五冊 各冊平均四百五十頁

並製（壹冊）八十錢
特製（壹冊）壹圓

一時拂

並製（全五冊）三圓九十錢
特製（全五冊）四圓九十錢

共に獨逸式美裝函入・特製は總クロース金文字。並製紙裝

豫約規定

（配本）昭和二年十一月第一冊刊行毎月一冊宛配本
（體裁）四六判上製各冊約四百五十頁
（申込金）特製壹圓・並製八十錢（全拂不要）
（送料）一冊につき六錢（市内）十四錢（地方）

本社が一度び資本論の刊行を發表するや、果然讀書界に一大センセーションを起し、賞讃の聲、激勵の辭、霰の如くに到り、申込殺到す。本社は此の大衆の期待に感激し、茲に猛然として當初の全三巻八冊の計畫を五冊として刊行することに變更した。希くば此の犠牲的出版完成の爲に一層の御援助を希望します。

發行所 東京市麹町内幸町（幸ビル） 振替東京八四〇二二番 改造社

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

法學博士 堀江歸一著

金貨本位制度の復興

四六判總クロース
定價壹圓
送料十八錢

最新刊

歐洲戰前の金貨本位制は世界大戰によりて一旦破壞されたが、戰後經濟的秩序の確立と共に次第に復興しつゝある狀況を研究し、我國經濟界に囂々たる金輸出解禁問題に論及し、この間に金貨本位制の本質、眼目に就て博士の見解を論述す。博士は曩きに本社より「貨幣・銀行・外國爲替」上下二卷を出したが、本書は同書中の論題に對し本社より引續き發表せんとする特殊研究の一つである。

堀江歸一著
貨幣・銀行・外國爲替（上卷）
菊版上製
定價三圓
送料廿六錢

堀江歸一著
貨幣・銀行・外國爲替（下卷）
菊版上製
定價四圓
送料卅錢

發兌
東京市麴町區內幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二番
改造社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

瀧井孝作著（最新刊）

無限抱擁

四六判上製
定價金貳圓
送料廿二錢

新銳文壇中の第一人者、ドッシリした風格もてヒタ推しに邁進しつゝある瀧井君作中の最大雄篇。俳趣豐かに、そして傾向文學に阿ねるなく、一つの旗幟を樹てゝ精進する君の姿は本篇を通して遺憾なく看取されて嬉し。作中病妻を抱擁する主人公の氣持が現代人にとりてどれほどの激動を與へるか。私どもはこの一篇は浮薄の現代傾向が產むにはアマリにドッシリしすぎると思ふ。そして作のどこにも僞善的分子なく、眞劍無二の美はしい所產として心ある人々の推賞に俟つ。

發行所　改造社
東京麴町區內幸町　振替東京八四〇二一　ビルデイング一階
電話銀座　一五四七　一〇五五　三四五三　三六八

エリイザ・オルゼシュコ著
清見陸郎譯

寡婦マルタ

（四六版並製）

定價壹圓貳拾錢
送料十八錢

最新刊

心正しく姿美しき寡婦マルタは、高き教養と豐なる趣味とにも拘らず、最愛の良人に先立たれて何故に一女工に身を落さゞるべからざりしか。さうして終に竊盜の罪を犯し、乘合馬車の轍の下に悲慘なる最後を遂げざるべからざりしか。現代社會組織の下に横はる病弊、ブルジョアジイの冷酷、男性の横暴、此一篇に描き盡されて餘蘊なし。原作者オルゼシュコ女史は、彼のシェンキェヰッチと聲望を爭ふポオランド文壇の巨匠。譯筆は流麗暢達、創作を讀むの思ひあり。敢て日本の若き女性、教育家、婦人問題研究者の熟讀を望む。

發兌
東京市麴町區内幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二番

改造社

池谷信三郎著（最新刊）

橋・おらんだ人形

四六判四一五頁

定價金壹圓八拾錢

送料十八錢

我等の生活に新時代の健康を付與し、來るべき必要を滿たし、新鮮なる感覺を撒布するものこの書の如きはない。「橋」他五篇の小説と「おらんだ人形」他五篇の戯曲とは新時代の新工夫に成り、必然に科學は內潛せしめ而も彩艶優雅。巧緻にして輕快なる筆致は街から街を國から國を晶徹して適切なる神經と豐鋭なる叡智は、是に都會文學を完成し是に國際化情緒を顯現し東西の情智意は曲盡されて各篇皆これ新時代の敍情小曲である。言々皆これ萬人の胸廓に打込む魅惑的なる砲彈である。細讀味讀を乞ふ。

內容

第一部　戯曲——三月卅二日（一幕）。獨り（二幕）。首（一幕）。歸りを待つ人々（一幕）。歸つて來た噂（一幕）。おらんだ人形（一幕）。

第二部　小說——街に笑ふ。まいとん。黄昏の幸福。忠僕。この戀人。橋。

發行所　東京麹町區內幸町　幸ビルヂイング一階　振替東京八四〇二　改造社　電話銀座　一五四一　七〇五三　三四五三　三六八

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

最新刊

クリツペン事件

フィルソン・ヤング編
村上常太郎譯

（四六版並製）

定價貳圓
送料二十錢

編者はこの世界的に著名なる稀有の犯罪事件を公判の展開のまゝ忠實に記述し、譯者は將に實施せられんとする陪審制の如何なるものなるかを示さん爲めに譯筆を採つた。併しながら此「小說よりも奇なる事實」そのものがより强く讀者の心を捉へる。――美しきベル・エルモアの消失。彼女の夫クリッペンとルネイヴ孃との變裝逃走。空倉より發見されたる人間の內臟と肉片――一篇のたくまれざる永久の謎を含める探偵小說である。

發兌　東京市麴町區内幸町　幸ビルディング一階　振替東京八四〇二番　改造社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

改造社出版圖書目録

（昭和二年十二月現在）

著（譯）者名	書名	型 頁數	定價 送料 円
法學博士 穗積重遠著	離婚制度の研究	菊上 九四〇頁	一〇・〇〇 内・三六
河西太一郎著	農業問題研究	四六上 四三五	二・三〇 ・一二
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	四六上 四三〇	二・五〇 ・二〇
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	菊上 四五三	五・三〇 ・二八
大教授 孫田秀春著	勞働法總論	菊上 三四〇	二・六八 ・二六
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	菊上 二九六	二・五〇 ・二四
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本財政史	菊上 五一六	二・五〇 ・二四
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	四六上 三六〇	二・五〇 ・二二
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	四六上 三四四	二・〇〇 ・一八
法學博士 河田嗣郎著	社會問題綱要	菊上 内 六四四	四・八〇 ・二七
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	四六上 三九八	二・五〇 ・二三
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	四六上 三五三	二・〇〇 ・二〇
東大助教授 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	菊上 三四二	二・五〇 ・二六
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	四六上 二三八	一・五〇 ・一八
農學博士 小野武夫著	日本農民史語彙	四六上 四九二	五・五〇 ・三三

著（譯）者名	書名	型 頁數	定價 送料 円
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	四六上 四一八	二・五〇 ・二三
法學博士 末弘嚴太郎著	噓の效用	四六上 四五四	二・六〇 ・二三
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	四六上 四一三	二・五〇 ・二三
法學博士 末弘嚴太郎著	勞働法研究	四六上 五七六	五・〇〇 ・二四
法學博士 堀江歸一著	國際經濟總論	菊上 四一七	五・五〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	改訂増補 國際經濟と國民經濟	菊上 三四三	二・五〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	四六上 三九四	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（上卷）	菊上 五八四	三・〇〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（下卷）	菊上 五二一	四・〇〇 ・三〇
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册一）	菊上 五一六	五・八〇 ・二四
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册二）生產要因	菊上 四〇〇	五・〇〇 ・二四
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册三）需要・供給・價値の一般關係	菊上 四九八	五・五〇 ・二八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册四）國民所得の分配	菊上 五三〇	五・七〇 ・二八
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	菊上 三八〇	二・八〇 ・二四
慶大教授 野村兼太郎著	近世商業史	菊上 五九六	五・〇〇 ・二六
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	四六上 二三三	一・五〇 ・一八

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	四六上 一九八	二・〇〇 ・一〇
ブハリン原著 宮士辰馬・横田千元譯	唯物史觀	四六上 六三〇	三・五〇 ・一八
ブヘリン著 富士辰馬譯	世界經濟論	四六上 一九六	二・八〇 ・一二
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニニズム	四六並 二一四	一・二〇 ・一六
ヂ・ジノヴィエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	四六並 一六四	・九〇 ・〇四
持地六三郎著	日本植民地經濟論	菊上 三二〇	二・八〇 ・二二
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	四六並 二四〇	一・三〇 ・一六
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	四六並 二〇〇	・三〇 ・一二
森戸辰男著	學生と政治	四六並 二〇四	・三五 ・一二
森戸辰男著	思想鬪爭史上に於ける社會科學運動の重要性	四六並 一七二	・四五 ・一二
森戸辰男著	思想と鬪爭	四六上 三八六	二・〇〇 ・一六
ウンダーマン著 森實一譯	哲學思想の史的考察	菊上 二〇二	二・〇〇 ・二二
ヨゼフ・ディッツゲン原著 山川均譯	無産階級の哲學	四六上 三六八	二・五〇 ・一二
高橋龜吉著	資本主義末期の研究	四六上 三六六	二・五〇 ・一四
渡邊一郎著	勞働問題原理	四六上 三四〇	二・〇〇 ・二〇
高島素之著	マルキシズムと國家主義	四六並 二八六	一・〇〇 ・一六
アーサー・レウヰス著 高島素之譯	改訂社會主義社會學	四六並 二四八	一・〇〇 ・一六
高島素之著	社會主義と進化論	四六並 二三二	一・〇〇 ・一六
カウツキイ著 高島素之譯	改譯資本論解說	四六並 五六八	一・〇〇 ・一八

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
口田康信著	國家思想の研究	四六上 三四四	二・〇〇 ・一〇
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	四六上 五五〇	二・五〇 ・一二
法學博士 森莊三郎著	法制講話	四六上 四四〇	二・五〇 ・一二
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	四六上 二四六	一・五〇 ・一八
阪 内務事務官 三宅 司法書記官 著	補訂普通選擧法要綱	菊半截 二六六	・八〇 ・〇六
帝大教授 田中耕太郎著	法と宗教と社會生活	四六上 四〇八	二・五〇 ・三〇
帝大判教 廣濱嘉雄著	私法學序說	菊上 四六〇	四・〇〇 ・二六
京大教授 末川博著	ソヴィエトロシアの民法と勞働法	四六上 四二二	二・〇〇 ・一三
法學博士 高柳賢三著	現代法律思想の研究	菊上 八二〇	四・五〇 ・二七
文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	四六上 五四六	四・二〇 ・一六
文學博士 松本亦太郎著	智能心理學	菊上 一〇四〇	九・〇〇 ・四六
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	四六上 五二六	五・〇〇 ・二四
文學博士 米田庄太郎著	文化哲學叢書第一篇 リッケルトの歷史哲學	四六切	四・七〇 ・二六
板垣鷹穗著	文化哲學叢書第二篇 新カント派の歷史哲學	四六上 二二八	一・五〇 ・一八
帝大教授 恒藤恭著	文化哲學叢書第三篇 ジムメルの經濟哲學	四六上切 一四〇	三・〇〇 ・一二
廣島高師教授 [illegible]譯	文化哲學叢書第四篇 ディルタイの哲學	四六上 三三五	二・〇〇 ・一二
京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	菊上 三四一	二・七〇 ・二四
廣島文理大教授 清原貞雄著	日本道德論	菊上 四四四	四・五〇 ・二〇
廣島高師教授 長田新著	現代の教育哲學の根本問題	菊上 三二二	三・〇〇 ・二四

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
賀川豐彥著	生存競爭の哲學	四六上 三〇〇	二・〇〇 ・二三
帝大教授 武內義雄著	老子の研究	菊上 五二二	四・五〇 ・二八
佐藤繁彥著	體驗宗教の研究	四六上 三三六	二・〇〇 ・二〇
スティルネル著 辻潤譯	自我經	四六上 六六六	二・八〇 ・二八
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六上 二三四	一・五〇 ・一八
關寬之著	學校兒童心理學	四六上 四三二	二・七〇 ・二三
エム・シー・フールタイ著 長尾正人譯	遺傳學概論	四六 三〇八	一・八〇 ・二〇
松崎實編	校註 切支丹鮮血遺書	四六上 六六三	四・五〇 ・二八
有島武郎著	愛する人々へ	四六上 五〇〇	三・〇〇 ・二四
吉江喬松著	近代文明と藝術	四六上 三三四	二・〇〇 ・二〇
里見弴著	文藝管見	四六上 一九九	一・二〇 ・一六
文學博士 厨川白村著	苦悶の象徵	四六上 二一四	一・八〇 ・二〇
文學博士 厨川白村著	近代の戀愛觀	四六上 三〇〇	二・五〇 ・二〇
昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	四六上 七八六	四・八〇 ・三〇
帝大教授 阿部次郎著	學藝論鈔	四六上 四二三	二・二〇 ・二〇
帝大教授 阿部次郎著	北郊雜記	菊半上 五〇三	一・九〇 ・一八
帝大教授 村岡典嗣著	吉利支丹文學抄	菊上 三六六	三・五〇 ・二六
武者小路實篤著	文學に志す人に	四六上 一六六	一・三〇 ・一八
京大教授 太宰施門著	ロマンチック時代	四六上 二六八	二・〇〇 ・一八
理學博士 石原純著	戀愛價値論	四六上 二一三	一・六〇 ・一八
親佛文學會編	ゆかり	四六上 四〇〇	三・三〇 ・二〇
文學博士 高野辰之著	日本演劇の研究	菊上 四二一	四・〇〇 ・三〇
菊池寬著	文藝當座帳	四六上 二一四	一・五〇 ・一八
正宗白鳥著	文藝評論	四六上 三〇七	一・八〇 ・二〇
齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	四六上 一三三	一・五〇 ・一八
島木赤彥著	現代代表自選歌集 十年	四六上 一四〇	一・六〇 ・一八
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のほとり	四六上 一八六	一・八〇 ・一八
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	四六上 一八〇	一・八〇 ・二〇
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	四六上 三六〇	一・八〇 ・二〇
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	四六上 一五三	一・八〇 ・二〇
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	四六上 一五三	一・八〇 ・二〇
前田夕暮著	現代代表自選歌集 原生林	四六上 二一四	一・八〇 ・二〇
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	四六上 一六六	一・八〇 ・二〇
若山牧水著	現代代表自選歌集 野原の郭公	四六上 三五八	一・八〇 ・二〇
窪田空穗著	現代代表自選歌集 槻の木	四六上 一九〇	一・八〇 ・二〇
倉田百三著	超克	四六上 二九八	二・〇〇 ・二〇
賀川豐彥著	星より星への通路	四六上 二二七	二・〇〇 ・二〇
若山牧水著	樹木とその葉	四六上 三二七	二・〇〇 ・二〇

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	四六上 一九八	二・〇〇 ・一〇
ブハーリン原著 富士辰馬・横田千元譯	唯物史觀	四六上 六三〇	三・五〇 ・二八
ブハーリン著 富士辰馬譯	世界經濟論	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニニズム	四六並 二四〇	一・二〇 ・一六
ヂー・ジノヴィエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	四六並 一八四	・九〇 ・〇四
持地六三郎著	日本植民地經濟論	菊上 三三〇	二・八〇 ・二〇
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	四六並 二四〇	一・四〇 ・一六
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	四六並 一六〇	・四〇 ・一二
森戸辰男著	學生と政治	四六並 一六〇	・四五 ・一二
森戸辰男著	思想闘爭史上に於ける社會科學運動の重要性	四六並 一七三	・三五 ・一二
森戸辰男著	思想と闘爭	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇
ウンターマン著 森喜一譯	哲學思想の史的考察	菊上 一四二	二・〇〇 ・二〇
ヨゼフ・ディーツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	四六上 三八八	二・五〇 ・二二
高橋龜吉著	資本主義末期の研究	四六上 五三六	二・五〇 ・二四
渡邊一郎著	勞働問題原理	四六上 三九〇	二・〇〇 ・二二
高畠素之著	マルキシズムと國家主義	四六並 二八〇	一・〇〇 ・〇八
アーサー・レウヰス著 高畠素之譯	改訂社會主義社會學	四六並 二四八	一・〇〇 ・一六
高畠素之著	社會主義と進化論	四六並 二七三	一・〇〇 ・〇八
カウツキイ著 高畠素之譯	改譯資本論解說	四六並 五二八	一・〇〇 ・一八

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
口田康信著	國家思想の研究	四六上 三四四	二・〇〇 ・一〇
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	四六上 三五四	二・五〇 ・二二
法學博士 森莊三郎著	法制講話	四六上 四五四	二・五〇 ・二二
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	四六上 二四六	一・五〇 ・一八
內務事務官 司法書記官著	増補普通選擧法要綱	菊半截 二五六	・八〇 ・〇六
京大教授 田中耕太郎著	法と宗教と社會生活	四六上 四〇八	二・五〇 ・二〇
東大教授 廣濱嘉雄著	私法學序說	菊上 四六〇	三・〇〇 ・二八
京大教授 末川博著	ソヴィエトロシアの民法と勞働法	四六上 四一二	二・五〇 ・二二
法學博士 高柳賢三著	現代法律思想の研究	菊上 八二〇	四・五〇 ・二七
文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	四六上 五四六	四・〇〇 ・一六
文學博士 松本亦太郎著	智能心理學	菊上 一〇〇〇	九・〇〇 ・三六
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	四六上 六二六	三・五〇 ・二四
文學博士 米田庄太郎著	文化哲學叢書第一篇 リッケルトの歷史哲學	四六切	四・七〇 ・二六
板垣鷹穗著	文化哲學叢書第二篇 新カント派の歷史哲學	四六上 二八〇	一・五〇 ・一八
東大教授 恒藤恭著	文化哲學叢書第三篇 ジムメルの經濟哲學	四六上	三・〇〇 ・一二
教授 務臺理作著	文化哲學叢書第四篇 ディルタイの哲學	四六上 三〇五	二・〇〇 ・二二
東大教授 植田壽藏著	藝術哲學	菊上 三四四	二・七〇 ・二四
女高師教授 清原貞雄著	日本道德論	菊上	[illegible]
教授長 田[illegible]著	現代に於ける哲學の根本問題	菊上	[illegible]

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

著者	書名	判型・頁數	定價	送料
賀川豐彦著	生存競爭の哲學	四六上 三六〇	二・〇〇	・二二
京大教授 武内義雄著	老子の研究	菊上 五三三	四・五〇	・二八
佐藤繁彦著	體驗宗教の研究	四六上 三三六	二・〇〇	・二〇
スティルネル著 辻潤譯	自我經	四六上 六六八	二・八〇	・二二
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六上 二三四	一・五〇	・一八
文學博士 關寬之著	學校兒童心理學	四六上 四二六	二・七〇	・二二
エム・シー・コールタイ著 長尾正人譯	遺傳學概論	四六 三三八	一・八〇	・二〇
松崎實編	校註 切支丹鮮血遺書	四六上 六六二	三・五〇	・二八
有島武郎著	愛する人々へ	四六上 五四四	三・〇〇	・二四
吉江喬松著	近代文明と藝術	四六上 三三四	二・〇〇	・二〇
里見弴著	文藝管見	四六上 一九八	一・二〇	・一六
文學博士 厨川白村著	苦悶の象徴	四六上 二一四	一・八〇	・二〇
文學博士 厨川白村著	近代の戀愛觀	四六上 三三七	二・五〇	・二三
昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	四六上 七八六	四・八〇	・三〇
東北帝大教授 阿部次郎著	學藝論鈔	四六上 四二三	二・二〇	・二〇
東北帝大教授 阿部次郎著	北郊雜記	菊半上 五〇三	一・九〇	・一八
京大教授 村岡典嗣著	吉利支丹文學抄	菊上 三六八	三・五〇	・二六
武者小路實篤著	文學に志す人に	四六上 一六六	一・三〇	・一八
京大助教授 太宰施門著	ロマンチック時代	四六上 二六八	二・〇〇	・一八

著者	書名	判型・頁數	定價	送料
理學博士 石原純著	戀愛價値論	四六上 二三三	一・二〇	・一八
親佛文學會編	ゆかり	四六上 四四	三・〇〇	・一二
文學博士 高野辰之著	日本演劇の研究	菊上 四二二	四・〇〇	・三〇
菊池寛著	文藝當座帳	四六上 二一四	一・五〇	・一八
正宗白鳥著	文藝評論	四六上 三二七	一・六〇	・二二
齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	四六上 一五五	一・五〇	・一八
島木赤彦著	現代代表自選歌集 十年	四六上 一四四	一・五〇	・一八
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のほとり	四六上 一八八	一・八〇	・一八
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	四六上 一八八	一・八〇	・一〇
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	四六上 三六六	一・八〇	・二〇
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	四六上 一五五	一・八〇	・一〇
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	四六上 一五五	一・八〇	・二〇
前田夕暮著	現代代表自選歌集 原生林	四六上 二一四	一・八〇	・一〇
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	四六上 一六六	一・八〇	・二〇
若山牧水著	現代代表自選歌集 野原の郭公	四六上 三三六	一・八〇	・一〇
窪田空穗著	現代代表自選歌集 槻の木	四六上 一四三	一・八〇	・一〇
倉田百三著	超克	四六上 三九九	二・二〇	・二〇
賀川豐彦著	星より星への通路	四六上 三七七	二・〇〇	・二〇
若山牧水著	樹木とその葉	四六上 三〇七	二・〇〇	・二二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
長谷川如是閑著	改造社隨筆叢書第一篇 犬・猫・人間	四六並 四〇三	一・八〇 ・一八
堺利彦著	改造社隨筆叢書第二篇 野外劇の一幕	四六上 二六八	一・九〇 ・一八
中澤臨川著	改造社隨筆叢書第三篇 風の前	四六上 二二四	一・五〇 ・一八
高濱虛子著	改造社隨筆叢書第四篇 朝の庭	四六並 三〇六	一・七〇 ・一八
武者小路實篤著	改造社隨筆叢書第五篇 筍の向くまゝ	四六並 二〇四	一・二〇 ・一四
河東碧梧桐著	改造社隨筆叢書第六篇 二重生活	四六並 二一〇	一・三〇 ・一二
文學博士 新村出著	南蠻更紗	四六上 三九八	二・六〇 ・二二
野口米次郎著	先驅者の言葉	四六上 一〇〇	一・八〇 ・一八
野口米次郎著	坐る人間の評論	四六上 三一六	二・〇〇 ・一八
富田溪仙 下島空谷編 著	溪仙八十一話	菊上 三四〇	三・〇〇 ・二二
岸田國士著	言葉・言葉・言葉	四六上 二四八	一・八〇 ・一八
文學博士 幸田露伴著	幽秘記	菊上 三三八	二・二〇 ・二二
文學博士 幸田露伴著	龍姿蛇姿	四六上 三二三	二・八〇 ・二二
醫學博士 土肥慶藏著	鶚軒游戲	四六上 四六六	三・〇〇 ・二二
文學博士 瀧精一著	文人畫概論	菊上 品切	二・二〇 ・二二
板垣鷹穗著	美術史論集 表現と背景	菊上 一九九	三・八〇 ・二二
岸田劉生著	圖畫教育論	菊上 一三六	三・五〇 ・二二
矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	四六上 二二四	一・五〇 ・一八
醫學博士 木下杢太郎著	支那南北記	四六上 二八八	三・〇〇 ・二二

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
改造社編	大正大震火災誌	四六倍 八〇〇 寫眞內	一・五〇 ・四〇
ピシャラ・ナハス著 高[illegible]譯	ツタンカーメンの生涯と時代	四六上 一三二	一・八〇 ・一八
村松梢風著	近世名匠列傳	四六上 三〇六	二・〇〇 ・二〇
山川均著	改版 レーニンとトロツキー	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
大杉榮著	自敍傳	四六並 三〇四	二・八〇 ・一八
文學博士 幸田露伴著	評釋 平將門	菊上 二八〇	二・〇〇 ・二二
文學博士 幸田露伴著	賴朝・爲朝	菊上 三八八	二・〇〇 ・二二
柳澤健著	ジャン・ジョレス	四六上 三三二	一・五〇 ・一八
堺利彦著	堺利彦傳	四六上 三四四	一・九〇 ・二〇
野口源三郎著	オリンピアへの旅	四六上 四四八	二・〇〇 ・二〇
芥川龍之介著	支那游記	四六上 二七六	二・〇〇 ・二二
賀川豐彦著	雲水遍路	四六上 五二六	三・〇〇 ・二六
帝大教授 河合榮治郎著	在歐通信	四六上 四三三	二・〇〇 ・一八
理學博士 石原純 他共編	アインスタイン全集 全四冊	菊上	各冊 三・〇〇 ・二六
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六上 二二四	一・五〇 ・一八
佐藤充 庄司彥六 共著	近代物理學概觀	菊上 二二四	三・〇〇 ・二二
中澤臨川著	電子說から見た世界	四六上 二四〇	一・八〇 ・一八
佐藤春夫著	童話 ピノチオ	四六上 二九六	一・八〇 ・一八
關寛之著	學校兒童心理學	四六上 二二二	二・七〇 ・二二

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

朝鮮紀行

若山牧水

その一 珍島

朝鮮全羅南道珍島なる福島勉君は永い間の我等が歌の仲間である。ツイ一昨年までは神戸の或る會社に勤めてゐたが、今はその珍島なる島に赴いて郵便所の所長をしてをるといふ。そして頻りにわたしに來遊を促して來た。單に遊びに來いといふでなく、この一二年間或る必要から催して來たわたしの揮毫會をも朝鮮で二三ヶ所開いてはどうかといふことであつた。行きたさは行きたし、近來ひどく弱つてゐる自分の健康は氣になるし、暫く迷つたが、介抱役に妻を同伴することにして愈々出懸くる事にきめた。

早速朝鮮の地圖を買つて來て先づその珍島を探したが、おもひの外の邊鄙な、そして澤山の島のごた／＼してゐる中に漸くそれを見出した。福島君もたいへんな所に住みついたものだと思ひ、また自分自身もたいへんな所まで出かけて行くことになつたものだと思うた。

ずつと大田まで出迎へてゐてくれた福島君と共に光州經由木浦を廻つて、いよ／＼五月廿七日の午後二時木浦港を發動汽船で出て珍島に向うた。木浦の坂本喜一郎君も同行する事になつた。

なるほど島の多い海であつた。港を出るとから直ぐこの小さな汽船は島よりの間を縫うて進んだ。大きな島、小さな島、木のある島、裸體の島、多くは無人島らしいそれらを右に左に眺めつつ進んだ。このあたりは潮の干滿の著しいので有名な所ださうで、その差は十五六尺にも上るのださうだ。昔、豐公の征韓役の時、日本の水軍（加藤嘉明等であつたか）がこの地理を知らなかつたゝめ散々に敵に惱まされたのも此處だつたさうである。で、今でも餘程潮の時間を計つてでなくては船はやれないのだといふ。

夕方、碧波津船着場に着いた。其處には福島君の兄さん福島一郎氏が出迎へて居た。そし、導かれて同所の同氏宅に赴き、一泊する事になつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二郎氏は同島に移住した内地人の極く最初の人々の一人ださうで、今は專ら干拓事業に當つて居らるる様子である。干拓事業といふのは初めて知つた事であるが、陸地に深く入り込んだ入江の干潮時に乘じてその口を封じ、中の干潟を田畑とする事業なのである。前に云つた様に潮の干滿が烈しく且つ海岸の屈折が强いので、この事が出來るのだといふ。

然し、何を云ふにも動揺烈しい大海を相手の仕事であるため困難は云ふまでもなく、幾度か失敗し、絶望し、いま漸く安定を得る所まで漕ぎつけられたのだといふ。珍島だけに三個所の工事を起し、二ケ所は完成し、一ケ所だけ今なほ工事中とのことであつた。然し、出來上れば何十町歩といふ大きな田畑がひよつこりと海底から浮き上るわけである。

同氏が工事を起された當初は單に工事が困難であつたのみならず、まだ土地の鮮人たちに不穏の氣の漲つてゐた頃であつたため、いつどういふ事が起るも知れず、内地人同志相警めて夜も眠らぬ様な時日がかなり長く續いたのであつたさうだ。現に今日我等の乘つて來た發動汽船なども今は普通の交通機關となつてゐるが、最初は單にさういふ意味でなく、萬一事の起つた場合に内地人だけそれに乘つて逃げ出すための用意であつたのださうである。

それこれの事新しい話を聞きながら夜遲くまで馳走になつた。

五月二十八日。

朝、眼が覺めてゐると頻りに雉子の啼く聲が聞える。お天氣らしいと起き上つてみると見ごとな日和である。雉子は家の背戸から續いた入江沿ひの小松山で啼いてゐるのであつた。庭に出て見ると潮は殆んど庭先の道路の縁を浸さうとしてゐる。そして何の魚だか、閑かな平らかな潮の上に頻りにぴちくと跳ねてゐるのが見えた。その閑かな入江の奥を限つてがつしりした石垣の土堤が築かれてあつた。それが即ち干拓事業の第一歩をなす潮止めの土堤であるのだつた。

食後、その土堤を見に行つた。一つの入江の袋口になつた場所を堰いたわけだが、それでもかなり長い土堤であつた。滿潮の時の潮の壓力に耐へ、折々起る風浪に耐へるために、土堤は隨分と岩乘に築かれてあつた。それでも一二ケ所、まだ不備な所があつて、其處から内に向つて凄じい勢ひで潮水が迸つてゐた。迸り出た水の深い淀みを爲した所には何やら細長い魚がいつぱいに群れて泳いでゐた。鯔だといふ。

やがて二郎氏方を辭して邑内なる勉君方に向うた。一里近い道であつた。邑内とはその地方での主都を意味するらしく、例の土饅頭の様な鮮人家屋のひしくと群り合うた大きな部落であつた。

その部落を抜けた山の根寄りの所に勉君の家はあつた。昔、然るべき兩班でも住んでゐたかと思はれる四方の塀のものくしく反りあがつた家屋の玄關に珍島郵便所の木札が掲げられてあつた。古びた屋根の上にはこの邊に珍しい松の古木が枝を張つてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

五月二十九日。

この朝、珍しいものを見た。木浦から一緒に來た坂本君は慶應義塾の出身で、もと同校劍道部の選手、四段の腕前なのださうである。それを知つてゐるこの土地珍島警察署の人たちは、同君の來た事を聞くと無理にも一本稽古を賴むといふことで、朝早くから同君を引つ張つて行つた。更らにわたしを驚かしたのは身のたけわたしにも及ばぬ小男の勉君がまた同じく二段の使ひ手だといふことで、揃つて出かけて行つた。オヤ〳〵と思ひながらわたしもそのあとについて行つた。

稽古は凄じいものであつた。血氣さかんな十四五人の人を相手にわが兩君は悠々として稽古をつけて行つた。彼には稽古を通り越した眞劍さで、精盡きて倒るる者二人三人と相次いだ。見てゐるわたしすらいつか知ら四肢固く、涙はおのづと眼に浸んだ。一種の必要からか朝鮮一帶に警察官の尙武熱、就中劍道の熱は盛んだとかで、此處の警察にもなか〳〵の使ひ手がゐるのださうである。坂本君が來たといふのを聞いて昨夜直ちに附近二三里の間に在る駐在所在勤の人たちにまで使を走らせ、その人たちはまた夜道を踏んで今曉此處に集つたのだといふ。

夕方、思ひもかけずこの邑內在住の內地人諸君から招待されてお酒をいただいた。會する人二十人あまり、男ばかりではあつたが老いたる若き、これで此處の內地人全部なのださうである。わたし先づ醉ひ、諸君も醉うた。或る人はわたしの腕を拉へて、時々斯うした事が無くては寂しうていけませぬと云うた。九州出身の人多く、わたしの生國日向の人も三人あつた。また、現在わたしの住んでゐる靜岡縣の人も一人ゐた。

五月三十日。

酒を過した時のわたしの癖で、朝は必ず未明に眼が覺め、覺めたら最後苦しくて寢てゐられない。今朝もそれであつた。ひそかに床を出で、一枚の雨戶をあけ、戶外に出た。

戶外はうす蒼く明けてゐた。鵲が二三羽、けたたましく附近の木で啼いてゐる。その聲に混つて聞えるのは例のポツタン〳〵と布を打つ洗濯の音である。しかもツイ近くから聞えて來るのでぶら〳〵とその方へ歩いて行つた。

幾らか傾斜を帶びた麥の畑が隣々と家の横手にあつた。音はその中から起つてゐるのである。露の小路に足袋を濡らしながら行くと、畑の中の一個所に小さな凹みがあり、周圍には野菜など茂つてゐた。其處は自然にあつたものか掘つて作つたものか小さな泉となつてゐた。泉から流れて出る小さな流を堰きとめて洗ひ場を作り、いま二人の女が手に手に杵を持つてせつせと布を叩いてゐる所であつた。一人のやや年とつた女は既に洗ひ終へて立ち上る所であつた。其の濡れる布を籠に入れ、籠を頭に載せて立ち上つた。じつと見てゐるものも面伏なの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、わたしも小路を引返した。そのあとから彼女はすべての彼女等がする様に姿勢ただしい恰好なり足取なりで歩いて來た。

畑の一方なだらかな隅となつてゐた。頂上にだけ樹木が茂り、その蔭は青い草地であつた。甕をいただいた女はその草原に寄つてゆき、甕から取り出してその中の布を乾すのであつた。斯うして畑の中腹などに干しひろげられた布をば今まで到る所で見て來たのであつたが、現在干しひろげるのを見るのは初めてで、異つてゐるせいか青草のせいかとりわけてもその布が白い様に眺められた。そしていつもながら思ひ出されるのは持統天皇の『春過ぎて夏來るらし……』の一首であつた。折も折、その季節でもあつたのだ。

乾し終へた女はまた悠々と甕をいただいて畑を降りて來た。歸つてゆくうしろ姿を見やりながらわたしは行くともなくそのあとに從りた。鮮人部落の中を一度通つて見たいと思うてゐたからである。

思つてゐた以上に彼等の小さな家居はこんでゐた。殆んど隙なくつづきの様にして、その丸やかな藁屋根を並べてゐるのである。屋根の下の部屋は極めて狹く、日本流に云つて四疊半に二疊か三疊の小さな部屋をくつ着けた二間ほどのものである。その中に出入りする彼等の、ことに子供たちの騒々しさは見てゐられないものであつた。ただ、老人だけは大概長い鬚を垂らし、ともすれば小さな冠をかむり、手に長い煙管を持つて部屋の隅か出入口の柱に背をもたせてぼんやりと膝を立ててゐるのであつた。

部落の中にも井戸があつた。一坪ほどの廣さに湛へた水を、高さ一間か一間半の石段を降りて行つて汲む様になつてゐた。石段を踏んで長く垂らした娘たちが汲みに來てゐた。めいめい甕をいただいて來てはそれをおろし、中に入れて汲んだ。パカチ（丸い瓢箪を半分に割つたもの）で水を汲み満たしてはその上にパカチを浮かし、また片手に頭に載せて歸つてゆくのであつた。漸く朝日がさしそめて、その井戸の中を照らした。清水とは云つても濁りに近い何やらのごみごみしいものがその日光に照らし出されて見えた。

魚市場らしい所にも通りかかつた。道ばたに板またはアンペラ様のものを敷き、それに魚を置き並べて賣るのである。賣る者も買ふ者も、何といふ喧しさ、口ばかりか手を振り足を踏んでおらび立ててゐる。斯くすること多時、漸くにして一尾の魚なり鰈なりを提げて歸つてゆくのである。手交される錢の額を知りたいものと思うた。

何處へ行つたかと云ひ合はされてゐるなかにわたしは珍しい散歩を終へて歸つて行つた。朝食を濟ますとこれから五里ほど離れた竹林洞といふ所にある福島家の別莊へ出かけることになつてゐたのだ。

既に四人のチゲ（チゲとは元來内地の田舍にて薪を負ふに用ふる道具に似た類をさす名であるが、それを負うて稼業をする鮮人を稱しても直ちに斯く呼ぶのださうだ）が食物や寢具を負うて出かくる所であつた。チゲとは云つても髮を結び鬚を垂らし、中にはまさしく我が郷の郡内縣廳を見るごとき堂々たる骨格の老人もゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

チゲ達を出しておいて始めた朝酒がかなりに永びき、待たしてあつた自動車に催促されて漸く出かくる事になつた。道路とても少なからうこの島に自動車のあるといふ事が可笑しく思へるのであるが、とにかく一臺だか二臺だかあるのださうだ。勉君、坂本君、我等夫婦のほかに一疋の犬が乗つた。犬をばその別莊の番をしてゐる男に呉れてやるために連れて行くのだといふ。ところが、この犬先生、忽ちに自動車に酔つてきたない事をした。止むなく下におろすと、長い舌を垂らしながら遅れじものと車のあとを追駈けて來るのであつた。

三里も走つたか、小さな部落で止つた。そして其處には先發の下男の世話で馬が四疋用意されてあつた。いづれも丈の低い朝鮮馬で、首には鈴をつけ、赤や黄の布地で化粧してゐた。

馬に乗るのが大騒ぎであつた。勉君を除くほかは三人とも馬が初めてなのである。ただわたしは一二度乗せられた經驗が無いではないが要するにそれも荷物として載せられたに過ぎなかつたのだ。先頭が勉君、次ぎが坂本君、妻、わたしといふ順序で、兎にも角にも出立した。鈴の音ばかりは賑かだが、乗つてをる當人たちは甚だ穏かでない。第一、その小さな馬にめい〳〵力いつぱいにしがみついてゐる恰好と云つたら、何とも云へぬ滑稽なものであつた。わたしは殿であるだけに、そのめいめいの乗り振りを見て行かねばならず、何かと云つては笑ひ出した。

『それなら一つ先生の乗り振りを見てあげよう』

と、勉君が馬をかへしてわたしのあとになつた。

『いや、これは不思議だ、先生のはどうやら型に入つてゐる』

といふ。一度なり二度なり乗せられた事が役立つてゐたものと見える。どう見ても可笑しいのはあとの二人である。劍道四段も此處では一向役に立たない。第一、しがみついたその五體の大きさが馬の背恰好より大きい位ゐなのだからあはれである。妻の姿と來ては更らに見ものて、下手な競馬の騎手を見る樣に自分の胸を馬の頸に當て尻をばぐつと高くしてしがみついてゐるのである。

しやんらん〳〵と鈴の音ばかりは明るくも賑かである。道は小松山と小松山との間を行くので、折々は首をちぢめねば小松の枝に引つかかりさうであつた。雉子がよく啼いた。一羽が一方で啼けば向うの松山で一羽啼く。非常にこのあたりこの鳥が多い所ださうである。路ばたいつぱい春龍膽の花の咲き亂れてゐるのも珍しく且つ美しかつた。妻の最も好きな花なので、どうだどうだと呼びかけても返事どころの沙汰ではなかつた。相も變らず首は頸に、甲斐々々しく裾を端折つたお尻のみはともすれば鞍を離れて天上せむずる氣勢を示してゐるのである。こつくり〳〵と運ばれながら、何といふこととなく無性にわたしは可笑しくなつた。何を見ては笑ひ、彼を見ては笑つた。やがて勉君にもそれが傳染つた。二人の馬鹿笑ひの間にはしやんらん〳〵と鈴の音、間近の茂みからはけん〳〵、けん〳〵と啼きあげて雉子が幾度もまひたつた。高麗雉子といふので、雉子のうちでも最も美しい種類な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のださうである。

峠の様な所を越ゆると海が見えだした。青やかに凪ぎ渡つた秋の海である。

「此処らでお昼にしませう」

勉君が呼んだ。

馬をとりかへるなどの事あつて、程なくまた出発した。昼飯と共にあふりつけた冷酒が意外に利いて、今度はこつちの尻が怪しくなつた。ことに登りより降り坂は乗りづらかつた。自づと笑ふ勇気も抜けてこつ〳〵と歩ませてゐると、今度は眠気が出て来た。が、用心せねばならなかつた。今までと違つて路の右下は嶮しい傾斜となつて直ちに海に臨んでゐた。

眠気ざましにわたしは大きな声を張りあげて唄の朗詠を始めた。勉君もこれに和した。それ〳〵に馬の口をとつた四人の鮮人たちも初めは黙つて聞いてゐたが、終には浮れてか何やら唄ひ初めた。恐らく土地の俗謡であらうが、殆んど鼻声ばかりから出来てゐる様なその間調の節廻しを聞いてゐると可笑しいたかにも自づと哀愁が催されて、わたくしはいつか真面目に耳を傾けてゐた。しやんらん〳〵の鈴の音もよくその節廻しに合つた。

その頃であつた、わたしは不思議なものを見出した。路の左手は崖となつて居る。崖の根は白い浪の起りつ消えつしてをる磯であるが、そしてその磯の尽きた所は[illegible]りに湾曲した白砂の浜となつてゐる。その向うは直ぐまた山で岩の黒々しい断崖となつてゐた。断崖と断崖とに囲まれた入江の浜は小さいながらに美しい浜であつた。折しもいま引潮と見え、清浄な白砂の上にはだんだら折りに白々と波が寄せてゐた。その浜の手前、丁度わたしたちの通つてゐる細路の下に当る磯の岩にわたしは不思議なものを発見したのである。

初めは人だともおもうた。が、どうも可笑しいと唄をもうたひやめて見てゐると、これはまたどうであらう、その岩の上に立つてゐたものは俄かに大きな羽根をひろげてまひ立つたのである。

「鶴！」

わたしは叫んだ。

と同時に更らに驚いた事は、まひ立つた一羽につれて今まで気のつかなかつた其処等の岩から一羽二羽と、終に三羽の鶴の鳥が豊かに豊かに大きな羽根をうちのして海の方に翔ひ出でたのである。

「鶴だ、真鶴！」

勉君も叫んだ。

四人は馬を停めた。しやんらん〳〵の音もやんだ。鶴は暫く海の上を翔うてゐたが、やがてまた相引いてまひ返り、今度は磯つゞきの干潟の砂におり立つた。

朝鮮に鶴のゐることは聞いてゐたが、現在斯うして眼の前にまひあそぶそれを見ようとは思ひがけぬことであつた。

「これはこの辺に巣ごもりしてゐる鶴ですね。」「今時珍しいことです」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と勉君が説明した。

馬の頸から漸く首を離して妻もわたしの方を振返つた。顔は眞紅である。

しやんらん〳〵と一列はまた動き出した。

先刻の鶴がまた出て來たか、異常の出來事に心が醉うたか、わたしは茫然と恍惚してゐたが、終に口から出まかせに即興の歌をうたひ出した。

潮干潟さゝらぐ波の遠ければ鶴おほどかにまひあそぶなり

潮干潟いまさす潮となりぬればあさりをやめて鶴はまふなる

うちわたす干潟のくまの岩のうへに眞鶴たてり波あがる岩に

おほどかに一羽の鶴はまひたてり三つ並びたるなかの一羽は

三首四首と出來るに從ひ聲をかぎりに歌ひあげた。いささかは聲自慢のわたしの聲が見苦しく慄へて出た。何事ぞ、と馬をとどめ海に向うて歌ひ直せば、更らにも亂れた。歌を唱へると勉君がまたこれに和した。

二人して相歌ひながら、いつか崎山の鼻を過ぎ、鶴の遊んでゐた白濱の線にかかつて來た。鶴たちは早や我等の一行に氣づくと共に悠々と羽根をのべて白浪の立つてゐる背後の方の崎山の鼻へまつて行つた。歌をもうたひやめたわたしたち二人が漸くその濱に降りて來ると、其處にはまた異樣な光景があつた。坂本君と喜志子女史の二人は其處で競馬を始めてゐたのである。しやんらん〳〵と轡を並べてひた走りに走らしてゐる。而して坂本君の背は愈々平たくつぶれて馬背を掩ひ、喜志子女史のお尻はいよ〳〵高さを加へて太さまたこれに添ふべく見えた。

勉君が大きな聲を出してその二人の馬子を呼びかけたが、聞えぬのか言葉が通ぜぬのか、しやんらん〳〵とひた走りに走り續けた。我等二人の馬子はそれを見て何やら云ひ合ひながらげら〳〵と笑つてゐた。

漸く我等二人が追ひついて見ると其處は例の土饅頭式の家の十か二十も集つた一つの宿場となつてゐた。其處で馬からおろされた妻は半泣きの顏をしてぼんやりと一軒の庭先に立つてゐた。それを見ると我等の馬子も馬をつないで、妻の前に行つて何やら云ひながら頭を下げて、其處の家の中に入つて行つた。

『奥さん、あなたはヨボどもに何かおやりぢやなかつたですか』

勉君が訊いた。

『えゝ先刻お茶の時に一人に五十錢づゝやりましたわ』

『それで解つた、彼奴等はそれで急に酒が飲みたくなつて夢中で馬を走らせたのですよ、御らんなさい、其處は酒屋です。』

且つまた五十錢といふ金は彼等にとつては並ならぬ大金なのだから

である。現に今日一日の彼等の日當がほゞそれ位ゐのものだといふ。普通一日十錢そこ〳〵の錢で彼等は生活してゐるのださうである。大きな椀で濁酒を啜つてゐる彼等に勉君は何やらきびしく云ひつけておいて、サテ我等だけぼつ〳〵と歩き出した。馬の腹帶を締めつけてゐたせいか、皆の足どりが大分捗さうに見えた。

それ〴〵に鞭を添くし、しやんらん〳〵と四足の駿を走らせながらそれでも案外早く彼等はあとを追うて來た。いや〳〵ながらにそれに乘ると、また小松山の嶺りにかかつた。今度は隨分と嶮しい登りで、もう歌をうたふ元氣もなく、ひとの乘り振を見廻す餘裕もなかつた。ただ落ちまい一心に馬につかまつてゐるのみであつた。見るともなく見廻はす路傍の松林の小松には殆んど葉といふものが無かつた。今年、松毛蟲といふ害蟲がわいて、手のつけやうがないのださうである。

漸く峠に出た。思はず知らず大きな聲をあげたほど、其處の眺めは大きくまた美しかつた。紺碧に晴れ渡つた大海はやゝ傾きかけた太陽に向つてうち開け、海のところ〴〵に浮んでゐる大きな島小さな島はすべてほのかに煙らひながら光と影とを含んで浮んでゐた。

峠から少し下りかけると崎山と崎山とに圍まれた僅かの平地に例の土饅頭の家の四五軒ほどかたまつてゐるのが見えた。其處が目指す竹林洞であるのださうだ。我等の馬の鈴音が聞えたか否か、家々から走り出て數人の人が一團になつてこちらを仰いでゐるのである。

漸くに下りついてその別莊といふのの砂地の庭におり立つた。二郎氏は早や既に此處に先着して待ちうけてゐたのであつた。別莊とは云つても同じ樣な鮮人家屋に僅かに手を入れたもので、部屋は二つ、部落の一番高みに在つた。この竹林洞はこの家を入れて全てゞ六軒しかないのださうである。それ等の家屋を初め附近の土地、土地を圍んだ此處等一帶の松林等、すべて二郎氏の所有に屬するものださうだ。

二郎氏かたの下男某、同じく勉君方の金米述等も先着してゐて何彼と準備を整へてゐた。やや驚いたのは今朝我等より僅か前に出立したチゲたちが早や此處に到着して荷物一切をおろし置き、既に歸り去つてゐたことであつた。もつとも、近道もあるのだといふ。

部落中の女子供が庭先に集つた。立つ者、砂に坐る者、すべてしげしげと我等の一擧一動に見入つてゐるのである。妻はこれらの子供たちに何か土産を買つて來てやればよかつたとくやんだ。そしてそれは今日これから歸る二郎氏方の下男に托して買ひ求め、明日また邑內から來る事になつてゐるといふチゲに持たしてよこして貰ふことになつた。五軒の家に、數へたてて見れば二十人からの子供があるのださうである。

やがて庭に集つた此等の中から上衣は純白、裳は黄色の絹の晴着をつけた三十歳あまりの小柄の女が一人出て來て叮嚀に我等に挨拶した。聞けばこの部落の差配をさしてある朴義千といふのの妻女であるのださうだ。言葉が通ぜず、唯だ笑顔をかはし合ふほかはなかつた。やがてその主人の義千も殺した鷄を提げてやつて來た。妻女の二

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

倍もある大男であつた。彼は怪しき日本語を知つてゐた。

場所が場所であるせいか、その日の晩餐は誠に興味深いものであつた。二郎氏初め我々まで立つて火を熾し、魚を料理し、持つて來た皿や茶碗を洗ひなどしてその席を作つた。

松葉焚く厨のけむり匂ふなり
まだ灯ともさぬ酒のむしろに

二郎氏は前にも云つた干拓事業其他、この島に渡つて以來幾多の困難に出會ひ、幾度か蹉跌し、はては自ら死をおもふ樣な場合に一再ならず遭遇した。さういふ場合、彼は家族をも除けて唯だ一人米と鹽とを持つてこの竹林洞のこの小さな家に籠つた。籠つて徐ろに自分の心を鎮むるのを常とした。半年から一年、この家から一歩も出でず、誰にも逢はないといふ樣なこともあつたといふ。

さう聞けばこの小さな家が一層なつかしいものに見廻された。夕方からはばら／＼と雨が來た。窓をあけると松原ごしに海が見え、靜かに寄せてをる小波の音も聞えた。

五月三十一日。

朝から靜かな雨であつた。

午前中、手傳つて貰つて二三十枚の揮毫をした。斯ういふ所に來て斯ういふ拙い字を書き散らすことかとそぞろに悲觀しながら、半裸體になり、コップの酒をあふりつけつつ片附けた。また、雨の間を見ながら磯に出て小さな貝を拾つたり、岡に啼く雉子の所在を探したりした。

部落のヨボたちがいろ／＼のものを持つて來て呉れた。魚や（名を忘れたが内地に見られぬ種類があつた）蟹や、貝などを。前に云つた樣なことからか、二郎氏はこの竹林洞のヨボたちを大變に可愛がつて、家も畑も無料で借してやり、燃料なども附近の山のを自由にさしてあるのださうだ。で、氏が此處に來れば斯うして歡迎の意を表するのだといふ。

妻の註文の菓子が來た。金米述が大きな聲で呼び立てると近所の家から子供は勿論大人までもついて出て來て庭に集つた。子供だけでもさに二十人からゐるのである。目分量で一人々々に分けて行くとあとではやゝ不足を感ずる位ゐであつた。

夜はまた靜かな酒、ヨボたちの贈物で御馳走も豐かであつた。

六月一日。

晝も夜も、何といふこともなく夢の樣に暮してしまうた。不意に斯うして珍しい所へ來てゐる事を考へて見るとまつたく夢の國に來てゐる樣なものであつた。

雉子頻りに啼き、背戸の松には鵲がかしましかつた。

六月二日。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今日は歸る日である。舟をしたてゝそれに乘つた。あはれであつたは朴義千かたに勉石のやつて來た犬のシエリーが我等の舟の出るのを知つて際を限りになきたてたことであつた。あとを追ふだらうといふので豫じめ義千の家に閉くつないでおいたのであつた。

二挺の櫓で漕ぎ出して一つの崎の鼻を廻るまで濱には五崎の人が總出で立つてゐた。そして終にこの夢の樣な村も見えなくなつた。一時間あまり漕いで金甲里といふ部落に着くと打合せてあつた自動車が來てゐた。

邑內の勉石方に歸り、明日出立の用意などした。夜は警察署長の宅に招かれて馳走になり、醉うて歸れば勉石方にはまた先日來崎馴染の數人の人が酒を煮て待つてゐた。

六月三日。

竹林洞を夢の國だと云つたが、更らに考へて見るとこの珍島全體がまたそんな感じのせぬでもなかつた。地圖の上でもなかなかに見出しかねる樣なこの島に緣あればこそよくも來たものだと思ひつゝ、多勢の見送りを受け、海倉里から先日の發動船に乘つてこの島を去つた。

左樣なら、珍島。

左樣なら、珍島の人々。

その二　金剛山

六月十三日。

もうこれから此處の驛に行つてゐたのでは間に合ひますまい、いつそ二驛先の福溪里まで此儘自動車で飛ばしませう、それが確かだと市川氏令息は云ひながら運轉手にその旨をいひつけた。一週間の京城滯在を終へ、けふこれより我等夫婦は金剛山登りに赴かうといふのである。

福溪里驛ではゆつくりと間に合つた。市川氏夫妻に滯在中の禮を述べ、折柄の好晴を喜びながら乘車した。丁度午前九時であつた。

汽車の左右に一帶の細長い平地があり、それを挾んで二つの山脈が連亙してゐた。山はこの國特有の岩山であるが、やはらかな日光を受けて峰から峰にかけ、奧深くうち煙つてゐる樣に見えた。うとうとしてゐると或る驛でわたしは呼び覺された。そして一人の婦人から正宗の一升壜を手渡された。婦人は昨日京城の歌の會に出席してゐた人で、この汽車で我等が今日此處を通ることを夫から聞いて待受けてゐられたのださうだ。此處の驛の驛長夫人であつた。

鐵原驛下車、午前十一時四十分。二三驛前からすつかり四邊の高原風になつたのを感じてゐたのであるが、此處に降りて見ると一層それが明らかになつた。うち渡す野原、それを限る山脈、ばらばらに散在しながら地にくつ着いてゐる樣な家屋、すべての感じが高原である。乘換の時間を急ぐので、驛で賣つてゐる辨當二つを買ひ、ふところに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れな込んで次ぎの電車に乘つた。

走り出した電車のなかで辨當を開いたが、近來の癖で一向に食慾なく、唯だ東豆川野々長夫人の贈物に今更ながらに感謝してそれをのみ嚼め味はうてゐると、わたしとさし向ひに乘つてゐた一人のヨボが、ヨボの齡は誠に解りにくいが中年過ぎに見える立派なヨボが、膝の上に置いてあるわたしの辨當を指ざして突然何やら云ひ出した。にや〳〵しながら頭を下げてゐる姿にやや驚いたが、これがほしいのかとわたしは反問した。双方とも言葉は通じない「左樣です」とそれを傍から見てゐた年若いヨボが笑ひながら通譯した。わたしは辨當を渡した。それを見ると今度は一人の女のヨボが、いきなり妻の前に出て來て同じく辨當を指ざしながら何やら云つた。我等は相顧みて苦笑したが、妻も同じくそれをその女に譲つた。妻はまだ自身で箸を動かしてゐたところであつた。

電車は炭甘里といふ部落で終點になつてゐた。降りると直ぐ驛前に金剛山行の乘合自動車が待つてゐた。幸ひ我等夫婦のみにて發車、快き速力で走り出した。これより廿二里の山路を走らればならぬのだ。

この附近で幾つか通り抜けた部落は何やら古風で物寂びてゐていかにもこの國土着の人たちの生活を見る思ひがした。京城や釜山附近のそれとずつと變つて感ぜられた。ことに內地ならば居酒屋とも云ふべき店に、多くはみな狹苦しい緣側に飲みものなり喰べものなりをてんでに持ち出し、顏を眞赤に染めてゐるあたり、わが徳川時代の道中記を思はすものがあつた。

途中で二人ほど同乘者が出來、車はひた走りに走つた。上手なのか亂暴なのか、随分と膽を冷やす走りかたをやつた。橋の落ちた所が一二ケ所あつた。そんな所をば彼は構はずざんぶ〳〵と突き進んで徒渉した。そして終に鳥道里とかいふ部落にさしかかつた時、故障を起して止つてしまつた。

それを直すのになか〳〵手間取つた。小川をたすとでか二人の相客が先に降り、我等も降りて背を伸した。丁度部落の眞中あたりから向う地にかかつた橋の上で二人の子供が釣りをしてゐた。行つて見ると岩魚に似てそれでもない樣な斑の美しい魚を四五匹ほど釣つてゐた。わたしは試みに十錢銀貨を出して、その五疋の魚と替へようと云つてみた。にやにや笑つてゐたが、やがて橋の袂の煙草屋から一人の大人が出て來て、子供に何やら云つた。子供は木の枝を折つて來て魚をつなぎ、わたしの方にさし出した。わたしは喜んで十錢銀貨を彼の掌に置いた。

魚をさげ、自動車に歸つてみると二人の相客は既に乘り込んでゐたが、妻がゐない。車の修繕ももうほぼ出來たところである。附近で其處等を見廻してゐると、車のめぐりに集つてゐたヨボの中の一人が何やら云ひながら向うを指さす。行つてみると、側の古風な朝鮮式の、土を塗りかためた樣な一軒の家屋の中に入り込んで何やらやつてゐるのを

見出した。

中では一人の若い女が機を織つてゐた。機は内地の田舎に今でもまだ殘つてゐると思はれる形の、足で下の板を踏み、手で杼を投げて織るものであつた。半ば織られてゐるのは純白の麻であつた。機にかかつてゐる布も美しかつたが、その側に立つてゐる十歳位ゐの娘の上品な美しさは全く意外であつた。そしてその娘の手には妻が手提の中から取り出したに相違ない西洋菓子が握られてゐた。言葉の通じない三人は唯だにこ／＼と笑ひながらさうして向ひあつてゐるのであつた。――

勇敢な自動車は更らに勇を鼓して走つた。そして一つの峠のやうな所を越すと、やや思ひの外の賑かな部落に出た。本邦里と云つた。はや夕方で、うす赤い日光がこの谷間の宿場の屋根を染め、立ち昇る煙を染めてゐた。わたしは何やら身に沁みて來る寂しさを感じながら、自動車にまで持ち込んで來た先程の一升壜を口うつしに飲み始めた。酒は髭に亂り、襟に流れた。それでもいつかわたしの眼は明らかに澄み、心は爽かに冴えて來た。

木立の立ち込んだ中の長安寺ホテルに着いた時は七時を疾ふに過ぎてゐた。六時間ほど乘つてゐたわけである。やれ／＼と背伸びしながら通された部屋は、これはしたり、西洋間であつた。和室はないとの事である。浴場も、便所もすべてそれであつた。

サテ、これで食堂に出かけて食事をとるとなるとわたしには大に苦手であつた。洋食も好きでないし、第一、其處では落ち着いて飲めないと思うたからである。幸ひわたしは京城の知人から此處のホテルの但馬支配人に宛てての添書を持つてゐた。斯くして夕食だけは自室に運んで貰ふことになつた。

ホテルとは云つても山中の、謂はば登山客のために設けられた簡易なものである。二つのベッドを置いたほかは、身をそばめなくては歩くにも困るほどの室内の狹さである。その狹い間に小さなテーブルを置き、膳を載せた。さうした後、一人分はどうやら椅子が置けるが、一人はベッドの端に坐るか腰かけるかせねばならなかつた。

電燈が――よくも斯んな山の中に點つてゐるものと思はれた電燈が――たび／＼暗くなり明るくなつた。窓のガラスに、ガラスのそとの樹木にあたる風の音が、何やら凄氣を含んで居る様に聞きなされた。

わたしはベッドの端にあぐらをかいて、サテ徐ろにコップを取つたが一口二口と飲んでゆくうちに何か知ら可笑しさがこみあげて來た。樂しいと云ふか、寂しいと云ふか、やれやれ疲れたといふか、何か知ら馬鹿々々しいといふ感じが、先づそれらが一緒くたになつた笑ひであらう。自分の眼の下に、――ベッドは椅子より高かつたから――しよんぼり椅子に腰かけて、ぼそ／＼と何やらはさんでたべてゐる妻の姿を見ると、耐へかねて吹き出した。妻の姿ばかりでなく、電燈も可笑しければ、ベッドも可笑しく、部屋の隅に窮屈に取りつけてある洗面台も、その上の水さしも、何も彼も可笑しかつた。苦しいばかりに

笑つてゐると、せうことなしに妻も笑ひ出した。但し、半分は泣いてゐたのかも知れない。

六月十四日。

おもひのほかの天氣であつた。頼んでおいた案内人が來たので、二人とも草鞋に足を固めて發足した。

溪沿ひの路を登つて行くと、案外にこのあたりは樹木が深い。樅の落葉を踏んで歩いてゐると、不圖「朝鮮」を離れて心は信州か上州あたりの面影を思ひ浮べるのであつた。

朝鮮に樹木の乏しいことをば噂に聞いてゐたが、それは豫想以上であつた。これにはいろ／＼理由があるのださうだが、單にわたしの見た事のみでも或る所では女が漸う伸び始めた松の木のしんをせつせと摘んで籠に入れてゐるのを見た。これを喰ふのださうである。出るから出るからしんを摘まれたのでは松も育ちようがないであらう。しんばかりか、しんが無くなると幹の皮を剝いで喰ふのださうである。皮を剝がれて、脂の出てゐる哀れな松の木を幾所でもわたしは見たのであつた。また、漸う伸び立つた畑の麥が葉と莖たけ青やかに立ち茂つて肝心の穗のみは摘み去られてゐるのを見た。あと五日か十日も待てば立派に成熟する麥を待つことをしないで、未熟の青い穗を畑から摘みとつて喰つてしまふのださうである。斯うした國民である。汽車のなかでひとの喰べかけてゐる辨當をねだつて平氣で喰ふのも無理はないと思うた。見れと云つてねだるのはまだしも、わたしは僅かな朝鮮旅行の間に二度の盗難に遭うた。一度は危ふく未然に防いだが、一度はうまくやられた。而かも殆んど眼の前に見てゐてやられたのである。

程なく長安寺に着いた。伽藍はなか／＼に大きく、大雄殿の額を揭げた本堂のほかになほ二三棟の堂宇が立ち並んでゐた。寺の山門とも見るべき梵王樓といふのの階上には十人あまりの僧侶だか俗人だかがいぎたなく寢倒れてゐた。美しいのは庭に咲いてゐる芍藥の花であつた。庭の土が殆んど眞白なこまかな砂利なので、一層この花が浮立つて見えた。

咲き盛る芍藥の花はみながらに日に向ひ
咲けり花の明るさ

長安寺の庭の芍藥さかりなり立ち寄れば
きこゆ花の匂ひの

芍藥のなかば咲きたるつぼみたるとりど
りの花にあそぶ蟻蟲

長安寺梵王樓のたかどのに寢亂れたりな
僧等を人は

長安寺を出で溪に沿うて登ること二十町ばかり、表訓寺があつた。長安寺よりは規模やゝ小さく、やゝ古びて見えた。長安寺も此處の寺も今より千四百年前、新羅時代の創立で當時は金剛山中に一百八ヶ寺

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が建つてゐたのださうである。曼荼羅を一個の靈場と見做したものでもあつたらう。但し現在するものも既に當時のままのものではないといふ。

表訓寺の庭も芍藥の盛りであつた。

表訓寺御堂の裏に辿りたればここは眞盛りの芍藥の園

それから正陽寺といふへ登つて行つた。其處への途は急に嶮しく、爪先登りの急坂であつた。十町あまりに大汗をかいて、漸くに着いた。

長安寺、表訓寺、ともにその寺の在る位置が秀れてゐた。背に奇峰を負ひ、溪を隔て、秀嶽に對するといふ風であつた。が、正陽寺はやや趣きを異にしてゐた。この寺も山を負うては居るが、前面が遠くうち開けてゐた。其處からは内金剛に於ける秀れた諸山嶺を居ながらにして展望することが出來た。遮日峰、白馬峰、望軍臺、日出峰、月出峰、毘盧峰、其他あれこれと案内人が指したが、わたしはたゞ半ば茫然とそれ等の峰から峰を眺め渡したに過ぎなかつた。峰から峰は、この快晴にほのかな霞を帶びて見えた。

寺は前の二つよりずつと小さかつた。人の居る氣配もしなかつた。たゞ本堂の片隅に一人の人並はづれて大兵の坊さんが坐つて、せつせと何やらやつてゐたが、我等の案内人が聲をかけると、フイとこちらを振り向いた。それを見てわたしは思はず眼を見張つた。その坊さんの顏はまさしく血みどろに染つて見えたからである。坊さんはいま獨りで造花をつくつてゐるところであつた。そしてその手の赤繪具が汗を拭くたびに顏や頸にくつ着いて血と見えたのである。案内人の聲に應じた坊さんの聲はまたまさしく破鐘の様な聲であつた。何やら云つてしまふと今度は獨りでかんら〳〵と打ち笑うた。我等も連れられて笑ふた。案内人の云ふ所によるとこの坊さんはもう八十幾つとかの高齢であるのださうだ。それで平氣で此處の山坂を登り下りしてゐるのだといふ。

乏しいながらに此處にも芍藥の園があつた。僅かの違ひで、餘の長安寺、表訓寺等の花は滿開であつたに、此處まで登つて來るとまだ蕾んだままであつた。

麓なる寺々の芍藥咲きたれど正陽寺の花はいまだ蕾める

正陽寺から下ると路は全く溪に沿うた。といふより一つの深い峽谷に入り込んだ。所謂萬瀑洞八潭なる景勝が其處から始まるのだ。丁度その入口に當る大きな一枚岩の片隅に一人の鮮童が一人して茶店を出してゐた。案内人の云ふままに其處でお晝をつかふことにした。案内人も鮮人であつたが眞面目なよき青年であつた。

其處で麥酒をとつて飲んでゐる間に妻は早や食事を終へ、廣い岩の上に出て遊んでゐたがやがて何やらを見附け、頻りに興に入つてゐ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。行つて見れば岩の凹みに湛へた水の中に澤山の蛙が遊んでゐるのだ。その蛙、大きさは先づ人の親指位ゐで、背は青く、まだらの黒い斑を帯び、その腹同じく斑を帯びながらも色は眞赤なのである。それ等が浮びつ沈みつ、口と口とでつつき合ひ、背に乘りして遊んでゐるさまは如何にも可愛いいものであつた。案内人に訊けば鮮語でキヤクりと云ふと答へた。

此處の岩はかりでなく、少し大きな岩となると殆んど悉くに何やらの大きな文字が彫つてあつた。大きいのは一文字で一坪二坪位の大きさに刻み込まれ、刻み込まれた深さも隨分と深いものがあつた。中には何々仙人が天より降つて刻んだといふものなどもあつた。我等素人の眼に見てもなか〱優れた書體と見ゆるのがあつた。

所謂何々潭がその邊から始つた。黒龍潭、琵琶潭、碧波潭、其他、みな名前はかりの至極下らぬ小さな瀧と淵との連續であつた。その潭を二つ三つ見て過ぎたあたりで溪を渡り、普徳窟といふへ登つて行つた。

この登りは先の正陽寺の登りより更らに險しかつた。唯だ、半分ほどの近さであつた。辛くも登りついた斷崖の中腹にその寺はあつた。庫裡と本堂との二棟が斷崖に沿ひ上下二段に分つて建てられてあつた。庫裡の前の岩の上には路の塊に似たものが一杯に乾してあつた。それを踏まねば通れぬ岩の狹さであつた。

庫裡には痩せてたけ高い僧が唯だ一人ゐた。着てゐる白い法衣はうすぎたなくよごれてゐるが、氣品のある僧であつた。庫裡と云つても僅かの岩の襞の様な所に建てられてあるので極めて狹いものであつた。狹い中に何やらごたごたと押し込んであつた。

本堂は一段下になつてゐた。そしてこの本堂は僅かに一方の礎を斷崖の岩に置き、半分は斷崖からはみ出し、一本の大きな柱で支えてあるのである。本尊は觀音様であつたかとおもふ。お線香を上げて貰ふて居ると、蠟燭の灯のまたたきがいかにも寂しいものに見えた。本堂から庫裡に歸らうとして險しい石段を登りながら不圖振返つて見ると、いま通つて來た萬瀑洞の峽谷が眼下に見下された。溪間に櫟木の深いのが、周圍がすべて岩山であるだけに一際眼についた。

寺を出でゝ險しい坂を降り、また溪に沿つて登つた。今までにも一二度眼についたのであつたが、この邊には栗鼠が非常に多かつた。縞の斑のある、可愛いい姿である。ちよこ〱と路を横切つては木にのぼり、岩にかくれた。

登ること數町、また一つの寺があつた。摩訶衍といふ。構への大きな寺であるが、古び荒んでゐた。此處の庭にも路の塊に似たものが乾しひろげてあつた。僧たちの肝要な食物の一つなのであらう。寺の庭に立つて見廻すと四方の空を限つて聳えてをる岩骨の山々が數重つとなく折重なり、又は相伴ひ尾を引いて西に東に走つて居る様にも見え、その間に醸し出さる山氣がひし〱と、身に迫つて來るのを覺えた。

萬灰庵といふ小さな尼寺の庭を通りすぎると、本堂に一人の婦人・

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寝せてあつた。こちらを向いて伏せつてゐる顔の何といふ淡いことであつたか。一人の尼が枕許に坐つてゐた。麓の村から看護に来てゐるのであらうとのことであつた。

いよ〳〵けふの日程の最後である白雲臺の登りにかゝつた。初め疎らな森の中を登つてゆくのであつたが、路極めて嶮しく、両手をかけつつ攀ぢねばならなかつた。而していつかその木立も盡き、路も盡きた。一面の岩壁に突き當り、其處からは其處に垂らされた一條の鐵鎖に縋つて頂上まで登らねばならぬのであつた。

我慢しい〳〵其處まで随いて来た妻も一二度は鎖に手をかけてゐたが、終に諦めて、其處の岩の根にしやがんで眼を伏せてしまへた。そして其處で待つてゐるといふ。

案内者は先に、わたしはあとに、鐵鎖につかまつた。僅かな距離ではあつたが、充分に肝を冷し終つて辛くも登りついた。其處は極く狭い尾根となつてゐた。尾根づたひに右にとろ〳〵と下ると、其處はその尾根の、即ち白雲台の峰の一つの絶端となつてゐた。其處からは急に嶮しく切れ落ちた断崖となつてゐるのである。

丁度、夕日の時であつた。いま登つて来た萬瀑洞の峡谷は早やとつぷりとかげり終つて冷く澄んだ色を湛へてゐた。斯うして見下せば愈愈木深い峡谷であつた。峡谷の向う、毘盧峰から月出峰、望軍台にかけての内金剛第一の大きな山系もまた悉く陰影を含んで薄墨色に、淡紫色に、空を限つて連り聳えてゐた。高山に登つて高山を知る、これらの峰々が一層高いものにうち仰がれた。

不図振返つてわたしは思はず大きな聲をあげた。其處にはまだ今まで豫期しなかつた衆香城峰の一高山が満面に夕日を浴び、我等に臨んで聳えてゐたのである。年若い案内人はわたしの驚きをうち笑うて見やりながら、

『これ、衆香城峰です』

と教へた。成程、地圖にはあつたのだ。唯だ、これほどの山とは知らなかつた。

案内記には斯う書いてある。

（前略）金剛山の主要岩石は花崗岩であると断定出来るのです、此峰の花崗岩は主として粗粒状をなしたる黒雲母花崗岩に屬し外観は極めて堅さうでありますがその石理が割合に粗いために比較的風化作用を受くる事が易く、（中略）彼の變幻極まりなく端倪すべからざる怪奇の岩體が現出したのであると考へられます。（後略）

花崗岩から成つた山といふことの最もなづけるのがこの衆香城峰である。満山殆んど白く見えるが、眼に見えぬ小さな山襞などの關係か、その白色にかすかな光が宿つてゐるのである。ところ〴〵に松など生えてゐるらしく、それはほのかな文となり影となつてゐる。

わたしは我知らず帽子を脱ぎ、山に向ひうち振つて、敬禮した。前面の山、背後の山、光の山、影の山、その間に白々と流れ出でて空に滿

ち山に滿ち、更らに山から山の間に落ち沈んで居る幾多の峽谷に滿ち、油然として天地に湧き動いて居る自然の靈氣は自からわたしに眼を瞑らしめた。

まなかひに鋒立ち鎮もりたふとけれ
をろがみ申す衆香城峰

幸ひ、腰には二合罎を提げてゐた。山、山に向うて先づ數滴の神酒を捧げ、さてみづから打ちあふつて心を鎭めた。眼を瞑づれば心の奥には一切の山の姿が光を帶びつゝ來り宿つてゐるのである。

岩角につかまつて慄えてゐるであらう人をおもふと、さう永く其處に留つてもゐられなかつた。もう一度、前の山うしろの山、總ての山河に頭を下げて其處を去つた。

歸りは歩みは速かつたが森蔭の宿にはもう電氣がついてゐた。今夜は流石に笑ふ勇氣も無かつた。

六月十五日。

朝、わたしは不幸にもひどく勞れてゐた。昨夜中烈しい下痢に襲はれてゐたゝめである。昨日、溪沿ひを歩きながら水好きのわたしは無闇にこれを掬つて飲んだ。それがあたつたものらしい。

昨日の案内人が來たが、詫びを云ふて歸つて貰つた。今日は實は昨日正陽寺や白雲台から溪を距てゝ正面に望んだ諸山嶽を經巡る筈であつたのだが、これではどうにもならなかつた。妻も寧ろそれを喜んだ。

晝近く、大分元氣が出て來た。さうなれば狹苦しい部屋に寢てゐるのも辛かつた。散歩のつもりで獨りして出かけた。昨日の路を長安寺よりもう少し登つた所に對岸の山から出て萬瀑洞の溪に落ち入るいま一條の溪のあるのを見ておいたので、岩づたひに萬瀑洞を渡り、その小さな溪の方へ入つて見た。

これもまた岩山の間を穿つて流れてゐる溪である。路とてもないので、人の往來もなく、唯だもう靜かであつた。とある岩蔭に休んでゐると、偶然か故意にか、ツイわたしの近くまで例の栗鼠がやつて來た。あとを追うて、もう一匹やつて來た。岩の頭から岩の陰へ、また木から木へ、敏捷に走り廻る。自づと微笑まねばならぬ可愛いい姿である。其處へ、いま一つあらはれた。鵲である。これはまた例の聲で啼きたてながら、二疋の栗鼠のあとをせつせと追うてゐるのである。

栗鼠ふたつ溪間の岩に遊べれば鵲も來て
戲れなとす

此處等の溪間にいろ〱の花が咲いてゐた。おだまき、野ばら、うつぎ、其他。なかで最もわたしを喜ばしたのは山木蓮の花であつた。木蓮とはいふが、形小さく、寧ろ辛夷の花に似てゐた。辛夷に木蓮のふくらみを持たせ、そのいづれよりも滑らかに且つ白かつた。ことにその匂ひの高さは木蓮にも辛夷にも無いところであつた。この花が咲いてをる所に通りかかるとあたりの木の間がほのかに匂ふた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自づと遊びすごして、夕方宿に歸つた。

夕食は伊藤支配人の馳走で、溪流の溪に臨んだヴェランダに座を作り、珍しく手料理をつくることになつた。溪を距てた向うの山には日の光が洽ねかつた。

六月十六日。

朝の食堂はわたしも嫌ひでなかつた。流石に朝は例の飲物をも簡單に濟ますし、麺包の軟いのもよかつた。いまこのホテルには一組の西洋人が滯在してゐた。英國人とかで、老母に廿四五歳の息子、その妹の三人連れであつた。母も、兄も、妹も、みな上品で快活であつた。折々兄と妹の擧くる笑聲にはこちらも自づと微笑を誘はれた。

九時、ホテルの人々に別れを告げ、自動車にて新溫井里といふに向うた。先日通つた末輝里に出で、其處より右に曲り、十一時頃新溫井里に着いた。其處には豫ねて打合せてあつたので溫井里の宿屋鶴陽館より番頭岩佐君が迎ひに來てゐて呉れた。

其處より徒歩、溫井嶺の登りにかかつた。頂上にて晝食、やがて下る事十町ばかり、道を折れて左に入り、岩を穿つて作られた小徑を登つてゆくと程なく目の尾根に出た。

尾根に出ると共に俄かに眼前が打ち開けた。尾根の向う側は思ひがけぬ大きな峽谷となつてをり、峽谷を距てて一側により不思議を極めた幾多の岩峰が攢簇ふが如くに峙ち聳えてゐるのであつた。この山塊が有名な萬物相であるのださうである。萬物相の名は前から聞いてゐて、金剛山即萬物相の樣にも想うてゐたのであつたが、やや落胆した。怪谷は怪谷であつても山々の形が、山と山との間に釀し出さるる雰氣が、何となく乾いて見えた。崇嚴幽邃の氣に乏しいのを思うた。わたしにとつては一昨日の白雲台の眺めの方が遙かに親しいものであつた。

此處は舊萬物相、新萬物相はまだこの谷の奥に當ると聞いたが疲れてゐるし、行くのをやめた。尾根を越えて谿に下り、更に溪を下つて道に出た。道は溪に沿ふた。寒霞溪と云ふ。夕方に追はれながら溫泉地溫井里に入り、鶴陽館に草鞋をぬいだ。

宿の溫泉はよく澄んで、溫度もよかつた。永い間、深い山の中に在つた様なおもひもほぐれて自づと心の明るむを覺えた。

六月十七日。

今日は一日休息することにきめておいたのでゆつくりと休む。きめておかなかつたにせよ、今日のわたしには草鞋は履けなかつた。烈しい下痢のあとにとつて昨日の一日は隨分と無理であつたのだ。運わるく、風邪氣も出て、熱を覺えた。

なほ運わるく明日よりこの土地にこの江原道小學校教師の講習會が開かれるとかで、われ等の宿にも二三十名の教師たちが泊り合はせてゐた。年齢などから見て相當年輩どこの人たちと見受けらるるに、そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の酒の上の馬鹿騷ぎ一方ならず、悉く閉口した。

六月十八日。

もう一日休むことにした。

宿の部屋からやや左手前面に水晶峰といふが聳えてゐた。日光の具合などは本當に水晶の山かとも思はるる位にうす紫に霞んで見えた。思ひがけなくその山から郭公の聲の落ちて來るのを聞いた。

　うち仰ぐ岩山の峰に朝日さし
　　起りたるかも郭公の聲

筒鳥も啼いた。

教員連の騷ぎ、いよいよきたなし。

六月十九日。

奮發して草鞋を穿いた。番頭の岩佐君、わたしの健康を氣遣うて自から案内に立つて呉れた。幸ひに好晴である。病人のつもりで、ゆつくり歩いた。

半道も歩いたかと思ふころ、一つの峠に出た。極樂峴といふ。峠を降りつゝ見下すと其處に一つの大きな峡谷が見えて來た。即ち九龍淵の峡谷である。谷の奥は霞んでゐた。

降りつくした所に神溪寺があつた。長安寺、表訓寺などと共に金剛四大寺の一であるといふ。庫裡の前の庭に三四人の僧たちが寄つて何かしてゐる。見ると岩茸といふ干乾びきつた茸を縁の上に積み、頻りに水を注いで揉んでゐるのである。また、庭に一本の菩提樹があつた。堂も庭も荒れてゐたが、そのなかに不思議な寂びがあつた。

更らに普光庵といふ寺に寄り、それを過ぎると路は全くの溪沿ひとなつた。右も左も、同じ樣な岩山が並び走つてゐるのである。既に集仙峰彩霞峰世尊峰觀音峰普賢峰等の諸峰を見て過ぎたわけだが、何しろ一萬二千峰と號せらるゝそれらに一々觀察と記憶とを持つことは困難である。たゞわたしは立並びの屏風の樣にこの峡谷を挾んで並行してゐる山嶽の峻しい姿と、その峻しい中に云ひ難い明るさと愛らしさのあるのを眺めつゝ歩んだ。峻しい山に愛らしさといふのは可笑しいが、確かにさういふ所がある。これは金剛山全體に對して云へる言葉かも知れない。

此處の峡谷にもまた山木蓮の花が咲いてゐた。そして度々栗鼠も出て來て、首をかしげ瞳をくるめかして我等を迎へた。山木蓮の花は全く好い、花の姿も、その匂ひも。

　たきつ瀬のたぎち落ち來る水のたま
　　珠より白き山木蓮の花
　この淵の靜けきにもの浮びたれ
　　枝のまゝなる山木蓮の花

側により仰止臺、金剛門、玉流洞、其他の名所があり　やがて左手に飛鳳瀑を仰いだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

この飛鳳瀑は變つた瀑であつた。何十丈といふ高さであらう、溪の岸に聳えて居る厳やかな大岸壁の頂上のまんなかどころより迸り出た水は初め眞白に輝きながら一團々々となつて落下して來るのであるが、餘りにその頂上の高いためか、水の量の乏しいためか、途中で右に左に折れ靡きつゝいつしか岸壁の面に迷ひ動く狹霧となり、終にはほの〴〵と姿を消してしまふてをるのである。末順かりになつて、ほの白くその末を消すあたり、まさしく鳳の舞ひ立たうとする姿に似てゐるのである。

妻はこれを香の烟にたとへた。また、然りである。彼女の歌。

　たち昇る香のけむりかひとすじに
　　ありとも見えで降りくだる瀧

其處から九龍瀑は近かつた。我等の登りつゝある峽間の迫り極つた正面の岸壁にそれは懸つてゐるのであつた。流石にこれは好かつた。高さ百七十餘尺、水量もまた豐かで、いかにも瀧らしい瀧であつた。瀧と相對する懸崖の裾、やゝ小高き所に掛茶屋が出來てゐた。其處に登り、この瀧に對した。

瀧の上、瀧の落ち口の上流をなす溪間に相次いで八つの深い淵があつて上八潭と云ふ。昔、その淵の一つ〳〵に、而して九龍瀑の瀧壺をも加へて九つの淵に、それ〴〵龍が棲んでゐたのだといふ。岩佐君、上八潭に登りませうかと誘ふ。わたしたちは各々兩脚を撫でつゝ謝辭した。

この溪の岩の面にも到るところ大小さまざまの文字が彫つてあつた。ことに九龍瀑の落下してゐる斷崖の面にまで、仰々しくいろ〳〵と彫り込んであつた。そゞろにうち眺めつゝこの俗惡なる趣味の我が日本に傳はらなかつたことを感謝せずには居られなかつた。

食事を終へ、我等はその瀧壺の側まで行つて見た。藍の色濃く湛へて、底も解らない。瀧の飛沫が冷やかに面を撲つた。

感心に妻もさほど弱らないで、夕方宿に歸り着いた。往復六里の山道であつた。

六月廿日。

もう二三日此處の溫泉には滯在するつもりでゐたが、折惡しく講習會と落ち合つた。いろ〳〵と氣を揉んで吳れる宿の人たちにも氣の毒なので、日取を繰りあげ、今日海金剛を見、そのまゝ元山の方へ赴くことにきめた。忙しいなかをまた岩佐君が案内かた〴〵長箭まで見送つて吳れることになつた。

午後一時、自動車にて溫井里を立つ。道もよかつたが、非常な速さであつた。途中、三日浦といふに寄つた。丘とも小山とも云ひたい巨巖の列にとり圍まれた湖水で、周圍三里、見た所は小さいが、そして四邊に樹木とてもないのであるが不思議におちついた靜かな湖水に感ぜられた。何とかいふ仙人たちが此處に來て歸るを忘れたとの傳說があるといふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

高城といふ宿驛に市がたつてゐた。例により鮮人たちのおめき叫ぶ賑かさを珍しく見やりながら通り過ぎて海金剛に着いた。

内金剛、外金剛、海金剛と並稱されてゐるので多少の期待をば持つて來たのであつたが、悉くがつかりした。物珍らしい山地の人ならばともかく、我等には何處が秀して海金剛だか解らぬほどであつた。

引き返して、途中から長箭港に折れた。或る宿屋に寄り、別盃を擧げむとしたに岩佐君靴をも脱がず、その自動車にて温井里に歸り去つた。

そのあと、汽船の出るまでの三時間が無闇に淋しかつた。妻に強ひて共にこの侘しい漁師村を散歩したり、酒をとり寄せて飲んで見たりしたが、身ぶるひの出る樣な淋しさがどうしても拔けなかつた。急に泣きたくなつたり笑ひたくなつたりするのはまさしく身體の疲勞を語るものだとおもふと、それが寂しかつた。六時近く出帆、艀より甲板に出てゐると、海には意外に浪があつた。雨を含んだ重苦しい空模樣であつた。

吹きつくる風に身をそばめつゝ、早や暮れかけてうす暗い叢石亭を見て通つた。此處の海岸はわたしには海金剛よりまだましだと思はれた。

甲板から室内に入つて見ると妻は烈しい船暈で、身をうち曲げて苦しんでゐた。（終）

現代代表自選歌集

若山牧水著　野原の郭公

與謝野晶子著　人間往來

前田夕暮著　原生林

土岐善麿著　空を仰ぐ

窪田空穗著　槻の木

（定價各一圓八十錢　送料二十錢但し「人間往來」は十八錢）

若山牧水著　樹木とその葉

（定價貳圓　送料廿二錢）

改造社發行

母

横瀬夜雨

（一）

はしがき

夜になると、父は中の間から次の間へ、自分の寢床を移させた。昨日のやうに。今八時十分、芯を細めた台ラムプが仄暗くその顏を照す。

廣間では長火鉢をまん中にして、母は東向に、私は北向に、多喜子は母と對ひあつた。糸子はおばちやんかあちやん父ちやんと交る〴〵に呼びかけながら三人の間を行つたり來たり、其處らには靑い色のセルロイドの鷄や、手の缺けた人形やを散らしたまゝである。土間にはいちとさみとせいとで稻をこいてゐる。塒の鷄が時々くゝくと咽を鳴らす。何處からか蟋蟀の聲が聞える。

鳩が日にとまつたのであらう、糸子は母親に凭りかゝりながら、吞み飽いた乳房を推したりへしたりしながら眠つてしまつた。晝のうち鬢を剃られた耳のあたり、あを〳〵と寒さうである。

目とくつゝけこして新聞を見てゐた母は、中氣して有らゆる言葉を忘れた父が、たゞ一語忘れずにゐて「おい」と呼んだので、煙草入と煙管と手に持つてその傍へ寢に行つた。恰度稻扱を終へた三人は、ランプを鍵から外し大戸の潛りを外へ出て行つた。井戸端の落栗を探すのであらう。暗い庭に火がちら〳〵する。幾つ拾へたか。間もなく潛りの猿を下す音して、けたゝましく土間へ馳け込んで來た。「おら厭だちゆば」「ふふ」と忍び笑ひを漏らしながら、今度は帶を解くのにきやつ〳〵と、湯に入る騷ぎだ。冷めたらうに、焚きつけようともしない。

糸子がむく〳〵と起き上つたが、母親の長い袖へ頭をひつかけて取らうとしても取れず、かあちやんああんと泣き出した。袂をのけて乳をくゝめたが泣きやまない。お尿なんだらうと、お虎子にかゝらせると、足を突つ張つて盛んに泣く。百日咳をわづらつてから、酷く泣くと咳きこんで來て口から鼻から血を噴くのだから、泣かないといゝのだが。やつと穩しくなつた、それでも血は少し出た。

女達は眞暗な風呂場で、ぴちや〳〵音立てて中々出ない。木戸は締

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

めたかと怒鳴つて見る、

「はあい御飯たべる前に〆めました」
裸だらうけれど、威勢がいい。

「馬鹿野郎、いつまで遣つてるんだ、鶏が鳴かあ」

「馬鹿野郎ですか」

くすくす笑ひながら多喜子は納戸から出て來て、そこら片づけにかかる。火鉢の火を取り、灰を篩つてゐるうち、三人はやうやく出た。肥つちよと、痩せ馬と、ちびと、そそくさに着物をひつかけ、またしてもラムプを持つて裏庭へ出て行つた。栗だけでは足りなくて、あいそ（柿）をもぎに。

大正九年十月十三日

―

馬洗場は木の蔭一つないので、夏はいつでも温まこいけれど、田の中などよりは冷たいし、下が砂で蛭もゐないから、子供に取つては水あびの天國だつた。

緑郎叔父は皆と一しよにもぐりたかつたけれど、私を負つてゐた。下ろして置けば這ひ出すし、棒杭へ結ひつけて置いては泣き出されると思つてか泳ぐのをあきらめ、杭と杭との上を渡り歩いた。下にゐる友達に水をはねかさうとして、踏み外して、堀の中へ仰にはまりこんだ。

緑郎叔父は動顛して、前の方へ直ぐに起きかへらうとしたけれど、下になつた私がもがく上に、二人とも袂のある着物を着てゐたから、がばがば水を跳ね飛ばすばかりで法がつかず、なかなか横にからだを捻ればよかつたけれど、友達が駈けて來て起すまでには二人ともかなりの水を呑んだ。私はぢきには泣けぬ程弱つてゐた。

何處のうちでも、子供は水をあびると死んでしまうかのやうにおこられる。で浴びても知れぬやう、背中をかんかん照る日で干してから着物を着る。私達の頭はまん中に皿があつて周りに長い毛を垂らしたおかつぱ頭だつた。十分に乾かした積りで歸つても十度びに一度ははれる。殊に頭をつかまつてどんの凹を調べされては助からない。どんの凹の毛はめつたに乾かない。なほ緑郎叔父は着物の儘はまつたのだから。しかし叔父はせつかんされたかどうか、忘れた。

私は下駄を穿いてかけ歩くまでになつた。姉は二つ違ひだつたので、時をりは乳をぬすむのを見たからであらう、おせさんを下川へ打つちやつちまへと暴れた。下川は村の外れに架つてゐる大きな土橋で、子供が泳ぐと川童の來るところだ、橋には烏瓜の蔓がからまつて、夏は白い蝶のやうな花が咲いた。

まるさんと呼ばれたり、まあちやんと呼ばれたり、私は生れた時から弱かつた。兄をはじめ、兄弟は七人とも子供の頃よく寝汗をかいた。

まあやは小さい時は慾が深かつた、負ぶさつて私の家へ遊びに來た

から、よく來た、さつまやつぺなど、出してやつて、姐やにもやらうとすると、そいつもおいのだつて、殘らず袂へ入れさせて、其さきを縛らせてから歸つたぞ、覺えてゐるかえ、覺えてはゐめいなと中坪のかみさんにすつぱ抜かれたことがある。喰ひたい癖に喰へず、喰ふともどして、腹はかりふくらましてゐた。瘦せとろけた足を投げ出して坐れる前へ、いろ〳〵の菓子を竝べて、どれでも喰べたいのを取るようにと母はすゝめるのだつた。が私は喰べられないから要らないのかといふと、自分の貰つた物はどこまでも貰つた物としてもつてゐた。がどうしても喰べられなかつた。

私はだん〳〵明るい所に居られなくなつていつた。不意に日なたへ連れ出されると、瞼を手で押へて泣き出した。仄くらい行燈の灯すら見られなかつた。今でも遠くから火を眺めると、炎はさら〳〵と動いて、小さな光の綱になり、まはりには靑い御光がさす。

いつだつたか。頭へでき物が出來て、長い毛を斷られたあがりに、顔の方までひろがつて、目も口もあけられなくなり、痒がつては眠つてまでひつ掻くから、まるで小さなお化と見えたであらう、母かたの叔父が水海道の聟入先きで病氣になり、歸つて隱居に寢てゐた。私をこいつお岩のやうだとぼやき〳〵したといふが、叔父はなほらなかつた。

水海道から貰いに來て看病してゐた叔母に、おさくさんといふ私よりは、一つ年上の子があつた。叔父は茶の注ぎ方が惡いの、座布團が曲つてゐるのと皆をこめる上に、おばあさんの少し耳遠なのを嫌つて、病室へ寄せつけなかつた。私をお岩と呼んだ位はまだしもしんしやくしたのかも知れぬ。母は本宅から西の木戸を通つて、間を見ては見に行くのだから、始終叔父の癇癪にぶつかる譯ではなかつた。が家附の女房として威張つてゐたと違つて、窮屈な姑の傍で我儘の夫に附き添ふのだから、叔母は辛かつたであらう。母はある朝はやく、病室には叔父しか居ぬことを見出して、鬼怒川傳へに人を走らせると、叔母は從妹を負ぶつた儘、夜どほし六里を歩いて水海道のうちに歸つてゐた。

母と叔母と、中の間で切れはしを取り散らしてゐるそばで、おさくさんは籠に入れた豆の實程の南京玉を、一つ置きに靑赤黄と糸に通して、指はめをこしらへた。私は母の膝に頭をおつけて横から從妹の顔を眺めて、おさくさんの鼻めどはいかいたあと思つたことを覺える。私の頭はおかつぱ、從妹の髪はちご輪だつた。

十三四の頃また來た。額一杯に前髪を垂らしてゐた。同じ年位のよその女の子と一しよなので、私はその頃は人に見られたくない悲しい癖がついてゐた。納戸に隱れ、布團に凭りかかつて、壁一重向うの奥ざしきにゐる從妹の容子をいろ〳〵と一人で想像した。

從妹は私の隱れたのを知つてか、奥の縁から行燈部屋の脇を廻つてつか〳〵と納戸へはいつて來た。私は黄いろいやうな靑いやうな顔を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た着物の裾づくのを見つけて、どき〳〵して、どうしよう、逃げ出さうか、布團の下へむぐらうかと、間誤ついてゐると、そばへ寄つて來て、まあちやん、これ上げますわと、繪本のやうな物を懷から出して、私の手へ載せた。あけて見たら草表紙の豆手帳だつた。私は禮をいふでもなく、にこりとしたであらう、おさくさんが大きな目をはつて私を見下してゐるのに氣がついて、急にしほげかへつた。

自分と同い年位の子供、ことに女の子に、目を顏をからだを見られることが悲しかつた。久しぶりで泊りに來た從妹に對しても、恥かしいのか、悲しいのか、恐らくは其二つから、歸るまで奧の間へ入らず、西の緣をそつと通つては、着物や帶のはしをちらと見るだけで滿足した。歸る時は辰巳屋のかげに隱れて見送つた。私は忘れぬ。

二

私の背椎に故障の有るのを母が見つけたのは、明治十四年數へ年四歳の春である。

四郎が生れる頃から私の健康は急激に變つて行つた。はじめて母の懷から祖母の手に移されて、廣間の段梯子の下へ寢るとになつた。祖父は胃がんで中の間に寢てゐた、祖母は附いてをりたかつたらうけれど、私は納戸の灯が見えなくなるので、中の間へ行くとはいはなかつた。私はよく泣いた。

弟は生れ落るとから、ひるまのうちだけ甚七爺のうちへ預けられ、おうめの乳を吞んだ、母は夜弟を寢せつけてから、私を抱くことにした。

母を弟の手から取り戻して、再び其乳に縋るやうになつたけれど、私のからだは操された機械とおなじかつた。

母は草臥れはじめた。目ざめては泣き出す私を、夜はごろんぎやおんが來るとおどしおどしした。ごろんぎやおんは毎晩のやうに來た。緣側や座敷の中をどだ〳〵駈け廻つて、あつちの隅でぎやおん、こつちの方でごろんぎやと鳴くので、私にしては忘れられぬ恐怖であつた。

「ごろんぎやおんつて、あれ狐だつぺか」

「さうさ。猫はめう〳〵と鳴くでせう。あれはとべ山から來る狐なんだよ。」

母は眠つてていふとは信じられなかつた。とべ山はうちの西屋敷に續く竹山で、晝も暗かつた。

ごろんぎやおんに怯え上つて、母にしがみついた儘、眠れるうちはまだよいので、ふだんは眠りかけると何處かしら痛み出して目がさめた。

女達は私に草履を穿かせて、六反田の田の畦に、節句の匂くさを摘みに出た。男の子等は田を駈けずり廻つて凧をあげてゐた。筑波山よりも高くのしてるのがあり、低く水を汲んでゐるのがあつた。澤かた田

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は田一面のかげろふを照らしてゐた。が、田の畦へぶつかつた其の私の不きげんはどうにもならなかつた。たんぽぽの花を買つても、凧の上つてるを教へられても、くしくし鼻を鳴らして身動きもしない。

母はまだ籠一杯にならない。

きみはふと南から飛んで來た雁を見つけて、遠くから、あらくく雁がと仰山に呼ぶので、私はそつちへ首を向けようとしてからだ中烈しき火に灼かるる痛みを感じた。

女達は私の悲鳴を聞いて、飛んで來てだましかけたけれど、泣きやまず、しまひには目の色まで變へて痛い痛いと泣くので、かはりつこに私を手おぶひにして歸つて來た。

母は、何處が痛いのかさつぱりわからぬので、泣きむつかる私を膝に臥せ、兩袖を背中へ廻して抱き締めようとしたら、叫び聲を發して、しがみ附いたので、若しや着物に針でも刺さつてゐるかと脱がせて見た。針は一本も無かつた。

が、左の股の內側に小さな腫物を見つけた。楊枝の尖で刺したやうに、ぽつちりと紅い小さな口があつた。膿が出て來てあとからくくと流れ出した。今まで、機嫌の惡かつたのは腫物の出來る兆だつた、これなら大した事は無いと母は一時はれぐくとした。

一生を通じて母を泣かし、私を苦しめた病根が、小さな足の腫物を前驅としたのは不幸で、形は小さいけれど、壞疽の源は深く遠く脊髓に潜してゐた。

ある日の夕方、母は風呂の中で泣き疲れた私を、長くのべた足の上へおし据ゑて、兩手の指を背中で組まうとした。其時、心もち凹める背筋の中に、一個所、かすかな隆起、それは木の實粒位の大きさの隆まりに觸れた。

けれど、母はまだこの隆起が佝僂病の前兆であり、脊椎がへし曲げられ、足が萎えて行くしるしだとは思ひもよらなかつた。

三

川を見た。帆かけ舟も見た。

先の俥には父が、後の俥には母と私とが乘つてゐた。長い長い柿の路。

畑の中に、鈴生に生れる柿の木があつた。柿は紅かつた。

夜になつて大きな橋を渡つた。灯が數かぎりもなく見えて、橋の上にも川の中にも人がざわくく動いてゐた。

それは千住の大橋だつた。川口あたりから雨になつて、千住の橋を渡る時はどしや降りだつたと母はいふのだけれど、私の見た灯は雨を透しての光ではなかつた。初めて見る火の塊りに驚いて雨は目につかなかつたのであらう。

私の容態はすでに來る處まで來てゐた。執拗頑固に纒りついていた疼痛は去つて、立つことも出來ず、歩くことも出來ずなつてゐた。

佐々木、櫻井、戶田、佐藤、岡本、等、名醫といふ名醫の診察を一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二度づゝは叩き歩いた。佐藤尚中先生はこれやいけない、入院しなくちやといつた。平河町の橋本綱常先生ももう手おくれだと斷つた。醫者廻りは十日程で打切つて、燒けた第二病院、和泉橋の大學第二病院の特等室に入つた。十四年も秋の終るころである。

疊が敷いてあつた。狹い間。

寢る時は白い蚊帳の方を枕に、窓の方を足にした。布團は白い布で包んであつた。

誰かゞ背中を撫な。痛いなと思つて目をさました。胸の上に白い猿が乘つてゐた。右にも左にも枕に添うて白い幻がうつくまつてゐた。

手を出して追はうとしたが出せず、母は私に手枕させてすや〳〵と眠つてゐた。

母と二人、明るい窓の下に坐つてゐた。下の道を婆やが風呂敷包をかゝへて、人中を突つきり〳〵いそいでこちらへ來るのを見た。やきいもか何か買つて來た時であらう。やきいもは何時も二錢づゝ買つて皆でたべきれなかつた。

寢臺が二かはに並んで、寢てゐる人もあれば、腰かけてゐる人もあり。私は婆やに負ぶさつて、手に握つた燐寸を一つづゝ配りながらそちこちで遊ばせて貰つた。

頭をきれで卷いた男が、あぐらを搔いて私を見てゐた。

皆のゐるところは、疊無しの板の間で、窓はあつたやら無かつたやら、蚊帳は白く、隅の方は日暮れのやうに暗かつた。

高い戸棚のやうな處へあげられて、竹の簾の上から下へおしつこをした。下は川だつた。其處でおしつこをしたのは私一人だつたか知ら。

蜜柑を一房一房きれいに皮を取つて、指の間で揉むと、ころころした丸い粒になる。其中程を糸で括つてくるくる捩ると、蜜柑の房は宙に躍る。

母は「それお猿さん」「ねお猿さん」と私を笑はせた。

母は日の一日夜の一夜を私の許にかかつて暮した。

母と居る窓の下は明るかつた。其明るい光の中で私は裸にされた。

長い布の紐できり〳〵とからだ中卷かれた。

ある日は、紐で卷かれたなり、床の上におかれた。

わき下に橋がある。右の方から二頭立ちの馬車が白熊の毛を被つた女を乘せて、ぱか〳〵と橋板を踏み鳴らして走つて來た。あれは馬車といふもので、乘つてるのは異人よと教へられた、私は其に抱き上げ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

—(*)—

られてゐたのだ。馬は二匹とも背の高い赤うまだつた。
馬車がまた來た。今度のは大ぜい日本の人が乘つて、馬は一匹だつた。
「あの馬車は、あの橋を渡つて、あつちの路を廻つて、それからまた此處へ來るの」
母の指さす方には屋根ばかり續いてゐた。
橋の袂に、荷を下した金魚屋がゐた。淺い桶の中に澤山の金魚がぶつ散らかつて動いてゐた。前の川にも、それは多分今の神田川であらう、大きなのが泳いでゐた。金魚屋はあれを掬つて賣るのだなと思つた。
鳩の出たり入つたりする大きな提燈の下を潜る。
どうして鳩が提燈の中に住んでゐるのか、夜になつて火を入れたら、鳩はどうするのだらう。母にきいてもわからなかつた。
金網の中に、脇を出した裸の鬼が立つてた。も一つの網の中には黑い牛がねてた。
豆を賣つてる女。人の足もとをはねてゐる鳩。私は其中を、父と母とから兩手を引かれて步いた。
手すりの幅の欄から首を出して、下を覗くと、地べたへ膝で脊を踞くお婆さんがゐる。小箱から、白い砂、赤い砂を摘り出して、指の股から少しづつ落して行つては、甲に武者繪を描いた。兜の鉢にも色をさし、甲の縅にも桜色の砂をつかつた。描き終へると、小さな箒で繪を掃き消した。私は捨ててしまふであらう砂を、どんなに欲しがつたか。
砂繪師は肌をぬいだ。しなびた乳房、高い肋の骨がいたいたしかつた。
顏の白い猿、惡茶氣た猿、尾のぴんと張つた猿、尻の赤い猿。
猿は架け渡した棧竿に繋がれてゐた。
うしろ向きになり切りの猿、逆さにつる下つた猿。しらみらしい虫を拾へる猿、戸を足で摑みあへる猿。
猿は其どれもが目だまをぎよろつかせてゐた。
猿から届かぬ店のはしに、人參の細切れを小皿に盛り分けて並べてあつた。父は長い柄の附いた柄杓を入れて猿の方へ出して見せた。猿の手と足とが上から下から出た。檻も動くやうに騷ぐ。
おだてられて私も人參を突き出した。人參だけ取りさらた猿は、私を馬鹿にしたのか、一匹、柄杓ごと掴んでぐいと引いた。やつと立つたばかりになつた私の足は、忽ち重心を失つて、猿の檻の方へおかつぱ頭をのめらした。目のおき近くに毛むくじやらな何本もの足があつた。私はあつと聲をあげた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

青竹の埒を繞らし大甕の上に、黒の半被を着、角鬘を差した髷つらの奴か、片足を投出して往來の人を睨んでゐる。月代の痕の青い、頰つにはピンと跳ねた髭が生えてゐた。

生き人形の看板。と教へられた。

奴は動かない。けれど、私はあれが人のやうに動いて逆屁すると聞いて、氣ひ悪かつたが、指の尖で糸を引いて動かすのだからと騙されて、やうやく小屋に入ることを承知した。

舞臺は夢の國のやうに際もなく遠くに見えた。

人形は手も動く、目も動く、口は死んだ人の動かす口のやうに動く、眉は黒い馬蛭の蠢くやうに上下にうごく。

廣袖の、顏の厳つい男が、刀をひねつて睨み廻してゐたが、いきなりひつこ抜いて、傍にゐる男の顏を脳天から打ち下すと、顏はぽかりと二つに縦に割れて、半分顎からぶら下つた。

切られた男は、あわてて手でしやくひ上げた。がうまく喰つからないで、またぽかと割れてぶらぶら下つた。

赤い顏の赤い斷面がそこにあつた。ぎらぎらする二つの目玉が、赤い血の中で動いた。

私はおびえ上つた。小屋を出てまで泣きやまなかつた。

私の疼痛は去つた。が、曲げられた背骨は元にかへらぬと宣告されたであらう。足の立つたのを唯一つの喜びとして、故郷に歸らねばならなかつた。片輪でもいい、生きてゐて呉れさへすればと思つた程、喜んだ母である。

うちから、人力仕入に上京する新吉を頼んで、一しよに歸れといつて來た。

新吉は新調の人力に荷物を載せて、陸路を、私達は深川の高橋から利根川通ひの船に乗つて水路を、別れ〳〵に東京を立つた。

新吉が車は箱のうしろに金と朱と極彩色のから獅子が描いてあつた。

岸から渡した歩みが撓ふので、父は母の手から私を受けとつて、あぶあぶ船に乗つた。

あたりはまだ明るかつた。河岸に點つた火の色、ぢやぶ〳〵音する水の音。船では大十能を持つた男が赤々と火を焚いてゐた。

船から父に抱かれたまま川へ小便した。

母は梨を剝かうとして、指を切つた、括つても括つても血が止まらず。小さかつたけれどナイフは四枚の刃を畳みこんであつた。觸れたばかりでも切れた。

土瓶の蔓を手拭でくくつて川の水を汲んだ。かがんで手を突き出さねば川つらへ屆かなかつた。堀の水はまだ濁らなかつたらしい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

初等六級の小學讀本を色刷りの繪本に仕立てたのを出して讀んだ。あかりは船窓から入つた。イト、イヌ、イカリの單語からはじめて、酒と煙草は養生に毒ありまで、いつからか母の膝の上でおぼえたのだ。船の中で見たばかりではなかつた。起きても寝ても、醫者の玄關を上つても、診察を受ける段になつても放さず、教はつて覺えるといふよりも、綱に引かれて馴れた字であらう。

東京はどうと訊かれた。箱のやうな家ばかり有るところと答へた。何處まで行つても瓦屋根ばかり見た、第一印象であらう。處々に立てた柱の上に、はりがねを二本づつ張つてあるのは、何にときくと、あれは遠くの人とはなしをする機械で、こちらでコメソウバイカガといふと、聲がはりがねを傳つてちき向うへ聞えるのだと母がいつた。コメソウバハと言つた言葉がはつきりと耳に殘つてゐる。（母はあれをはなしをするからくりと考へたのであらう）

薄い金々のガラス玉を柳の枝に撓む程下げたおもちやがあつた。船に乘る時は母が一足あとから持ちこんで、低い天井へ釣つた。新吉に肩車して人ごみの中を歩いた時買つて歸つた品である。うちまであつたかどうか、鳩の卵ほどの大きさの玉だつた。

湯槽の帽の大きいかれの丸太は上までずつと抜けてゐる。この帽は

嵌（　）はでおきて入れてあるか（　）觸ると熱い」母は金杯にさはらぬやうに私を抱いてとほりと廻つた。窓から差すあかりで、母の白い肩が湯氣の中に浮いてゐた。夕ぐれ。

はぎ／＼の縮緬で縫つた縮緬袋。襟は青いろの唐ちりめんだつた。今でもゴリゴリする。

金襴のきれで仕たてたきんちやく。

順天堂の焼印を捺した木片に、横山虎壽賀五才とある。

醫者巡禮時代の記念品は以上の三つしか殘らない。

四

坂井の米平叔父か、私の兩手を支へて、茶の間から座敷の縁側まで、あとゐしやりに歩かせて見れたのは、東京へ行く前かとも思ふ。「あんよは上手」とはやすので、口惜しがつて、なほと足をもつらせた。四郎の乳母が野良支度の儘、抱いて來た四郎を上りはなへ下して、上にゐた私に「そこの煙草入を取つて」と指さした。散らばつた縫ひ物を掻きよせて探したが見つからず、四郎がちよこちよこ驅けて來て取つてやつた。私はまだ這ひまはつてゐたのであらう。朝は目がさめると、きまつてしやつくりに苦しんだ。

人の前へ出るのを嫌がり出したのも此頃で、紙鳶の客などは、やう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やく生きてゐるやうな私をいぢらしがつて、土産の繪の具だの鍵だのを見せてお出く\と呼んでも、帶戸の陰に隠れるか、きみの背に縋るかして、決して出なかつた。

母に次いで戀しいのはきみだつた。

きみは重たがりながら、よく守した。寒いと肌んこに負ぶさるのを喜んだ。

起きると、しやつくりに喘ぎながらもすぐと温かな背中へはひつて門を出た。

きみは私を負ぶつて遊びながら、足袋底を刺した。懐には何時でも針を刺す黑いきれと太いぬひの糸卷と入つてゐた。

女で小學校へ行くのは餘程株持の娘でないと無かつた。どこの家でも十三四までは守をするか、まろめを引くかした。きみの相棒はいつも六七人はあつて、守同志雁のやうに横に並んで路を歩くのだつた。うちでは底をきみが差し、上を母が縫つて、大ぜいの家族ながら、足袋は一足も買はなかつた。

守達の遊び場は、定つて土手のうち外だつた。

木瓜は探すのも探すのも澁いかはり、鳩紙は一つ採ると、無數の矢を空中に飛ばせた。種子を下にして掌形にはじけた矢を口で吹くと、ぢき飛び上つて、暫らく宙に浮く。それから目に見えぬ風に乗るのであらう。煙の動くやうに、高く、低く、落ちさうで落ちず、だんだんに遠くなる。見失はぬやうにして見てゐると、木のそばまで行くと、木へぶつかりさうでぶつからず、靜かに浮いて飛んでゐる。轉ろ轉ろと木の上に浮いて飛んでゐる。

鳩紙は耳に入ると聾になる。いましめ合うて人の耳のはたでは吹かない。

「狐が出たぞオ」

きみはがつくりく\駈けてゐた。友達もはあはあ喘ぎながら駈けてゐた。負ぶさつた子供達、私も其一人だが、からだ無性にゆすぶられて、切ないけれど泣けなかつた。

「まだ居るぞオ」

あとを振り返つては呼ぶ者がある。「おいしさん待つてろちば」「おめ、早く來うよ」呼び交しては駈けた。

私は狐、ころんきやおんと聞いて、兩手できみが肩へ噛りついた。きみは私を揺り上げながら、あとへ指さしするけれど、狐は何處を走つてるのか、草しか見えない。

こちらが逃げれば追つて來るし、立ち留れば留つてぢつとしてゐるのだといふ。狐にまはされるといふ者へが恐ろしかつたのか、狐其物がこはかつたのか、多分その二つがきみ達を追つたのであらう。

土手の下は一面の茅萱だつた。

ふとすると、筑波山に眞赤な火が點いて、幾日も消えぬことがある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

野火。
猿を捕るために、獵師のつけるといふ野火だ。
野火のつく頃は、きみも寂しかつたであらう、私は母の顔ばかり思ひ浮べるのだつた。

でも母は日暮れがせはしかつた。
きみと踊る頃はいつも門は締つて、木戸だけが開いてゐた。
時とすると、きみは天上の星を指して、あれはぬか星だの、これは夜ばひ星だのと、名を教へて庭を歩きまはることがあつた。母が聲をかけるまでは、潜りから中へはいらないで。

誰かが肌んこに負ぶさつて
何時か見たよなあの尺五星

三つ並んで光つてた
頭の上のあの尺五星

土手の狐火きれ〴〵に
うすら覺えのあの尺五星

誰かが窓の櫺子越しに
指して教へたあの尺五星
其尺五星今宵探せども見えず
霧のあまりに深ければ

五

湯から上ると、ねつとりした油を背中から肋へかけて塗られる。其上を息も苦しい程長いきれで拭く。それから肝油。
からだへ塗られる油と同じ匂ひの肝油を生のまま呑むのだ。
私は觀念してゐた。
肝油を呑めばなほると信じて呑んだのでは無論無い。肝油さへ呑めば背骨の痛いのが止むと母が言ひ含めるから呑んだのである。大人には我慢のならぬ強烈なにほひなのだ。
母はぐつと一息に呑むのだよと。きまつて言つた。砂糖と一口代りに呑んだらどうとも言つた。その度梨を剝いてくれた。殊にざくざくした古河梨は、口のにほひをぢきに消すので剝くそばから貪りたべた。
尋常四年の課程を卒へて、文庫藏の二階に閉ぢ籠つてた時分、段梯子の下の戸棚で肝油の罐を見つけた。納戸から挿し込む日光に、ぎらぎらする油の玉が、重さうに湛へた液體の上層に浮いてゐる。口を取ると、秋刀魚を燒く時火の上へ落ちる油のやうな匂ひが鼻を突く。これを呑んでおれは生きたのだらうかと淺ましい氣がした。母は飲け

て呑むやうに買つたのだけれど、子供心にぢつとこらへて呑むのが見てゐられなくて、しまひ込んだのだが、あれで三圓だつたと話した。それは買つてから十年たつけれど、罅一つ無かつたので、新家の順次番に、毎日牛乳を分けてやる序に、肝油を呑んで見ぬかと言はせると、牛乳を頂いてゐる上に勿體ないと泣くといふから罎ごと届けた。が嫁は間もなく死んだ。肺が腐つてゐたのだから助かりようはなかつた。肝油は呑み盡して死んだやら、呑み殘して行つたやら、板の上など、落とした位ではこはれぬ罎だつた。

父は外出の度よく蒲燒を買つて來たが、私は鰻でなくちやとじぶくるので、鰻を丸煮にしてつけると喰べる。二三度はだまされたらしい。いい蒲燒をつけると、やはり箸をつけない。生きて動く鰻を見てから蛇を聯想したか、それとも尖つた背骨がいやだつたかだ。私は幾分な事に、たべ物の好き嫌ひが激しく、格好を見ては嫌ひ、色を見ては嫌つた。膳の上に氣にくはぬ物があれば、からりと箸を投げ出して逃つてしまふ。母はある日、怒つてせつかんしようとした。父は「仕方がないよ、おれ達が仕つけてしまつたんだから」と留めた。

泥沼の畑をうちやては向田と呼んでゐた。田圃を大川で取り卷いてゐた島地で、男達は船で通つた。青鷺も下りれば、川獺もかくれてゐた。春になると、男達はよくむくつちよの卵を捕つて來た。低く飛ぶところを鍬の柄で叩き落したといふ雛子をくれたり、菅の葉を束ねてふらふらに作つたよしきりの巢を營ごと持つて來たりした。赤蛙をつかまへて來るのも、男達だつた。赤蛙の足は、こんがりと燒いてしたぢをつけて喰べさせられた。

六

寢間の隅に二階に上る段梯子がある。もと蠶場を置いたといふ處へ、姉様と東向に寢て、枕元へ行燈を立てゝは毎晩草双紙をあけて、平假名ばかりの細かい字を根氣よく追つた。假名よみ八犬傳、白縫物語、まぼろし草紙、金のわらじ等、見より見まねに繪を描くことを覺えた。行燈の横手に母はいつも居るのだつた。女達は暗い火じりに坐つて針をさしたり絲を切つたりした。私が眠るまで皆で側を去らぬばかりに行燈の周りは賑はふ。

養蠶の夜わりは、秋の末から春へかけてする。男達は暗い灯の届かぬ土間で、二尋づつの繩をなふ、持ちこんだだけの藁がなくなると、一束づつ手繰つて輪にして、百束めにくぎりをつけ、それから纏めて戸外へ出す。藁に入るかと思ふと、いつの間にか居なくなつてしまふ。女達のまろみ作りも夜なべの一つである。綿打が若いのうち打つておいたふうかし綿を、そうつと膝へかかへこんで、向う側の見えぬ程ひろげる。それを摑んで、一人づつまるめ綿を擴へて、一尺ばかりの細い竹を右の手に持つ。山のやうな綿の中へその竹を挿しこんで少し

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

づつ綿を釣り上げる。
釣つた綿は、竹ごとまろめ臺の上へ横にして、左の手でくるくると巻く、綿は竹へふうわり巻きつく。竹を引つこぬく。大きな繭くらゐのまろめが出來る。まろめは十本づつみご藁でくくる。かうして丸められたまろめは、一年中おつ通して糸車を廻すたねになる。糸車と機足はどこにもあつた。
始末も終へて、綿俵が積まれると、女達には野良の仕事がなくなるから、晝も夜も糸挽きにかかる。晝間は庭へむしろを敷いて、夜は行燈のぐるりに集つて。

母

お紺に手を曳かれて門から入ると、前倉の庇の下に、うばたまが落ちてゐた。餡を寒天様のうす皮で包んだ、上の圓い下の平たい、座の喰み出した菓子だ。これはうまいと思つて、お紺に片手を釣られた儘しやがんで、明いた方の手で摑みあげやうとした。
「そりや狗糞だつぺな」
狗糞らしいとは思つたけれど。其頃から近眼だつたのである。
家根屋の子のおよし、木挽か鍛冶のおえふなど、毎日頼まれて來ては私を遊ばせた。二人の手に始末しかねる程きれを呉れるし、駄賃も貰へるので、二人は私の忠實なはしためだつた。
晩には萬歳さんが來た。飯に喰はぬことがあつても蝋燭は出來ず、一日三界しよつ中行つたり來たりした。
四人で饅頭の皮を剝いて、中の餡を水で掻きまはしては啄みつこしたり、小さな團子に捏ねて、綺麗な竹細工の篋に並べたりした。
何が原因でか、およしとおえふと門の袖のかげで喧嘩をはじめた。
「何だ、このおよしの齒垂れ尼、わりやなあ、ゆんべ〇〇したつぺ」
いひかけると、畜生、畜生とおよしは猛然としてかぶりついた。
組ち頭髪の毛のむしりこになつて、どちもひいひい泣きながら、掴つさきこ、喰ひつきこをしてゐる處へ、母が出て來た。
苗助さんは、どつちが勝つかといつたやうな顔つきで見てゐたが、母を見ると横とびに飛んで行つてしまつた。

佛壇にはおばあさんが入つてゐる。
佛様の灯と、それに並んだ淺間様の灯と、高い處には神棚のお燈明と、三つまであかりが點いて、中の間は明るかつた。
とゝんかとゝんか、太鼓が鳴り出す。笛を吹く者が出る。
次の間との境になつてるあひだの襖を一枚明けて、一人づつ兩方にかくれて、小を輪に組んだ紐を引張つて待ち構へてゐる。輪の下に饅頭が置いてある。
「すうりんぞ
すうりんぞ

しのだのもりの
だうらくぎつね」
が始まる。おばあさんが歌ふのだ。皆があとを續いて、「だうらくぎつね、今すつて見うせるぞ」と合唱すると、眞暗な次の間から、白い面を冠つた狐がぴよこんと出て來た。

變な手つきで躍りながら、一直線にわなの處へ來て、饅頭を取らうと手を延べる。テンと太鼓が鳴る。狐はびつくりしてひつこめる。テンテンと鳴ると、狐はぴよんと後へ下る。ひゆうとろんことんとんの囃しにいれて、狐はいきほひついたやうに座敷中をはね廻る。すきを狙つては饅頭を取らうとする。太鼓は取らせまいとする。

結局わなに狐がかゝる。

面を脱ぐと、狐は栗原の金さんだつた。

金さんの姉さんは市村勝次郎さんに嫁いでゐた。金さんは何でも出來るくせに何の能も無い人で、一年中親類巡りをして歩いた。うちへも來ると三日はゐた。

延ばせば三尺の長さになる遠目鏡があつた。黑漆の筒に金唐草を卷いたのが、いつからか黴ばんで、離れ〴〵になつてゐた。金さんはある日それを私の手から取りあげて、いぢくつて見たが締まらず、下宿で直して來ると持つてつた切り、私の手に戻らない。

七

幕の裾を引張つて中を覗いて見た。舞臺には襖を二枚立ててあるきり誰もゐない。

臼をいくつも伏せた眞暗な舞臺の下に友達と遊んでゐると、頭の上で拍子木が鳴つた。

それ始まると、我れがちに奈落から這ひ出して、舞臺のわき下へ寄りこぞつた。二階で押して、だいたい「おれなもんか、後ろからおつかかるんだぞ」と、どつちでも叱鳴る。東西といふから、幕があくのかと思ふと明かない。

青竹で仕切つた桝の中には、大人がだんだん詰まる。私達の中間から、飛び出して行つて、青竹を飛び渡つたり、たしろの上でさしよたを立てたり、親仁でも見てゐるかして、無理に威張つて一騒みんなかつた。

拍子木が鳴つた。が未だ幕は動かない。花道の脇に、幕の端を背に手繰つて立つてる男が、首だけ突つこんで中を見てゐる。かと思ふと、幕のまん中頃の縫目から外を見る目がある。私達はそれを見のがさなかつた。誰かそうつと幕の端を持ちあげて中を見ようとした、私も誘はれて下から中を見上げた。

緋緞の錦を着たいゝさ人が腰掛に凭らうとしたが、具合でも惡いか二人ばかり足の下にしやがんで、こんでいゝけふ、こんでといつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の前には後ろ手に縛られて鼓を背負つたお姫様が居た。

「いゝけえ」

「よオし」

木が入つて幕がすら〳〵と引かれた。お姫様は首を垂れてゐる、頭のびら〳〵が動く。耳の前へ切り下げた鬢の毛も美しい。

「愛さん、うまいぞ」

「彦、しつかりしろ。」

おやと見ると、鍬形の兜を被て、緋縅まで揃へたいくさ人は八百屋の愛之助さんだし、お姫様は中の町の彦さんである。ふだんから林組で、尺八を腰にさし、村から村を押し廻す男とは思へない。彦さんは花の額に髭の生えかけたあとを持つてるんだが、一しんに見てゐる中に、愛さんは幕のあかぬ前から腰かけの具合の悪かつたところへ、村のてやひに囃し立てられて、のぼせ上つたのであらう、錯のなかで仰向にひつくりかへつた。

舞臺には彦さんのお姫様が殘つた。

彦さんは鼓を膝からとりあげて、右の肩へ乘せた。

カタと木が鳴つた。鼓はポン〳〵と調子づく。赤面の奴が一人、あげ幕から飛び出して來て、花道を六尺も七尺も一とびに飛んで、ねい、ねいお呼びでござりましたかと、愛さんの前につくばつた。

あとから、十人程の取手を連れたさむらひが出て來た。北の驛さんである。常の野良着に襷だけつけていふのだから、揃つてゐた。奴は筑波島からすけに來た芝居上手の島さんだつた。それに教はつたのであらう。

「どうだ、わいら、腹が減つたぺな。

お腹だ。

「減つた減つた、大減りだ。

さうじて敵さといふものはと、渡りせりふがあつて、腹がへつてはどうもならない物だが、見ればあすこに狐野郎が居る、あの奴も叩き殺して、皆で喰つちまへ、かかるか。

「かかるか、やい。

「かかる。

「捕るか。

「捕る。

賑やか節太鼓のはやしにつれ、本舞臺へ進んで、取つた〳〵とかゝつて行くと、奴は飛んだり跳ねたり、拳骨を虚空に振り舞はして皆の方へ突き出しては、糸でも引くやうに後ろへ引くと、十手を振つてかかつて來る取手は、一人毎に奴の頭の上でとんぼを切りながら後ろへ落ちる。起き上つてはまたかかつて、どたと落ち、ばたと落ちる。花道へ逃げ出したお頭まで、うしろ向きのまゝでたぢ〳〵とひき戻されるのだつた。

私は桟敷で姉と話した。

「今のは狐忠信だつて。あのお姫様が静御前だつぺか」

「さうよ」

「こんだ、石川五右衛門の盗うでだちうが、本とにうでんだんべか」

「あゝ、本とにうでんだんべよ」

「ぢや、おら見ねえ」

私は桟敷から下りた。うちには母がたゞ一人で、忠左衛門新田の爺に呑ませてゐた。

村へ芝居が出來ると、隣村の知りあひには呼び狀をやつて、見に來た人には重詰なり酒なり出す、大概はうちの方へ挨拶に寄るから落る患ひは無いが、父は時々見物席の中を探し歩いて知つた人が居ると言葉をかけた。母は何人に出すか方圖の知れぬ壽司や酒の用意をせねばならないのだ。ふだんは鼬の路切したやうに寄りつかぬ手合が、芝居はたゞで見られて、酒まで呑めるのをいい事に顔を出すのだ。

爺は兄弟三人がかりで兄嫁を姦夫の家で斬り殺した關係を有つてゐた。うちへは春秋二季のべいじやう（祭）に缺かさず顔を出して、一つには兄嫁を斬つた時親類役だつた祖父に助けられた恩を思ふからであり、一つには子供の折から庭で育つた懐しさを忘れなかつたせゐらしい。けれどやはり酒は好きだつた。

私はからみついた。

「爺は、あの平川戸のおかんを斬つたんだつてな。

「嘘いふもんぢやねえ。爺はね鼬かきれえで、あんちき生、路へ出ては、かう立つて手を目の上さかざして爺を見るんだぞ、爺は仕かたがねえから眞似して踊つて見せるんだぞれ、すると鼬は稲ん中さつといと隠れつちまうがね」

兄嫁を斬つたことはあまり言ひたがらなかつた。が、はぐらかされると、おさそれに乘る私であつた。

「鼬は何を喰つてるの、田ん中で。」

「けえるめさ。まあちやんもけえるめは喰つたつけね。」

「うん、赤げえるなら。だが鼬は前倉にもゐら、米も喰ふんだんべか。」

「いや、青大將を喰ふんでさ。」

「青大將、青大將が倉にゐるかい。」

「居る。爺が若い時分にや天井に何匹も巣うくつて、いびきをこうごう掻いてから、今だつて居べさ。」

「嘘だあ。お母さん、ちくだつぺな。」

「えゝ、嘘だともよと笑つてゐた。母は蛇が嫌ひだつた。

私は九つになつてもまだ學校へは行けなかつた。變體假名で書いた繪本太閤記は母に教はりながら讀んだ。三味線の絃で綴つた長唄稽古本や、端唄の紐などゝ教へられて讀んだ。母は年を取つてからも美しい聲を失はず、折々はうたを口にした。三味線は手にせぬかはり、姉が稽古から戻れば、前に据えて見てやつてゐた。

…………………………

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かうして、病體は固まりかけて行つたけれど、曲まれる背は一寸だか伸びず、死なば幸福であつたらう命を、なまじひに母に救はれて、類なき不具の名を國に謳はるる身となつた。代用教員長澤なにがしの筆に、ボールドに形を寫されてさらし物にされた時、大塚武平とて北大寶から來る男が、背中に笊をさし入れ、頭を前の方へ突出して、私に似せて歩いて生徒達を笑はせた時、泣きながら家に逃げ歸つて、どんなに母を泣かしたらう。

二度目に歩けなくならうとした時、醫學士武井準とともに、小貝川の土手から、夕焼の中に浮べる紫の富士を見た。自殺は思ひ留まつてゐたけれど、春近き大野の草に、なほ落つる涙はあつた。

大野の萱草枯れて
火は燃え易くなりにけり
水せせらがず鳥鳴かず
動くは低き煙のみ

落日力弱うして
森の木の間に懸れども
靜かに移る空の色
暮れやゝに淡くして

八ヶ岳[illegible]南に
[illegible]ふ路の極まりて
雪の冠を戴ける
富士の高嶺は現はれぬ

返らぬ波に影見えて
櫻は川に匂ふらむ
萌え初めたる大地に
遍きものは光かな

淚涸りし胸の邊に
閉ぢたる花も咲かんとして
亡びんとせしわが魂の
今こそ新に甦へれ

人は旅より歸る時
花なる妻を門に見む
わが見るものは風荒ぶ
土橋の爪の枯柳

人は旅路に出る時

美人を垣に見む
わが行く路に横たはるは
暗を罩めたる穴にして

筑波の山に居る雲の
葉山繁山越へるも
春は蝶飛ぶ花園に
立つべき足の痿えたるも

ややともすれば雲の外に
隠れんとするいとし兒を
悲む母の懐に
退かせじとする枷にして

千代もと我は祈れども
母は子故に死なんといふ
世に一人なる母を措きて
わが有つ物は有らじと思ふに。

瀧井孝作著　—新刊—
長篇小説　無限抱擁
四六版上製　定價貳圓　送料廿二錢

新鋭文壇中の第一人者、ドツシリした風格もてヒタ推しに邁進しつゝある瀧井君作中の最大雄篇。作趣豐かに、そして傾向文學に阿ねるなく、獨自の旗幟を樹てゝ精進する君の姿は本篇を通して遺憾なく看取されて嬉し。作中病妻を抱擁する主人公の氣持が現代人に向つてどれほどの激動を與へる事か！この雄篇は浮薄なる現代傾向を蔑むにはアマリにドツシリし過ぎると思ふ。その一行にも僞善的分子を認めず眞劍無二の大作！大方の推賞に俟つ。

改造社發行

日本の眞珠

川村多實二

一　日本眞珠の歷史

日本の眞珠は極近年まで世界的に知らるゝに到らなかつたけれども、國内に於てそれが裝飾等に用ひられたのは遠い昔からのことである。眞珠は軟體動物卽ち貝類の肉中に偶然に形成せらるゝ球形の物體であるが、後節に說明する如く、我邦沿海に饒產するアハビ、アコヤガヒ、又は到るところの沼や河に棲む諸種のカラスガヒが良質の眞珠を生ずるものである。從つて水邊に居を構へてこのやうな貝類を嗜食した古代未開の住民が、肉を食はんとして介殼を開き、眼を射る燦然たる眞珠の光に接する機會が度々あつたに相違ない。

それに、他の寶石なれば、種々人工的に琢いたり削つたりするまでは、その光輝を出さないのであるが、眞珠ばかりは天然の儘で完全であり、通常殆んど加工の餘地がないから、裝飾として野蠻人の身邊に用ゐられたことは、岩石貝殼の破片や骨の角などは別として、他の孰れの所謂寶玉より遙に古いのが、全世界を通じての例である。この事は現今南洋や濠州にある最未開なる種族を調べても、又米國中部等で古代人類の遺跡たる塚を發掘してみても、容易に認められることである。

古事記日本紀又は萬葉集を見ると、眞珠が當時シラタマ（之良多麻、思良多麻の字をあつ）と呼ばれてゐた事が解る。マタマといふのは支那語の眞珠から來たので、シラタマよりは後世の稱呼である。神代の記事としては、古事記に玉依姫の御歌に眞珠が裝飾用として佳品であることを詠まれたものがある。人皇の御代になつては、景行天皇が肥前の國で白珠を獲給ふたこと（肥前風土紀）、神功皇后が豐浦津に如意珠を獲給ふたこと（日本書紀）、允恭天皇の時海人の男狹磯が明石海峽に潛つて死を以て大鰒腹中の眞珠を得たこと（日本書紀）等が記錄せられてあり、萬葉集には如何に當時の人々が眞珠を珍重したかを察するに足る歌が澤山ある。例へば、

「海神の持てる白玉見まくほり、千たびぞ告りしかつぎする海子。」
「海神の手にまきもてる玉ゆゑに、いその浦わにかつぎするかも。」
「海底しづく白玉、風吹きて海は荒るともとらずば止まじ。」
「わぎもこが心なぐさにやらむため、沖つ島なる之良多麻もがも。」

母貝の種類若しくは產地を知り得る便ある歌も若干あつて、伊勢、志摩、紀伊、淡路（野島、今の沼島）能登（珠洲）地方のアコヤガヒ、アハ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ビ又は近江の湖のカラスガヒの眞珠であつたことが推定せられる。前にして徴にアハビダマとあるもの、中には眞貝のアハビでなくて、普通のシンジユガヒ即ちアコヤガヒの眞珠を指したものもあるとの説がある。此時代に眞珠の珍重せられたことの他の證據には、尙佛像の裝飾に之が使用せられた事實がある。奈良三月堂の御本尊たる不空羂索觀音の白毫及び寶冠にはアハビとアコヤガヒとの眞珠が澤山に用ゐられてあり、東大寺や元興寺の建立に際して地鎭のために他の寶玉と共に眞珠を埋めたことが近頃明かとなつた。

奈良朝以後の文書にも、志摩や對馬の眞珠が當買せられたことが誌されてあり、西行法師は三河國伊良子に旅行したときに、イガヒとて、現今でも所によつては食料となし且つ屢眞珠を藏することのある一種の貝の殼をうづ高く積みあるのを見て、

「あこやとるいかひの殼を積みおきて、寶の跡を見するなりけり」(山家集)。と詠んでゐる。

西洋人の殘した日本の眞珠に關する古記録はあまり多く知られてゐないが、古くは元代に支那に來つて政治の最高顧問をしてゐた伊太利人マルコポロがその著ヂパングの島に「此の島に薔薇色の大形の眞珠が澤山あつて、死人を火葬にする時口中に一個の眞珠を納れる風がある」と書いて居ること、千六百七十年頃に印度に來てゐた佛國旅行家ゼー、ベー、タベルニールが日本の眞珠に關する噂の聽き書をしてゐること、及び、千七百二十七年に出版したイー、ケムペルの『日本の歴史』中に眞珠を藏する貝類の各種とその産地とを揚げてゐること位で、著るしいものであらう。尤も彼の二人は日本の眞珠の噂に倣なることや高額の大なることまでは知らなかつたらしい。夫故日本の眞珠を實際に歐洲人に紹介した機會としては、寧ろ次の場合を擧ぐる方が適當であらう。それは德川時代に九州各地の大名が羅馬法王に使節を送つた際に、手土産として持つて往つた物の中に立派な眞珠があつたことで、そのことは今もヴチカン宮博物館に保存せられてある文書の中に誌されてゐる。肥前大村の藩主は親ら法王及びその從者に一握づゝの眞珠を贈つて彼等を驚かしたさうであるが、大村藩は現今でも尙我邦有數の眞珠産地である。

我邦上代の風俗として、珠玉に緒を貫いて首飾としたり、支那の衣冠を眞似て制定した服裝で所々に珠玉を利用したりしたから、眞珠も亦盛に此目的に用ひられたのであるが、中世以後は服裝の變遷のためか、どうも身邊に之を佩ぶる風が次第に廢れたやうである。但し他方に於て商品として市井の間に多量に之が取引せられた事實を考へると、日本の眞珠が我邦の對外貿易業者若しくは支那朝鮮和蘭等の商人によつて盛に外國に送り出されたことが推測せられるが、それにも拘はらず歐洲人が日本の眞珠のことを一向知らなかつたのを見ると、日本の眞珠が商人の手から手へと轉賣せられて歐洲に達する頃には、印度波斯又は南洋諸島の眞珠と全く混同せられて、單に Oriental Pearl の名を以て呼ばれたのであらう。

二　日本眞珠の母貝

動物の體中に或種の病的凝固物又は結石を生ずることは間々あることである。人間又は牛馬の膽石や膀胱結石に昔から人がよく知つて居

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たし、腸の內臓中にも堅い石灰物質を生ずることがあり、人間では唾液の凝固物が口腔の一部に出來ることがある。然し貝類の體中に生ずる眞珠なるものは、其發見せられる場所に於て論ずるにそれ等に從つてゐる。その理由は、貝類には體の外表に介殼といふ石灰質硬固たる而して頗る大なる物體を作る性質があるので、之が少しく間違つて、體內に同樣なる物質を作り始めれば、卽ち眞珠となるからである。抑も動物體が介殼を作るのは、體の外側を包む薄き皮卽ち外套膜の表面を占むる「上皮組織」の役目である。此組織は多數の細胞が恰かも道路上の敷石の如くに一枚宛並んで、一枚の甚だ薄い皮膜をなしてゐるもので、內側卽ち結締組織其他の內に接する側から適當なる材料を攝て、外側卽ち體外に向つて、一種の液體を分泌する所謂「腺細胞」の集合である。此泌出せられた液は直ちに凝固して炭酸石灰の結晶を作り、既に存する介殼の內面に沈著して、次第に介殼の厚みを增すのである。つまり介殼なるものは其內面に於て丁度壁の上塗を追續してやる如くに、層又層を加へて造られるものであるから、介殼を橫斷してその斷面を見れば、恰も重ねた紙の小口を見る如き平行線が見ゆるわけである。

然るに元來は表面にあるべき、上皮組織細胞の小群が一寸した機會で貝の體中深く陷入する場合がある。例へば小形の寄生蟲が外套膜の表面から孔を穿つて內中に侵入したときに、之に伴つて入り行くが如きである。上皮組織には分泌以外になほ表面を被覆するといふ役目があるので、體皮の何處かに傷を受けて表面に裂目でも出來やうものなら、その近傍にある上皮細胞が直ちに增殖し初めて、橫に此組織を延長伸出し、裂目を補綴する天性を備へてゐるのである。從つて寄生蟲が穿つた孔に沿うて體中深く上皮細胞が陷入することも不可能ではない。之は單に一例であるが、とにかく、或る機會に體中の一部に一つの陷所が出來て、そこに若干個の細胞より成る上皮組織の一破片が陷入し來つたとすれば、此上皮組織は細胞の增殖によつて橫に延長伸出し、陷所の內壁に沿うて擴がり行く結果として、遂に元來の外面を內側に向けた一個の袋を作り上げる。之を眞珠袋といふ。それと同時に此等の細胞の各々は彼等の固有の官能たる介殼物質の分泌をドシドシ行ふから、茲に袋の內部に介殼と同じく、炭酸石灰からなるところの一個の凝固物が作られることになる。之卽ち眞珠である。從つて眞珠は最初は形が小さく、時日を經るにつれて次第にその徑を增しゆくもので、若し之を二個の半球に切斷してその斷面を見れば、同心環形をなすところの成層線が認められるのである。

眞珠の成因は右說明した通りであるから、介殼の內面を作る物質と、その貝に生ずる眞珠の物質とは同一である。然るにこの介殼の內面は貝の種類によつてその色彩光澤を異にし、例へばアサリ、ハマグリ又はシジミの如くに白色又は紫灰色であまり光澤のないものと、アコヤガヒ、アハビ、又はカラスガヒの如くに金屬狀の美しい色彩光澤を有するものとがある。後者の美しい介殼の內層を特に「眞珠層」と呼ぶのは、此種の層を有する貝類で此層と同一物質が體中に分泌せられて作られる眞珠こそ實際裝飾の目的に用ひられるものであるからである。アサリ、ハマグリ、シジミ、若しくはシヤコの如きの眞珠は、色澤が何かの樣に蒼白いとか灰色であるとかで、少しも光澤が無いか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら、實玉としては殆んど無價値である。

我邦に産する貝類で、最も美麗なる眞珠層が介殼の内面に有し從つて最優秀な眞珠を生ずるものは、シンジユガヒ科に屬する日本シンジユガヒ即ちアコヤガヒである。此貝は我邦本州南半分と四國九州の沿岸で、幾分外洋から隔てられたる灣内で、底に泥土が少くて水の濁らぬやうな所に、深さ數尋の底の岩石に絲を以て附着してゐる直徑二、三寸の貝である。昔から眞珠採取の目的で居られたのは此種であつて、その産地として有名なのは、肥前大村灣、日向浦尻灣、淡路福良灣、志摩英虞灣、對島淺茅灣、若狹小濱灣及び能登七尾灣であるが、近年濫獲の結果著るしく減少したところが少くない。尤も他に、新に移植を計畫せられた所もある。此貝の眞珠層（從つて眞珠）の色彩は産地によつて少しく異り、大村灣産のものは英虞灣の純白なるものに比すれば大分クリーム色を帶びて居るが、皆非常に美しい光澤を有して、その介殼は貝釦製造の良原料として賞用せられ、倫敦市場では之をJapanese Lingah shellと呼んでゐる。

アコヤガヒに近いもので、之よりも一層大形なものにシロテフガヒ、クロテフガヒの二種があるが、共に熱帶產の種で、我版圖内では琉球以北に産しない。貝釦や頭飾りの類に利用せられてゐる蝶貝といふのは大抵右のシロテフガヒである。琉球に産する他の一種マベはアコヤガヒ程多數に産しないが、然し介殼の長徑七八寸位の大きな貝で、眞珠層も亦美麗であるから、時に大形の立派な眞珠を生ずることがある。

各種のカラスガヒも亦美しい眞珠層を有し、往々美麗なる眞珠を生ずる。色彩光澤共にアコヤガヒのものに似て、區別し難き程のものを生ずることもあるが、概して稍赤紫色を帶び、且つ形の球形でないものが多い。海產のアハビから出る眞珠も亦光澤はよいが、色彩が赤緑紫等を交へて濃艶に過ぐるものが多く、イガヒの眞珠は通常黑紫色で茄子のやうな色をしてゐるから、或特殊の目的を除いては、裝飾としての用途が甚だ狹い。カラスガヒを眞珠採取の目的で漁つたり飼つたりすることも明治時代迄は多少行はれたが、今ではさういふ事はない。況してアハビやイガヒでは全然食料として漁獲したものゝ中で極稀に、然も偶然に眞珠を發見するので、古歌にあるやうに眞珠を得んが爲めに海に潛つて此貝を漁ることは無い。比較的眞珠を含む歩合の多いアコヤガヒの場合でさへも、貝の產額が次第に減少した上に勞銀が高くなつた今日では、介殼や天然眞珠のみを目的として此貝を採取したのでは到底收支が償はぬ狀態であるが、幸に我邦では人工を以てアコヤガヒに眞珠形成を促がすやうな方法が發明せられてゐるため、貝の產地を所有する人々又は漁業組合は、自分で此人工促進及び養殖を行ふか、さもなくばかゝる養殖業者に向つて施工の種貝として賣り込むことによつて多少收益を擧げ得るのである。

三 養殖眞珠

明治二十三年東京市に催された第三回内國勸業博覽會に、志摩國鳥羽の御木本幸吉氏が眞珠と眞珠貝の生活せる模樣の標本を出品したが、審査官の一人で東大動物學教授の箕作佳吉博士が之を見て、眞珠貝の蕃殖を計る方法並に人力を以て介殼內に眞珠樣の物體を作らしめ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る手段に就て種々の注意を與へ、之が實行に着手することを勸告した。貝の内に眞珠樣の物體を作らしめるといふのは古くから南支那地方で行はれた手段で、カラスガヒの介殼と外套膜との間に土塊や錫で作つた小佛像をさし入れて、之に眞珠層の薄皮を被らしめる方法である。當時壯年の御木本幸吉氏は、別に眞珠養殖場の大地主でもなくまた眞珠取引の大商人でもなかつたのであるから、多分單に國產品を紹介する程度の目的を以て出陳したものと考へられるが、大都市の商人でさへも未だ博覽會の趣旨や效果を了解せぬ者の多かつた當時にあつて、志摩の如き地方から進んで之を出品したところ、既に同氏の着眼點の凡ならざるを示してゐる。この研究心に富み事業慾に燃ゆる御木本氏のことであるから、大に箕作博士の忠告を歡迎し、歸國の後直ちに之に着手したが、親族の反對隣人の嘲笑を始め、創業時代に有り勝な幾多の悪戰苦鬪をやつた後、明治二十七年頃遂に半圓眞珠の產出に成功し、二十九年一月此方法の專賣特許權を獲、製品を「御木本養殖眞珠」と名づけて、次第に手廣く之を販賣することになつた。最初御木本氏が此事業を創めたのは、今も同家の養殖場のヘッドクオーターである志摩英虞灣の多德島附近であつたが、其後各地に好適たる漁場を見つけては養殖所を增設し、養殖眞珠の產額年々增加すると共に、又東京銀座の本店を始め、大阪、倫敦、紐育、巴里等に支店を開き、有名なる博覽會には毎回必ず意匠を凝らした廣告塔を出陳して宣傳大に力め、遂に今日の世界的聲價を得たのである。其間に於ける御木本氏の奮鬪努力は申迄もないが、氏は所謂將に將たる才とでもいふか、親族や店員中の信頼す可きものを拔擢して、各養殖場や支店の支配を一任し、自らは常にその全般を見渡して總指揮官としての采配を振るといふ風である。宣傳の巧妙なることも、恐らく實業家の模範たるべく、貴人顯官の御訪問に當つて機會を捉へて、多德島に招待するとか、帝都の富豪大官の所へ押かけて行き談笑の間に眞珠養殖の苦心談をする手際など實に巧なるものであつたと聞く。更に天然眞珠の買集めにも非常の商才を發揮して、名實共に日本一の眞珠商となり、其結果近頃ではもはや日本内地の廣告は不必要といつてもよい位に有名であるが、昨年から七十歲の高齡を以て歐米を巡り、各國の大統領や大官連を訪問し、通譯を介してではあるが、翁一流の大氣焰を吐いて日本眞珠を廣告して廻つたなどは、他人に眞似の出來ない藝當である。氏は又郷里附近の公共事業に私財を寄與したこと多く、頗る地方民の信望を得て居る。曾ては綠綬褒賞を下賜せられ、現今は貴族院の勅選議員に任ぜられてゐる。

御木本氏が養殖眞珠の發賣によつて多大の聲望と收益とを得ることになつてから、日本各地のアコヤガヒ產地にある水產業者、特に志摩郡附近の人々が之を羨み、氏に倣つて眞珠養殖業に投資しやうとする者が續々と現はれたのは當然の成行である。然し右の養殖眞珠なるものは御木本氏の專賣特許であつて如何ともすることが出來ぬ。そこで何とかして此特許權を無効にせんものと考へ、「御木本氏の方法は既に南支那地方の農民さへも知悉せる公知公用の方法であるから、到底一個人の專有を許さるべきものではない」との理由で以て、出訴する者が出來た。之は如何にも理由のある反對論であつたが、當時特許局の係官に之を判斷する知識がなかつたか、或は我邦に於ては古來無かつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たものであるからか、それとも御木本氏の巧妙なる運動が其効を奏したのか、其邊のことは分りかねるが、兎に角最後に御木本氏が此訴訟に敗ける迄の廿餘年間は係爭が續いて一向埒が明かず、其間に御木本氏の方ではドシドシ事業も膨脹すれば、販路も擴がり、多大の收益を擧げてしまつたから、專賣特許の甘い汁は充分吸つてしまつたと評してもよいであらう。今日では「一所切落しの核」といつて、中に插入する核を鏡餅のやうな形にすることだけは御木本氏の專有權で、それさへ使はねば養殖眞珠の人工形成を何人が何處でやつても構はぬといふ事になつたので、諸所のアコヤガヒ産地で之を作つて居り、その製品は東京、横濱、大阪、神戸等の商人の手を經て、相當多量に外國へも輸出せられつゝある現狀である。

然し茲に注意す可きことは、右の「養殖眞珠」なるものは、嚴格なる意味に於ては決して眞珠ではないことである。前に説明した通り、介殼内面の眞珠層なるものは、外套膜表面の上皮組織が分泌した物質が層又層を作つて凝固附着したもので、恰かも漆の上塗をするやうに上へ上へと添加せられるものであるから、若し外套膜と介殼内側との接着面に球形の物體を插入したとすれば、それ以後に分泌せられる眞珠層は此物體の上を被ふやうにして介殼の外へ塗りこめて仕舞ふのが當然である。若し物體の插入後兩三年の時日を經過すれば、この被包眞珠層も相當に厚くなつて、あまり中味が透いて見えぬ樣になるわけで、丁度介殼の内面に一つの半球形な突起が出來る。養殖眞珠といふのはこの半球形な突起をば介殼に附着して居る根本の部位で切り離し、鏡餅のやうな形のものを得、その下面の扁平なところに、蝶貝を削つて同じく半球形としたものをもつて來て膠様のものでくつ附けると、之で漸く一個の球形のものが出來る。上から十分の六位迄が介殼から切り出した眞珠層の半球形部で、それから下が蝶貝の繼ぎ足しであるが、此繼目の邊が指輪で云へば丁度摑く爪の邊りになるから、指輪にくつ附けてしまへば餘程近づいて見なければ、實際球形なる本物の眞珠と區別がつかぬ。御木本氏はそれで之を眞珠の一種として賣出したのであるが、然し眞珠とは元來貝の肉中で形成せられたる球形體であるから、右の如き介殼の内面に作らしめた物とは別の物である。尤も天然でも肉中にあつた眞珠がその發育の増加と共に表面近くに現はれ、遂には介殼と癒着するに到るために遊離眞珠變じて附着眞珠となることもあるが、此場合には介殼から切り離して一皮剝けば中から完全なる遊離眞珠が現はれる筈である。

御木本の店で此養殖眞珠を買つて歸つた外國人が之を眞個の眞珠たと思つて得意になつてゐる中に、繼目の所から離れたのに驚いて、非常に怒つて懸合に來たといふやうな話を聞いたことがある。之は第一には買ふ方の迂闊で、本物なれば千圓も二千圓もする程の大きさの眞珠を三十圓か五十圓で買つて置いて本物と思ふて居るのは虫のよい話であるが、然し何分素人の買手のことであるから最初の中たまにはそんな面倒も起つたらうと想像する。尤も御木本商店の方では半圓眞珠は天然眞珠に比較して誰でも容易に區別し得る上に、價格に大差があるから倫敦や巴里の市場で特別の商品として取扱はれ、何等取引上に困難なる問題を惹起すことはなかつたと辯明してゐる。それは兎にかく現今では一般外國人も此養殖眞珠の性質を了解して右のやうな誤解

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をする者も無くなつたらうが、然し茲に甚だ面倒なのは此養殖眞珠といふ名稱である。近頃日本では、私が後節に説明する球形眞珠の人工促成法によつて、アコヤガヒ肉中に天然眞珠と同一なる遊離眞珠を作らせて、盛に外國に賣り出さうとしてゐるが、此方法でもアコヤガヒを手術後何年かの間保護飼養し置くのであるから、所謂眞珠の養殖事業であるが、外國人は此方法によつて得た球形眞珠をも the culture pearl と呼んで、天然眞珠即ち野生の貝を取つて集める眞珠から區別しようとする。從つて之が御木本式の半圓眞珠と混同せられて、その區別の説明に中々手數がかゝるので、之は實際に私が外國人に向つて説明を試みて經驗したところである。新に商品に命名する場合、なるべく諸方面の事情を考へてせねばならぬことを示す一例であらう。

之を要するに御木本氏が眞珠養殖事業を開始したことは、日本眞珠の發達上に一新紀元を作つたもので、從來の漁民が野生のアコヤガヒを取ることだけを知つて、その幼者を仕立てたり、害敵を防禦し驅除することを知らなかつたのを改めて、相當有効なる蕃殖保護の方策を樹て、支那では單に玩具様のものだけしか作り得なかつた方法を改めて、世界的に取引せられる商品とまで爲した功績は永久に記錄せらる可きものである。

四　球圓眞珠の人工促成

それを構成してゐる物質から云へば、養殖眞珠の上作と天然眞珠の遊離眞珠も、共に眞珠層の被包であつて、全然同一であるから、其養殖からいつて、養殖眞珠も眞珠でないことはない。硝子の空球内に魚鱗から採つた銀白色の物質を吹きこんで作つた擬眞珠、或は近頃佛蘭西邊で硝子球の上に眞珠の薄衣をかけて作る模造眞珠等よりは、餘程本物に近いのであるが、然し何分にも完全な球圓形ではなく、球體にする爲めには下から紐をあてねばならぬ。それ故孔を穿つて頸輪等にするといつたやうな場合には全然駄目である。そればかりではない、眞正といふものは兎角所有者の氣持が大切で、たとへ夜目遠目に區別がつかぬとはいへ、本物でなくては持つ者の氣持が惡い。そこで、どうしてもアコヤガヒの肉中に遊離して生ずる球圓形の眞珠を作らせることに成功する迄は、眞の人工促成法の發明とは云ひ難いのである。

抑も生ける貝に人工を施して眞珠を作らしめやうとする企畫は世界各國で頗る遠い昔から試みられたことであり、學術的にも既に千七百十七年佛國のレオーミユールの時代に行はれた實驗がある。最近には、ブータン（一九〇三）ラッペル（一九一一）ゼームソン（一九一二）アルフエルデス（一九一三）等の歐洲學者が甚だ精確なる研究をなし、最後の學者の如きは學理的には可なりに成功したけれども、用ひた貝が淡水産のものであつたのと、幾分不充分な所もあつて、實行的に不經濟で、到底望なしと放棄したのであつた。眞に學理實行二つながらの方面で完全に此問題を解決したのは我日本の動物學者、故西川藤吉氏である。

西川氏は明治三十年に東大の動物學を出た理學士で、卒業後直ちに農商務省の水產課に入り、三十八年まで同省にあつて、各種水產調查

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の調査に從事したが、其間特に眞珠の養殖に興味をもち、三十四年濠洲に出張した際にその世界的知見を獲た上に、御木本幸吉氏の令嬢と結婚して益々眞珠との關係を深めた。其頃眞珠養殖上の種々なる問題特に害敵の防禦などで屡御木本氏を援けたことも多かつたであらう。同氏は學生時代から頭腦のよい上に機械を工夫したり、標本を造つたりすることが巧なので、友人間に定評のあつた人であるから、眞珠の人工促成方法の發明には實にもつて來いの學者であつた。氏も亦此點に自信があつたと見え、遂に斷然官を辭して浪人生活をなし、東大の大學院でいよく\/此問題の研究に邁進することになつた。當時學生として同教室にあり、多大の知識を受けた私は同氏の性行を詳に知つてゐるが、實に眞面目な、研究心に富んだ而して他人に親切な學者で非常に學生達に敬慕されてゐた。

西川氏は先づ英國の眞珠學者ゼームソンが發見した天然眞珠を取卷く眞珠袋の存在と、同國のハードマンやホーネルの認めたる眞珠の中核として存する寄生蟲の死骸等から考へて、本稿の第二節に述べたやうな眞珠の成因、即ち寄生蟲の突入若しくは他の或偶然なる機會で外套膜表面の上皮細胞が貝の組織中に移入して、其處に眞珠袋を作るものであることを看破し、人工を以て上皮細胞の一部を貝の肉中に挿入する實驗を行つて見事に成功し、更に之に添へて一個の核を插入することによつて稍大形の眞珠を作らしめることにも成功した。之が即ち西川式眞珠人工促成方法である。一口に斯う云つて終へば何でもないことのやうであるが、この原理が發見せられ、此實驗が奏効するまでの西川藤吉氏の苦心が如何に大であつたかは、歐米の眞珠學者が數世紀に亘つて同一問題を攻究しつゝ、然かも一人の此域に達したものが無かつたことを考へれば直ちに明瞭であらう。

當時西川氏は此發明を公表せんことを欲しなかつた。同氏は此方法を益々改良發達せしめて完全なものとし、ゆく\/は國産として對外的に有利なる國家的事業とせん念願であつたらしく、從て、此方法の秘密が外國に漏れることを非常に氣遣つてゐたやうである。又當時我邦の中でも、球形眞珠の人工促成といふことは、多くの眞珠關係者が渇望してゐたことであるから、いよく\/西川氏が此方法を發明して、何處かで養殖事業をやり出したとなると、此秘密を探るためのスパイを盛に入り込ませる。或は秘密を教へられ手術を習つた使用人を買收して連れて行く。之が中々防ぎ難いものである。西川氏は特許を取ることさへも躊躇した。特許を取れば公報に出る。いくら要點をボカシて書いても公報に載せる文句に嘘はかけぬから、少し專門的知識のあるものが讀めば直ぐに見透されるといふわけである。然し全然出願せずに置いたのでは他より出願者があつた時に負けるからといふので、特許は出願して置き乍ら後から追かけて願書を出して當方から重ねて願ふまで審査を延期して待つて貰れといふことを申出し特許局では之を受理して適當の時まで預るといふことになつたのである。

實際其頃眞珠人工促成の發明といふことは世人の非常に注目した問題であつた。之には其頃飛ぶ鳥落す勢の御木本氏の特許を無効にしようと焦る北村某氏等の抗議が關係者の注意を惹いてゐたことも幾らか關聯して、「半圓眞珠で御木本に頭を抑へられるよりは球形を發明して鼻を明かし、御木本以上の富を摑んでやらう」とねらふ連中が少く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たかつた。當時少しく西川氏の眞珠研究に手傳つてゐた私の處などにも、何とかして秘密の端くれでも聞き出し、ヒントを得やうとする者が來たことがある。或時三崎から上京して本鄉の親戚の內に滯在して居ると、名は秘して置くが志摩國の何某といふ男が紹介も何もなくて突然やつて來て頻りにいろんなことを聞く。好い加減に應對してゐると、懷から水引のかゝつた金包を態と食み出さして、さて折入つてとか何とか云ひ出す樣子なので、怒心頭に發し早々に追出したことがあるが、近頃人傳に聞くと、先方では私とは中々親しくて度々質問に行つた等と吹いてゐるとか。然し未だ大發明を完成せぬ樣子。當時はこんな風な人間が少からず立廻つたものであつた。

さて、西川藤吉氏の右の方法を發明した頃には、舅の御木本氏との間に幾分氣まづい事があつて、仲があまりよくなかつた。それには性格上の相違といふやうな深い原因もあつて、親族友人等の斡旋位では中々解けない有樣であつたので、此新方法の使用についても意思の疏通が出來なかつたらしい。それで西川氏は御木本氏の希望を拒絕して全然此方法の使用を許さず、別に他の親族や友人の出資で淡路の福良灣に直營の養殖場を開き、又大村灣內の長島といふ無人島を披いて新に養殖場を創めた渡邊男爵の養子渡邊理一氏にその使用を許可したり等して實行期に入つたのであつたが、他方には將來國家的事業とする瀨踏として、東京帝大の事業として經營し、出來得るならば大學の收入を圖らしめる考で、教授飯島博士と濱尾總長の贊成を得て同大學附屬の三崎臨海實驗所で態々九州から移送したアコヤガヒの養殖をやることにしたのである。然るにそれから幾らも經たぬ中に同氏は胃癌の爲めに夭逝せられる。淡路福良の養殖場は同地漁業組合長の要求過大と天災とに惱まされて遺族の人が斷然閉鎖する。三崎の試驗的養殖は經費が續かなくて中止するなど散々なことになり、折角東大の卒業式に標品を陳列して、明治天皇陛下の天覽を忝うした（之が明治四十二年の七月で、西川氏の歿後僅に十數日の後であつた）新發明方法もその後二年も經たぬ間に實施といふ點で一頓挫を來した形であつた。然し幸に西川氏には現九大教授西川虎吉博士現日銀理事麻生二郎の兩兄と、職業を擲ちて眞珠業に入つた一弟西川新十郎氏とがあり、飯島博士の他荻野仲三郎武田五一其他故人の親友に立派な人々が多かつたので、間もなく西川御木本兩家の間の確執も解け、志摩の御木本の養殖場の一部に西川新十郎氏が移住して協同で新方法による事業を初める（之は後には閉鎖せられたが）やら、各地の養殖業者が今は故人の遺子西川眞吉氏の名義となつてゐる特許方法を或報償の契約の下に使用し始めるやらで、再び發展の曙光を見ることになつた。尙此方法の改良といふことに關しては、三崎實驗所の助手をしてゐた理學士藤田輔世氏（此人は今三菱の出資で南洋セレベス島で眞珠養殖をやつてゐる）と藤田昌世氏の兄弟と私（尤も私は其後京大に轉任したので遠ざかることになつたが）が西川新十郎氏等と連絡をとつて絕えず新實驗をやり、方法の進步を圖つた結果最初は極小さな球圓眞珠しか出來なかつたものが、此頃では直徑七ミリ半もあるやうな大形の光澤色彩申分なきものが出來るやうになつた。之には今肥前大村にあつて自ら養殖場を經營し、又各地の養殖場の總指揮をやつてゐる西川新十郎氏の努力が大に與つて力あつたのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

抑方法の進歩といふことは經濟上からいつても大切なることであるが、一方他の同業者に對抗する必要からも忽にすべからざることである。今日では眞珠の成因とか眞珠袋の意義とかいふことは世界の專門學者が皆よく知つてゐるけれども、多くの學者は原理だけを知つて實行上に有利なる手術方法を知らぬのである。西川式方法は既に内外國で特許として許可公表されてゐるが、此特許なるものは、發明の種類によつては大に競爭者防禦の武器となるけれども、眞珠の如く秘密の作業室で手術を施し、製品の上で何等の證據を殘さぬ品物の場合、特許侵害で盜用者を牽制することは甚だ困難なることである。從つて此種の事業で競爭者を負かすには、どうしても手術方法をはじめ、飼養とか害敵驅除とか、あらゆる關係問題を、絶えず學術上合理的に然も實際に有利なるやうに改良進歩せしめ、常に競爭者より一歩先に出てゐるといふことが大切である。西川式方法は我邦では既に確實に算盤が持てるだけに改良せられてはゐるが、今後外國に於ける追從者や競爭者の出ることを考へたらば、我國家といふ見地から、絶えずその進歩を圖り、もつと短時日に、もつと優秀なる眞珠を作り出すやうにすることが日本人の是非とも爲す可きところである。

五　類似方法の比較

日本眞珠界近時に於ける内情を考へるには、どうしても我が特許局が眞珠に關する特許出願者に對して執つた態度を説明せねばならぬ。元來特許局の審査官には工科出身の人が多く、動物學上の事や水産養殖上の問題に精通した人は望まれない。然るに特許出願者の側では自分の方法の急所を薄ボンヤリにぼかして置いて、成る可く廣い範圍を包括するやうに文句をもつてやらうといふ魂膽があるから、願書面で甲乙の優劣とか抵觸の點の有無を判斷することが中々容易でない。明治時代の同局では恐らく眞珠問題程厄介にしたものは他にあるまい。明治四十二年の頃同局では特に小野といふ頭腦のよい審査官を選んで東京帝國大學の三崎臨海實驗所へ派遣して、實際生きたアコヤガヒの形態解剖や、生活狀態などを學習させたことがあつた。之は特許局としては實に眞摯な而して親切なるやり方で、當時私は此擧を深く感心したのであつたが、近頃の特許局が續々と許可する方法の内容を見ると、右の樣な眞面な態度と正當を得たる理解とが審査者の間に缺けてゐるやうに思はれてならない。

尤も此種の問題は機械か何かの場合と違つて生き物相手の仕事で方法の有效無效といふことが常に問題になる。先年中間眞珠の場合に、挿入する核を手術前に暫時生理的食鹽水に浸すといふ新出願の特許が係爭問題となつたことがあつた。抗議者はそんなことはやつてもやらずとも同じ事だといふのである。實際のところは蝶貝の殼から作つた核を一日や二日食鹽水につけても別に何ともならないし、又海水そのものは殆んど生理的食鹽水と同成分で唯少し濃縮なるの差があるばかり、而して貝に挿入した核は眞珠質を被る迄は常に海水にぬれて居るのであるから、何も豫め人工で作つた生理的食鹽水に入れて置く必要はないのだが、特許局で之を多數の學者に鑑定させたところ、或鑑定人は醫學者や生理學者が何時でも試驗材料を食鹽水に浸すことを考へて特に有效だといひ、殘りの鑑定人はどうせ海に放つ貝のことだか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら同じ事だといひ、審査官をして判斷に苦しましめたことがある。結局は無効といふことになつて出願者は特許を獲なかつたやうに聞いてゐるが、さて實際に於て、果してこの特許が他人から侵害されぬであらうか、核を豫め食鹽水に浸すことをやつてはならぬと云つた所で取締の仕やうがあるまい。こんな特許は實際の使用如何よりも、一つでも多く特許番號を並べて廣告にしようといふ位の目的で出願せられるのである。

次に私は近頃の特許方法を評論する前に、比較のために西川眞吉西川新十郎兩氏が所有する特許方法の主點を掲げて置かう。

「生活セル貝體ヨリ眞珠袋ヲ構成ス可キ細胞ヲ之ニ接續セル組織ト共ニ取リテ之ヲ貝ノ組織中ニ挿入シ眞珠ヲ形成セシムル方法」ニ

「介ノ體中ニ設ケタル穿孔ニ任意ノ核ヲ插入シテ其癒着スルヲ待チテ更ニ新ニ穿孔シ核ニ近接シテ眞珠袋ヲ構成スベキ組織ヲ挿入シテ眞珠ヲ構成セシムル方法」

要するに私が本稿の第二節に說明した通り、外套膜の上皮組織の小片を介の肉中に陷入せしめて眞珠袋を作らせることが主眼で、核を同所に挿入することは眞珠物質被着のスタートを與へて、速に大形の球圓眞珠を得んが爲めにである。前項の方法では此核の有無を明示してゐないが、之は眞珠形成の原理としては眞珠袋の形式が大切で、核の有無は從屬的の問題であるから斷つて無いと解するが適當である。從つて核の有無にかゝはらず「眞珠袋ヲ構成ス可キ細胞ヲ貝ノ組織中ニ挿入スル方法」は皆前項の方法に牴觸すること勿論である。後項の場合には前以て核を入れて置くといふ點が前項方法の追加改良と認められて許可せられたと思ふが、之は當然のことである。

御木本幸吉氏がその半圓眞珠の特許權を失つた頃から、球圓眞珠の人工促成法を得んと焦慮したことは既に述べたが、遂に大正二年秋一法を案出して特許權を得るに到つた。之が同氏の眞圓眞珠形成法であるが、

「適當ノ核ヲ貝ノ眞珠素質分泌細胞組織ノ皮膜ニテ被包シ、其口ヲ結紮シタル儘、他ノ母貝ノ表皮ヲ傷ケ、其ノ下層ニ外科的植皮術樣ニ壓着シ海中ニ放養シテ眞珠素質ヲ被着セシムル方法」

といふのである。即ち、平たく云へば、一匹の貝の外套膜の外側に核を置いて外套膜を曲げて、恰かも手巾で一個の橙を包むやうに包み、その口もとを絲で縛り、之を貝の他の部分から切り離して、今一匹の貝の表皮を傷けてその所に壓着するといふのであるが、之は當然西川氏の「眞珠袋ヲ構成ス可キ細胞ヲ貝ノ組織中ニ插入スル」場合の内に包括せられてゐるものであるから、明に牴觸してゐるといはねばならぬ。恐らく特許局の方では使用してゐる文字の巧妙なる爲めに胡麻化されて、異同の鑑定が出來なかつたのであらう。西川式方法の原文では核を包むで入れやうが、小破片として入れやうが、それには論なく、眞珠袋を構成すべき細胞を貝の組織中に插入する場合をすべて指して居るものである。

牴觸の理由は之で明瞭であるとして、果して御木本式方法が實行し得らるゝかといふ點も考慮を要する。すべて貝殼の外套膜は甚だ水つぽいもので、且つ表面に粘液を出してゐるために、その上に小形の核を載せて、之を風呂敷で包むやうに包むことは、實に困難である。又吾

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

之を次の貝に入れる手術は貝をして介殻を細目に開かせて置き、その間からピンセットか何かをさし入れてするのである。私はその可能を大に疑ふ者であるが、然し此點は昨年動物學者たる佐々木、五島、岸上、宮島の四博士と同じく動物學者で水産の專門家である妹尾技師とが帝國發明協會の審査員として實際に就て目撃せられたといふことであるから、別に異議を唱へるわけではない。唯然し、かくして結果した核入りの袋を次の貝中に挿入して果して好成績を得らるゝかといふことは、本當に疑つてゐる。私は曾て二年間も球眞珠の人工促成法を自分でやつたことがあつて、種々の場合を經驗して居るが、挿入する上皮組織の破片は必ずしも大なるを要せないで、寧ろ却て小さい方が結果がよい。これこの組織にはその小口の處で幾らでも横に細胞を増して延長する強い再生力があるのと、新たに作られたる細胞の方が自由に肉中の腔隙の側壁に往いて癒着し得ることを考へれば當然のことである。御木本式のやうに大きな袋を作つて入れて成功したことは一度も無い。殊に御木本式方法で核を包む外套膜は外面の上皮組織の外に中部の肉と内側の有纖毛上皮細胞とが重なつたものである。譬を取れば、橙を包む手巾は一重の布ではなくて可なり厚い綿入れであり、丁度座敷布團で橙を包むやうな具合、結んだ口元も從つてゴツゴツしてゐる筈。而して包み終つたとき外に出た側に毛が生へてゐる。こんな變梃な包物をそのまゝ次の貝の肉中に挿入しても、到底速に腔隙の側壁と癒着する方法がない筈である。故に若し不思議に此手術で眞珠袋を形成するとせば、核を包むだ大部分の上皮細胞は死んでしまつて、僅に袋の切り口に露出してあつた上皮細胞から復活再生したものと解釋す可きで、最初から上皮組織の小片を挿入するに比して、寧ろ甚だ廻りくどい方法といはねばならぬ。之は單に理論上ばかりでなく、實際私が生けるアコヤガヒで色々とやつて見ての結果からして深く信ずるところである。

右の外にもなほ讀んで興味のある特許方法が幾つかある。例へば神奈川縣人三橋文造氏が獲たものに「核ヲ鍍滑シ、外套膜ニ接シテ挿入シ全體ヲ外套膜ノ外面ニ沒入シ、外套膜ヲ以テ袋囊狀ニ核全體ヲ被覆セシメ、其袋囊ノ口ノ外部ニ銀等ノ針金ヲ纏付シテ適度ニ緊束シ外套膜ノ外面又ハ内面ヲ以テ核全體ヲ緩ク且ツ緻密ニ包囊シタル後、放養シ、核ニ眞珠素質ヲ分泌セシメ」といふのがある。詰り外套膜の外面か内面かを以て核を被包せしめ、核に眞珠質を被せようといふので、外面でやれば略ぼ御木本氏の半圓眞珠と同じものを作らす手段で、既に公知公用で無効となつた方法に近いものである。特許局では恐らく袋囊狀に核を被覆せしめるとか、銀の針金を纏附するとかいふ文句があるために其類似點が分らなかつたのであらう。而して外套膜の外面なるものは元來介殻の内側にピッタリと接着して居る可きもので、この外套膜に皺を寄せて球形の核などを包んだ上に、その口を針金で結んだりした日には、介殻から離れてしまふ。更に、之は生きた貝を見た人でなければ解らぬが貝の左右側の外套膜は末端に於て相接し、左右相並んで居なければ、貝が呼吸をやつたり、水中に浮游する食物を攝取したりするに差支へるのであるから、そんなに片側の外套膜だけを皺くちやにしたのでは、貝が生きて行かれぬのである。更に右の三橋式方法には、外套膜の内面

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を以て核を包むことも含まれてゐるが、內面には介殼分泌の機能が全然缺けてゐるから、此儘で此方法がやれると思ふのは、全然素人考で、特許局が之に氣づかぬのも迂闊だと評さねばなるまい。

特許公報を繙いて最近十數年間に特許せられた人工眞珠形成法を拾ひ出して見ると、右の外にも隨分と面白いものが澤山にある。靜岡市の牧健三氏の「貝類ノ組織中ニテ天然ニ生ジタル眞珠或ハ人工ニヨリテ生ジタル眞珠ヲ拔キ取リ、其殘痕中ニ核ヲ插入シテ眞珠ヲ形成セシムル方法」などは寧ろ困難の方法と思考する。何となれば人工によりて肉中に眞珠を作る方法は他人の持つ特許であるし、天然眞珠の方は貝を澤山殺して探しても中々見つからぬのに、況して生きた貝を細目にあけて外から見つけ得るやうな場所にある天然眞珠といへば、それこそ萬匹に一匹も見つからぬものであるが、此特許はそれを見つけて珠をすりかへやうといふのである。又既に人工たり天然たりの眞珠があるものを何のために入れ換へるのか解らぬ。

次に御木本氏の有つ特許に「貝ノ蝶番部ヲ適當ニ切リ離シ、外部ニ接近セル外套膜ニ球形ノ核ヲ插入セル後蝶番部ノ作用ヲ妨ゲザル樣切離部ヲ癒着シ、眞圓眞珠ヲ蕃殖スル方法」といふのがある。之は實際どんな巧妙な手段があるのか知らぬが、貝の蝶番を一度切つて再び元の樣に直すといふのは實に神わざの如くである。序に說明して置くが貝の蝶番には巧妙なるバネ仕掛があつて閉殼筋が緩めば介殼が自然に左右に開くやうになつてゐるものである。

同じく御木本氏の有つ特許方法で「一核ヲ插入セル後可溶性石灰鹽類ヲ其組織體ニ注射シテ眞珠素質ノ分泌ヲ旺盛ナラシメ以テ」といふのがある。之は肺病の治療にカルシウム注射がよいといふ處から思ひついたらしいが、肝腎の眞珠質分泌をやる上皮細胞が拔けてゐては、いくらカルシウムを注射して貰つても貝の方で分泌の仕やうがあるまい。之とよく似たのは大阪府の濱田政勝氏の取つた特許方法で「核ヲ插入シタル眞珠貝其他ノ貝類ヲ海中ニ養成スルニ當リ、其目的ニ電流ヲ作用セシメ、神經系ニ刺戟ヲ與ヘ、細胞ノ活動ヲ促進シ眞珠質ノ分泌ヲ旺盛ナラシメ以テ眞珠ノ形成ヲ促進セシムル」といふのがある。水中の貝類に電氣をかけて眞珠の分泌を促かし得るといふことは動物學上の書物にはないことであるが、それは兎も角、上皮細胞のない所へ、無暗と電氣をかけられて、早く眞珠を作れといはれたのでは、貝の方で當惑するの外はなからう。

曩きに眞珠の產地として有名な長崎縣に水產試驗場長をしてゐた小西季一氏が宇和島市の齋藤光雄氏と共同で獲た特許方法に次のやうなのがある。「眞珠介又ハ其他ノ眞珠形成ニ適當ナル介類ノ介殼ノ一部ヲ除去シテ其外套膜ヲ露出セシメ、之ヲ同樣ニ處理セル他ノ同種ノ介ノ外套膜ト相接セシメ、其間ニ核ヲ裝置シテ各介殼ヲ外部ヨリ固着セシムル」といふのがある。詰り、御木本の養殖眞珠では半圓にしかならぬから、二個の貝をコッツリさせて、そこの處に貫通した孔を作り、その中に核を入れて置かうといふのである。一方が介殼だと插入した核が摩擦によつて止まつてゐやうが、双方がぬるぬるした外套膜では果して入れた所に三年以上も靜止してゐるか否か疑はしい。又此方法が公告せられたとき或人から、それでは球形とならずに山高帽を二つ壓合せにくつつけたやうな物が出來やうと抗議したところ、此

販賣者からは時々行つてゆすぶるといふ追加說明が出たので、特許局が之を通したといふ話も聞いたが、どんな風にゆすぶると眞珠袋內の球形眞珠がくるりと回轉するか私に分らぬ。机の上では隨分いろんな工夫が出來るものである。

以上私は數例の眞珠人工形成法を擧げて、その無遠慮な批判を試みたのであるが、之を以て日本政府の特許局の係官が「第百八十六類ノ三、眞珠形成法」の許可に就て如何に寛大なる處置をとつてゐるかが明瞭となつたであらう。世界大戰後一般的になる可く許可する方針であるやうにも聞くが、近年續々と出願する方法の內には、到底生きた貝をつかまへて實驗した結果とは思はれぬやうな亂暴なのが多いから之を詮議する特許局の方で餘程考へて貰はねばならぬと思ふ。

一體實行不可能な方法で特許を取つて何になるかといふ人があろか も知れぬが、之には又種々な事情があるらしい。第一、善意に解釋すれば、それ等の人々が貝類に關する精確なる知識を有たないために、それで實行可能と信じ、何人か適當なる出資者があつて、自己の方法の實施を援助し吳れる迄待つといふ目的で特許を得る場合もあらう。次には(現在のものが必ずしもそれだとは思はぬが)何か一つ自己所有の特許方法さへあれば、それを使用すると稱して養殖業を始め、他のあらゆる方法によつて眞珠を作り出し之を賣り出す、手術室は秘密として外來者に參觀せしめないし、出來上つた眞珠を見たのでは、果して何の方法に據つたか鑑定がつかぬから構はぬといふやうな狡い考で特許を所有せんとする不屆者も今後には出て來ぬとも限るまい。眞珠關係の特許の厄介なのは實に此點である。

六　日本眞珠の販路

前節に述べた各種の特許所有者の內で、實際に球形眞珠を作り出してゐるのは、西川關係の諸養殖場と御木本氏の養殖場だけである。西川では之を西川眞珠と稱し、御木本では御木本眞圓眞珠と呼んでゐる。さて、此等の球形眞珠が初めて倫敦や巴里の市場に達したときに、どんな取扱を受けたか、天然眞珠と寸分違はぬ球形眞珠のことであるから、嘸かし大歡迎を受けたことゝ讀者諸君は考へられるかも知れぬが、事實は正反對である。

歐洲の寶石商は世界大戰以來贅澤品のはけないのと、價額の暴落とに青息吐息であつて、波斯や南洋諸島から輸入した天然眞珠の賣ものを持扱つて居る時である。日本からこんな恐敵が現はれたのでは、第一今持つてゐる品物の値打が下つてしまふ。之は何でも日本の眞珠にケチをつけて暫く歐洲に入つてこぬやうにするの外はないといふことに相談が纏つて、早速猛烈なる排斥を初めたのである。今その一班を說明すると、巴里の寶石商仲間は故意に誤解せられ易い模造、人造とか養殖とかの名稱を以て此日本の眞珠を呼び、其外觀性質共に天然眞珠とは甚だしく異る劣惡品であるといひ、倫敦商業會議所の「金剛石眞珠及び寶石商部」が千九百二十四年に印刷してばら播いた宣傳ビラには天然眞珠と日本球形眞珠との斷面の圖を入れて、天然眞珠が金無垢なれば、日本「養殖眞珠」は鍍金の如きものだと書いてある。これに似たことは紐育チフアニー商會の顧問で有名な寶石學者クンツ博士等もいつてゐたことがある。更にひどいのになると、日本の新眞珠

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

には毒物を含んでゐて、之を身につけるとかぶれて皮膚病にかゝる等と誠しやかに吹聴するやうな悪辣なのもある。

茲で一寸、あまり眞珠の性質に就て御承知の無い方に、右の悪評に對する辯明をして置かう。第一には人造とか養殖とかいふ言葉の使ひ方である。養殖眞珠といふ名稱の甚だ拙いことは先に述べたが、外國人は日本の球間眞珠を頻りと artificial だといふ。然し人造といふ語は人造ダイアとか、人造絹絲とか云ふ時のやうに、始から終まで人工で造る場合であつて、生きた介を飼養して、それから收獲する物には用ひないのが常である。畠に造つた果物、室内で蠶を飼つて得た絹絲、それを何人も人造だとは云はぬ。野生の果實であり、天蠶の絹絲であるところの天然眞珠と異る點は、唯貝が wild でなくて tame であるだけの差である。（此評語は英國リバープール大學教授であつて、日本眞珠に理解を有つてゐた故ハードマン博士の使用したものである。）

次には鍍金に比較することの不都合である。眞珠は鍍金の如くに鑄潰して形をかへることがないから、中味の異るは差支ないが、それは兎もあれ、鍍金といふものは實際斷面にして見れば非常に薄いものである。眞珠層といふものは透明であるからそんなに薄くては中の核が見える上に光澤が少しも無い。それ故商品として市場に出す球間眞珠は手術後三四年も肉中にあつたもので、眞珠層の厚み一ミリ以上も被つてゐるから、鍍金の場合とは大にわけが違ふのである。それに天然眞珠の方でも、心の心まで眞珠層ばかりからなるものとは限らぬ。中心に寄生蟲等のあるは勿論、石灰凝塊といつて光澤のない白色の一塊を核としてその上に眞珠層を被つてゐるやうなのも稀でない。して見れば、天然眞珠も此球間眞珠も質に於てさしたる差違はないのである。唯前にも一寸述べた通り、裝身具等は氣持のものであるから、中に蝶介の核があるといふことが明に分つて居ては、或は中まで眞珠層であるかも知れぬ「野生天然眞珠」よりも少しく不滿足であるかも知れぬ。その代り此日本の「養殖天然眞珠」はそれだけ廉價に買ふことが出來るので少しも不都合はない筈である。

歐米の寶石商が日本の新眞珠を恐れて取扱はぬ理由の一は、此眞珠と野生眞珠との識別が困難である爲めに、一度之を店頭に置くと、顧客の目に從來の野生眞珠までが養殖眞珠に見え出して、何が何だか分らなくなり、顧客が其店を危がつて來なくなる慮があるといふのである。一九一八年私が紐育でクンツ博士に面會して携行した球間眞珠を與へた時に、同氏も之と同じ事をいつて、誠に立派な品であるが、チフアニーの店頭には置くわけには行かぬといつて居た。尤も私はそんな交渉に行つたのではなく、同氏が西川藤吉氏生前の友人であり、東大に西川紀念圖書を寄贈するときに援助して呉れたことなどをも謝するために、西川氏の遺族から發明の成功を報告することを托せられたからであつたが、流石はチフアニーの最高顧問だけあつて、當時日本眞珠がいよ〳〵歐米市場に齎出されるとき、今日のやうな迫害を受けるだらうといふことを豫言して居つた。

然し乍ら倫敦巴里の寶石商と雖も、日本人が出かけて行つて、直接日本の此眞珠を賣り込めば、それと知るであらうが、一旦支那人や印度人の手に渡つてそれから轉々し彼等の手に入つたものは既に彼らも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氣づかずして買つて居るかも知れぬ。或は今日まではなくとも、何時そうなるかも知れぬ。從つて歐米の商人も何時までも遊宕儀ばかりをやつてゐなくて、幾らか價額の差等をつけて日本の新眞珠を取扱ふのが得策である。巴里で相當の店を張つてゐる一人の寶石商は數年前西川新十郎氏に對して、自分の店で年中陳列くだけの日本眞珠を間斷なく供給し呉るゝならば、從來の眞珠取引をやめて日本眞珠一式に換へてもよいと話したそうである。之を以ても彼等も内心では日本眞珠の有望なることを信じてゐることが解るのである。西川藤吉氏及び其後繼者達が、血の出るやうな努力を續けて、日本眞珠の品質を益々引き上げ、今日ではもはや野生眞珠を目的として取つたのでは引き合はず、半圓眞珠を作らしたのではあまり利益のないやうになつたところのアコヤガヒから、斯様に有望な國産が作られる迄になつたのであるから、何とかして之を大に發展せしめ、單に一人や二人の養殖業者でなく、日本の沿海漁民一般を潤ほす位の事業にし度いと、私は切に思ふ。

日本眞珠の將來を考へるときに何よりも先に望ましいことは、日本に於ける眞珠業者の協和團結である。今日のやうにテン〴〵バラ〳〵では、種貝の買入にも製品の賣出しにも競爭があり、拔駈があつたりして不便此上もない。技術の進歩といふ上に於ても同樣である。又一つのユニオンが出來れば大研究所等を建てゝ指導機關とし、未決の生理病理、特に分泌促進の問題等も研究を進めて行くことが出來るのである。一層理想的なことを云へば、國家が眞珠研究所を作りて、相當の施設をなし、養殖上の諸問題を攻究す可きである。そうすれば西川藤吉氏が生前に抱いて居た考のやうに、現在の特許權所有者も進んでその權利を國家に提供するであらうし、場合によつては朝鮮の人蔘のやうに眞珠の養殖を官營としてもよからう。而して國家としてその製品をよく檢査したる上どし〳〵歐米へ輸出し、堂々と賣り出すことも出來るわけである。

かく云へば、或は眞珠のやうな贅澤品で價額の不定なるものでは、輸出品として生絲以上に賴もしくないと考へる人があるかも知れぬ。成程價額も變動するし、日用品の如く多量に賣り出せるものではないが、然し歐米人の眞珠に對する嗜好は、日本人などが一寸想像の及ばぬ程に熾烈なるものである。我國では中世以後服裝の變遷のために眞珠の使用が廢れたけれども、歐洲では指輪、頸輪耳輪にしても頭の飾りにしても、眞珠を利用する所が甚だ多く、古今を通じて少しも變らぬ。舊い寺院の寶物である聖器や、王宮に秘藏せらるゝ冠などに眞珠を鏤めたのは彼國人達が常に眺めて樂しむところである。ヴエニス市では昔法律を以て眞珠の使用を禁止すること前後九回に及んだが、遂にその流行を阻止し得なかつた位である。要するに歐米人は傳統的に眞珠を愛すること、南歐人が牡蠣を好み、アイヌ人が熊を愛するが如きものがあつて、決して一時的の流行現象ではないのである。夫故日本人がよく認識して日本眞珠の性質を寶石以外の一般歐米人によく了解せしめるやうにしたら、需要販路の擴大することは必然である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

漱石の思ひ出（三）

夏目鏡子述
松岡譲筆錄

十　草枕のモデル

前年のお正月に懲り懲りして居りましたので、夏目もこのお正月には、たしか大晦日になつて、小天へまゐりました。山川信次郎さんと御一緒でしたが、私は同行しませんで、家で多々羅三平こと俣野義郎さんが、學校のお友達を幾人となく連れて來る、其のお仲間に入つて、歌留多を取つたりして暮らしました。この方が叱られる憂もなくて、まづ／＼愉快なお正月でありました。

小天といふところは、「草枕」以來有名になつたものと見えまして、漱石の居た部屋だなんていふのが殘つてゐて、五高の學生さんたちなどが今でもたづねて行かれるとかいふことを伺つて居りますが、其頃も小旅行に手頃な處だつたのでせう、五高の先生方や學生さんたちが行かれたもの丶やうでした。熊本から西北三里半ばかりのところで、背に山があり前に海があつて、大變遙い土地で、蜜柑の名所だと伺つて居ります。高いところに立つと、有明灣溫泉嶽などが見え、時には不知火が見えたりもするさうです。泊まつた家は前田さんといふ鄉士の方の別莊で、俗に湯の浦と言はれたところだとのことです。こゝは「草枕」のモデルになつたところで、又女主人公のモデルは前田さんのお宅のお姉さん、前田さんの一番季の異母姉で、現に東京高等工藝學校の先生をして居られる前田利鎌さん（よく識つてますので、かう呼びなれてゐます）だといふ話なので、其方からいろ／＼當時のお話を伺つたことがあります。私は嫁いだ翌の最初の九州旅行で懲りましたので一緒に參ゐつたこともなく、一向當時の樣子も存じませんが、御參考迄に前田さんの姉さんのお話をお傳へしませう。前田さんは今府下の池袋に居られまして、もう六十だとか六十一だと申して居られますが、それも其筈でせう。何でも最初か二度目に夏目が參りました時、丁度生まれたばかりの季の利鎌さんを見て、顏の赤いのに驚いたとか何とか云ふのですが、其方がもう三十にもおなりなのですから。

前田さんのお父さんは案山子といつて、明治の初年から熱心に政治運動をやり、後では國會にも出て、河野廣中・箕浦勝人などゝいふ方と一緒に、自由黨の三傑と云はれたといふ程の名高い方だつたさうで、鄕黨の爲めには隨分と盡くされた方だといふことです。村をとつて一[illegible]州

一といふ評判のあつた名士で、これについても隨分面白い逸話があるやうです。明治十年の熊本籠城當時のこと、玉名郷の區長をして居られて、郷の郷備金といふものを全部預かつて、小天の本宅に守護して居られた。といふのは、官軍もその莫大な金貨に目をつけて居れば、西郷方も目をつけて居るといつた工合で、危くて仕方がありません。すると西郷方の池邊吉十郎（池邊三山居士の父）、この方とは以前から親しくしてゐて、此時も池邊さん御家族の老人子供さん方（三山さんは從軍してゐられたさうですが）全部を引き取つて避難させて居られたのださうですが、それとは知らず、池邊さんから使者があつて、すぐに出頭せよ、でなくば軍兵を差し向けるとのことです。用件は郷備金にきまつてゐる、渡せといつても渡すわけには行かず、渡さなければ殺されるにきまつてゐる。前田さんも死を覺悟して、一人で陣中に行かれました。家の定命です。しかし死ぬのを覺悟の前で來てゐるのですから、きつぱり斷はりますと、それでは一晩とくと思案をせいとあつて、牢屋にぶち込まれました。

池邊さんの老人子供の方々が、陣中に恩人が呼び出されたと聞いたのは後のことです。これでは恩を仇で返へすわけ、べん／＼としては居られないといふので、其夜のうちに陣にかへつて、逐一今迄前田さんに恩になつたことを吉十郎氏に訴へたので、三山居士のお父さんも前田さんの手を取つてわびられたといふことです。

中江兆民さんなんかとも交りがあつて、さうした政界の名士方も續々來泊されるので、明治十一年頃に、村の共有温泉のところに、一町歩ばかりの持地があつたのを、そこの竹藪を切り開いて別莊を建つて、かうした名士を迎へることにされたのださうです。出來て見ると普段は遊ばせておくので、それも勿體ないし、段々にそこに泊めてくれといふ人も出來て、それでは折角だからといふので、後から後からと棟をつぎ足して、とう／＼温泉宿の形式を整へるやうになつたのださうですが、始めは茶代なぞを貰ふと處置に困つて了つて、客の後を何丁も追つかけて返へしに行つたといふ話もあるさうです。

五高の人達が始めて湯の浦の宿に來たのは、明治三十年の十一月頃で、久我さん山川さんの二人が一泊してかへられたが、やがて其年の大晦日に山川さんに誘はれて夏目が一緒に參りました。其時嫂さんは不縁で一年ばかり前から温泉にかへつて居られたのださうです。年は三十一才だつたといふことです。

山川さんは前に一度來られて、もう前田さんの家の方とも心安くなつてゐられる上に、輕口の諧謔家で、よく落語の眞似をしたりして、家の者を笑はせたものださうです。それに引きかへ夏目の方は一體に口の重い方で、滅多には喋舌らない。大概は山川さんに萬事口をきかして、自分ではたまに一言二言言葉を挾むといつた工合。どう見ても山川さんが女房役で、その上やさ男ですし、夏目の方は嫂さんが、夏目さんはじぐやくばり（アバタの醜態の意）がいゝから旦那らしいと評したやうに、謂はゞ旦那さんといふ格式だつたさうです。そこで一番上等とされてゐる三番といふ部屋に案内したさうですが、萬事が此の調子なので、家のものは皆三番の御夫婦さんと呼んでゐたとのことです。

この三番の部屋といふは、つまり政界の名士などの來た時にとめる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爲めに本宅から移して建てたところで、部屋の飾り附けなども中々立派で、其時は『草枕』にあるやうに若冲の鶴を、床にかけておき、部屋の眞中に紫檀の角卓をおいて、帆の形をした竹の茶棚がおいてあつたりしたさうです。その茶棚が大層夏目の氣に入つて、しきりにそれをほめるので、そんなに欲しいんなら僕が談判して來てやらうといふので山川さんの話があり、それでは上げても差支ないといふ前田さん側の承諾もあつたとのことですが、それはそれきりになつたといふ事です。それが緣になつて、

「こゝの家には中々變はつたものがあるな。」

と夏目が申したのがきつかけになり、

「それでは骨董がお好きですか。」

と姉さんが尋ねると、頗る好きだといふので、そんならといふ段取で、お父さんの離れで一日一回位づゝお茶によんで、掛物をかけかへたりして見せたものださうです。

其頃女中の手が不足だつたので、姉さんかよく三番に酒を出し、着いた日に茶を運んで、『草枕』に書いてあるやうに青磁の鉢に羊羹を入れにもつて行つたのも事實ださうです。

ある日夜おそくなつてから姉さんは、其日のとを終つていざ湯に入つて寢みませうと思つて、女湯の方へ行つて見ますと、ぬるくてとても入れません。男湯の方はとのぞいて見ますと、もう〳〵と湯氣の立つてる工合と言ひ、誰も居ないらしい氣勢なので、安心して着物をぬいで、浴槽へ石段を踏んで下りかけますと、湯の中でボチヤリといふ音がします。オヤ、誰も居ないはずだつたのにと立ちどまつて、怪しみながら、中をじつと覗つて見ますと、くすりとたしかに人の笑ふ聲がします。びつくりして瞳をこらして見ると、驚いたことに夏目と山川さんとが、しきりに可笑しさをこらへて、茶目さんらしく灯影の當らない浴槽の一隅に首だけ出してゐたといふではありませんか。姉さんは眞赤になつて戸の外へ逃げ出したさうです。すると女中がこれ又裸になりかけてゐましたが、どうなすつたのかとひどい周章て方にびつくりして尋ねますが、姉さんは堪らなくなつて何も言はず着物をひつかけて逃げ出して了つたといふことです。これが『草枕』の女がお湯に入つて來る場面の元の形だといふことです。

この家は山のところに建てゝあるので、

「二階だと思つたら、一階だね。」

と夏目が面白がつてゐたさうですが、もう明日は熊本へかへるといふ日になつて、お土産にもと嫂さんが玄關前の澁柿の木の上に、誰も居ないのを見すましてのぼつて居りましたところが、いつの間にやら散歩からかへつて來た二人がそれを見つけて、夏目は、まるでお猿の親類見たいだといつて、笑つたり揶揄つたりしたさうです。

或る時なんかは何か用があつて一寸來てくれといふとなので、三番目の部屋に入つて夏目の話を聞いて居ますが、それが又何の話か忘れたさうですが、丁度蜜柑をむいて食べかけてゐた時なので、ほんのすぐの用と思ひ込んで片手に皮を握つたまゝ行つたのださうですが、大

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

長い話で、すんで放免になつた時には、蜜柑の皮がパリ〳〵する迄に乾いてゐたなど丶いふこともあつたと申します。

その歸へる時のこと、二人の茶代が五圓、女中の氣付が一圓、姉さんには袖口代にとあつて三圓包んであつたさうですが、姉さんはまだそんなものを客から貰つたことがないので、顏を赤らめてかへしますと、折角やつたものをかへすものはないだらうといふ見幕だつたといふことです。

其時馬に荷をつまして送つたさうですが、其後も時々蜜柑なんぞを屆けたことがあるとのことです。

四月頃に山川さんが一人だけ見えて、奥さんがやかましくて夏目さんは來られませんよなど丶言つてられたさうです。それから間もなく盆の頃になつて、狩野亨吉さん、山川さん、奥太一郎さん、木村さん、それに夏目の五人連れで、朝早く小天について、湯の浦の別莊で中食を認め、本宅が見たいからといふので、姉さんが案内したさうです。本宅といふのは湯の浦の別莊から少し離れた山の中腹にあつて、白く塗つてあつて丁度城のやうな家ださうですが、惜しいことに私どもが東京に引き上げてから燒けて了つたさうです。其時すぐ下の畑に夏蜜柑がなつてゐたので、姉さんが一人に一枝づつ折つて上げ、狩野さんは教頭で皆が揃つてゐたので、狩野さんの分を姉さんがかついで、河内まで一里半ばかりの道を一緒に行つたことがあるさうです。

それから一行は宮本武藏が籠もつて、兵法五輪之書を書いたと言はれる岩戸觀音の方に行かれたか、鼓ヶ瀧の方に行かれたか、とにかくその邊の名所をめぐつて日歸へりで熊本へ歸へつたといふことです。

前田さんの姉さんは當時としては隨分新らしかつたもので、其後もいろ〳〵數奇な運命を辿られたものと伺つて居ります。それが緣になつてか、熊本で山川さんの宿などへ遊びに來られたこともあるとか聞いて居ります。

山川さんとはよく御一緒に其後も旅行に行つたやうです。すると山川さんが歸へつておいでになつてから、

「夏目の奴旅行をしてゐると、いつも苦虫を嚙みつぶしたやうな顏をしてゐる。家をもつてるとそんなにいゝものかなあ。」

などゝ、よく仰言り仰言りしたものです。山川さんは又どうしたわけか家庭をお持ちにならず、下宿住居で、自分附きの女中をおいたりして、下宿の香の物は喰へない、かういふ風に漬けるものだなどゝ講釋たら〳〵で、教へておいて、これなら食へるなどゝいつてはお持ちかへりになりました。その日もそれを樂しんでたべてゐられると、後に一切れ殘つたのをその女中さんが頂いて了つたといふので怒つてゐられた滑稽などがありました。

山川さんが赴任して來られて、家にとまつて居られて其の就任の挨拶があるといふ朝、まだ背廣といふのを着たことがないといふのですが、ともかく東京から一式一揃何から何迄持つておいでになつたはいいが、ネクタイが獨りで結べない。其上ワイシャツのボタンもつけてなけりや何の準備もしてありません。餘り早起きでない御連中のことですから、大急ぎで仕度をしてそれ出掛けやうといふ時になつても、大

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

切なお客さんの方が一向出來てゐません。丁度長谷川貞一郎さんが居られた頃で、夏目と私と二人でボタンをつけてやるやら、ズボンをはかせてやるやら、それカラーだ、それネクタイだと、えらい騷ぎをやりました。

「こんなことは家のうちにしておくもんだ。」

夏目はプリ／＼怒つて、御機嫌頗る斜でした。

「やれ／＼、今日は厄介におやぢに叱られづくめだ。」

山川さんはこんなことを言つて歸へつて來られました。翌日出掛けは三人で一緒に參ゐりましたが、歸へりには別れ別れだつたと見えて夏目も長谷川さんも歸へつて來てますのに、早びけの山川さんがいつまでたつてもお歸へりになりません。其日は大抵大丈夫だらうと一人呑込みで歸へつて來るうちに、道に迷つて了つて、町の大半を歩るき廻はられたのださうです。

十一　猫——多々羅三平

落合村では鼠が出て仕方がないので其話をしてますと、丁度そこへ女中の姉さんが來合せてゐて、それなら家の三毛猫で非常に鼠捕りのうまいのが居りますから、それを上げませう。其代りはしつこい猫ですから、いらなくなつたらかへして下さいといふ話でした。早速連れて來て見ますと、話のとほりよく鼠をとるのですが、鼠だけにしておいてくれゝば何の事はないのに、お膳のもの迄取つてくれるのにはほと／＼困つて了ゐました。全く目が離せません。お客に出さうとしてゐる小鯛なんかをさらつてゆかれて、まごつかされたことも二度や三度でありません。とう／＼いま／＼しくなつて、みんなが腹を立てゝ捨てゝ了へといふことに衆議一決しまして、その捨て役が書生の土屋さんに當りました。よろしいてわけでどつか學校の行きがけなどに捨てゝくるのですが、すぐに歸へつて來ては、又人間の食べるものをさらつてくれます。聞いて見ると目隠くしをしないで捨てゝ來るとのことですから、それではいけない筈だと申しますと、或る日のこと、丁度猫の持主人が臺所口へ來て話をしてゐるところへ、土屋さんが猫はどうしたとうろ／＼捜しながら入つて來て、おゝ／＼、そこに居たと言つて前の主人の膝の上で丸まつてゐるのを捉まへるが早いか、いきなり懷から古靴下を出すやくる／＼と猫の頭にかぶせて了ゐまして、これで上等上等と、大得意で連れて行つて了ゐました。見てゐた私たちはひやひやしてゐるのですけれども、まさか後で來て下さいとも言へず、ひどくばつの悪い思ひをしたことがあります。此間ふと古い其頃の寫眞を取り出して見ましたところ、夏目と私とが緣側に火鉢をもち出してあたつてゐますと、夏目の左に土屋さん、私の右に女中のテルといふ風に緣に腰かけてゐます。夏目の座蒲團をわけて小い犬の仔が座はり、只今の話の猫は女中の膝の上で、耳を三角にしてぬけ目のない顔をして居ります。これが土屋さんの古靴下を冠せられた猫かと思つたら可笑しくなりました。

三月、家主の落合東郭さんが東京からお歸へりになつて、熊本でおつとめになるといふことで、お家をお返しゝなければならなくなりました。そこで千反畑といふところに小い家を見つけまして、一時急ぎに

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そこへ移りました。そこは川べりでした。何でも部屋數の少い家でして、間に合せの借居ではありましたが不便たらありません。部屋がないので、夜になると土屋股野の二人の書生さんを座敷にねかせるのです。ところが土屋さんはきちやうめんの方ですからいゝのですが、股野さんと來たら朝寢はするし、それに横着者なので、自分の寢床迄土屋さんに上げさせます。掃除は遲くれるしいま〱しいたらありません。が又どこからどこ迄よく出來てゐて、此方のいふことなんかてんで通じないのです。

ところが或る朝、いつもの通り朝寢坊をきめ込んでゐるところを運惡く夏目に見つかりました。

「股野、起きろ、いつまで寢坊してるんだ。」

と、夏目も私たちが常日頃いま〱しがつてゐるのを知つてるものですから、いきなり大きな聲でどやしつけました。圖々しい股野さんでもこの一喝には恐れ入つたと見えて、「ハイ」と云ひ樣バネ仕掛のやうにはね起きたのはいゝが、この多々羅三平君、夏冬ともに眞裸で寢床の中にもぐり込む習慣なので、びつくり夜着をはねのけて起きるには起きたが、どうとも始末がつきません。夏目も可笑しさをこらへて、

「早く自分で寢床を上げろ。」

と更に叱鳴りました。

多々羅君弱りに弱つて、

「オイ、土屋――」

とうらめしさうに土屋さんに援けを求めます。その樣子が又可笑しいとあつてとう〱みんなで吹き出して了ひましたが、そこへ土屋さんが着物を持つて來てやつて、漸く床を上げたなどゝいふ滑稽がありました。何しろ股野さんと來たら全くの物ぐさ太郎でして、人の氣も知らないでと、若い私などは時々腹も立てましたが、終ひにはとうとう根まけがして、隨分笑はせられました。それでも七月にはお二人とも卒業されて、間もなく上京。土屋さんは私たちが紹介して上野で、私の里の中根の家に書生になることになりました。土屋さんは本當に貧乏で隨分と苦學されたやうです。お二人ともに法科でした。學校を出られてから、土屋さんは裁判官になり、股野さんは大連に渡つて實業家になられました。

此の後狩野亨吉さんが五高の教頭に來られまして、狩野さん、菅さん、山川さんなんぞ、昔からのお友達が澤山集まられました。狩野さんの居られた家があいたので、早速内坪井町の家に引き移りました。この家は五六百坪も屋敷の地面があつたかと思ひますが、桑畑があつたり、庭も相當に廣かつたりしましたが、家は左程に廣くありませんでした。其代り別棟の物置があつて、それが中々廣うございました。

其頃、五高の學生さんでした寺田寅彦さんがおいでになつて、是非書生においてくれろといふことだつたのですが、夏目は自分のところになんぞ書生に居たつて仕方がない、第一座敷も少いしといふやうなことを申しますと、それでは物置でもいゝといふ御熱心振りで、その物置きに案内したことがありました。隨分變はつた人もあればあるものだと思つて居りましたが、話はそれ切り立ち消えになつたやうでした。

寺田さんはちよい〱お宅へ見えたやうでしたが、私は殆んどお會ひ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

したことがないので、其頃の印象といつては、或る時西片町の撮影場に行つて居りますと、五高の制帽を冠つた寺田さんをお見うけしたことを覺えて居る位のものです。坊ちやん／＼して何だかぼおつとしたやうな方だと其時思ひました。只今東大工科に居られる内丸最一郎さんなんぞも、其頃の學生さんだつたやうに存じます。

此間寺田さんにお會ひしました時、この物置きの話が出て、家の間取りや物置の位置なんぞ覺えてゐますかといふと、大體覺えて居る積りですかとお答へしたとでした。

十二　長女生まる

此秋私は姙娠して居りまして、猛烈な惡阻になやまされました。それは九月から始まつて十一月迄續いて、一番ひどかつた時などには、食ひ物や藥は愚か、水さへ咽喉に通らなかつた位で、衰弱は日ましに加はりますし、かといつて今更手術も出來ず、運を天にまかせてといつた工合に、漸く滋養浣腸位で命をつないでゐたわけでした。

病妻の閨に灯ともし暮るゝ秋　漱石

などゝ、此頃私の病氣をとつてよんだ句が少しあるやうでありました。

かうして殆んど私の病氣で此の年も暮れて了ひましたが、やがてその方も落ちつきましたので、例のとほり元日から奥太一郎さんと御一緒に、年來の希望であつた耶馬溪へと旅立ちました。旅の模樣は知りませんでしたが、家へかへる前日か前々日のことでありませう。豐後の日田あたりの峠で馬に乘られて雪の中に倒れたといつて、いやなしかめつ面をして歸へつて參りました。それから無闇と歩るいたものと見えて、足にまめをこしらへて居りました。山の中の旅行のことゝて、鳥だといつては鼠らしいものを食はせたなどゝ大分不機嫌でしたが、歸へつてから又例のとほり澤山句を作つて、子規さんの所へ送つて居りました。

奥太一郎さんともよく行き來をして居りましたが、夏目が其頃謡を習ひ始め、奥さんも同じく謡をやつて居られたので、謡の師匠などでも落ち合つてたやうです。夏目の先生といふのは、同じ五高で工學部長かして居られた櫻井房記さんが金澤の方の方で、そこで加賀寶生が御上手とあつて、どういふ拍子で唸り出したものか、素謡稽古かを教へて頂くことになつたのですが、大層筋がいゝとのおほめにあづかつて、自分ではしきりに得意で大きな聲を出して唸つて居ります。けれども根からいゝ聲らしくも思へないので、櫻井さんにほめられたつて、それやおだてゞ、なつて居ないぢやありませんかなどゝ、いつもの惡口の仇でも取る氣で浴せかけたものです。すると俺のゝもそんなにいゝと思つてるわけではないが、まあ、奥のゝを聽いて見ろ。御湯の中で屁が浮いたやうなひよろ／＼聲を出すんだから、あれから見ればといつた工合に、中々敗けません。そこで奥さんは奥さん、貴夫は貴夫、人がどうあらうとその聲は自慢になりませんよなどと憎まれ口を叩いて居りますと、或る日奥さんがいらして謡が始まりました。私は丁度お湯に入つてゐたのですが、さあ、始まると困つて了ゐました。全く珍妙な希代な聲なのですが、それよりもすぐとさきの尾籠な批評を思ひ出したから堪まりません。堪りかねて御湯の中で手拭を口に當てゝ聞え

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないやうに笑つて居りますと、台所でも女中たちが笑ひを堪えてゐるのですが、これも笑ひがとまらず、えらい苦しみをしたことがあります。

長女が生まれましたのは、五月の末のことでありました。私が字が下手だから、せめて此子は少し字を上手にしてやりたいといふので、夏目の意見に從ひまして『筆』と命名致しました。ところが皮肉なことに私以上の惡筆になつて了つたのはお笑草です。で、今ではそんな慾ばつた名はつけるものでない、そんな名をつけるからこんなに字が下手になつたのだなど〻、當人の筆子はこの話が出る度にかへつて私たちを恨んで居るのです。親の心子知らずか、ともかくお笑草に違ゐありません。

最初の子供ではあり、結婚してから滿三年の後に出來た子ではあり、隨分と可愛がりまして、自分でよく抱いたり致しました。さうして女中のテルの色が眞黑なので、子供は抱くものに似るといふから、そんな黑いのが傳染されちや困るなど〻申しまして、やかましく女中に抱かせるのを排斥しました。しかし私が居るうちはそれで納まつてるのですが、私が買ひ物に出たりして子供を殘しておきますと、そのうちにおとなしく眠つてゐた赤ん坊が目をさまして泣き出します。さうしていくらすかしたりあやしたりしても、徐々火のついたやうに泣きますので、困つて了つて、テルテルと呼んで世話を頼むと、女中の方は大威張りで、いくら顏が黑くても、私でなけりやどうにもならんぢやありませんかと一本參るつて抱き上げる。抱き上げればすぐにだまるといつた工合に、この女中が又大層赤ん坊を可愛がつてくれました。遊びにいらつしやる山川さんが、よくこんなことを言つてはからかつて居られました。

「君の娘のことだから、いづれ大きくなつたら色男でもこしらへるだらう。さうしたら俺が中へ入つてやるよ。」

其後間もなく山川さんは東京へ歸られ、私たちも亦東京へ參ゐりましたのですが、筆子などはよく遊びに參ゐつて居りました。

夏目はよくこの赤ん坊を膝の上にのせて、つく〴〵顏を見ながら、

「もう十七年たつと、これが十八になつて、俺が五十になるんだ。」

など〻、獨り語ともつかず申して居りましたが、偶然の一致とは言ひへ、本當に筆子が十八の時五十で亡くなりました。そんなことを考へると一寸妙な氣が致します。

たしかこの夏のことであつたと思ひますが、暑中休暇に毎日位に英語を習ひに來る五高の學生がありました。座敷で稽古をつけてやつてゐるのですが、二時間ばかりの間、殆んど頭ごなしに叱られ通しなのです。それが夏のことで、戶を開け放しにしてゐるので、どの部屋にも聞こえるのです。私ならあんなに叱り飛ばされたら次の日から恐らく來まいと思はれる位ですのに、これは又實に根氣のい〻學生さんがあつたもので、毎日毎日根氣よく叱られに來るのです。私も女中も大層同情致しまして、或日私が夏目に尋ねました。

「教場でも貴夫あんなにがみ〳〵お叱りになるの。」

「い〻や、學校ぢやあんなに口やかましく叱りやしないさ。しかしかうやつて家でたゞで教へるといふものはい〻もんだよ。」

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すましたもので、相變らず汚れた枕掛です。そこで私は學生さんが氣の毒でならないと申して居りましたところが、次の日學生さんが又やつて參りました。すると夏目が學生さんに尋ねてゐるのが聞こえます。「あんまり僕が君を叱るといふので、家内が君に同情してゐるがね。」「さうですか、僕はそれ程にも思つて居りませんが。」

學生さんは一向叱られてゐるのが苦にならない樣子で、少々此方で同情して上げたのが馬鹿らしくなりました。其後もう一人學生さんが增えましたが、此の方はあんまり小言もなかつたやうです。其うちに叱り方が日に增し少くなつて參りますので、これはてつきり私の同情が功を奏したのかと考へて見ますと、此頃は大分英語も上達して、そんなに叱らなくともすむやうになつたんだよと笑つて居りました。其の中の御一人は長谷部さんと仰言つたやうに覺えて居りますが、もう一人の方の名は忘れて了ひました。

十三　姉さん

八月末から九月初めにかけて、山川信次郎さんと御一緒に阿蘇山へ登りました。丁度二百十日前後のことでした。『二百十日』といふ短篇の種はその邊にあるのでありませう。此頃高田の姉さんのことについて、兄弟間に少しいざこざがあつたやうです。

高田の姉さんと申しますのは、夏目の腹違ひの姉で、一番上の新宿の揚屋へ嫁いだといふ姉さんの妹なのです。前に兄さんに聞くところによりますと、一番上の姉さんのことも少しわかつて來ましたから、序にお話いたしておきませう。

一番上の姉さんはおさわと申しました。これは大變な器量よしだつたさうで、尾張さんの御殿女中に行つてゐて、仲間を連れてかへつて來る時など、近所のものがお姫樣のやうだと袖引きあつたものだといふことで、その上大變な利口ものだつたと言ひます。或る下町の大きな名主が喜久井町の夏目の家へ來て姉さんを見て、是非息子の嫁にくれろと望まれるので、父もとう／＼斷りかねて承知をして了つたさうです。すると姉さんの方では、外に好きな人があるので、どうあつても嫁かぬといふし、父は父で今更嫁つてくれなくては自分の面目が立たない、すつたもんだの揚句、では三日でもいゝからとにかく嫁つて來て、それでどうしてもいやだつたら歸へつて來いといふわけで、隨分亂暴な話ですが、いや／＼輿入れをしたわけです。ところが先方のお婿さんといふのが、家は成程大層なお金持で而利きなのですが、いかんせん今も昔も同じ御大家のお坊ちやまで、ぼんやりした薄のろなので、なほ更のこと氣に入る道理もなく、嫁きは嫁つたものゝ、とう／＼我を張りとほして、婿さんなんぞ近よせもせず、附いて行つた女中なぞを散々手古摺らせた揚句、何でも三日目とか四日目とかに御約束どほり歸へつて來たといふのだから、えらい者に違ひありません。御維新後その名主の家も落ちぶれて、どつか人形町あたりで、鹽せんべいなんか賣る一文見世を出してゐたと言ひます。姉さんは丙午の生まれださうです。さうして好きな男の方に行つたものです。そこが新宿の伊豆橋といふ揚屋だつたのです。

そこは母の親類で、母の方では初め話のあつた頃には、父の方の話もあつて、遠慮も手傳ひ二の足を踏んでゐたのですが、からなつて見

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れば誰に遠慮もないので、そこへ嫁くことになりました。そのお婿さんといふのは、中々の好男子で、親たちの意見では堅氣の商賣をといふので、本町のいはしや（鰯屋）に見習ひにやつておいたのですが、やはり親のあとをついで、伊豆橋に落ちつくことになつたのだと申すのです。一つはこのお婿さんも丙午生れで、同じ干支なら丙午でも性が合ふとかいふのも、一緒になる原因だつたらうといふことです。

　女郎屋といふと今では實にいやな響をもつた言葉になつて了ゐましたが、當時は奧のものは全くの大名暮らしで、店は一切番頭まかせで、贅澤三昧の日を送つて、やれ義太夫だやれ生花だやれ茶の湯だと、そんな藝事に身を窶す位が關の山で、手廻りのこと一切は何一つ自分の手を煩はすこともなくすんだものだといふから、姉さんの性分には持つて來いだつたのでせう。お婿さんはよく馬に乗り廻はしてゐたさうです。それでも御維新後の開放に一切世帯を切りほどいて、娼妓なんぞも自由にしてやり、いつまで時勢の違つた世の中にこんな商賣をしてゐるでもないとあつて、それから子のない二人は、父の世話で喜久井町の長屋の一角に手を入れて、そこへ移つて來てゐたさうです。さうして姉さんは三十三かで一生贅澤を仕盡くして死んだと言はれて居ります。

　この姉さんが、お代といつて父の妾づとめをしてゐたお針の婆さんに連れられては、寄席や芝居の樂屋に出入りして、たんまり祝儀を張り込んだりしてゐるのを見てゐた次の姉さんも、お房さんといふ名ですが、自然金費ひが荒くて、其時分お誂ひで三兩の下駄でなければ穿かなかつたなど〻言はれて居りますが、ともかく派出な暮らしをしてゐたやうです。この姉さんは馬鹿ではないのですが、何をやらせて出來た試がない。手習も喧しくやらされて、漸く假名位が曲りなりに書ける位だし、お針は家にお代婆さんが居て仕込むけれども、これ又浴衣一枚縫へるぢやない。當時常磐津が大流行で、根來の小濱さんといふ有名な御師匠さんについても、三味線がまるで彈けず、それでゐて人の髮を結つたり掃除をしたりすることが非常に好きで、御世辭のうまいたらないのです。掃除では私がずぼらな方なもんで、よくこの高田の姉さんを引き合ひに出しては夏目から叱られたものです。雨降りの後の掃除なんかゞ來たら、それは〳〵すさまじい氣狂じみた勢だつたといふことです。

　上の姉さんは利口過ぎたが、この方は人がいゝので、男なんぞはお房お房と可愛がつたものださうですが、いかんせん何も出來ないので、父は殊の外心配して、外で貰つてくれるところもなからうといふので考へぬいた揚句、築土の名主で高田といふ自分の弟が居る、其の長男の庄吉といふのなら、自分にはいろ〳〵恩もうけてることだから、こゝなら間違ゐはなからうといふので、從兄弟同士の結婚といふことになつたのです。御世辭がいゝので待合の女將にいゝなどゝ言はれたものださうですが、一寸見は何でも出來さうな顏をしてゐて、其實何にも出來なかつたといふのだから、不思議な人もあつたものです。

　さて嫁に行つたところが、益々人づきあひのいゝところは發揮されて、大切な家婦の役目の方はとんとさつぱりです。たゞ客が來たら上げないでもいゝ客まで上げて、やれ蕎麥だ、あれお酒だと食べさせて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かへしたり、近所の子供や赤ん坊を連れて來ては、菓子をやつたり髮を結つたりして遊んだり、それから困るといふ人があれば、自分の着物を質においても工面してやるといふ慈善家振りなのですから、台所持ちはよくないにきまつて居ます。ところがよくしたものでこの庄吉さんはとてもしまり屋と來てゐるのだから、いゝものがあつても細君にくれない位で、ましていらないものを呉れる筈もありません。そこで自然お尻は一切合財父の方に廻はつて行くといふわけです。

父も行けばとられるのはわかつてゐるのですが、そこが又江戸に御世辭の一つもうまくやられたりすると、つい嬉しくなるものと見えて、昨日今日は一圓とられたの二圓とられたのと、こぼし〳〵しては毎日位に行つてゐたものださうです。

姉さんがこんな風ですから、弟たちもそこへ行けば歡待して貰へるといふので、よく行願寺内の高田の家に遊びに行つたものださうです。するとそこの向ひには東屋といふ藝者屋があつて、小妻、咲松、鶴吉なんぞといふ藝者が居て、高田の家にもよく遊びに來たものださうです。矢來の兄さんの上の榮之助などゝいふ兄さんは、兄弟中での道樂者で、家からこつそり書畫骨董なんぞを持ち出して賣り飛ばして、其金で道樂をしたりして、父の勘當をうけてゐたものであつたさうですが、例の開成學校へ行くといつては、こゝへ上り込んで藝者相手に遊んでゐたものだといふことです。

ところが又緣といふものは不思議なもので、この東家の姉さん藝者の緣談といふのが、この話なのですが、そこへ一番上のお澤姉さんへ伊豆橋に嫁いでゐた姉さんが、姉さんが亡なるとこの後添の旦那になつて、東家に納まつてゐたさうですから、何のことはない、神樂坂の行願寺内の一角は、夏目一族の會合所見たいなものだつたと言ひます。この美代吉といふ老妓は、この間の大震災で避難の途中燒死したさうです。この東家のことは「硝子戸の中」に自分で書いたものがあります。

此の頃、それは夏目が落語好きだつたらうと思ひますが、直太郎が好きで、兄さんと一緒によく相生太夫、朝太夫、それから落語家などをききに寄席へ行つたものださうです。高田の家あたりでは、落語の眞似がよるとさわると駄洒落の言ひくらをしてゐたとか申すことです。

姉さんの方では段々左前になつて來る。一時は一寸よかつたこともありますが、すぐに又落魄して困つて居ります。そこで父が亡くなつて後からといふものは、困つた、小使だといつては夏目のところにいつてよこす。さうして一寸病氣をしたといつては夏目の兄さんのところにかへつてゐたり、その間に小使をねだつたりするが、庄吉さんの方はすましたもので、金もやらなければ、世話になつたからといつて御禮一ついつてよこすでなし、それは、我利我利亡者だつたので、とう〳〵夏目も怒り出して、勝手にたつて歸へつて來たのならまだしも、自分の細君位までが面倒見るのは當り前ぢやないかといつた工合で、姉さんの小五月蠅い躾のいゝ手紙と、庄吉さんの利己主義とにほと〳〵閉口して居りました。

ところが姉さんといふ人は、自分ばかり勝手にぺら〳〵言ひたい放題のことをしやべつてゐて、人の氣はちつともわからない人だとして、夏目もこれには閉口して、あのなつかしい顏を一層むつかしくしかめて

ゐても、一向平気の平左でまくし立てるのです。これはずつと後の話ですが、夏目が修善寺で大患ひをしまして、それからなほつて東京にかへつて、内幸町の長與さんの胃腸病院に入つてゐた時のことです。面會謝絶といふのに姉さんが見舞に訪ねてくれました。看護婦も識つてるので通ほしますと、中へ入るなりいきなり例の調子で一人でまくし立てます。夏目の方では又始まつたな、うるさい〳〵と思つてるので益々しかめつつらが險惡になります。さうしてうんともすんとも言はずそつぽを向いて相手になりません。すると今松本高校の校長になられた森巻吉さんがついてゐて、姉さんとは知らず、これは又あんまり沒義道なと同情したものでせう、もうだまつてこの場の光景を觀るに見兼ねて、助け舟に乘り出したわけです。

「御容態は非常によくなつたのですが、先生しやべることはどうも好かれんで……」

とか何とかしきりに詫まつたが、それでも姉さんは好き放題にしやべつて、それ切り歸へつて行かれました。そのすぐ後に私が參りますと、夏目が笑つて申しますには、

「今高田の姉が來て、又例の調子で小五月蠅くやるので、だまつてしかめつ面をしてゐてやると、森の奴しきりにあやまつてゐて、その可笑しいたらなかつた。」

といふ話に、森さんも先生は人が惡い、そいつは飛んだ笑ひ話だと頭を掻いてゐられたことがあります。

高田の姉さんといふのはこんな人ですが、此姉さんの若い年頃の時の話でせう。よく御殿女中なんかゞ、丑待ちとかいつて、正月の丑の日の丑の刻に、床の間も何もない八疊の眞四角の部屋の四角に百目蝋燭をつけて、鏡臺を前において、前日から身を淸めて、洗ひ髪で一人じつと鏡に向つてゐると、丑の刻になつて行く先きの自分の運命がうつつて來るといふので、その丑待ちといふのが流行つたものださうです。いづれ一番上の姉さんから聞いたものでせう。家の八疊で丑待ちをすると、裏長屋の汚い家がうつつたので、いやだ〳〵と言つてられたさうですが、死ぬ時は神樂坂の入口の今の川鐵といふ鳥屋の奧の汚い裏長屋で息を引きとりました。

古いことと神樂坂序に思ひ出したことは、今神樂坂の毘沙門の大きな理髪店、あそこの先代か先々代かのおかみさんといふのが、一時夏目に乳をやつたことのある人で、今の亭主といふのは夏目の乳兄弟に當るといふことを聞いたことがあります。

十四　犬

明治三十三年、私たちは此年の七月に長らく住みなれた土地熊本を去るのですが、それより先き四月、最後の私が嫁いでから五度目の轉居を致しました。北千反畑といふところです。

内坪井町に居た頃、よそから大きな犬を貰つて飼つて居りましたが、其の犬がやたらに人に吠えつく犬でして、人の影さへ見れば吠え立てるといふ始末で、ほと〳〵困つて了ゐました。家では結句その方が要愼がいゝなどゝ言つては居りますものゝ、通行人の迷惑たらありませんでしたでせう。向ひに荒物屋があるのですが、餘りその犬が吠えるので、客足が遠くなつたなどゝいふ非難さへあつた位でしたが、夏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

目はそれこそ大變可愛がつて居りますし、女中のテルが又犬には目のない方で、書生に居られた行徳二郎さんなどは、犬の子を乳母車にのせては、犬の綱を引いて、穴八幡様に遊びに行くといつたわけで、家の者にはなついて居りましたのですが、附近の憎まれ者であつたのです。所が或る時のこと、どうしたはづみかとう〳〵通行人に噛みついて了つたので、その人が大變怒つて警察に訴へました。家のものも出て謝びたのですが、夜になると巡査が訪ねて來ました。すると夏目が玄關に出て行つて應待するその問答が頗る可笑しいのです。私なんぞは傍聽から、要領にはよくつても、さう〳〵人に吠えては、通る人には氣の毒で、若し自分たちがいゝ氣持で散歩でもしてゐる時に横合から吠えつかれでもすればいやな氣持に違ひないのだからと、口癖のやうに申して居たのですが、とう〳〵こんなことになつたのですから、今度ばかりは一言もあるまいから、默つて引つ込むより外はあるまいと思ひの外、中々巡査にまけて居りません。夏目のいふには、犬なんてものは利口なもので、怪しと見るからこそ吠えるのであつて、家のものなどや人相のいゝものには吠える筈のものではない。噛みつかれたりするのは、よく〳〵人相の惡いものか、犬に特に敵意を挾んでゐるもので、犬ばかりを責めるわけには行かない。人間が惡いのだと言はぬばかりの申分です。そこへ女中のテルも大聲で加勢に出るといふわけで議論の纏まりがつきません。巡査も理窟は何とでもつかうが、要するに犬の分際で人間に噛みつくとは何事だ、犬より人間が大切にきまつてゐるといふわけで、とにかく狂犬病でもあつては一大事と、テルに犬を連行して來いといつて、その犬は警察に牽かれて行つて了ひました。其晩妙に淋しく思つて居りますと、翌日早々に歸へつて參りました。後で調べたところ狂犬病ぢやないとのことでしたが、こんな噛みついたら撲殺するとかおどかされて、とにかくいつも繋いておくといふ條件で許されたのです。

さて内坪井町から北千反畑に移りましたが、この物騒な犬も一緒に連れて參りました。主人が好きで下女が好きなのですから、犬にとつてこれ程心丈夫なことはありますまい。不相變吠えては人を困らせて居りました。

或る晩のことです。夜用心に綱を放しておいて、繋ぐのを忘れてテルが門を開けたものと見えます。犬は元氣に吠え立てながら、一目散に門を飛び出しました。失策つたと思つて口笛を吹いたり、犬の名を呼んだりした時にはもう遲い。前の空地のところで、もう其時はよそのおかみさんに噛みついて了つたのでした。ところがこれは普通の通行人でも何でもなく、すぐ近所に住む巡査の細君と知れて、今度は唯ですむまいといふわけです。さあ、夏目も女中も困つて了ひました。私だけがそれ御覧なさい、言はないことぢやないといつたわけです。

果せるかな巡査がどなり込んで來ました。夏目は相變らず前の時と同じやうな理窟をこねて、いつかな巡査のいふことに屈服しません。といふのには、夏目にも腹に一物あつてのことです。實は女中のテルが朝早く門を開けると、いつも門前の空地に塵埃を捨てに來る女が巡査の細君だといふことを知つて、それを夏目の耳に入れてゐるのだからたまりません。人の見てないうちにこそ〳〵と人の門前に塵芥なんぞ

を捨てるなど、猫はゞ寄生にもおとるやうな所業の罰で、犬も怪しと睨んで噛みついたのだと、まあかういつた工合です。が今度の巡査は、前の時のお役目で來たのとは違つて、自分の妻女がやられてゐるのだから、それ位のことで見す〳〵退却はしません。又々警察に引つ張られて行きましたが、さりとて狂犬病でもないので、又歸つて來ました。それ見たことかとテルは大喜びでした。

すると或る晩のことです。夜おそくたつて夏目が謠の會かに行つて歸へつて參りました。門に音がしたと思ふと、一しきりに犬が吠えて、さうして玄關が開きました。出迎へて見ると、夏目は悄げた顔をしてゐます。さうして袂と袴とがひどく破けてゐます。どうなすつたのですと驚いて尋ねますけれども、默つて居ります。段々聞いて見ると家の犬にやられたのだとわかつて、これこそ飼ひ犬に手をかまれた恰好だといつて笑ひますと、夏目も仕方なしに苦笑ひをして居りました。

この犬は私達が熊本を引き上げる時、よく吠えていゝといふので貰らつてつた方がありましたが、物好きな方もあつたものです。

十五　洋行

丁度其頃校長の中川元氏が仙台へ轉任され、工學部長の櫻井房記さんが代はつて校長になられました。さうして夏目は教頭代理のやうなことをしてゐたやうでした。其頃からボツ〳〵洋行話が持ち上がりました。これが高等學校の先生が選ばれて洋行する始めで、藤代禎輔さん芳賀矢一さんなどが御一緒でした。

愈々これらの方々と共に行くのがきまつたところへ、夏の始めかと思ひますが、大塚さんが獨逸から歸へつて來られました。熊本から歸京する道すがら、それは七月でしたが、丁度大洪水のあつた後で、到るところで汽車が不通になつてゐて歩いて聯絡したことを覺えて居ります。私は又身重になつて居りました。

この四月私の祖父が亡くなり、父も其後間もなく官職をやめて、矢來の宅に引き籠もつて居りました。丁度祖父の居た離れが空いたわけなので、洋行の留守中そこを借りて居ることにして、夏中はともかく皆が大磯へ海水浴に出掛けたので、私どもで留守を預かつてゐたことです。

すると八月の中旬になつて、私の妹が大磯で赤痢を病んで亡くなり、續いて母も赤痢をやつて、一時は大騷ぎをやりましたが、それでも夏目が出發する時には、いゝ鹽梅に母も辛うじてではありましたが玄關迄見送れるやうになつてくれました。

私たちは横濱迄見送りました。プロイセン號といふ外國船で、日本人の客といつては、芳賀さん藤代さんそれに夏目の三人でした。それは九月八日のことでした。立つ前短冊に、

秋風の一人を吹くや海の上　漱石

の一句を認めて殘して行きましたが、洋行から歸へつて來て、私の部屋に入るなり、床の間の横にかけておいた短冊を外づして、びりびりに裂いて捨てゝ了ひました。

この洋行を轉機として、私ども一家の上に暗い影がさすやうになつてまゐりました。（未完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あの短刀

堺利彦

近藤憲二君の『秋の日向で』(改造十一月號)の中で、私は近藤君から、『村木に代つてのお詫び』の言葉を受けてゐる。そして、私に取つては、誠に心持のいゝ話を聞かされて居る。それでツイその話にからまり、その前後の事情を少しばかり書いて見る氣になつた。

× × ×

近藤君は私に對して、『本當にあなたの所にさういふ紛失物があつたのか』と書いて居る。『もしさうだとすれば、それは村木の仕業』だと書いて居る。如何にも、私の所にさういふ紛失物があつた。そして誰が持つて行つたのか、少しも見當が付かなかつたが、それを今『村木の仕業』と聞いて、私は實に嬉しいのである。

紛失物は一本の短刀であつた。そしてそれには由來がある。大正十年の秋、或日の事、私の家に變な男がやつて來た。私は多忙中で會はなかつたが、その男が私の尾行巡査に誰何されて持物などを檢べられた時、その懷中に短刀か何かゞあつた。そしてその男は、私を殺しに來たのだと氣焔を吐いた。それでその男は殺人豫備とかいふ罪名で起訴されたが、、、、、、、、の限りに出た行爲だといふので、執行猶豫になつた。その時、細川猶二君が私に對する見舞として、一本の短刀を贈つてくれた。如何にも細川君らしい贈り物で、それは又、横田淵叟翁が書いた手紙が添へてあつた。私は其の厚意を有りがたく受けて、短刀は書類入の簞笥の箱の中に入れて、常に座右に置いて居た。私は刀劍を愛好するといふ柄でもなく、又武器を取つて人に立向ふといふ柄でもないが、それでも折々、座右の短刀を拔いて、その澄み透つた光、謂ゆる燒刃の匂ひといふ奴を眺めるのは、決して惡い氣持でなかつた。たまには、夕暮に外出する時など、ソツトそれを懷に入れる事も無いではなかつた。その短刀が誰の作であつたか、銘があつたか無かつたか、そんな事は一さい氣にも止めなかつたが、只だ切れ味は必ず相當に善さそうな、身のガッシリした、重みのある白鞘だつた。

その年の冬、又私を殺しに來た男があつた。それは軍服を着た兵隊で、玄關で私と立話をして居る中行きなり飛びあがつて來て私を刺した。幸ひにして私は僅かに傷ついただけであつた。然し私は今、その時の事を語らうとするのではない。只その時、見舞に來てくれた村木君が私の家の二階に宿つて、(近藤君の書いて居る所に依れば)右の短刀を枕頭の棚に見つけて、それをソツト持つて行つたのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その時、私の家では、混雑に取紛れて、誰も短刀の事など忘れて居たが、幾日かたつて、少し家内が鎮まつた時、初めて、あの短刀がないと氣がついた。いろ〳〵探して見たが、どうしても無い。誰かゞ持つて行つたのだらうといふ事には極まつたが、何しろ大ぜい出入した時の事だから、少しも見當は付かなかつた。私は何となく寂しい氣持がした。折角の贈り物を無くして濟まないといふ氣持もあり、又毎日机の前に坐つて見て、頰に手觸りの賑やかさが消えたやうな氣持もあつた。若しかすると、これは、、、、、、、、、、、、、、巧みにそんな眞似をしたのではないかとも考へられた。或は又、見え半分の、無粋な、強がりの青年が、出來心でツイ持つて行つたのかとも考へられた。或は又、あれを可なり高價な品物と思つて、牛肉か酒か米か女にでも代へる積りで、誰か馬鹿な奴が持つて行つたかとも考へられた。いづれにしても、それは可なり、私に取つて不快であつた。

然るに、それから六年もたつた今、初めてそれが「村木の仕事」だと知れたのである。近藤君は「村木に代つて……幾重にもお詫び」すると書き「どうか勘辨してやつて」くれと書いて居るが、私としては、それどころの段ではない、「あゝそうだつたのか」「村木だつたのか」と、只だ愉快なほゝゑみが浮ぶだけの事である。近藤君は又「奴もただ、、、にかられて盗んだのではあるまいから、その盗を酌んでやつて」くれと書いて居るが、その盗を酌む事に於いては、私も決して不足しない積りである。

× × ×

昔、横濱の同志に招かれて、根岸の海岸で夜半の遊びをした時、初めて美少年村木君を知つた。その後、彼が東京に來てから、ずいぶん久しいあひだ親しくした。千葉の監獄でも一年ばかり一緒に居た。殊に隣りあひの監房に居た事もあつた。近藤君の謂ゆる「御隣居」時代にも、彼はよく遊びに來た。いつでも靜かに、そして心配そうに話して行く人だつた。

彼の短刀の事のあつた年、だつたと思ふが、或日村木君がフラリとやつて來て、今度しばらく何處かに旅行する積りだが、少し旅費をつて呉れませんかと云つた。彼は滅多にそんな事を云はない人で、云ふ場合には少しも悪びれた様子のない人だつた。殊にその日は何となく餘所ながらの暇乞とでも云つた様な素振が見えたので、私は有りあはせた少しの金を心持よく餞別にした。

近藤君が、、、、、、、を見て「ドカーンと胸を打たれた」といふ其の時、私も矢張りその、、を見て、覺えずギクリとして胸をおどらせたのだつた。

その時は丁度、、、、、、、れたり、、、、、、、、、れたりした頃で、私がフト「飛行機、その他、續々落ちる小雀かな」といふ俳句の様なものを作つたのが、新聞で噂されたりした。そして其の年の暮、私自身までが（前記の通り）其の「續々」の一つとして落ちかけたのであつた。

村木君はあの短刀を持つて行つて何に使はうとしたのか。又實際何かに使つたのかどうか。或は使ひかけたのかどうか。そして結局、あの短刀は今、何處にどうなつて居るのか。それらの一さい分らないの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も却つて面白いような氣持もする。兎にかく私としては、あれを持つて行つた人が村木君であつた事が、、、、、、。

× × ×

猶一つ村木君についての思ひ出がある。或日彼が一疋の小猫を箱に入れて私の宅に持つて來た。何處かの椽の下に居たのを見つけて、可愛さうだから持つて來たと云ふのだつた。それが後に、コマといふ有名な大猫になつて、永いあいだ私の家庭を賑はして居たが、村木君の亡くなつた後には、これが村木の片見だと云つて、よく話の種になつた。そのコマもつい先ごろ亡くなつてしまつた。

× × × ×

もひとつ。或日、私の家の椽側で、村木君と和田久太郎君と私と三人、日向ぼつこをしながら、面白く話をした事がある。雑談と肺病と大學坊主が物語する小說かなとでもやるのかなと、久さんが笑ひ出した。村木君もニヤ〱して居た。その場の光景は、三人とも全く一齣の隱居』だつた。後に久さんの獄中からの手紙に、「再び社會でお目に懸かれたら、日向ぼつこでもしながら昔噺しのお相手になりましよう」と云ひ、又『日向ぼつこ會といふすばらしい理想の臨に』「今後十五年の晩」お互ひに生きようと云つたのも、皆な右の三人會を思ひだしての事だと思はれる。村木君の事を思ふ時、私はいつでも必ず此の日向ぼつこの會を思ひだすのである。

× × ×

右の記事は、近藤君の「お詫び」に對する私の返事ですが、同時に又、和田狂二君に對する私の報告です。不幸にして今、和田君と私との交りは絶えて居ろが、あの短刀の行衛に就いては、何かの機會に報告する義務があると考へて居たのです。そして私は今、それを斯樣に心持よく報告することの出來たのを深く喜びます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現代の思想家はどの政黨を支持してゐるか

楢崎篤平

從來の日本の政治界は、一般民衆から浮き上つてゐたばかりでなく、學者や、思想家とも極めて縁遠いものであつた。政治運動なんてものは、建部遯吾とか植原悅二郎とかいつたやうな、いはゞ出來損ひの學者思想家のやることゝ相場がきまつてゐた。實際政治に係はりがないといふことが彼等の誇りであつた、といふよりは寧ろ、彼等の間に直接關係を結めてゐたものがいくらもなかつたのだ。

だが、遂に來るべきものは來た。本年の五月に迫つたこの紀念すべき最初の普通選擧に臨んで、わが國の代表的思想家が如何なる政黨にその一票を投ずるかと吟味することは、換言すれば、彼等の間に政黨別色分け圖を作製することは、この際、甚だ興味深いことである。併しながら山野を測量するのと違つて、他人の頭の中を測量することは、彼の財布の中を測量するよりも六かしい仕事である。況んや一人の人間の主觀に映じた印象を唯一の材料としてそれを推定する場合に於ては、その當選率の少い點に於て、或は勸業債券の抽籤にも劣るかも知れない。併し以下列記する所の諸名士は殆ど、全部筆者が、平素その著書を通じてお目にかゝつてゐるばかりでなく、少くとも一回以上その謦咳に接する光榮に浴した人々であり、その中の過半數は筆者と昵懇の間柄である若くはあつた人々である。從つて萬一筆者が思ひがけない誤解を犯したとしても、その被害者は筆者に抗議を持ち込む前に、さういふ誤解を生んだ因由について反省して戴きたい。さすれば、その誤解には全然社會的根據がなく、その反省には全然社會的價値がないとはいへないだらう。

近代日本に於ける最も力強い學者と民衆との握手の一つは、大正初期にデモクラシーの運動となつて現れた。最近の思想運動の殆どすべてがこの中から派生したとさへいへる位重要なこの運動の、最も熱烈な支持者であり、指導者であり、代表者であつた人は、いふまでもなく吉野作造博士であるが、その後十數年を經た今日、博士は果していづれの政黨にその一票を投ずるであらうか。往年の最も親しい同志、今は勞農黨々首大山郁夫氏が、いつたやうに、果して博士は「ファシズム化」したであらうか。博士が總同盟の同情者であり、又女婿赤松克麿氏を理論的代表者とする社會民衆黨の成立に際して、その産婆役を勤めたことは天下周知の事實であるが、傳へ聞く所によれば、日勞黨が民衆黨から分離した際、博士は麻生久氏に一書を呈して、人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

間的には同氏に最も好感を抱いてゐるから、必要に應じて同氏のために一肌脱ぐことを誓つたといふ。近代やゝもすれば、民族意志の主流から足を洗つて、單なる資本主義者、帝大[illegible]、[illegible]、大正文化史の一資料化せんとしつゝある博士にも、さういふ一面があるといふことは、博士の政治的立場を考察する上に於て、我等に何事かを示唆しないであらうか。

吉野博士に次いで、東京帝國大學に於ける進歩的な學生の輿望を擔つて立つた人は末弘嚴太郎博士である。一見生命保險の勸誘員かミシン會社の集金人位ゐにしか見えない貧弱なからだにはち切れさうな精力を見せて、まるで尖端を走る鼬のやうな敏捷さを以つて、講壇、論壇、スポーツ界を驅けめぐる先鋒は全く端倪すべからざるものがある。だが、一つの主義主張に殉ずるには、博士は餘りに聰明すぎる。本來博士は鳩山兄弟の進んだやうな方向にスタートすべき人であつたかも知れない。左[illegible]が、鳩一を義兄に持つ博士から一票を期待することは、同じく政[illegible]代議士牧野良三を弟に持つ牧野英一博士からそれを期待するよりも、遙かにむつかしいといふ說は或は當を得てゐないにも限らないであらう。

末弘博士の直系で、而も或點ではより赤くなつた人に、目下洋行中の平野義太郎氏がある。氏は末弘博士とは全く反對に、地味で、溫厚篤實で、スロー・アンド・ステッディで、而もその胸には燃えるやうな情熱を秘めてゐる。勞農黨や產業勞働調査所から出た法律に關する文獻は大部分氏の筆に成るか、恐くはその校閲を經たものである。目下獨逸にあつて、共產黨の活躍を目擊しては、感激に滿ちた通信を寄せて若い同志の胸を躍らせてゐる。

平野氏と同じく東大の助教授で、屢々同氏と混同される人に大森義太郎氏がある。この二人は年齡、地位、思想から名前に到るまでよく似てゐるが、人物性格は全く相反した面白い對象をなしてゐる。平野氏が上品で、謹嚴で、どこまでも「學者」であるのに反して、大森氏は粗野で、奔放で、どちらかといへば生きぬきの勞働者に近い人である。平野氏が研究室から一歩も外へ足を踏み出さないのに反して、大森氏はどんな危險な所へでもざつくばらんに出かけて、屢々勞働街で[illegible]を振つてゐる。[illegible]のチラシの[illegible]では、大森氏はよく「帝大教授」に昇進してゐるが、文部省の方では永久に教授にしない方針らしい。併し氏は誰も豫想しさうもないやうな隱し藝（知りたい人は直接聞き合はし給へ）を持つてゐるので、何時大學の方をくびになつても大丈夫だと公言してゐる。勿論氏は勞農黨の支持者であるばかりでなく、その勇敢なる鬪士である。

京都帝大の河上肇博士は、何といつても關西思想界の重鎭である。博士がマルクス主義を奉ずる態度は、死んだ芥川龍之介氏がベルシヤ猫を愛撫するやうに、マルクスやレーニンを撫で廻しては恍惚として見惚れてゐるやうなところがあつて、一時左翼の若い左

與黨學生から排斥されたこともあるが、やはり京都にはなくてはならない人である。先月、博士の著書で數萬の財を築いた書肆弘文堂に博士の推薦で入社した京大事件のリーダー淡德三郎君が、弘文堂の店員小僧約二十名を「團結」させ、當主の「搾取」振りを摘發したチラシをばら撒いて戰つたさうであるが、この珍らしい爭議の結末こそ見ものである。

その外京大には本庄榮治郎、河田嗣郎、佐佐木惣一等の諸博士がゐる。本庄博士は純然たる經濟史家だから、恐らくはつきりした政黨的立場を持つてゐないだらうし、河田博士は一種のリベラリストで、風向きによつてはかなりラヂカルな立場をとることもないではないが、此頃はすつかり右傾してしまつてゐるやうだから、社會民衆黨でさへ博士の一票を得ることがむづかしいかも知れない。却つて社會的には少しも危險視されて居ない徹底的リベラリスト佐々木博士などが、案外勞農黨にその一票を投ずるやうな事がありさうに思はれる。

勞農黨京都支部には、帝大系の浪人が二人ゐる。一人は露骨な性欲演說で理學部講師の地位を棒に振つた山本宣治氏で、他に水谷長三郎氏である。前者は名勝宇治第一の料亭「花やしき」の若旦那であり、後者は伏見の旅籠の次男坊である。二人ともファナチックな勞農黨のアヂテーターで、來年の總選擧には揃つて京都市の內外から出馬し、いづれも當選確實(?)だと噂されてゐる。萬一當選の曉には、山本氏は早速全國を持廻つて折目のぼろ／＼になつた例の標本圖形を掲げて議政壇上に現れ、「かくて目的の卵に到達いたしました精虫は、いはゞ二億の同胞の中から選出された選良でありまして……」といつて大向ふを唸らせるだらう。續いて安部磯雄氏が登壇し、「產兒調節獎勵法案」を提出すれば、既成政黨の禿頭連は妻の腹の中を考へ、將來はやがて生れるであらう幾人目かの子供のことを考へて、この時ばかりは階級と黨派を忘れ、滿場肅然として謹聽するであらう。

京大の米田庄太郎博士がすつかり沈默してしまつた今日博士の直系で九州帝大に納まつてゐる高田保馬博士は、相變らず尨大な著書を出して日本の社會學界を代表してゐる。四五年前までは「社會」と名のつくものは何でも危險視せられたが、今日では社會學程「安全」な學問がないことが明らかになつた。百貨店のやうにあらゆる學問思想を征服し、折衷按配して、「第三」どころか「第四」「第五」の「史觀」を作製するのがその目的だから、至つて「公平」なものである。かういふ結構な學問を捨て、日本の學生、殊に頭のいゝ學生が競つて唯物史觀に走るのを、奇怪至極だといはれる博士の說は頗る合理的である。そして博士の說にぴつたり適合するやうな政黨が日本に生れないのを、筆者は甚だ遺憾とするものである。

帝大はこれ位で切り上げて次に早稻田大學に移らう。

こゝには日本社會運動界の元老で、現に社會民衆黨々首の地位にある安部磯雄氏がゐる。併しながら氏は、現實的な「政黨」の黨

首領といふよりは寧ろ「社會教」の大僧正とでもいふべき人である。それに惜しいことには、平常は細眼をしてゐるから一寸わからないが、よく見ると氏の左の眼はちつとも動かない。夫が氏から左の視力を奪つたといふことは、日本の社會運動史に於ける最も偉大なる損失の一つである。この眼を開かしむる名醫の出現しない限り、或は日本には完全な單一無産政黨が出現しないであらう。

佐野學氏と併び稱せられ、一度でもその講義を聞いた者は銀行會社で採用することを拒否するといふ噂が立つた程恐れられた北澤新次郎氏は、今や極右翼無産政黨の總民黨にさへゐたゝまらずに拔け出して、すつかり社會運動から足を洗つてしまつた。今では北澤新次郎といへば、有名な蓄音機狂としてその存在を知られてゐる。

その他早稻田には意識的反動家高橋清吾氏、文化主義者林癸未夫氏、原則先生杉森孝次郎氏の外に、五來素川氏がゐる。五來氏は陸ヶ峰假三郎氏の擧に從つて、民政黨から出馬したき野心滿々たるものあり、この頃も水泳部長の地位を利用し、早稻田出身の高石勝男その他を郷里茨城縣まで連出して水泳大會を催し、今から總選擧の人氣取りにこれ努めてゐるといふ。かくて佐野學氏追はれ、大山郁夫氏去つた早稻田の森は、日一日と反動化して行く一方である。

勞働農民黨々首大山郁夫氏については餘りに知られ過ぎてゐるから、今更改めて書くべきことがない。あの年齡で學生達と共にリベラリズムの洗禮を受けて「勞働農民黨の自由獲得闘爭の歴史的意義は如何に實際闘爭を通じて發揮せられたか？」といつたやうな文章を書いたりするところは、聊か大人氣ないこともないではないが、あの若々しさと熱烈性とが氏の身上である。尤も中には、學者そのものゝやうな氏を政治運動の渦動の中へ引つぱり出すのは、狼の群へ羊を投ずるやうなもので、家を賣り財産を離れて東奔西走してゐるうちに、學者としては頭が空で、實際運動家としては[illegible]すぎるといつたやうな人間にたり、第二の[illegible]のやうな男が出て來て誤り去られるやうなことはないかと、今から御苦勞にも氣に病んでゐる連中もあるが、さういふ連中のさういふ考へ方は、要するに彼等自身のプチ・ブルジョア・イデオロギーを表白してゐるに過ぎないのだらう。

次ぎに、慶應義塾での自由思想家に堀江歸一博士がゐる。博士は社會民衆黨の成立に際して、安部、吉野の兩氏に誘はれて産婆役を務めたものゝ、最初から餘り氣のりがしなかつたらしい。いはゞ、二本足では歩りが悪いから、もう一本、といつたやうなところから引つぱり出されたのであつて、氏の文章がいつもソフト・フオーカスで出來てゐる。從つて社會民衆黨が成立當初の親みで博士の一票を頂戴する位が關の山である。

その外に慶應には福田博士の論敵小泉信三氏がゐるが、氏は典型的慶應タイプの上品な紳士で、テニスの選手であると共に、マルクス經濟學の造詣が深く、而もその危險な思想には遂に感染しないだらう。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大きに商科大學には、よく學び、よく謀く精力家福田德三博士がゐる。無產黨の中では日勞黨贔負らしいが、近頃の博士には堂々たる本格的主張の論文なく、黎明會當時のやうな、勇敢な、積極的な論戰が絶えて久しく見られないのは淋しい。尤も事一度學究の野に臨れば、日本の經濟學界、英才雲の如くに多しと雖も、知識の淵博に於てよく博士の右に出づる者は一人もない。先頃本誌に連載せられた『唯物史觀の再吟味』の如き、考證が餘り煩瑣に渉つて讀者を多少倦かしめもしたらうし、若干の非難も耳にしないではないが、併し少くともあの問題だけの範圍では、學界への貢獻として世界的なものではあるまいか。

更に民間に於ける進步的な思想的グループとしては、大原社會問題研究所、「社會思想」、「我等」「マルクス主義」等がある。

大原社會問題研究所長高野岩三郎博士は、一時日勞黨々首として呼び聲の高かつた人であるが、果して承諾するかどうか今のところ判然したい。博士は安部氏と違つて、豪放で、磊落で、大山氏や河上氏と違つて、酸いも甘いも噛みしめた苦勞人で、多分に親分肌なところを持つてゐるから、無產黨々首としては理想に近い人物である。仕事の關係上今すぐ出られなくても、恐らく近き將來に於て無產政治運動のために一肌脫ぐ時が來るだらう。

大原研究所は博士の外に、森戶辰男、櫛田民藏、久留間鮫造等多士濟々である。

謙讓で素朴な森戶氏は、社會主義者といふよりは寧ろ、宗教家若くは道德的若くは教育家ともいふべき肌合の人で、氏の人格の中では、マルクスも、クロポトキンも、スチルナーも、バクーニンも、レーニンも完全に融合し、氏はそのいづれもから倫理的要素を攝取して、氏獨特の思想を構成してゐるのである。從つて普通のアナーキストやサンヂカリストのやうに政治運動を頭から否定してかゝるやうなことはなく、資本主義に對するアンチ・テーゼとしてすべての無產政黨を支持し、無產諸政黨の中にあつては、なるべく左翼を支持することを氏の良心は命ずるであらう。

村夫子然として頗る風采の上らない森戶氏にも、洗練された文章や熱辯を以つて、讀者若くは聽衆を魅する華やかさはあるが、櫛田氏に到つては全く地味一方で、その人物なり生活態度なりはまるで禪宗坊主である。非常な勉學で様々な逆境を經て今日に到つた人であるが、世間的な欲望が全然なく、完全にその分を守つてそこから一歩も外へ足を踏み出さない。氏の生活態度は、一寸類例の出來ないことである。無產政黨に對しては、氣持の上では日勞黨にも好意を寄せてゐるやうであるが、勞農黨を支持する點にかけては敢て人後に落ちないであらう。

久留間氏は櫛田氏の直系で、どこまでも學究的態度を失はず、何を書いても一字一句も苟くもしない點に於て、櫛田氏そつくりである。政治的立場も恐らく櫛田氏と變りがないであらう。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

往年「森戸事件」に連座した大内兵衛氏は、前東大の教授として留つてはゐるが、思想的には大原系に數ふべき人である。櫛田氏に比べると明るく快活で、時々文學青年のやうなセンチメンタルな文章をものすることもあるが、櫛田氏とは思想的にも生活的にも親交の間柄である。我が國財政のマルクス主義的解剖は氏の最も得意とするところであつて、氏の言説は若いマルクス學徒の間に重きを成し、直接間接に、左翼無產政黨の有力な武器となつてゐる。

社會思想社は、勞農黨書記長の細迫兼光氏その他一二を除けば、殆どすべて日勞黨支持である。ここには東大新人會出身の好學的マルキシスト若くはマルクス研究家が顔を揃へてゐる。

彼等の機關誌「社會思想」を經濟的に支持して來た嘉治隆一氏は、お金持の坊ちやんで、篤實なマルクス研究家で、故上田敏博士の令嬢瑠璃子さんのお婿さんとして有名である。

このグループの隱れたる策士と稱せられる平貞藏氏は法政大學教授で、積極的日勞黨支持者である。至つて粗朴な人で、一見農民代表といつたやうな感じである。

先頃英國から歸つた東大助教授蠟山政道氏は、吉野博士を若くしたやうな上品な紳士で、やはり日勞黨に加盟したさうである。

日勞黨所屬の辯護士三輪壽壯、細野三千雄の兩氏もこの仲間である。三輪氏は安部磯雄氏を若くしたやうな溫厚篤實の士であるが、柔道の達人で、先月大阪で講演中に演壇へ躍り込んで來た暴漢を取つて投げた手際は鮮やかなもので、この人さへ議會に送れば無產黨如何に少數なりと雖も恐るゝに足らずと稱せられてゐる。細野氏は色の生白い優男であるが、一度演壇に立てば驚くべく勇敢な鬪士と化する人である。

細迫兼光氏もヴアレンチノ型の美男子であるが、此間の縣議戰に日勞黨から出馬して、二十九才の若冠で神戸市に於て第一位に當選した阪本勝氏も[illegible]走つた好男子である。氏は[illegible]藝術家肌の人で、繪を畫かせても玄人の域に達してゐるし、先月出版された長篇戯曲「洛陽餓ゆ」は今の文壇では一寸見られないものである。

九州大學教授の石濱知行氏は、「文藝時代」の石濱金作氏の令兄で、氏もどつちかといへばボヘミアン的な藝術家肌の人である。

東北大學の新明正道氏は、森戸氏に似て宗教的な無政府主義的な要素を多分に持つた人で、マルクス全盛のこの仲間では珍らしい異端者である。

日勞黨の成立と共に同志社大學の教職を抛つてその政治鬪士となつた河野密氏は、適度の理智と適度の感情と適度の意志とを持つた人で、いゝ意味での教養が作り出した理想的の人物である。

その他地方に農村問題研究家河西太一郎氏や三重縣に於ける水平運動の指導者河合秀夫氏から、故松方侯の[illegible]川崎造船所の社長松方幸次郎の第何男坊——に至るまでを包含してゐるこのグループは、當然一九二〇年代の口

本の進歩的な智識階級の見本の觀がある。

次に「我等」主幹長谷川如是閑氏は、前述の「社會思想」の同人全部を掻き混ぜたやうな人であるが、大原社會問題研究所の囑託の關係から、櫛田氏や大内氏に近寄つた點もある。とは言ふものゝ氏は曾て自分の思想的立場を明らかにしたことがない。反軍國主義であり、從つて反資本主義者である――そこまではわかるが、それから先は迷宮である。氏の存在は確かに日本思想界の「七不思議」の一つに數へらるべきである。

日本の社會思想界に一新紀元を劃した雜誌「マルクス主義」には、總大將福本和夫氏を始め、氏の難解な文章を「戰ひとつた」人達が無數に控へてゐる。

福本氏は先年獨逸から歸朝するや、最新式の「マルクス主義」をトランクから取り出して、所謂「共産黨事件」の人達を始め、河上、櫛田等の從來のマルクス經濟學の諸權威に到るまで片つ端から俎上に上げ、（尤も氏は大變な精力家でそれと同時に温々或る方面にも精力家（？）である）正しいマルクス主義を天下に普及し、傍ら日本語の語脈を改めると共に語彙を豐富にするのに與つて力のあつた人である。この八月に水野成夫氏と共にモスコウのコミンテルン執行委員會に出席して、また新しいお土産があつたと見えて、歸國早々日本の無産階級はブルジョアジーと「包合」せる「絶對的權力」にその闘爭目標を置かなければならぬといつたやうなことをいつてあちこちで叩かれ、大分影が薄くなつたやうである。とはいへ、氏が日本の社會思想界に印した足跡は、永久に滅却すべからざる程偉大なものである。

舊共産黨の人達の中で福本イズムの洗禮に遇つて生き殘つた人は、野坂鐵氏と猪俣津南雄氏位のものである。

野坂氏は何らの好意を思はせるやうな英國型の紳士で、獨力で（但し出獄その他は奥さんの實家から貰つたとのこと）産業勞働調査所を起し、女高師出身の奥さんと御一緒に、仲善く、根氣よく、一番必要な而も誰もやりたがらない地味な仕事に勵んで居る。勿論お二人とも熱心な勞働黨の支持者である。

猪俣氏は一寸日本人離れのした、まさかベル夫人が外國人だからその血が混入したのでもあるまいが、どことなく歐洲人らしい感じのする立派な紳士である。氏は一見謹嚴そのもののやうで、どんな些細な誤りをも見逃さない峻烈な學者に見えるが、あれでなかなかマルクス主義者には珍らしいモダン・ボーイで、嘗つては新村出門下の偉人であつたこともあり、洋行前後及び洋行中に於て色々と醜聞を流したこともある。プチ・帝國主義者高橋龜吉氏を攻撃する暇々には、せつせと湘南に近い某方面へ通つてゐる。尤も氏が論壇に於ける最近の活躍の素晴らしく、最近に福本氏を克服したのは此人の最大功績である。

共産黨事件で日本を脱走して一時鳴物入りで騒がれた佐野學氏は、出獄後今に鳴かず飛ばずで、人事ながら力瘤を入れ過ぎた所は、聊か間拔けの態である。と言つて今更福本派に入るわけにもゆくまいし、前途から

まくないから代議士になるのもむづかしからうが、或は近く異つた方面に一花咲かすかも知れない。

共産黨事件の御大、といふよりは寧ろ「日本社會主義ギルド」の神様、堺利彦老は、その後繼者山川均氏と共にあまりに有名でその立場や人物を紹介する必要もあるまい。ただ勞農黨と日勞黨との仲違ひが、倅の兄弟喧嘩のやうに氣になると見えて、朝日新聞の紙上まで利用して盛んに兩黨の合同を勸めてゐるが、倅ももう一人前になつたと見えて、親父のいふことを聞きさうにもないのは困つたものだ。

同じく共産黨の荒畑寒村氏は、十代から社會主義者の群に身を投じて日本の社會主義運動そのものと共に成長して來た、いはゞ典型的の革命兒であり、反逆兒であるが、時世はいつまでも此人を裏長屋に燻らしてゐる。

次に前の政治研究會の右翼、即ち後の獨立勞働協會の幹部で今尚活躍してゐる人に、高橋龜吉、[illegible]、島中雄三、馬場恒吾の諸氏がある。

高橋氏は多年東洋經濟新報社にあつて實際經濟の蘊奥を極めた人である。例のプチ・帝國主義論では左翼から一齊攻撃を受けたが、先年氏の「經濟學の實際知識」が出た時には、社會科學研究會の學生達の間に異常なセンセーションを惹起したものだ。風貌は至つて貧弱で、古ぼけた服を着て跛を引いて歩いてゐる所は、誰が見ても會社の受付か下足番位にしか見えない。自分の主張と餘程の懸隔のない限り、懇望に招かれゝば大抵どこへでも行くといつたやうな性質の人だから、日本農民黨にも引かれたのだらう。

島中氏は中央公論主幹島中雄作氏の令兄で、世話好きな事務家だ。來年の總選擧には、金の都合さへつけば、社會民衆黨から出馬するだらう。

馬場氏は、今後若し社會民衆黨と既成政黨との間に何等かの了解が成立するやうなことがあれば、その橋渡し役にはお誂へ向きの人である。[illegible]氏は[illegible]の本誌で[illegible]氏が「既成政黨から取れる丈けの金を取つて、投票は我黨の味方に入れて呉れと云つた方が簡單明瞭ではないか」といつたやうなことをいつてゐるが、ついでにその手で、[illegible]か[illegible]あたりを中に立てゝ、既成政黨から纏つた金を捲き上げて、太鼓を打つ[illegible]す工夫をした方がもつと簡單明瞭かも知れない。何にしても人格の正しい人である。

普選の呼聲と共に、講壇の中から飛出して來て社會民衆黨に加盟した人に白柳秀湖氏がある。昔氏が早稲田を出て危險人物として入營したとき、時の聯隊長が今の田中政友會總裁で、偶然の機會が二人を結びつけ、爾來長く二人の交友が續いてゐたとのことであるが、若し今でもさうだとすれば社會民衆黨が、萬々歳だのに、惜しい哉、除隊後はたつた一度、勤務演習に招集された時、田中義一と顔を合はしたと言ふに止まるのが、事實のやうだ。

今だに反動派の中では、前の經濟聯盟の[illegible]やうなものが主[illegible]となり、ファシズム主義に

て、積極的な、具體的な政治運動となつて現れて來ないのは不思議である。熱心な普選の首唱者であつた上杉愼吉博士が近頃すつかり鳴りを潛めてゐるのも解し難い。高畠素之氏には賛否いろいろの批評はあるが、しかし氏が孜々として獨力あの浩瀚な「資本論」の譯を完成したことだけは、立場として氏の正反對にある年少氣鋭のマルクスボーイ達も深く感謝を捧げておかない所である。最近河上博士の譯本も出て、競爭の地位に立つてゐるが、公平にみて兩者の譯は一長一短、輕重は付け難い。うまく資本論でも當つたら一大ファシズム黨でもこしらへることだ。

農民黨のついでに、專門の農村問題研究家としては小野武夫、那須皓、中澤辨次郎等の諸氏がある。

小野氏は古い農村問題に關する文獻を漁ると共に、實地調査のために全國の農村を行脚して廻つて、全く獨自力で博士になつた人で、農林省の名嘱託ではあるが、思想的には全然獨立し、内に燃えるやうな熱情を湛へながら、おつと堪えてその研究を進めてゐる。從つて假りにも日本農民黨なんかに擔がれるやうなことはあるまい。那須氏はその反對に謹直な紳士で、うつかり擔がれては後で自分の身分を考へて驚いて跳び降りる人である。中澤氏は誰でも擔いでくれる人があればいゝ氣になつて投げ出されるまで擔がれてゐる人である。この故に中辨々々と言つてみんなから冷かされる。

同じく擔がれることの好きな人に賀川豐彦氏がある。但し氏を單なる宗教家だと思つてゐる人は、氏の本質を全然知らざるものである。氏は偉大なる（時にはとんでもない失敗もするが）事業家である。嘗て總選擧で日勞黨が兵庫縣で二名の當選者を出したのは氏の有形無形の應援に負ふ所が多いといはねばならぬ。惜しむらくは、自分の趣味を他人に押しつけなければ承知しない宗教家特有のエゴイズムが強すぎるために、氏は組織者としては成功してゐるが、組織の維持者としては常に失敗してゐる。その點に於て杉山元治郎氏は、より緩和されてゐるが故に、より多く擁護の才がある。

又いつも擔がれてゐるやうに見せかけてその實自分の方で擔いでゐる人がある。それは「プロ」辯護士界の片山哲、布施辰治、山崎今朝彌の諸氏である。このことは布施氏の方には大體異論なく當てはまるが、山崎氏の場合になると、二つの鏡の間に一つの物體を置いた時のやうに、擔ぐ意識と擔がれる意識とが無限に反對し合ひ交錯し合つて、恐らく自分でもはつきりわかるまいと思はれる。とにかく辯護士なんてものは有難い商賣で、一度でも餘計新聞に名前が出ればそれだけ廣告になるのであつて、いつのまにか堂々たる邸宅が出來るのである。從つて布施氏が勞農黨の中央委員にならうが、山崎氏が日勞黨の支持者にならうが、要するに狐と狸の化かし較べだと思つて見れば大した間違ひはない。

次に文士の方はどうかといふに、藤森成吉、青野季吉、前田河廣一郎、佐々木孝丸、金子洋文、小牧近江、林房之輔、細田民樹

等の勞農藝術家聯盟及びそれから分離した若い無名の人達を主とするプロレタリア藝術聯盟は、共に熱烈な勞農黨支持で、まさに競ひ合の形である。恐らく來年の總選擧には、兩方とも隊を組んで旗を押し立てゝ投票場に押し寄せることだらう。所が、前者は最近また二つに割れて、青野、金子、今野等の「種蒔く人」以來結びついてゐるブロックは雜誌「文藝戰線」を買ひ受け、林房雄、村山知義等のモダーン・ボーイは「前衞座」を戰ひとつて」物別れをするに摑み合ひまでやつたさうだ。これから先もこの仲間はどれだけ分裂するか、微分積分にでも通じたものでなければ像想がつかない。この中に自ら代議士の候補者にでも立ちさうな人のゐないことは勿論である。藤森、青野の兩氏は百姓家だし、政黨運動なんか出來さうにもない。小牧氏は親父が代議士だから或は茶目氣を出さないとも限らないが、青野氏あたりがまあ／＼と言つて引留めるだらう。やらせて見て面白さうなのは藤森成吉氏だが、保證金だけでも出來るかどうか危つかしいものだ。

文士の中では、前記もまさく政治的才能もあつて失敗しても相當の所まで漕ぎつけるだらうと思はれるのは、日勞黨に屬する木村毅氏位のものだらう。氏は近く圓本の印稅で相當纏つた金が入るので、洋行しようか立候補しようかと頻かに迷つてゐるやうだが、案外兩案とも上院議長木村夫人の手によつて握り潰されて、東京の郊外に赤煉瓦の文化住宅が一軒增えるのが落ちかも知れない。

片上伸、千葉龜雄の兩批評家は、いづれもはつきりした政黨的立場を持つてゐないらしい。理智的には勞農黨に傾き、氣持の上では日勞黨に好意を寄せ、いざといふ場合には結局どつちか景氣のいゝ方に投票するといつたやうな所だらう。

政治否定、卽ちアナーキズム若しくはサンヂカリズムの立場を取る文士としては、秋田雨雀、小川未明、新居格、中西伊之助、加藤一夫等の諸氏がある。但し秋田氏は自分で折衷派的アナーキスト（これは政治的運動を必ずしも否定しないといふ意味である）だといつてゐるから、いゝ印象を得てロシヤから歸つて來たら、勞農黨に投票するかも知れない。小川氏は明白にアナーキストだから全然見込がない。新居氏は曾つて自ら經理で立候補を思ひ立つたこともあるし、（その時彼の懷中の蟇口には銀貨銅貨取まぜて一圓廿七錢しかなかつた）麻生久氏等とも仲の善い間柄だから、こつそり日勞黨あたりへ投票するだらう。いや、それ所か、イタリーには何とか言つてアナーキストの代議士がゐると、始終口にしてゐる位だから、金と地盤さへ提供してやつたら、存外、立候補位するだらう。但しさうなれば取り卷き連が承知せず、彼を見捨てゝ去ることは申すにも及ばぬ。中西氏は行きがゝり上例の「農民自治」で押し通すだらうし、加藤氏は近頃青雅春秋社の番頭になつて家を建て、買ひ、昔の取り卷き連とも手を切つたやうだから、アナーキストでも、その外の何物でもない。

その他政治否定論者としては、大杉派の

アナーキスト近藤憲二、岩佐作太郎の兩氏及び黑色聯盟や印刷工組合の人達、アナクロ・サンヂカリスト石川三四郎氏、スペングラリアン室伏高信氏等がある。中でも近藤、岩佐の二氏は、棄權したら殺すといはれても斷じて投票しないだらう。

石川氏は沒落した貴族のやうな格好をした上品な人で、氏の一番好きなものは×××××とフランスとエリゼ・ルクリユとダンスと畑作りで、一番嫌ひなものはマルクスとドイツとロシヤと議會と進化論である。安部磯雄氏と親交があるから、氏のためなら一票も投じやうが、地盤が違ふから恐らく棄權するであらう。

室伏氏はデモクラシーその他七段返しを經て文明沒落主義者になつて一儲けした人で、これから先も丸善へどんな面白い本が着くとも限らないから、今氏の思想に明確な斷定を下すことは、この頃の天候を測候所の天氣豫報で縛るよりも難かしい藝當である。

カール・カウツキー著
高畠素之譯

改譯 資本論解說 (忽六十版)

■四六版　三三六頁　特製壹圓卅錢　◎　並製壹圓　送料各十八錢■

世界改造の大法廷は開かる。資本主義文明は今や最後の審判を前にして戰慄す。見よマルクスが印したる科學的文字は新興階級の經典として地球の全面に舞躍せり。時代の批判はマルクス學の批判より始めざるべからず。本書はマルクス「資本論」に不易明快の解說を與へたるもの、久しく專門學者の机上に置かれし深遠の典籍も本書いづると共に高級常識の一資財と化せり。原著者は現代世界の最大マルクス學者、譯者は日本マルクス學界の巨星、茲に著者譯者共にその人を得たり。

改造社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

無産政黨合同問題

勞農黨、合同を提議すべし

荒畑寒村

かつて堺利彦氏が一新聞紙上に、勞農黨と日勞黨との無條件合同を提議するや、勞農黨機關紙、無産者新聞等は筆を揃へて堺氏を攻撃し、『醜惡たるデマゴオグ』とまで罵るに至つた。

堺氏は單に合同論の口火を切つた迄であつて、その意見を充分に發展させてゐなかつたのは事實である。然し若し勞農黨の指導者が、眞に無産階級の政治的戰線の統一と、その勢力の集中とを欲してゐるならば、たとへ如何に粗雜な意見であるにしろ、既に合同論の口火が切られた上は、これを機會に無條件といふ意を、合同の方法と云ふ如き、具體的な條件の討究にまでその議論を發展させるべきであつた。

勞農黨の指導者諸君は、無條件合同といふことを以て、勞農黨の指導精神拋棄、その所謂『勞農黨の意識を日勞黨の意識水準に引き下げる』事だと思つてゐるらしい。少くとも黨員に對して、そう云ふ意味に宣傳してゐるのは事實である。然しこれでは合同でなくて、日勞黨への無條件屈服に過ぎない事になるが、吾々がこの無條件屈服を主張してゐるのだと思ひ込ませるために、吾々が日勞黨と策動してゐると吹聽し、且つそう信じてゐる者があるのは滑稽である。殊に勞農黨の最高幹部の某氏までが、そう信じてゐたと云ふに至つては、實に沙汰の限りと云はざるを得ぬ。

×

吾々はそんな個人的ポリチツクスをやつてゐるのではない。吾々は無産階級の政治戰線の統一と、その勢力の集中とのために、兩黨が屈服とか併合とかでなく、眞に民主的な條件の下に聯合大會を開いて、合同案を討議すべしと主張するのである。そして此の民主的、大衆的な合同大會を開く上に、豫かじめ種々なる前提條件を附せず、孰れの意見、孰れの政策、孰れの綱領が、眞に果して無産階級の支持を受くるか、此の大會に於て討議決定すべしと云ふのである。

勞農黨の指導者諸君、また必ずしも合同に反對ではないらしい。只・

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だその前提條件として、先づ日勞黨員がその指導精神から脱却すべき事を要求してゐる。だが、これは決して戰線統一の目的を達成する上に、取るべき正當の手段ではない。何故なら斯の如きは寧ろ、出來ない相談をもちかける結果になるからである。そしてこんな出來ない相談を條件とするからこそ、日勞黨につねに拒絶の口實を與ふる事になるのだ。日勞黨もまた勞農黨と等しく、無産階級政黨だと稱し、無産階級を構成要素となし、そしてブルヂョア階級と戰ふべき事を宣言してゐる。何故に勞農黨はこれと合同して、日勞黨の宣言公約を實行せしめないのか。勞農黨が無産階級の協同戰線黨である限り、そして全體として見る時は、最も階級意識の熾烈なる無産階級層を代表してゐる限り、勞農黨にはまさしく此の義務があるのである。

何故なら、協同戰線黨とは無産階級の前衛が後衛と合同して、實際上の闘爭に相共に提携參加し、その行動を通じて後衛の意識を昂揚せしめ、そして彼等の上に前衛の精神的感化、理論的影響、指導的覇權を樹立すべき組織だからである。また斯くしてこそ、初めて後衛を支配する理論精神は脱却せしめ得るのであつて、若し所謂『排撃』に依て後衛を驅逐するのであつたら、何處に協同戰線黨を作るの必要があらうか。前衛（私はこゝでは勿論、比較上の意味で前衛後衛と稱してゐるのである。）は前衛で結成し、後衛は後衛で結成せしむるに過ぎざる出來ない相談を、合同の前提條件となすが如きは、階級戰線の分裂を齎らすものであつて、協同戰線黨の斷乎として排すべき所である。

×

勞農黨がつねに自負してゐる如く、その政策が最も無産階級の利害を代表し、從つて必ずその支持を受くるの眞實ならば、何故に自ら進んで合同を提議せざるか。何故に『日勞黨の意識水準に引き下がる』ことを恐るゝのか。

日本の無産階級に取つて何故にこの二大無産政黨の合同が必要であるかと云へば、それは吾が國の無産階級政治運動が、猶いまだその政治的解放の黎明、その階級意識の發達の發端を意味するに過ぎぬからである。從つて無産政黨の指導者中には、他のブルヂョア先進國に於けるが如き改良主義者、社會民主々義者、メンシェヰキ、裏切者等があるかも知れぬ。然も猶且つ、無産政黨の出現は無産階級運動に取つて、明白なる一前進を示すものである。そしてそれ故にこそ、無産階級間の最も階級意識に富める前衛分子に取つて、絶へずこれに戰闘的意識の感化を及ぼすために、大衆と緊密なる接觸を保つことが無上の必要となるのである。

これは決して排撃や、暴露のみで實現さるゝものではない。後衛大衆が前衛の戰闘的意識に感化せられ、その階級意識を昂揚發展せしめんが爲には、彼等自身の政治的經驗を要する。この經驗は、よしそれが改良主義者に依て指導せられてゐやうとも、大衆はこれを無産政黨の中で受けるのである。急進派、戰闘派、左翼派は大衆と接觸し、協働し、その闘爭を鼓舞援助し、そして彼等の要求を絶へず改良主義的、有害的な指導者に突きつけさせねばならぬ。指導者の無能、裏切等はこの大衆の要求に從はざる場合に最もよく暴露せらるゝのであつて、それと同時に大衆はだん／＼明白に、彼等自身の獨立な階級的政黨の必要を感ずるに至るのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勞農黨にして眞にその平生の標榜、主張、等に忠ならば、今こそ無産階級運動を急進化し、その指導精神の下に大衆を糾合するために、進んで日勞黨との合同を提議すべきではないか。そして此の合同を通じて、更に社會民衆黨との協同戰線をも實現すべきである。

×

雜誌マルクス主義や、無産者新聞か、吾々の合同論を以て、恰かもマルクス主義政黨と非社會主義政黨との合同論の如く見せかけるために、難文曲筆してゐるのは笑止である。彼等は勞農黨を以てマルクス主義意識に結成せられたる前衛黨の如く見做し、その他の無産政黨との合同を以て無産階級内の自衛と妥協でなく、恰かもブルヂョア階級との妥協の如く思ひ込ませやうと努めてゐる。斯の如きは、無産階級政治戰線の分裂を策して、無産階級運動の一部分たる一黨内に根を張り、その内部に於て意のまゝに統轄の權力を揮はんとするセクト主義の表現に外ならぬ。コミンタアンは既に日本の無産階級運動に於ける此のセクト主義を、猛烈に非難攻撃した。勞農黨が眞に果して日本無産階級運動の選手であるならば、先づ此の獅子身中の蟲たるセクタリアンを排撃すべきである。

分裂と合同の分岐點

馬場恒吾

無産政黨の分裂が既成政治家に輕蔑と侮蔑と安心の情を起さしてゐる事は事實である。彼等の或者は云ふ。「君等は何んだ。幾つの黨派に分れて喧嘩をしてゐるなんて。所謂無産政治家に統率の大人物かない事が判るではないか」と。又、或者は無産政黨が分裂してゐる事を眞に氣の毒がるらしく云ふ。實は當分一緒になりさうにない事に安心してゐる。又或者は心から同情してゐる。併し同情すると同時に無産階級が一致團結する能力がない事を憐れむと云ふ顏色を隱さない。

之に對して無産政黨の陣營では、憤慨と反省の念を起す。殊に府縣會議員選擧に於て、無産政黨分立の爲めに、當選すべき候補者が當選せざりし例を見ては、何人も無産政黨の分野に對し再び之を檢討する氣持を懷き、已に其の合同或は提携を勸告する聲か數ヶ所に擧げられた。其の合同問題で目下の注目の中心となつてゐるのは勞働農民黨と日本勞農黨の無條件合同論である。

此合同説は勞農黨の元老山川均、堺利彦氏、雜誌「大衆」の人々など

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に依つて支持されてゐるが、勞農黨の現在の指導者の支持する所でない。勞農黨の中央執行委員會が十一月七日に發表したる共同闘爭に關する聲明書を見ると其中に

「他黨大衆諸君も自由を求めて闘はん爲めに政治戰線の統一を猛烈に要求するに至つた。此要求たるや元より誤れる指導精神のよく代表し得ざる所であり、又他黨幹部のよく阻止し得ざる所である。勞農黨第三回中央執行委員會はこれら大衆諸君の要求を支持し、大衆的闘爭をより強大に展開せんが爲めに、いやしくも政治的自由獲得のために戰はんとする黨とは萬難を排して協力提携に努力することを重ねて聲明する」

とある。重ねて聲明すると云ふのは、十月廿四日の聲明書に、社會民衆黨、日本勞農黨などに屬する無產大衆の利益は擁護してやるけれども、無條件合同には反對だ。社民、日勞の指導精神とはあくまで闘爭すると云つた事を指すのであらう。

此聲明書の云ふ所の他黨の大衆諸君とは共同戰線を張る。併し其幹部や指導精神とは闘ふと云ふ事を、實行の上に翻譯すれば他黨の幹部を排斥して、其黨員を奪ひ取ると云ふ事を露骨に表白してゐる。かうした狀態では普通に云ふ意味での無產政黨の合同提携は勞農黨の關する限り問題にならない。

然らば勞農黨の指導精神は何であるかは、云ふ迄もなく『戰闘的マルクス主義』『全無產階級的政治闘爭』である。それが組合主義でも、合法的、、、、、、、、、今更說明補足を必要としない。

勞農黨の首領大山郁夫氏が果して全部福本イストであるか否かは私の知る所でないが、氏が府會選擧に際して機會ある毎に述ぶる所を見ると、氏も、、、、して政權を行はんとする人ではない。選擧に際して當選を希望せぬのではないが、當選を第一義とはしない。無產階級の階級的結成を以てより重要なる目的とする。議會には代議士を送る事を希望する。併しそれは議會の多數を占めて政權を行ふ爲めでなく、寧ろ議會に於て述べる勞農黨代表者の演說が全國に宣傳される事を望む爲めだと云ふ意味に解せられる。

それ故に、勞農黨には無產政黨として他の無產政黨と異る特殊性がある事を認めねばならぬ。他の無產政黨はそれが無產階級の自覺に伴つて、議會に多數を占める事を確信し、そして議會を通して無產階級の政策を實行する事を目的とする。勞農黨は議會中心でなくして無產階級の歷史的使命を遂行せんとする。

斯の如き意圖を有するが故に、勞農黨は其目的は非常に相異するけれども、其形式に於ては明治維新の際の勤王黨のやうな立場にある。勤王黨は幕府を倒して王政復古を企てたが故に、當時の支配階級である幕府からは反逆者として彈壓された。恰も勞農黨が官憲の爲めに常に壓迫され勝ちである如しだ。殊に最近の地國會のなぐり込みは、維新の幕府方の近藤勇が率ゐた新撰組が勤王黨に對する斬り込みに似てゐる、だから勞農黨の指導者の意圖には闘的な熱狂があり、宗教的な感激がある。併しさうした團結を近代的意義に於て政黨と云ふべきか否かは問題とせざるを得ない。勤王黨は政黨ではなかつた。

兎も角も、勞農黨が非議會主義の政黨であることは、それをして多數の投票黨員に依存するよりは、寧ろ少數の精銳分子に依存せしめる

事になる。そして其精鋭分子が奮闘する事は、之を全部大衆に向つて、或は實際に其黨員に向つても、否認する事を憚らなければならぬ性質のものである。勞農黨の演説を聞くときは、聽衆の中の最も敏感なるもののみが、辯士の隱微な指導精神を推察し得る。其眞意を知らずして、勞農黨に參加した黨員は、其眞意を知らされたときに、或は之に欺かれたと思ひ、或は憤然として離散するものがあるであらう。何となれば立憲政治の時代に於て、普通人が政黨に參加することは、只其政策に贊成して之に投票する義務を負ふ位の積りで參加するのであつて、維新當時勤王黨に參加する如く、生命を賭して政黨に加入するものでないからだ。

勞農黨は他の無産政黨をエセ無産政黨だと云ふ。若しそれが勤王黨員の如き覺悟と決心がないと云ふの故を以つてエセ無産政黨と云ふならば、それにも一理はある。併し無産階級全部に向つて、悉く維新志士の如き覺悟を有てと要求する事は實際に於て無理な注文であらう。所謂政黨はかうして大衆を包含する譯けには行かぬ。

勞農黨は最近モスカウから、今迄の勞農黨の遣り方は分裂政策である。大衆から孤立無援になる傾向があると注意されたと云ふ。併し勞農黨の指導精神が前に述べた如く決死的のものならば、それが大衆と緣が薄く、寧ろ少數精鋭の團結となつて行く事は、其組織の本質から已むを得ない事である。

何れの國、何れの社會層に於ても精鋭分子は少數なものだ。其精鋭分子が精鋭分子とのみ團結してゐやうと思へば、其團結は分裂に次ぐに分裂を以てして遂に、少數なる純粹の精鋭分子のみが殘る。勞農黨が然う日本農民黨が現はれ出し、社會民衆黨と日勞黨を失つたのもそれは民黨の指導精神の本質から見て當然な過程ではなかつたか。今日勞農黨内部にも福本派と、それが所謂折衷主義者、組合主義者の對立がある。今迄の過程が今後も挫折せずに繼續すると見るならば、折衷主義者、組合主義者が追ひ出される順序になる。

併し露西亞大國では共産黨中の精鋭分子たるトロツキー、ヂノヴイエフが却つて追ひ出される側になつた。今の勞農黨の指導者達が、トロツキー、ヂノヴイエフの轍を踏む可能性がないとは誰れも保證し得ない。そのときにもならば、無産政黨の合同も實際問題になるけれども、それ迄の合同説は現實の傾向を全然無視した勸告である。

勞農黨を勤王黨に比較した事が、勞農黨が勤王黨の如く實際運動の功を擧げる事を暗示してゐるのではない。それは斷はる迄もなく、勤王黨の戰術は議會のなかつた當時有効であつた。併し議會はかうした決死的の活動でなく、平凡なる一般人民の平常茶飯事の如き投票で、政治の大改革を可能ならしめる爲めに作られたのである。吾々は勤王黨の活動に興味のあつた事を認める。併しそれ以上の威力を無産政黨の代表者が壓倒的多數を以て議會に入る事に認めねばならぬ。少數の傑士よりは多數の平凡人に歷史的使命の遂行を期待する。茲に分裂と合同の分岐點が存在する。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戰鬪的統一戰線への具體的過程

佐野學

（一）無條件合同論の一般的批判

私は本年八月の「社會科學」の理論鬪爭批判號に次の如く書いたことがある。

「今、吾々の前に勞農黨及び日勞黨の無條件合同論なるものが一部的に存してゐる。兩黨に屬する大衆の社會的地盤は共通であるが、しかも兩黨は既に確定的に異種のイデオロギーに立つてゐる。吾々は大衆的階級的共同戰線黨として唯一個の黨の存在することを望む。故に勞農日勞兩黨の合同は望ましい。だがそれは現に日勞黨を指導しつゝある小ブルジョア的中央派的イデオロギーの克服せられた後に於てのみ可能である。既に日勞黨大衆が眞實の階級鬪爭に向つて立ちあがつたのは歴然としてゐる　勞農黨は共同鬪爭の過程に於いて之を獲得せねばならぬ。これを獲得する道は直に無條件に合同することを意味しない。勞農黨はレーニンの謂ふ前衞黨でないが、しかも階級鬪爭理論に貫かれて居なければならぬ。現在の無條件合同論は唯一の戰鬪的な合法的政黨の内部に中央派的理論を許さうとするものであり、わが無產階級の政治的實踐のために損害を加へる。」（大意）

以上に兩黨の理論の上から見た結論だつたが、府縣會選擧を中心とした政策と實踐から見ても同樣の結論に到達する。

（二）離れゆく兩黨の指導精神

府縣會選擧戰は二府三十七縣だけに行はれたのだが、第一回の普選の下に、わが勞働者農民が全面的に國家權力に對立した點において、正に全國的全階級的な政治的意義を持つてゐる。吾々は勞農、日勞兩黨の合同問題に連關して二つの著しい事實を見いだす。

第一は兩黨の指導精神のます〱離れてゆくこと、第二は、それにも拘らず、兩黨合同の具體的條件が次第に成熟してゆくこと、だ。

勞農黨は府縣會選擧戰において政治的自由の獲得といふ鬪爭目標の下に、全勞働人民の生活過程に發現する、、、、それの壓抑に對抗して戰つた。勞働民衆の、、、、、、、、、、に組織化することに成功した。この故に勞農黨の得票は階級を、少くとも階級的なものを、鬪爭を代表し得た。日勞黨は先づ議席を獲得せよといふ標語の下に進んだ。そして失敗した。その指導思想はブルジョア議會主義以外のものでなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

選擧後の兩黨のそれぞれの自己批判にも指導精神の差異が現れてゐる。勞農黨はブルジョア民主々義の獲得がその歴史的任務であることを強く且つ明確に認識しつゝある。日勞黨の一幹部は選擧の失敗は大衆の「政治教育の不足からだ」と嘆き、大衆の自立性、大衆の創意、大衆の戰闘的エネルギーに對して信頼を持つてゐないことを示した。

（三）戰線統一の具體的條件の急速なる成熟

それにも拘らず、兩黨の合同の質的の基礎は、府縣會選擧戰の經驗を通して、高まつてきてゐるのである。こゝに質的の基礎とは兩黨に屬する大衆の歩み寄りを言ふのである。ヨリ具體的に言へば、日勞黨の大衆が勞農黨の大衆と共に政治的自由獲得のための戰闘的態度を正認し、之と握手し始めてゐることである。新潟や兵庫の選擧戰や縣會の闘爭はその例だ。島根、千葉、岐阜、淡路、宮城における各勞農組合の共同闘爭委員會の成立もその現象形態である。

黨の指導者が大衆に信頼し、大衆がその指導者を支持する、といふ交互關係が見事に行はれてこそ、黨は私黨でなく、階級の黨であり得る。勞農黨において、この交互作用がよく行はれてゐる。少くとも、このことの正しさが充分に認識されてゐる。大山郁夫氏の戰闘的態度はよく勞農黨大衆の戰意を表現してゐる。一方、日勞黨幹部は統一主義を唱へてゐるが、勞農黨が最近提唱した朝鮮共產黨被告虐待抗議、ロシヤ革命記念の共働、檢閲改正運動の共同支持、全國農民團體協議會の共同支持といふが如き、現在、勞働者農民にとつて最も重大な事項の共同闘爭を拒絶し、益々、、となつてゆく支配者への階級的共同反抗を斷念し、戰闘的になつてきた日勞黨大衆の進出を阻んでゐる。

（四）「徹底的普選獲得の猛運動」とは何を意味するか

最近の日勞黨機關紙は「徹底的普選獲得の猛運動をおこせ」と言いてゐる。このこと自體は非常にいゝ事である。先づ立法機關の徹底的民主化に闘爭を集中するのは世界の階級闘爭のとる歴史的傾向であり、吾國に於てもそうであるから。日勞黨幹部が、ブルジョア議會主義に滿足し切れなくなつた同黨大衆の要求に押されて、このスローガンを掲げざるを得なくなつたにせよ、このスローガン自身は充分に正しい。だがこの重要な運動目標について日勞黨幹部の二つの根本的に誤れる態度を指摘し得ることを遺憾とする。

第一に何故に彼等はこの運動を第五十四議會の解散要求の運動に發展せしめないのか。彼等は來議會に選擧法改正を要求するらしい。第五十四議會は舊選擧法に依つて選擧された議會であり、いかに反動的であるかは第五十二、五十三議會が示してゐる。この議會に對して解散要求以外のものを持ち出すのは絶對にブルジョア議會主義である。しかし日勞黨幹部は依然この過誤を繰り返さうとしてゐる。同黨の指導者はその大衆の闘爭を正當に代表してゐない。

第二に彼等はこの重要な運動について、統一戰線を以てすることを少しも考へてゐない。このスローガンは戰線統一の具體的條件の重要な成熟を示してゐるのである。しかも日勞黨幹部は依然として之を遮きり止めてゐる。これは根本的には、彼等の統一戰線に關する徹底的

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に誤つた思想から出るのである。

（五）日勞黨幹部の統一戰線の本質的否定

同じ日勞黨機關紙は同黨幹部が統一戰線の戰術の本質的否定者であるのを明かにしてゐる。彼等は「諸國の共產黨に共同戰線（統一戰線を指す、筆者）を唯一の武器として他の無產政黨の撹亂を策してゐる」「事實上、それは分裂撹亂の手段に外ならぬ」と書いてゐる。從來、左翼を共產黨呼はりすることは民衆黨、農民黨などが警察の氣に入るために濫發した文句であつたが、日勞黨幹部はもつと根本的に理論的にこのマルクス主義的戰術を否定するらしい。

統一戰線の戰術は、大多數の勞働者がまだ改良主義に捉はれてゐること、勞働階級が資本の攻勢の前に守勢に陷つてゐること等の歷史的事情の下に生れたのであり、かゝる段階における大衆動員の形式であつて、階級鬪爭のすべての段階を通ずる形式でない。統一戰線は日勞黨幹部の考ふる如く永久不變の戰術でなく、また平和的進化的戰術でもない。今日、吾國においては勞働者、農民、無產小市民等、いはゆる勞働人民が一樣に、、、壓迫の下にあり且つそれ〳〵の反抗に立ちあがつてゐる。そこに統一戰線の一般的な基礎があり、條件があり、必要がある。プロレタリアートは其歷史的な決定的鬪、、を準備するために、上記の見地を以てする統一戰線の戰術に依つて、この全勞働人民の鬪爭力を結成せねばならないのだ。歷史性を見ざる、また戰鬪性を見ざる、漫然たる統一主義ではいけないのだ。日勞黨は「共產黨の共同戰線」と「我黨の統一主義」とを對立させてゐる。これを本質的に言ひ換へると、戰鬪的な統一戰線と漫然たる平和的統一主義との對立といふことになるのだ。

私は日勞黨の幹部に勞働者諸氏のなかに知人が少くないに拘らず、いつも非難を續けることを遺憾とするが、根本的な意見の相違のとりさられない以上、やむを得ないのである。

（六）共同鬪爭を通ずるあるのみ

上記の如く、兩黨の指導精神は益々背反してゆくが、それにも拘らず兩黨合同の具體的條件――大衆相互の接近――は益々成熟してきてゐる。兩黨が合同して戰鬪的な階級的單一政黨を形成することを希望する者の眞實の任務は何か？　それはかゝる具體的條件を益々發展させ、具體的な鬪爭題目について具體的に共同鬪爭を重ねてゆくことに在る。府縣會選擧後の今日、第五十四議會のさし迫つた今日、その解決を促してゐる無數の現實的な大衆的鬪爭の具體問題がある。統一戰線は大衆の鬪爭の實踐を通じてのみ確保されるのであり、明確な行動綱領と大衆の實踐とを通じない一般的協約は意味を成さない。今日、わが勞働者農民の眼前には、第五十四反動議會の解散要求、選擧法の徹底的改正、言論集會出版結社の自由、人身の保護の要求、團結權、罷業權、耕作權の獲得、對支非干涉等、重大な共同鬪爭の政治的課題がある。

共同鬪爭は共同鬪爭だけで止まるものでない。大衆の共同鬪爭に基礎をおく統一戰線の實踐を重ねてゆくにつれて、そこから直ちに合同問題が發展し解決され得るのだ。具體的な合同の諸政治問題について

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の兩黨の眞摯な共同鬪爭に依つてのみ、合同問題が急速に解決に向ふのだ。

既に地方では屢々、共同鬪爭が自然發生的に行はれ共同鬪爭委員會の形すら採つてゐる。これを全國的規模に推し進めてこそ、兩黨の合同問題の具體的條件が完成する。

（七）宗派主義について

堺利彥氏は最近、從來にない激越な口調で勞農黨左翼分子の分派主義、宗派主義なるものを非難して居られる。

第一に一般的問題として宗派主義が禍害であるのは言ふまでもない。だがレーニンが「吾々は一定程度において宗派主義者でありプランキストである」と言つたことを回想する必要がある。レーニンはこの言葉を使つて、ダラシなき無原則主義に對抗して原則的純潔を確保せねばならぬことや、反日和見主義を以て直ちに宗派主義と難じ去るデマゴギーの俗惡性を語つたのである。堺氏はこのレーニン的意味の宗派主義まで否定されたのであるまいと考へる。

第二に堺氏は勞農黨の左翼分子が一般的意味の宗派主義にかたまつてゐると言はれるのであらうか？ それなら誤りだ。左翼分子の中には、嘗ていわゆる結合の前の分離、また理論鬪爭なるものを機械的に解して過失を演じたことが少くなかつた。だが黨、組合其他の實踐に於いてゐる若い左翼分子は既に此過失から脫却し、實際的活動においても理論的把握力においてもわが無產階級の強い要素となりつゝある。吾々はこゝでもレーニンが戰後のイタリーの社會主義運動の急激

た發展の場合において、セクチに反對し、無經驗で、多少の過失を犯すことがあつても若い黨員の殖えたことを祝福してゐるのを回想し度いとおもふ。

勞農黨の政治局の人々が兩黨合同の妨害者だといふ批評を屢々きく。しかし事實上、今日では彼等こそ戰鬪的統一戰線の眞實の主張者だと考へられる。

兩黨合同の具體的條件の急速に成熟しつつあるは上述の如し。支配階級の攻勢が激しくなるにつれて大衆的鬪爭も激化し、これにつれて、戰鬪的統一戰線の條件と必要とは愈々大きくなつてゆくであらう。この契機を最も忠實に把握し發展させ、これを最も合理的な形態にまとめ上げるのが眞實のプロレタリア政治家の任務だ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

合同への途

淺野晃

一

所謂ゆる折衷主義の諸君ならびに雜誌『大衆』一派の諸君は、日勞黨と勞農黨との『無條件合同』論を掲げて、今やはじめて『理論鬪爭』の段階に突入しつゝある。しかも、これらの諸君は、勞農黨が幾度となく日勞黨に對して試みた共同鬪爭の提議が、いつも日勞黨幹部によつて拒否された事については、愼重に口を緘してゐる。

私はいま手許に去る六、七日の勞農黨第三回中央執行委員會で承認された常任中央執行委員會報告要綱を持つてゐる。それは、本年一月十六日以降の報告であるが、それから日勞黨への共同鬪爭の提議だけを取り出して見ると、次の如き數回の提議がなされてゐる。

一、惡法案反對運動に關する件（各無産政黨に共同戰線提唱）
二、對支非干渉運動に關する件（社民、日勞との間に對策委員會設置提議）
三、鐵道從業員彈壓馘首反對委員會に積極的に參加し更らに各支部へ應援委員會組織の再指令を發する件（日勞黨へ共同戰線を申込むこと）
四、京都學生事件に對し各地方批判演說會を開き治安維持法の正體を曝露し、黨本部としても演說會を計畫し、檢事の論告につき聲明書を發表すること（但し日勞黨との共同聲明を出すこと）
五、議會解散運動に關し、日勞黨と共同委員會設置の件
六、社會民衆黨排擊の共同委員會設置を日勞黨に提議する件
七、失業反對運動に關する件（各無産團體協議會提唱）
八、五法律獲得運動に關する件（日勞黨に對し共同戰線を申し込むこと）
九、九月一日震災紀念日對策の件（社民、日勞と共同主催の演說會を開くこと）
十、日勞黨に對して共同戰線を申込む件
（イ、所謂朝鮮共産黨事件、ロ、農民團體協議會に關して、ハ、檢閱制度改正期成同盟への參加、ニ、ロシア革命十週年紀念に關して）

勞農黨が日勞黨に對して試みたこれらの共同鬪爭の提議は、事毎に日勞黨幹部の拒否するところとなつてゐる。（たゞ一回だけ對支非干渉運動に關して共同主催の演說會が行はれたが。この始末については勞農

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

黨リーフレツト――『日勞黨との協同戰線の意義』――を參照）さうして謂はゆる『無條件合同』論の諸君は、このことに關して恐らくは故意の沈默をまもつてゐるのである。

二

日勞黨機關紙の最近號は、勞農黨よりの共同鬪爭の提議に應ふるに、一の注目すべき回答文を以てしてゐる。この回答文は『今や無產階級の政治的戰線の統一を確立しなければならぬ』といふ全たく正しい要求――それは、けだし、今や日勞黨六萬（いな、全日本の勞働者、農民大衆）の熾烈なる要求なのだ――から出發して次の如き奇怪な結論に到達してゐる。曰く、――『今回の共同戰線の提唱も、在來の範疇を脫却せざるものと認むるが故に拒絕す』と。では『在來の範疇』とは何であるのか。日勞黨幹部――けだし、此の回答文たるや、固より明かに幹部諸君の回答文であつて、大衆諸君の意思はそこに毫末も代表されては居らぬ――の解するところによれば、それは、『勞農黨の共同戰線論は明白に戰線攪亂策である』と云ふことなのだ。これは國際日和見主義勞働幹部の陣列から、左翼に對して一齊に放たれてゐるかの無力な誹謗、中傷、と全たく同じものである。例へば、オーストリアの日和見主義者フレデリック・アドラーによれば、『マキアベル以後、共同戰線論者のやり方ほど卑劣なものは歷史上これを見ない。それは無產階級をば、その意志に反し、その良心に反して、コミユニズムの仕事のために利用せんとするもの』なのだ。

しかるに右回答文において、日勞黨幹部諸君はつゞいて曰ふ、――『當面は統一主義の立場から今やかくの如き共同戰線の意義を大衆に暴露し、大衆が、何れを支持するか大衆の判斷に訴へんとするものである』と。之は首尾一貫してゐない。何故ならば共同鬪爭の展開のみがよく大衆への『暴露』や、大衆の『判斷』を有効に結果するであらうから。從つて我々は次のやうに考へざるを得ない。即ち共同鬪爭に對するかゝる非難は、それが明かに彼等にとつて不利な條件をつくり出すと云ふことに基づくものである、と云ふことを。

三

政治戰線への勞農大衆の進出の目ざましきものある中に、特に日勞黨大衆は急速な成長をとげた。だから大衆の戰線統一への要求は、かゝる成長、進出の必然的な結果であり、それの直接の發展である。こゝに我々は從來、戰線統一についてマルクス主義者のとつた戰術の正當なりしこと、それは今や、かゝる大衆の成長進出に應じて、展開の新たなる段階につき進まねばならぬことを看取する。私はこの意味において、過日の勞農黨中央執行委員會が發表した次の聲明書を重要視するものである。

『近時、、、、、の强壓の益々、、を極めるに對し、全日本の抑壓されたる民衆はいよいよ熾烈に政治的自由を求め、强固なる統一戰線を以て、あくまで鬪爭せんとする決意を表明するにいたつた。わが黨が政治的自由の旗を高くかゝげ、この目標への鬪爭のために絕えず政治戰線の統一に努力し來つたのはかゝる大衆の要求を眞に正しく代表することをわが黨の光輝ある使命と信ずるからである。故にわが黨は二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つの目標獲得のための大衆闘爭の展開につとめると共に、諸他無產政黨の大衆諸君との共同闘爭の現實に専心して來たのである。いまや抑壓は益々來り加り、目ざましき成長を示しつゝある他黨大衆諸君は、自由を求めて闘はんがために、政治戰線の統一を猛烈に要求するにいたつた。この要求たるや、もとより誤れる指導精神のよく代表し得ざるところであり、また他黨幹部のよく阻止し得ざるところである。

第三回中央勞働農民黨執行委員會は、これら大衆諸君の要求を支持し、大衆的闘爭をより强大に展開せんがために、いやしくも政治的自由獲得のために戰はんとする意志を有する黨とは、障礙を排して、協力提携に努力することをこゝに重ねて闡明する。

日和見主義の諸君は、『外からの攻撃』を排して『内からの攻撃を力說する。『内からの攻撃』のために先づ、無條件即時合同が必要である。と云ふのだ。これらの論者の根本的誤謬は、――『内から』と『外から』との抽象的、機械的對立はしばらくおくも――階級的協同戰線黨の本質、從つてまたその發展過程を正當に認識し得ざるところにある。

――一九二七、一一、九――

合同問題に關聯して

青野季吉

合同、統一が差詰め問題になり得るのは、政治運動の上では勞農黨と日勞黨のそれであり、組合運動の上ではその兩黨の背後にある勞働組合、農民組合間のそれである。

現在、この合同問題、統一問題が日程に上りかけてゐるやうであるが、先づ考へておかねばならぬのは、今日の契機にこれが何故、無產階級運動の日程に上りかけて來たか、である。

こゝにすぐ無條件に思ひ浮ぶことは、最近の縣議選擧を頂點として、それまでに重ねられて來た運動の實踐的結果である。この實踐的結果による批判の具體化されたものが、合同問題、統一問題の最近の擡頭であると見るのは、大して間違ひではないと思ふ。實踐はあらゆる空想的なもの、あらゆる觀念的當爲的なものを批判して、現實的なものを暴露しないではおかないのである。

その暴露された現實に立つて見るとき、こゝに合同問題・統一問題が當然日程に上らなければならない理由がある。

私は今日の日本の無產階級運動の陣營を、明らかに混亂してゐると觀てゐる。その點では、コミンテルンの評語『日本の勞働運動におけ

る現在の支離滅裂が、正しい觀方であると考へる。だが、この觀方は、今日、日本に於ける所謂る『マルクス主義的に思考する個性』等の宗派の觀方とは、絕對に相容れぬものである。彼等は、我々に反して而してコミンテルンに反して、この混亂や支離滅裂を現實の姿のまゝに受け納れず、「內的必然」の否認を抽き出して「分離結合」の神秘を振りまはして、それは當然の狀態であると言ふ。

この無產階級運動におけるロマンサンスムは、實踐の批判によつて、それがロマンスであること、客觀化されない主觀の狂舞に過ぎないことが、手痛く暴露された。そこで無產階級運動におけるリアリズムが前景に步み出たのである。合同問題・統一問題は「自己」の實踐上の分離政策を見透し得ないロマシチツケル等の眼には、一片の折衷的當爲としか映らないかも知れない。だが、それは尠くとも實踐が口授した當爲である。

實踐の力は酷く強い。だから『マルクス主義的に思考する個性』等の宗派でさへも、今日、積極的には合同・統一に反對してゐるわけではない。否、反對出來なくなつてゐる。そこで『戰鬪的統一』と言つたごまかしを案出して、その合同や統一に、飽までも宗派的扮飾を施さうと焦慮してゐる。

から云ふ藥當を骨の折れるまでつゞけて見たつて、眞の合同や統一の生れて來ないのは、夢をいくら重ねたつて現實の生れて來ないのと同然である。

合同や統一の實踐にとつて、一方の障害は確かに宗派的精神であるが、他方にそれと同じ位に、乃至はそれ以上に障害となるのは、狹隘な自然發生的の組合心理である。この二つは實は同じものの二つのそれぞれの尖端であり、マルクス主義が常にそれと戰はねばならぬものであるが、それはこゝに說かない。とにかくこの實踐上において常に分離に結果するところの、二つの精神を克服しなくては、合同や統一の實踐は、その正しい過程をとつて進み得ない。

最近、合同問題や統一問題が無產階級運動の日程にのぼりかけて來て、それが實際或る人の言葉のやうに、「澎湃」として大衆の間に滲透して來てゐるならば、それは大衆が實踐の批判を反映して、合同・統一にたいする右の二つの反動精神を批判しかけて來てゐるのだと觀てよいであらう。これこそ言ふところの內的必然である。

合同・統一は、いかなる過程をとつて、いかなる條件の下に實現さるべきであるか？　またされるであらうか？　その具體的政策として勞農黨の提唱してゐる『共同鬪爭委員會』の意義が、一部の間に高調されてゐる。だが、合同・統一の根本を確立しないで、たゞ表面だけの共同戰線、共同動作、何々協定と手を代へ品を代へして見たところで、合同・統一へ一步も前進しないのは、これまでの經驗が示してゐる。

合同問題・統一問題の今日は、そんな堂々めぐりでなしに合同　統一を眞正面から問題にして來て、それが卽時實現の具體的な行動に出づべき時だと、私は考へる。

（一一・九）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

維新回天史

——『改造』正月號より連載——

德富蘇峰

蘇峰學人の維新史に於ける知識と眼識とは天下已に定論あり。我誌は學人に請ふて、其の近業「維新回天史の一面、久邇宮朝彦親王を中心としての考察」を得、之が約一個年に亘りて連載せんとす。久邇宮朝彦親王は、御當代皇后陛下の祖父君に在して、孝明天皇の最も信頼ありとせられたる親王の御一人なりき。

親王は當時維新中興の大塔宮と中外より稱せられ給へり。然も親王は上は孝明天皇の聖旨を遵奉し、下は中正穩健と稱せられたる諸公卿諸武家と戮協し危局を拾收せんとし給ひしが、不幸にして孝明天皇の崩御となり政局一轉武力解決の止むなきに至り、單に自ら失敗者の地に擠され給ふのみならず、無實の寃罪の爲に廣島に流竄せられ給へり。然も明治天皇の聖明によりてやがて天日の昭なるを拜し、其の晩年を世道人心の爲めに盡し平和と幸福とを以て其の天壽を終へ給へり。要するに親王の御一代は維新回天史と始終して分離す可らず。而して親王を中心として觀察する維新史は三條岩倉若しくは西郷大久保木戸等の諸元勳を中心として觀察するものと、自から其の角度を殊にす。而して我が蘇峰學人の考察が果して何物を維新史研究の上に齎らし來る可き乎、姑らく本文に就て之を徴せよ。

但だ學人の使用するものは、概ね根本資料にして、世間の容易に得難き秘庫より出で來りたるものなることは言を俟たず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

昭和職人歌　六番

釋迢空

一番

左　さんか

山住みの心安さよ。ぬすみ來し里の鷄（カケロ）も、痩せて居にけり

右　木地屋

山の木のともしきを思ふ。たまさかの轆轤（ヒャレ）のおとに、心澄みつゝ

二番

左　學者

かへりみて、紙魚（シミ）のすみかも馴れにけり。六十（ムソヂ）の髭（ヒゲ）は、黄（キ）にかはりぬる

右　軍人

町の子の大刀（タチ）ふり遊び見るさへに、世は靜けさに、倦みにけらしも

三番

左　演歌師

はやされて、てのゑうたひとあらむ我(ワレ)　あはれ夢の世を　身もてうたはむ

右　辻碁うち

東京をせましとぞ思ふ。すくなくも、賭(カ)け碁(ゴ)の錢は、へらざりにけり

四番

左　ゑいとれず

くちびるに、色ある酒も冷えにけり。頬(ホホ)にまさぐれば、髪(カミ)のみぢかさ

右　女役者

父知らず　我が子も生(オ)ひて、聲よろし。このさびしさは、泣きがたきかも

五番

左　朝鮮人足

ふる國(クニ)も　こゝも住みよし。妻も　子も、人のそしりに安けき　見れば

右　支那あきんど

やき物をつがせむとする　聲もなし。けたゝましくも　犬は、吠えたちにけり

六番

左　壯士

かにかくに　世はたのしもよ。大刀(タチ)ふりて、大路(オホヂ)に舞へば、人さまたげず

右　だんさあ

かにかくに　身のたのしさよ。ゆらゆらに　うき世の渦(ウヅ)は、わが手より捲く

故(ふる)葉(かしは)

室生犀星

夕餉前しまし讀まなむ文ありて机によれば落着きにけり

乾干びし胡瓜の臺に風立ちて裏山(やま)の明るみ日にしろきかな

葱畑の畦に溜りて降りやまぬ永雨(ゐめ)の光ぞ寂くなりけり

山家なる軒にうごかぬ白雲をまさしくは見る碓氷ねの上

雜草(あらくさ)の中の胡瓜のこぼれだね蔓引きければ胡瓜さがれり

荒松の音(と)にづる聴けば山中の道の途絶えつ歸へり來にけり

古家の夜半の襖にかすかなる羽根掻きてゐるいなごを見たり

豆畑の豆の莢をばゆりゐしにつやつやし豆のまろび出にけり

庭

さ庭べにむら立つ竹のさむざむと光るを見ればば月はありけり

庵一つ

庵一つ稲木の底となりにけり　西山泊雲

たてゝすぐ掛けはじめたる稲木かな　同

横縦と選ぶ日向や稲木立つ　同

草紅葉みな草臥れて坐りゐる　池内たけし

コスモスの家とさながら申すべし　同

人形を拵へてゐる菊のあり　同

蟷螂や夕日の枝にとまりたる　鈴木花蓑

十六夜や水神の森はだかれる　同

稲雀わたり消えけり筑波山　同

奥紅葉端山芒にかくれぬる　水原秋櫻子

渡り鳥赤城も見ゆる雲間より　同

龍膽も落葉もぬれて露寒し　同

草枯れて尚鳴く虫のありにけり　高野素十

大簗に遊びし秋の一日かな　同

傾きて大なる葉の破れ蓮　同

枯萩を刈りたる事も淋しさよ　高濱虚子

松の間に薄き紅葉の御寺かな　同

二上山の面に入りぬ蘆の水　同

凡愚列傳

長谷川如是閑

ある男爵家の系圖

實業家、平櫛男爵家の當主平櫛團二郎を中心とする一團の血縁的集團の列傳を書く人は、恐らく、日本の社會的分業のあらゆる方面に亘る人々について記すことになるであらう。

ある好事家は、平櫛家の系圖を、その表面の家系圖によらずに、實際の血縁によつて作り出さうとしたが、その關係が餘りに錯雜してゐるのでそれを作つて見ると、各人から各人への線が複雜なラヂオセットの配線以上に混線して、一目瞭然たらしめる筈の系圖が、却つてこぐらかつた糸のやうになるので、その製圖を中止したといふ位である。

いま平櫛家の系譜樹の根幹たる當主平櫛團二郎に比較的近い枝葉だけについて列記して見ても次のやうにヴアライテイーに富んでゐる。

平櫛兵吾（元農）當主團二郎男爵の實父で、鳥越家といふ農家から出て平櫛家の養子となつた。養家は株屋であつたが、兵吾はいろ〳〵た事業に成功し、平櫛商事會社と平櫛銀行と平櫛信託とは、相場面の六號に屢々實業家を『席捲』したと評された。死にかゝつて男爵になつたが、不思議に生き返つて何年か生きた男爵でゐた。

鳥越馬治（八百屋）平櫛兵吾の實家の主人で兵吾の兄だ。早く死んだが、東京近くの郷里から出て來て八百屋になつて、死ぬまで天秤棒をかついでゐた。自から『精進の喜八郎』と稱して、得意廻りをしながら、弟を罵倒するのを賣物にしてゐた。『兵吾の野郎、しめへには男爵だツぺ。大阪「俄」の殿樣が出來上るべい。』などといつてゐたが、その通り男爵になつたが、大阪俄のそれとは甚だ異つた文明の貴族になつた兵吾を見ずに死んでしまつた。

鳥越一太（重役）馬治の忰で、鳥越家の當主だ。平櫛商事會社の重役だが、本職は郷里で鷄を飼つてゐる。

平櫛春（元師匠）平櫛兵吾の妾で當代の男爵の養母である。元は一中節の師匠であつた。平櫛家の夫人になつて間もなく死んで、生きた男爵夫人にはならずにしまつた。

富谷恭（洋畫家）平櫛春の實子で、春の前の旦那の子である。平櫛家をパトロンとして、その海外美術品購入顧問で、度々フランスに往復

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する。

江島保（宮中顧問官）富谷春の旦那の一人で、富谷恭の實父である。大臣にならないだけで、書記官、參事官、局長、知事、次官等あらゆる官職を經て、宮中顧問官で死んだ。死ぬ時男爵になるといふ説で、喪を秘して待つてゐる間に、內閣が代つておヂャンになつた。

富谷新助（周旋業）春の實父で、所謂何でも屋だつたが、春が平櫛夫人になつてから間もなく酒を飲み過ぎて死んだ。『お父ッさんが死んでホッとした。生きてゐられたら、私は慘め見なきやならない。』と春はある時腹心の婆やにさういつた。

江島泰（音樂家）保の長男で音樂學校にゐたが中途退學して『研究』中と稱してから二十年以上になるが、演奏會に一つ出たこともない。いゝ歳をして、背中に帶のついた背廣で、オールバックの頭をいかなる演奏會にも見せないことはない。がいつもしまひまで居たことはない。富谷恭の異腹の兄だが、常に小使をせびるので恭に嫌はれてゐる。

玉井しま（元藝者）平櫛兵吾の妾で、當代の團二郎男の生母である。どこの藝者であつたか無論わかつてゐるのだが、かつてそれを誰れにもいはぬ。餘り香ばしくない場所の出だからだらうといふがさうでもないらしく、つまり男爵家の當主の生母として、元の職業のことはおくびにも出さぬこと數十年に及んでゐるのだ。平櫛兵吾の前の夫人卽ちお春が死んだ時に、籍を入れるやうに兵吾はすゝめたが、その時丁度兵吾が男爵になつたので、しまは男爵家ともあらうものが、前の夫人も次の夫人も水商賣とあつては、面目にかゝわる、それよりも、第一皇室に對して畏れ多い、と藝者のいひ相もないことを主張して斷然辭退した。が實をいふと、男爵夫人になつた日には、自分の一家親類がいゝ事にして集つて來てせびり立てるのが遣り切れないこと殷鑑遠からずお春夫人にありといふので、自から日蔭者に甘んじてゐるのだといふ話だが、どつちにしても感心な女だといふ評判である。だから當代の團二郎はしまの私生兒で兵吾の養子として男爵家をついだやうに事情通はいふが、然し、戶籍面では、團二郎はいつの間にか、兵吾の前夫人春の實子になつてゐるのだ。

玉井はぎ（元待合女將）男爵の生母しまの養母。有名な待合の女將で、先代兵吾との關係を噂はれてゐたが、いつの間にか養女が身代りになつた。今は平櫛家の扶養をうけてゐるが、自分で『世襲財産』と稱してゐる家作が澤山にある。

來島福三（元博徒）玉井はぎの內緣の亭主。人夫請負業といふ名目の『ばくちうち』だが、所謂顏役になるまでの柄でなく、『女將の油蟲』と呼ばれてゐた。後にはすつかり改心して、くり〳〵坊主になつて、常に『南無妙法蓮華經』を唱へてゐたが、結局よいよいになつて生きてゐる。

品田けい（おでんや）男爵當代の祖母で、しまの生母。然し『娘を人に呉れてやつた以上は、その子が華族にならうと泥棒にならうとこつちの知つたことではない』といつて、決して男爵家に出入しない。『もう歳も歳だからおでんやだけはよしておくれな。』としまがいふたびに『べら棒め、こちとらにはおでんやをしなきや何の商賣が出來る。此の歳までこの商賣のお蔭でご飯をいたゞいてゐたのだ。おでんや〳〵

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、何でおでんやが悪いのだい。』と男のやうな啖呵を切つて、曲つた腰で、屋臺店を押してゐる。

品田傳助（元旅役者）けいの亭主即ち當代男爵の祖父。旅役者を喰ひつめて、娘を賣り飛ばしてその金をもつて、女房をすて、行衞不明になつてしまつた。いまに生死はわからないが、一說には、關西で相應な『ひき屋』（家を引張る商賣）をしてゐたといふことだ。

品田信太郎（元巡査）傳助の總領、即ち男爵の叔父。母のけいと喧嘩して母の所に寄り付かない。豆腐屋のかつぎになつたり、巡査になつたり、檢番の書記になつたりしてゐたが、子供が活版職工になつたので、その厄介になつて、時々妹のしま即ち男爵生母をせびりに行く。

品田源治（紙屑屋）男爵の叔父で、信太郎の弟。晝は紙屑屋で夜はけいのおでん屋を手傳つてゐる。母の眞似をして決して姪の男爵生母の所へも男爵家へも出入しない。『あすこらの屑をもらつてら一軒切りの得意で立派にやつて行けるのだが、こいつばつかりやご免だ。』『しまの奴、何てへとおでんやだの紙屑屋だのつてぐづ〳〵いやがるが、そんなら俺達がおでんやも紙屑屋もやめて、居候であすこへ乘り込んだら穢な面する氣遣へはねへ。』などといふが、また『しまの奴もおっ母アに似てちつとはつむじ曲りだぜ。戸籍を入れろつて言はれたのに、ひツ斷りやがつてよ。あの時入れとけば、今ぢやご後室樣で收まつてゐられるのに、慾のねへ女だぜ。』などゝもいふ。

藪小路伯爵（准元老）男爵當主團二郎の夫人の父。公爵華族で外交官出身。

次男は實業界の巨頭××家の養子となり、平櫛男爵夫人となつたはその八女である。男六人女十人の子持だが、その子等の母は五人ともいひ又六人ともいふ。母の職業は、それ〴〵伯爵夫人、藝者、女中頭、平女中、看護婦等で、疑問の一人は女流音樂家だといひ、又は女流教育家だともいひ、或は外交官夫人だといひ、甚だしいのは大使時代に於けるフランスの婦人だといふが、これは子供のうちの一人の眼色から來た風說に過ぎないとのことである。

平櫛初江（伯爵令孃）藪小路伯の八女で團二郎男の夫人。フランスに留學して、語學、音樂、手藝等に通じてゐるが、平櫛家と婚約後に平櫛家の費用で留學したといふことである。その姉妹は、それ〴〵○族、華族、外交官、實業家、新聞社長、軍人、大地主等に嫁し又は養女に行つてゐる。然し男の兄弟は、實業家へ養子に行つた次男が大實業家の男爵社長になつてゐる外、五人とも、何にもなつてゐない。尤も一人は生物學を研究し、一人は印紙の蒐集家で、一人は厭世詩人と稱し、一人は園藝家と稱し、他の二人は文化住宅を作らせた。

峰河三郎（醫學博士）男爵家の先代兵吾の最初の妾の前の旦那の子。その旦那が死んだので、三郎の母は、兵吾の妾になつたのだが、その後間もなくその女も死んだ。三郎博士はその時まで乳飲子だつたが、兵吾男の夫人お春の養母に預けられて十四五までその手で育てられた。その後平櫛家の世話で出入の醫師峰河老人の養子になつて、今は有名な峰河病院の院長である。その堂々たる病院の建築は平櫛家の出資にかゝるといふことである。三郎博士の父の何人たるかは、博士自身にもよくわかつてゐないといふことだが、實はわかつてゐるのだともいふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

市野とり（落語家の女房）先代兵吾男の死んだ夫人お春の養母。亭主の落語家が身を投げて死んでから、一中節の師匠をしてゐたが、養女の春が、平櫛家の正夫人になつてからそれをやめた。峰河博士を手しほにかけたので、今は峰河家に引取られ沼津の別莊にゐる。峰河博士の夫人といふのは、大平侯爵の妾腹の令孃だが、恐ろしいヒステリーで、おとりは同家に引取られてひどい目に逢つた。『お春が生きて居たら』とそればかりいつては泣いたが、この頃何うした加減か夫人の病氣がすつかり癒つて、時々別莊に來ても『お婆さん〳〵』とちやほやするので、おとりはしきりに薄氣味惡がつて『どつちかゞ死ぬんぢやないか』といつてゐる。

市野軍次（料理職）兵吾男の夫人お春の義理の兄でおとりの實子。小さい頃家出をして、漂泊の末に料理人になつて今は小料理店の料理番になつてゐる。酒癖が惡くて時々平櫛家へあばれ込んで、お春夫人を泣かせた。『あんなのに出られた日には大變だから』とはおしまがどうしても男爵夫人にならなかつた理由の一つであつた。それがため、今日まで平櫛男爵家は、決して男の料理人を雇はぬ家憲になつてゐる。

駒屋定藏（馬丁）先代平櫛夫人お春の實父で、某伯爵家の馬丁だつたが、何かの失敗で、馬丁を罷められて庭掃除に廻はされた不平と、子供を澤山殘して女房に死なれた生活難とで首を縊つて死んだ。

駒屋一助（元植木職）定藏の長男でお春夫人の兄。實直の職人だつたが、お春が平櫛家の夫人になつてから職人をやめて酒飲みになつて平櫛家の居候で酒ばかり飲んでゐる。その他の兄弟も似たりよつたりで、平櫛家に出入してゐるものも鮮いのでこゝには擧げない。

鳥越貞一（村長）兵吾男の實家の本家と稱してゐるが、男爵家ではそれを認めてゐない。よく平櫛家に出入したが『あいつは田舍政治家だ。』と兵吾男は相手にしなかつた。當代になつてからは男爵を子供扱ひにして威張つてゐるが、他の重役連にはペコ〳〵してゐる。自分のことを『此叔父が』といつてゐるが、邸のものからは『ゲジ〳〵親爺』と綽名されてゐる。男爵をつかまへて話すことは昔の自由黨のことばかりだが、頻繁に出入するのは、自由黨の話がしたい爲めではないらしい。

平櫛東兵衛（『本家』）男爵家の北海道の地所部にゐる老人だが、自分の家が平櫛家の本家だといつてゐるので國勢調査の時に誰れかが『本家樣』と老人の職業欄の所へ書いて役所から叱られた。

こんな風に列記したら、系圖は恐らく社會の上下左右に無限に擴大されるのであらう。

然し、平櫛男爵家を中心とする系圖は次第に、上層に凝集する傾向に進んでゐる。八百屋も死に、落語家も死に、博徒も死に、師匠も死に、藝者も死に、馬丁も死に、おでんやも死に、紙屑屋も死に、料理人も死に、……それらの初代的血緣者が平櫛家の系譜樹の枝から、腐つた果實の落ちるやうに、ふり落されると、そこにそれらの階級的容貌から全く離れたロスチヤルド家の貴族的系圖が完成する。

「そこで始めて階級戰が始まる。系圖がこんな風にこんがらかつてゐる時代は、階級的對立の客觀的條件がまだ成立してゐないことを示す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものである。」と村長鳥越貞一の末男で、親父と違つて、自から平梅家の系閥に加はることを忌避してゐると稱してゐる經濟學者鳥越銀之助君はいつてゐる。

穴

ある朝、女中のお秋の部屋になつてゐる納戸の障子に、大の男が大手をふつて通りぬけられ相な大穴があいてゐた。

同じ朝、書生の篠田──無論ひとりもの──の顔に、夫婦喧嘩の跡のやうな蚯蚓腫れが出來てゐた。

家中の人眼は、納戸の障子の穴と篠田の顔の蚯蚓腫れとをその朝直ちに發見したが、それについて何か言ひ出したものは一人もなかつた。

下働きのお房も、今一人の書生の栗原も、障子の大穴と篠田の蚯蚓腫れと納戸に寢起きしてゐるお秋の顔とを通りがゝりにヂロ／＼眺めはするが、何も見ないやうな顔──よりも一層眞面目な顔をして、默り臭つてゐた。

奧方と稱する貞江夫人も楊子を口に銜へながら風呂場へ行きかけに、その障子の大穴を認めて、ばつたり立ち止つたが、いきなり大聲を揚げてこの不思議の現象を問ひ訊すことを咄嗟に思ひ止つて、たゞ凝とその穴を見つめてゐた。そこへ誰れも立ち現はれなかつたので、夫人はたゞ口の中の楊子をぬき出したゞけで、重大な顏付きをして風呂場の方へ行つてしまつた。

この障子の穴について最初に口を利いた人間は、後備陸軍中將男爵宮川新之丞なる、背はやゝ低いが、胸の張つて尻の出た、石油で磨いたやうにギラ／＼した顔の皮の持主である、この家の主人公であた。

男爵が夫人よりも餘程遲れて寢間着のまゝ納戸の傍を通りかゝつた時には、お秋は障子の大穴へ、可なり細かに打ち碎かれたその骨をあてがつて、紙片で接骨術を施してゐる所であつた。

それに眼を止めた男爵は、怪訝な顔をして立ち止つた。

『えらく骨が折れてゐるの？ 何うしたのかい？』

男爵はさういつて、大分白くなつた支那の大官のやうな髯を、掌で鼻の上から撫で下ろした。

その大穴を通りぬけるにやゝ困難を感じさうな立派な體格の後姿を見せてゐたお秋は、男爵の聲に、あわてゝ身體をひねつて『お早うございます』とそこへ座つてお辭儀をすると廊下が一體になつた。

『何うしたのかね？』

男爵は、更めて、さういつて、夫人のやうには容易く風呂場へ行かなかつた。

お秋は眞赤な顏をあげたが、誰でも立てゝゐるやうに、返事もせずにくるりと向ふをむいて、骨繼ぎの作業をつゞけた。

男爵は、それでもしばらくは突つ立つてゐたが、いつまで經つてもお秋が何ともいはないので、頸をひねつて、風呂場の方へ行つてしまつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その日の午後、男爵は、夫人からお秋が暇をとつて出て行くといふことを聴いた。

『何うしたといふかい？　一生でも居りたいやうなことをいつて居つたぢやないかい？　それにまだ一年も經たんうちに暇をとるといふのは？』

『少し事情があるのです。』

夫人は、愛國婦人會の委員會で問題の說明を始める時のやうな口調でさういつた。

『事情ちゆうと？』

『あなた、今朝納戶の障子に大きな穴のあいてゐたのをご覽ぢやないでしたか？』

男爵はもう全くその大穴のことを忘れてゐたのだ。尤も男爵が見た時には、大穴は最早大半――少くとも背だけは――修繕されてゐたので、間ぬけの障子を見た夫人のやうに強い印象を與へられなかつたのだ。

『あれは何かね、障子に大穴が開いとつたのかね？』

『さうです。まるで向ふから此方へ馬でもかけぬけたやうな穴が明いてゐたのですわ。』

『そりや又何うした譯かい？』

『それがお秋のひまを貰ひたいといふ原因なのです。』

『はゝあ、誰れかいたづらをしよつたな。』

男爵は案外敏感だつた。

『アッハッハッハ、誰れかい、それは？　アッハッハッハッハ。』

『笑ひごとぢやございません。』

夫人は凛とした口調でさういつて男爵をたしなめたが、男爵は、手の甲で淚をふきながら笑ひが止まらなかつた。

『困つた方ね。』

『アッハッハ……そいで相手は一體誰れかい？』

『篠田だらうです。』

夫人は苦がり切つて、さういつて男爵をにらみつけた。

『そんなに怖い顏をして睨んだつて、わしは知らんよ。……で障子の大穴といふのは何うしたわけぢやろ？』

『お秋は、今も泣いて訴へるのです。「私の父は西南戰爭で戰死し、夫は日露戰爭で戰死して、云はゞ二代に亙つてお國のため立派な義務をつくしたのですが、その名譽ある軍人の子なり妻なりの私が、何處の馬の骨ともわからないもの丶ためにかやうな辱めをうけるのは殘念に堪へません」とさういつて居たのです。誠に尤も千萬で、私も責任を感じて、平謝りに謝りました。』

『そいはさうぢや。所で障子の大穴は何うしたのかい？』

『あの女はお國で育つたのですが叔父が國で警部をしてゐて、それから柔道を習つたのださうです。その上、小い頃に母を失くして、これも連合を失くしたその叔父の手に育てられたので、まるで男のやうにして生長したのださうです。二十歲前後に聯隊の軍旗祭で將校を相手に柔道の仕合をしたこともあつたさうです。』

『そいは痛快な女ぢや。わしどもの若い時分には　往々そないな女子も居つたものぢや。西鄕どんと相撲つたなんて、恐ろしい女子も居つた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然し當今では、そないのは全く珍らしい女といつてよからう。であの大穴は何うしたのかい？」

將軍の問題は結局大穴である。

「夜中に何者か納戸に忍び込んだものがあるので、お秋は息を殺らして様子を窺つてゐると、近よつて何かいつたのが、篠田の聲だつた相で、お秋はすぐと刎ね起きて取つて投げたら、障子をぶちぬいて廊下へ轉ろげ出してしまつたのださうです。」

「アッハッハッハ。篠田が又頗る意氣地がない奴ぢやな。あやつも萬更ら心得のないこともない筈ぢやに、何うしたもんぢやい。女と侮つてひけをとつたな。アッハッハハアッハッハ。」

「何んですあなた、そんなに面白ろ相にアハアハお笑ひになつて、私は冷汗をかいたぢやありませんか。つまりこの家の風紀問題なのぢやございませんか。」

「風紀問題？　さうぢや、さうぢやとも！。然し痛快な女ぢや。いかさま識格もよいわい。容貌とて相應ぢやらうが。……」

「そんなこと！」

夫人は頗る不機嫌らしく、投げつけるやうにさういつて、言葉をつづけた。

「何しろ、自分の夫の命日には必ず寫眞を飾つて供へ物をしてゐる位の女です。そんな侮辱に會つては何んなに口惜しいでせう。私もこれには慰めやうもありませんから、たゞ謝りました。」

「お前が謝つたので、我慢してつゞいて居るといふたかい？」

「何うしてあなた、何んでも出て行くといつて聽かんのです。で私も、それでは何うも已むを得ないと申しました。」

「已むを得んといつて、それなら、出て行けといふわけかね。」

「さういふ外に致し方がないぢやありませんか。」

男爵は暫らく考へてゐたが、何か思ひついたやうに、然し全く何も思ひついたのではないといふ風でさういつた。

「そいは居るぞ、乾度居るわい。」

「居るぞつて、あなた、もう出て行くといつて仕度をして居るぢやありませんか。」

「いや居る。それほどしつかりとした女が、こないなこと位でへこ垂れるものではない。話のしやう一つで、居るといふわい。」

「私が話したのでは、居るといひませんでした。」

「そいはおぬしが餘り鹿つべらしく應對するので、向ふもちよつと折れ難いのぢや。」

「私は何も鹿つべらしくなどは申しは致しません。」

「それその通り鹿つべらしいではないか、アッハッハッハ。」

「そんなにお笑ひになつたつて、私別にあの女に鹿つべらしい物のいひ方なんかしやいたしません、平謝りに謝りこそしましたが……」

「その平謝りなるもの元來いかんのぢやよ。」

「でも謝るより仕方がないぢやございませんか。つまり宮川家の規律が立たんといふ問題なのですもの……」

「それ、それがいかん、さう杵を嵌んで話して見なさい。乾度居るといふ。」

「私、別に杵杯なんか……」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『まあ今一遍いつて見い。』

『私には出來ません。あなたお自身で仰つてご覧なさい。』

『馬鹿な！　わしが下女風情のことに口が出せますかい。まあおぬしが今一遍いつて見なさい。云つて見いといつたらいつて見い。乾度居るといふわい。』

夫人は不精無精に出ていつた。

それから何十分か經つて、再び男爵の居間に入つて來た夫人は、傳令が戻つて來たやうな口調でいつた。

『居ると申しました。』

『それ見い。居るといふたぢやらうが。それは居るわい。』

『何づれにしても、書生達の風紀問題を考へなければなりませんが、秋はもしつゞいて居ていたゞくなら、爺やと代つて別莊の方のお留守居にしていたゞきたいといつてゐます。』

『なるほど、そいは名案ぢや。早速爺と入れ代らすがよい。』

『でも女一人、あんな所に……』

『いや賊に入られた所で、損害は障子に大穴があく位な所ぢやらう。アツハツハツハ。』

夫人の鹿つべらしい風紀振肅問題も、男爵が相手にならないので、夫人は不平らしく、然し少しも鹿つべらしさを崩さずに肅然と出て行つた。

男爵は再び机に向き直つて、ひろげられた山鹿語類に眼を落すと、『朱子曰。盡己之心而無隱。所謂忠也。』といふ文句が眼へ入つた。

その文句も無論、今の男爵夫人と同じ鹿つべらしさをもつて、男爵の眼の前から消へて行くのであつた。

姓名の祟り

『後室――といふと恐らく北向きの座敷のことだらうと、今の若い人達が考へるであらうやうな名稱で呼ばれてゐる未亡人が今もあることは、男にまだ『殿樣』といふのがあり、婦に『御所樣』といふのがあるのと同じ理窟であるが、その純日本語の後室にしかと對する英語に適應する名稱をもつた娘のあることは、誠に時代の過渡的性質を示してゐる現象であるといはねばならぬ。』

そこまで書いて來て島津は、ペンを止めて、天井を眺めた。彼れは、自分の苗字が、その殿樣なるものによくある苗字であるために此手紙に書うとしてゐるやうな事件も起つたのだといふことを考へて可笑しくなつたのだ。

『俺の苗字はお袋の家の苗字だがお袋と同じ名前の後室があるに違ひない。』と彼は考へた。『島津みつといふのが俺のお袋の名だ。……おみつの方……とでもいふのだらう。島津といつて更らに「みつ」といふのは「つ」が重複するが、恐らく俺のお袋の親共は、自身の姓が島津などゝいふのだといふことを忘れてゐたんだらう。さうだらう、お袋の親父は大工だつたといふから、苗字なんか使つたことはあるまい。喧嘩で懲役に行つた時でも、「被告萬太郎」で濟んだだらうからな。』

そんなことを考へて彼れは書きかけた文章をつゞけることを忘れた

さうして紛へつゞけた。

一然し、俺の親爺はこの由緒のある苗字を利用して山カンを企てた。それは恐らく、自分の苗字が親爺を誘惑したのだらうでなければあの惡ごすい親父が大工の養子なんかに、なる筈はない。「島津義光」又何んだつて俺の親爺の親爺は、自分の子供にこんないかめしい名をつける氣になつたのだらう。俺の親爺の冒險が失敗して監獄で死ぬやうな運命に陷つたのも、元は此の苗字と名の罪だ。

一然し、元來俺の家は根からの土百姓か素町人か又は職人かで、苗字なんかなかつた筈だ。維新の際に苗字をつけることになつた時には、皆村の坊主か神主かにつけて貰つたといふことだが、俺の家の島津なんて姓も坊主か神主かゞつけたのだらう。すると俺の親爺を罪人にしたのはその坊主か神主かの責任だ

「然し、島津といふのが何んでいゝ名なのだらう。それは大名の姓だが、大名といふのは元來何んな商賣だつたのだ。俺の親爺の商賣と根から違つたものぢやなかつた筈だ。たゞ違ふ點は、もつと亂暴で、而も大名はその商賣をしても罪人にならずに大名になつたといふことだけだ。一體大名の名前がいゝ名前か何うか問題だ。「松平」と名乘る惡漢が續々出た時代もあつた。「お茶の水の何とか殺し」とか唄はれた惡漢もその松平の一人だつた。俺の友達には、本物の松平で牢へ行つたのもある。然し、彼奴は痛快な男であつた。喧嘩があると必ず飛び込んで仲裁のふりをしてどつちでも構はず毆り飛ばしたり抛り出したりした。若殿樣の癖に立食が好きで、おでんでもいたり鮨でも燒きとりでも、見ると驅け込んで暖簾に首をつこんで飲んだり食つたりした。俺は彼奴が好きだつた。皆にも好かれた。本物の松平であれなら當り前の人間だと皆さういつた。俺の親爺の僞せの島津より餘つ程いゝ。どつちも監獄へ行つたが結局同じ所へ落ちて行く人間にも善い惡いのあることは、同じ監獄へ入る布片にも、木綿もあり絹布もあるやうなものだ。」

彼れは、そこまで考へて、自分の眼の前にかきかけの手紙のあることに氣がついた。彼れは、自分が最近遭遇したある事件について友達に書いてやらうとしてゐたのだ。

その事件といふのは、彼れのやうな年頃のものにあり勝ちの事柄で、とり立てゝ事件などゝいふほどのことでもないが、場合によつては、それは彼れのやうな若いものゝ心に烈しい惱みを殘す性質のものだつた。然し、彼れの場合はさうでもなかつた。彼れは其の事件を、今ある種をひろつて來た新聞記者がそれを急いで雜報に書くやうな態度でしかもメ切時間に急き立てられたり長さに制限があつたりしないのんきさをもつて、盛に頭の裡の道草を喰ひながら、書いてゐられるのだ。

彼れは漸く再びペンを動かし始めた。

「後室のお姫樣にモダーン・ガール。前關白太政大臣の子に中央執行委員だ。時代がそれだけ一足飛びに飛んだのだ。親は疊の上に履物が三尺も引ずつてゐるおかいどりを着、その娘は、あべこべに足の方が三尺も出てゐるスカートを着るのだから徹底だ。髪の毛に繼足しをして尻の下までぶら下げた親が、手づから娘の髪を散切りにするのだから、武士がその魂を廢刀令によつて斷りすてた以上の急進主義を餘

儀なくされたのだ。

「然し俺は何んでこんなことをいつてゐるのだと君は思ふだらう。が話はこれからだ。

「君は俺が彫刻を習つてゐるといふことを誰れかゝらきいた相だが、その彫刻家を俺は日本一の彫刻家と思つてゐるが、一寸人にその名前をいつても、それは何者だと聞かれる位無名の人間だ。快心の作は皆人にくれてやつて、賣物にするのは、人にも呉れられないといふ屑ばかりだ。然しその屑の方でなければ誰れも買はうとはいはないからさうしてゐるのだと先生はいつてゐる。そんな先生だから俺のやうなものを弟子にしてゐるのだ。

「俺とは何だ。君は俺の極少い友達の一人だが、そいつが俺の職業を知つてはゐまい。俺の本職は下駄の歯入だ。

「俺が下駄の歯入になつたのは、俺の親爺が山カン手段の一つとして鼓の稽古をしたので、家に鼓があつたからではない。俺の偶然間借りした家の老人がそれをやつてゐたので、俺は失職の度にそれの手傳ひをやつてゐるのだ。老人はもう往來を流がして歩るけなくなつたので長屋に看板をかけて注文をとつてゐたのだが、元來中風なので俺や伜が大部分やつてやつたのだ。始めのうちは、入れ代へた歯がすぐぬけたなんて何度尻を喰つたかわからない。伜は鐵工で滅多に失職しないから俺の方が熟練して、全く本職だ。「これならわしが死んでも看板がつゞけられる」と老人は喜んでゐたが、下駄の歯入れの看板を引繼ぐ光榮なんかは下さらない。

「下駄の歯入をして何うして彫刻の稽古なんか出來る？といふだらうか、俺の先生は、俺が下駄の歯入れをやつてゐる間は、月謝なんかは無論とらない上に、何から何まで支給してくれるのだ。皆は俺のことを「歯入れや」と呼んでゐるのだ。それは、俺が時々先生の下駄や弟子共の下駄を持つて來つて入れてやるからだが、皆はそれをうちの老人が入れてゐるのだと思つてゐるのだ。俺はたゞ歯入れやの二階にゐる人間で、實際の歯入れやだとは、誰れも思つてゐないのだ。俺がさういつたつて誰もほんとうにしないのだ。

「先生の所へ通ふ弟子のうちに――といつてもその弟子はほんの五六人だが、そのうち三人が女だ。その女のうちに「後室のモガ」が一人ゐるのだ。此手紙が小説だとすると、ヒロインは即ちその女だ。

「女の姓は案外平凡で羽鳥だ。大名華族でなく、成上りの所謂新華族でなく、その眞中だと皆は云つてゐるが何ういふ段階の華族なのだか俺は知らない。名は貴美子といふのだ。無論、最新式の女だ。踵の高い靴を穿いて、尻を∞形に揺りながら、犬の糞を除けながら歩いてゐるやうな歩きぶりをしてゐることはいふまでもない。

「俺はけれどもその貴美子が嫌ひぢやなかつた。三人の女のうちでは一番好きだつた。外の二人はあんまり當り前の女だ。そんなのを好いた日には世間中の女を皆好かねばならなくなる。貴美子の方でも俺がすきだつた。尤もそれは俺があたり前の男でないからではない。俺は見た所は外の弟子共とちつとも變つてはゐない。たゞ少しばかり汚たないだけだ。のみならず、態々君に斷るまでもないが、俺はこれで中々貪な男だ。口ではいろ〳〵人のいやがるやうなことをいひたがる癖があつて、自分でもよくない癖だと思つてゐるが、それが俺の唯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一の道樂で、それ以外は一般世間の普通の人間の生活の型にはまつてゐるので、たゞその一箇所でだけは道をこしらへてゐるのだ。だから俺を使つた人間は、未だ曾つて不忠實のために俺を失職させたことはない。俺の失職は俺の故でも使ひ手の故でもなく、今日の組織の然らしめるところだ。無論、俺の口の故でもない。俺の使ひ手は、俺の惡口のために俺を放逐する氣になれない位、俺は忠實な使用人なのだ。先生は無論義俠心から——といふのも當つてゐない位、たゞ漫然と、俺を弟子にしてくれてゐるのだが、先生始め外の弟子達も、俺が無月給どころか歯入れの代までとつてゐるのを別に侮蔑もせずに人並に扱つてくれてゐるのは、一つには俺が忠實に、小まめに皆のために働いてやつてゐるせいもあるのだ。君はよく俺のことを口先ばかりの意氣地なしと罵つたが、その口先ばかりの意氣地なしが今俺を生かしてくれてゐるのだ。口先き通りを實行する意氣地があつたら、俺はとうの昔、死刑になつてゐたかも知れない。」

『だから俺が貴美子を好いたのは、彼女が外の女の弟子と變つてゐたからだが、貴美子が俺を好いたのは、俺が外の弟子と變つてゐたからではない。そんなら何うした理由からだ？　といふだらうが、それは人の事だから俺にはわからない。

『貴美子は自分が大變貧乏だと思つてゐるのだ。あんな風をして、ぶら〳〵しながら貧乏と思ふのは訝しいやうだが、然し貧乏といふのは心理だといふ説もあり又相對的のものだから、彼女も實際貧乏人と稱する權利をもつてゐるかも知れない。だからそれはいゝが、彼女の間違ひは、先生の弟子のうちで一番貧乏なのは、自分とこの俺だと考へてゐることだ。

『貴美子がそんな風に考へてゐることを俺が知つたのは、貴美子が俺を愛してゐるといふことを俺に打ち明けた後のことだが、それによつて考へると、貴美子が俺を愛するに到つたのは、二人が貧乏の共同戰線に在るといふことを考へた結果ではなかつたらうかと思ふのだ。

『華族が彫刻を習ふといへば、誰れも道樂としか思はないが、貴美子の動機は全くさうではなく、俺の動機と同じだといふのだ。即ちそれによつて自活する準備だといふのだ。彼女の打ち明けた所によると、羽鳥家はもと男爵だつたが、父の死んだ時に嗣子の相續が遅れたので、男爵は自然消滅になつてしまつてゐるといふことだ。どんな理窟か知らないが、爵位といふのは自然消滅をするものと見へる。又女の子には貰へないものなのだ。男の子なら白痴でも阿呆でも何爵にでもなれるが、女ではどんなに偉らくとも何爵にもなれないのだ相だ。さういへば、女の侯爵も男爵もないやうだ。こいつは女の子だつてちつとも差支ない譯だから呉れてやつてもよさ相なものだが、尤もさうなると、、、、、差支のある理窟はない譯だから、差向き乃木將軍の、などには、、位やらねばならないことになつて一寸困るかも知れない。然し別に困ることもない。、が、、になつたとても誰れも困りはしない。況んや女をやだ。

『然し、貴美子はそれで男爵になり損つた。尤も貴美子はそれにはちつとも困らなかつた。男爵になんか、なつたつて困るものもないが、ならなくても誰れも困りはしない。貴美子の困つたのは、親父が巨額の借金を殘して死んだことだ。彼女の母即ち後家は、それがために日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

分の身の廻りのものさへ賣拂ふといふ始末だつたが、生活が奢侈だつたゝめに、家財を賣拂つた金で借家を立てゝそれで辛うじて生計を立てゝゐるのだ。彼女の貸家は俺の下駄の齒に當る。華族と平民とはそれだけ段違ひだ。

『然し貧乏のサイコロジーは同じだ、寧ろ彼女の方が度が強い。』と彼女もさういつた。サイコロジーなんて餘計なものをなくなせば、彼女は忽ち貧乏ではなくなるが、俺の方は、サイコロジーがなくとも貧乏に變りはないと、俺は彼女にいつてやつた。所が彼女は、それには答へないで、默つて俺の眼と鼻の間をキューッと睨めつけて、その癖、彼女の口元の近くに片えくぼを作つて、そいつをヒクヒクと動かして見せるのだ。俺は脊筋から背筋へかけて虱の大群が全速力でクロッスカントリー・レースをやつてゐるやうに感じて全くぞつとした。

『男といふものは女の眼や口に會ふと、彼女の所謂サイコロジーなんか何處へかケシ飛ばされて、感覺機關が神經中樞を直接に叩きつけてしまうものだ。俺は彼女なんか屁とも思つてはゐない、といふのが俺のサイコロジーだが、彼女に睨みつけられると、俺の感覺機關と神經中樞とは直接交渉をやつて、俺のサイコロジーを除外して俺を慄はせる。その代り彼女の眼や口が俺の視覺から除いてしまうと、俺のサイコロジーは生き返つて「今のは夢か」でおしまひになる。

『然し問題はもつと具體的に發展してしまつたのだ。その後俺は親爺と少しの知り合だつた男が專務をしてゐる商事會社に出るやうになつた。彼女は頻りに「生活問題」を俺に訴へて、その會社の事務員にでも使つて貰ふやうに周旋してくれといふのだ。俺は例の調子で入社早々車輪で働いたので專務の信用を得てゐたから、俺の推薦で貴美子はタイピストとして採用された。その時、專務が貴美子の風采のけばけばしいのを俺に注意したから、俺は貴美子にいつてやつた。

『專務のハゲがさういつたからいふのぢやありません。私がいふのです。そんなつまらない道樂はおやめなさい。喰ふか喰はないかの問題だといふなら、華族も平民もあつたものぢやない。乞食を商賣にするものには態々汚たない着物を着て出るぢやありませんか。われわれだつて一種の乞食だ。貰ひの多いやうな姿をするのが方式です。そんな風をして會社に出て來たつて、眼をつけるやうな奴は引ッかける價値のない奴だ、あべこべに貴女を引ッかける奴です。あなたはそんな姿を見せびらかすつもりだらうが、中期の金收入を身體に貼りつけて自慢してゐるやうなもので、見るものが見ると悲慘です。一體喰うものを何うしてゐるのか疑はれる。まさか女泥棒だらうとは思はれないから、勢ひ無資本の副業をやつてゐる女だと思はれます。』

『さういひかけたら彼女は憤然として立ち上つて、いつも俺の眼と鼻の間を睨むそれとは全く違つた眼付で俺をにらみつけて、そのまゝ給へ歸つてしまつた。俺はすぐと追ひかけて行つて引戾したい氣がしたが相憎用事をいひつけられたのでそのまゝにして、歸りに家へ寄れ行かうとしたが、何うもその所謂後家なるものゝゐるお邸なる所へ入つて行く勇氣がないので抛つて置いた。翌日會社へ出て見ると、彼女は女教師の着るやうな洋裝ですましてゐた。俺も默つてゐたが、人のゐない時に彼女が口を切つた。

『昨日は私どんなに腹を立てたでせう。あんな、お母さんのいふやう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なことを云つて得意になつてゐるのだもの。私全く愛憎がつきてしまつたわ。全くがつかりしてよ。あなたこれからあんな風のことといふのだけはおよしなさいよ。ヘイコラ〳〵働いてゐるのは、我慢して見てゐてあげるけれども、面と向つてあんなことといはれると我慢が出來やしない。私男なら横ッ面張り倒すところだわ。」

『「でもあなた着物を代へたぢやありませんか。」

『「あなたに云はれたからぢやないのよ。私自身でしたのだわ。……あなただつて昨日いつたでせう。「事務のハゲにいはれたのでいふのぢやない、私がいふのだ」だつて。

『さういつて俺の明盲を嗜む彼女の眼付は、もういつもの通りのムッムッさせる奴だつた。

『然し、小説はまだおしまひにはならないのだ。俺はやがて、その後室なるものを見なければならないことになつた。俺は一日事務の家に呼ばれた。免職にしては丁寧過ぎると思つて行つて見ると、事務の奴てんからいやににや〳〵して、俺の一身上のことをきゝたいといつて、親父が死んでから後のことを根掘り葉掘り聞くのだ。まさか俺を重役にして呉れるのではなからう、娘をくれるつもりにしては、奴に女の子はない筈だなどゝ虫のいゝ事を考へてゐると、とう〳〵飛んでもないことをいひ出した。

『この飛んでもないことについて、君始め誰れにも相談も話しもしなかつたのは、やがてまたすぐにその結末を報告せねばならぬことになると思つたから、それを一緒とするつもりで今まで何も報告しなかつた譯だ。

『禿のいひ出したのは、俺に羽鳥家の入婿にならぬかといふことなのだ。だが俺は速座に答へた。俺も島津家の當主だ。廢家して他家へ入婿になることは家に對して相濟まぬ。とさういつたものだ。われながら口は調法なものだと思つた。すると事務は禿を叩いていふのだ。「わしはそれをきゝたかつたのだ。君がそれをいつたのをきいてわしは君の親父に對して罪を犯すことを脫れたといふ氣がする。わしは、はなからそのことを考へてゐたのだ。もし君がそれを云はないで、自分の家のあることなどは忘れた樣に、二つ返事にわしのすゝめを容れたとすれば、わしは、自分の力で此話をぶち壞はすつもりだつた。そんな上調子の男のために骨を折ることは眞平だ。君の親父に對しても相濟まんことになる。」

『くど〳〵とそんなことばかりいつてゐるので俺は癪に障つていつてやつた。「では此お話はこれ切りと心得てよろしうございますか。」

『「何をいふのだ。これ切りでおしまひならば、わしが何で此話を切り出すものか。君の精神はわしが始めから見ぬいてゐたから、その點は君の安心するやうに、島津家の將來の立つやうに、といふ謀はちゃんと考へてゐるのだ。つゞめていへば、羽鳥家の母方の親戚の……えゝと羽山でなし山田でなし……何といつたか、とにかくそこにおつゝけ生れる子供のある相ぢや、それが生れたらそれを貰つて島津家の養子、つまり君の子供にして、然る後、君が分家して羽鳥家に入るのだ。」

『「何とかいふ家なんて、名前も知らないやうな所の子を島津家の後つぎにするのですか？」

『「俺もつまらない揚足をとつたものだ。然し、まさか速座にそれがい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いともいへず、といつて別にいふこともなし、そんな拘泥でもとる外はないのだ。

「それは君、昔は親知らずの貰ひ子などゝいふことさへしたものだ。つまり家を立てるといふのが主で、子供は授かりものといふわけだ。尤もそれが氣に入らんのたらその子はまだ生れんのたから、生れたら誰れか島津家の親戚の家の生兒といふことにして屆け出せば、島津家からついだといふことになる。」

「そんなことが出來るのですか。」

「それは出來るとも、こゝだけの話だが、わしの次男は死んだ妾の子を妻の子にして屆けたのだ。これは別に不正といふことではない。名目だけのことだでの。」専務は資本の融通と子供の融通とを一緒にして濟したものだ。

「一體何處から俺の婿入説が起つたのかと思つたら、例の後室が自から専務を訪問しての頼みだ相だ。専務の話では、後室のいふ所によると、これは貴美子が長い間後室を責め立てゝゐたので、後室も持ちあぐむし、親類一家も大反對で長く悶着してゐたが、貴美子の持久戰が効を奏して、先づ後室が落城し、自から進んで親戚一同を說き伏せて、専務の許に仲介を頼んで來たのださうだ。で専務はいふのだ。

「實はわしも自分の會社の社員同士がかういふことになるのは順當のやうでもあるが、また風紀の關係もあるので、後室にもきゝ糺し外からも手を廻してよく調べたが、先づ風紀の點は心配なしといふころがわかつたので引うけたのだ。君を前に云ふのもをかしいが、調べたところでは、君と貴美子との間には、例の美術家の先生のところでも、一向に訝しい風評もなし、たゞ美しく親密にしてゐたといふことであつたし、永島家の出入のものゝ間にも、貴美子のことについて悪い噂もないやうだし、所謂モダンとしては大出來だとわしも實は感服した譯での。それに貴美子もこの頃は、あの通りヂミな風をして忠實に働いてゐるし、先づ反對すべき理由はないといふので、實は後室にも大丈夫受合ひ勸めてあげるといつて引受けてしまつたのでの。然る後に、事六かしいとあつてはわしの顏もいさゝかつぶれるわけだ。いや何もわしの顏を立てるために何うしてくれといふのではないが、つゞめていへば、快諾してもらひたいのだ。然る後、細いことはいろ〳〵とわしも相談をうける。……」

専務が、いつまでも「然る後」「つゞめていへば」を繰り返すので俺もうるさいから、つゞめて云へば承諾だと答へて、とう〳〵實行に及んだと思つて呉れたまへ。然る後どうなつたかは、今の俺の狀態が說明してゐるが、つゞめていへば失敗だ。

「貴美子も、——實は俺も——その當座は、多少有頂天の氣味だつたが、第一に退屈し始めたのは貴美子だつた。俺は始めから退屈してゐて、たゞ一時少しばかり欠伸の數が減つてゐただけだが、貴美子は、第一に俺の忠實ぶりに閉口し出した。毎日こつ〳〵と會社へ出て、專務にぺこ〳〵頭を下げて、無駄口一つ利かずに機械のやうに働いて、家に歸ると、後室の御機嫌をとつたり、庭掃除をしたり、便所の戸を修繕したり、臺所の三和土の穴を埋めたり、本職の下駄直しをやつたり、そんなことばかりして、夜になると、書物をよむといふので、貴美子のいふ通り、肝心の彼女を全く抛りぱなしにしてゐた。が後室にし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろ便所の扉にしろ三和土の穴にしろ、拋つて置くとこつちに都合がわるいのでそれ〳〵何うにかするのだが、貴美子は拋つて置いても一向差支がないから拋りばなしにして置いたに過ぎない。決して惡意のあつたわけではない。

『「せめて夜だけも話位はしたつていゝぢやありませんか。折角家庭を作たつてこれぢやまるで一緒に御飯をたべるといふだけぢやありませんか。」と貴美子はぶつ〳〵いふが、話をするといつたつて、大抵のことはいままでにいひつくしてゐて、全く新規の交際の新婚夫婦のやうに、何から何まで話し合はぬ間はわけもわからず用が足りないといふやうなことがないので、向ふで問題を作つてくれゝば答もするが、こちから提供する問題は殆んど想ひつかない。然るにその貴美子のもち出す問題がいつもきまつたやうにリージユア・クラスと勞働生活とヒユーマニテイーと婦人問題と文學と藝術と……尤もこれだけでも本にすると數千頁に上る大シリーズとなる可能性があるのだが、それが貴美子の頭を通して口からぬけ出すと、ラヂオのプログラムのやうに平凡で單調で、辭までが金屬性で、悲しくなる。

『「でも私この頃は全く氣分が革命されたわ。勞働〳〵つて口でいつても、やつて見なければ全くその氣持のわからないものね。寄生々活といふものも、それから離れて眺めて見ないと、どんなに不合理な不道德な退屈なものだかつてことはわかりこないわね。だからリージユア・クラスのカルチユアなんてものゝ無意味なことも、そこに入つてゐて何うしてわかるでせう。女の力が何うの地位がどうのつていつたつて、それを自分で攫んだものでなければ、たゞ口にしてゐるといふだけね。ストリンドベルク……ぢやなかつた……ベリーなんかも、女のことをあんなにいふ心持を、私達はたゞ男のヒステリーが女のヒステリーを攻撃してゐるのだと思つてゐたけれども、さういふ女の地位を一寸離れて見て見ると、成程今日までの女にはあゝいふ必然性が與へられるわけだと思はれるわね。尤もそれは半ば男の責任だけれども……私、この頃になつて漸く少しばかり社會の問題の性質がわかつて來たやうな氣がするわ。でもさうなると怖くなつて、今までのやうに勝手な熱が吹けなくなつてしまつたわ。(これは勝手の熱ではないのだ——筆者註)ほんとうに勞働といふものは不思議の力があるものね。でもさういふ勞働を全く離れた人ばかりが——さうして他人にそれをさせてゐる人ばかりが、ヒユーマニテイーなんてことを煩るさくいつてるのは訝しいわね。ヒユーマニテイはリージユアの產物なのでせうか私、ドラマでも小說でもそこへ出て來る人物が退屈して〳〵死ぬほど退屈して煩悶するのに同情したけれども、今から考へると、なぜその人達は寄生々活から飛び出して勞働をしなかつたかといつてやりたくなるわ。そこへ行くとチエホフはやつぱり豪いわね。退屈をテーマにした場合は、屹度勞働の威力をそのうらで暗示してゐるわね。「三人姉妹」でも、あの田舍生活の退屈を嫌つて「モスコーへ〳〵」といつてゐた末の娘が、おしまひには、「働いて〳〵働きぬから」つていつて幕になるのぢやなくつて? 私あの意味が今になつてほんとうにわかる氣がして來たわ。ねえさうぢやない勞働の……」

『そんな風のことを、まるで梅雨時分の雨垂れのやうにつゞけてゐる言葉——といふよりは音響——をきいてゐると、俺は何か重いものを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

貴美子の頭の上に載せて、しばらく彼女をぴしやんこにして置きたいと思はないことはない。時には亂暴至極のこともいひたくなる。

「閑散だの勞働だのっていったって、われ／＼の勞働なんか閑散同然ですよ。時々タイプライターをコツ／＼叩く位、お姫様の琴の稽古の方が餘程の勞働ですよ。私達のペンをもつのが勞働なら鶴嘴を持つのは何です。あなたは一體自惚れてゐる。自分の他所行の衣服一着つくるのに半年の稼ぎをふいにするやうな眞似をしながら、寄生々活を離れたが聞いて呆れますよ。……」

「そんなこと幾度いふのよ。」

「あなたが同じことを幾度でもいつてゐる間は私もいひすよ。勞働をしたのでストリンドベルクもベリーもチエホフもセキスピアもすつかりわかつたなんて押がつよいよ。それなら坪内先生なんかゞセキスピアで一生苦勞する必要はないぢやありませんか。……」

「セキスピアなんて誰れがいひました。」

「チエホフだつて誰れだつて同じです。タイプライターの二つや三つ叩いた位ですつかりわかるドラマや小説があつてたまるものですか。一體「私達」の勞働生活なんていふのがづうづうしい。勞働生活だつて何生活だつて「私達の」なんてものがあるもんですか。あれは私達の勞働生活ではありません。あのハゲ頭のための勞働生活ですよ。だからあいつがもう要らないといへば私達は忽ち勞働生活から閑散生活に逆戻りですよ。泣いたつて笑つたつて私達には何うにもなりはしない。サア又おいでとあのハゲか外のハゲかがいつてくれるまではポカンと口をあいて閑散生活です。たゞその開いた口に牡丹餅どころか米粒も入つて來ない閑散生活だ。ストリンドベルクがベリーになつたつて、腹の足りになりはしません。そんなもので腹をこしらへてゐるのは學校の先生だけだ。あなたはよく勞働を摑んだ摑んだつていふけれども、私達が何うして勞働を摑んでゐます。要らないといへばすぐおつぱなさなければならないで、何が摑めてゐるのです。」

「一つことばかり云はないで下さいよ。」

「一つことはよりいふことはないぢやありませんか。あなたも何か違つたことをいひましたか。私達は毎日々々一つことをしてゐるのだ。何年でも一つ帳面に一つことをかいてゐるのぢやありませんか。あなたのライプラーだつて毎日どんな違つたことを打つてゐます。家に歸つて來たつて、私達の御機嫌を使ふ後室はいつも一つ後室です。その御機嫌の使ひ方も使はれ方も毎日々々一つです。毎日々々私を攻め立てるあなたも毎日々々一つあなたで、その云ふことも毎晩々々一つことです。私達は一つことが出來なくなれば死ぬばかりだ。一つことでもさせて貰つてゐる間は命がつなげるのです。もう、一つことも[illegible]らんでいゝといはれゝば、その日から命が危い。一つことを呪ふた[illegible]て贅澤千萬です。一體あなたは贅澤だ。夜になつて、へト／＼になつてゐる人間をつかまへてヒユーマニテーのリージユア・クラスの[illegible]頭をピン／＼させるのは、ひるまピラミツドの大石を運ばせられてゐる奴隷に夜按摩をさせやうとしてゐる埃及の女王の仕草だ。」

「マアー、私はまたひるの間の苦勞をお互に忘れやうとして、さういふ方面に氣分を轉換する工夫をしてゐるのぢやありませんか。それもいけないといはれゝば私達は全く奴隷ぢやなくつて？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『「あなたの氣分は轉換するかも知れないが、ぬいた毒氣を吹きかけられる相手は堪らない。あなたはまるで、私達が上はつらに浮いてゐる油をよけて底の方へ沈んで行つて靜かな奇麗な水を呑まうとしてゐるのを、油の所まで引づり上げて、ぬら／＼する奴をのめくつて口の中に注ぎ込んでゐるやうなものだ。あなたは社會のギラをひつ掻き廻して、私達にはヘドの出るやうなぬら／＼したいやな感じをたまらなくいゝ氣持だと思つてゐるのです。狐にばかされた奴が肥溜めに飛び込んで溫泉に入つた氣でゐるのと同じだ。あなたのはギラですよ。ストリンドベリー當人でもヒユーマニテイーそのものでも、又それをいつてゐる人達でも、嘘でもほんとうでもとにかくギラそのものでなく、ギラを浮かしてゐるモトなのですよ。あなたのはそのモトでなしにギラその物なのです。私達はモトの水を呑みに苦しんで深い所へもぐつと行くのですよ。それをあなたは上つらのギラを呑ませやうとするのです。自分一人で勝手にのんでゐるのはいゝが少くとも私に呑ませることだけはよして下さい。何うせ私達は、底の方へもぐつて行つてモトを飲むひまも金もないのだから、そんなことはとうの昔にあきらめてゐます。又そんなものも飲んだつて腹のたしにならないから腹のへつてゐる私達は問題にしませんよ。せめてギラだけでも飲まうといふのも人情だが、鰻の香ひだけ嗅いだら益腹がへるでせう。……」

『「譯のわからないことをよくしやべるわね。」

「あなたのしやべるのを防ぐためには、舌の爛れるまでしやべりまト、あの單調な、その癖馬鹿に氣取つた、裁判官がいつまで經つても無罪も有罪もわからない判決文を朗讀してゐるやうな聲をきいてゐる

位なら、一つの唇のつぶれるまで喋舌つてゐる方が余程增しだ。此度あんた聲がきこえたら私は氣がふれるかも知れない。……」

「とう／＼彼女は聲をふるはして泣き出すのだ。でもよく俺がこれだけしやべる間我慢してゐたと感心する位だ。

『「お泣きなさい。お泣きなさい。泣いて泣いて泣きぬいたら、ちつとはわかるやうになるか、まるきりわからなくなるか、何方にしても少しはよくなるでせう。」

『この場合はこれでしまひだが、それが大人氣の芝居のやうにいつまでもくりかへされてゐるのだからかなはない。

『要するに、この結婚は失敗だ。

『然し失敗したのは彼女だ。彼女は、その饒舌の示してゐる通り、勞働への復歸と文化への憧憬との間を行つたり來たりしてゐる振子だ。所が彼女の振子の兩端にある勞働も文化も彼女の振子的運動をどちらか一方へ片よせて彼女をその過渡期の不安から、過去か將來かへ安定せしむる力のない性質のものだ。然しそれは彼女の必然で彼女の失敗ではない。

『彼女の失敗は、俺を彼女と同じ型典のものと見たことだ。然し、俺は、振子ではない。振子だとしても、勞働へも行かれず文化へも行かれず、その中間で動けなくなつてゐる人間だ。もし俺が動き出せたとすると、それは左右へ動かずに前後に動くのだらう。俺はたゞ喰ふためにだけ動いてゐるのだ。

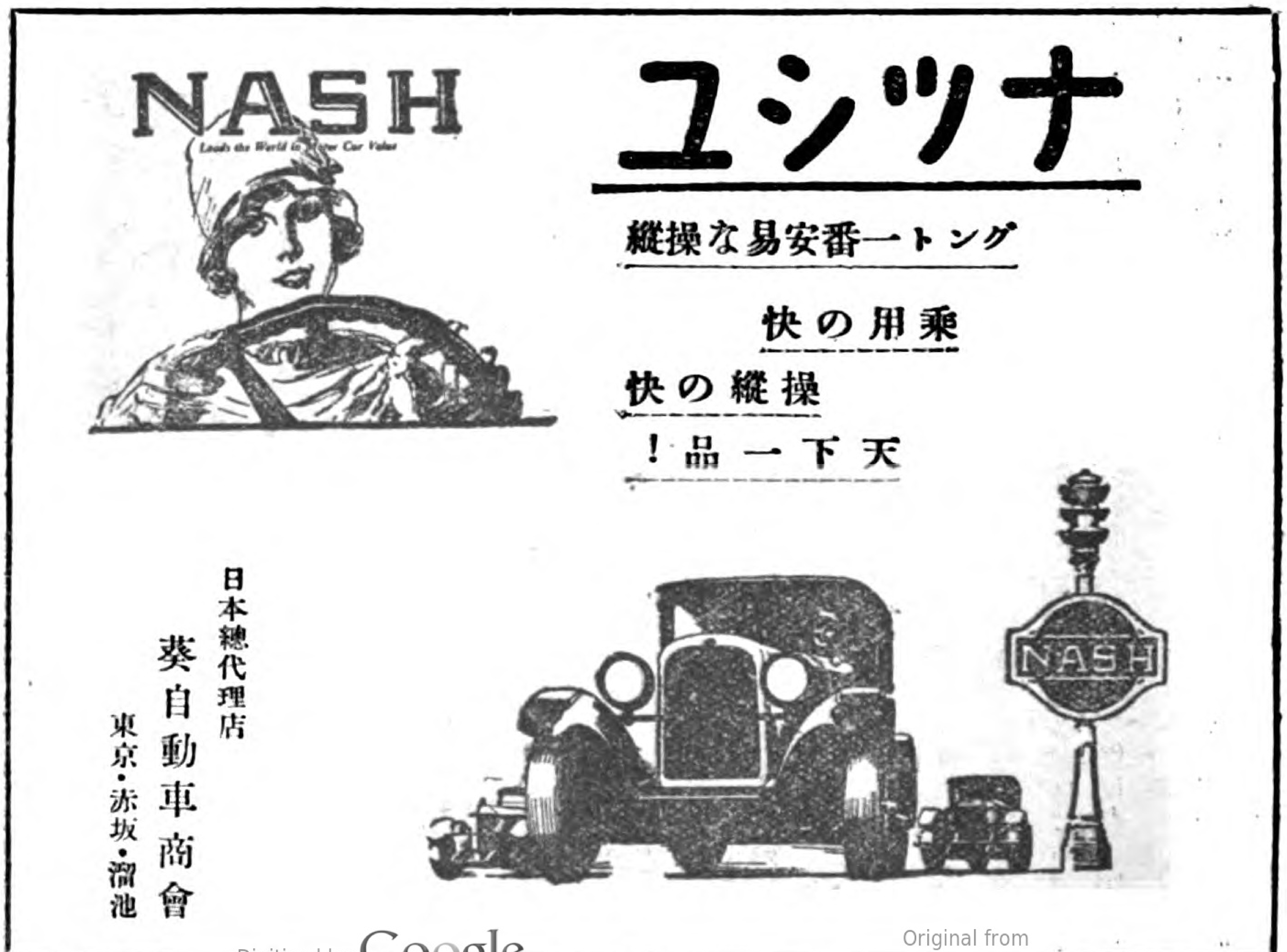
『彼女は俺が彫刻の頭何物もせず、小說もかゝず、私立大學を中途退學もせず、純然たるはへぬきの勞働者であつたら、決して俺を愛しは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しなかつたらう。俺といふものが、お姫樣のお邸で鸚を飼ふといふ種類の勞働生活のお相手に適つた人間だと思つたので、彼女は俺を愛したのだ。それが彼女の失敗だ、

『俺の失敗は、もう本職の下駄の齒入れののんきな生活も出來ないで、當分大人氣の芝居を賴りにくりかへさせられてゐることだ。がその間に、俺はある發見をした。それは簡單なことだ、島津といふ俺の姓が彼女を無意識に誘惑したといふことだ、或は又、俺が無意識に島津といふ姓で彼女を誘惑したともいへる。すると俺は俺の親父と同罪だ。

『姓の誘惑だ。性の誘惑と間違つてはいけない。俺の家はこれでもう二代つゞいて姓に祟られた。然し俺の息子の代にはもう俺の姓名もそんな魔力を失つてしまうに違ひない。俺の息子の友達は、だからもう決して君のやうにこんな手紙で惱まされる虞はない。』



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

饒舌録（感想）

谷崎潤一郎

今度改造社の圓本から「幸田露伴集」が出るに就いて、何か提灯を持てと云ふ山本社長の註文である。露伴氏の如き偉大なる先輩に對して私のやうな若輩が今更提灯を持つと云ふのも滑稽の沙汰だが、しかし圓本の讀者はひろい。何十萬と云ふ人人である。さうしてその多くは二三十歳の若い連中であらうから、既に半ばは文學史上の人物たる露伴氏の功績、地位等を、よく知つてゐない人もあるであらう。私の如き若輩をさへ「大家」と呼び、時には可哀さうにも「老大家」と呼ぶ今の時勢では、われわれと露伴氏との隔たりが、年數から云つても、いかに大きいものであるかを理解してゐない方面もあらう。で、主としてさう云ふ人人のために書くことにする。

○

ちやうど私の父親ぐらゐの年輩の老人は、芝居と云ふと團十郎と五代目菊五郎の評判をする。「わたしたちの眼にやあ成田屋があるもんだから、吉右衛門の活歴なんてあまるで子供芝居ですよ」とか、「どうも五代目が死んぢまつてからは芝居を見る氣がしませんな」とか、老人どもは此の二人を芝居道の神様扱ひにする。われわれより十年か二十年早く生れてその神様を見ることが出來たのを、自分たちの手柄のやうに云ふ。一時、團菊亡き後の劇壇に團藏が返り咲きをしたのなども、團藏自身が實際名優だつたのにも依るが、一つには彼が團菊の存生時代に彼等と拮抗してゐたと云ふ事實に依ることも多いであらう。「あれは團十郎や菊五郎に楯をついたほどの役者だ」と云ふやうな噂が、「團菊」を神様扱ひにする迷信から、彼を生きた國寶のやうに偉く思はせたのであらう。今の歌右衛門が舊俳優中で威張つてゐるのも、矢張り成田屋や五代目の相手役として當時隨一の女形であつたことが、何となく重味を附けてゐるのではなからうか。

が、幸ひにして文壇の方は劇壇に比べるとたいへんに様子が違ふ。中車、彌左衛門以下吉右衛門に至るまで何かと云ふと「團菊」を引き合

ひに出されるやうに、われわれの作品が一一紅葉露伴のものに比較されて、「紅露を見た眼では見られませんな」などとやられては全くたまつたものではないが、小説の讀者は芝居の見物ほど迷信的でない。それに文壇には幸か不幸か歌舞伎の如き魅力ある傳統がなかつたために、劇壇に比べればずつと時勢に伴つて進歩した。しかしながら、明治の文壇に於ける「紅露」の地位は、恰も劇壇の「團菊」にあたる。今の「中央公論」や「改造」になほ露伴氏が活躍してゐるのは、ちやうど五代目菊五郎が帝劇の舞臺へ現はれるやうなものである。これが芝居道であつたら非常な出來事に違ひない。

○

團菊の死んだのは私の中學時代であつた。だから私も彼等の舞台をまんざら知らないでもないが、老人連が餘り神様扱ひにする反感もあつてか、名優には違ひないとしても、果たしてどれほどのものであつたか疑はしいやうな氣がする。少くとも當時の彼等の演出をそのまま今日の見物に見せたら、何と云ふか分つたものでない。今の六代目や勘彌の方が面白いといふかも知れない。要するに老人連が團菊を持ち上げるのは、いくら持ち上げても今の若い者には見ることが出來ないからである。

そこへ行くと文學の方は都合がいい。さうさう老人を威張らしては置かない。われわれは今日の眼で改めて紅露の作品を見、文壇に於ける此の二名優の價値を批判することが出來るのである。

私は可なり早熟であつたから、少年時代からずゐぶん生意氣な本を讀んだ。ちやうど老人が團菊の時代にあこがれるやうに、私も始めて紅葉露伴の作品を貪り讀んだ頃をおもふと、云ひやうのないなつかしさを覺える。そして私は、どちらかと云ふと、紅葉よりは露伴の方に早く親しみ、一番最初は露伴の方が好きであつた。これは一つには、露伴の作品は佛教思想などを背景にして哲學的色彩を帶び、なかなかむつかしい小説だと云はれたもので、子供の癖にそれを讀みこなすと云ふのが、我れながら偉さうに思へたからである。當時、私の教へを受け持つてゐた小學校の先生に哲學や文學の好きな人があつて、此の先生が常に露伴を褒めてゐた。紅葉よりも露伴の方がずつとえらい、第一學問が非常にある、だから書く物にも思想的の深みがあつて、通り一ぺんの小説とは類が違ふ。あれはただの小説家ではない。と云つてゐた。その後中學校へ行つてからも、たしか今の學習院の教授をしてをられる福井久藏氏が先生であつたが、やはり同じやうなことを云つて、紅葉よりも露伴の方を持ち上げてゐた。これは餘談であるが、勝海舟翁なども「露伴はえらい、餘程ひろく本を讀んでゐる。學問のない男は小説を書いても直きに種が盡きてしまふが、あの男はまだまだいくらでも伸びるだらう」と云つてゐたさうで、直接翁の話を聞いた人から私は又聞きしたことがある（海舟伯の文學談は「氷川清話」か何かにも載つてゐる筈である。）さう云ふ譯で、その頃の學者とか教育家とか政治家

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とか、知識階級の方面には露伴の方が評判がよかつた。徳田秋聲氏の話にも、氏が高等學校時代にほんたうは露伴の弟子になりたかつたのだが、あまり尊敬し過ぎてしまつて、その門を叩くのが恐ろしく、それで紅葉山人の許へ行つたのだと云つてをられた。で、たとへば「對髑髏」などと云ふ作品を、少年の私は頗る愛讀したものであつた。紅葉の物は思想とか觀念とか眼じるしになるものがなく、ちよつと見ると何の奇もない客觀的の作品であるから、寫實の妙とか、會話の機微とか組み立てのうまさとか云ふものが、却つて子供には分りにくかつた。それに露伴の文章は古典の趣味が豐富であつたので、讀みながらその出典を考へるのが一つの興味であり、たまたまそれを捜しあてると、自分もたいさう學者になれたやうな氣がした。「對髑髏」と云へば、あれは何處か「雨月物語」の「青頭巾」を想はせる。さうして一層よく似てゐるのは「二日物語」と「白峰」である。これは勿論露伴氏が「白峰」を頭に置いて書かれた物に違ひないが、秋成が「雨月物語」に書き、馬琴が「弓張月」に書いたその同じ題材を再び取り扱ふと云ふことは、餘程の自信を以てかかられたのであらう。馬琴のはあまりに好かなかつたが、「白峰」と「二日物語」とは私は殆んど暗誦するくらゐに繰り返し讀んだ。

當時露伴氏は少年の讀み物をもときどき書かれたが、「少年世界」の臨時増刊號へ出された「休暇傳」の如きは、少年物ながら結構布局の整つてゐる點、變化に富み波瀾に富み、趣があり厚みがある點、まことに瞭然たる大家の作品である。西洋ならばゲエテとかトルストイとか云ふやうな人が童話を書いたらば斯うもあらうかと思はれるやうな、貫禄と品格がある。あれはその後どの單行本に這入つたのか、久しく讀んだことはないが、子供の時の印象は案外正確なものであるから、恐らく今讀んでも立派なものに違ひあるまい。

○

紅葉山人の死はたしか團菊の晩年とほぼ同時代であつたと思ふが、その死と共に硯友社の諸家は凋落した。これはちやうど高山樗牛の死と共に樗牛を取り卷く姉崎嘲風登張竹風の連中が一緒に忘れられたのと同じく、一方の旗頭がゐなくなるとそれを擔いでゐた人々は一本立ちが出來なくなつてしまふものと見える。私は當時の露伴紅葉——乃至硯友社の關係が、いかなる程度にあつたかを知らない。が、作物の上では紅葉に對して明かに一敵國の觀があつた露伴氏も、硯友社の衰へた頃からだんだん文壇を遠ざかつた。ついで自然主義が文壇を風靡した頃は、森鷗外一人を除いて前の時代の作家たちは殆んど影をひそめてしまつた。自然主義前派の人人が當時の新しい作家や批評家にいかに迫害されたかは、當時被迫害者の一人であつた泉鏡花氏の話を聽いても一半を想像することが出來る。「いや、書いたものの惡口を云はれるどころではありません、何處でも私の原稿などは買つてくれないのを、やうやうのことで或る本屋を見付けて、そこから單行本を出さう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とすると、自然主義の人たちが徒黨を組んでその本屋へ押しかけて行つて、君の店ではなぜあんなものを出版するんだと、抗議を持ち込むと云ふ始末です。だからしまひには出版屋までが手を引くやうな有様で、これには弱つてしまひました。」――それで鏡花氏はしばらく逗子に侘び住まひをして、逼息してをられたといふことであつた。後藤宙外が郷里の秋田縣だか猪苗代湖畔だかへ隱遁したのも、多分その時分だつたであらう。聞くところに依ると、露伴氏も頗る不平で、好きな釣りに浮き身を窶して悶悶の情を慰めてゐた時代もあると云ふ。讀賣新聞に「心のあと」を發表してから後、氏は時代の壓迫を受けてか、或ひは自己の内部に情熱が盡きたのか、全く創作を斷念したかに見え、京都の帝大の教授になつたりして、學者としての本領に立て籠るかの如くに見えた。若し氏の文筆生活が實際あの時で終つてゐたならば、氏は文學史の上に今の半分も業績を殘さずにしまつたであらう。

私は嘗て大正八九年頃、本誌へ「藝術一家言」を草した折に、紅露二家の作物を比較し、小說家としてはどうも紅葉の方が上であるやうに思はれると云つたが、それは私の當時の僞はらざる感想であつた。大概の作家は時勢と共に押し流され、二十年三十年の年所を閲した後になつて見れば讀むに堪へないのが常だけれども、紅葉のものには今日讀んで見ても渾然としてゐて、古典の品格を備へてゐる作品が澤山ある。此の點に於いて露伴氏はいささか紅葉に劣る。「對髑髏」はつい二三日前讀み直して見たが、これはさすがに立派なものだ。獨逸の浪漫派の作品に比べても遜色はなからう。「二日物語」は手許にないが、これも恐らくは永久に「雨月物語」の「白峰」と光輝を爭ふことが出來よう。が、何と云つても紅葉よりは生硬な作物を多く殘してゐる。なまじ思想や哲學があるだけに、それが却つて眼障りになる嫌ひがあり、渾然たる感じを傷けてゐるところもある。さう云ふ點で、私は一時氏の作品を好まなかつた時代もあつた。

○

紅葉は夭折したには違ひないが、しかし恐らくは文學的の生命はもう枯渇してゐたであらう。もつと長生きをさせたところであれ以上伸びはしなかつたであらう。しかるに露伴氏は、長年月の雌伏の後、――その間には自然主義が勃興して、やがて衰亡し、氏と同じく學者にして小說家を兼ねた漱石が出でてさうして死んでしまつた後、俄然として捲土重來した。私の記憶に誤りがなければ「改造」の誌上へ發表された「運命」が復活の最初ではなかつたらうか。私はあれを讀んだ時の感歎を今でも忘れることが出來ない。人或ひは、あれは史傳であつて小說ではないと云ふかも知れない。けれどもそれは餘りに小說と云ふものの近代的な形式に囚はれ過ぎた考へである。斯く云ふ私もそんな風に考へた時もあるけれども、今はさうは思はない。所謂「小說」ではないにもせよ、藝術家たる露伴氏の學殖と情熱とを傾注し、冒頭からを躍如たらしめてゐるところの「創作」であると云はずして何であら

う。正に小説以上の小説、小説にして叙事詩を兼ね、史傳を兼ねてゐるものである。分量こそ比較的に短いが、それでゐて一巻の平家物語や太平記にも匹敵すべき規模を有し、一篇の中に小宇宙を藏してゐる大作である。文章は昔風の和漢混交體であるが、少しも古臭い感じがなく、溌溂とした新味があり、萬鈞の重味があるのは不思議である。驚天動地の出來事を叙し、波瀾重疊を極め、幾多の大英雄小英雄を紙上に生かして躍らせてゐる手腕は、ただの歴史家の仕事ではない。永井荷風氏は鴎外の「澁江抽齋」や「伊澤蘭軒」を歴史小説と呼んでをられるが、さう云ふならば露伴氏の「運命」や「幽情記」以下の諸篇、その他「蒲生氏郷」の如きをも小説として差し支へないであらう。日常茶飯の日記の一ページのやうなものが小説として通る世の中に、これが小説でないと云ふのはよつぽどおかしい。いつぞやも述べた通り、彼は全く西洋風、此れは純粋に東洋風ではあるが、その體裁はスタンダールの歴史物の書きざまに似てゐる。勿論露伴氏の方が遙かに名文ではあらうか。

○

去年か一昨年の「改造」に出た「觀畫談」といふものは、どう云ふ譯か創作欄に載つてゐなかつたが、あれは文體は全然われわれの用ふるのと同じ言文一致、取材も現代で、いかなる意味に於ても今日の小説として通るものだつた。さうして露伴氏の創作力が聊かも昔日と變らないことを證するに足る傑作で、なつかしくも紅葉と轡を並べた頃の俤もあり、全作品を通じても秀れたものの一つであらうと思はれるのに、何故か評判にもならないのでしまつた。その後に出た「骨董」と云ふのも頗る面白い。就中「活死人」は最も幽玄高邁の作であつた。あゝ云ふ作品に接すると時勢も糞もあつたものでない。達人の書くものは時代思潮に關はりがなくとも、いつの世にも古今を通じて光彩を放つ。露伴氏の如きは正にそれである。「あの男はまだまだ伸びる」と云つた海舟伯の豫言は中つた。今ではたしかに紅葉や漱石を凌いでゐると私は思ふ。

○

露伴氏はたいへんな物識りで、馬琴や秋成の比ではなく、國漢文學はもとより、佛教に通じ、英文學も出來、歴史地理博物物理の方面にまで亘つてゐるのには驚く。物識りの方ではこれも有名な内田魯庵氏さへが、「あんな男はめつたに出るもんではないよ、五百年に一人ぐらゐしか生れない人間だよ」と云はれたと云ふ話を、私は木村毅君から聞いた。が、えらいのは物識りである點よりも、それほどの學者でありながら、少しも學者肌でなく、熱情漢である點である。私は個人的に知るところは少いけれども、作品を見れば到る所にそれが感じられる。村上浪六氏を書いた「奇男兒」などと云ふ小説は、傑作と云ふほどではないが、しかし熱情漢でなければ書けない。某氏はいつか露伴氏

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を訪問したら、褌を締めてゐないのか、股間の一物があぐらの下から隱見したのには閉口したと云つてゐた。糖尿病の癖に酒も飲めば菓子もたべる、口を開けばチヤキチヤキの江戸辯である、それで學者なのだから、鷗外や漱石とは大分肌合ひが違つてゐる。

まだいろいろ書きたいことがあるのだが、實は私も近頃はときどきお邪魔に上るので、あまり書きたてるとさう云ふ時にキマリが悪いし、締め切りの時間も迫つてゐるから、いづれ又の機會に讓らう。そして「饒舌録」もまる一年續いたから、一と先づ此れを以て打ち止めとする。

佐佐木信綱著

萬葉漫筆

—最新刊—

本書は萬葉學研究の權威佐佐木博士が多年研究の集積たる隨筆的考證にして、この好題目を捉へて博士の麗筆は如何に光彩を發するか

内容一班　萬葉集と天平時代、萬葉集は二十卷なりや、萬葉の影法師、萬葉集と畫題、萬葉研究と婦人、萬葉こゝかしこ、桂萬葉に關する一發見、萬葉集の外國語譯本、萬葉と大和、權律師仙覺、源實朝、小泉八雲氏、新譯萬葉百首、萬葉珍本談、萬葉遊蹤物語、萬葉集笑話、外二百餘項（挿入寫眞十六葉）

（四六版極美裝）　定價貳圓　送料廿錢　改造社發行

武者小路實篤著

母と子

定價 貳圓
送料貳拾貳錢

最新刊

久かたぶりの氏の長篇小說。人類の意志に從ひ、正義と愛と倫理の世界に裸のまゝ飛み込んで、自己の使命を果さんとする理想の熱愛者進を圍むに、母性愛の廣大さを示現する母縫子、捨身になつて愛戀する綾子、友情を完ふする中尾、更に和尙、彫刻家を點じ、作者は如何に躍動せしか。プロレタリヤ根性もブルジヨア根性も洗淸せる同じ水平線に立ち、彼我一緒に苦しみ、生長し、人生を肯定したいのだ。此の眞人の世界に人類總がゝりで開扉せらるゝ心の窓に晃燿として輝く東方の光を見よ。

發兌
東京市麴町區內幸町
幸ビルディング一階
振替東京八四〇二番

改造社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寢ても起ても使へる本台 Kスタンド

本器一臺で家中の喜び六種に使へる此便利先づ！

カタログを御申込下さい回

轉高底自由自在

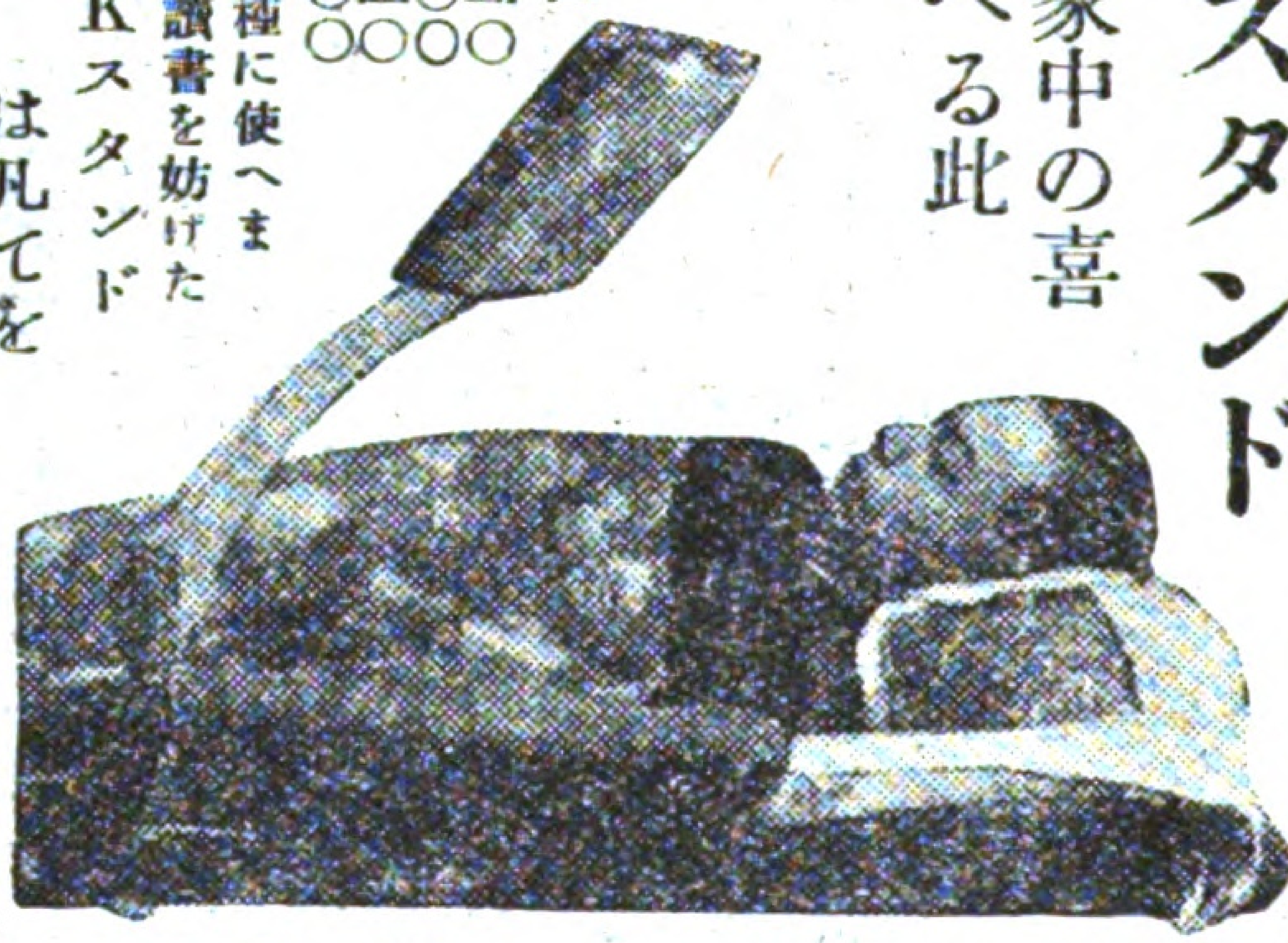
定價（學生用一・五〇 並製三・〇〇 上製三・五〇 寢臺用四・〇〇）

寢臺用完成本器も六種に使へます

この苦痛が貴下の讀書を妨げた

凍る寒さ
炎熱のダルさ
一日の疲勞
は凡てをKスタンド解決します

讀書能りつの增進今迄十冊讀んだ努力で五十冊を讀破出來ます勉强は勿論、溫泉、旅行、海岸其他病氣靜養に是非御携帶下さい







合名會社スタンド商會

東京池袋九一四番地　振替東京七〇一四一九番

有島生馬著　―最新刊―

（小説集）海村

海は、人生を含み、相寄り慕ひ話しかける。懷疑的に、慈悲の微笑に滿ち、又怒り易く。限りない魅力と神秘な誘惑とは肉感に交り、永劫恒常の心と天光遙碧の姿とは靈魂に迫る。クウルべの海は荒れ、モネエの海は光る海に過ぎない。イプセンは海を描かんとして戯曲の形に終り、ロテイの海は長い小説を綴りて尙足らず、わが有島生馬氏の海は日本の代表傑作として是に小説集「海村」の快著となる。その泡沫にも人間の明暗を映し、その隻波に人生の光翳を宿し、望洋よく天地の圓光に浸り哀歡盡さざる無し。湘南の寓居にものせる十九篇の佳麗は皆海村を主題とし上下二卷、唐本一帙に藏めて世の讀書子にすゝめ、徐ろに漁家の炊煙を指呼し、魚龍の夢を驚破しようとする。―

唐本極美裝 上下二冊帙入　定價貳圓五拾錢（送料拾八錢）

改造社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだといふ煙草も!! 一度『カロット』を口にすれば吸へぬ

乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本社代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云つて主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好きな方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員の方「やつ!之は驚いた、之は煙草が不味て吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね!」驚いたと仰有いました、此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草が吸へませんね!」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讚下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御獎勵の言葉を述べて下さいました。

特徵

外見恰も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人參の精氣を含有せるを以て朝鮮人參が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き淸涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は煙草に對する永き嗜好を離れて顧みざるに至る殊に口中惡息を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時散步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を治すべし

カロット（凡百日分）

ペークライト製パイプ付 **金貳圓五十錢**（カロット味一瓶 きらひ液一瓶）
送料（内地十八錢 臺、朝、樺四十五錢）

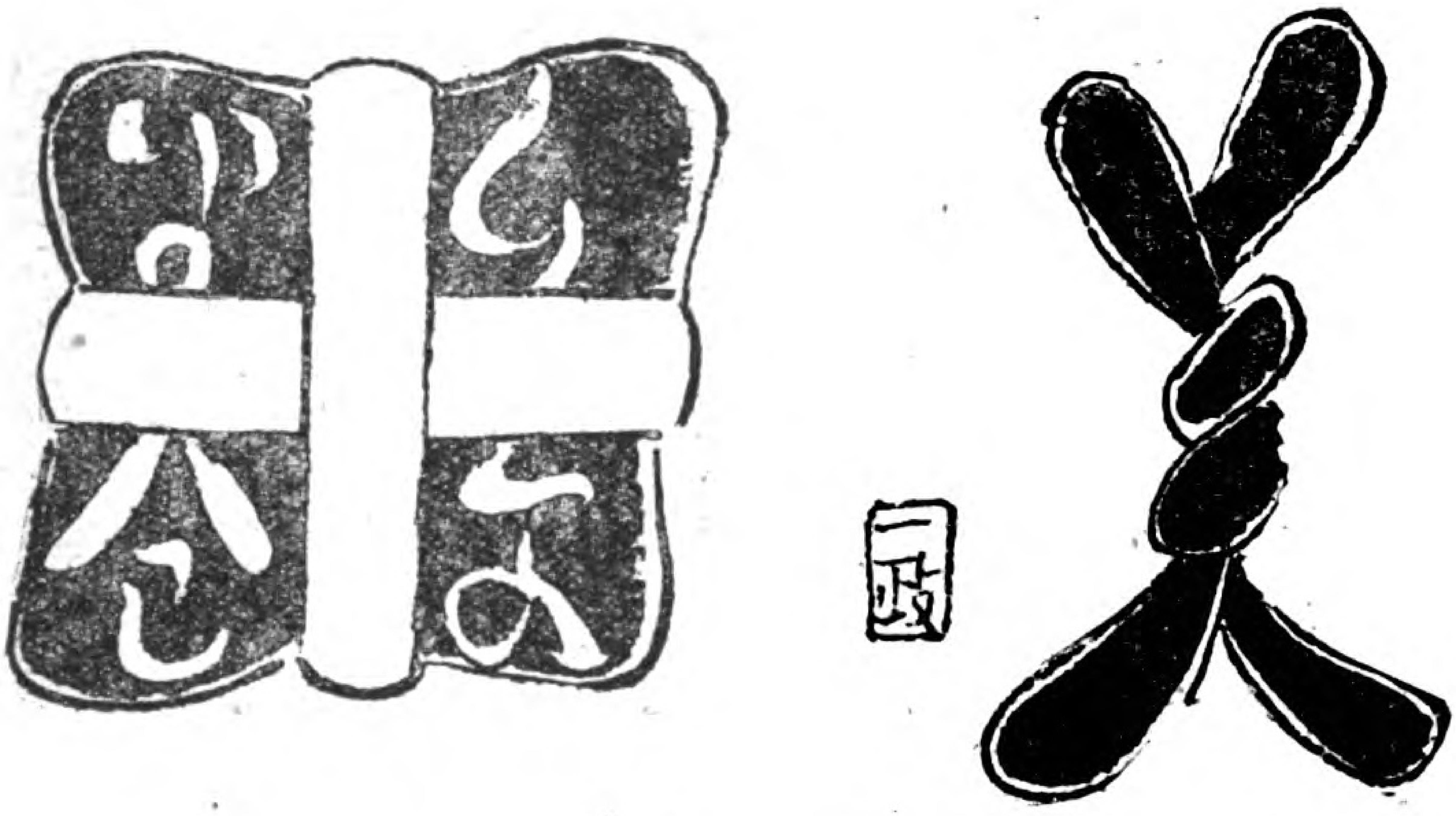
サック入象牙製パイプ付 **金參圓五十錢**（カロット味一瓶 きらひ液一瓶）
代金引換送料（内地三十錢 臺、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては
[illegible]書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候
○代金引換は御便利の郵便局を御申越願升

發賣元 東京府大森不入斗八二八
榮川堂
振替東京五二九一一番

代理店 東京市京橋區瀧山町十三番地
天下堂
振替東京七〇六八番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



一本の花

中條百合子

一

表玄關の受附に、人影がなかつた。

朝子は、下駄箱へ自分の下駄を入れ、廊下を眞直に歩き出した。その廊下は只一條で、つき當りに外の景色が見えた。青草の茂つた此方側の堤にある二本の太い櫻の間に、水を隔てゝ古い石垣とその上に生えた松の樹とが、歩き進むにつれ朝子の前にくつきりとして來る。草の上と石垣に九月末近い日光が照つて居るのが非常に秋らしい感じであつた。そこから廊下を吹きぬける風が如何にも颯爽として居るので、一しほ日光の中に秋を感じる、其那氣持だ。朝子は、右手の、窓にまだ簾を下げてある一室へ入つた。

こゝも廊下と同じやうに白けた床の上に、大きな長卓子があつた。書きかけの封筒が積んである場所に人は居ず、がらんとした內で、たつた一人矢崎が事務を執つて居た。丸顏の、小造りな矢崎は、入つて來た朝子を見、別に頭も下げず、

「今日は——早いんですね」

と云つた。

「えゝ。——」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

赤インクの瓶や、ゴム糊、硯箱、そんなものが置いてある机の上へ袂紗包みを置き、朝子は立つたまゝ、
「校正まだよこしてませんですか」
と矢崎に訊いた。
「さあ……どうですか。伊田君が受取つてるかも知れませんよ」
朝子は、此處で、機關雜誌の編輯をして居るのであつた。
朝子は、落付いた、然し何處か派手な感じを與へる縞の袂を帶留に挾んで、埋草に使ふ切抜きを揃へ始めた。
廊下の遠くから跫音を反響させて、伊田が戻つて來た。朝子が來て居るのを見て、彼は青年らしい顔を微に赧らめ、
「今日は」
と云つた。
「校正まだですか」
「來ません」
「使も？」
「えゝ」
朝子は、隅にある電話の前へ立ち、印刷所へ催促した。
再び机へ戻り、朝子は切抜きをつゞけ、伊田は、厚く重ねた帶封の紙へ宛名を書き出した。是は午後四時までの仕事で、それから後の伊田は、N大學の社會科の學生なのであつた。
黒毛繻子の袋を袖口にはめ、筆記でもするやうに首を曲げて萬年筆を動かして居た伊田は、やがて、
「あゝ」
顔を擡げ、矢崎に向つて尋ねた。
「先日斷つて來た分、こんなかから抜いてあるんでせうか」
むつくりした片手で小さい算盤の端を押へ、膨らんだ事務服の胸を顎で押へるやうにし、何か勘定して居る矢崎は、聞えないのか返事をしなかつた。伊田は暫く待つて居たが、肩を聳やかし、又書き出した。
朝子は、新聞に西洋鋏を入れながら、聲を出さず苦笑ひした。笑はれて、伊田は、耳の後をかいた。二日ばかり前、或對校野球試合が外苑グラウンドであつた。伊田は、午後から帶封書きをすてゝ出かけて行つた。自分に其那興味も活氣もなく、毎日九時から四時までこゝに坐つて日を過す外、暮しようのない矢崎は、それでも他の者が其那ことをすると、甚だ不機嫌になつた。彼は、其を根にもつて一日でも二日でも、口を利かなかつた。
「どの位斷つて來ました？」
朝子が伊田に訊いた。
「今度はそんなに澤山ぢやありません。五十位なもんでせう」
「去年からでは、でも千ばかり減りましたね……田舍のひとだつて、この頃は婦人雜誌どん〴〵とるんだから、斷るのが自然ですよ。比べて見れば、誰だつて、他の雜誌がやすくつて面白いと思ふんだもの」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一圓本の話が出て、それには矢崎も加はつた。
「娘がやかましく云ふんで、小學生全集をとつて居るんですが、一體、あんなものはどの位儲かるもんでせうな。…………」
「…………社でも何か一つとつて呉れないかな、さうすると僕たち助かつちやうんだが」
「矢崎さん、いかゞ？　その位のこと出來ませんか」
「さあ…………」
伊田が、
「金缺、か」
と呟いた。
いきなり朝子が
「あゝ、矢崎さん、お引越し、どうなりました」
と訊ねた。
「いよ〳〵澁谷ですか」
「えゝ。今月一杯に五月蠅いから行つちはふと思つたんですが…………
……來月中には移ります」
「須田さんその後どうして居らつしやいます？」
矢崎は、厭な顔をして
「この頃出かけないから」
と低く答へた。
「こゝ罷めることは、もう決つたんですか」
「決つたでせう」
默つて居たが朝子の心には義憤的な感情があつた。
須田信吉は、編輯部の廣告取をして居た男で、一風變つた人物であつた。頭の一部が缺けて居るのか過剰なのか、度外れなところがあつて、或時は寫眞に、或時は蓄音器に、最近はラジオに夢中に凝つた。ラヂオの爲には、金錢を惜しむことを知らなかつた。種々道具をとり集め、ラウド・スピイカアに趣味の悪い薄絹の覆ひをかけたり、それをビイズ細工のとかへて見たり、朝子に會ふと、
「一度是非聽きにいらつしやい、全くそこいら邊のガア〳〵雜音の入るのとは譯が違ふんです——もう二三日すると、京城も入るやうにします、朝鮮語つてえものは一寸いゝですね」
嬉しげに話した。實際は、然し決して組立てに成功出來る須田ではなかつた。成功しないと材料の故にして、それが和製なら舶來に代へる。舶來なら和製を買ひ、其那ことの度重なるうちに、彼が代表で保管して居た町會の金を私消して仕舞つた。千圓近い金であつた。彼は此のほかに雜誌の廣告代にも喰ひこみがあつた。死ぬ覺悟で、須田は家出をした。然し追手に無事に引返された。須田と姻戚で、須田の紹介で、雜誌部の會計をやつて居た矢崎は、後々の迷惑を恐れ、事が公になりもしないうち、庶務部長の諸戸へ注進した。須田の爲に辯護の勞をとるより、寧ろ自分を庇ひ、示談にして貰へた須田を、免職させる方へ働いたのであつた。須田の好人物を知つて居た同僚は、矢崎の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

態度を非難した。その非難は、親類からもあるらしく、矢崎は近頃

「親類なんてものは五月蠅くていけない」

と云ひ出した。俄に、細谷の塚家の近くへ家を見つけた話を、朝子も程なく聞いたのであつた。

報知新聞は漢字を制限し、ところどころ、切抜きの中にも、かん布摩さつ。機能こう進。昇コウなどゝ讀み難い綴りがある。朝子は赤インクでそれをなほし乍ら、

「何時？」

と訊いた。

「一時半です」

「磯田、何してるんだらう」

朝子は、電話口へ

「嘉造さんに一寸どうぞ」

と印刷所の若主人を呼び出した。彼女の、ふつくりした、勝氣らしい張のある聲が、簾越しに秋風の通る殺風景な室に響いた。

「もしく、十一時半の約束だのにまだ一臺も来ないんですが、どうしたんでせう、え？　あゝさう。………でももう二十三日ですよ。卅分ばかりしたら其方へ行きますから、ぢや直ぐ出るやうにしといて下さい、どうぞ」

二

鶴巻町で電車を下り、魚屋の角を曲ると、磯田印刷所は半町ばかりであつた。魚屋の看板に、色の剥げた大鯛が一匹と、同じやうに古ぼけた鯛が添へて描かれて居る。そのやうに貧しげな、ごたくした家並にそこばかり大きい硝子戸を挟まれて、磯田印刷所はある。震災で、神田から此處へ移つて來たのだ。

「どうも只今は失禮いたしました。もう二十臺ばかりあがりましたから、……どうぞ」

金庫を背にした正面の机の前から、嘉造が、入つて來る朝子に挨拶した。朝子と同い年であつたが、商賣にかけると、廿七とは思へない腕があつた。

「おい、工場へ行つてとつといで」

「――二階――よござんすか」

濃い髮が一文字に生えた額際に特徴ある顔を、嘉造は、

「どうぞ」

と云ふ代りに默つて下げた。

自分の腕に自信があつて、全然情に絆されることなく使用人を使ふし、算盤を彈くし、食へない生れつきは商賣を始めた親父より强さうな嘉造を見ると、朝子はいつも興味と反感とを同時に覺えた。朝子は、團栗眼の十二三の給仕が揃へて呉れた草履に換へ、右手の隅についた階段を登つた。

階段は、粗末な洋館らしく、急で狭い。朝子の長い膝が上の段につ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かへて登り難いこと夥しかつた。片手に袱紗包をかゝへ、左手を壁につゝ張るやうにし、朝子は注意深く一段一段登つて行つた。三分の二登ると、社長室の葭戸の裾が見えた。葭戸を透して外光が階段にもさして、足許が大分明るくなつた。

何の氣もなく、朝子はハタ〳〵、草履を鳴らし若い女らしく二三段足速に登つた。

その途端に、颯つと葭戸が開き、室内から十七ばかりの給仕女が、とび出したとしか云へない急激な動作で踊り場の上へ出た。其娘は素速く朝子を擦りぬけて、ドタドタドタ、階下へ駈け降りた。

朝子が思はず、もう誰も居ない暗い階段の下の方を見送つて居ると、赭ら顔の社長は、葭戸と平行に、書棚でも嵌め込む積りか壁に六尺に二尺程窪みがついて居る、その窪みの處から、悠くりさり氣なく室の中央へ向つて歩き出した。

朝子は厭な心持がした。

二階で親父が此那ことをして居るのを、嘉造は知つて居るだらうか。朝子は二重に厭な心持がし、社長室のリノリウムを踏んだ。

建坪の工合で、校正室は、社長室を抜けてゆかないと行けなかつた。朝子は、默つて輕く頭を下げ、通りすぎた。磯田は、机の此方側に立つて、葉卷に火をつけかけて居た。彼は、下瞼に大きな汚點のある袋のいつた眼を細め、燐寸を持ち添へスパスパ火をよび作ら、

「やー」

と曖昧に聲をかけた。

備へつけの筆がすつかり痛んで居る。

朝子はベルを鳴らして新しいのを貰ひ、工場から持つて來たばかりで、インクがまだ濕つぽい校正を、檢べ始めた。

下手な應募俳句を讀み合はせて居るところへ、ぶらりと磯田が入つて來た。

「――大分凌ぎよくなつて來ましたなあ、久しく御見えなさらんやうでしたが、海邊へでも御出かけでしたか」

「ずうつと東京でした……貴方は？　いかゞです、その後」

「やあ、どうも」

白チョッキの腹をつき出して、磯田は僅に髪の遺つて居る後頭部に葉卷をもつた手を當てた。

「年ですな一つは。……一進一退です。然し梅雨頃に比べれば、生れ更つたやうなもんです、濕氣が實に障りますなあ」

磯田は近年激しい神經痛に惱まされ、駿河臺の腦神經專門家の許で、絶えず電氣療法を受けて居た。朝子などには、慢性神經痛だと云つた。實際の病は決して其那單純なものではなかつた。家庭などひどいことを、朝子は知つて居た。

さつきの小娘のことを、自ら皮肉に思ひ合はせ、朝子は、

「もう淺野さんはおやめですか」

と訊いた。淺野と云ふのが、駿河臺の醫者であつた。ふつと、老人ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しい眼付で窓外の景色を眺めて居た磯田は、
「あゝ、いやまだです」
と、元氣な聲と共に、眼を朝子に移した。
「私は今日もこれから出かけにやならんのです……浅野御存知ですか？　遠藤伯なんぞあの人を大分信仰のやうですな。」
そして、半ば揶揄的に、
「その縁故で、死んだ津村二郎なんぞ、金を出させたつて云ふ話もあるが……」
朝子が仕事をして居る硝子のインクスタンドの傍に、マジョリカ擬ひの安灰皿があつた。それへ、磯田は話し乍ら葉巻の灰を落した。
「この間上海から還つた浅野利器つてえのが弟でね……面倒だらう、なか／＼……」
話が途切れ、磯田は暫く朝子の手許を見下して居たが、
「どれ、おやあ、どうも失禮しました」
と立ちなほした。
「さう？……どうも失禮」
歩きかけ、
「偉く日がさすね」
磯田は一二歩小戻りして、丁度朝子の髮に照りつけかけた西日に向つて、窓のカアテンを下した。

工場で刷り上げる間、三四十分づゝ手が空く。朝子は、其間に、自分一人居るきりの二階の窓々を、彼方此方へぶら／＼歩いた。
一つの窓と遠く向ひ合ふ位置に、工場の小窓が開いて居た。工場には、普通の場末の二階家をそのまゝ使用して居た。狭い猫目の高いところに、三尺に一間の窓。格子も硝子も無く、いきなり内部が見えた。窓と云ふより、陰気な通口のやうであつた。両側から寄せあつた長い活字棚、その中へ、活字を戻して居る小僧や若い女工の姿も見えた。
外見既にがたく／＼で、活字の重さ、人間の労働のために歪み膨らんだ建物の裡は、暗さうであつた。女工が、その、此方に向いて開いた狭い窓際を何かの用で通り過る時だけ、水浅黄の襦袢の襟など、朝子の目に入つた。
朝子はもう餘程前、
「いつか工場見せて下さいな」
と嘉造に云つた。
「どなたにもお断りして居りますんで——どうも……穢くて仕方ありませんですよ御覧になつたつて」
彼は、さう云つて、机の上にひろげた新聞の上へ両手をつき、片手をあげて、ぐるりと頭の後を掻いた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

朝子の居る室と板戸で區切つた隣室で、二人の職工がこんなことを云つて居る聲が聞えた。

「——陰氣くさいが、柳なんぞ、あれで陽のもんだつてね」

「さうかねえ」

「昔何とか云ふ名高い繪描きが幽靈の繪をたのまれたんだつさ。明盲にしたり、いろ〳〵やるが凄さが足りない。そこで考へたにや、物は何でも陰陽のつり合が大切だ。幽靈は陰のものだから陽のものを一つとり合はせて見ようてんで、柳描いたら、巧いこと行つたんだつて」

「ふうむ」

「——死ぬと變りますね、男と女だつて、生きてる時は男が陽で女が陰だが、土左衛門ね、ほら、きつと男が下向きで、女が上向きだらう。——陰陽が代つて、あゝなるんだつさ」

「……おやあお辭儀なんか何故陰の形するんだらう……」

工場らしい話題で、朝子は興味をもち、返事を待つた。けれども、何故辭儀に陰の形をするのか、職工はうまい說明が見當らなかつたらしく、やゝ暫くして靜に、

「そりや私にも解らないねえ」

と云ふ聲がした。

三

五時過ぎて朝子は歸途についた。

日の短くなつたことが、はつきり感じられた。印刷所を出た時、まだ明るかつたのに、傳通院で電車を待つ時分にはとつぷり暮れた。角の繪ハガキ屋の前に、やつぱり電車を待つて居る人群れが逆光で黒く見える。その人々も肌寒さうであつた。

朝子は、夕暮の雰圍氣に感染し、必要以上いそぎ足で講道館の坂をのぼつた。向うから、自動車が二台來た。それをさけ、電柱の横へ立つて居る朝子の肩先を、指先で輕くたゝいた者があつた。

朝子は振りかへつた。敏捷に振向けた顏をそのまゝ、立つて居る男を認ると、彼女は白い前齒で下脣をかむやうな、活氣ある笑顏を見せた。

「——なか〳〵足が速いんだな。電車を降りると後姿がどうもさうらしいから、追ひ越してやらうと思つたけれど、到頭駄目だつた」

「電車が一つ違つちや無理だわ」

朝子は大平と並んで、先刻よりやゝ悠くり、坂を登り切つた。

「どこです？　今日は——河田町？」

河田町に、兄が家督を繼いで、朝子の生家があるのであつた。

「いゝえ。……印刷屋」

「なるほど、廿三日だな、もう」

「…………」

「すみましたか？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「もう少し殘つてるの、てきぱきして呉れないから閉口よ。でも、まあすんだも同然」

「一月づゝ繰越して濟すやうなもんだな貴女なんぞは……」

彼等は、大通りから、右へ一條細道のある角で、どつちからともなく立ち止つた。

「どうなさるの」

大平は、その通りをずつと袋地を拔けた處に、年とつた雇女と暮して居るのであつた。

「幸子女史はどうなんです、家ですか」

「家よ、きつと」

「……一寸敬意を表して行くか」

向ひは桃畑で、街燈の光が剪定棚の竹や、下の土を森と照し出して居る。同じやうな生垣の小體な門が二つ並んで居る右の方を、朝子は開けた。高く鈴の音がした。障硝子の格子の中で、それと同時にぱつと電燈がついた。

「かへつて來たらしいよ」

女中に云ふ幸子の聲がした。

上り口へ出て來た幸子は大平を見て、

「ほう、一緒？」

と云つた。大平は、帽子の緣へ、輕く手をかけた。

「相變らず元氣だな」

「惜縮るわけもないもん」

「はつはつは」

大平は、神經質らしい顏つきに似ず、洒達に笑つた。

「いやに理詰めだね」

朝子は、赤インクでよごれた手が氣持わるいので、先に內へ入つた。

「──上らないの？」

「一寸敬意を拜すだけのつもりだつたんだが……」

「お上んなさい。──どうせ夕飯これからなんでせう」

問答が、朝子の手を洗つて居る小さい臺所の處まで聞え、遂に、大平が靴を脫ぎ、入つて來た。タオルで手を拭き拭き、朝子は緣側に立つて、

「いやに世話をやかすのね」

と笑つた。

「本當さ。昔からの癖で、一生なほらないと見える」

大平は、幸子と向ひ合はせに長火鉢のところへ腰を下しながら、

「まあ、お互に手に負えない從兄妹を持つたと諦めるんだね」

と云つた。

「──然し、僕のところ、これから追々歸つて、あの婆さんとさし向ひで飯を食ふのかと思ふと、思ひ遣る」

故意とぞんざいに、然し暖く叱るやうに幸子が云つた。

「だから早く奧さんおみつけなさいつて云ふんだのに」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大平はそれに答へず、幸子が心理學を教へて居る女子大學の噂など始めた。二年ばかり前、彼の妻は彼の許を去つた。初めの愛人が、今は彼女と暮して居る模樣だ。大平は三十六であつた。

食後、三人はぴよん／＼をして遊んだ。始め、大平はその遊びを知らず、二枚折の紙の上の文字を、

「何？ ピヨン？ ピヨン？」

と讀んで、

「ぴよん、ぴよんよ」

と朝子に云はれた。

幸子が、簡單にルールを說明すると、

「そんなら、ダイアモンドぢやあないか」

と云ひ出した。

「それならやつたことがある。對手の境界線の上まで行つていゝんだ」

「これは違ふのさ、一本手前までしか行つちやいけないの」

「一番奧のが出切るまで陣へ入つちやいけないつて云ふんだらう？ だから、きつと行けるんだ」

「頑固だなあ」

幸子が、じれつたさうに、力を入れて宣告した。

「これは違ふんだつてば！」

勝負の間、彼等は、朝子が二人に何をしても平氣の癖に、大平が幸子の駒を飛びすぎたり、幸子が彼の計畫を打ち壞したりすると

「此奴め」

「生意氣なことをするな、さ、どうだ」

「ほら、朝つぺ！うまいぞ／＼」

其等の言葉は、本氣とも冗談ともとれた。

「なんて負けず嫌い？ 二人とも！」

「あゝ、女の執念ですからね」

大平が、行き惱んだ駒で盤の上を叩き乍ら云つた。

「對手にとつて不足はないが、と。………どうも詰つちやつたな、朝子さん、何とかなりますまいかね」

「相互扶助を忘れた結果だから、まあさうして當分もが／＼してゐらつしやい」

この桃畑の前の家を見つけたのは、大平であつた。幸子はそれまで小日向の方に居た。朝子は一年半程前に夫を失ひ、河田町の生家に逼塞してゐた。幸子と二人で家を持つと決つた時、大平は、

「よし！ 家探しは僕が引受けたげませう。どうせ學校のまはりだらう？ そんならお手のもんだ」

と云つた。

「隣りへ空いたなんて云つて來たつて行きませんよ………五月蠅くて仕樣がありやしない」

すると、また四五遍しか會つて居なかつた朝子を顧み、大平は、敏感

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な顔面筋肉の間から、濃やかな艶のある、右と左と少しちんばなやうな、印象的な眼で笑ひかけた。

「念を押すところが未だしも愛すべきですね」「嫉し」に一つ足りたいなんてもの、まあ此方から願ひ下げだ」

或二月の午後、幸子から電話がかゝり、朝子も出かけ、この家を見た。雪降り揚句で、日向の往來は泥濘だが、煉瓦塀の下の溝などにまだ掻きよせた雪があつた。そんな往來を足駄でひろつて行くと、角の土管屋の、砂利の堆積の上に、黒い厚い外套を着、焦茶色の天鵞絨帽をかぶつた大平が立つて待つて居た。

「この横丁が霜解けがひどさうで難だが、惡くないでせう？此方側が果樹園なのは氣が利いて居る」

溶け殘つた雪が、薄すり果樹園一面に殘つて居て、日光に細かくチカチカ輝いて居た。青空から、快晴な雪解の日につきもの〻風が渡つて、杉の生垣を吹き、朝子のショウルの端をひるがへした。——

これは、一年餘り前のことだ。

四

續いて二日、秋雨が降つた。

夜は、雨の中で蟲が鳴いた。草の根をひたす水のつめたさが、寢て居る朝子の心にも感じられた。

晴れると、一しほ秋が冴えた。さういふ一日、朝子は狹鎔に住んで居る藤堂を訪れた。雜誌へ隨筆の依頼を兼ねた訪問であつた。

ひろやかに庭がとつてあつて芝が生え、垣根よりに、紫苑、鷄頭、百日草、萩、薄など、どつさり植つて居た。百日草と鷄頭とがやたらに多く、朝子は目の先に濃厚な絨毯を押しつけられたやうに感じた。

四十四五の、顔色の惡い藤堂は、細君に、

「もつと濃く」

と、茶を代へさせ乍ら、

「——秋になつたが、どうも工合わるくて閉口して居ます」

と云つた。

「數年來不眠症でしてね、こうやつて家族と遮斷したところで寢ても眠れない。癪にさわつて、晩方にチアールを二粒位飲んでやるんです。ところが、朝出かけなけりやならない時なんか藥が殘つて居ると見えましてね、この間も省線で、この次は目白だ、と氣を張つて居ても夢中んなつちやつて、乘り越す。はつと思つて又戻るが、今度は戻りすぎて、一つ驛を二三度行つたり來たりしました」

細君が、

「——本當に滅茶苦茶を致しますんですからねえ」

そして、藤堂の顔に目を据ゑて云つた。

「きつと今にどうかなつちやうから、見て居らつしやい」

藤堂は暫く默つて居たが、しんねり、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「此奴もヒステリーです」
と云つた。
歸らうとして居ると、細君が、
「あゝ白杉さん、お宅に犬お飼ひですか」
と訊いた。
「いゝえ、飼はふつて云つては居りますんですけれど」
「貴方、ぢや丁度よござんすよ」
藤堂の答へも待たず、
「うちに犬の兒が二匹も居て、始末に困つてるんですの。ぢや一匹お宅で飼つていたゞきませう、丁度いゝから、今日連れてつていたゞいてね」
立ちかゝるのを、藤堂が止めた。
「そんなに急に云つたつて――御迷惑だよ」
「――駄目でせうか…………。」
妻君は、高い椅子の上で上體を捻るやうにし、不機嫌に朝子を見た。
春になると、庭へ、ヒアシンスや喇叭水仙が不斷に咲き滿ちると云ふことであつた。それ等の花に圍まれ、益々病的であらう夫婦の生活を想像すると、朝子は頽廢的な繪畫を眺めるやうな氣分を感じた。彼等のところにも、夫婦生活の惰力が強く支配して居る。それがどんな沼か、朝子は、彼女の短い亡夫との夫婦生活で知つて居る。
朝子は、漠然と思ひ耽り乍ら、社の門を潜つた。

小使室に、伊田が居た。伊田が低いストウルにかけて居る後に、受附の茂都子が立つて、ぐいぐい伊田の頸根つこを押へつけて居た。伊田は、朝子を認め、頸をちゞめたまゝ頭で挨拶した。
「――ひどくいぢめられるのね」
「えゝ、えゝ。」
茂都子が引とつて朝子に答へ、小鰭のある、ふつくりした上瞼をぼつとさせて、
「本當に、この子つたら、すつかり男つ臭くなつちまつて……あんなに子供子供してたのに――」
猶押へつけようとした。伊田が本氣で、
「馬鹿！ 止してくれ」
と、手をふり拂ひ立ち上つた。
二時間程經つて、朝子が手洗ひのついでに、例の濠を見晴す、こゝばかりはやゝセザンヌの繪のやうな風景を眺めて立つて居ると、伊田が來た。彼は、さつき見られたのが大分極り惡い風であつたが、それは云はず、
「今日おいそがしいですか」
と朝子に訊いた。
「いゝえ。――用？」
「用ぢやないんですけど……夜、上つてかまひませんか」
「いらつしやい」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「川島君も行くかも知れないんですが」

「どうぞ」

「川島の奴……叱られちまやがつた」

伊田は、面白がつて居るやうな、恐怖くなくも無いやうな、善良な笑ひ顔をした。

「——ぢや」

朝子に、訊ねる時間を與へず、彼は去つた。

五

日露戰爭當時、或篤志な婦人が、全國の有志を糾合して、一つの婦人團體を組織した。戰時中、其團體は相當活動して實績を擧げた。主脳者であつた婦人が死んだ後も、團體は解散せず、明治時代帷幄政治で名のあつた女流を會長にしたりして、次第に社會事業など企てゝ來た。

然し、精神は昔の主脳者と共に死んだ。理事、その他役員が上流婦人ばかりなので、實權は、主事、又は庶務課長の諸戸吉彦にあつた。女は女なりに、男は男で、此團體の内部を野心の巣にした。

雜誌部の仕事の性質と、自身の氣質の上から、朝子は其等の外交や政治に關係出來なかつたが、目につく事は多くあつた。

社會事業の一つとして、内職に裁縫をさせて居たが、工賃は市價よりやすかつた。一寸不出來な箇處は何度でも縫ひなほさせた。

「——それぢや、つまり、いくらでも拵へる人に、やすいお仕立物ところを拵へて上げてるわけね。裁縫學校ぢやない、内職なんだから、も少しどうにかするのが本當ですよ」

朝子は、始めの時分、そんな事も云つたが、永年其處で働いて居る國子は、女學校長のやうに笑ひ乍ら、

「そんなこと云つちや、何も出來ませんですよ。此だつて無いより増しなんですから」

と、とり合はなかつた。社會事業全班、無いより増しの標準でされて居るらしかつた。

川島が叱られたといふ事、それも、この働き會の方に關係して居た。

W大學へ通ひ乍ら、庶務に働いて居る川島が宿直の時、小使室で、働き會の小谷といふ女と喋つて居た。そこへ、諸戸が外から歸つて來て、翌日川島を呼びつけ酷く詰問したのであつた。

川島は、小心さうな眉の上に小皺をよせ、

「びつくりしちまつた。——迚も憤慨して罷めさせさうなこと云ふんだもん」

と、苦笑した。

「——一體何時頃だつたの?」

「八時頃ですよ」

伊田が朝子に、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「小谷さんて人、知りませんか」
と訊いた。
「さあ……河合さんなら知つてるけれど……」
「ふ、ふ、ふ」
伊田も川島も笑つた。
「——色白な人で……幾つ位だい？　もう餘つぽど年とつてるんだらう？」
「卅位なんだらう」
弱氣らしく川島が答へた。
「——何でもないなあ解つてるんだけれど……その時だつて。話しでもすると思つて、いやな氣がしたんだらう」
「この頃馬鹿にやかましくなつちやつたね、こないだ矢崎さんもやられたらしいよ」
朝子は、
「でも、諸戸さん、一種の性格だな」
と云つた。
諸戸は、女房子供を國許に置き、一人東京で家を持つて居た。まるでの一人暮しなのに、家の小奇麗なことは評判であつた。現在彼等が經營主任のやうなことをして居る、そして、將來彼のものになるだらう或女學校長とは特別な關係で、半ば公然の秘密であつたが、諸戸は近來、働き會の方の河合と云ふ女といきさつがあつた。もう一人さう云ふ人が働き會の中にある。其那狀態であつた。のほほんで、その河合と連れ立つて歸るやうなこともするのに、時時、川島の場合のやうに不様な痙攣的臆病を現すのであつた。
「氣のいゝところもある人なんだから、貴方、たゞ叱られて居ずに、ちやんと自分の立場を明かにして置くといゝんですよ」
朝子は川島に云つた。
「此方がしやんとして出れば、ぢき折れる人なんだから」
「憤ると、でも可怖ですよ」
川島は、いかにも學生らしく、眼を大きくした。
「迚もでつかい聲で『君！』つてやられると、參つちやうな。云ふことなんか忘れちやう」
「だから、貴方がそれよりもつとでかい聲で『何でありますか！』つて云へばいゝのよ」
多分、相原の口添へで、川島を罷めさせることは中止になつたらしいと云ふことだつた。相原は、諸戸と同郷で、ころがり込んで居るうち、府下のセツトルメント、ワークを任され、今では一方の主に成つて居る男であつた。伊田と川島は異口同音に、
「——相原氏の方があれでましでせう」
と云つた。
「男らしい點だけでもましぢやないですか」
「今度だつて、諸戸氏、直き廊下で會つたら『やあ』なんて先から聲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かけるんだよ。迚もお天氣やだね、何が何だか分りやしない」

「相原さん、諸戸さんにゃ精神的缺陷があるんだつて云つてました」

朝子は、段々いやな心持になつて、

「もう、やめ！　やめ！　此那話」

と云つた。

「第一相原さんが諸戸さんについて、そんな風に貴方がたに云へた義理ではない筈ですよ。葭町の藝者とごたくがあつた、その借金の始末だつて諸戸さんにして貰つてるさうだし……第一、今の地位を作つてくれたのが諸戸さんぢやありませんか。」

「――さうなんですか」

「こないだ、將來は萬事自分が切り盛りするらしい口吻でしたよ、でも。………」

「――若し、相原氏が、反諸戸運動を畫策してるんだつたら、私は見下げた男だと思ふ」

朝子は、亢奮を感じた顔付で云つた。

「諸戸さんにだつて、卑怯なところもけちなところもあるが、一旦自分の拾つた者はすて切れないといふところがあります。そうしちや、飼犬に手を咬まれて居るんだけれど…………」

諸戸は豁氣で、どこか器のゆつたりしたところがあり、相原は表面謙遜さうで、内心は鼠の歯のやうに小さくてつよい利己主義者であつた。相原を食客に置いた時分から、十年近く、さう云ふ性質の違ひや、世道の利害が諸戸にとつて微妙な心理的魅力であると見え、少くとも表面、相原は不思議な感化を諸戸に持つてゐるのであつた。

彼等はトランプをしたり、朝子が最近買つたフランスの畫集を觀たりして十一時近く歸つた。玄關へ送つて出ながら、朝子は冗談にまぎらして云つた。

「まあ、なるたけお家騷動へは嘴を入れないことね。私共の時代の仕事ぢやないわ。」

六

朝子が、買物に出ようとして玄關に立つて居た。日曜であつた。其處へ大伴が來た。

「――出かけるんですか」

彼は洋杖をついたまゝ、薄すり綠がゝつて黄色いセルを着た朝子の姿を見上げた。

「一人？――もう一本は？」

幸子と自分のことを、朝子はお神酒德利と綽名して居た。

「本とお話中でございます。――でも直ぐかへりますから、どうぞ……お幸さん道樂の方らしいから大丈夫よ」

朝子は草履をはき、三和土へ下りて、

「さ」

大伴と入れ換るやうにした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「――どの邊まで行くんです」
「ついそこ――文房具やへ行くの」
「いゝ天氣だから、おや私も一緒に行かうかな」
「さう？　――」
そこに女中が居た。頭越しに、朝子は大きな聲で、
「ちよつと」
と幸子を呼んだ。
「大平さんがいらつしやつてよ。こゝまで來て」
「何さわいでるのさ」
幸子が出て來た。
「どうも聲がさうらしいと思つた」
「大平さんも外お歩きんなるんですつて。貴女も來ないこと？　少し遠くまで行つて見ませうよ」
「來給へ、來給へ、本は夜讀める」
「本當にいゝ天氣だな」
幸子は、瞼をせばめ、花の終りかけた秋に斑らな日光を眺めて居たが
「まあ、二人で行つといで」
と云つた。
「外もいゝだらうが、障子んなかで本よんでる心持もなかなか今日はわるくない」

大平と連立ち、朝子は暫くごたごたした町並の間を抜け、やがて、雑司ヶ谷墓地の横へ出た。秋はことに晴れやかな墓地の彼方に、色づいた櫟の梢が深く高く連つて居るのが見えた。線香と菊の香がほんのり彼等の歩いて居る往來まで漂つた。石屋の鑿の音がした。
彼等は、電車通りの文房具屋で買物をし、菓子屋へよつてから、ぶらぶら家へ向つた。
「――十月こそ秋ね……お幸さんも來ればよかつたのに」
「住まずに考へると、ちよいとごみごみして居るやうでゝ、小石川の此方側、なかなか散歩するところがあるでせう」
「古い木があるのもいゝのよ、」
大平は、やがて
「このまんま戻るの、何だか惜しいなあ」
と、往來で立ち止つた。
「どうです、ずうつと鬼子母神の方へでも行つて見ませんか」
「さうね――そして、又あのお蕎麥たべるの？」
去年の秋、幸子と三人づれで鬼子母神の方を歩き、近所の通りで、舌の曲る程辛い蕎麥をたべた。
「ハッハッハッ、餘程閉口したと見えて、よく憶えてるな――本當に行きませんか。さもなけりや、私んところへこのまゝ行つちやつて、御馳走を貴女に苦面して貰つてから幸子君を呼ぶんだ」
その思ひつきは朝子を誘つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「その方が增しらしいわ……でも、お幸さん心配することね」

「なあにいゝさ！　本讀ましとけ。——心配させるのも面白いや」

「——こゝに居りや何でもないのに」

「居たら、まいてやる」

大平は、いやに本氣に其を云つた。

朝子は、家の方へ再び歩き出した。大平も、自分の、聲さへ強く發した語氣に打れたやうに、暫く口を噤んで歩いた。

桃畑の角を曲つたら、門の前を往つたり來たりして居る幸子の姿が見えた。朝子は、その姿を遠くから見た瞬間、自分達が後還つて來たことを心からよろこんだ。

「お待ち遠さま」

「何だ！それつくらゐなら一緒に來りやいゝのに」

大平が、嬉しいやうに笑つた。

「君が案じるつて、忠實なアミー君、敢然と僕の誘惑を斥けたよ」

「ふうん」

先立つて門を入り乍ら、幸子は、氣よく、少し極りわるさうに首をすくめ、

「——今何處いら邊歩いてるだらうなと思つてたら、自分も出たく成つちやつた」

茶をのみ乍ら、朝子は大平が往來で提議したことを話した。

「——、頼みんならない從兄よ、貴女が居れば、まいちゆうつて仰云るんだから」

「さうさ、素介と云ふ男はさういふ男なの、どうせ。——アッペルバッハが、ちやんと書いて居る」

幸子は、さつぱりした氣質と、その氣質に適した學問の力とで釣合よく落付きの出來た眼差しで、朝子と素介とを見較べながら云つた。

「從兄の悲しさに、あんたも私も、どうもサディストの型に屬するらしいね。アッペルバッハの新しい性格分類法で行くと。だから、マゾヒストの型で德性の高い朝つぺさんに居て貰つて、調和よろしという譯さ。私なんか、同じサディストでも、德性が高いからいゝけれど、この素介なんぞ——」

「——君に解つてたまるもんか。——第一そのアッペル何とか云ふの、獨逸の男だらう？　獨逸人の頭がいゝか惡いかは、疑問だな。フランス人の警句一つを、ドイツ人は三百頁の本にする。そいだけ書かないぢや、常人にも呑込めないんぢやないかな」

「頭のよしあしぢやない、向きの選ひさ」

アッペルバッハの說は、マゾヒスト、サディストの兩極の外に男性的、女性的、道德性、智能性その他感情性などの分類法を作り、性能調和の根底にすると云ふ學說であつた。朝子は、

「政治家になんか、本當にサディストの質でなけりや成れないかもしれない」

と云つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

七

夕方近く、幸子が数へたことのある末松といふ娘が、も一人友達と訪ねて來た。何か職業を見出して見れと云ふのであつた。

「——經濟上、仕事がなけりや困るんですか」

「いゝえ、さうではありませんけれど………」

「——家に只居ても仕方がないと云ふわけですね——で？どんな仕事がいゝんです？……何に自信があるんです？」

末松は、並んでかけた椅子の上で、友達と互に顏を見合はせるやうにし、間が悪さうに、

「何つて………別に自信のあるものなんかありませんけれど——。若し出來たら、雜誌か新聞に働いて見たいと思ひます」

「さう云ふ方は、こゝに居る朝子さんに持つて行けば、何か無いもんでもないかもしれないけれど………ジヤアナリストになるつもりなんですか？將來」

其處まで考へては居なかつたと見え、娘達は身じろぎをして黙り込んだ。幸子は、自分までも工合わるさうな微笑を顏に浮べ、暫く答を待つて居たが、やがて、學生つぽい調子で、

「——その位の氣持なんなら、却つて勉強つゞけて居たらどうなんです」

と云つた。

「ひどい不景氣だから、きつといゝ口なんぞありませんよ。あつたにしろ、そんな口には、貴女がたより、もつと、今日生きるに必要な男が飛びついて居ます」

不得要領で二人が歸つた。窓際へ椅子を運び、雜誌を繰りながら其等の會話をきいて居た大平が、體ごと椅子を此方へ向け、

「ふうわりしたもんだな」

好意と意外さとをこめて、呟いた。

「會社に働いて居る連中も、あゝいふ娘さん達のワン・オブ・ゼムか」

「簿記や算盤が達者なだけ増しかもしれない」

「然し、變つたもんだなあ」

大平が、眞面目な追想の表情を薄すい煙草色の細面に現して、云つた。

「兎に角、相當教育のある連中が、體裁かざりを名譽としなくなつたんだからなあ。青鞜時代の熱情には、經濟觀念が全然なかつた。今の令嬢は、獨立イクヲル經濟的自立と、きつちり結びつけて居るんだから油斷ならない」

そして、彼は持ち前の、ちんばな、印象的な眼で、

「こゝにも現に一人居らつしやるが………」

と、朝子の顏を見て笑つた。

「同じ判こをついて廻す帳面でも、中に、例へばまあ、あさ子なんて小さい印があると一寸惡くないな」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

幾分照れ、朝子は、
「ぢや、私女學校の先生に世話して上げるわ」
と云つた。
「さうしたら、右も左もボンヌ、ファム（美人）ばかりよ」
大平は、直ぐ其をもぢつて、皮肉に、
「ボーン、ファーム（骨ごわ）？」
と、訊き返した。
朝子は、別に笑ひもせず大平の顔を見て居たが、やがて云ひ出した。
「ね、お爺さん、どう？　私この頃懐疑論よ。働く女のひとについて。女權擴張家みたいに呑氣に考へて居られなくなつて來たわ」
「ふうむ…………」
「自分の職業なら職業が、人生のどんな部分へ、どんな工合に結びついてるか、もう少し探究的でなけりや嘘なんぢやないのかしら。たゞ給料がとれて居ればいゝ。然んなつたらその職業すてるだけだし其ぢや、つまり女も男なみに擦れて、而も、彼等より不熟練で半人前だと云ふのが落ちなんぢやないの」
「女性文化なんてことは、そこが出發點だね」
大平が言葉を挾んだ。
「然しね」幸子が寧ろ大平に向つて云つた。
「女性文化必ずしも、女は内にを意味しやしないからね。――貴方も知つてる、ほら日野、東北大學の――あのひとの奥さん、もう直き立派な女辯護士ですよ」
「變てこな表現だけど」
ちよつと笑ひ、朝子が、
「私のは、超女性文化主義よ」
と云つた。
「その奥さんの方、きつと、男の辯護士が利益の薄い事件に冷淡だつたり、自分の依頼者を勝たせる爲には法網を平氣でくゞつたりするのに正義派的憤慨で、勉強をお始めんなつたのよ。又、女が罪を犯す心理は、女に最も理解される、そこまでが女性文化ぢやない？　謂はば。それなら、自分が楯にとつたり、武器にしたりする法律といふものは如何なるものぞや、如何なる社會が制定したか。社會とはどんなものか。――理屈つぽいみたいだけれど、この頃自分の職業でも、追ひつめて行くと、何だか其處まで行つちまうのよ」
「――つまり我等如何に生くべきか、と云ふことだね」
朝子は、不安げな、熱心な面持ちで大平に合點した。
「だからね、私だつて、たゞ月給九十圓貰つて、あてがはれた雜誌の編輯が出來るだけぢや、生きても居ないんだし、職業も持つてるんぢやないのよ――どんな雜誌を何故編輯するのか、そこまではつきりした意志で働いて、やつと人間の職業と云へるんだらうけれど……」
「…………」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大平が、佛の目から一種鋭い、朝子を嘲弄するのか、自分を嘲笑ふのか分らない强い光を射出しながら呟いた。

「——朝子さんのお說によると、ぢやあ、我々會社員の仕事なんていふものは、要するに月給を碾き出す石臼廻しみたいなもんかな」

彼の微かな皮肉を正直に受け、朝子は非常に單純に、

「さうかも知れないのよ」

と答へた。

續て、朝子は生來のぴち〱した表情をとり戾して、云つた。

「私、何、働いて食つて居るぞつて、實は一寸得意でなくも無かつたんだけれど、どうも怪しく成つて來たわ、此頃。今に私が本當に自分の雜誌創つたら、大平さん讀者になつて頂戴」

これは、實際問題として、朝子の心に育ちかけて居ることなのであつた。

幸子は机に向つて、明日の講義の準備をして居た。此方で、大平は朝子と低聲に話して居た。朝子は、編物を手にもつて居た。

「——だれの？」

「甥の——わるくないでしよ？　この色——」

「いつか往來で會つた坊ちやんですか」

「あゝ、お會ひんなつたことがあるのね、」

幸子が、それを小耳に挾んで机に向つたまゝ、

「だれに會つたつて？」

と大きな聲で云つた。

「健ちやん」

暫く幸子のペンの音と、竹の編棒の觸れ合ふ音ばかりが夜の室內を占めた。そのうるほひある靜けさが彼の心にしみ入つたと云ふ風に、大平がうつむいて居る朝子の髮の渦を見ながら呟いた。

「丁度こんな時もあつたんだらうなあ」

朝子が、死んだ夫と暮して居た生活の中に、今夜のやうな家庭的な情景もあつたであらうと云ふ意味を、朝子は感じた。彼女は淡い悲しみを感じ、默つた。同時に、大平の心の內にも、それにつけて自ら思ひ出される何事も元の妻との間に無いと、どうして云へよう。さう、朝子は思つた。彼女はこれまでも、大平の去つた妻については、自分の趣味と遠慮から進んで一言も觸れなかつた。今も、朝子は默つたまゝ、小さいスウエタアの一段を編み終つた。片手で、膝に落ちて居る毛絲玉から、更に糸のゆとりを膝の上へたぐりあげ、向きをかへて編みつゞけようと、朝子が椅子の上で少し胸を伸した。そのはづみを捕へたやうに「あなたは變つてるね」

大平が云つた。

「あなた、本當に又細君になる氣持はないんですか」

「貴方はいかゞ？」

「ふーむ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大平はうなつて、然しはつきり云つた。

「無いな」

餘程間を置いて、

「それが、だが自然なんだらうな、一方から云へば」

大平は、椅子の腕木に片肘をつき、その上へ頰杖をついて居た姿勢を改めて、腕組みをした。彼はそのまゝ、やゝ久しく沈吟して居たが、急にその顔を朝子の方へ向け、

「まさか發菩提心といふ譯ぢやありますまいね」

「そんなことありやしないわ。たゞ……」

「なに？」

「……私の心持ん中で、もう結婚生活、すつかり完結した氣がするのよ。又、同じことを別にして見たいと思はないだけ」

彼等は、幸子の邪魔にならないやうに、始めつから小聲で話して居たが、この時、朝子は異樣な閃光が、大平と自分との低い、切れ切れな會話の内に生じて居るのを感じた。變に心を貫通する苦しい心持で、彼女は身動き出來なかつた。大平は、一層低い聲で、正面を見据えたまゝ、やつと聽える位に云つた。

「――變りもん同志で、面白くやつてゆけると思ふんだがな……自由に……」

――朝子の感情は、同じやうに動いて居る。彼女は默つて居る。大平も默つて仕舞つた。

突然、幸子が机から、

「えらく靜かだな」

と云つた。

「何してるの」

「うむ…………」

「さあ、もう一息ですみますよ」

氣を入れなほし、机にこゞみかゝつた幸子の背なかつきを見て、朝子は愕然とした氣になつた。彼女は、幸子がそこに居るのを知り乍ら忘れて居た。忘れて居た瞬間の長さ、深さが、幸子に聲をかけられ、始めて朝子の意識にのぼつたのであつた。非常に幸子と無關係などこへか心が去つて居るやうで、そのまゝでは、ふだんの位置に置いて幸子を認識するのにさへ、困難を覺える。そんな氣持だつた。

この覺醒は、實に我ながらの愕きで朝子を打ち、彼女は、今幸子に振りかへられては堪らない心持になつた。彼女は、ぼんやり考えるやうな顔をして、部屋を出てしまつた。

「おや、居なかつたの？」

幸子の意外さうな聲が、此方の室で鏡の前に佇んで居た朝子のところまで聽えた。

八

翌日、朝子は事務所へ出かけて行つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事務をとつて居る間にも、時々、昨夜の、心を奪はれた異様な感じが甦つて來た。その度に、朝子は一時苦しい氣持になつた。歡びで胸がわく〳〵する、其那切なさではなく、眞直に立つて居る朝子を、何處からか重く、暗く、きつく引つ張る、その牽引の苦しさであつた。

三時頃、庶務に居る男が、

「――諸戸さん、龜井戸ですか」

と入つて來た。

「さあ、知らないね」

「白杉さん、今朝お會ひになりましたか」

「文部省へ行くとかつてお話でしたよ」

「――文部省へ？　何かあるのかしら…………」

矢崎が、冷淡なやうな、根掘り葉掘りのやうな口調で聞き出した。

「どうしたんだね」

「新聞から來たんですよ」

「××ぢやないのかい？」

團體に出入りする、諸戸の子分のやうな記者があるのであつたが、其男が告げた名は其社ではなかつた。

「へえ…………」

矢崎は、不精髯の短かく生えた口をとがらせ、考へて居たが、

「呼んだのかい」

と云つた。

「賣り込みさ、――又。此處の資金をこつそり學校の方へ流用してゐる事實が有るがとか何とか云つて來たらしいんだ」

「誰が會つたんだ」

「鈴木さん――其那こと絕對に無いと思ふつて熱心にやつてましたよ」

矢崎は、それぎり默り込み、仕事をしつゞけたが、彼の樣子を見ると、朝子は、矢崎がその事について全然知らぬではないと感じられた。其那ことに無關係な朝子さへ、突嗟に其那事實はあるまいと思へず、漠然疑ひを抱く。その程度に、團體内部の空氣は淸潔でないのであつた。

程經て、朝子が廊下を行くと、向ふから諸戸が、ひどく急ぎ足にやつて來た。朝子は一寸會釋した。平常なら、二言三言口を利くところを、彼は殆ど朝子をも目に入れなかつた風で、角を曲らうとした。小使が、草履を鳴らし、其を追つた。

「あの、自動車は直ぐ來させましてよろしうございますか」

角を曲る急な動作でモウニングの尾を煽るやうにしながら、左手を後へ振り、諸戸は、

「直ぐ！　直ぐだ。」

叫ぶやうに命じた。

その廊下の外に、一本石榴の木が生えて居た。このやうな公共建築の空地に生えた木らしく、いつも徒花ばかり散らして居た。珍しく、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今年は、低い枝にたつた一つ實を結んだ。その實は落ちもせず、僅かながら色づいて來た。がらんとした長廊下や、これから相原に會ひ、買收策をでも講じるであらう諸戸の周章した後姿、風に動く草まで、總て秋蕭々と細長い中に、たつた一つ石榴の實は圓く重さうで、朝子に何か好もしい感じを與へた。

朝子は立ち止つて、秋風の午後に光る石榴をながめた。

締切りで、毎日編輯所に用がある。朝子は、これ迄と方針を更へ、同じ沈滯した雜誌にも幾分活氣を與へる爲、經濟方面の記事、時事評論など加へることにした。その爲に用事が殖えた。朝子は、仕事に一旦かゝると、等閑に出來ない氣質を現はして働いた。

ほんの一時的な火花で、神經が疲れて居た故だと云ふ位に考へて居た、先夜の、大平との感覺は、思ひがけずいつまでも朝子の心に影響をのこした。編輯所で、手が空き、窓から濠の景色を眺めて居る。霖雨の後で、濠の水はたぷ〳〵石垣をひたして居る。淺く揺れる水の面に、石垣とその上の芝との倒影がある。水に一しほ柔かな緑か、朝子の活字ばかり見て居た眼に、休安を與へる。微かなくつろぎに連れ、朝子の心に、例の引つぱりが感じられた。引つぱりは、依然鋭く、きつく、暗かつた。然し、その暗さは、精神上の不幸のやうに心から滲み出して、眼で見る風景までを黯ませる種類のものではなかつた。緑はどこまでも朗らかな緑に、日常のすべての事は昨日、今日、一昨日そのまゝ純粹に感じられる。それ等とまるで對立して、一方に暗い引つぱりと、それに牽かれて傾く心の傾斜とを感じて居るのであつた。片側づゝ、夜、晝と描き分けられた一面の風景畫のやうな心であつた。言葉にすれば「苦しいぞ。だが、なか〳〵惡くない、」朝子は其那心持で、目出たい自分の心の、二通りの染め分けを眺めた。

朝子が、夫を失つたのは廿四の時であつた。彼女は近頃になつて、元知らなかつた多くのことを、男女の生活について理解するやうになつた。彼女の中に、半開であつた女性の花が咲いた。若し今まで結婚生活が續いて居たら、自分は此様に細かに、何か木の芽でも育つのを見守るやうに心や官能の生長を自分に味ふことが出來たであらうか。朝子はよくさう思ひ、世間並に考へれば、又當時にあつては朝子にとつても大きな不幸であつた不幸を、たゞ不運とばかりは考へなかつた。女一人の成長。――自然は其女が夫を持つて居ようと居まいと、そんな事に頓着はして居ない。時が來れば、花を咲かせる。――自然は淨きかな――

然し、朝子は大平を愛して居るのではなかつた。彼は、朝子が再び結婚を欲しない意味とは全然違ふ、たゞ面倒くさい位の心持から、消極的自由を保つて居ることも判つて居た。彼にすれば、惡い心持はせず一年餘知り合つた朝子が、ひとりで、自由で、一寸面白く無くもなささうなのに不圖心付き、何か野心めいたものを感じたのであらう。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

朝子にとつても、ぼんやり幸子の從兄として見て居た大平が、一人の男としてはつきり現れた點は同じであつた。けれども、細かく心持を追つてゆくと、朝子にとつて魅力あるのは大平といふ人自身ではなかつた。大平が彼の夜以來、朝子の心の内にかき立てた感覺が、朝子を牽つけるのであつた。

其意識は、桃畑の前の小さな家で、靜かに幸子と話したり、めいめいがめいめいの仕事をもちよつて一つ灯の許に居る夜など、特に明瞭に朝子の心に迫つた。

朝子は、幸子を愛して居た。彼女は幸子のどんな些細な癖も知つて居たし、缺點も、美しき善良さをも知つて居た。幸子が癇癪を起し、又それが時々起るのであつたが、迚も可怖い顏をして朝子に食つてかゝる。其時の、世にも見つともない幸子の顏付きを思ひ出してさへ、朝子は滑稽と幸福とを感じ、腹から笑ふことが出來た。

大平について、自分はそのやうな、何を抱いて居るだらう！

朝子は、自分の感情に惑きつゝ考へるのであつた。幸子と居て、互に扶けつゝ生活を運んで行くことに、朝子は氣質の不平や否定の理由を心の何處にも持つて居なかつた。

それだのに、その熱い力は異樣に牽きつける。眞空のやうに吸ひよせる。朝子の全身が其處へ向つて只管墜落することを欲した。その發作のやうな瞬間、朝子は自分の肉體の裡で、大きな花瓣が渦卷き開き、聲なき叫びで心に押しよせるやうに切なく感じるのであつた。

或午後、幸子が長椅子で雜誌を讀んで居る椽側に籐椅子を出し、朝子が庭を眺めて居た。隣家の生垣の際に一株の金木犀があつた。やゝ盛りを過ぎ、朝子の方の庭土の上へまで、金柑色の細かい花を散り敷いて甘涼しい香を撒いて居た。その香は秋の土の冷えの感じられる香であつた。

朝子は、昨日、印刷屋から歸つたところであつた。其處で年とつた女工が、隣室で、

「ねえ、源さん、勞働組合つてあるんだつてね、そこへ入ると毎月廿錢だか會費納めるんですつてね」

「はあ」

「そいで何だつてえぢやあないの、どつかの工場でストライキでもすると、皆でお金出し合つてすけてやるんだつてね」

「へえ」

「いくらでも出さなくちやあ成らないんぢや、困つちやうね」

源さんと呼ばれた男が、氣なささうに、

「えゝ」

と返事した。其那ことを、元氣に幸子に喋つてきかせた。

朝子の默り込んだのを、幸子はたゞ疲れたのだと思つたらしい。長椅子の横一杯に脚をのばし、讀んで居る彼女の樂な姿勢を、朝子は凝つと見て居たが、突然、顏と頭を、いやいやでもするやうに振り上げ、

「ね、一寸、私二つに裂けちやう」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小さい、弱々しい聲で訴へた。

「何云つてるのさ」

膝の上へぽたりと雜誌を伏せ、笑ひかけたが、朝子の蒼ざめた顏を見ると、幸子は、

「──どうした」

兩脚を一時に椅子から下した。

「あゝ二つん成つちやうわよ、裂けちやう」

朝子は背中を丸め、強い力で幸子の手を捉まへて自分の手と一緒くたにたくしこんで、胸へ押しつけた。

「如何した、え？　これ！」

幸子は、駭いて、背中を押へた。

「口を利いて！　口を利いて！」

朝子は、涙をこぼしながら、切れ切れに。

「暗い瞬間！──暗い瞬間！」

と囁いた。

九

轉退を欲する本能、一思ひに目を瞑つて墮落したい狂的な欲望。そう云ふものだけが、纏て朝子の心の中に殘つた。其等の欲望が跳梁する時、常に傍觀者として、大平の心緒が、朝子の感覺から離れぬ。朝子は、明確に說明出來ない心持の頂上で、其日其日を送つた。生活は、ほんの薄い表皮だけ堅まりかけの、熱い熔岩の上に立つてでも居るやうに、あぶなかつた。

幸子の姉で、山口縣へ嫁入つて居る人があつた。春、葡萄狀鬼胎の手術を受けてから、ずつとよくなかつた。最近容態の面白くない話があつたところへ、或日、幸子の留守、電報が來た。幸子が歸つて、其を見たのは四時頃であつた。

「こりや行かなくちやならない」

「勿論だわ」

「旅行案内、私んところになかつたかしら」

朝子は、今獨りにされる事は恐ろしくなつて來た。幸子が歸つて來るまでに、自分は今の自分で無く成つて仕舞つて居る。──其様な感がした。

朝子は、

「私も行つちやはふかしら」

と云つた。

「一緒に？」

「うん」

「そりや來たつていゝけど……」

幸子は、旅行案内から眼をあげ、

「駄々つ兒だな、まだ雜誌も出ないぢやないの」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と苦笑した。

「駄目だ、仕事を放つちやいけない」

校正がまだ終つて居なかつた。然しそれは、どうにもなる事であつた。暫く考へた後、朝子は、

「私、行く」

と、椅子から立ち上つた。

「今獨りんなると碌なことしないにきまつてる。いやだわ」

幸子には、いゝ意味でぼんやりなところがあり、朝子の動搖して居る心持を知つて居ても、實感としては、わからないらしかつた。彼女は、

「居なさい、居なさい」

いかにも年長らしくきめつけた。

「そんなこつて、どうするのさ」

それから間に合ふ汽車は九時十五分であつた。幸子は手鞄に遑しく手廻りのものをつめながら、又云つた。

「第一、私の旅費さへかつ／＼なんだもの」

銀座で見舞物を買つたりして居るうちに、朝子は、變な不安から段々自由な心持になつた。幸子の居ないのもよい。自分の前後左右を通りすがる夥しい群集を眺めながら、朝子は思つた。自分も苦しいなら苦しいまんま、この群集の一人となつて生きればよいのだ。どんなに苦しくても、間違つても、人間の裡にあればこそ、だ。

ところどころの商窓の夜の鏡に、ちらりと、自分の歩いて居る姿が映つた。その自分を、内心で刺して居る苦しさや、一瞬同じ灯に照らされ鏡にうつる様々な顏、ネクタイの色などに、朝子は暖かい感情を抱いた。

外國へ出發する名士でもあると見え、一等寢台の前で、盛にマグネシウムの音がした。幸子の乘つた車室の前のプラットフォームには、朝子の他四五人の男女が居るだけであつた。窓から半身外へのり出し、幸子が訊いた。

「――大丈夫？」

朝子は、頬笑んで合點した。

「本當に？」

「本當に――。大丈夫で無くたつて、大丈夫と思つちやつた」

「何のことさ……え？　何のこと？」

「いゝのよ、安心して」

「着いたら電報打つけど、若し何かあつたら」

何心なく云ひかけ、驚いて止めた拍子に、幸子は赤い顏をし、口に當てた掌のかげで舌を出した。朝子は、

「莫迦ね！」

薄笑ひしたが、段々可笑しく自分も仕舞ひに聲を出して笑つた。幸子は、習慣的に、大小に痛めと云ひかけたのであつた。

列車が動き出す。萬歳アーイと云ふ聲がプラットフォームの二個所よ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ばかりで起つた。
　カーブにつれて列車が蜒り、幸子の振る手が見えなくなつてから、朝子は歩き出した。すると、人ごみの中から、
「――しばらく」
太いフェルト草履の鼻緒をそろへて、挨拶した者があつた。
「まあ――」
朝子と、同級の中では親しい部の富貴子であつた。
「来てらしたの？　この汽車？」
富貴子は、ずば抜けて背の高い肩の間へ、首をちゞめるやうな形恰をした。
「母の名代を仰せ付かつちやつたの」
市寄せへ出ると、
「あなた、真直おかへり？」
洒落た紙入れを持つたクリーム色の手套のかげで、時間を見ながら富貴子が訊いた。
「――何だかこのまんまお別れするの厭ね、……………銀座抜けませうか」
「私かまはないけど――いゝの？　貴女んところ小さい方」
「いゝのよ」
富貴子は朝子の手を引つぱつて歩き出した。
「御世話してやつたんですもの、暫く賢いゝお兄ちやんに成つて頂く

れたつていゝわ。此頃でもないと、私なんぞ離れよ、身軽にのし出すことも出来ないんですもの」
夫が外遊中で、富貴子は二人の子供と実家に暮して居るのであつた。
先刻は幸子と新橋の方から来た、同じ通りを逆の方向から、今度は富貴子と歩いた。富貴子は、
「あ、一寸待つて頂戴」
と云つて、途中で子供の為に手土産を買つた。さうかと思ふと、呉服屋の陳列窓の間を、ペーブメントの連続かなどのやうにぐるりと通りぬけたりした。朝子は、女学校時代のまんまの気持で、ずつと母となつた富貴子の態度に、好意を感じた。糸屋の飾窓に、毛糸衣裳をつけた針金人形が幾つも並んで居た。朝子は其前へ立ち止つた。
「一寸――いらないの？」
「なあに？……まさか！」
二人は、珈琲を飲みによつた。友達の噂の末、
「結局一番いゝのは、貴女なのよ、朝子さん」
断定を下すやうに富貴子が云つた。
「私みたいに一時預け、全く閉口。預つてる手前つて云ふわけか、いやに遠廻しの監視つきなんですもの」
「それも、もう十月の辛抱、でせう？」
頭をひき、上眼を使ふやうにして合点したが、富貴子は急に眼を輝かせ、

「そりやさうと、あなたの方、どうなのよ其後」
と云つた。
「何が」
「いやなひと！　相變らず？」
「相變らず」
「──うそ！」
「どうして？　私は貴女と違つて正直に生れついてゐるのよ」
「だつて……。あゝ、ぢやあ、さうなの、やつぱり貴女は偉いわね」
凡そその意味が想像され、朝子はぼんやり苦笑を浮べた。すると、云つた方の當人が、今度は其を勘違ひし、意外らしく、胸まで卓子の上へのり出して、逆に、
「──さう？──大道無門？」
と小聲で念を押しなほした。
朝子はさうなると、猶笑ふだけで、パイをたべて居たが
「──モダアンだつて幾通りもあるんぢやないの──少し話は違ふけれど」
と云つた。
全く、個人的に自己消耗だけ華々しく或は苦々しくやつて滿足して居る部と、それが一人から一人へ傳り、或程度まで一般となつた現代の消耗が身に慣へて徹へてやり切れず、何か確乎とした、何か新しいものを見出さなくてはやり切れながつて居る人たちもきつとある。朝子は自分の苦痛として、其を感じて居るのであつた。後者に屬す人は、強烈な消耗と同時に新生の可能の故に、自分を包括する更にひろい人間は、群を忘れることが出來ない。例へ、それに對して自分は無力であらうとも、忘れることは出來ない。
朝子は、考へ〳〵珈琲を含んだが、不圖、一杯の珈琲をも、自分達は社會に於て夥しい足音と共に飲んで居るのだと感じ、背筋を走る一種の感に打たれた。
朝子は、やがてぶつきら棒のやうに、富貴子に訊いた。
「いつか──貴女とだつた？　底知れぬ深さ、つて云ふ詩讀んだのに」
「さあ、……さうかしら」
彼等の居るボックスを、色彩ではたくやうにして入つて來た若い一團に氣をとられ、富貴子はうつかり答へたが、
「おや、もう彼那時間？」
自分の手頸と、花模樣の壁にかゝつて居る時計とを見較べ、富貴子は、
「大變、大變」
と、油繪で薔薇を描いた帯の前をたゝいて立ち上つた。
朝子もタクシーで、十一時過ぎ家へ着いた。

十

「明るい時」と云ふベルハアランの小さい詩集がある。その中に、底

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

知れぬ深さ、その他朝子の愛する小曲が數多あつた。

醉つてから其を讀み始め、朝子が眠りについたのは二時近くであつた。電燈を消さうとし、思ひついて、旅行案內をとりに立つた。幸子の汽車が、靜岡と濱松の間を走つて居る刻限であつた。

翌日は晴れやかな日で、獨り食事などする靜かな寂しさも、透明な秋日和の中では、いゝ心持であつた。

朝子は午後から、龜井戸の方へ出かけた。市の宿泊所に用があつた。かへりに、彼女はセツトルメントへ寄つて見た。新たに兒童圖書館が設けられ、赤兒を結ひつけおんぶした近所の子供が、各年級に分れた卓子を圍んで、繪本を見たり雜誌を讀んだりしてゐた。托兒所の久保と云ふ女が朝子を以前から知つて居て、案內をして呉れた。彼女は僂麻質斯で、二階の私室で休んで居た。髮をぐるぐる巻きにして、セルの上へ袷羽織を着た久保は、やせた肩越しに、朝子を振り返り、

「私の方も見て下さい、そりや私骨を折つて居るんですよ」

渡廊下の踏板を越え乍ら云つた。

「みんな若い人達ばかりで、たゞ音なしく四時まで遊ばしときさへすればいゝと思つてるんだから。――そんな人の方が、又お氣に入るんですからね。私喧嘩したつて爲うと思ふことはやつて貰ふんです。いやな女だと思つて居るだらうけど、いざ子供を動かすとなると、どうしたつて、そりや、私でなければならない事が起つて來るんですからね」

久保は、自分一人で切り廻して居るやうに云つた。そして、變化な子が一人あつて、それが誰の云ふ事もきかない。髮をむしつて暴れるやうなのを、自分が此頃すつかり手なづけた苦心を朝子に聞かせた。

別棟になつて、廣い遊戲室や、醫務室や、嬰兒室があつた。遊戲室の板敷に辷り台や、室內ブランコ等あつて、エプロンをかけた幼い子供達が遊んで居た。先生が、やはりエプロンを羽織つて、一隅に五六人の子供を寄せ、話をしてやつて居た。室ぢゆうに明るい光線がさし込んで居た。その中で、子供の白いエプロンや、兵兒帶の赤や黃色が、清潔な床の上にくつきり浮立つて見えた。知らぬ朝子が入つて行つた故か、子供が、割合おとなしく遊んで居る。朝子は、その行儀のいゝのが、少し自然でないやうに感じた。其事を云ふと、久保は、

「今、おとなし遊びの時間なんですよ」

と云つた。さう云ひ乍ら彼女は、室を見廻して居たが、

「あゝ居ますよ」

窓際の子供達に向つて、おいでおいでをし、

「今村さん、こつちへいらつしやい」

と呼んだ。若い先生は顏をあげ、子供と久保とを見たが、直ぐ彼方を向いた。

「何なの、いゝの、呼んで」

「かまはないんですよ」

紺絣の着物を着た、頭の大きい男の兒が、素足へ草履をはいて、久保の傍へ來て立つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「この兒ですよ、その一寸黙つてるつて云ふの」

久保は、子供が全然自分の言葉を理解しない生物であるかのやうにさう云つて、

「さ、こちらの先生に御挨拶なさい」

子供の肩へ手をかけ、自分の身に引き添へた。素直にされるまゝに成つて居るが、三白眼のその男の兒が久保を愛しても、なついても居ないのは、表情で明かであつた。義務を強いるやうで、朝子は、

「およしなさいよ」

と止めた。

久保は、去りたさうにして居る兒の肩を押へたまゝ、猶、

「今村さん、先生の云ふことは何でもきゝ分けるわね」

などゝ云つた。

朝子は、彼女の部屋へ戻り乍ら、

「子供、もつと放つといてやらなけりや」

と云つた。

「愛素のいゝ子供なんぞ拵へたつて、下らなかないの」

久保は、家庭の無い、健康の無い、慰めのない、自分の生活の苦痛を、持ち前の强情さに還元して、その力で子供も同僚も押して行くらしく思へた。久保は、いろ〳〵な手段で蒐集した藤村の短冊など見せた。

本館の三階に、相原の部屋があつた。朝子は其處で小一時間話した。

相原は、世間で重役風と形容する格幅であつた。たゞ笑ふと、上唇の両端が變に持ち上つて、歯なみよい細かい前歯と齦とがヒーンとすつかり見えた。その小さい口は性格的で、朝子にいゝ感じを與へなかつた。

相原は、先頃退職した或男の噂をし、

「どうして罷めたのかね……いづれ何とかするやうに諸戸さんにも云はうと思つて居たんだつたが」

と云つた。朝子の知つて居る事實はさうではなかつた。

「諸戸さんに、貴方が忠告なすつたんぢやなかつたんですか」

相原は、平氣で、

「ふーん、そんな風に聞えてますかね」

と、云つた。相原の態度と言葉とだけで見ると、朝子の知つてゐる事實の方が間違つてゐると云ふやうであつた。

諸戸の態度を批評するやうなことを云ひ、

「まあ、白杉さんも、一つ確りやつて下さい。今にちよつとは給も出せるやうになるんだらうから」

などゝ云つた。朝子は黙つて笑つた。しんに弱氣な小野心があるので、一人一人の顏を見て居るうちは、悪感情を抱かせては損と云ふ打算が働く。相原はさう云ふ種類の心を持つて居るらしかつた。

歸り途、朝子は人間の生存の尖端と云ふやうなことを深く思つた。道徳や常識、教養など、その人を支へる何の役にも立たない瞬間が人生にある。又さう云ふ非常の時でないまでも、我等を取卷く常識や、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

道德や、其等の權威の失墜の間に生きて行くに、何か心のよりどころとなるであらう。何で人間が人間らしく生きて行く道をかき分けるかと云へば、それは、草木で云へば草木を伸び育てる大切な芽に等しい、人間の心の內にある生存の尖端によつてだ。朝子は、昨夜詩を讀んだ時にも、例へば、

自體を淨めるために結び合ふ―
同じお寺の二つの黄金の薔薇窓が
ちがつた明るさの炎を交じへて
たがひに貫きあふやうに。

此那に高貴で優しく美しい、深い感じを捕へ得る詩人とは、どのやうな心であらう、と思つた。彼は考へるのではない。感じるのだ。――感じるのだ。そして、朝子は、その敏感な本源的な魂の觸覺を、符牒のやうな生存の尖端と云ふ言葉にまとめて思つたのであつた。自分が、放埒の欲望を感じながら、何の爲にか、のめり込まず居る。其はと云へば、正氣は失つても、その尖端が拒絶するからだ。幸子が、昨夜立つ時、

「大丈夫？」

と訊いた。朝子は、ひとりでに。

「大丈夫でなくても、大丈夫だと思つちやつた」

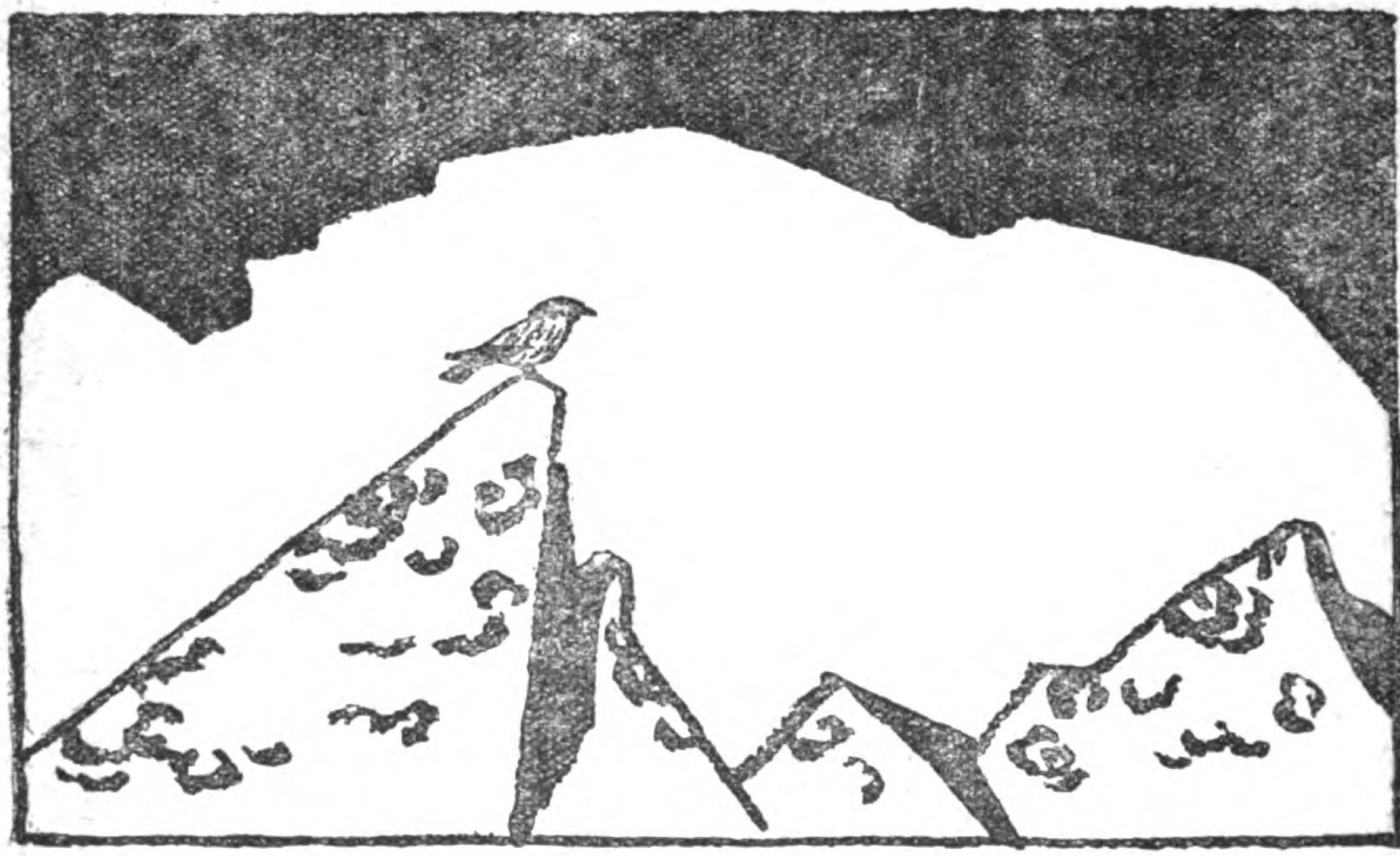
と、捉へどころのないやうな返事をしたが、左樣だ。大丈夫ではないか、その尖端が感じ、選擇し何ごとか主張して居る間は大丈夫だ。その生存の尖端をも押しつゝむ程大きな焔が燃えたらどうであらう。其ならそれで、萬歲だ。朝子は思ひつゞけた。自分は、そして、自分の生存の尖端は、その焔の央にあつて我が生の歌の一つをうたはふ。

朝子は、會つて來たばかりの久保のこと、相原の生活、間には、新しく磨きたての磁石の針のやうに活々と光り、敏く、自分の內心に存在すると感じるものについて考へ、味ひ、長い夕方の電車に搖られて行つた。

六時前後で、電車は混み、朝子の横も後も其日の勞働を終つて歸らうとする職工、事務員などの群であつた。或交叉點で先の車が閊へ、朝子の電車も久しい間立往生した。窓から外を眺めたら、甘栗屋があり、丁度その店頭の燈火で、市營自働車停留場の標識が見えた。黑い詰襟服の監督か何からしい髭のある四十前後の男が、其處に立つて居た。何か頻りに見て居る。鏡のやうだ。よく視たら、彼の手にあるのは女持ちの一つのコムパクトであつた。拾つたのだらう。彼は、偶然停つた滿員電車の中から觀て居る者があらうとは心付かう筈なく、そのコムパクトを珍しさうに、と見、斯う見して居たが、軈て蓋をあけ中について居る鏡で自分の顏を一寸見た。其は直ぐやめ、今度はコムパクトの方を鼻に近づけ白粉の匂ひを嗅いだ。――トラックや自轉車の往き交ふ周圍の雜踏を忘れた情景であつた。

その位長く彼は嗅いだ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



善魔

里見弴

七の三

沖津の玄關に立つが早いか、待ち構えてゐたやうに、お民がとんで出て來た。

「いらつしやい」

いつもの通り笑顏よく迎へて、「有樂座に行つていらしたんですつて？」

殆ど命がけと云つてもいゝほどの思ひをして、別れ話をつけたばかりの鰕藏の芝居を見に行つてゐたことは、瑛龍としては、どのみち說明のしにくいことに違ひなかつた。僅か半月やそこらの間に、けろりと忘れたやうな拘泥のない氣持になつてゐようとも思はれない。もし彼方でヒヨツコリ顏を合せるやうな、まるで思ひもかけない偶然がなかつたとしたら、或はほどへて打ちあけるとしても、今夜は、昌造の前を、たゞどこかほかの座敷にでも行つてゐたやうに、知らん顏ですましたかも知れない。昌造としては、そこになんの疑念を懷く餘地もないのだけれど、——そしてまたその虛心は、瑛龍にも解つてゐさうに思へるのだけれど、なほかつ彼方で出會したことが、多少の氣まづさを感じさせてゐはしまいかといふ思ひやりから、だん〳〵こつちの氣持までが、ぎごちなくなりかけてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ところが、玄関に出迎へたおよが、早速もうそのことを聞き知つてゐた。電話がかゝつたか、それとももう瑛龍自身こゝのうちに來てゐるのか、兎に角第三者が知つてゐるとすれば……そこでまた昌造の心は、二つの方角へ頭を突つ込んだ、――瑛龍が、そのことについて、それほどなんの拘泥も感じてゐないか、或はまた、お民を通してさう見せかけるほど拘泥つてゐるのか、遂にどつちとも云へない、と思つたのだ。

「あゝ」

返事とも笑ひ聲ともつかないやうに、云ひ紛らしながら、導かれるまゝに、「梅」と呼ばれる二階座敷に通つた。

「來てるのかい？」

仕事の道具のはいつた鞄を、違棚に置かうとしてゐるお民の背なかに、早速さう云つて尋ねかけた。

「いゝえ、もうちよつと前に、電話で……。あつちでお逢ひなすつたんですつて？」

「うん。廊下でちよつと……」

「話なすつたの？」

「なに、チラッと顏を見ただけさ」

「あら、さうお」

笑ひながら、下座にさがつて、改めて挨拶をした。すぐそこに、ほかの女中が運んで來た茶道具や絞り手拭などを、それ／＼手配してから、

「どうしてまた、御一緒に歸つてらつしやらなかつたんです？」

「だつて、彼方じやア、知らない人のおつれがあるんだもの」

「へーえ、お客様ですか」

「いゝえ、娘さんらしい人だつたよ」

「あゝ、さう！」

と、嚥み込んで、「ぢア、美登利屋の娘さんですわ。今そこから電話をかけてよこして、お見えンなつたらすぐ知らせてくれつて云つてたんですから、きつとさうですよ」

「ぢア さうだらう」

「貴方、御飯は……？」

「無論まださ」

「その前に、ちよつと御風呂お召しなさいましたら？」

「あゝ、さうしよう。……だけど、電話はどうしたんだい」

「電話つて……？」

「だからさ、美登利家へさ……」

「まア／＼」

「何がまア／＼だい」

「はいつてらつしやるや否や、すぐ云ひつけときましたよウだ」

「さうかよウだ」

半分はてれかくしに立ちあがつて、「さア、お支度を併せよ、風呂に行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くから――

悠々とした流し場で、三助に背なかをながさせてゐると、勢よくがらがらッと雨戸をあけて、いきなり瑛龍が顔を出した。

「いらつしやい！」

「こんばんは――」

「あけといても寒かアないでせう？」

「ちつとも」

「御飯は？」

「これからだ」

「なんか頼んであるの？」

「いや、まだきめて云ひつけやアしなかつたけど……」

「どんなものがあがりたい？」

「さうだな……」

「脂ッこいもの？さつぱりしたもの？」

「久振りで支那料理なんでもいゝな」

「ぢアさうしませう。……鱶の鰭？」

「いゝね。そのほか、よろしくまア、あんたに頼むな」

「あたし、よく知らないことよ」

「いゝ加減でいゝ。そイから、忘れないで老酒を……」

「はい。……成可く早くあがつていらつしやいね」

返事も待たずに出て行つて了つた。いやに調子づいた瑛龍が、風呂場の湯にも、やゝ一杯きかつたが、同時にまた、待築屋での偶會、を、おたに、小龍も氣にかけてゐたいといふ風に、強いてさうしたやうにも心が咎められた。

（いけない〳〵！）

昌造は、浴槽のなかで、私にひとり呟いた。（かういふことで、惰弱的に、だん〳〵氣持が細く動きだすといふことは、決していゝ傾向ぢアない。瑛龍は女だから、それでもいゝが、俺までそれに惹き込まれちアいけない。根本の氣持にさへ揺ぎがないなら、でくの棒のやうに無神經でいゝんだ。それでなくつちアいけないんだ）

座敷に歸ると、けれども、口に出るのは、やはりその話だつた。

「あんたは、こつちに出ていらしつた時から、あすこへ行くつもりだつたの？」

「さうぢやアないさ。あんたが、八時か九時頃になるつて云ふから、ぢアちよつと寄つて行かうかな、つて氣になつたんですよ」

「あたしね、どうもあんたらしいと思つたんだけれど、とてもあたしの眼ぢア見えないから、お主さんにさう云つて見て貰つたのよ？」

「お主さんつて誰？」

「美登利家の娘さんよ。……小母さんがね、一緒に行かう行かうつて……」

「美登利家の女将さんだね？」

「えゝ、たんとかかんとか云つて斷つてたんだけれど、あんまりさう

云つてくれるのに惡いと思つて……」

「なんにも知らずにかい？」

「知つてるのよ」

「知つてるつて、つまり、どのへんまで」

「兩方で大好きなのに、世間がうるさくなつて來たもんだから、仕方なしに別れたんだと思つてるんでせう。だもんだから、構やアしないやね、あたしが一緒に行つてあげるから、おいでよ、おいでよつて、なんてつても聽かないの」

「つまり同情してくれてるわけなんだね？」

ほかから聞える筈はないのだから、瑛龍が自分で、別れたまでの話をし、その餘のことは一切默つてゐる、といふ關係とは察しられたが、いかにも無理のないことで、別にそれを卑怯とも思はなかつた。

「でもね、あんたが行つてらつしやるとは夢にも知らなかつたから、吃驚しちやつたわ」

「こつちだつて、まるで思ひがけなかつたよ。さうならさうと、電話の時に云やアよかつたのに。さうすれアあたしは、行きやアしなかつたんだ」

「どうして？ 逢つたつてちつとも構やアしないぢアないの」

「構はないと云やア構はないやうなもんだけれど、どうせどつちの行つてたことも、すぐ剛郁には知れちまうんだからね、さうすると、前にちやんと打合せでもして來たやうにしか取れないだらう。剛郁にしちア、いゝ氣持がしなかつたに違ひないよ。何も面當がましく、二人で一緒に見に來ないでもいゝ、――それア誰だつてさう別々に來てゐるだけに、なほさら思ふよ」

「でも、それア仕方がないわ」

然し、あの芝居も、いゝ加減面當がましいもんだつたね。何しろ、相手が小説家だけにね……」

「あんたは……」

と、それには觸れたくない樣子で、「あとの狭寛だかなんだかまで見ていらしつたの？」

「いや、見ない。あれから、ちよつと剛郁に逢ひに行つて、脚本の出來なかつた斷りを云つて……」

「築地へいらしつたの？」

「さうさ。どうして？ いけないかい？」

「いけなかアないけど」

「ちつと岡々しかつたかね。然し、あたしア、實際なアんとも思つてやアしないんだよ。と云つて、別に、輕蔑しきつてるつてわけでもないし……」

案じてゐたぎごちなさなどは、氣にしたくもなくて、きらくとわけが解つて了つた。

やがて晝飯が、好きな支那料理で、老酒を二三本もあける頃には、瑛龍もすつかり氣を樂にして、

「あのね、二縁目だつたかに、手紙を書いてどこかへ持たしてやるところがあつたでせう？　あすこでね、お母さんたら、あたしをつッ突いて、あの手紙、瑛親さん宛よ、ですつて……」

などゝ、その冷かしも、まんざらでなかつたやうに、笑つて話してゐた。男にしろ女にしろ、別れた後に、さきの人の上を噂く云ふのは、假令それが眞實であつても、決して氣持のいゝものではないが、かういふ多少の甘味なら、品造の性分では、聞き辛いどころか、一緒になつて心から微笑まれた。

「然しまア、何しろ、よかつたよ」

何がどうよかつたのか、はつきりした考へもなしに、機嫌のいゝ笑顔で、たゞそんた風に呟いたりした。

「惡魔」は「安城家の兄弟」と題する長篇の中途の一小部分で、まだこの何十倍といふほど、前も後も書き加へなければならない、謂はゞ未定稿であるが、それにしても、この切れ目では、あんまり纏りがつかなすぎるかとも思はれるけれど、今年一杯といふ約束で書きだしたものゆゑ、ひと先これで擱筆することにした。讀者の諒恕を乞ふ。——作者

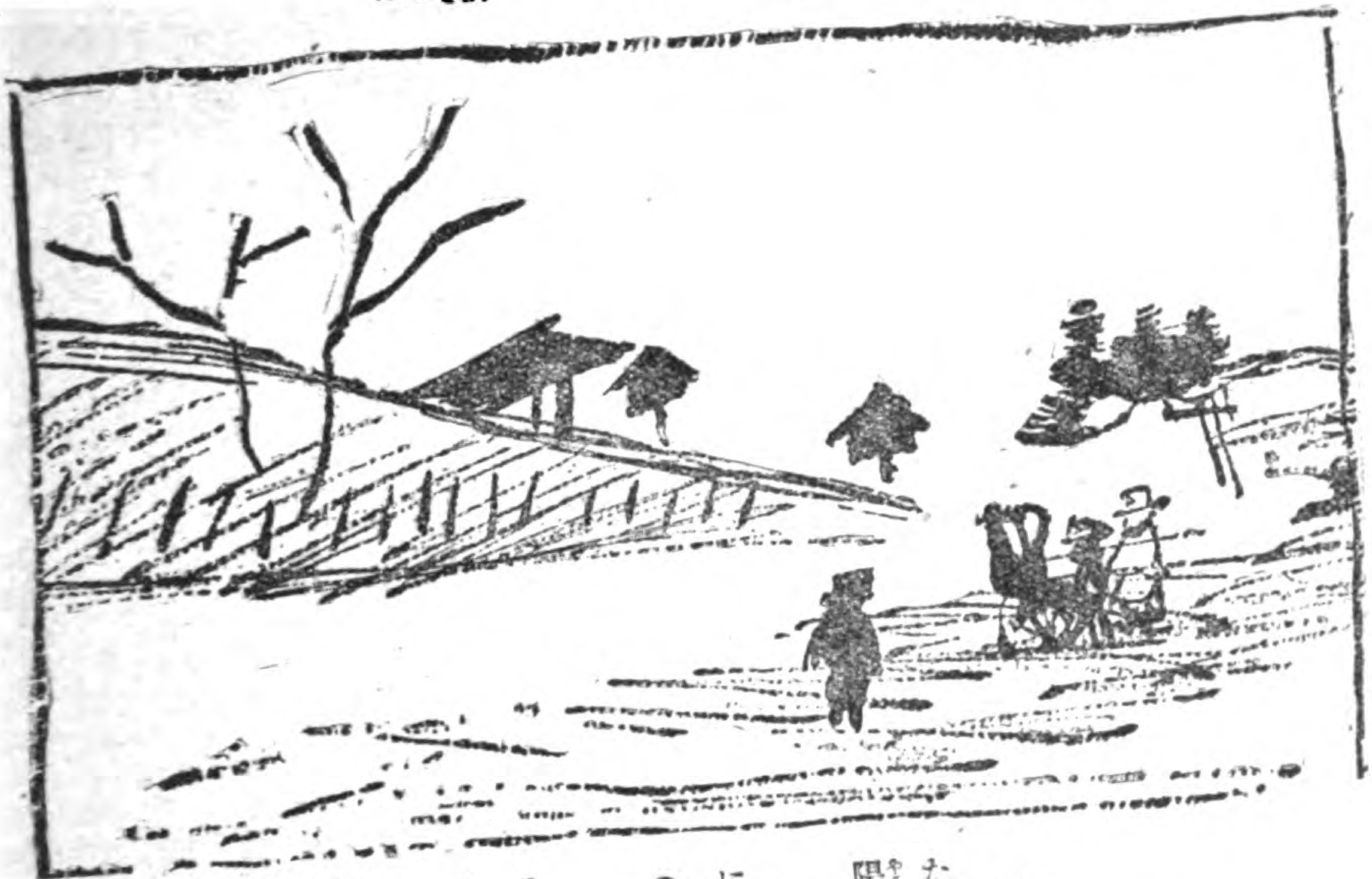
眞山青果著　—改造社發行—

（戯曲集）鼠小僧次郎吉
桃中軒雲右衛門

人間の眞相と人性の誠實とを其の人物徳行の完全圓滿に求めず、不完全と不具足との間に見んとする得意の趣向構想こゝに盛り、わが鼠小僧次郎吉を、わが桃中軒雲右衛門を、その傲慢、傍若無人、豪奢、驕傲の外面生活のみに見させず、その内に潜む哀愁と憂苦を、弱小を、悔恨を、そして内省的良心を描く。著者が不屈の意氣はこの二人物を縱横に躍動せしめて一讀巻を掩ふ能はざらしむ。

定價壹圓八拾錢（送料二十錢）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



放浪の宿

里村欣三

午さがりの太陽が、油のきれたフライパンのやうに、風の死んだ街を焙りつけてゐた。プラタナスの街路樹が、その廣い掌のやうな葉身をぐつたり萎めて、土埃りと、太陽の強い照りに弱り拔いて見えた。

街上には、動く影もなかつた。アスファルトの路面をはげしく照りつけてゐる陽脚に、かすかな埃りが舞ひあがつてゐるばかりで、地上はまるで汗腺の涸渇した土工の肌のやうに、暑熱の苦悶に喘いでゐるのだ！

この太陽のじりじり燒きつける執念深さから、僅かな木影や土塀の陰を盜み出して、そこにもこゝにも裸形の苦力が死んだやうに、ぶつ倒れてゐた。そして寢苦しく身悶えする肌に、食ひ散らされた西瓜や眞桑瓜の種子が、おかまひなくこびりついた。

日幕を深くおろした商店は、まるで啞のやうに靜まり返へつて、あの繁々しい、支那街に特有な毒々しい調子で響いてゐる筈の算盤や銅貨の音さへも、珍らしく聞えて來なかつた。幕の隙間からは、涎をたらして、だらしのない姿態で眠りこけてゐる店員たちの姿が見えた。蠅ばかりが、閑散な店の土間を一杯に、わんわんとかすかな唸りをたてゝ飛び廻つてゐるたけだつた。………

すると軈て、この熱射の街頭にぽつんと一つの影が現はれた。その影は初めに、蝙蝠

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の臓い、ゆるやかな傾斜をもつた大通りの果てに――恰度オレンヂ色の宏壯な中國銀行の建物の下に、ぽつんと黑い一つの點になつて出現したのであるが、その黑點が太陽の熱射のなかを泳いで近づいて膨らみ切つた時、それは日燒けのした、埃りまびれの若者が七月の太陽にゆだり切つてよろめいて來るのだつた。嚙み碎いた鉛筆の末端のやうに、先端のほうけたステツキに、小さな風呂敷を結えつけて、それを肩にひつ擔いでゐた。その詰襟の黑ぽい洋服は汗と埃りに、ぐしよぐしよになつて、しかも餘り大きくもない體格を引きづるやうに持て餘まして、底のあいた編上靴で埃をまきたてながらよろめいて行つた。すると、恰度彼のよろめいて行くアスファルトの大通りが、やがて二つに裂けて左右に岐れてゐた。その岐れ目の薄馬鹿の額のやうに間ののびた面積が、手際よく楕圓形に積土されて、プラタナスの木株が植ゑ込まれ、その上に四五脚の廣告ベンチさへ曝されてゐて、この不體裁な大通りの致命的な缺陷を、その工夫が危く救ひあげてゐた。この設計技師の苦心も、商ひや仕事を抛り出してベンチの上に眠りこけてゐる不潔な苦力や路傍商人の不遠慮な侵入に他愛もなく踏みにぢられてゐた。

若者はそこまでよろめいて行つた時、ちよつと立ち停つた。路を考へるやうにも見えたし、また空いたベンチを搜し求めるやうにも受取れた。だが、その何れでもなかつた。彼の眼は、無料宿泊所の新らしい木札に、吸鐵石のやうに吸ひつけられたのだ！　かすかではあるが、疲れ切つた若者の顏には生色が動いた――その若者は木札の意味を讀みとると、すぐに病院の柵に沿うて右側の路に折れて行つた。病院の柵が盡きると、埃の多い十字路になつて、その向ひ側の一角はアカシヤの深い木立に蔽はれて、支那風の土塀にかこまれた正念寺だつた。正面に黑い門が開いてゐた。門柱の一方には「無料宿泊所」の看板があつて「お宿のない人、職のない人は遠慮なくお越し下さい」と、親切な添え書きさへしてあつた。

この寺院と斜かひになつた十字路の角は、ロシヤ人の酒場だつた。酒場と云つてもそれは、馬廐よりも下等な飯屋や、もつとそれよりもひどい下層勞働者達が、木製のカルバスや生胡瓜を嚙つて、安酒を呷つたり、牛の臓腑を煮出したスープを啜つて飲み食ひする劣等な飲食店であつた。その店頭には蒲團の破目からはみ出たボロ綿みたいな髮の毛の小娘が、雜巾よりもひどいスカートから泥だらけの素足を投げ出して、馬鈴薯の皮を剝きながら、そのまゝ床におツかぶさつて居眠つてゐた。薄暗さうな猶太系の縮ら顏の主人が、風の入りさうもない店の奥の薄暗いカウンターに、ボイルされた、ポテトーみたいに、湯氣の吹きさうな饅頭を投げ出してゐた。

若者は注意深くロシヤ人の酒場を盗み見ながら、そのまゝ瞬間の思案もなく正念寺の黑門に吸はれて行つた。門のなかはアカシヤと椽の木立が自然のまゝに生ひ育つて、その樹間はほの暗いほどの雜草に埋れてゐた。本堂に通じる路だけが、それでも白く掃き淸められてゐる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。

若者は二三步よろめいて行つたが、ふと突然に立ち止つた。こゝにまで裸體の苦力が侵入して來て、木影の雜草のなかに、鮪みたいな物凄い人間の腹が無數に映つたからである。彼は感じ深い面持で、そのゐぎたない風情を眺めた。そして無料宿泊所が、自分たち同國人にのみしか與へられない恩惠を、阿彌陀如來の廣大無邊の慈悲に民族的な息詰りをすら感じながら、本堂脇の玄關に步いて行つた。

『ごめん下さい』と、彼は椽の端に投げ出された毛脛を眺めながら、二聲ばかり呼んだ。すると欠伸ひながら、毛脛がぴよこツと縮むと、白い襟卷一つの坊主が頭から這ひ出して來た。

『お世話になりたいと存じますが……』

無精髭の伸びた坊主が、迂散臭い眼付きで、若者の頭のさきから靴のさきまで眺め上げ、眺めおろした。

『何處から來た？』

坊主は木を折るやうに怒鳴つた。

『は、奉天から』

『步いてか？』

『え……』

『そこに帳面と硯があるで、原籍と姓名を書きとめておいて、向ふの長屋で休むといゝ』

坊主は面倒臭く言葉半分に言ひ捨てゝ、とつとと庫へ戻つてしまつた。

『お腹が減つてゐるんですが、一口……』と思つたが、もう追ひつかなかつた。若者はぼんやり氣の弛むのを感じた。

宿泊所と云つても、それは名ばかりのもので、假家づくりの八疊一間きりの長屋だつた。何んの目的のために、こんな假家を宿泊所に選したのであるか、その坊主の魂膽は言はずと知れてゐる！　窓ガラスは破れ放題だし、疊はぼこぼこにほぐれてゐた。ペンキの剝げ落ちたドアに通じる路だけが、どうにか路らしく踏みにじられてある以外は、雜草が跳梁するまゝだつた。恰もそれは雜草に埋れた破家の感じで、得體の知れない蔓草に窓も壁も蔽はれて、更にこの宿泊所に陰鬱な零落者の陰を濃くするために、葉の繁つたアカシヤの木立が深々と枝を垂れてゐた。

若者は把手の壞れたドアを開けて、漆苔の生えた土間に入つて行つた。忽ち蠅の群が、かすかな唸り聲をあげて襲ひかゝつた。

『ごめん下さい』

素裸の男が默つて顏をあげた。髮の濃い、たが穩かな面構の四十男で、ひどいトラホームを患つてゐると見えて、赤く爛れた脂つぽい眼付で、股の間に拗げた猿又の虱を潰してゐた。

『何處つから來た。兄イ！』

その男は無表情な口のきゝ方をした。

『え、奉天から……』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『歩いてか？』

『え、……』

男は再び無感動な動作で、虱を潰し始めた。が、ふと

『その兄イも一昨日大連から歩いて來たんだ』と、言つて顋をしやくつて見せた。『二日三晩まるで死屍みたいに寢通しなんだ』

さう云つてまた、彼は無感動な顏付をした。その男の肢の向ふに、その通りの青年が寢汗をかいて寢通つたまゝで眠り落ちてゐた。黒黒と日焼けのした顏は、蒼白いむくれが來てゐた。もういゝ加減に叩き起さなければ！

若者はごろりと横になつた。眼の凹むのを覺えた。

『飯は食つたか？』また男が問ひかけた。

『いゝえ、一昨日から……』若者は情けない表情をした。

『さうか。そこの新聞紙をめくつて見ろよ。胡瓜と黒パンがあらあな』

若者は咽喉から手が出るほど、飛びつきたかつたが、もぢもぢせずにはゐられなかつた。——もつと適切に言ふならば、この男の親切な言葉に對して、何かから精一杯な、感謝の心持の溢れた言葉だけででも報ひたかつたからだ。

『遠慮するな。困つた時はお互だよ！』

彼は相變らず無感動な表情で虱を殺しつゞけた。

『有難うよ！』

若者は譯の判らない感動で、反つて無技巧な言葉を單純な感激で押し出してしまつた。新聞紙をめくつて黒パンを手にした。香ばしい匂ひがぷんと來る。——ざらついてはゐるが、心持ねばついた觸りよかな、その感觸は一體何日ぶりに經驗する快よさであつたらうか！若者はともすると、瞼に溢れて來る涙を危ぶみながら黒パンの塊を二つに引き裂いて、ごくんと唾液を胸元深くのみこんだ。そして次の瞬間には、餓鬼のやうに貪りついてゐた。

若者が眼を醒したのは、翌日の夕方であつた。一晝夜ぶつ通しに眠り通して、まるで魂を置き忘れた人間のやうに、ふぬけた格恰で起きあがつた。何かの悲鳴を聞いたやうにも、またさうでないやうにも思はれた。

ドアが忙しさうに開いたり、閉つたりした。まだ若者の知らなかつた支那服の男、それに逞しい體格の黒眼鏡の男、虱をひねり潰してゐた昨日の男、それから大連から歩いて來たと云はれる青年の四人が、それぞれ忙しく水を汲み込んだり、短刀を研いだり、子供を追ひ散らすために、怒鳴つたり喚めいたりしてゐた。

『何事だらうか』若者は不審に思つた。生欠伸を嚙みしめながら土間におりて行くと、その足元にどたりと犬の死骸が落ちた。ドアの外から支那服が投げ込んだのだ。彼は吃驚して、飛び退いた。

犬はまだ撲殺されたばかりらしく、鼻面に、、を垂らしてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『は、は、はツ。煮くた、御馳走するぜ！』
支那服は筋張つた顔を、てらてらさせて笑つた。『若いの！　よく覗いてゐたな。赤犬だ。頰べたが千切れるほど旨いぞ！』
『やう、出來た。誰れが料理んだ。支那服、貴樣の腕前を見せろよ！』
逞ましい體格の黒眼鏡が、濡板と、研ぎすました短刀をひつ提げて這入つて來た。そして抛り出した濡板の上に、短刀を突つ立てた。
『馬鹿！　貴樣だよ』支那服が罵り返へした。だが、親しい間柄だと見えて
『怖毛ついたか』
『馬鹿ぬかせ！』
・と、二つ三つ言ひ爭つた揚句、支那服が濡板の上に犬をひきづり上げた。ふと、黒眼鏡が、若者に氣づいて
『やう、起きたな。何處から流れた』と、親しみ深い笑ひを見せた。
『え、奉天から。どうか御願ひいたします』彼は素直に頭を下げた。
『ほ、腹が減つたら。今に腹一杯喰はすぞ！』
『え、どうぞ』
『出來上がるまで、上つて休んでゐなよ』
もうこの時、鮮かな支那服の短刀で動脈を切り開かれた濡板の犬は、まるで洗濯物のやうに腸たかを揉みしぼられてゐた。、、、が、小氣味よく切口から溢れ奔つて、それが濡板を染めて、五寸四方位の大きさに剔り抜かれた穴に流れ込んでゐた。晴れ切つたものだ！
『どうだ。小氣味よく流れ出すぢやねえか。、、、は氣味のいゝもんだな』
支那服が、うつとりした眼で、血のついた手を毛だらけにしながら、犬の胴を揉み抜いた。
『うむ。生血だぞ。その度胸で呑み干しちやあ！』
血がすつかり絞り取られると、犬はぐつたりと濡板の上に伸びて、手脚すらも靑ばんでゆくやうに感ぜられた。白い眼をむいて、黒づんだ昆布の葉を思はすやうなギサつ いた口唇の横から、撲殺される刹那に、自分の、、食ひちぎつたらしい、、、、、、を、だらりと意氣地なく吐き出してゐた。
水で手と短刀を洗ひ清めると、垂れさがつて來る袖をまくり上げて、支那服が短刀の鋭い双さきをずぶりと犬の頸に差し込むと、その握つた柄を力一杯に、しかも見事な手つきで尻のあたりまで切りさげておいて、その双を逆に巧妙に使ひ分けて皮肉と肉のなかに差しいれて、見る見るうちに、一匹の野犬を血だらけの肉と皺くちやな一枚の毛皮に引き剝がしてしまつた。
短刀が血糊をきつて、再び閃めくと、腹部に一筋いれられた切目が、ぷくツと内側から押し破れて、一氣に、、、、、、、、、、、、、、、、溢れるやうに犬の投げ出された四肢の間へ一杯に流れ出た。と、支那服の手が、その溢れ出た臟腑をかき集めて、胸部の間

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に辷り込んで、二三度胸壁を指さきで抉ぐると、綺麗に二つの腎臓がはかれて、肝臓や胃袋などゝ一緒くたに爼板の上に掻き出された。そして大腸をたぐつて、その最後の部分に刃がはいると、見事に肛門から切斷されて、一抱えほどの臟腑が、ずるずると爼板を辷つて、血を絞り捨てた同じ穴へ雜作もなく落こつてしまつた。その上に、支那服が砂を後足でかぶせてしまふと、もうすつかり食慾を唆る肉塊以外の何物でもなかつた。

　大腿部の關節に、短刀の刃が食ひ込んで、骨と刃物の音が軋むと、ぽろりと譯もなく肢が完全に離れた。こゝまで一氣に、見事な冴えを短刀の刃さきに見せて、料理つゞけて來た支那服が、その腕を黑眼鏡に投げつけると、

『おい！　骨をはづせよ！』と、始めて怒鳴つた。

『よし、手傳はう』かう叫ぶと黑眼鏡は、始めて支那服の使ひ動かす刃物から眼を反らした。そして「ふうーツ」と、感嘆の吐息をついた。顏をつぶした男と、大連から來た青年が、水を汲んだり、薪を拾ひ集めたりしてゐた。

　またしても、近所中の子供が、木の枝によぢ、窓にぶらさがつて、あるひはドア一杯に押し寄せて、好奇心に燃える眼を瞠つて、この野人達の獰猛な料理に片唾をのんでゐた。

『うるさい！』

ふいと、出し抜けに支那服がかう叫ぶと、叩き切つた犬の首を、子供の群に力一杯投げつけた。

『わあッ！』

　子供たちは、一目散に逃げ散つた。そして臆病さうに、この光景を遠巻きにした。

『犬殺し』

と、口々に罵りつゞけてゐたが、やがてその怒聲が『お坊さんだ！お坊さんだ！』と、喚き聲にかはると、安心しきつて、またしても子供の群が、坊主と一緒にドアに溢れ込んだ。坊主が、そこに現れる前に、癇癪の方がさき走つて來たやうな具合に、坊主はその無精たらしい面をドアに覗けないうちから、

『無茶だ。無茶だ。まるで畜生道だ！』と、喚めき込んで來た。

『出て行け！　出て行け！　出て行つて貰はう。お前たちを一刻もこゝにおいておく譯には參らぬ。』

　お坊さんは劇しい逆上で、息切れがしてしやうがないやうに、眼と鼻と口で一緒くたに息を吸ひ込んだ。

『ふ、ふん……』

　支那服がお坊さんの袖の下でくすりと笑つた。

『まるで餓鬼畜生だ。飼犬を殺して、あらうことか、この尊い佛地を穢して煮て喰はうといふのだ。淺間しい畜生道の仕業だ。お前等のやうな墮地獄の住民は一時も、こゝに置く譯には行かん！』

默つて骨をはづしてゐた黑眼鏡が

『喧ましいわ！　糞たれ坊主！』と、ふいに喚めき唸めいたかと思ふと、握つてゐた骨を土間に叩きつけた。「糞、豚小屋みたいな穴居に俺たちを叩き込んで置いて、手前は寄附を強請つて世の中の人間を瞞しこんでゐるんぢやあねえか。利いた風な口を利くねえ！』

『よし。貴様、よく覺えてゐろ！　このわしの手に仕末ができなければ、ちやんと警官がある。きつと追拂つてくれる。追ひ出さずに我慢がなるものか！』

『おゝ！　やつて見ろ！　野良犬の替はりに、こんどは手前の番だ！踏板に這ひつくばつて後悔するな』

血だらけの短刀が、支那服の手からさつと閃めいて、髭爺の腰骨をぐさつと突通した。坊主はぴよこつと頭をかがめたかと思ふと、そのまま逃げ出してしまつた。後も見ずに！

坊主は、その後再び顔を覗けなかつた。

　酒場の主人は「赤」であるのか「白」であるのか、まるで見當がつかなかつた。酒錢でさへあれば、一枚五厘にもつかない銅貨を五枚も投げ出せばそれで充分なスープを、たつた一杯だけしか賣らないお客であつても、彼は因業な眼尻を細めて、にこづいた。

　大通から歩いて來たといふ男は、ロシヤ人をさへ見れば、女の髯に見惚れるやうに、その憂鬱な瞳に、憧かれの閃めきをちらつかせた。彼は大通から飲まず食はずに步きとばして來て、その惨憺たる苦勞にも懲りずに、まだこれから、地圖だけで見ても、牛の鞣皮みたいに漠々として見當もつかないロシヤといふ國へ、線路傳ひに步きかねない意氣込をもつてゐた。彼はこの二三日炎天の乾干みたいになつて街中を步き飛ばしてゐたが、何處でどう捜し求めて來たのか「カルパス」の行商をやつてゐたが、その賣り上げの全部はこの赧顏の強慾な酒場ではたいてしまふのだつた。

　また彼はどこかで、いつ習ひ覺えて來たのか知らないが、「ボルシエビキイ」だの「カリーニン」だの「プハリン」だの、または「イリッチ・レエニン」だの、それから「ハラショ」に「スパシーバ」くらゐの露西亞語を、支那語と一緒くたに使ひまくつて、得體の知れない氣焔を、誰れかれの差別なく、強慾な主人をでも、生れ落ちた時から馬小舍の悪臭から抜け切つたことのないやうな馭者、また何處でどう一日一日を喰つて行くのか、まるで見當のつかないやうな素足の露西亞人をよく捕まへては吹つかけて、『ボルシエビキーは好きだ』の『帝政派は嫌ひだ』だのと、まるで鷄の尻から臓腑をひき出すやうな手付で、夢我夢中で興奮してゐた。

　露西亞人たちは、その野放圖もない胴體で、ちよつとばかり力を入れば、押し潰れさうな手製の貧弱なテーブルを股のなかに抱き込んで、しかも雀の涙ほどのウオツカの杯を見つめながら、この道化者の氣狂ひじみた饒舌を猫脊に微笑んでゐるのだつた。そして彼にはさういふ仕種みたいな言動が、一言の反駁もなく彼の氣焔に微笑んでゐて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くれることが、何よりも嬉しいと見えて、それだけでもう充分に有頂天になれて底抜けた興奮に驅り立てられずにはゐなかつたのだ。

「大連」は全く、交尾期のついた馬みたいに荷馬車を蹴飛ばして、シベリヤの曠野を突走りかねない量見を抱いてゐるらしかつた。それはまるで途方もない心掛けだ！

若者はこの「大連」がさういふ途徹もない量見と、氣狂ひ染みた情熱をもつてゐやうとは夢にも知らなかつた。

第一大連は、若者が豚小舍みたいな宿泊所に辿りついた時に、虱を潰してゐた男が、痴呆症みたいに二日三晩も寢通したと言つたし、その上支那服が野犬を料理る時に、彼は憂鬱に默りこんで、水汲みにぼい使はれてゐながら不服さうな面も出來なかつた。それに暇さへあると、誰れの話にも割り込まうとはせずに、無口な面構へで寢轉んでばかりゐた。

その彼に、こんな狂じみた情熱があらうとは！　若者は夢にも知らなかつたのだ。

黑眼鏡が醉ひつぶれる時に、きまつてあげる「オダ」に依れば、彼はどうにもしようのないやくざ者で、人の女房と姦通して、おまけに亭主の頭の鉢を金テコで打破つて、無期徒刑を喰つたのだが、御大典のおかげで、二度と出られる筈のなかつたこの社會に舞ひ戻つて來たといふ札つきの「金スジ」だつた。それにまた懲りずに、彼奴はそのやくざを自慢の種にして、この人生を金テコでぶちのめすやうな滅茶な調子で、押しまくつて生きやうとするのだ！

その日は暑かつた。太陽がカッと照らしつけてゐる表へ、女の毛を投げ出せば「じじッ」と燃え上つてしまひはしないかと思はれるほどだつた。

若者は何處をほうついても仕事がなかつた。それで彼は飢え死する覺悟を決めたやうな悲痛さで、蝙蝠傘をかゝえて宿泊所に舞ひ戻つてはね轉がつた。すると、時計の直しが見つからないで團扇をかゝえ込んだ、爛れた脂つぽい眼付の男も、同じやうに樫の木のやうに固たさうな脛を投げ出して寢轉んでゐた。

さうだ。若者が流れ込んだ時に、この虱を潰してゐた男は時計屋だつた。

この男は時計の修繕を拾ひながら、それで世界を流して歩かうと云ふ、また滅相もない野望をもつてゐるのだ。この時計屋の話によれば、可愛いゝ女房が、のびたうどんみたいになつて、あの世へくたばつた日から、店を疊んでしまつて、その途徹もない野心を、學生鞄のなかにネジ廻しや、人形の靴みたいな合鍵と一緒くたに納ひ込んで、もう五年この方流浪してゐるのだと云ふ——。この男のその氣持はまるで解らない。支那服は雜作もなく（なあに、女房の死態に、魂をあの世へかッさらはれたのさ。それでフヌけた譯さ）と、傲慢に片付けたが、或ひはさうかも知れない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若者が厄介な苦行者同然の調子で、自分の帽をやけ気に投げ出すと、ぴよこッと時計屋が折れ釘のやうに、起きあがつて手を伸ばした。
『若いの！ 三銭ばかりないか。腹が減つてしやうがないんだ。』抜毛のやうに頼りない顔を出した。
『三銭どころか。この通りさ』若者は両手をはたいて見せた。
『さうか』
折れ釘はまたそのまゝ倒れた。
そしてそれつきりで二人がうと〳〵とかゝつた時、絞め損つた鶏を飛ばしたやうな消魂しさで、引き裂かれるやうな悲鳴が、耳のつけ根で爆発した。同時に、若者と時計屋がはね起きた。
すると、どうだ！ 短袴子の赤い腰紐を引き摺られたまゝで、ぐるりと狒二面餅のやうた、、、、、、、修理婦が、そこら中に糸巻きや針や鋏などを一面に投げ散らして、あがき喚めきたてながら、、、、の黒眼鏡に、、、、、、、、、、、、、、、――それはまるで一秒間と、、、、、、、、、、、、、、、までであつた。
『いやあッ！』と、魂をさらはれて、豆腐粕みたいにフヌケ切つた時計屋でさへも、脂だらけの、はつきり見分けのつきさうもない眼玉を、南瓜頭と一緒くたに、樫の木みたいにごつ〳〵した股倉につッ込んでしまつた位だ。
若者はたゞ、火花のやうにカッとした。それでそのまゝ、燐火箱に尻餅をついたやうな震れ上がりかたで、蹴犬みたいな怒り顔をたてゝ黒眼鏡に夢中で飛びかゝつた。それまではよかつたが『うぬ！』と、相手が頓かく喚めいたと同時に、彼はドアの外へ横から右にそのまゝ吹ッ飛んで、雑草のなかに、、、、、、ぶざまな格好で丸まつてしまつた。そして気がついた時、若者は燐火箱を尻の下に敷いた時よりも、もつと素迅い動作と、地球の外へ吹ッ飛ぶやうな勢で逃げ出した。一体どうしたといふのだ！
正金寺の門前には、露西亜の酒場があることに変りはない。だが、今日といふ今日こそ「大道」は、カルパスの元も子もすつかり綺麗強りと、ウオツカの酔ひとひつかへてぐでん〳〵に酔払つてゐた。
『タワリシチ！』から怒鳴ると、脂つぽい針松の木椅子を蹴とばして、彼は鉄砲玉のやうに吹つ飛んで行く若者を、かつきりと釘抜きみたいに抱き留めてしまつた。
『飲め！ タワリシチ！ 飲め！』
彼は漬架のやうに度肝を抜かれた若者を、わ、は、はッ、わ、は、はッ！ と牛の舌みたいな口唇を開いて笑ひ崩れてゐる豚の尻みたいに濁汚いロシヤ人の群のなかに突き飛ばした。
『日本人よろしい！』
『ボルシエビイキ、ハラショウ！』
その濁汚いロシヤ人が、一斉に手を求めた。若者はこの毛だらけの、豚の蹄みたいな、途方もなくでつかい無数の掌の交響に、す

つかり面喰つてしまつた。

　大連はもう仕末におえない程に酔拂つてゐた。

『飲め。畜生！　飲め。俺は自由を愛するんだ。俺は自由の國ソビエツト・ロシヤを誰よりも愛するんだ。糞！　いゝか。よく聞け、俺は。俺はだ。家風呂敷みたいなロシヤで、自由に背伸びをして生きたいんだ。いゝか。さあ、若いの飲むんだ！』

　若者はすつかり酒に惑かれてしまつた。が、また彼奴は彼奴で、性根の据らない小盗人みたいに、たつたいまはちける程に蹴とばされた睾丸のことも、鐵砲玉のやうに逃げ出したことも、すつかりけろりと忘れてしまつて、酔拂つた大連が差し出すウオツカを呷り始めたのだ。

　そして直ぐに、大連の酔ひに追ひ着いた。

『さうだとも！』若者は出抜けに叫び出した。何がたんだか判らない癖に、彼はよろめく脚を、そこいら中の露西亜人の長靴や、破れツポンにぶちつけながら

『さうだとも！　兄弟。ふん、浮草みたいに何處をうろつかうともだ。いゝか！　根なし草ぢやあるまいし、ちやんと住み心地のよささうな土地に根をおろさうてな心構は、ちやんと、なあ兄弟、しつかり握つてゐやうぢやねえか。馬鹿にすんねえ！　間抜け奴。一體どこの國の土地がよ、この俺の口を食ひつないでくれたんだ。へん。立ン坊ぢやあるまいし、ちやんと腕があるんだ。俺の腕を知らねえか。左官の腕吉を知らねえのか。この間抜け露助奴！』

　彼は酔つた。怒鳴る本人すら譯の解らない啖呵を吐き出しながら、顔中を赤貝みたいにむき出して、笑ひ崩れるロシヤ人のテーブルを泳ぎ廻つた。

「若いの」は左官だつたのだ。彼がステツキに結びつけてゐた風呂敷は、コテとコテ板の商賣道具だつたんだ。その左官が黒のよごれた詰襟の洋服と、破れ靴で流れ歩いてゐるんだが、それは全く二目と見られた態ではない！

　植民地の風習といふものは何故に、かうもいなせな職人の風俗を、泥溝からあげた死骸みたいに、すつかり威勢のないものにしてしまはなければ承知しないのか！

　だからこそ、支那人に内地人の勞働力が、邪魔つけな石塊みたいに、隅の方に押しこくられずにはゐないのだ。洋服が決して、民族的衿持にはなりはしないのだ。氣を付けろ！

　怒鳴るだけ怒鳴ると、左官も大連も、ゆで上げられた伊勢海老のやうに、曲がるだけ體を股倉に曲げ込んで、ぬるぬると吐き出された肉片や、皿からこぼれ落ちたスープに辷べる土間に坐り込んでしまつた。

　この死屍みたいに酔つぶれた酔どれを眺めると、赭ら顔の酒場の亭主が内掌六本指を出して、不機嫌な顔で怒鳴り出したものだ。まるで病み呆けた野良犬を追ひまくるやうな汚ならしさで、支那語と露西亜

語で喚めき立てた。商賣氣を離れると、からも因業な表情になるものか、全く不思議な位だ。

『出て行け！』

牛のやうに喚めき立てた。古綿をかぶつたやうな髮の毛の小娘が、少しでも手をゆるめると尻の穴でも嘗めかねないほど、嫌に出かりたがる醉どれの首筋から兩手一杯に、二人の洋服の襟を引きちぎる程引きづり出してゐた。

『お歸りなさいな』

小娘はさう云つてゐるに違ひなかつた。娘といふ者は、強慾な親爺みたいに、獸のやうに惡態を吐く筈がない。

娘が少しでも、油斷すると醉どれは自分の尻を嘗めやうとした。もう何んとしても、彼奴等には、海泥のやうに性根がないのだ。

ウオツカの雫で濡れ放題のカウンターを、その團扇みたいな手で歪むほど打ちのめすと、尻尾を踏んづけられた狼のやうな唸り聲をたて、蹴倒した木椅子を兩脚で跨き飛ばしながら、亭主が巨大な圖體を瘤瘡の筋だらけにして飛び出して來た。そして小娘の手から醉どれの襟首をひつたくると、騾車みたいに往來に引き出して行つて、そして二人を同時に鉋屑のやうに抛り出した。

『出て行け！』

と、たんまり儲けたことは忘れて、支那語で醉どれをケン飛ばしかねない權幕で喚めいた。

大連は彼の愛するロシヤ人から、こんな待遇で酬ひられたことを知つたら最後、シヤベルでロシヤの國土を地球の外へはね出しかねない調子で地團駄踏んで口惜しがるに違ひない。

（彼奴は、白のスパイに違ひないのだ！）

二人の醉どれが、眼を醒ました時には、醉拂はない前と同じやうに、眞晝間だつた。太陽が燒けてゐた。風がちつともなかつた。たゞちよつと頭がふらついた。——この邊から少し昨日と變つてゐる。汗ばんだ肌が、砂利でこすつたやうに痛かつた。咽喉が乾いた。何んだか少し世界の角度が狂つたやうな訝かしさを、二人は宿醉の頭に感じなければならなかつた。

周圍の記憶が、少しもなかつた。——無理もない。彼等は宿泊所の疊の上で目醒めたのだ！

彼等はすつかり時の經過と、生命の流れの一部分を忘却してゐたのだ。彼等の二人は、握手をかはした馭者や、乞食みたいなロシヤ人によつて、タワリシチの禮をつくすために、この宿泊所へ運び込まれたことを少しも知らなかつたのだ。若しも大連が、そのやうな親切な介抱を、彼の愛するロシヤ人によつて受けた事實を知つたならば、彼は骸骨になつてでも東支鐵道の線路を傳ひつゞけて、彼の愛するロシヤに突走る覺悟を決めたであらう。

左官は一度目を覺ましたが、また眠こんでしまつた。はつきりほん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とに眼を覺ましたのは夕方であつた。

大連がゐなかつた。だが、そんなことは少しも不思議ではない。腹が減つて仕方がなくなると、誰にしたつて夜鷹のやうに餌を拾ひに出掛けなければならない。だが――一つ驚いたことに、大連のかはりに、黒眼鏡がすぐ傍で、大安坐をかいて、黒パンの大きな塊りを片腕に抱え込んで、それを襤褸巾のやうに引き裂いて、賑かに頰張つてゐた。

左官は頰ぺたから、骨が拔け出るほど青くなつて、そのまゝ縮んでしまつた。

『おい！ 若いの。眼が醒めたか？……ところでお前は馬鹿だな。何んで昨日は俺にむかつて來たのだ。』

そら！ 左官はまるで針鼠のやうに震えあがつてしまつた。黒眼鏡は睡の足りない口から、パン屑をぼろぼろこぼしながら、ゆつくり責め拔かうとするのかも知れない。

『時計屋はな。お前。魂のかはりに、こんどは骨ぐるみさらつて行かれさうな聲をたてゝ、、、、、、、、、、、、おとなしく待つてらあ、手前にも、、、、、、、、、有りつかすんだつたのに！ 馬鹿だなあ』

左官は驚いた。こんな筈である道理がない！ 彼はそろそろ首を伸ばした。

黒眼鏡は何んとも思つてはゐないのだ。かへつて彼のあの氣狂ひ染みた突嗟の氣持を、まるで憫笑してゐるのだ。でも、左官はさやうに遺恨も含まずに、憫笑する黒眼鏡の氣持がまるで判らないと考へた。

『ほら、喰へ！』

どたりと引き裂いた黒パンの塊を、彼の頭を目蒐けて投げ出した。

『この男はまるで、俺たちを齒牙にかけてゐないのだ。まるで太平洋のやうな度胸だな。』

單純で感じ易い左官は、涙にあふれるやうな感動を我慢して、黒パンの塊に手を伸ばした。

『どう考へても、黒眼鏡の氣持は判らない』

左官は自分の狎粘みたいな膽ッ玉に較べて、さう考へ惱まずにはゐられなかつた。

尊敬の念が、油然と湧いて來た。

支那服は野良犬の腿燒きと、一升ほどの高粱酒を相宿の途中に大盤振舞ひして醉つぶれた翌朝から、ずつと姿を見せなかつた。

『支那服と黒眼鏡は、一體どうして食つてゐるんだらう？』

彼は不思議に考へた。だが、二人の存在は左官の貧弱な想像力では、蹤跡を測り出すやうには、雜作なく想像することはできなかつた。そんなことを考へてゐるところへ、當の支那服がのつそり歸つて來た。油だらけの新聞紙をほごすと、燒きたてのロースビーフが、湯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鼠のやうに転がり出た。素晴らしい勢ひが鼻から尻の穴へ抜け出るやうだつた。
『やう！　素敵ぢあねえか』
この二人はいつでも肌身はなさず短刀を身につけてゐると見えて、黒眼鏡は食ひかけの黒パンの破片を抛り捨てると、早速に支那服と向ひ合つて短刀の刃でロースビーフの角を切り落して、頬ばり始めた。口中を油だらけにして、旨さうに眼玉を白黒させた。
『黒パンに、生胡瓜か。見つともない眞似はよせよ！　まさかにどぶ鼠ぢやあんめえし……』
支那服が、皮肉に黒眼鏡を笑殺した。
『糞！　抜かすな』
黒眼鏡はそんな皮肉に應酬するよりも、咽喉一杯に、雑巾のやうに押し込んだビーフに手古摺つてゐたのだ。
ふと、支那服が左官を見つけて、思ひ出したやうに言つた。
『おい！　手前は昨日、ほら門前のロシヤ人の酒場で酔ひつぶれたらう。大連はお前、たつた今、領事警察に引つこ抜かれたぞ！　こゝらの「白」は皆んなスパイだ。滅多なことは喋舌れねえんだ。それに氣を配らずに、小僧兒みたいな、氣焔をあげるのが、ドジさ。大人氣ない話よ。網んなかで跳ね廻はるやうなもんぢやねえか。馬鹿な』
だが、左官は皆目、その支那服の言つた意味が解らなかつた。
『ほう。社會主義者だつたのか。彼奴が』
黒眼鏡が興味深く訊き返へした。
『社會主義者だつて、何れ大したもんぢやあんめえよ！』
支那服も黒眼鏡も、それつきりその話をやめてしまつた。そして喰ふだけ喰ふと、二人は連れだつて、暮れかゝつた街に出て行つた。豪儀なもん
『まるでこつちとらとは、雲泥とすつぽんほどの違ひだ』
左官は、暗くなつた部屋のなかで、ビーフの食ひ残しをつまみあげながら呟いた。
彼等と擦れ違ひに、時計屋が洞穴のやうに窪れた眼玉を光らせて歸つて來た。
『糞くろみかッさらつて行かれさうに、、、、、、、！』
左官は黒眼鏡の言葉を思ひ出して、こみあげてくる笑ひを殺すことが出來なかつた。
二人は彼等の喰ひ残しのロースビーフに噛りついたのが、御馳走の最後だつた。
それつきり支那服も、黒眼鏡も歸つて來なかつた。無論のこと大連も、それつきりだつた。――
時計屋と左官の上には、がらりと生活が向きをかえた。二人の上には再び、あのにぎやかな生活が歸らないのだ。零落と流浪の絶望が眼に見えない手を擴げ始めた。
左官には、大連の情熱に滿ちた夢がなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時計屋には支那服の、あの度胸がなかつた。

坊主が惜毛づいてゐた、黒眼鏡と支那服がゐなくなつたので、乾干にたりかゝつた時計屋と左官を取つ摑まへて、日毎に怒鳴り込んで來た。

『出て失せろ！ 、、はする。犬はぶち殺して喰ふ。社會主義者は舞ひ込む。何んといふ畜生共だ。穢らはしい人非人奴！ 出て行け。こゝで死んでみろ。忽ち眞逆さに御堂の下は無間地獄の釜の上だぞ！ 恐しかつたら、一刻も早く出て失せろ』

坊主はまるで青鬼のやうに、半分死にかゝつた人間の前でたけり立つた。

『人間は死んだら最後、お寺に來るより外に仕様があるか。ちよつと一足さきに來ただけぢあないか！』

時計屋が最後の聲をふり絞つて、怒鳴り返へした。

坊主はそのまゝ身震ひすると、髑髏のやうに肉を震ひ落さんばかりに、慄ひあがつて怒つた。——だが、まだ息の根はとまらない二人を、そのまゝ墓場へ持つてゆく譯には行かなかつた。

突然に、殺人事件が惹き起された。

この街一流の日本人商館が、二人組の強盗に襲はれたのだ。被害者は藥種商だつた。手廣く密輸入をやつてゐるといふ評判が、この街の公然の噂だつた。

強盗に反抗した支配人は、偃月刀の一撃で腕を抉くられて、金庫にしがみついたまゝ即死した。、、、店員たちが縛りあげられた、その眼の前で、、、、、、その上五千弗近い金を掠奪された。

店員や女房の證言で、その犯人は日本人であることに間違ひはなかつた。犯人は蹤跡をくらまして、まだ逮捕されなかつた。

乾干になつて、もうこゝ一二日の生命が危いくらゐ弱り拔いてゐた左官に時計屋は、寢たきりなので、その事件を知る筈がなかつた。

領事警察の刑事隊が、變裝して用心深く小半日も張り込んだ結果、とつつかまへた代物は、自分で自分の身體さへ支え切れないほど弱りこんだ、この二人だつた！ この左官に時計屋が、強盗殺人強姦の犯人であるとは——何んと立派な手柄であることか！

坊主は黒い門柱から、無料宿泊所の看板をひつぺがした。そしてまるで土方のやうに、それを踏み破つた。

こんな慈善ぶつた看板で金を強請らうとかゝつたことが、そもそもの誤りなのだ。

お天んとうさまに唾を吐いて見ろ！ そつくりそのまゝ手前の坊主面に戻つて來るんだ。

——一九二七・九・三——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



暗夜行路

志賀直哉

十三

龍膽、撫子、女郎花、山杜若、松蟲草、吾亦紅、その他、名を知らぬ菊科の美しい花などが咲亂れてゐる高原の細い路を二人は休まず登つて行つた。放牧の牛や馬が、草を食ふのを止め、立つて此方を眺めてゐた。所々に大きな松の木があり、その高い枝で蟬が力一杯啼いてゐた。空氣が澄んで山の氣は感じられたが登り路故に却々暑かつた。そして背後遙かに海が見え出すと、二人は所々で休み一服しながら行つた。

「さあ、もう一ト息だ」

「荷は思つたより重いだらう」

「うむ、づつしりといやに重いね。こりやあ本かね」

「本だ」謙作は云つた。「辛いやうなら、その茶屋で少し出して行つてもいゝ。ついでの時に運んで貰うとして」

「なに大丈夫だ。分けの茶屋で飯を一つよばれよう。さうすりや元氣が出らあね」

「お前は酒は飲むか？」

「たんとはいけないね」

「其所で少し飲んだらどうだ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「直しを一杯御馳走になるか。旦那はどうだね」
「私は駄目だ」
「全然いけないといふ事はないだらう。直しを一杯やつて一時間ばかり蹲踞をして行つちやあどうだ」
「蹲踞は兎も角、少しゆつくり休んで行かう」
「もう三四丁だ」
「其處はその茶屋一軒か」
「分けの一つ家といつて、一里四方人家のない所だ。昔は恐ろしい爺がゐて、よく旅人の物を盗つたりしたものだ」
「何時頃の話だ」
「俺の若い頃の話さ。大山の蓮淨院へ竹槍を持つて押込みをやつたのが知れ、茶屋の前で攻め木にかけられてゐるのを見た事がある。海老攻めと云ふので見てられなかつたね。眞白い長い髮を振つてわあ〳〵云ふ奴を段々にしめて行くのだ。俺は丁度髷を背負つて、其所を通りかゝつて見たのだが、海老攻めといふのはえらい拷問だね。身體をぎゆう〳〵海老のやうに屈げちまうんだから」
　車夫は尚その時の話を精しくした。頬被りをした強盗が住職を嚇してゐる間に、氣の利いた小坊主が本堂の鐘を亂打した。それが火事その他不時の場合を知らす撞き方なので、他の寺々でも應じて鐘を撞き出したが、靜かな眞夜中だけに森や谷にこだましてごん〳〵ごん〳〵それが響いた。或る僧が戸外に出てゐると丁度月の入りで、森の中を眞白な髮を振り亂しながら逃げて行く老人の姿を遙かに見たといふ。
「山には竹はないが、その頭一つ家の前だけに竹藪があつた。そこで藪を探すと、捨てゝ行つた竹槍にすつきり切り口の合ふ株が見つかつた。これには如何に強情な爺も恐れ入つたさうだ。調べ上げると他にも色々悪い事をしてたのが分つて間もなく米子で死刑になつたよ」
　やがて、二人は其茶屋に着いた。屋根の低い陰々した平家だつた。軒先の大きな天水桶にはなみ〳〵と水がたゝへてあり、その下で襷をかけた六十ばかりの婆さんが、腕びきの鮭を洗つてゐた。
「やあ、暑い〳〵」車夫は其所の縁臺に重い荷を下ろした。
陰い平家は眞中に土間が奧まで通つてゐ、その左が住ひ、右が客用の間になつてゐた。そしてその客用の間の眞中に八十近い白髮の老人が長い脛を兩手で抱くやうにして、廣い裾野から遠く中の海、夜見ケ濱、美保の關更にそと海まで眺められる景色を前に靜かに坐つてゐた。老人は謙作達が入つて來ても氣附かぬ風で、如何にも遠くを眺めてゐる。
「車屋にめしと酒」謙作は婆さんに云つた。「私には菓子とそれからサイダーでも貰はうか」
「お爺さん。お爺さん」婆さんは立つて濡れ手を前へ下げたまゝ老人を呼んだ。「私は手が臭いからお客様に菓子とサイダーを上げて下さい」
　老人は默つて立つた。背が高く丁度風雨にさらされた山の枯木のや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うた感じがした。

「菓子と何んだね？」

「お爺さんサイダーは俺が持つて來る菓子だけ出しておくれ」車夫はさういひ、自身流しの方へそれを取りに行つた。「此方の方が冷えてるのかね」

爺さんは棚から硝子の皿を取り、石油鑵から駄菓子を手で摑み出し、それを謙作の前へ持つて來た。そして「おいで……」かういつて一寸頭を下げると、又元ゐた場所へ還つて腰を下ろした。

「これを食べるかね」婆さんは蕗びきを切りながら車夫に云つた。

「結構だね」車夫は胸の流れる汗を拭きながら答へた。

謙作も扇を使ひながら、サイダーを飲み、それから遠い景色を眺めた。そして彼は二三寸にのびた白髪頭の老人を背後から眺め、今、車夫に聞いた昔の爺とを想ひ較べ、それらが同じ場所に住んで居るだけに如何にも面白い對照に感じた。此老人にすればこれは毎日見てゐる景色であらう。それを厭かずかうして眺めてゐる。一體此老人は何を考へてゐるのだらう。勿論將來を考へてゐるのではない。又恐らく現在を考へてゐるのでもあるまい。長い一生、その長い過去の色々な出來事を老人は憶ひ出してゐるのではあるまいか。否、それさへ恐らく、今は忘れてゐるだらう。老人は山の老樹のやうに、或は苔むした岩のやうに、此景色の前に只其所に置かれてあるのだ。そして若し何か考へてゐるとすれば、それは樹が考へ、岩が考へる程度にしか考へてゐないだらう。謙作はそんな氣がした。彼にはその靜寂な感じが羨ましかつた。

老人のゐる右手の壁に寄せて、米俵が幾つか積上げてあつた。その後ろで先刻から何かゴソ〳〵音がしてゐたが、不意に一疋の仔猫が其所から米俵の上へ現はれた。仔猫は兩方の耳を前へ向け、熱心に今、自分の飛出して來た所を覗き込んでゐた。そして身體は凝つとしてゐるが、長い尾だけが別の生き物のやうに勝手に動いてゐた。すると、下からも丸い猫の手がちよい〳〵見えた。

「旦那も冷しを一杯どうだね」車夫は今、自分がそれを注いで貰つたコップを持つて謙作に勸めに來た。

「冷しといふのは飲んだ事がないから」

「未だ口をつけないから、これを一ト口やつて御覽なさい」

「まあよさう」

「さうかね。夏はこれにかぎるがね」さう云つて、車夫はそれへ口をつけながら自分の腰掛へ還つて行つた。

「あの猫は此所で生れたのか？」

「あれは此所で生れたのかね？」車夫が取次いで婆さんに訊いた。

「去年貰つたのが、生んだのだよ」

「さうか。早いもんだな。雌もゐるのかね」

「なに雄は居ないのだが、何所かで子種を貰つて來たよ」

「一里四方人家のない所で、何所から貰つて來たかな」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「二日程ゐなくなつたが、〇〇あたりまで行つたかも知れない」

老人は荷物のやうに箱枕の方へ背を向けたまゝでゐた。二疋の仔猫は俵の上で上になり下になりふざけてゐたが、そのうち誤つて一疋が俵から下へ落ちた。落ちた仔猫は急に興ざめのしたキヨトンとした様子で哀れつぽい聲で二度三度啼いた。何所からか急いで親猫が出て來て仔猫の身體を舐めてやつた。

乘馬ズボンに卷脚絆をした三十餘りの男が入つて來た。

「やあ」さういつてかまちの所で後ろ向きになると、股を開き兩手を膝に、さも疲れたやうにどすんと腰を下ろした「山田を探して出まで行つたが、居らなんだ。お婆さん、今日此處を通らんかつたね？」

「誰れが」

「山田が」

「見かけなかつたね」

「又御來屋へでも出掛けたかな」

「昨日足を折つた馬はどうしたね」

「それで山田を探してるんだが、居にやあ仕方がない。殺して埋めちまはう」

「山田さんの馬かい」

「さうだ」

「えらい損害だね」

「時に、今日は宿は何んだい」

「鮭の照燒は？」

「照燒か……。それよりいゝするめでも燒いて貰はうか」

婆さんは酒をつけ、するめを燒きながら、

「今年は山でも蚊が出たさうだね」

「そんな事も聽かなかつたが、さうかね」

「此所らは月初めから蚊帳を釣つてるよ」

親猫はするめの臭ひで、五月蝿く其邊を立廻はり、婆さんの裂いたするめの皿へ鼻をつけさうにしてはその度、頭を叩かれて、眼を細くし、耳を寢かせてゐた。

暫くして謙作と車夫とは此小屋を出た。三十分程歩く内に謙作は又咽が乾ひて來た。車夫はもう少し行くといゝ流れがあるからと云つた。然し行つて見ると、流れは涸れて砂が乾破れてゐた。

「昨晩、鳥取では大分降つたが、此邊は降らなかつたかな」謙作は腹立しさうに云つた。

車夫はもう十町ばかりで、鳥居の所に冷水がひいてあるからと慰め顔に云つた。そして、

「寺は何所にするかね。景色はないが不二門院の離れが空いてると、勉強にはいゝと思ふがね」

「兎に角行つて見た上にしよう」

「暫く滯在するのかね？」

「氣に入れば永くゐたいと思ふのだ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「永いと云つても夏だけの所だよ。秋になりやあ、下に幾らもいゝ温泉場があるから、山に居たつてつまらない。第一食物がないから、餘り永くは居られないよ」

「寺は精進か？」

「いや、生臭でも何んでも食はすよ。梵妻もゐるし、開けたもんだ。坊主は馬の賣り買ひばかり熱心にやつてゐらあね」

謙作は叡山に次ぐ大山の靈場といふやうに聞いてゐただけに此話にはいさゝか落膽した。　（未完）

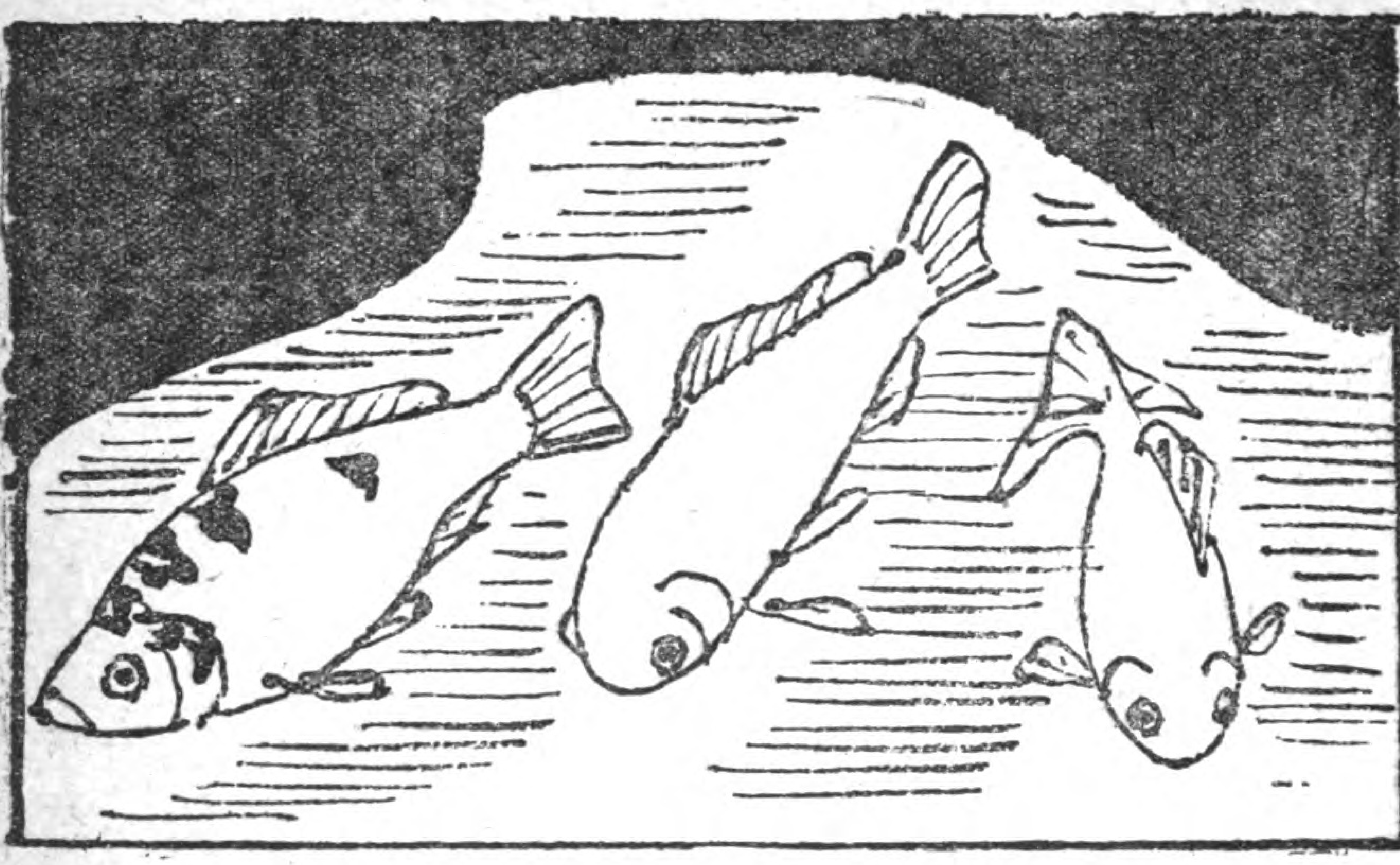
志賀直哉著（四六判上製　定價壹圓五拾錢　送料二十錢）

山科の記憶

現代作家中にあつて志賀氏程藝術に精進する徒があらうか。時流にこびず、表現の奇をてらはず、飽くまでも事實を凝視し、道徳的内省の上に、一行をもゆるがせにせず浮彫して行く氏のリアリズムの手法は、藝術の彼岸無我の境地を描出せしめてゐる。眞に藝術的な作品に觸れんと欲する人々には、志賀氏の作品を薦むるに躊躇しない。「暗夜行路」に心醉せる讀者は亦、氏が短篇作家としても如何に秀れた藝術的才能にめぐまれてゐるかを知るであらう。

改造社發行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



鳥

長田幹彦

一

その晩、二十二巻からある三本の映畫を全部映寫し終つたのはもう午後の十時十五分過であつた。關西上りの、喜劇の與太ものを廻はしてゐる最中に、古アクメのモーターの工合が急に悪くなりだしたので、技士の宮崎が應急の手當を施してゐる間に、もうそれだけでも十分から時間を食はれてしまつた。それにフヰルムが草臥れきつてゐて、捲き返しに倍も手數がかゝつたので、當てにしてゐた時間がすつかり番狂はせになつてしまつた。

宮崎は汚れたワイシヤツの袖で、汗ばんだ額を自棄に拭きながら、もうつくづく愛想が盡きたといふやうに、助手の大野の方を睨みて、

「どうも弱つちやつたなあ。今夜はどうかして、九時半迄には上げてやらうと思つてたんだが、この機械のおかげで、折角の苦心も水の泡さ。このアクメもいよいよ云ふことを聞かなくなりやがつたよ。人間の古いのは、まあどうにか潰しが利くが、機械の古くなつたのばかりや、使ひ途になりやしねえからね。」と、地團でぼやいて、明り口をばくんと引開けて恨めしさうに映寫機の中を覗き込む。

大野もフヰルムの焦れッ臭い中で、フヰルム筒の蓋をこつんこつん靴の先で踏んづけながら、もう説明台詞もなく禁煙の煙草に火をつけて、

「ほんとだともさ。モーターばかりや、とッても糊づけぢや働かれえからね。もう君、仙臺をたつ時からこいつあ、散々にまじくなつてあるんだもの。さうさうはねッこと、云つて、煙脂でよごれた黄色い歯を剝き出しながらあゝッと大きな欠伸をひとつして、そこの石油箱のうへへぐッたりと腰を下ろしてしまふ。

二坪ばかりの狹ッ苦しい映寫室の楷子では、百四五十も入つてゐるかと思はれる觀客が、下駄の音をカランカランと、土間へ響かせながら、先を爭つて歸つていく。子供の泣き喚く聲も聞えれば、田舍言葉で呼び合つてゐる町の女達の聲も聞える。

戸外はいつかしら小雨になつてゐるらしかつた。

宮崎も髭の蓬々と生へた膨れぼつたい顏でバットの吸殼へ煙草をして、

「おい、大野君。もう閉場つたんだから、そんなにシケ込んでゐねえで、早くこのキートンのあとを捲き返しておくれよ。俺一人ぢやとつても手に了へねえからなあ。」

大野はさう云はれると、苦さうな顰を呑んで、又もぞりと捲き返しのハンドルを執つて、氣のない樣子でカラカラ廻しながら、

「また今夜も雨か。幾日降り續きやがるんだらうな。此處へ乘り込んでから、一日たつてからッとした天氣はありやしねえぜ。からなると、全く東京が戀しいなあ。それでなくつたつて、もう里心がつききつてるんだからなあ。」としみじみ云ふ。

宮崎もアゲメから洩れて來る青白い燈火で、せつせと大野に手傳つてやりながら

「ほんとによ。もう彼此二月にもなるんだ。奴の顏もみておやれえかなあ。ほんとに馬鹿々々しいにも程があらあ。俺もこんな旅はこの道へ入つてから初めてだよ。どうも踏み出しからツケが悪いと思つたら、劈頭この始末だ。」

「實際ラストが可かんねえ。古狸の君でさへさうなんだもの。僕なんざもう懲りごりだよ。一體いつになつたら東京へ歸れるんだたな。」と嘆息を吐いて、大野は宮崎がもう一本の殘りへまで手をつけようとするので、それを押へながら、

「君、いゝよ。そいつは僕がやるから、さうやつといて呉れよ。今向ふへいつて、僕、喇叭を形づけてすぐに又やつて來るからね。さうしたら、僕一遍にやつちやうよ。」と、云つて、側の映寫口から舞臺の方の様子を差覗く。——大野は自體は樂士の一人なのだが、無人な一行なので、手があくと映寫の方の手傳ひもしてゐるのであつた。そ

田舍町のボロ小屋なので、舞臺はすぐ眼と鼻の間にみえてゐた。そこでは簀の子の照明を消して、舞臺端の街燈だけがぼんやり點つてゐた。舞臺のシーツの前には、[illegible]のひよろ長い[illegible]樂士の[illegible]

腕組みをしたから影のやうに突立つて、下のオーケストラボックスにゐる楽士達と何やら、陰口でもきゝ合つてゐるやうであつた。それが翠波だといふことも、太い胴間聲でやつと分る位四邊は暗かつた。下の楽士達も大入道のやうなぼやけた影を観客席の両袖へ這はせながら、立つたり、踞んだりして、頻りに楽器の始末をしてゐるので、絃の鳴る音や、サツクの蓋をする音か、薄寒く観客席のがらんとした天井へ響いてゐた。

　だしぬけに、舞台の方からは銅鑼聲が聞えてきた。観客がゐないと、變な響がキーンと後に殘つた。

「おい、宮崎君、大野君！　一寸舞台まで御用ツ。」それは次席辯士の畑静波の聲であつた。彼は聲だけ聞えて、何處にゐるのだか、姿はみえなかつた。

　大野は捲き返しの手を止めて、映寫口へ顔を摺りつけながら、中ッ腹で、

「何んだな。畑さん。今大急ぎで商賣ものを戻してゐるんぢやねえか。さうガアガア怒鳴らねえでおくれよ。それでなくつてさへ容ッ腹だ。うつかり大きな聲を出されると、氣が遠くなつちやうぢやねえか。」

　舞台の方ではくすくす笑ふ聲が聞えた。

　今度は翠波の氣取つた聲が、

「どうもまことにお氣の毒様です。御見物を隔つて甚だ恐縮ですが、實は今こゝで緊急動議が提出されたので、どうか皆さんに至急こゝまでお運びが願ひ度いのです。お容ッ腹でも御座いませうが、是非どうか、……」と、笑談に切口上で云つたが、その聲も寒さうであつた。

　宮崎は一人で苦り切つて、

「茶ッ笑談ぢやねえや。向ふぢや又皆集つて、洒落のめしてやがるんだらう。このギリギリ舞ひのさなかに、奴等あいゝ氣なもんだ。ちつと時節柄を考へろい。」と、つんつんしながら云つたが、やがて小首をひねつて、「大野君。それともいよいよ城明け渡しの相談かも知れんぞ。今夜あたりや、とても形勢險悪だからね。まあ、こゝはかうやつといて、兎に角行つてみようや。どうせ碌な事はねえに極つてるけど。……」と、ぶつぶつ云ひながら、やがて古プロで穢らしく張り廻はした板壁に懸けてある油じみたよれよれの上着をとつて、脊中へ引懸ける。大野はゲップばかりしながら、これも手を廻はして映寫室の開戸を開けて、ぴよいと後向きに下の通路へ飛び下りた。

　形ばかりのオ、ケストラ、ボックスのところまでやつて來ると、翠波は小手を翳して、舞台のうへから此方を見下ろしながら、

「やあ、宮崎君かい。御苦勞様。さあ、どうかまあ、そこいらへでも坐つて呉れ玉へ。」と、云ふ。彼は咽をひどくやられてでもゐるとみえ、しつきりなしにごほごほ力のない咳ばかりしてゐた。それが又妙に冷え寒く天井へひゞき上つていつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

宮崎も大野も顚流落でむしむしする映寫室から急に外へ出て來たので、觀客の歸つたあとの觀覽席へ下りて來ると、ぞうッとするほど寒かつた。蒸れ返つたやうな、惡臭い人いきれがまだ殘つてゐて、そこいらの床には、蜜柑の皮や、南京豆の殼や、プロのもみくしやにしたのなぞが薄汚く散らばつてゐる。二人は一番端のかぶりつきの座席へいつて腰を下ろした。と、粗末な木片をいゝ加減に打ッつけてこしらへた腰掛はぎしぎし不氣味に軋んで、ひやッとするやうな冷たさがズボン越しに感じられる。

宮崎は肩を縮めて、不貞ッ腐れに又立上りながら、

「畜生ッ、こりや可けねえ。せめて女の子の腰をかけた跡へでもいつて坐つてやれ。まだいくらか人肌の溫みが殘つてるだらう。」と、呟いて、その隣りの側の婦人席へ移つていく。此處邊でも、婦人席だけは別に繩が張つてあつた。

畑部靜波は舞臺からスリッパのまゝぴよいと飛び下りて來て、彼の傍へいつて坐りながらにやく\／變に笑つて、

「成程ね。宮さんの仰有る通り、こりやいくらか溫かいやうな氣もするね。女つて奴あ、不思議なもんだ。どうだい。宮さん。匂ひを嗅いでみねえか。白粉の匂ひ位殘つてるかも知んねえぜ。先刻こゝにやたしか酌婦體の太つちよが坐つてたやうだつたからなあ。はゝゝゝ。」

宮崎は苦笑ひをして、

「馬鹿ッ犬ぢやあるめえし、この助平野郎！……このうへあんな太ッちよの腰氣の匂ひなんぞ嗅がされて耐るもんか。」

オーケストラボックスの中からは、又笑聲が起つた。それは無理にお調子を合はせてゐるといつたやうな笑聲であつた。

翠波はつかつか舞臺端へ出て來て、ずうッとひとわたり皆の方を眺め廻はしながら、

「諸君、これで皆揃つた譯だね。」と、聲をかけると、靜波は素頓狂な調子で、

「は、さうです。先生。樂士が五名、技士が一名。樂士と技士の兩棲動物であるところの變挺な存在がもう一匹、それに辯士諸君が二名、合計九名也。餘りッ」と、まぜッ返す。

大野は自分のことを「兩棲動物」だの、「吹き代へ」だのと渾名されてゐるので、後から然間で靜波の頭をこつんと音のするほど毆つた。

翠波は笑聲が靜かになるのを待つて、又切り口上で、

「諸君！」と、云つたが、急に彼も咳と一緒に噴き出して、「いや、どうも觀客がこれぢや馬鹿々々しくつて、正面も切れないね。ぐつと碎けて、ひとつ世話でいかう。」と、無理に笑つて、「ねえ、諸君。實は、その、諸君とも旅へ出てからもう二月もかうやつて苦樂を共にして來たが、諸君も豫て御存知の通り、今度は興行成績が實際のところ散々で、僕は甚だ以つてお氣の毒な話だが、いよいよ今夜をもつて、この一行もボシヤと、かういふことになつたんだよ。そこで僕もいろいろ方法も講じてみたんだが、出術八方塞がりで、不肖翠波微力

にして遂に頽勢を挽回する能はず、こゝに涙を揮つて、一行の解散を宣言するの已むを得ざるに立至つた次第なのだ。今度の興行は先づ仙臺で恩師島田光反先生が俄かに病氣に罹られたのが一大打撃で、それから打ち續く各興行先の不景況、それに仕込み寫眞の不當り等が源因をなして、遂に斯かる悲境に沈淪してしまつたのだ。その點はどうか諸君にも不悪御諒解を願ひ度いのだ。」初めは笑談のやうな口調で、成る可く皆を笑はせようと試みてゐたが、眞實が骨身に應へてゐるので、彼は途中まで來ると、つい濕つぽくなつてしまふのであつた。

　ボックスの隅で、煙草ばかりぱくりぱくり吸つてゐた若い樂士の一人は、その時、焦れッ度さうに立上つて、

「併し、香月さん。いくら解散するといつても、この儘ぢや何うにもならんでせう。」と嘲けるやうに云つたが、翠波はぢろりとそつちをみて、

「まあ、中島君。一寸待ち玉へ。靜かにおしまひまで聞いて居つて呉れんけりや困るよ。」と、たしなめて、又咳に追はれながら、「そこでだ。フヰルムや何かは皆島田先生の方の仕込みなんだから、これは別勘定として、實は今夜こゝの館主から、分合ひとして金五十六圓十三錢也を受取つたのさ。それをこゝで全部諸君に提供するから、どうか御不足もあらうが、先づとにかくこれをもつて、東京まで引揚げて貰ひ度いんだ。あとのことは歸京のうへで又改めて御相談するとしようぢやないか。」と、押伏せるやうに云ふ。

と、その樂士は腹を立てゝ

「いや、それぢやいかに何んでも、餘り酷過ぎるぢやないですか。僕等は契約によつて働いてゐる勞働者だ。しかもこんなやくざなヴァイオリン一挺で君、女房や子供を食はせてるんだ。せめて旅へ出たら、米代位は土産に持つて歸らなけりや君。……それに仙臺で、給金の殘りをたつた十圓づゝ貰つたきりで、それから後はもうずうつと唯働きだからなあ。何んとかして貰はなくちや、……」

　翠波はだしぬけに大きな聲を出して、

「おい、中島君、そりや君、誰しも相見互ぢやないか。君ひとりが何うつて云ふんぢやない。一行のものは皆、食ふや食はずでやつと此地まで引揚げて來たんぢやないか。それとも厭なら、君一人で何うとも自由行動を執るさ。こりや君、勞働爭議ぢやないんだからな。」と、怒りつぽい調子でいふ。

　樂士はそれでもひるまずに、

「併し……」と、云ひかけたが、翠波は彼の方へ詰め寄つていつて、性急に、

「何にが併しだ。贅澤云ふなよ。君達は東京を立つ時、既に給金の半金を受取つて來てゐるんぢやないか。それで文句を云はれちや一體我我說明者側は何うすりやいゝんだ。分らない奴だなあ。」と、荒つぽくなつていく。

　皆はさすがに默つて見てゐた。四邊はしいんとして、觀客席は[illegible]

屋根に降りそゝぐ雨の音ばかりになつてしまつた。その薄暗闇を冷つこい風がすうツと吹いて通つていつた。

技士の宮崎はもう端の奴には構つてゐられないといふ風に、煙草の吸殻をぐいぐい靴先で踏みにじつて、

「ねえ、香月さん。それよりも君は一體どうするんです。一緒に歸れるんですか。」と、おだやかな聲で訊く。

邦彦は彼の方へ振向つて、

「僕か。いや、僕は無論諸君の犠牲になつて、當分所從のつく迄伊津屋へ殘らなけりやなるまいと思ふんだ。何にしろ、あの久保井の奴が先乘りに延つて、方々で勝手な眞似をして歩きやがつたんで全く何うにも始末にいかんのだ。手前の利喰ひばかりしてやがつて、行く先々の仕打を皆失策つちまつてるんだ。僕は島田先生の方へも先刻又電報を打つてみたんだが、先生の方だつていろいろ都合もあるだらうしなあ。又たとへ送金して呉れるにしたつて、それが我々の手へ入るまでの諸君のアゴや足が恐いからね。かう頭數があつちや、一日つなぐんだつて、金高が上るばかりだからなあ。そこで僕ももう背に腹は代へられんから、全く涙を揮つて解散を宣言するんだ。君などはもう隨分旅をかけてるから、何も彼もようく呑み込んで呉れると思ふが、全く僕の立場は實に辛いんだよ。」と、泣き言になつてしまふ。

宮崎は強いて笑顔をつくりながら、

「さうですか。あんたが殘るんですか。そりやどうもお氣の毒ですな。一人で殘りますかね。」と、成り行きは百も承知してゐるやうに落着いて訊く。

邦彦は一寸云ひ憎さうに、

「いや、先刻までは僕一人で殘るつもりでゐたんだが、その實どうも少々心細いんでね。仕方がないから、無理に頼んで、德ちやんにも殘つて貰ふことにしたんだ。かう見廻はした時に、野郎で金になる可能性のある奴は一人も居らんからねえ。はゝゝゝ。」

「左樣。この顔ッ面ばかりぢやね。旅の居殘りは全く女に限りやすよ。伊津屋だつて、何しろ七八十兩にやなつてるでせうから向ふでもうつかりしちやゐますまいからなあ。それに此處迄でも度々この手を食つてるでせうしなあ。いや、全く憐れな末期を遂げたもんですよ。」と、云つて宮崎はすぐ前のボックスの中で、ふらふらしてゐる斷髮女の河童頭を後から見ながら、にやりと笑つて、

「おい、德ちやん。君も扨ては因果を含められたね。まあ、いゝさ。兎に角これだけ大の男が揃つてゐても、體で金になる奴は一人もゐないんだからね。これだけの人間の人質になると思やあ、君も名譽の至りさ。はゝゝゝ。」

女ヴアイオリン彈きの德枝は、默つてうつむいたまゝ、ぱくぱくになつた樂器入れのケースを開けたり、閉めたりしてゐた。さすがにいつもは浮はついてゐる彼女も遉に悄氣てゐた。

と、又先刻の中島は突然口を出して、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ねえ、香月さん。そりや酷い。人蹂躪だ。いくら女だつて、それぢやあんまりぢやないですか。人質にするのに、事をかいて、この、この徳ちやんを、……」と、急込んで云ひかけるのを、翠波は到頭むかッ腹をたてゝ、

「默つてろ、この野郎ッ。小僧ッ子の癖にしやがつて、餘計な口を出しやがると、捩り倒すぞ。手前はこの社會の法則を知られえんだ。皆が承知してるのに、それが不服ならどうとも勝手にしたらいゝぢやねえか。煩せえ野郎だ。もう疾うに手前は首になるところをやッと俺がつないでやつたのに、その義理も忘れやがつて。……」と、打つてかゝりもし兼ねまじい權幕を示す。

中島はその語氣に壓せられて、ぐうの音も出なかつた。彼は當るところがないので、長い蓬髮の頭をごしごしやけに掻きながら、一人で貧乏揺りをしてゐた。

皆もそれで一段と白けてしまつた。いつもなら各々煩い文句のある處であらうが、かう切迫つまつてしまつては、東京へ歸れるといふだけでも全くのところ儲けものであつた。東京へ歸つてから、何んとかして吳れゝば猶更よし、さもなくてもこんな心細い旅をつゞけてゐるより、淺草へさへ歸れば何とかして食ひッぱぐれはないので、彼等はたつた今にも歸り度いのであつた。

殊に宮崎は旅の御難には馴れてゐるとみえ、眞先に足が浮いてゐた。彼にかうなるともう人情も何もなく、自分一人が素敏ッこく立廻つて、その五十六圓なにがしかの分合の配分方を、翠波に迫つた。樂士達の方では頭割りを主張したが、宮崎は恐い顔をしてそつちをぢろりと睨めつけながら、

「おい、笑談云つちやいけねえよ。こんな些細な金だつて、今の俺達にや生命とかけがへになる大事な水の手だ。とにかく翠波さん。そいつあ給金の高に應じて、按分にして貰ひませう。いざこざゴテる野郎は勝手にさせときやいゝんだから。」と、頑固に云ひ張る。蒼く膨れた顔には、梃でも動きさうもない色がみえてゐた。

翠波は一寸所置に困つてゐたが、やがて決定だといつて、技士と樂士と說明者と三つに分けて渡すことにした。中で十五圓だけは宮崎の分に天引きして、あとの三十五圓だけを樂士に廻はしてやり、殘りは皆弟子の翠波の所得にしてやつた。汽車賃が足りないの、辨當代がないのと云つて、樂士の方では頻りに揉んでゐたが、翠波はもう知らん顔をして、薄暗い舞臺のうへをポケットハンドをしたまゝこツこツ歩てゐた。

そのごたくさしてゐる最中に、電燈がぱッと消えてしまつた。

翠波は忌々しさうに、舌打ちをして、

「ツッ、これだから田舍の貧乏小屋は厭さ。電燈料まで吝々してやがるんだからなあ。」と、呟いて、大きな聲で、「おい、表の老爺つあん。もうぢきに行くんだから、電燈位つけといてお吳んな。これぢや眞暗で身動きも出來ねえぢやねえか。歸るにも歸られねえよ。」と怒鳴る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

向ふからは返事はなくて、又ぱッと電燈がついた。

宮崎はもう委細構はず身支度をして、

「香月さん。そいぢや僕は先が急ぐから、今夜の汽車で立ちますよ。何んでも十一時四十五分かに、たしか東京行きがある筈だからこれから行きやゆつくり間に合ひますからね。」と、云つて、「あのそれから島田先生の方はもう萬事僕が呑み込んでるから、よろしくやつときますよ。そいぢやお先に。あんたも成る丈け早く足を抜いて歸つてらつしやい、左様なら。」と、半分から先は後向きになつて云ひながら、彼はそそくさ映寫室の方へ歸つていく。やがて彼はそこで恐ろしくがたぴし物音を立てだした。

樂士達もさうなると、急に靜かになつて、我勝ちに支度をしはじめた。逃げ足は可笑しいほど早かつた。とみる間に彼等はもう各々樂器をかついで、默つてぞろぞろ館の出口の方へ出ていく。靜波までが素早く外套を引被つて長居は無用といふやうな格好をして、とつとと皆の先廻はりをしていつた。

映寫室では宮崎が大野に手傳はせて、もうすつかり荷物をこしらへ上げてゐた。まるで早立ちの乘り込みのやうに、ちやんと手配がついてゐた。宮崎は帽子を阿彌陀に被つて、テケツ場の庇で、雨のしぶきを避けながら、

「扨てと。雨には弱つたた。いつもなら俥を奢るんだが、この懷ぢや贅澤も云へねえなあ。どうだい、大野君。君このアクメを擔いで與れんか。俺がフヰルム、サックを引負ふから。」

後に突立つてゐた大野は口を尖からかして、

「いや、僕には樂器があるかんな。」と、云つたが、もう臆面もなく、

「おい、君、それとも、俥代を與れるかね。さうすりや擔いでいつてやるよ。」と、まんぢりともしずにいふ。

宮崎もさすがに苦笑ひを洩らして、

「コン畜生、足許を見やがつたな。油斷も隙もありやしねえ。ようし、そんなにかつがつしてやがるんなら、五十錢で負けとけよ。さ、そのかはり、擔いだり、擔いだり。」と云つて、もうアクメを有無も云はさず大野の肩へのッけて、そのうへからさッさと穴だらけの桐油を押被せてしまふ。そして自分もズックの袋へ入つたフヰルムをうんとこしよと背負ひ上げて、他人には構はずにどんどん雨の中へ出ていつてしまつた。

「捲き返し」や、大野の大喇叭や、その他のこまこましたものは、手ぶらな靜波が背負はされてしまつた。彼はぶつくさ云ひながらもそれを兩方の手で抱へ込んで、諦めたやうに、

「まあ、いゝや。どうせ停車場までは六七丁しかないんだからな。その代り、おい、宮崎君、明日の朝の汽車賃はお前さんの持ちだよ。かうなりや俺たつて、他人樣のお膝に乘ッからなけりやならねえ。はゝゝゝ。おや先生。ひと足お先へ。德ちやん、あばよ。」チヤップリン髯を生やした、小ちめな、氣の利いた顏の持主であるだけに、よちよち步

いていく格好が噴き笑し度いほど可笑しかつた。

皆はやがて百鬼夜行といふ形で、それでも成る可く着てゐるものや、持つてゐるものを濡らすまいとして、停車場の方へ歩いていつた。翠波の笑聲だけはいつまでも聞えてゐたが、皆の後姿はやがて降りしきる雨の闇に消えていつてしまつた。その町筋には理髪店と、小料理屋と、それから雜貨屋がたつた一軒起きてゐるつきりで、もうあとはすつかり大戸を下ろしてゐた。

あとに殘る翠波と德枝も身支度をして、繪看板の陰へ突立つて、皆の立去つた跡をじいッと見送つてゐた。德枝はぶるぶるッと身慄ひをして、向側の家並を透かしてみながら、

「あら、雨かと思つたら、雪もまじつてるのね。」と、呟いて、もう我慢が出來なくなつたやうに、哀れッぽい聲で、

「ねえ、香月さん、とにかく宿屋へ歸りませうよ。傘がないから、仕方がない。このまゝ濡れて歸るのねえ。さ、思ひ切つて行かうぢやないの。」

翠波も空を見上げながら躊躇してゐたが、やがて德枝に眼まぜをしてついと往來へ出た。二人は皆の立去つた方とは反對の方角へとッとと歩いていつた。前屈みになつて、片手で裳をよけてゐたが、耐らなくなつたとみえ、德枝の方が先にばた〳〵驅け出した。彼女は樂器を濡らすのが何よりも恐ろしいので、そればかり氣にしながら息せき驅けて行つた。

二人の姿が遠のくと、間もなく、館の中からは眼たゞれの小さな老爺がよぼ〳〵出て來た。その老爺は水洟を啜りながら、惡どいペンキ塗りの剝げちよろけた扉を片寄せ、建ち腐れのしさうなテケツ場の窓を閉めて、繪看板も軒内へ取り込んだが、やがて表飾りの電燈もポッポッと二度に消されて、そこいらは急に眞暗になつてしまつた。無燈の自轉車に乘つた子供が、雪の降りしきるその闇の中を、それでも元氣のいゝ口笛を吹きながら、ついと眞驀に乘り切つていつた。

あとにはもう人通りもなかつた。

二

一行がずつと滯在してゐた鶴津屋といふ小宿は、館から三丁ほど下の町へ下つた、裏通りのだらだら坂の下にあつた。往來に沿つた總二階建ての、こゝいらでは一寸眼につく家であつたが、先年の大火のあとで無理をして建てた俄か普請なので、ナマコ板張りで、軒が低くゝて、いかにも見すぼらしかつた。青ペンキで塗り立てた場末の旅籠らしい大看板が入口の屋根一面に上げてあつて、柄にもなく大きな電燈ばかりが明るく四邊を照らしてゐた。

德枝は玄關の硝子戸を開けて、照れ隱しに「おう、寒い。」と、云つて、土間へ飛び込んでいつたが、帳場には誰れもゐなくて、お歸りと迎へる聲も聞えない。

翠波も結局それをいゝことにして、そのまゝ大きな顔をして正面の

階段を上つていつた。よつぽどあの大火が痛かつたと見え、そこから廊下へかけては、杜毎に眞紅な、安ものゝ消火器が懸けつらねてあつた。

彼等の借りてゐる座敷は、二階の一番どんづまりの八號だつた。がらんとした、置き床の間のついた八疊で、申譯ばかりに黒塗の田舍臭い衣桁と、長火鉢と、ニス塗りの飾棚が置いてあつた。疊はぼくぼく膨れ上つて、歩く度にやはな根太がぎしりぎしり鳴つた。

二人は火の消えた長火鉢の側へいつて、先づ坐るには坐つたが、何にしろ齒の根も合はないほど寒いので、翠波は、

「ねえ、德ちやん。とにかくこんな濡れたものを着てゐちや毒だから、早速ひとツ風呂溫まらうぢやないか。」と、空咳をしいしい云つたが、面長の、鼻筋のきりツとした彼の顔は、まるで、土氣色をしてゐた。緣なしの華奢な眼鏡も雨に濡れて、カラーの隙間からみえる頸筋はいたいたしいほど鳥肌だつてゐた。

德枝は手帛でしきりに樂器入れのケースを拭きながら、

「ほんとにこれぢや風邪をひいちやうわね。」と云つたが、彼女ももう長いこと理髮店へもいかないと見えて、斷髮の盆の窪のところには黒くみえるほど毛が伸びて、耳朶ばかりが紅をひいたやうに眞紅になつてゐた。

そこへ裏階段の方から、背丈のずんぐりした金齒を入れた、人の好さゝうな女中が十能に火を入れてもつてきた。

翠波はその女中の方へ、態々愛想のいゝ笑顔をみせて、

「お常さん。唯今。お風呂は何うだい。すぐに入つてもいゝかね。」と、云つたが、女中は氣の毒さうに、

「は、あの、生憎ね。今夜はあのお釜がどうかしちやつたとか云つて、沸かしませんの。どうもお氣の毒樣。」と、云つて、宙腰になつて、長火鉢へ炭火をつぎだす。大震災から此方、東京を流れ出して來たとかいふので、その女は珍らしく輕い東京辯をつかつた。

翠波は落膽して、

「おや、おや。お風呂も立てないのかい。どうも實に手酷しいね。はゝはゝ。」と、仕方がなさゝうに笑つて、やがてすごすご脊廣をぬいで、褞袍へ着換へながら、

「沸かさんといふものを愚圖愚圖云つた時に仕方がないが、併しこゝの家の老爺さんも金を取るのは下手だね。客遇ひをよくして置きやこれで義理つてものもかゝるのになあ。はゝゝゝ。まあ、仕方がない。兎に角これぢや風邪をこぢらせてしまふから、ねえ、お常さん。お氣の毒だけど、大急ぎで熱い奴を一本つけて來て頂戴な。お帳場ぢや何んと云つても、そこはひとつお常さんの働きでね。君は僕等の隱れたる同情者なんだからなあ。」と、煽て上げて、「それともうお酒は現金でなくちや出さんかね。」

お常は困つたやうな顔をして、

「さあ、如何ですかねえ。」と、云つて、鐵瓶の湯を注たりしてゐた

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、翠波はシャツのポケットから財布を引出して、何うしたのか、その中から五圓紙幣を一枚氣前よく抜り出して、

「いや、お常さん。このうへ君をいぢめても始まらない。これをお帳場へ持つてつてね、とにかくお勘定の件は明日きつぱり極りをつけるから、どうか今夜の酒だけは心持ちよく出してくれるやうにさう云つて呉れないか。賴むよ。この通りがたがた慄へてゐる始末なんだからね。」

お常はもじもじしながら、

「どうもほんとに相濟みません。何にしろ家の旦那と來たら、因業なんですからねえ。」と、笑つて、「あの、他の方達は何うなさいましたの。大變に遲うござんすのね。」と、訝る。

翠波は火鉢の前へ坐つて、

「皆かい。皆はもう君、この前の汽車で東京へ歸つちまつたよ。いよいよ一行解散と來ましたからね。實に慘憺たる有樣さ。はゝゝゝゝ。」

お常は眼を丸くして、

「あら、まあ。……」と、云つて、「だつて、それでもまだ皆さんのお荷物なんか殘つてますのにねえ。」

「はゝゝゝ。荷物？　どうせ碌なものは殘しちやゐないさ。開けてみりや猿股の汚れたのか、古ポスター位なものさ。はゝゝゝゝ。まあ、いゝ。とにかくお常さん。大急ぎでお銚子をね。」

お常は狐につまゝれたやうな顔をして、階下へ下りていつてしまつた。

德枝もその間に宿の男褞袍に着換へて、長火鉢の向ふへ坐りながら、翠波の煙草入から敷島をぬきだして、うまさうに吸つてゐた。まだ寒さが應へてゐるとみえ、鼻の頭が眞紅になつて、眼も低く窪んでゐたが、翠波の顔を下からみて、

「ねえ。あんた。かうなつてみると、何んだか急に寂しくなつちやつたわねえ。もう皆汽車に乗つちやつたでせうか。」

翠波は腕時計をみて、

「さあ、もう十一時三十分だから、そろそろ乗る頃だね。今頃はもう歩廊へ出てやがるだらう。」と、云つて、自分も煙草に火をつけて、

「併し全くかうなると、實に薄情な野郎ばかり揃つてゐやがるぢやないか。別れ際に誰れ一人だつて、氣の毒さうな顔をしてた奴ありやしないもの。尤も樂士の連中は、今度は突込みで風來ものを引張つて來たんだから、人情のねえのは當前だが、併しそれにしても當時の奴位は何んとかひと愁嘆場あつてもよさゝうなもんぢやないか。彼奴までがいゝ加減な茶羅ッぽこを云つて、とつとと歸つてつちまいやがつた。さすがに僕あ涙が出たね。今時は全く賴りにやならねえね。」

德枝は吸殻を灰の中へ突込んで、袋の中からコンパクトを出して、顔を直しにかゝりながら、

「ほんとにさ。私もあの時にや呆氣にとられちやつたわ。隨分な人達だと思つて、口惜しかつたのよ。二月もひとつ釜の御飯を食べて來た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のにねえ。……それにあんた、機械だつて齒だつて、また九日も日が殘つてるんぢやないの。」と、云つて心細さうに自分の鼻をみながら、
「でも、私、正直なことを云ふと、私も全く歸り度かつたわ。もう東京を出てから二月にもなるんだものねえ。一體あとはどうなるの。ほんとに東京からお金が來るの。大丈夫？」
　翠波は平氣な顏で、
「そりや君、大丈夫さ。間違ひッこないよ。島田先生だつて君、からなりや自分の責任もあるんだからねえ。」と、云つて、又咳入りながら、「それに、今だから云ふが、あゝやつて一行を抱へてゐたんぢや、いくら先生だつてとても金を送つて寄越しッこないよ。先生は兎に角、奥さんの蛇がね。實にあの蛇と來たら算盤高いからね。あゝ人頭が多くつちや、とてもちつとやそつとの金ぢや足搔きがとれないつてとこを見てるから、中々何うして。そこで僕は考へてね。いよいよ今夜解散の宣言を下した譯なのさ。たつた二人で身輕になりや、これで何うにだつてなるもの。從つて先生の荷だつて輕くなる譯だからね。そこは先生だつて、ちやあんと考へてらあね。」
「さうか知ら。それだと私も安心が出來るんだけど。これでやつぱり心配でね。あんたに任しときやいゝと思つても、やつぱり不安なもんだわ。惡いけど。……それに私、何にしろ旅は今度が初めてなんでせう。大きな顏はしてるけど、その實心細いのよ。それにあんた、手持ちのお錢は何う。少しは殘つてんの。」
　翠波は狡さうな眼つきをして、舌舐めずりをしながら、
「はゝゝゝ。德ちやん。細工はりうりう仕上げを御覽じろさ。いや、實はね。どうせこんなことになるだらうと思つたんで、先刻盛榮館の館主から分金を受取る時に、そつとピンを切つてやつたんだよ。あの時には五十六圓なにがしと報告したが、實は君、九十三圓ばかしになつてゐたのさ。その中から丸々三十七圓がとこぽつぽをしてやつたんだから、一寸いゝ仕事だらう。それで君、あとは知らぬ顏の半兵衞さ。どうだい、凄い腕だらう。はゝゝゝ。」と、自慢さうにいふ。
　德枝は呆れて、
「まあ、ぢや一寸三分の一、頭を張つた譯ね。全くこの道は、仲間でもうつかり氣が許せないわね。呆れッちやうわ。」と、云つて、コンパクトをそこへ放り出して、今度はだらしなく、火鉢のうへゝ被さるやうにしてあたりながら、「ぢや今の五圓もそん中から出したのね。道理で氣前がよすぎると思つたわ。ほゝゝゝ。そいで誰れも氣がつかなかつたの。」
「氣がつくもんかね。第一三日勘定だから、各の頭が分つてやしないもの。それにあのどさくさの中だらう。やたらとガッガッしやがるばかりで、そんな血のめぐりのいゝ奴は一人だつてゐやしないんだ。まあ、あの宮崎の奴位は、あれで汽車に乘つてからどうも少々變だなと感づいたかも知れないが、もう後の祭だからね。はゝゝゝ。」
　そこへお常がやつと銚子の仕度をして運んで來た。もう火を落とし

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て何んにも肴が出來ないからと云つて、しなびた燒海苔と殘りものらしい蛸の酢ぬたをつけて來た。

德枝はそれを置いて出ていかうとするお常を後から呼び止めて、

「ねえ、ちよいと、お常さん。いろいろ我儘を云つて濟みませんけどねえ。私、お腹が空いて耐んないのよ。火を落としたんなら、あの、何處かそこいらからおうどんを取つて呉れない。うどんかけを二つでようござんすわ。」と、いふ。

お常は障子を閉めながら、

「はい、畏りました。旦那の方は如何です。」と訊いたが、翠波はもううどんなんか澤山だと云つて、まるで餓ゑてゐるやうに黑塗の猪のうへから盃を取り上げた。

德枝は酌をしてやつた。

德枝も旅へ出てからは、すつかり手が上つたので、彼女も翠波に酌をして貰つて、ぐいぐい呷つた。酢つぱいやうな地酒だつたが、二人は文句も云はなかつた。

德枝は煙草ばかり吸つて、

「でも香月さん。今度の旅は振り出しから無理があつたんだわねえ。何にしろ宇都宮の軍隊が外れたのが、躓きの初めだわ。それに福島もいけなかつたし、郡山もあの通りでせう。そこへもつてきて、仙臺で島田先生に脫けられちまつたんだもの。助かりッこないわ。ほんとに運が惡かつたんだわねえ。」

翠波は蛸の脚を口の中でもぐもぐやりながら、

「いや、そこへいくとこの旅つて奴は全く水もんだよ。それこそ出たとこ勝負だからね。併しこれも今だから云ふんだが、實はね、あの島田先生の病氣だつて、ほんと云や臭いもんさ。先生はもう白河ですつかり懲りちやつて、もうこりやとても可けないと見て取つたんで、あの假病をつかつて、巧くドロンぢやつたのさ。先生なんか、この道ぢや三十年も叩ッ込んでるんだもの。そりや眼先は早いやね。」

德枝は變に口尻を歪めて、

「まあ、さうか知ら。ぢやあの病氣は狂言なの。隨分失禮しちやうわねえ。折角の上置きがあんた、そんなことをしていゝのか知ら。」

「いくら可けなくても、師匠と弟子ぢや咎める譯にやいかんからね。」と、云つて、翠波は口惜しさうな顏になつて、「いや、併し今度の失敗はね。いつも云ふことだが、たしかにあの久保川の野郎が片棒かつぎやがつたんだよ。彼奴が出るところの土地で、いゝ加減な契約をして廻はりやがつたから、到頭雪隱詰めを食つちやつたのさ。どうも、彼奴、此の前の時から臭いと思つてたが、やつぱり僕の眼鏡は違はなかつたよ。」

「おや彼奴、上前でもかすつて歩いたのかしら。」

「いや、上前どころぢやない。中にや仕打の懷までいびつてやがる處があるに相違ないんだ。須賀川なんか、さう云やあ、實に怪しかつたもの。」と、云つて、翠波は手酌でやりながら、「今更、愚痴を零した

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて追付かないけど、僕は今度東京へ歸つたらと思つてるんだ。彼奴まんまと、我々をはめやがつたから、今度こそもう島田先生のところへ顏出しの出來ねえやうに、ぎふと首根ッこを押へつけてやらなけりや、此方だつて胸がおさまらねえからね。何うするか、それこそ見えてゐろさ。」

德枝も口惜しさうに、

「ほんとだわ。今度こそうんと叩きつけてやる方がいゝわ。何も私達がこんな辛い目をみて、默つてることはないんだものねえ。」

翠波は立て續けに飮んだので、もうそろ〱醉つて來て、血線の出た白眼をくる〱させながら、

「いや、それにやつぱり今から考へると、持つて來た藝も可けなかつたんだね。劍劇もの丶「敵討八方鏡」に、正喜劇「亭主」なんて並べ方ぢや、いくら東北でもお客が來ッこないよ。せめて君、一本位はやつぱりしんみり泣ける情緒ものがなけりやねえ。おかげ樣で、この翠波の如きはやんやと來る儲け場所更らになしさ。はゝゝ。」

「だつて、あの藝はみんな島田先生が選定なすつたんでせう。」

「もとよりさ。つまり露骨に云へば、先生が義理のある手持ちのものをさつぱり掃いた形さ。我々が默つて、それへ載つけられたのさ。それに大きな聲ぢや云へないけど、もう先生だつて此節ぢや時勢に遅れちやつてるからね。」

「さう云やあ、さうだけど。でもやつぱし顏觸はあるわね。何處の田舍へいつたつて、先生の名だけは知つてますからね。」

「そりや入れた年期の餘德さ。田舍へ來りやこれで強いもんだからね。説明界の大キング、辯士界の大明星と來らあ。はゝゝ。大天狗の間違ひぢやねえか知ら。」

「あら、隨分口が悪いわね。ほゝゝ。そんなこと云ふもんぢやないわよ。恩師に對して。ほゝゝ。」

翠波は頭を抱へて、

「こりや失禮。口が曲る、臍が曲る、足が曲るッと。序に小便へでもいつて來ようッ。はゝゝ」と思切り笑つて、彼はそのまゝ勢よく立上つて、便所へ下りていつた。

德枝はひとりでちびりちびり飮んでゐたが、翠波は便所から歸つて來ると、今度は德枝の傍へ態と崩れるやうに横坐りに坐つて、彼女に酌をしてやりながら、一寸彼女の肩へ顋をもたせかけて、

「ねえ、德ちやん。そりやさうと、先刻別れ際に、君と僕との關係に對して、何んか槍でも入れる奴がゐるかと思つたら、案外何奴も默つてやがつたぢやないか。意氣地やねえんだね。」

德枝も色めかしく、頬ッぺたを翠波の顏へ押しつけて、横眼で秋波を送りながら、

「いゝえね、私も實はびく〱してたのよ。今迄だつて、あんたは知るまいけど、藤ちやそりや煩かつたのよ。だから私、きつと藤崎さんが何んか厭なことを云ふに違ひないと思つてたら、案外だつたわ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「はゝゝゝ。そりや君、あの宮崎は苦勞人だよ。人間が出來てらあね。薄情なだけに、そこいらの要領はまことにいゝんだがね。併し中島のにきび野郎がそれでも小さ刀でちよいと斬りかけて來たぢやないか。はゝゝゝゝ。」

徳枝は媚びるやうに大業に嘘笑をして、

「ほゝゝ。あの人、ほんとにいつも三枚目ね。慾の皮も突張つてるが、あれでゐて色氣の方もたつぷりなんだから滑稽だわね。今日の云ひ草だつて、もとを洗やあやつぱし嫉ッかみなのよ。」

「はゝゝゝゝゝ。今更嫉いたつて始まらないぢやないか。ほんとに彼奴は、いくらか君に脈があると思つてんのかね。」と、云つて翠波は徳枝の絃蛸の出來た手をいぢくり出す。

徳枝はするがまゝに任せて、

「そりやあんた、思つてるどころぢやないわ。あの人、昨夜もね。私がお風呂へ入つてたら、そこへこつそり入つて來てね、變な眞似をすんのよ。」

「はゝゝ。頰ッぺたのにきびを潰しつぶしね。ほんとに氣の利かない野郎だ。何うして彼奴はあゝ薄汚いんだらう。傍へ寄るとぷうんと酢ッぱいやうな匂ひがするからね。厭な體臭だね。」

徳枝は盃を啣みかけて、手を振りながら、

「あんた、もう止してよ。私、思ひ出しても、お酒の味がまづくなつちやうわ。それでゐてあんな氣の利かない顏をしてゝ、あの人、これなんですつてね。」と、人指し指でカギをこしらへてみせる。

翠波は合點いて、

「さうだとも。その方ぢや一ッ端しやれるんだからね。人は見かけに依らないものさ。白河でなくなつたあの井上の指環だつて、到頭吐き出さなかつたからね。」と、云つて、彼は自分の藥指にはめてゐる印度瑪瑙の大きな金指環をはめ直しながら、ちらと徳枝の顏を見て、「ねえ、徳ちやん。君ばかり飮まないで、僕にも一杯おくれよ。」

徳枝は自分の飮みかけを、翠波の口へもつて行つてやりながら、

「ねえ、香月さん。だけど、併し、旅つてものは、全くいゝ加減なもんね。私、全く愛想が盡きちやつたわ。同じ仲間うちでも、女と見たら、それこそもう遁がさないのね。とても凄いわ。」

翠波は徳枝の肩へ手を廻はして、

「はゝゝゝ。何奴も皆餓ゑてやがるからねえ。それに御馳走つときときてるんだもの。その方ぢや氣も荒くなつてるからね。」

「でもそれにしたつても、あんまり見境ひがなさすぎるわ。私、まさかと思つてたのに、……」

翠波は變に思はせッ振りなその云ひ方を聞き咎めて、

「何にがさ。中島の他に何かい、まだ誰れか君に思召しをつけてゐた奴がゐるのかい。……あゝ分つた、宮崎たらう。」

徳枝は手を振つて、

「うゝん。さうぢやないわよ。あんたに云つたら、きつと吃驚する

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

わ」
と云つたらいゝぢやないか。どうせもう皆歸つちまつて、今夜は僕とたつた二人きりなんだもの。いやに君にも似合はず持つて廻はるぢやないか。」

「いゝえ。さういふ譯ぢやないのよ。だけどあんた、聞いたあとで氣を惡くしないでね。私、もう今だから云つちやうけど、あの、實はね、島田先生までが私を口說いたわよ。呆れるぢやないの。」

翠波も意外さうに、うすら笑ひを洩らして、

「へえ。あの禿ちやんがね。一體何處でさ。」

「何處つて、あの、白河の宿屋でよ。そらあすこを立つ前の晩、例の井上さんの指環一件で遲くまでごたごたしてたでせう。あん時、あんた達は表二階へいつて荷物を調べてたわねえ。あの留守によ。」

「へえ。あの留守にね。いや、こりや驚いた。」と、翠波もさすがに少し白けて、德枝の肩から手を外しながら、「尤も先生は昔からチヨッカイが早いんで有名だつたが、併し君に當りをつけるとは聊かたしなみがなさすぎるねえ。寧ろ少々慨然だよ。それで何うしたい。君はうんと云つたかね。」

德枝はふんと鼻で扱つて、

「まさかあ。いくら何んでも先生ぢやあねえ。私、だからもうはつきり斷つてさう云つてやつたの。さうしたらね、先生つたら、禿の中まで眞赤にしちやつてね、何にしろ、禿がカンカンついてる中でせう。もうそりや可笑しいほど照れちやつて、到頭私の手を放しちやつたわ。それからは何うしたんだか、氣味の惡いほど、お世辭を使つてね。私の機嫌ばかりとるやうにしてるんだもの。私、却つてお氣の毒になつちやつたわ。やつぱし他人に知れると可けないと思つてびくびくしてらしつたんだわねえ。」

「そりやさうだらうとも。もし東京へ歸つて蛇へでも云ッつけ口をされようもんなら、それこそお家騷動だからね。併し辯士界の重鎭、島田光波先生も、德ちやん風情を口說くやうになつちや、いよいよ燒きが廻つたね。」と、嘲けるやうに云つたが、さういふ彼の顏色は、妙に變つてゐた。彼はそのまゝ火鉢の火をみつめながら、ふと何か別なことでも頭腦へ映つて來たやうに少時の間考へ込んでゐた。

德枝は三本ついて來た銚子が、もうすつかり空になつてしまつたので、殘惜しさうに一本一本振つてみながら、

「ねえ、あんた、もうお酒がなくなつちやつたわよ。あんたもう止す。もつと飲みませうよ。今夜は皆歸つちやつて、どうせ邪魔ものがゐないんだから、私、うんと飲んでうぢやぢやけ度いわ。ほゝゝゝ。もう三本位いゝわね。お常さんを呼んでよ。」と、云つて、ふらふらしながら立上つたが、ふと戸外へ聞き耳をたてゝ、

「あら、雨は止んぢやつたのか知ら。いやにしいんとしちやつたわねえ。」と、云ひながら呼鈴を押す。

翠波は思ひ出したやうに、ぶるぶるッと身震ひをして、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あゝ、又めつきり冷え込んで來やがつた。さつきの嚔がきつと雪になつたに違ひないよ。それで音がしなくなつたんだ。」と、呟いて、彼ももぞもぞ立上つて、空咳をしいしい又便所へ下りていつた。

三

その翌日、二人は午過ぎまでふて寢をしてゐたが、起ると引違へに宿の亭主が上つて來て、もう宿料の勘定に對する手詰めの談判であつた。

昨夜降つた雪も三寸ばかり積つたきりで、午過ぎにはすつかり霽つてゐた。低い雲の切れ目からは時折寢ぼけたやうな薄日が射したりしてはゐたが、何分にも底冷えがつよいので、翠波は炬燵の中へちゞこまつてゐた。彼は顏色はまるで錆のやうで、熱ッぽい濕んだ目をしながら、咳ばかりせいてゐた。徳枝も昨夜の醉ひが殘つてゐるとみえ、生欠伸ばかりしながら、安ものゝガタガタ鏡台を炬燵の傍へ引寄せ、さつきから燒火箸で横鬢の毛へ丹念にウエーブをかけてゐた。それがうまくいかないので、彼女は横坐りにだらしなく坐つて、一人で焦れてゐた。

宿の亭主は、今日はもうすつかり嵩にかゝつてゐた。黒痣の處斑らに出來た、胡麻鹽頭を振りたてながら圖々辯でいつこくにまくしたててゐたが、翠波はまるで取合ひもしなかつた。

「いや、今も御覽の通り、東京の方へあゝいふ電報も打つたんだから、その返事が來るまで何んとかして待つて貰ふより他はないですよ。一行のものも今朝はもう東京へ着いてゐますから、必ず送金はしてよこしますよ。まあ、どうかさう物事を面倒にせんで、もう少時ですから待つてゐて下さい。決して御迷惑はかけんといふてるぢやないですか。私も東京の藝士界では相當に人氣ものゝ香月翠波です。たつた七八十圓の金で、御當地を賣りやしませんよ。」

亭主も度々藝人には踏み倒されてゐるとみえて、いつかな聽き入れなかつた。因業といふよりは、少し手筋のよくない老爺らしいので、いふことも隨分荒ッぽかつた。それだけに翠波もうつかりタンカも切れず、頭に柳とあしらつてゐるより他に仕樣がないのであつた。

二時間ばかり坐り込むと、階下から女の子供が用があると云つて呼びに來たので、老爺はしぶしぶたつていつた。とにかくないものは取る譯にはいかないので、いくら厭味なことを云はれても、かうなると居坐つてゐる客の方が強かつた。

翠波は老爺の足音が裏階段の下へ消えていつてしまふと、いくらかほッとしたやうに大きな伸びをひとつして、

「あゝッ、骨を折らせやがつた。畜生奴ッ。僕はどうも今日は少しばかり熱があるやうだよ。その筈さね、昨夜ひと晩ですつかり風邪をこじらせてしまつたんだものなあ。」と、云つて、そのまゝ座布團を枕にして、ごろりと横になつてしまふ。その顏は今度は眞紅になつてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

德枝も段々思ふやうにならないので、もう斷念めて、鏡臺をかたがた向ふへ足で押しやつて、もう一度欠伸をしながら、

「あゝ、ほんとに厭になつちやうわねえ。お金の催促つてものは、いつ聞いても不愉快なものね。」と、投げ出すやうに呟いて、自分も炬燵へ入つて來た。ふいと膝小僧を入れようとすると、そこの布團の下には、翠波の足の先が來てゐるので、德枝はそれをよけて、向ふへ居坐つていつた。翠波の足はいかにも細つこくて、蒼い靜脈が蚯蚓のやうにうねうね浮いて、まるで血の氣がなかつた。

德枝はさうしたまゝぼんやり考へ込んでゐたが、少時するとたしなみもなく鼻の穴をほぢくつて、

「ねえ、香月さん。昨日の晩打つた電報の返事はもう來さうなもんぢやないの。何うしたんでせうねえ。先生又病氣でもして被居るんぢやないでせうかねえ。」

翠波は天井ばかりまじまじ見上げながら、

「さあ……」と、浮かぬ聲で答へたが、急に德枝の方へ上半身を摺り寄せて來ながら、眉をぴくりぴくりと痙攣させ、

「ねえ、德ちやん。昨夜君に聞いた話ね。そら、先生が白河の宿屋で、君を口說いたつて話さ。あいつはまさか嘘ぢやないんだらうねえ。」

德枝は平氣な顏で、

「嘘ぢやないわよ。何うして。」

「いや、あれがほんとうとすると、何うもちつとばかり形勢が面白くなくなつて來るんだよ。一寸困つたなあ。」

「だつてあんた、先生はあんなことを眞逆根にもつてやしないでせう。私、そんな了見の狹い先生でもないだらうと思ふわ。酒癖と、私事とは違ふんだもの。」

翠波は變な眼つきをして、

「いや、ところがさうでないんだよ。これで色事の恨みといふ奴は、誰れしも厭にこだはるもんだからねえ。僕、實は昨夜も寢てから考へてみたんだが、先生があの時急に仙臺からずらかつたのにも、幾らかそつちの方の事件がこだはつてゐるんぢやないかね。少くとも一つの原因にはなつてゐると思ふよ。」

德枝は鼻の先で笑つて、

「まさか、そんなことないわ。どうせあんた、先生だつて旅先のこつだもの。木刀休めに掃き倒す位のつもりで、私に當つてみたに違ひないわ。きつとさうよ。だからもう今頃はけろりと忘れてるわよ。ほゝほゝ。」

「いや、中々さうでないて。年を老つてるだけに、さう君、さらりとは行かんよ。それに第一面目つてものがあるからね。案外あの禿ちやん、氣を惡くしてゐるに相違ないよ。どうも僕にはそんな氣がしてならないんだ。さうとすると、これで一大事だからね。」翠波は力めて笑談めかしく云はふとするのだが、彼の感情が許さなかつた。彼の表情

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は段々強ばつてきた。

德枝は駄々ッ兒のやうに、

「さうか知ら。男つてそんなもの。案外ね。あんた先生のやうな相當地位のある人でもやつぱりさうなのかなあ。可笑しなものね。そいぢやつまりあの事を根にもつて、お金を遂つて寄越さないんだわねえ。」

「まあ、疑へばさうだね。それでなけりや昨日つからあんなにもう五通も電報を打つてるんだもの。金は兎も角として、返事だけでも寄越さないつて法はないよ、先生の氣性としてだね。……それに皆ももう今頃は東京で先生に逢つてるだらうし、奴等のこつだから又どんな讒訴をして、その又上塗りをやつてるか分らんしね。兎に角困つたことになつたもんだよ。少々僕も心細くなつて來たよ。」

德枝は炬燵の櫓へ顎をもたせかけて、急に眼だけ心配さうに動かしながら、

「困るわねえ。もしお金が來なかつたら、私達どうするの。」と、悄氣返つてしまふ。

翠波は又ごろりと仰向けに寢て、

「そこさ。それを僕はもう今朝から考へてゐるんだよ。何か他にいゝ方法はないかと思つてね。」と、云つたつきり、彼は妙に默り込んでしまつた。

肱掛窓の障子にはすうッと日が當つて來た。それはもう紅味がゝつた弱々しい夕陽の光で、雲が去來する度に、座敷の中までが息を引くやうに明るくなつたり、暗くなつたりする。丁度そこから眞向ふにみえる崖地では、今鐵道線路の增幅工事をやつてゐるので、カチンカチンと石を割る鐵槌の音や、コンクリート、ミツキサーの轟音がしつきりなしに遠く聞えてゐた。

そこへすぐ二階の軒下のところで、だしぬけに鳥がかアかアと二聲ほど取つてつけたやうに啼いた。風が障子をひとしきり搖り動かすと、つゞいて又その鳥が不愛想な、變哲もない聲で今度は三聲ばかり空へ向つて啼きつゞけた。

德枝は場合が場合なので、忌々しさうに舌打ちをして、

「つッ、又あの鳥が啼き出したわ。緣喜ッくそが惡いッ」と、云つて、障子の腰硝子から伸び上つて階下を覗いたが、何うしたのか、彼女は顏色をかへて

「まあ、厭な奴ッ」と、叫んで、ついと肩を縮めた。

そこから工事場まではずうつと材料置場になつてゐて、枯草の生へた草地には處斑らに雪が消え殘つて、板つぺらと菰でこしらへた工事小屋が幾棟となく建ちつゞいてゐた。低い丘陵の起伏した向ふには、うら枯れた禿肌の山が、尾根尾根に雪を頂きながら幾重にも立重つて、どんよりと雲の多い空の色までが耐らなく陰鬱であつた。夕陽は四角く切つた御影石の山へきらきら輝いて、ピラミツド型に積み上げてあるセメント樽や、眞紅な鐵橋材料の間では小さな勞働者の群が蟲のやうに默々として働いてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とみると、すぐ窓の下の工事小屋の横手では、餓鬼のやうに痩せた淺黒の男がセメントの空樽のうへへ腰をかけて此方向きになつて頰に何かやつてゐる。腐つたやうなシャツや褌をずらりと乾しつらねた軒先で風を避けて、その男は小さくかゞまりながら、一心になつて、何かやつてゐるのである。よく見ると、そこに積んである古木箱の中には、何羽も何羽も氣味の悪い、真黒な鳥が入れてあつて、その男は小さな箸のやうなもので今餌を食はせてゐるのであつた。餌は彼の足許の缺け茶碗の中へ入つてゐて、それは何かしら蚯蚓のやうなものらしかつた。鳥は板の割目から風つきのよくない頭を突き出しては、貪るやうに餌をついばむ。ついばんではやがて一際ほどかアかアと啼くのであつた。空を仰いできよろきよろしながら嘴を開ける度に、夕陽がカツとあたつて、傷口のやうな真紅な口中が何とも云へない凄味を帯びて見えてくる。

徳枝はその様をみると、白粉の粉ツぽく浮き上つた顔を醜くゝしかめて、

「あら、まあ、あの人ツたら、鳥に餌をたべさせてるわ。物好きな人もあるもんねえ。」と、唾棄するやうに云つて、それでも厭なものみたさに、又炬燵の櫓へ手を突いて、そつちを差覗きながら、

「どうも私、こゝへ來た時から變だと思つてたら、やつぱしあの鳥は飼つてあるのねえ。道理で變な時にばかし啼くんだわ。」

要敬も氣を變へるためにむくむく起き上つて、同じやうに障子の腰硝子から戸外をこうツとみて、

「いやあ、氣持の悪い奴が何羽もゐるぢやないか。明るいうちに見たとはないんで今迄ちつとも知らなかつたが、成る程、變な道樂もあるもんだねえ。鳥を飼ふとはどうも氣が知れないねえ。」と、笑つて、もぞもぞ煙草を取り上げながら、「昨日お常さんがさう云つてたが、何んでもあの連中は皆朝鮮人の土工なんだつてさ。晩になると、酒を食らつちや喧嘩をしたり、賭博を打つたりして、もう手におへないんださうだ。それに通りがゝりの女に悪戯をしたりして、この町ぢやもう持て餘してゐるんだつて話だよ。」

「まあ、さうでせうともねえ。あの男の顏なんか、凄いわねえ。どうせ鳥なんか飼つてる位だもの。どこか人間離れがしてるわ。朝鮮ぢや鳥を珍重するのか知ら。」

要敬は火鉢の火が消えてしまつてゐるので炬燵へもぐり込んで、その火で煙草を吸ひつけながら、

「まさか。併しやつぱりあれでも、飼つて見ると、何處か可愛氣があるのかも知れないのよ。ほれ、御覧。今度は手の掌へ餌をのつけて食べさしてゐるぢやないか。」

「あらッ厭だツ、あの紅い口の忌らしいッたらないわね。あゝ、私、ほんとに厭なものを見ちやつたわ。何んだか、變にぞくぞくして來た。私もう昔ツからそりや鳥が嫌ひなんだもの。」

要敬も彼女と並んで、今度は膝枕をして、寝た。そして吸ひつけた煙草

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を纖細い指の先でパチンパチン鳴らしながら、德枝の顏の方へ流れていくその煙の行方をぼんやり追つてゐたが、少時すると、咳を押へて、
「ねえ、德ちやん。つかんことを聞くが、君、何處から金を引出す口はないかね。」と、切り出す。
德枝は、男のやうに兩手で頭を抱へて、それで調子をとりながら、奥齒をチュッチュッと吸つてゐたが、翠波の方は見もしずに、
「私に、そんな口なんかないわよ。それがあるッ位なら、あんたにお小遣ひをせびりやしないわ。」
翠波は意氣地もなく伏目になりながら、一寸云ひ悄さうに、
「あの、いつかの深井つて人は、ありや何うしたね。」と、云つたが、
德枝は鼻の先で、
「あんな男駄目よ。もう半年も逢はないんだもの。」
「だつて、あの人、隨分君に惚れてたんだつていふぢやないか。」
「いくら惚れて吳れたつて、私ぢや三月と續きやしないわよ。それにあんまりお金をせびり倒したもんだから、恐れをなしちやつてね。向ふから寄り付かなくなつちやつたのよ。」
翠波は煙草をくはへたが、煙が入つたために眼をしよぼしよぼさせながら、
「それぢやあの、慶應の學生で、何んとかいふ人がゐたね。あれは何うしたね。あれもパイかい。」
「波多野さん？　あの人もう學校を卒業しちやつて、お嫁さんを貰つたわよ。」
「今でも東京にゐることはゐるんだらう。」
「さあ、何うですか。何んでも大阪の方の會社へいくとか云つてたけど、何うしましたかねえ。」
「恐ろしくさつぱりしたもんだなあ。はゝゝゝ。これぢやとても歯が立たないなあ。ねえ、德ちやん。君もかういふ時の用意に、これからはいゝ弗箱を二三個つかまへとくんだねえ。まさかの時にや爲めになるからねえ。」
「私もう眞平だわ。もう旅へなんか二度と來ないから。」
「まあさ、旅へは出ないにしても、女は金穴が大事だよ。ほんとに少しでも金を送つて寄越すやうな口はないのかね。隱しちや可けないぜ。」
德枝は煩さうに、
「隱したりなんかするもんですかよ。この頃はもう何も彼もおてッぱらひよ。そいだから旅へなんぞ出て來たんぢやありませんか。」と、云つて、彼女は爪の長くのびた指先で無意味に疊の目を勘定しながら、
「あゝッ、私、東京へ歸り度いッ、しみじみ歸り度くなつちやつたわ。ほんとに香月さん。何うするのよ。かうなると、あんたの責任よ。」
翠波はさすがに厭な顏をして、
「いや、君と僕との間で、責任呼ばはりによさうよ。さうなると、つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひ物事が角だつてくるからね。」と、云つて、咳をしながら、「それより徳ちやん。ほんとに何んとかしようよ。何んとかして金を作る算段をしようぢやないか。かうなりや、君にも大いに心配して貰はなけりやねえ。責任問題が出て來りや、君にだつて幾分の責任はあるんだもの。僕も昨夜までは、白河での一件をちつとも知らなかつたんで、もう先生から金が來るものとばかり思つて當てにしきつて安心してゐたんだが、君の話で形勢がまるで一變してしまつたからねえ。だから君にもひとつ金をこしらへる口を心配して貰ひ度いんだ。そりや君だつて當然しなけりやならないことなんだからね。厭なことを云ふやうだが、君の口から責任て言葉が出たんで僕もつひかう云ひ度くなるのさ。」彼はいくらか角目だつていふほど困惑しきつてゐるらしかつた。

徳枝は默つて、歯ばかり吸つてゐた。不機嫌な、不貞腐れたその顔には、もう夕陽の殘映が暗くかげつてゐた。

また戸外では烏が騒がしく鳴き立て初めた。コンクリート、ミツキサーは遠くの方で、ゞーと喚いて、日は寂しい風の音とゝもにとつぷりと暮れかゝつていくのであつた。

四

その翌日になると、翠波は大分容態が悪くなつて、もう朝から寝たつきりになつてしまつた。碌に食べるものも喉へ通らないやうなので、頬のあたりにはめつきり窶れさへみえて來た。平常から色の浅黒い、角ばつた顔なので肉が落ちると、輪廓が一層とげ〳〵して來た。彼は熱も高いとみえ、額へ脂汗を浮かせて、眼ばかり力なく瞬きながら黄縞のゴツ〳〵した夜具の中へ仰向けに寝てゐた。枕が低いので、時々大儀さうに手を出しては、頭へかひ直してゐた。今日はもう激しい頭痛を訴へるばかりで、何うしたのか、大變咳の數は減じてゐた。

徳枝は何うにも手がつけられないので、自分も炬燵の中で寝たり起きたりしながら、ぼんやり時を消してゐた。戸外へ氣を紛らしに出ようにも、帳場の監視がきびしいので、氣味が悪くて、階段さへうつかり下りられなかつた。いくら翠波に相談をもちかけてみても、彼はうん〳〵云ふばかりで、別にこれといふ思案もなさゝうなので、徳枝はしまひにはほんとに腹が立つて來た。彼の寝てゐる顔へ何かものでも投げつけてやり度いやうな、ヒステリックな焦燥さへ覺えて來た。

徳枝は翠波が素湯を一杯呉れといふので、いけぞんざいな様子で、ゆすぎもしない茶碗へ冷たい鐵瓶の湯をついで枕許へ押し遣りながら、

「ねえ、あんた。そんなに苦しいんなら、風邪藥でも服んだらいゝぢやないの、うつちやつとくから駄目なんだわ。」と、つんけんしながら云ふ。

翠波は寝返りを打つて、その湯をまづさうに飲みながら、

「いや、今朝もアスピリンの錠劑を二粒も服んだんだが、さつぱり駄目なんだ。それにどうしたんだか、下腹がしくしく差し込んで、小便にばかり行き度くて堪らないんだ。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

德枝は横眼でその顏をぢろりと見遣りながら、
「ふん。だからさ、、、、、、、、、らなきやいゝんだわ。、、ないつていふのに、、、ないんだもの。私、もう此間ッから、あんまり汽車に乘り過ぎたり、冷え込んだりしたんで、、、ものかして困つてるんぢやないの。」
翠波も口を尖らかして、
「そんなら、その樣に、はつきり云つて呉れりやいゝぢやないか。」
と、云つたが、德枝は蔑むやうに、
「そんなこと、云へやしないぢやないの。馬鹿々々しくつて。」と、云つて、彼女はそのまゝ又ばたりと仰向けに寢てしまつた。
翠波は今度はよろよろ起き上つて、自分で鐵瓶の湯をお代りした。熱のせいで、彼はひどく喉が渇くらしかつた。
德枝はそつちは見てやりもしずに、節だらけの天井ばかり見上げてゐた。さうしてゐるうちに、ふつと旅へ出てからこのかたの出來事が、眩ろしいフヰルムのやうになつてまざまざと胸に去來して來た。ほんとに馬鹿々々しかつたと思へば思ふほど、さうした印象ははつきりと眼に映じて來た。彼女は耐らないやうな氣持ちで、今日迄の長い旅路を振顧らずにはゐられなかつた。
一行が東京を立つたは、十月二日のことであつた。それまで彼等の出勤してゐた四谷の喜樂館といふ小屋が、丁度持ち主と賃貸期限が切れたので、彼等は生憎一月ほど遊びになつてしまつた。館主の方では不景氣のどん底を衝いてゐる昨今のことであるから、いつそ小屋は當分乾して置いて、その間に修繕をしたり、座席の改良をしたりすると云ひだしたので、主任辯士である香月翠波は間へはさまつて、困りぬいた揚句、窮餘の策として旅を思ひたつたのであつた。それには一本立ちでいくのは少々不安でもあるし、又責任も重いので、彼は兩天秤をかける狹い了見から、自分達の師匠である島田光波を擔ぎ出すことにした。光波を上置きにして行けば、分合も上がきれるし、一行の我界もずつと大きくなるので、彼は光波が横濱の館へ約束があつたのを、無理に斷つて貰つて、まるで泣きつくやうにして、一行の先達になつて貰つたのであつた。
囃や、樂士や、技士も無論そつくりそのまゝ喜樂館のを引ッこ拔くつもりでゐた。ところが途端場になつて、給金の分合で文句がついて、急に寢返りを打たれてしまつたので、翠波はひどく困つて、その方面のこともすつかり島田に一任してしまつた。で、館からは自分の弟子の畑靜波と、それから德枝だけが行を共にすることになり、あとは淺草にごろごろしてゐる烏合の衆を驅り集めて、それで曲りなりにも一行を組織したのであつた。
最初の振り出しは宇都宮であつた。それから栃木縣下を廻つて、福島へ出て、仙臺まで伸して、仙臺からそろそろ又東京の方へ足を向けたのであつた。東京を出る時には、皆も相當な意氣込みで、少くとも千か千五百は拔くつもりで踏み出して來たのであつたが、併しその

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くろみはからりと外れ、行く先々でいろんな御馳走をくつて、仙臺、辿りついた時には、もうへとへとになつてしまつてゐた。それといふのも不景況が祟つたのではあるが、一方又座組みの馴染みがうすいので、仲間うちの氣が揃はなくて、その爲めにまるつきり油が乘らなかつたせいもあつた。

ドイツ河ではもう二進も三進もいかなくなつたので、島田光波は最後の奥の手を出して、在方の役場へ頼み込んで、教育映畫といふ銘を打つて、その村の寺で開演した。さうなるとさすがに年功を積んだ師匠のことゝて、「敵討八方鏡」なぞといふヨタものを、巧妙な辯舌ですつかり忠君愛國の一大名篇といふことにしてしまつた。そこいらは實に得たものであつた。

徳枝は思ひ出すと、可笑しかつた。村の小學校の校長さんが羊羹色のフロックで出懸けて來たり、青年團の團長が軍服をひけらかしたから場内を斡旋して歩いたりして、騒ぎは可成りえらかつた。寺の鐘樓の横腹へシーツをかけて、本堂の縁端から映すので、畫は絶えず微風にあふられて、歪んだり曲つたりした。それでも寒い地面へ蓙をしいて見物してゐる村の善男善女達は別に文句も云はなかつた、殊にその畫の中には田舎向きに日蓮宗の有難い事蹟が織り込んであるので、寺の坊主や、壇家の衆はひどく喜こんで呉れて、思はぬ儲けものさへしたのであつた。

徳枝達は木戸の階段の陰でオーケストラを入れた。いゝかげんに浮かれてヴァイオリンを弾いてゐるうちに、妙に頸筋がむづ〳〵するので、徳枝はふつと手をやつてみると、大きな蜈蚣が洋服の襟のところへとまつてゐた。彼女はきやツと云つて、危くバウを放り出さうとして、やつと我慢した。明りも何もないので、皆は樂符をみることが出來ないところから、同じメロデイばかり矢鱈と繰返し繰返し弾きまくつてゐた。映寫がすんで、青年團員達がアセチリン瓦斯のランプをともすと、村の娘達は徳枝の斷髪を珍しがつて、ぞろ〳〵ついて來たりした。

その晩宿へ歸つて來てから、あの騒ぎが起つたのであつた。皆が風呂へ入つてゐる留守に、宿の床の間にのせてあつたクラリオネット吹きの井上の金の指環と、それから財布の中の金が三圓ばかりいつの間にか失つてしまつたのであつた。連中が連中なので、そんな些細なものでももう大騒ぎになつて、宿屋の主人や内儀さんまでが呼び上げられる始末であつた。何か事がありさへすれば、因縁をつけ度い樂士連のことゝて、中にはそれを結句云ひがゝりにして、酒食を強請るものさへゐた。

島田はひどく困つて、到頭自分が仲へ入つた。井上には自分の懐からその盗まれた三圓と別にもう二圓だけつけて渡してやつたので、それでやつと騒ぎはおさまつた。他の者達はそれを羨んで、その晩二三人で井上を淫賣買ひにでも誘き出したらしかつた。

島田はそのどさくさが靜まると、自分だけ奥二階へ歸つて來て、そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こで麥酒を飲みだした。徳枝は座敷の隅で、ヴァイオリンの絃をかけ直してゐた。

「それにしても、あの時、若し島田先生の云ふことを聞いてゐたら、この自分はどうなつたらう。」徳枝はふつとそれを考へると、胸がどきどきして來た。もう斯界の元老として、自分でも箔をつけてゐる光波に、いきなり手を握られた時には、徳枝も怪乎として二の句がつげなかつた。どうせその場の出來心だらうとは思つたが、自分風情にと思ふと、さすがの彼女もわくわくしてしまつた。雷藏はかんかんついてゐるし、それに表二階の方では光波や宮崎の聲も聞えてゐるので、いかに徳枝が思ひ切つてゐても、すぐその場でうんとは云へなかつた。で、彼女は氣の毒だとは思つたが、麥酒臭い唇で、自分の唇を探す島田の肩をとんと突いて、

「あら、先生、笑談をなすつちや厭ですわ。そんなことをなさると、私、大きな聲を出しますわよ。」と、照れ氣味に笑つてみせた。

と、島田は禿の中まで眞紅になつて、急に取つてつけたやうに笑ひ出しながら、

「そんな野暮を云ふもんぢやないよ。」と、柔か調子で云つて、それでもついと握つた手を放して呉れた。……

「先生はあの事を根にもつて、それでお金を送つて呉れないんだらうか。まさかねえ。まさか私のやうなものに眞面目で何うかうつていふんぢやないもの。そんな氣の狭い先生ぢやないに極つてるわ。……それとも先生はあれで少しは眞面目だつたのか知ら。」さうした疑ひは急に徳枝の心にこびりついて來た。それにしても、若い時からその方へかけては隨分修羅場も踏んで來た島田が、まさかそれッくらゐなことで、弟子の一人を失策らせるやうなことはあるまいと思ふと、徳枝には却つてそれを云ひたてにする光波の方が憎く僻んでゐるとしか思へなかつた。

それから三日目に、丁度仙臺へ乘り込んだ晩、島田光波は館の樂屋で急に眩暈がすると云ひ出して、その晩の夜汽車で突然東京へ歸つていつてしまつたのであつた。歸る時に、彼は二百圓からの金を投げ出して、皆に給金の幾部の内金を渡して呉れた。徳枝はその時には生憎樂屋に居合はせなかつたので、何んにも知らなかつた。………

徳枝がそんなこんなを思ひ合はせながら、ぼんやり考へ込んでゐるところへ、だしぬけに裏階段の方からみしりみしり大きな足音が聞えて來た。お常にしてはどうも變なので、きつと又宿の番頭が上つて來たのだらうと思つて、びくりと寢返りを打つと、廊下の障子の外ではお常ではないもう一人の女中の聲が、

「此方です。」と、誰れかを案内でもして來たやうに云ふ。

と、同時に、そこの障子はぎしぎし軋みながら引開けられて、思ひもかけない官服のまゝの若い巡査がぬうッと入つて來た。

徳枝は度膽をぬかれて、

「あらッ」と、叫んだつきり、夢中でぱつと起き返つてしまつた。彼女

女はみる〳〵唇の色も何もなくなつて、火鉢の椽へ兩手をかけて、蒼くなつたり、紅くなつたりしてゐた。

巡査はまだ二十二三の、愚直さうな男で、その樣をみると、默つて照れたやうに笑つて、

「やあ、お邪魔します。」と、東北訛をぴち〳〵戰かせながら云つて、そのまゝ帽子を傍へ置いて、端近かなところへ坐りながら、「私はここの署のもんだが、あんた方活動の方の人ですな。」と、じろ〳〵德枝の方をみる。

德枝はひと縮みになつて、

「はい、あの、左樣で御座います。」と、答へて不行儀に披がつた褞袍の裾をおづおづ引繕ひながら、翠波の方へ助け舟を乞ふやうに眼をやる。

翠波も寢ながら顏色を變へてゐたやうであつたが、巡査は今度は彼の方をみて、

「やあ、あんた、體でも惡いですか。いや、いや、もう起んでもえゝですよ。さうして寢とつて下さい。」と、氣の毒さうに笑つたが、翠波はそれでももそもそ起き上つて、

「どうも、こんな失禮な風をして居りまして、申譯も御座いません。何あに大したことはないのですが、一寸風邪をこじらせましてな。」と、苦しい中にも無理に愛想笑ひをして、「あなたは、此地の警察のお方で。はあ、左樣で御座いますか。それはわざわざどうも。はゝゝゝゝ。」と、頭をかきながら、「いや、何に。もう御用の趣きは大概分つて居りますのですが、どうも御繁用中、ほんとに恐入りましたなあ。さあ、どうかまあ、お樂に。」と、下へも置かないやうに云ふ。

巡査は厚い唇のうへゝちよつぴり生へた髭髯を撫でながら、

「いや、私こそお寢みのところへ踏込んで濟まんでした。實はもうお分りだらうが、その、此の宿の主人から一寸話しがありましたのでなあ。……」

翠波はそれを慄へる手で遮つて、

「いや、どうかまあ、それよりもお平に被居つて下さい。私も失禮しますから。」と、云つて、つくり笑ひをしながら、「いや、どうも面目次第も御座いません。私共も實はこんなことになる筈はなかつたのですが、生憎どうも今年は御承知のとほりいづ方へ參りましてもこの不景況で、すつかり手違ひになつてしまひましてなあ。全く近來にない馬鹿々々しいドヤをいたして居りますのですよ。はゝゝゝ。」

巡査も笑つて、

「さうですか。その話も此處の主人から聞いたですが、此處もやつぱり商賣の方が振はんので、非常に手許にもつまつて居るやうなのですよ。それでまあ、やむを得ず、先刻一寸署へ來て、何んとかして吳れちうもんですから。」

「は、いや、恐入ります。貴方がたにまでお手數をかけてほんとに恐縮です。何に、實はどうも主人の方であんまり氣が短かう御座いまし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てな。もう東京の方へも再三電報で打合はせもしまして、今明日中には送金もして呉れるやうな手筈になつて居りますのですから、もう少々待つて呉れますと、よろしいんですか。………」

「ふむ、それで、東京の方からは何處から送金して來るのですか。」

翠波はにこにこ笑つて、

「それがで御座います。隨分主人にも説明して聞かせましたんですが、一向に興行の方のことを心得ん人だもんですから、呑み込んで呉れんので御座いますなあ。御承知のとほりかうやつて地方巡業をして歩きますには、やつぱりちやんとした太夫元が御座いましてなあ。その方からの指揮命令で我々は動きますやうな譯で、かういふ場合にもその太夫元が責任を分擔して呉れることになつて居りますのですよ。それが我々同業者仲間の定欵になつて居りましてな、いや、定欵といふよりも一種の義務で御座いますな。」翠波はどうしたのか、まるで熱に浮かされてゐるやうな調子で、可笑しいほど雄辯にべらべら饒舌りだした。

徳枝は傍ではらはらしてゐた。

巡査は一々分つてゐるのか、分つてゐないのか唯こくりこくりと合點いて、

「それでは、つまりその太夫元から送金して來るのですな。太夫元といふのをもつと普通の言葉でいふと何ういふですか。」と、途轍もないことを云ひ出す。

翠波はもう先を呑んでゐるやうに、

「太夫元で御座いますか。それはつまり興行主といふこと、同意義で御座いますよ。私の方はそれが師匠の名になつて居りますので、その名前も申上げてよろしう御座いますし、又お取調べの必要が御座いましたら、いつでも彼地の淺草の象潟署へ御照會下さいますれば師匠の身許もよく分りますから。」

巡査は初めて官服のポケットから手帳を出して、

「はあ、太夫元、興行主ですな。」と、獨語のやうに呟いて、「それでは念の爲めにその送金先を聞いておきませうか。東京の何處ですか。」

翠波は一寸徳枝の方を顧みて、

「ねえ、徳枝さん。お茶でも入れてね。」と、さあらぬ顔で眼配せして、やがて師匠の住所姓名を述べた。淺草區象潟町二丁目十二番地、島田光波といふうちにも、巡査は象潟の字が分らないとみえて、幾度も幾度も聞き直した。翠波は臥床から乘り出して、畳のうへへ大きく指で書いてみせたりした。

巡査はやつと呑み込めたやうに、鉛筆を甜めづり〳〵、手帳へ書き留めて

「それではこの島田といふ人から、こゝの宿泊料を送つてよこす譯なのですな。いや、よく分りました。實は一寸盛榮館へもいつて、あすこの館主にも聞いてみましたですが、さつぱり要領を得んのでねえ。」

翠波は徳枝のついで出す茶を巡査にすゝめたから、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さうで御座いませうとも。いろんな職人が入り込んで居りますから、中々あすこいらも大變で御坐いませうからなあ。併し私共は行商をやつて歩きますだけに、旅先でうつかりした不義理は出來ませんのですよ。東京へ出て來られゝばこれで何の某で相當門戸も張つて居りますし、それに第一新聞を御覧になれば、誰れそれは何處の館へ出てゐるといふことが一目にして分りますからなあ。はゝゝゝ。私も僅か七十圓や八十圓の金で、御當地を賣り度くは御座いませんよ。そこの心持ちが當家の主人に少しでも分つて呉れるとよろしいんですが、……」

巡査は茶碗を取り上げて、

「いや、此處の主人は町でも有名な一徹もんだからなあ。私からよく云ふて置きますよ。」と、もうそれで自分の用は濟んだと云はぬばかりに呑氣な顏をして、間内を眺め廻はしながら、ふつと床の間に置いてあるヴアイオリンのケースを見附け出して、「や、あれはヴアイオリンぢやねえですか。」と、いふ。

琴波はおいでなすつたなといふやうな顏をして、

「左樣です。此方は樂士の一人だもんですから。」と、德枝の方をみながらいふと、巡査は親しげな眼つきをして德枝の顏をそれでもいくらか懷かしさうにみながら、

「やつぱりさうでしたか。實は私一昨日の晩非番であつたので、盛繁華へいつてみましてな。たしか歡樂の中にあんたがゐられたのを見かけたやうに思つたですが、やつぱりさうでしたか。なあ、あんた、出た樂手ですか、ちよつとそのヴアイオリンを見せて呉れんですか。」

德枝はケースごと床の間から下ろして來て、中から白粉ツ臭いヴアイオリンを出して見せた。彼女ももうすつかり胸を撫で下ろして、にこにこ笑つてゐた。

巡査はそのヴアイオリンをそつと取り上げて、大事さうに引繰返してみてゐたが、

「うむ。これは何うして、中々木が枯れてる。これ位使ひ込めば、いい音が出ませう。」

德枝は小娘のやうに嬌態をして、

「え、もう隨分長いこと持つて居りますから。」と、云つたが、巡査はGの糸を太い、眞紅な指でぽつんぽつんと彈いてみながら、

「もうこれは買つてから何年程になるですか。」と、訊く。

德枝は一寸考へるやうな風をして、

「さうで御座いますわね。私が學校に居ります時分に手に入れましたんで御座いますから、さう、もう八年になりますわね。」

「八年？　うむ、それではね。」と、云つて、巡査は云ひ憎さうに、「あの、これぐらゐなのぢやつたら、失禮ですが、何程位しますかな。」

「左樣ですわね。その時分たしか八十圓かで求めましたんですから、今ぢや大分致しますでせう。」その實彼女は三年程前に二十圓で、質流れの品を買つたのだが、勿體をつけて六十圓も法螺を吹いたのであつ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たら

巡査は一寸顔をあげて、眼を据ゑながら、

「八十圓？　それではえゝ品の筈ですよ。ふむ！」と、頻りにプリツチのあたりをいぢくり廻はしてゐた。

徳枝はその樣子で、巡査もきつとヴアイオリンを彈くなと察したので、水を向けるつもりで、

「あの、失禮で御坐いますけれど、あなたもヴアイオリンをなさるんぢや御坐いませんの。」と、笑ひながら、訊いたが、巡査はつぶ〳〵な頰つぺたを妙に紅くして、

「いや、ほんの僕なぞは慰みにやるのですよ。それも田舍で買つたものですから、音が惡くてね。」と、いつて、思ひ切つたやうに、「いやあなたに伺つたら分るでせうが、流行唄のやうなものゝ樂譜は何處にあるのですかな。きつと東京へいつたらいゝのがあるに違ひねえが、……」

徳枝は媚びのある眼でじッとその顔をみて、

「あの、流行唄つて申しますと、何んなんで御坐いますの。」と、訊き返したが、巡査は眼をそらして、にや〳〵しながら、

「いや、つまり「漂泊の唄」とか、「北はシベリア」とかいふやうな唄ですな。あゝいふ種類のものゝ譜ですよ。」

「あゝ、あゝいふもんで御坐いますか。それならあなた何處にだつて御坐いますわよ。私共は皆自分で寫しますけど、印刷したのも出版されて居りますわ。私、東京へ歸つたら、送つて差上げませうか。」

「やあ、それぢや恐縮ですから、どうか買つとる店を報らせて下さらんですか。僕はかういふものですから。」と、云つて、巡査は手帖の間から、官名を書いた自分の名刺を出して、臺のうへゝ置いた。

徳枝はちよつとそれをみて、

「いゝえ、あんなものはあなた、幾らも致しやしませんもの。それに館で澤山使ひますから、私、送つて差上げますわ。いゝのを選びましてね。たあに御心配なんか要りませんわよ。」

巡査は困つたやうに又顔を紅くしてゐたが、

「いや、一昨日その、あの劍劇の間でやつた唄ですな。あゝいふのが僕は好きなんですが……」

「あ、あの「父を尋ねて」ですか。あれはよう御坐いますわ。」と、云つて、徳枝はもう臆面もなく、囃唄のやうにその唄を小聲で唄ひ出した。

巡査は卑俗な、センチメンタルなその唄をぼんやり聞き惚れてゐた。そのうちにふつと彼にも職務の意識が歸つて來たと見え、ヴアイオリンを押しやつて、俄かに慌てゝ、

「や、どうもいろいろ有難う。それではどうか、よろしくやつて下さい。私からも主人の方へ云ふて置きますから。」と、云つて、そゝくさ立ち上つた。その樣子がひどく可笑しかつたので、危く徳枝は噴笑しさうになるのをやつと我慢して、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「とうもはんとにとんだ御迷惑をかけさして。」なぞと、頻りに云ひながら、彼を送り出していつた。

　徳枝は階段のところまで送つていつて、低声に先刻の唄のつゞきを唄ひながら又座敷へ引返して来たが、到頭腕を抱へて、

「はゝゝゝ。可笑しな巡査さんもあるもんねえ。小供々々してゐて、ほんとに可愛らしいぢやないの。」と、いふ。

　翠波はそれを抑へて、

「しッ。聞えるぢやないか。いや、實に善良ないゝ巡査だよ。實際愛す可き青年だ。」と、彼もにこにこしてゐたが、急に彼は顔色をかへて、さも苦しさうに胸を押へる。

　徳枝は炬燵のところへ突立つたまゝ、

「あら、あんた、どうしたの。又差し込むの。」と、眉を寄せたが、翠波は、そのまゝ氣狂ひのやうにぴよいと突立つて、いきなりばたばた廊下の方へ駆け出していく。何をするのかと思つて、呆氣にとられてみてゐると、彼はその足で便所の方へ駆け下りていつた。

　徳枝はきつとあの人便所がつかへてゐたのよと心の中で可笑しく思ひながら、やがてヴアイオリンを又膝づけて、茶道具はそのまゝ火鉢の傍へ押しやつて、炬燵の中へごろりと横になつた。そして先づまあ、よかつたと思つてほッとした。

　便所の方では、翠波がしきりに咳き入る聲が聞えてゐたが、徳枝は別に氣にもしてゐなかつた。天井の節穴を見上げてゐると、彼女の胸には又島田のことがいつともなく蘇つて来た。

……島田はりうとした絹のモウニングを着て、宇都宮の高級館のステーヂへ立つてゐた。彼はいつも映寫をはじめる前に一度スクリーンの前へ立つて明るい照明の中で一場の挨拶をするので、その晩も、てかてかした禿頭を光らせながら微妙の辯舌を振つてゐた。彼はもとからその愛嬌が賣りもので、一寸場違ひた英語なぞを入れるところが又觀客の氣に入つた。徳枝はボックスの中から彼の顔を見上げてゐたが、彼女はその顔をみてゐると叔父さんと呼びかけたくなるほどの親しみを覺えた。彼の癖で、兩方の手をズボンの前ボタンのところで始終からみ合はしては、言葉の調子をつけてゐるのが、徳枝には何となく可笑しかつた。あの人に色氣があるのか知ら。若し二人になつたら、どうであらう。さぞ柔か調子で殺ろし文句の百萬遍も云ふだらうと思ふと、徳枝は實に可笑しかつた。

　あの島田が白河の宿ではでれりとした顔をしていきなり自分の手を握つたのである。もつと何んとか形のつけやうもあるだらうに、いきなり變な顔をして摺寄られたんでは、此方がてれてしまふ。もしあの時、もつとうまく持ち駆けられたら、自分だつてきつと厭とは云へなかつたであらう。どうせ旅先ででもなければ、師匠なんかに口説かれることなんかありッこないんだから。さうしたら、今頃はどうなつてゐるだらう。……

　そんなことを空想してゐる間に、翠波はどたりどたりと重い足音を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たてながら裏階段を上つて來た。座敷へ入つて來るのをみると、いたいたしいほど息を切らしてゐて、顏色はまるで死人のやうだつた。

德枝は默つてもゐられないので、

「ねえ、あんた。どうしたの。お腹でも痛めたの。」と半分起き上つて云つたが、翠波はもう崩れるやうに臥床の中へ倒れ込んで、肩で息をしながら、

「いや、何にしろ眼が廻るんでね。」と、生唾を呑んで、「ねえ、君、氣の毒だが、僕のスーツケースの中から美音錠を出して吳れないか。あれでも飮んだら。……」と、云ひ云ひ枕のうへ〻顏を押しつけてしまふ。

德枝は押入の中から、彼の古びたスーツケースを出して來て、その中から小壜に入つた美音錠のボンボンを出して、壜ごと彼の枕許へもつていつてやつた。

翠波はそれをわなわな慄へる指先で取り上げて、栓をあけて、二つ三つ口の中へ入れたが、その時に、ふつとみると、彼の口尻のところには何うしたのか、眞紅な血が紅でも含んだやうに、少しばかりくッついてゐた。

德枝は吐胸をつかれて、

「あら、あんた、何うしたの。血でも吐いたんぢやない？」と、みるみる眉を顰めたが、さう云はれると翠波は慌て〻舌苔の一杯くッついた舌の先で口のまはりをべろ〱舐め廻して、一層蒼白な顏色になりながら、

「いや、我々の、我々の、商賣の人間は、血位、吐くの珍らしくないよ。から咳が出ちや喉が耐らないからね。」と、云つて、肩でせいせい息を引きながら、「ねえ德ちやん。僕まさか肺病ぢやないんだから、安心してお吳れよ。さうならさうとはつきり云ふから……喉が痛くつてね。ほんのほんの少しばかり血が出たんだ。……」さう辯解するやうに喘いで彼は無理に笑はふとしたが、彼自身が既に極度の不安と、恐怖に襲はれてゐるので、その顏は妙に歪んで、却つて絕望的な物凄い表情になつていくばかりだつた。

德枝は默つて、彼の顏をみてゐた。羽毛をぬいた鳥の肌のやうな彼の咽首がひくひく動くのをじいつとみてゐる彼女の眼にはもはや一點の同情もなく、まるで穢ないものでもみてゐるやうな冷刻な殘忍な嫌惡の色が露骨に現はれてゐた。

五

その晚、德枝はもう早くから寢てしまつた。お常がいつものやうに、二人の寢床をぴつたりくッつけて敷いていつたのを、德枝は態と自分のだけ窓際へひいていつて、その間に火鉢を置いて寢た。床の中へ入つてみると、底冷えがして耐らないので、彼女はもう一度起きて、火鉢の火を直して、それへ男のやうに兩足を踏掛けて寢た。さうしなければ、下腹がしく〱痛んで眠れさうもないのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

徳枝は眠れないまゝに、又いろんなことを考へ出した。翠波が吐血をしたのをみてからは、もう彼女の氣持は一變してしまつてゐた。彼女はいくら翠波が辯解しても、もう彼の病氣が何んであるかといふことはよく分つてゐた。

翠波が變な咳をしだしたのは、今年の夏頃からであつた。舞臺にゐる時分から楽屋へ入つていくと、彼は輕い空咳をたてつゞけにやつては、あとでがぶ〱湯茶を飲んで、それを紛らかしてゐた。時々は熱ッぽい潤んだ眼つきをして、鎮靜劑にした藥を飲んでゐることなぞあつた。併しいづれも聲を使ふ商賣同士なので、一人としてそれを氣にするものはなかつた。或時なぞは說明をしてゐる間に咳嗽が入るので、楽屋でそれを聞いてゐた弟子達は「いよ〱大將。毒が喉へ來たな」なぞと笑談を云合つて、くす〱笑つてゐた。

翠波は秋口へ入つてから滅切り肉が落ちて來た。それでも食べるものはどし〱食べるし、元氣なぞもさう衰へないので、徳枝は別に何んとも思つてゐなかつた。口の匂ひがアセチリン瓦斯のやうな臭氣をあつてゐるのが厭ではあつたが、それは胃が惡いせいだと思つてゐた。一緒に寢るやうな場合でも、あんまり彼の體が温いので、冷え性の徳枝は却つて羨ましかつた。寒時冷え込んで來るのに、此の人はまあ何んて温いんだらうなぞと云つては、それを口說の種にしたことさへあつた。

併しもう今日にたつてみると、彼が眼を閉されてゐるらしいのは、火を睹るよりも明らかであつた。さう思つてみると、一々思ひ當ることばかりであつた。肺の惡い人間は、よく指の先が丸く腫れてゐるといふが、翠波もやつぱりさうであつた。それに肋骨の肉がげつそり落ちて、頰には細かい毛細管が紫脹のやうに浮いてゐた。一つとしてその恐ろしい病氣の症候でないものはなかつた。

徳枝はさう考へて來ると、底の知れない不安と恐怖に襲はれずにはゐられなかつた。何うして今の今までそれに氣がつかなかつたらう。これだけ證據が揃つてゐるのに、自分は今迄何んだつてうつかりしてゐたのであらう。病氣のことに對しては可成りに神經質な自分であるのに、そんなことは思つてもみなかつたのが、實に不思議であつた。それが又一期の不覺であるやうにも思へた。彼女はさうなると、さう自分にも恐ろしい結核菌が取憑いて、體中の血の中にうぢや〱蠢ぎ廻つてゐるやうな氣がして、ゐても立つても堪らなかつた。口の中にも黄色い膿汁のやうなものがねちやねちやねばりついてゐるやうで、喉はいりつくやうに渇いて來る。胸から肩先へかけて、むうッと熱くなつて來て、彼女は不知不識の間に、兩方の手足が我にもなく宙に慄へて來るのであつた。

「あゝ、厭だ、厭だ。何うすりやいゝんだらう。」彼女はづきづき胸中を突ッつき廻はされるやうな耐らない心持ちがして、身悶えするやうに、何遍も何遍も寢返りを打つた。その弾みに、ふつと咳が出たりすると、今度は體中がぴんと硬直してしまつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それと同時に、徳枝はもう矢も楯も耐らないほど東京へ歸り度くなつてきた。東京へ歸つて、もう上野の停車場からすぐに病院へ驅けつけて、信頼の出來るお醫者樣にすつかり體を診察して貰ひ度かつた。

　それにしても、一體自分は何ういふ氣で、今迄こんな翠波のやうな男にくッついて歩いてゐたのであらう。自分はこの男に少しでも惚れてゐたのであらうか。翠波は辯士の中では、いゝ男として評判の彼であつた。小生意氣な弟子達は逢つてゐもしない癖に、文豪尾崎紅葉先生にそつくりだなぞと云つて、彼を煽いでゐた。翠波自身もその氣でゐるらしかつた。色が淺黒くて、きりつとしてゐるので、徳枝は初めて逢つた時から、いゝ男だなとは思つてゐた。併し變に氣障で、樣子振つてゐて、自分には何處か好かないところがあつた。

　それでも初めて紅葉軒といふ近邊の支那料理屋へ飯を食ひに連れられていつて、その歸りに津守の小待合で譯もなく出來合つてしまつた時には、彼女も嬉れしいなと思つた。少くとも彼が後楯になつてついてゐて呉れゝば、館でも何かと便利だし、それに時々はお小遣ひもせびれた。

　一度關係が出來てからは、徳枝も隨分我儘を云つた。甘つたれるやうにしてやると、翠波はすぐに長兵衞になつて、大概の無理は聞いてくれるので、それが何んだか嬉れしいよりも面白かつた。時々は自分でも馬鹿々々しいとは思ひながら、いろんな手管もつかつた。狡すッ辛いやうでゐて、何處か氣の弱い翠波の氣性もその間に、彼女はすつかり呑み込んでしまつた。

　その時分にはさうは云ひながらもたしかに少しは惚れてゐたやうな氣もするのであつた。その證據には、徳枝も彼のいふことだけはよく聞いた。そして從順であつた。それに薄暗いボックスで、巧みな彼の説明を聞いてゐるうちに、ぼうッとするやうなこともあつた。翠波は自然情緒もので賣り出した男なので、悲しい戀の場面の説明なぞは手に入つたものであつた。つひ前の晩に、徳枝の云つた殺ろし文句なぞをふッと説明の中へ織込んだりして、見物を泣かせたりするのを聞いてゐると、徳枝は無上に嬉れしかつたものであつた。

　併し今から考へてみても、徳枝は決して彼に心から惚れてはゐなかつた。その場その場の感情は何う動いたにしても、自分から進んで彼の爲に苦勞をしようと思つたことなぞは唯の一度もなかつた。何も彼も先樣任せで、唯水のやうに一つ溝を流れて來たに過ぎなかつた。それに時も經つてしまつた。だからかうなつてみると、考へれば考へる程、馬鹿々々しいやうな氣がして、一方からいふと變に翠波が憎くさへあつた。今すぐに別れてしまつても、別に悲しくもなければ惜しくもないのであつた。殊にこんな切迫つまつたトヤをしてゐる際に、彼が假にいまはしい吐血なぞをしたのであるから、徳枝が殘忍な氣持になるのも決して不自然ではなかつた。

「それにしても、何うしたら自分はこの男の傍を遁れることが出來るであらう。」徳枝は冷たい枕に頬を押しつけて、そればかり考へだし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。自分の財布には、今たつた七八十錢しか殘つてゐないのであるから、たと、此宿はうまくドロンだにしても、東京までの旅費の算段がつかない。これから電報でも打つて、自分だけの旅費を呼ぶにしても、それを賴むあてがなかつた。さうなると、德枝はせめてあの深井の方でもうまくつないで置けばよかつたと、しみじみ口惜しくなつて來た。あの甘い男であるから、旅先から二三本繪葉書でも出して置けば、まさかの時には二十圓位な金は何んとかして呉れるにきまつてゐる。自分は何故それをやらなかつたのであらう。手間も隙も入る話ではないのに、何んだつて不精をしたのであらう。自體、翠波と出來てからは、妙に他の男にかかづらふのが、臆劫になつて、あれからはもうちつとも浮氣をしなかつたのが、今になつて考へてみると、飛んだ不覺であつた。一人二人なら何うにでもなつたのに、全く惜しいことをしたと思ふと、德枝は自然と深い嘆息が出て來た。下の病氣にかゝつてからは、實際德枝は浮氣心が動いて來ないのであつた。

德枝は闇の中でぽつかり眼を睜いて、

「あッ、島田先生！」と、思はず口の中で叫んだ。明日の朝早く、翠波には知れないやうに、あの島田先生のところへ電報を打つたら何うだらう。詳しいことは云つてやらなくても、もう先方では事情をよく知つてゐるのであるから、ひよつとかしたら金を送つて呉れやしまいか。あの先生は仙臺を立つ時に、二百圓といふ大金を投げ出していつた位であるから、東京までの旅費位ならいつでも電報爲替で送つてよこすだらう。

「さうだ。あの島田先生に！」と、前後の考へもなくさう思つた時に、ふと戸外では何か變た聲がした。

德枝はそれに氣を取られて、思はず聞耳をたてたが、それは階下の工事小屋に飼つてある例の鳥がふいに夜啼きをしたのであつた。

德枝は脊筋がぞうんとするやうな感じがして、變な胸騷ぎに襲はれながら、

「つッ、仕様がないねえ。又あの鳥奴、啼いてやがんだ。幸先の惡い。」と、やけに呟いた。それと一緒に彼女の眼には、夕陽の紅つぽくしされた中で、眞紅な創口のやうな口をあけて餌をたべてゐたあの物凄い眞黒な鳥の姿がまざまざと暗闇の中にみえて來た。

それから間もなく、今度は又戸外で、だしぬけにガラガラッと何かもの〻崩れ落ちるやうなえらい物音がした。德枝は生憎うとうとッとしかけた時であつたので、思はず枕から頭を持上げる程吃驚したが、それと同時に、階下の廣場の方ではわあッと恐ろしい鬨の聲が起つて、醉つた男達の聲が何ごとか盛んに罵り合ひ出した。何をいつてゐるのだか、何をしてゐるのだかさつぱり分らなかつたが、唯ガアガア犇めき合つて、時々は木箱でも蹴散らかすやうな荒つぽい音がする。それは何んでも三四十人もゐさうな大勢の聲で中には女の金切り聲も交つてゐた。

德枝は息を殺して聞き耳をたてゝゐたがこれは唯事ではないと思つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。きつと又下の工事場で、土工達が酒に醉つて喧嘩を初めたのだらうと思ふと、徳枝はじつとしてゐられなかつた。

しばらく聞いてゐると、何んでも日本人の土工達が、朝鮮人の小屋へ何か返報でもしに來たやうな樣子であつた。朝鮮人の方が多勢なので、譯の分らぬ朝鮮語で喚き合ひながらしきりに氣勢を添へてゐた。日本人の土工の方はひどく醉つてゐるとみえ、云ふこともしどろもどろで、ひどく旗色が惡いらしかつた。それでも中には、シヤベルや、スコップのやうなものでも振り廻はして、阿修羅の如くに狂ひ廻つてゐる奴が二人三人ゐて、その男達の聲はひと際鋭く聞えて來た。皆それにあふられて、もう無我無中で暴れてゐるやうであつた。小屋の軒先を叩ッこわすやうな物音や、息せききつて組んづほぐれつ揉み合つてゐるやうな聲までが物凄く聞えて來た。

そのうちに若い男の聲が、魂消るやうに、

「あッ、痛えッ、斬りやがつたな、こン畜生ッ」と、叫んだかと思ふと、急に四邊が陰慘として來た。

徳枝は誰れか殺されたなと思ふと、ぞうッと胸中に鳥肌たつて來た。今のあの聲ははつきりはしてゐたが、たしかに深創を負つた絕叫に相違なかつた。さう思ふと、思ひなしか呻めき聲が恐ろしく聞えて來た。實際戸外ではそれからひどくざはついて來て、なほ一層騒ぎが殺氣たつて來たのであつた。小屋までも叩き潰しかねまじい勢で、双方わッわッと叫喚しながら、無二無三に大格鬪を演じ出した。必死た絕叫や、呻めき聲の樣子では又四五人は斬られたか、突かれたかしたらしく、逃くれた土工達が血みどろになつてのたうち廻つてゐる有樣が眼にみえるやうであつた。

何を投げるのか、時々宿の板羽目や、雨戸へもガチリガチリと礫のやうなものが飛んで來て打衝かつた。その都度に徳枝はひやりとして、首を縮めたが、もう聲を聞いてゐるだけでもぞくぞくするので、彼女はいつの間にか夜着の中へすつぽり潜り込んで、息を凝らしてゐた。

騒ぎの鎭まつたのは、それから小半時はかり經つてからであつた。町の人達や、警官達が集つて來て、やつと双方取鎭めたらしかつたが、徳枝はもう懾えて、顏を出さなかつたので、何が何うなつたのかさつぱり分らなかつた、警察へ引かれていつたものも多勢あるらしかつた。

騒ぎ濟んで、ひとしきり四邊がしいんとすると、やがて階下の帳場のボンボン時計が寢ぼけたやうな聲で、十二時を打つたのがかすかに廊を傳つて響いて來た。

戸外では物見高い野次馬がこの寒いのにまだそこいらを立ち去らないとみえ、ぶつぶつ何か話し合つてゐるのが、吹く風に乘つて寂しく聞えてゐた。風で動く障子の面には、提灯の光らしいものが、雨戸の隙間からちろちろ映つて來たりした。

徳枝は氣がたつて、中々眠れなかつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

六

……とみると、何うしたのか、徳枝はいつの間にか、高い草土手の上へ體を固くして腹ン匍ひになつてゐた。眞青な草いきれがむんむと匂つて、刺々した草の根が素肌の下腹のあたりに氣味惡く感じられた。餘り體をすくめてゐるので、肩にはひどい凝りが來て、彼女は息をするのにも痛苦しかつた。

空には雨雲がどんよりと一面に垂れ下つて、日の光さへ見えない。眞青な草が眼路の限りにふかふかと生へてゐながら、吹く風は妙に冷冷と濕つぽかつた。

徳枝はふと考へた。

「自分は一體何處にゐるのだらう。」たつた今しがたまで館のボックスでヴアイオリンを彈いてゐたのに、何處へあの樂器を落として來たのだらう。

「はゝあ、自分はロケーションに來てゐるんだな。」彼女は何んといふ譯もなくそんな事も思つてみた。すると、彼女は急にぞうッとして來た。

と、草土手の彼方では、「キヤラバン」のオーケストラが、細かく刻むやうなリズムをふわふわと此方へ流してゐる。あの漂渺とした樂曲が、どうしたのか、彼女には耐らなく悲しげに聞えて來る。なるほどヴアイオリンの數が増えたせいだな。いつの間にあんなに樂士がやつて來たのだらう。自分も早く行つて彈かなけりやならないのではあるまいか。

徳枝はそうつと頭を擡げて、土手のうへから向ふを覗き込んだ。と、その土手の向側は急に落ち込んだやうに斷崖になつてゐて、眼が眩むやうだつた。その下には一面の眞青な馬場がはるかに展けてゐて、とみると、フロックコートをしやんと着た英國紳士のやうな男が馬に騎つて、同じやうな格好をして、幾人となく右往左往に入亂れながら疾驅してゐる。青草は縱横に薙ぎ倒され、砂塵は白つぽく陽炎のやうに地に匍つて、幾頭となない馬の脚は宙を飛んでゆく。騎つてゐる男達の顏は鉛のやうに白茶けて、山高帽子は今にも飛び脫げさうで、彼等はもう氣が狂つたやうに無我無中で手綱を操つてゐるらしかつた。その中にはダグラスのやうな顏をした西洋人もゐれば、コールマンのやうな男もゐた。バーセルメスもゐれば、リチヤーヅもゐた。一番可笑しいのは、その中に島田光波が混つてゐる事であつた。彼は苦虫をかみつぶしたやうな生眞面目な、しかも何處か悲壯な顏つきをして、徳枝が覗いてゐるのなぞはもう眼中にないやうに、一生懸命になつて鞍坪を踏んまへてゐた。カラが眞白に光つて、馬が前脚を高く踏み上げる度に、彼は聲は立てずに、口だけで悲鳴をあげてゐるやうであつた。

一體何うしたことなのであらう。

徳枝はいつか、何處かでこんなフキルムを見たことがあるやうだな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と思つた。彼女ははらはらしながら島田の馬ばかり眼で追つてゐた。

その瞬間、彼女自身は今にも前の斷崖が崩れ落ちさうで、もう恐くて恐くて堪らないので、兩手でしつかりと草の根をつかんでゐた。手の指は汗でにちやにちやしてゐた。

そのうちに、何處か高い空の彼方で、カアカアと二聲ばかり鳥が啼き渡つた。しいんとしてゐるので、その聲は突きぬけるやうに鼓膜に響いて來た。もうほんとにいゝ加減にすればいゝのにと、忌々しい氣持ちで聞いてゐると、やがて突然に、德枝のすぐ鼻の先を掠めて、それこそ飛行機ほどもあらうかと思はれる一羽の奇怪な鳥が、紅い口を一杯に開いて、さツと眞黑な風のやうに翔り去つていく。その羽搏きのあほりをくらつて、德枝は息が窒りさうになつた。

はツと思つて、德枝は首を縮めたが、その鳥はやがてそのまゝ大きな圓を描きながら、馬場の上空を非常な速さでぐるりぐるり旋回しはじめた。或時は點のやうな高さにまで飛び上つたり、さうかと思ふと、颯と逆落としに舞ひ下つて來て、馬場の青草のうへに白々と風路を開きながら平地とすれすれに飛び去つていつたりする。その度に疾驅狂奔してゐる馬はいづれも慴えたやうに前脚を上げて背丈一杯に躍り上つた。馬は青銅の肌のやうに光つてゐた。

德枝は何うしたのか、急に悲しくなつて來た。何かなしに胸はぎうツと喉のところまで込み上げてきて、涙がぼろぼろ頰を傳つて流れ落ちて來るのが、自分にもよく分つた。彼女は何だか何もかもちやんともう知つてゐた。あの氣味の惡い鳥が丁度頭上の空へ來懸つた時には、その下に當つた馬上の人は必ず自殺しなければならない宿命をもつてゐるのだ。いつもかういふ場合にはさうであつた。

今日は誰れの番であらう。この陰鬱な曇り空の下で、悲しく自殺を遂げるのは誰れであらう。あんな立派なフロツクコートの死出の禮服を着て、あんな綺麗なカラーをつけて……

その途端に、馬場の眞中のところでは、拍擊つたやうな、汗ばんだ聲が、

「やツ、しまつたツ」と、絕叫した。

愕乎として眼を据ゑると、そこには一頭の栗毛の馬がつくねんと佇んで、その鞍上からはだらりと黑いものがぶら下つてゐた。それは思ひもかけない島田光波で、彼は鞍から眞逆樣に釣る下つて、片手にピストルをぎらつかせながら、もう觀念したやうに眼をはつきり瞠つたまゝ死んでゐた。フロツクの上着はぬけかゝつて、禿げた彼の頭は地面へ向きさうになつてゐた。

鳥が空中でカアと事もなげに啼いた。…………

德枝は心臟が今にもはち切れさうに痛むので、その時、我にもなくはツと眼を覺ました。

「あゝツ夢だつたのか。」と、思ふと、彼女は引く息と一緒に渾身に冷水を浴びせかけられたやうなショツクを感じて來た。手足はすつかり硬直して、心臟の鼓動は背筋から五體の節々にまでづしんづしんと響

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き渡つてゆく。意識がはつきり返つてみると、彼女は脇中にびつしより盗汗をかいてゐるのが分つて、身動きをするのも氣味が悪かつた。

と、その時、朦朧な中からは翠波のしや嗄れた聲が、

「徳ちやん、徳ちやん。」と、呼んでゐる。

徳枝は仰向けに寝たまゝ、もうぐつたりとしてゐたので、餘程返事をしてやるまいかと思つたが、あんまり翠波が煩く呼ぶので、邪險に、

「何によッ」と、怒鳴る。

と、翠波は枕をぎうッと鳴らして、

「ねえ、徳ちやん。君、何うしたの。先刻から大變にうなされてゐたぢやないか。僕、泣いてるのかと思つた。」と、妙に優しくいふ。その聲は徳枝のすぐ枕の側で聞えて、彼女は自分の夜着の中へ入つてゐる翠波の手をそれとなく感じた。

徳枝は又引彈くやうに、

「私、泣いてなんぞゐやしないわよッ」と、云つて、こそりと寝返りを打つてしまつたが、翠波の手はそれを追つて來て、彼女の肩のところへ觸る。

徳枝はまるで駄々ッ兒のやうに、

「いやよッ　いやよッ」と身を揉んで、それを恐ろしい勢ひで振切らうとしたが、それでも翠波の手は執念く追つて來るので、徳枝は到頭かばと彈ね起きて、さも憎々しげに、

「何をすんのよッ　ほんとに私、眠たッたら。病人の癖に、しッこいッたらない。」と、舌打ちをしながら云つて、今度は自分の臥床をずる力一杯に引掛つて、ずッと遠くの紙襖の方へ持つていつてしまふ。長火鉢へ、蹴躓いたので、鐵瓶が大きな音をたてゝ躍り上つた。

翠波は變に鼻を鳴らして、

「いや、徳ちやん。さうぢやないんだ。さうぢやないんだよ。僕、今しがた君のうなされる聲で眼を覺ましたら、もう何んだか急に寂しくなつちやつてねえ。何か君と話をしようと思つたゞけなんだよ。」と、痰を切つて、臥床の中でもぞりもぞり音をたてゝゐる。

徳枝はそのまゝ夜着をすつぽり引被つて、

「もう默つてお寝なさいつたら。夜中に冷えると、又明日になつて血を吐くわよ。」と、當て付けるやうに云つた。

翠波はそれでげそりとして默り込んでしまつたが、今度は悲しさうな聲で、

「ねえ、君、徳ちやん、君と初めて、そら、津の守の琴月へいつたのは、ありやたしか今年の二月の十一日、さうさう、紀元節の晩だつたねえ。寒い晩だつた。たしかあの晩、坂町に火事があつたね。それで歸れなくなつて泊つちやつたんだつけね。」と、いつて、嘆息をついて、「あの晩は封切りで、さうだ、〝地の涯まで〟だつたねえ。君がヴァオリンのソロでつけて呉れたんだ。思ひ出すよ。さうだ、クライスラーの子守唄のやうなものだつた。大變に出來がよかつたんで、僕が紅

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

邪慳を奢つたんだつたね。……」

德枝は返事もしなかつた。

翠波はそれからも一人で何かぶつぶつ思ひ出話しをしてゐたが、德枝がちつとも返事をして吳れないので、少時すると諦めたやうに默り込んでしまつた。そして頻りにぜい〳〵喉を鳴らしてゐたが、やがて又耐らなくなつたやうに、悲しげに、

「ねえ德ちやん。君、寢ちやつたのかい。おい、起きてるのかい。ねえ、君、後生だから何んか云つてお吳れよ。何んかさ。ほんとに後生だからさ。……」と、聲を顫しながらいふ。

德枝はもうすう〳〵態とらしい鼾をかいてゐた。

翠波は又默つて心細げに咽を鳴らし出した。初めは息遣ひが苦しいのだとばかり思つてゐたが、漸次聞いてゐると、それには抑揚があつて、時々ぐうッと込み上げて來るやうに嗚咽が高まつては、ふッつりと止んでしまふ。かと思ふと、又せか〳〵刻むやうに息をしだして、齒をしつかり喰ひ緊つてゞもゐるとみえ、痙攣するやうな嗚咽は鼻の方へ洩れていつた。

德枝は身慄ひが出さうな厭な氣持になつて、

「あの人、泣いてるんだよ。見ッともない。きつと死ぬのが恐いんだよ。」と嘲るやうに心の中で呟いた。

七

德枝が二度目に眼を覺ましたのは、もう曉方であつた。何時の間にかそれでもうと〳〵眠りつゞけたので、彼女はいくらか心持ちも落着いてゐた。

そうッと眼を瞬けてみると、建付けの惡い雨戸の隙間からはほの白い曉の光が幾筋となく射し込んで、障子の面にうすぼんやりした縞を描いてゐる。戶外ではまだ昨夜の寒風が吹いてゐるとみえ、雨戸はこと〳〵と鳴つて、冷たい風が息をするやうにはうッと吹き込んで來て、德枝の顏や肩先へ滲み渡つていく。

炬燵の火も消えてしまつてゐるので、德枝は下腹が板のやうに冷え込んで、便所へいき度くて耐らなかつた。折角暖溫つてゐるのにと思つて、わが身ながら腹がたつたが、どうしてもう我慢が出來ないので、彼女はむく〳〵起き上つた。

とみると、翠波は宵とは變つて紙帳の方を枕にして、夜具の中へ海老のやうにちゞこまつて、ぐつすり寢入つてゐる。もう咳もしずに、彼は前後も知らず熟睡してゐるらしかつた。

德枝は成る可く音を立てないやうに、足音を忍んで階下へ下りていつた。

用を足して、手を洗はふと思つて手洗場の硝子戸を開けると、戶外はまだ暗かつた。雪の薄白く殘つた庇間から吹き込んで來る風は、氷のやうに冷たかつた。隣りの家の屋根のうへにはほんのり蒼ざめた曉が催して、何處も彼もまだしんと靜まつてゐる。

手洗場の向ふは通ひの露路になつてゐて、低い板塀のつゞきには不態な鷄小屋が建つてゐた。何の氣なしに伸び上つて覗くと、その先は何うやら吹きッ曝しの工事場の方へ出られるやうになつてゐるらしかつた。

德枝はその時、ふッと心が動いた。さうだ、こゝからこッそり忍び出れば、分りッこないではないか。さう思ふと彼女は頭の頂邊から足の爪先きまでさッと電光のやうな感じが走つて、もう決心は立ち處に極つてしまつた。さうだ。こんなうまい脫出口が眼の先にあるのに昨夜はあんなに考へても、何うして氣が附かなかつたのだらう。こゝから遁げてしまへば、誰に見付かるでもなし、何も彼ももう譯なしだと、彼女はさう思つたのであつた。

さうなると、德枝は自分でも不思議に思はれる位、頭腦がはつきりして來た、何から何までが極めて用意周到に考へられた。機會は今だ。今を措いては、もう二度と再びかういふいゝ機會は來ないのだ。さう覺悟をきめると、彼女は胴震ひはしながらも、急に氣が勇んで來た。

德枝はその硝子戶は開けッ放しにして置いて、又二階座敷へ歸つていつた。翠波は先刻のまゝ、眼を覺まさうともしない。で、彼女は先づ薄氷を踏むやうな心持ちで洋服に着換へた。ボタンなどは碌にとめもしずに、うへからうへからやたらと羽織つていつた。ひよつとして翠波に感づかれてはもう百年目なので、彼女は其の袖口がかく〳〵縮むほど緊張しきつた心持ちで事を運んだ。洋服を着てしまふと、今度は持ちものを入れたあけび籠と、それからヴァイオリンのケースをそつと廊下まで運び出した。暗い中なので、ともすると何處かへ打衝かりさうで、彼女はやたらとひやひやしてゐた。神經はまるで針のやうに尖つてゐた。

すつかり用意が整ふと、最後の仕事が一番重大であつた。それは眠つてゐる翠波の枕の下から、財布を拔き出すことであつた。德枝は兩手から先へそうッと枕許の疊のうへへ突張つて、出來るだけ輕く自分の片膝をそこへ突いた。そして息を深く吸ひ込んだあとで、どき〳〵する胸を押へながら、最初は眠りの度を計る爲めに彼の枕へさわつてみた。

「氣を急いては可けない。しッしッ」と、自分で逸る氣を制しながら、いよ〳〵枕の下へ右の手を突込まうとしたが、曉方の寒氣の爲めに上體が耐力もなくぶる〳〵慄へて來るので、全く氣が氣でなかつた。ふッと突込んだ途端に、肱が翠波の枕許に置いてある久須へさわつて、かちやりと音がしたので、德枝はひやりとして膝を落とすと、もう今度は腕の附根からやけに慄へが出て、手が伸びなかつた。

それでも幸ひ翠波は眼を覺まさうともしなかつた。

德枝は到頭夢中で彼の枕の下から、半でこしらへた二つ折の財布を引出すことに成功した。彼女は聖溫もりのしみてゐるその財布を開けて、その中から十圓札を一枚ぬきだすと、それを手早く自分のポケツ

トへ突込んで、もう用はないといふやうにすうッと素早く立上つた。
あけび籠と、ヴアイオリンのケースを両腋に抱へ込んで、急な階段を下りることも随分困難な仕事であつた。今度は階下に寝てゐる宿の者達に對する不安であつた。ともすると、階段全體がミシミシ音を立てるので、足を下ろす度に德枝は肉を削られるやうな心持ちがした。併しもう半分は安心が出來てゐるので、しきりに氣を勵ましながらやつと階下の手洗場のところまで下りた。そして先刻態と閉めずに置いた硝子戸からひと思ひに戸外へ下りたが、その時にはもう自分でもはつきりした意識はなかつた。鷄小屋の前まで歩いてきて、彼女は初めて自分が裸足であることに氣がついたくらゐであつた。

鷄小屋の前では、尻尾のはげた、ひねッこびれたチヤボがたつた一羽、クツクツと寒さうに啼きながら、薄暗い殘雪の上で餌を漁つてゐた。鷄小屋と、掃き溜の間の低い竹垣が倒れかゝつてゐるので、そこから出ればもうひとつ跳びに工事小屋の方へ出られた。此方側は丁度浴場の硝子戸になつてゐて、磨り硝子越しにぼやけた電燈の光が雪で汚れた簀板のあたりを照らしてゐた。

ふつと足許をみると、そこには一足の下駄がぬぎ捨てゝあつた。それは下働きの男のでゞもあるとみえて、革鼻緒のすがつたぴたんこな、センの駒下駄であつた。

德枝は天の與へだと思つて、早速それを穿いた。鼻緒が凍てゝゐて、ひどく穿き惡かつたが、彼女はそんなことを氣にしてゐられる場合ではなかつた。下駄をはくと、彼女はすぐさま掃溜のうへを踏み越えて、脱兎のやうに竹垣から戸外へ飛び出していつてしまつた。

外には低い工事小屋がつゞいてゐた。すぐとッつきの一軒では、横手の泥濘のところへ木片や、洗濯ものなぞがずたずたに引散らかしてあつて、そのうへには霜が眞白に置いてゐた。軒先には何の古箱とも知れない木箱が三つ四つ引轉がしてあつて、その一つからは變な黒いものが顔を出してゐた。

德枝は氣が急いてゐるので、おちおちみてもゐられなかつた。ああ、此處は昨夜あの恐ろしい騒ぎのあつた跡だなと、唯さう思ひながら、その前を急いで駈け抜けていつたが、ふつとみると、その黒いむくむくしたものは烏の死骸であつた。それも一羽ではなくて、木箱の中へ入つてゐる烏は皆叩き殺されてゐて、汚れた殘雪のうへには、血糊のくッついた黒い羽根が彼方にも、此方にも飛び散つてゐた。その工事小屋自身もよくみると、無慘に打ち壊されてゐて、鮮人の土工達は昨夜そつくりあのまゝ警察へ引かれていつたとみえ、木戸は開け放されて、電燈の薄ぼんやり點つた小屋の中には人氣さへなかつた。

德枝はそれでなくてさへもう後から追ひたてられるやうな氣持ちがして、セメント樽や、石材の間を右に左に駈けぬけながら、足を宙にしてやつと工事場の端れまで出ていつた。そこでヴアイオリンのケースと、あけび籠を持ち代へて、半分掘り崩された赤土の山を越え、すぐ上の鐵道線路の草土手へどんどん登つていつた。彼女はもう息がは

づんで、喉はからからに渇いてゐた。少し息を强めに吸ひ込むと、咽喉の奥が、空氣の冷たさで、眼にしみるほど痛かつた。

後を振返つてみると、町の方には炊烟のやうな濃い朝靄が低く凍てついてゐた。町の家並はまだ黒々と眠つてゐて、ところどころに點つた街燈が白けたやうな丸い光環をつくつてゐた。會津屋の二階ももう小さくなつて、廊下の突當りと覺しい個所に、たつた一つ燈が瞬いてゐるのが見えるばかりであつた。まだ皆は馬鹿な顏をして寢こけてゐるのかと思ふと、德枝は態ア見ろといふやうな氣がして、そつちへ向いて唾でもひつかけてやり度かつた。

朝靄の中では、彼方此方で鷄が時をつくつてゐた。

鐵道線路は遠い切取線からぐうッと大曲りに曲つて、彼方の停車場の構内へ入つてゐた。薄白いレールには、蒼ざめた信號燈の光がちろちろ映つて、何も彼も小霜に凍てゝゐた。丘陵の彼方ではそろそろ夜が明け放れて、明るくなつた山の頂には、殘んの影を抱いたうすい薔薇色の朝雲が、帶のやうになつてひと筋長く漂つてゐた。

德枝は今度はレールに沿つて歩いていつた。さう遠くも來ないのに、あんまり興奮し過ぎたせいか、もうへとへとになつてゐた。彼女は幾度か枕木へ躓かうとして、危く膝を踏みしめながら急いでいつた。彼女の心はもう汽車に乗つてゐた。

とある踏切を越えると、停車場の構内へ入つた。そこには貨車と無蓋車が十輛ほど置き放しにしてあつたが、そこから彼女は草土手の斜面を柵へつかまつて横に渡つて、便所の後からやッとのことで停車場の建物の前へたどりついた。正面の大時計をみると、もうそれでも午前五時四十分であつた。

停車場にはまだ誰れも來てゐなかつた。かんかん明りのついた驛員の溜りでは、二三人の驛員が何か大聲で話し合つてゐたが、その聲が天井に寂しい反響を呼んでゐるのも、珍らしかつた。時々電話のベルが消魂しく鳴り渡つて、警報機のカタカタ動く音がしつきりなしに聞えてゐた。そんなもの音までが德枝を妙に神經的に脅えさせた。併し彼女は他に乘る客が一人も來てゐないので、それが何よりも嬉しかつた。

德枝は東京行は何時に出るのだらうと思つて、そのまゝ時間表の下へ歩いていつて見た。と、幸ひにも五時五十二分といふ一番があつて、それは福島で乘り換へなければならなかつたが、德枝は何にしろ一刻も早くこの町を立去りさへすればいゝので、とにかくそれへ乘らうと思つた。彼女は慌てゝ出札口へいつて、翠波の財布から盜んで來た例の十圓紙幣を出して、それで東京までの三等の切符を買つた。

彼女が斷髮に洋裝で、しかも下駄穿きといふ異樣な風つきをしてゐるので、切符を切りに出て來た若い驛員は怪訝な顏をして、じろじろみてゐた。

歩廊へ出ると間もなく、列車は入つて來た。鋼鐵の怪獸のやうな52型の機關車が、シュッシュッと眞白な蒸氣を吐き出したから、地

警笛を打つて彼女の眼の前へ近づいて來た時には德枝はもう淚ぐましいほど胸が込み上げて來た。

德枝の乘つた三等のボギー車には一人も乘客がなかつた。明りがついてゐないので、車室の端の方は薄暗くて見えなかつた。德枝は二つの荷物を網棚へ載せてしまふと、急に何んだか人に顏を見られるのが恐くなつて、隅の方の座席へ體ごと隱してしまつたが、列車が動き出すと、それでもおづおづ起き上つて、車窓から町の方を見下ろした。

町の方ももう明るくなつてゐた。紅茶けた軒燈の列は小さく曲りくねつて、乘込みの時に、一寸休んだ驛前の休憩所が須臾の間に後へ飛んでいつた。旅館の建物も飛んでいつた。石灰工場もとんでいつた。と思ふと、今度は一昨日まで働いてゐたあの盛榮館の屋根が靄の中にでこぼこ浮き上つてみえたが、それもほんの束の間であつた。列車は疎林の間を町の外廓に沿つて西の方へ馳つていくので、無論あの命津屋をもう一度見ることは出來なかつた。さうしてゐるうちに列車は殘雪の斑な、水の枯れた廣い川を渡つて、雜木のしげつた傾斜地の方へ入つていつてしまつた。

德枝はやつとほつとしたやうな氣持ちで、車窓を掠めて、高く低くサッさッと流れていく煤煙を眺めながら、今の自分を考へてみた。列車は頗うまく逃げ了せたなといふ嬉しい安心はあつても、實際は何んとなく氣が濟まなかつた。かうなつてみると、何にかなしに妥波のことばかりが思はれてたらなかつた。

今頃、あの妥波は何うしてゐるだらう。あのまゝまだ何んにも知らずに眠つてゐるであらうか。それとも自分がゐないのに氣づいて、ごほごほ咳入りながら方々を探し歩いてゐるであらうか。それにしても、彼は今日から先は何うして日を送ることであらう。彼の財布の中には、まだあと二十圓位は殘つてゐたやうであつたが、あれだけの金では何うすることも出來まい。それに又あのうへ吐血でもしたら、何うするであらう。彼は果たして東京へ歸つて來ることが出來るであらうか。もうあのまゝころりと死んでしまふのではあるまいか。

「昨夜は、男の癖に、あんなに意氣地もなく泣いてゐた。彼の人は自分が死ぬのをちやんと知つてゐるのではなからうか。」さう思ふと、さすがに德枝は咽喉のつけ根がむづ〳〵して來た。彼の爲めに自分も泣いてやらなければ、何んだか義理が濟まないやうな苦ッぽい氣持ちがして、彼女は洋服のポケットから我にもなく手帛を取出した。汚れた、白粉臭い手帛をみると、何うした譯か、彼女は急に眼が熱くなつて、胸がぐうッと込み上げて來て、それで口のあたりをしつかりと押へながら可笑しい程しく〳〵啜り上げて泣き出してしまつた。さうなると、彼女はもう留めどもなく淚が湧いて來て、泣けて泣けて仕樣がなかつた。その癖、彼女は白粉の匂ひから、ふッとコンパクトを命津屋の机のうへへ置き忘れて來たことをも思ひ出してゐたのであつた。

さうかと思ふと、德枝は又妥波の口尻についてゐたあの血の色をも思ひ出してゐた。もうあの樣子では、あの人はずうッと長いこと懸かつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たに相違ない。さうするとこの自分にもきつと感染してゐるかも知れない。自分ももとからあんまり壮丈な方ではないのだし、それに自分を育てゝ呉れたあの叔母も昨年あの病氣で死んでいつたのであるからと思ふと、彼女は急に胸がうづうづして來た。泣くのを止めて、口から手帛を外して、思ひッ切り力を入れて咳をせいてみると、どうやら肩胛骨の下あたりがぴんぴん糸をひくやうに痛んでくる。若しや今自分がそんな恐ろしい病氣に取憑かれたら、もうそれこそ萬事休すである。さうなると、三井の慈善病院で、餓鬼のやうに痩せ呆けて、血といふ血を吐き盡したやうな物凄い姿になつてねちねち死んでいつた叔母のことまでが矢鱈に思ひ出されて來る。いくら考へまいとしても、もう何うにも出來なかつた。

徳枝は、いつの間にかすつかり朝になつてしまつた輝かしい野山を車窓から眺めながらも、耐らないほど絶望的な氣持ちになつていつた。今度咳をせいたら、口から生温かい血がたらたらッと流れ出て來さうで、彼女はうつかり身動きも出來ないやうに思ひ詰めてしまつた。彼女の眼は底光りを帶びて、暗く乾いてきた。

列車が次の驛へ着くと、徳枝はふらふら立上つて、車窓の硝子戸を落とした。そこは私設線への乘換へ驛なので、歩廊には乘客も相當に待つてゐた。賣子達はその間を忙はしげに走り廻りながら、賑な聲々で驛の辨當や、牛乳などを賣つてゐた。徳枝はもう恥も外聞もなく、車窓から上半身を突き出して、

「ちよいと。ちよいとッ　あの正宗の壜詰を一本頂戴ッたらッ—と、大きな聲で叫んだ。

賣子の一人は四合壜を一本ついと差出した。徳枝は金を掴つて、首を引込めるとそのまゝ座席へがくりと腰を落として、その壜詰の栓を起して、眼を据ゑながらごくりごくりと壜の口からラッパ飲みに呷り出した。

どやどやと乘り込んで來た四五人連の鐵道工夫達も、呆氣にとられたやうな顔をして此方をみてゐた。

四合壜を半分ほどひと息に呑んでしまふと、徳枝は手の掌で口を拭いて、ぢろりと鐵道工夫達の方を見廻はしたが、やがて、座席の肘掛を枕にしてそのまゝ横になつてしまつた。ゲップをする度に、彼女の顔は陰鬱になつてきて、しまひには口を力一杯に引歪めて、眼をつぶつてしまつた。彼女はさうやつてせぐり上げる淚をやつと我慢してゐるのであつた。

列車はしばらくすると又物憂い鐵輪の音をごとりごとり響かせながら動き出した。寒さうな朝日の影は、眼の下にうすい淋巴腺の黒斑の澱潤した彼女の顔を容赦もなく横合から照らしだした。よぼよぼした冬の蠅が一疋ぶらんと飛んで來て、彼女の揺れ動く頭髪のまはりをいつまでも離れなかつた。

（—十一月七日—）

舊劇美論

—此の拙き一篇を坪内逍遙先生に捧ぐ—

岸田劉生

○

私は舊劇がどうも好きである。これは私が東京生れの人種の故もあらう。しかし、そればかりではあるまいと思ふ。それよりも、もつと深い理由は私が畫工であるから、もう一つ言へば私が何かにつけて美しきものを求め、美しきものを愛するからだと云へる。

もとより私は、如何なる方面に於ても、絶對的に學者ではない。だから私は舊劇についても何等の學究を持たない。のみならず私は又、謂ふところの見巧者でもない。舊劇に關する知識は殆どまるで持合はさぬづぶの素人である。しかし乍ら、考證、又は見巧者、又は知識のみが舊劇を語る全部ではない。私には又私の述べて然る可き一域があると思へる。即ち私がこれから述べやうとする事は一畫工としての私の所感である。が云ふ事をゆるされるならばこの所感は、これ迄考察さる可くして充分に考察され反省されてゐなかつた事がらの樣に思へる。今日舊劇に關する所論は數多いが私からみる時そのいづれもが多く的をはづれてゐるかの樣に思へる。それは舊劇の美を眞に知らず又は味ふ事なしに舊劇を論じてゐる。かゝる所から舊劇不用論、舊劇現代沒交渉論が生れる。

しかし舊劇の美を知つたものは、たとへ舊劇が今後數十年の中に全く亡びてしまふ事を考へ得ても猶その美が永遠不朽のものである事、深く、美を求める心を打ち、ゆり動かす力あるものである事を知るであらう。がそれ等の問題は本論にゆづらう。こゝでは只私が舊劇について何も知識的な事は知らぬものである事を述べ、それにもかゝはらずこゝに烏滸がましくものべ立つる理由を申述べておく次第である。

舊劇とは

舊劇といふ題をとつた理由は、歌舞伎と義太夫劇とをくるめて、云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひ度かつたからで、歌舞伎劇といふと、純粋の歌舞伎もののみにとれる傾きを考へたからである。

で舊劇とは何ぞやといふ問題になる。一體舊劇といふ言葉は明治以後の言葉で徳川時代には勿論なかつた。新派劇に對して言はれた言葉と称するが、くわしい事は知らない。とも角も徳川時代に發生し發達した歌舞伎と義太夫劇（その他淨瑠璃所作事及び南北又は黙阿彌式な世話劇等を區別してもいゝがこれは歌舞伎の中にくるめてもいゝ）を指して云ふのであつて、さういふ様式にあるものならたとへ今日作られた劇でも舊劇と云ふ事が出來る。つまり新派劇又は新劇、近代劇等に對比するところのまるで別世界を持つ、昔の芝居を指してこゝで一口に舊劇と云ふのである。

何となれば、新派以後新劇又は近代劇と、この舊劇とは、誠に截然たる區別がある。藝術的境地の上に實にはつきりとした區別がある。即ちこの區別を境にして、一方に蒐め得られるもの一切を舊劇と呼んでさしつかへなしと云ひ得る底の區別である。その區別とは何か、一言にして言へば「舊劇的なる美」の有無である。舊劇的なる美とは何か、それが本論文の解かんとするところのものなのである。この一つのものを境として誠に芝居は二分さる可きである。新派と、近代劇とはその藝術的生命なり價値なりに全く絶對的な相違があらう。云ふ事をゆるされるならば新派劇なるものは殆と全く藝術とは云ひ得ない代物であつて、眞に藝術的生命ある芝居と云ふ範に於ては、眞個の近代劇と舊劇とは同位置にある。しかし、芝居の種別として區別する時に、新派劇と近代劇はともに舊劇と對立する存在でなければならない。淨瑠璃所作事、世話狂言、古典的な大歌舞伎、義太夫劇等、いろいろのまるでちがつた世界を示す狂言であり乍ら、それ等は實に等しく舊劇である。それ等は皆同じ「舊劇の美」をいろ〱の形に於て示してくれる。

こゝに於てどうしても考へられるのは舊劇が何と云つても、一面「役者」の芝居であるといふ事である。何となれば、舊劇の美とは一面に於て、「役者の美」を多量に含有するからである。こゝに於て又當然問題となるのは、文樂其他の人形芝居が舊劇か否かの問題である。もう一つ、文樂其他の人形芝居の美は舊劇の美とちがふものかといふ問題である。簡單に云ふならば、その美は本質に於て全く同一のものであつて、この二つは御互に感化しあひ模倣し合つて生長して來たのみならず、その淨瑠璃も略同一のものによつて所演されるのである。しかし乍ら舊劇といふものには人形芝居にない別個の味がある。それは何かと云へば實にこの「役者の美」の味である。

文樂の人形は實に不思議の物であつて、見る者を不思議な美の陶醉に引き入れてしまふが、そして私などは或る時は芝居などよりずつと深い藝術境へ引き入れられるが、これは要するに今日の役者の勢力の相異であつて、兩者それ自身の本質上の優劣ではない。人形芝居は正に一つの藝術と云へやうが、それは「一つの」であつて、眞の舊劇は役者

の所演にまたねばならない。

　だからその内容に於てはどうしても眞の舊劇と云ひ得ない様な例の團十郎の活歴の如きも、それが舊劇の役者によつて演ぜられたからわづかに新派又は新劇らしくなくみえるのである。が私はこゝに舊劇の美の事を考へるに當つて、この活歴は舊劇の中の勘定へは入れないつもりである。あれは名優團十郎の一つのゆるさる可き時代的な又は過渡期的過誤として、そつと棚の上にのせて置いて然る可きであらうと思はれる。

　舊劇が大歌舞伎物にしても、でん〳〵物にしても、世話物にしても、踊りにしても、まるでちがふ世界を示しながら一つの美に貫かれてゐると云ふ事には勿論その美の味が一貫した一つの日本独特の不思議な美であるからにもよるが、又一面に於てこの役者の美がそこに一貫してゐるからであるとも云ひ得やう。勿論この役者の美といふものも、舊劇の美の一要素ではあるが、同じ役者がいろ〳〵の種類の狂言を演じ得るといふ事には、舊劇の各種類が實に同じ味をその美の基調としてゐる事を思はすものがあるとも云へる。

　一例を以て云へば、「暫」の顔出しや鯰坊主の持つ不思議なグロテスクな滑稽味はまるで方面のちがつた様にみえる源平布引瀧の小萬の死に顔や白い腕の上にも感じられる。そこには一脈の相通ずる深い深い縁の糸があるのである。

　次に述ぶ可きは舊劇の歴史及種別の考證であるが、ことに歴史等の事は私の職分以外の事であり、又これ等については多くの學者もある事故こゝには省く事とする。只種別については私に又多少の私見もある故考證としてゞなく所感として少々のべてみやう。

　簡單に申せば、舊劇の種別は前にも述べた通り、大體、一、古典的歌舞伎狂言、二、義太夫劇、三、所謂江戸世話狂言、四、淨瑠璃所作事の四つに區別される様である。(尤もこの外に例の團十郎の活歴といふ代物があるが、これは前に述べた理由で敢てこゝには省く)がこの四つは普通、義太夫劇と、江戸歌舞伎の二つに區別されてゐる。尤も義太夫劇は本來は人形によつて演ぜられる可きであつて、義太夫が「床」となり、役者の「こうせき」の間を縫つて行く歌舞伎の舞臺に上ればこれを歌舞伎劇の一つと考へる事も不當ではない。しかし乍ら、この所謂デン〳〵ものと、江戸歌舞伎とはどうもその美的内容に立派な「味」の區別がある。江戸歌舞伎は、時代々々による變化や進歩によつて、一見まるで形式や内容が異ふものゝ様にみえるものでも一脈の共通の味がある。即ち元祿、暫風のものや押もどし風の所謂荒事劇から切られの與三や近くは散切もの更に又、美しい、江戸淨瑠璃の所作事に至る迄、一つは荒唐無稽で出鱈目な大味の中に、又一つは寫實がゝつた黙阿彌趣味の中に、又一つは輕妙洒脱な舞踊の中に一脈相通ずる所謂歌舞伎の味がある。これを義太夫ものゝ悲劇で濃く執拗い味と對比する時一層、歌舞伎といふものゝ味をはつきりと感じさせられる様な氣がする。これは、一面、江戸と上方の持ちあぢの相異で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あらうが、かく二種別を區別して義太夫劇と歌舞伎劇の二つに分つ事はあながち不當の事とは云へないと思はれる。

が、これ等の區別についてはすでに多くの人の氣附いてゐるところである。それで私がこゝに特に申したいのはこの區別の方法にもう一つ、舊劇をその成立の本質上から見た區別の仕方である。即ち、劇の成立を、所作と、言葉＝言をかへれば歌舞伎と、物眞似の二つと見てこの本質上の區別を基礎として舊劇の各種別を二つに分けてみるのである。

（この二要素の事については後項に於てくわしく述べる）

もとより日本の舊劇は、その根本をどこ迄も所作、即ち劇藝術に於ける美的領域に置いてゐる。がその上で、所作のみが主となつてゐるものと、所作を下地にしながらも表面、脚本によつて物眞似をする事を主としたものとの二つがある。即ち一見して繪畫的なるものと、文學的なるものとの二つがある。（くどい樣だが、文學的なるものも、常にその基礎は繪畫的である）

でこの二つの區別によつて、舊劇の四種別を分つてみると次の如くになる。

- 舊劇
  - 歌舞伎（所作的）
    - 古典的大歌舞伎
    - 舞踊
  - 物眞似（寫實的—文學的）
    - 義太夫物
    - 世話狂言
    - （もし含めれば活劇）

即ち、助六や、江戸淨瑠璃の所作事は歌舞伎＝即ち繪畫的方面に屬し、義太夫物や江戸世話狂言は物眞似即ち文學的の方面に屬する。

これが私の舊劇の種別の區分法であるがこれについて申し置き度いのは、舊劇はその基調がどこ迄も「美」の表現にある藝術であつて、決して文學のための劇ではない。舊劇をもし文學的な眼のみで觀るならば終にこの日本民族の生んだあの不思議極まる美的魅力を味ふ事なしに終るであらう。

近松、竹田出雲、大南北、默阿彌等の作品は文學としても不朽のものであらうけれど、しかし、それはそれである。それは文學であつて舊劇ではない。まして畫に描いた虎が脫け出したり、主人の爲めに我子の首を切らせる事を文學上の不服とする近代人は、舊劇をもう一度、美術として見なほす必要がある。

以下項をあらためてこれ等について論をすゝめやう。

劇の本質的二要素

劇は綜合藝術だと云ふが、劇から他の一切の藝術を取り去つて猶殘るものがあるとしたら、それが純粹の劇の本質であらうと思はれる。即ち、劇から、音樂、文學（脚本等）、繪畫（背景等）等を取り去るならば、其處には、二つのものが殘る。それは何かと云へば即ち、「物眞似」と「踊り」である。この二つは、「劇」の最も「劇」たるところのものであつて、極端に云へば「劇」はこの二つだけでも「劇」たり得

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。又我々が演劇を鑑賞してゐる場合には、この二つを鑑賞してゐるのであつて、他の附屬の藝術はたとへ、それ〴〵に鑑賞されたにしても、それは、この二つのものの鑑賞を助けるものとして味はれるか、もしくは、劇の鑑賞とは別に、それ等の他の藝術の個々を獨立的に鑑賞してゐるのである。例へば、或る所作事を見るとして、その地方の音樂を非常に面白く聽いたとしたら、それは、劇を鑑賞したのでなく音樂を鑑賞してゐたのである。しかし、踊りを鑑賞しつゝ踊を生かし、踊りが生かすところの音樂を面白いと感じた場合は、それはやはり踊そのものを鑑賞してゐるのであつて、音樂は踊りの一部として鑑賞されてゐるのである。又劇に於ける脚本の場合に於ても、これと殆ど同じ事が云へる。即ち、我々が劇を見てゐる場合我々が劇として見るところのものはどこ迄も脚本ではなくて、その脚本によつて生かされ、その脚本を生かすところの役者の「物眞似」を鑑賞するのである。その脚本の文學的價値はそれはどこ迄も文學的價値として(たとへ同時に感心はしても)鑑賞される可きである。

かく云ふと、こゝに一つの問題が生ずる。即ち、芝居は役者の所演即ち物眞似及び踊りが如何に上手でも、脚本や、音樂がつまらぬものであつたら、とても鑑賞するに耐へない。かるが故に、劇に於ては、文學、音樂は決して從たる可きでない。殊に文學(脚本又は筋書)は、その所演(踊りにあつても)を意味あるもの、具體的なものとする上になくてならぬものであるから劇の主要なる要素の一つであらねばならぬ。

この疑問は大體に於て當つてゐる。しかし、文學や音樂が劇の主要の要素であると云ふ事は事實であるとしても、根本的な又は本質的な要素ではない。私は劇といふものを綜合藝術でないと云ふのではなく、綜合藝術であるけれども、いろいろの藝術が綜合されてゐる中に、純粹の「劇」としての=劇でなくては持たぬところの一藝術境があるといふ事を云ふのである。即ち劇の藝術としての本質を考へやうと云ふのである。

だから、脚本や音樂が立派でなくては、劇の所演が如何に上手でも面白くないといふ事實を否定する事にはならない。脚本や音樂が如何に立派でも、それがなくては劇にならず又、同時に、脚本や音樂が如何にひどいものでも、それがあれば、とに角劇になるところのものゝ事を明確にしてゐる迄である。

即ち物眞似及び踊りの二つは、それであつて、この二つは脚本や音樂、其他のものによつて劇らしい劇になるにしても、又同時に脚本や音樂が全然なくても、一種の劇であり得る事は出來ると考へられる。即ちこゝに一人の才能ある人が立つて、悲しみとか喜びとか、愛とか、憎みとか、又は殺す人とか殺される人とか、何事によらず、それを如實にしてみせる。其處には扮裝、聲音、身ぶり等があつても、筋はない。しかし、それが實に上手にされた場合は人々は其處に人身を以て表はされる寫實の妙味を味ひ、一種の藝術のみがもたらすとこ

ろの感動があると考へ得る。

踊りの場合も同じである。音樂は勿論何等の「科」をも持たぬ純粋の、手ぶり足ぶりだけで、それが人の心の美的リズムにかなふものならば人々は其處に人身を以てなされた美を見るであらう。

もとより、これだけでは二つながらに簡單である。それは充分に人を醉はす事は出來ない。かくて、そこに筋が必要となり、裝飾が必要となる。しかしそれはどこ迄も、この二つのものがより複雜に、より深く生きん爲めにである。

そして、又、この二つは、相生きん爲めに、互に相助け合ふ事になる。但し、物眞似の方は、必ずしも踊りの助けを借りなくても、その複雜さや、深さを得るし、又物眞似が物眞似として純眞になる爲めには踊りは不必要のみか、有害である。何となれば、物眞似は本當らしいといふ事を生命とするのであつて、實際感には、樣式化（又は裝飾化）は禁物だからである。しかし、それは純粹の寫實の場合であつて、それ以外のときは物眞似を主としてゐる劇であつても、形の美、即ち踊りの助けを借りる事も多い。これに對して踊りの場合は、「科」の入らない踊りは殆どあるまい。これは何故かと云へば踊りと雖も、それが複雜となりより深き美を出すためには曲を要し、曲は又それがより複雜になるためには歌詞を要し、歌詞がより複雜になるためには筋を要す。のみならず、踊そのものも、只手ぶり足ぶりをするのみでなく、或は獅子の形を眞似てそれを裝飾的な美を以て出すとか、物狂りの眞似をするとか、馬鹿の眞似をするとか、醉ひどれの眞似をするとかした方がより複雜に又より美しくその手ぶり足ぶりが生かせる。その要求からも歌詞や筋が必要となる。

勿論、踊りはどこ迄も踊りであるから、物眞似を加へても、又筋によつて踊つても、それは丁度模樣畫の樣なもので、たとへば菊の花の模樣でも、それは菊を借りた、美しい裝飾の線であり色である。でその模樣畫の中、菊の形を眞似てない部分は全部、何等の外形物を模寫しない、只の美しい線と色とを以て聯絡してある。踊りもその通りであつて、例へば、梅坊主の「大門口を眺むれば」といふ踊りにしても、大門口でちよいと門の樣な形を手でするが、そのあとの眺むるで眺める形をする迄の動作は全然何物の模寫でもない、意味のない手ぶり足ぶりである。而も大門にしても、眺めるにしても決して本當のものの形をするのでなく、踊りを複雜にするための形にすぎない。

でこゝに一つの問題が生じる。即ち劇にとつて、物眞似は單純なる踊りだけの踊以外には如何なる場合にも存するが踊りは全然なくとも、劇として複雜なるものたり得る。そしてこの事は劇にとつては、文學は、音樂よりもつと密接な關係を持つのではないかといふ事である。

これは一面に於て事實であるけれど、こゝに考ふ可き事は、劇も藝術である以上「美」を等閑に附しては考へられぬと云ふ事である。でこゝに問題となるのは、この劇の本質的二要素の中、物眞似と、踊り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とそのいづれが「美」的要素となるか、兩方ともか、片一方とすれば**そのいづれかといふ事である。**

こゝに私はこの劇の本質的二要素が、やはり、美術に於ける本質的二要素と同じ性質を持つ事を述べ度く思ふ。詳しく述べたら又別の一文を艸しなければならぬから簡單に述べるが、美術の根元は、寫實と裝飾にある。即ち何等か自分の見たところのものゝ形を模倣し形づくつて見度いといふところに描寫が生じ、不整頓、不均齊をきらふ本能が積極的になつて、より整頓、より均齊を欲し、これが裝飾の本能となる。この模倣、裝飾の二本能は大てい美術の根本的な二要素となる樣であるが、この二つの中直接、美に關係のあるのは、裝飾の本能である。即ちこの本能は元來、その根元を、物體の形が形成される時の或る形象的法則にあると考へられるものであつて、それが動物の本能の中にも生きてゐて、蜘蛛や蜂が巢を營む時、象がわらをそろへる時等に表はれる。人間になつては、不整頓や、不均齊をきらふ本能となる。我々はあまり散らかつた部屋に入ると、神經がいらくする。又片ちんばな靴などを見ると不安定でやはりいらくする。これを整頓し、均齊にすると我々の神經は安心する。これが更にもう一歩積極的になると、その安定感を更にもう一歩積極的に加へたくなる。即ち單に片づけるのでなく、そこに積極的に、我々の心を靜かにしてくれるものを造り、見たくなる。これが裝飾への欲求である。そして、この安定、整頓、均齊等の窮極の感じは靜寂にあり又、無限感にある。散亂は動であり整頓はその動が靜にかわつた事である。かくて一切の裝飾はいろくの線や色の動きが靜に至るその感じである。美とはそれに**よつて感じる感銘である。**

かくして、直接美と關係のあるのはこの裝飾の本能であつて、模倣の本能はそれ自身としては、何等、美醜と關係なく、何事でも模倣してみたい本能である。この本能も、生物が生じる時の形成上の法則の中にその根元を見出せる樣に思はれる。保護色や、植物の異種族のいたづらかと思はれる程の相似、猿の人眞似、小兒の反射心理等がその例であるが、これはそれだけでは美醜と何の交渉もない。しかし、この相似たり、その通りであるといふ事には、一種の快感がある。この快感は合一の快感、適合の快感であつて、射術に於て、的にうまく矢が當つた場合や、花合戰でスッパリと赤たんが出來た時などの快感と同じものである。これを分析してみると、其處にはやはり、散亂や不整頓を嫌ひ、合一整頓を欲する本能がある。即ち相似ない狀態は散亂で相似た事はその合一である。言をかへれば、不統一が統一された事である。かくてこの快感はやはり形象に關する人間の裝飾欲と相通ずる性質を持つてゐると思考される。只それは直接美を欲求する本能でないから、積極的なる美への欲求の本能と見る事は出來ない。只我々が、相似を欲し、模倣し、寫實せんとする欲求や本能の底には、やはり調和、統一、整頓を欲する一種の本能があり、その本能の滿足が快感である以上、此處には、或る裝飾的なものがある可きであると云

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひ得ると云つてさしつかえないと思はれる。只それは積極的でなくその藝術的なものはどこ迄も消極的であると云ふ事は事實である。

がこゝにもう一つ、この模倣、寫實の境地の爲めに考ふ可き事は、この境地が持つところの「表情」の一境である。一體この模寫の境地は、「本當らしい」といふ「事」を寫すのであつて、「形」の美を表現する事に對立してゐる。(精しい事は本論でないから省くが、これについては拙著、初期肉筆浮世繪の中、浮世繪の寫實的本質の項を參照されると便宜である)だから物象の形を如實に模寫する場合でも、その藝術的對照は、「相似によつて生ずる快感」であつて、そこに表現されるものは似たりといふ「事」である。これに對して、その物象の形を美しとして、その美しさを寫す場合は、相似不相似は論外であつて、その形そのものを寫し、形の美そのものを表現するのである。

物象を寫す場合が既にさうである。かくてこの境地は、「光景」、「事件」、「表情」等、形以外のものを形を模寫する事によつて表現する境地である。即ち如實と無關係な「美」へのみの境地では、「美」より外のものは表現出來ない。模倣、寫實によつてはじめて、我々は何が描かれてゐるかをしり、又何事を描いたかを見る事が出來る。この「光景」、「事件」、「表情」等の中、人間の「心」の問題、即ち心理を表はし得るのは、何と云つても、表情の表現であらねばならない。かくて、

この境地に於て、美術は文學に近づく幾分を持つ。

でこの境地は、美といふ點では前述の如く消極的境地であるが、只この、心の表現といふ事に於て、「積極的」に、「深さ」「静さ」「永遠」等の倫理感、即ち美に近づいたかに見える。しかしそれは近づいたのであつて、到達し、掴つたのではない。何となれば、心を表現する場合、悲しみ、喜び、怒り、苦しみ、等すべて、「形の美」を借りなければ、眞の藝術としての「深さ」「静かさ」「永遠さ」は表はれて來ない。この境地はどこ迄も、「深さらしく」「永遠さらしく」「静かさらしく」といふ、如實、模倣から一歩も出ぬ境地であつて、この境地だけのものを見て起す感銘は藝術の與へる感銘や魅惑ではなく、描かれた事からそれ自身が人に與へる感銘に過ぎない。血みどろな殺人の畫を見て人は顔をそむけ、櫻井子別れも畫をみて忠義な人は泣き、料理の友の口繪は喰ひしん坊に涎をうながすけれど、それは藝術の力ではなく、その事がこの力である。でこの境地にあつても「心」が藝術となる爲めには即ち「美」となつて藝術的に渾然と生きるためには、その心持を表はし得る、静かなる又は深き、又は強き、又は悲しき、又は怒れる線、色とならねばならない。しかし、それはどこ迄も、單に「美」への境地だけでは出來ない事で、事象の表現、相似の快感のこの模倣、寫實の一境と合一してはじめて成される。

以上は美術上の問題であるが、舞の事を述べる上にはどうしてもここから說くのが便宜であると思つたので述べた。

即ち美術に於ける以上の二要素の中、裝飾の本能は踊り、模倣の本能は物眞似に換へればいゝのである。即ち踊りは、裝飾の本能が、動作

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

作によりて表はれるもの、物眞似は模倣の本能が、動作、音聲等によつて表はれたものである。

かくて、この二要素が、藝術的生命、即ち「美」と如何の關係があり又如何の位置にあるかは前述の所論によりて明白の事と思はれる。即ち、裝飾の本能を元因とする踊りは美に對して直接であり積極的であり、模倣の本能を元因とする物眞似は、美に對して消極的である。只、こゝに注意すべきは、劇と美術とは「事件」又は「表情」等、心理の表現といふ事に於て一つの面白い相違のある事である。

美術にあつては、「心理」の表現は、模倣、寫實の境地の領域であるが、それが藝術的生命を得るには、「美」への表現と合一しなければならぬのは前に述べた通りである。ところで、劇の場合は、美への道即ち、所作的（又は踊り的）領域による道と、その他に、文學といふ別の藝術の持つ藝術的生命＝即ち美感に據る場合がある。

たとへば殺し場に於て只の壯士芝居や劍劇の樣に只如實に人を殺して見せる場合そこに生ずる慘忍な感銘は、その藝の力ではなく、その事實の感銘であるが、團七九郎兵衞、義兵衞次の殺し場はこれを型によりて而かも寫實的な味を渾然と生かして見せる。かくて、生々しさは失はれるが、凄慘な味が美として心にうつる。尤も、慘忍といふ味は形の上では美と遠いから殺し場では實感よりも型が眼に立つが、悲しみ等になると、壯士芝居やそこらの新劇あたりの只如實なものより、松王丸寺小屋の二度目の出の悲しさの方が深く人の心を動かす。これは、悲しみは、形の美と調和のとれる「心」だからであらう。

が、かういふ型、即ち所作の領域と合一して美となる「心理」への寫實は、どうしても充分にその寫實的境地を獨立的に、又は生々しく生かす事は出來ない。

この場合、所作、型、踊りに代つて、この物眞似の一境と藝術的に生かし合ふものに、脚本がある。即ち文學の持つところの「心」の深み、藝術的生命、美が來り加つて、物眞似は其の如實感の快感をより積極的な、深い藝術的生命として生かすのである。かくてこの境地に於ては、物眞似は迫眞なればなる程いゝ事になる。少くとも、舞臺上に於ける形美の境地、即ち所作其他をその演技に加味する必要はない。自分の心を以て脚本の「心」を理解し、藝術的に醇化しそれを出來る丈け實際らしく演出すのである。

尤も、脚本の文學的性質にも、寫實的なものと、象徴的なものとがある。又所作事の臺本をも一種の文學と見なす場合もあり、又或る所作事の臺本などは文學としてみても價値高きものである事が多い。しかし所作事の臺本の文學としての價値は、演劇上にさしたる交渉は持たない。所作事は、美の表出に於て全然、獨立的であるから、文句の美辭から來る快感は、演劇をみてゐる中に味ふ事は難かしい。それは各々別々に觀照さる可きで、こゝでは論外の事である。

こゝで問題となる可きは、文學的脚本の寫實的なるものと、象徴的なるものとの區別である。そしてこゝでは所論上の便宜の爲め主とし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て近代劇の脚本について云ひ度く思ふ。寫實的なもの丶所演は前述の通りであるが、象徴的なものは、どうしてもあまり寫實にやつては、つまり物眞似を生々しくやつてはぶちこわしになる。しかもそれは所作劇ではなく、文學的内容をモティフとしてゐる。だから、藝術的生命を表現する爲めには、必ずしも形の美、即ち所作を必要としないでもいゝ筈である。即ちその表はさうとする美なり生命なりはどこ迄も文學上の藝術的生命にあるのであつて、所作の美ではない。しかし、その文學的生命を表はす爲めに所演の方法が形の象徴化を要求する場合は、勢、其處に形の美的様式化が生ずる譯である。これは所作事と云ふにしてはあまりに單純なものであり、人々はこれだけによつて、藝術的に陶醉する事は出來ないけれど、その場合の形の美的様式化といふ事は所作的領域の片鱗であり又同脉のものである事は否み難い。

で、象徴劇にあつては、その主潮なり根本意義はどこ迄も、物眞似の方の領域に属するが、即ち、同じく、「心」への寫實、「心」への表現にあるのだが、その外形へ、所作的領域を借りて來て、より深く「心」への寫生をしやうといふのである。だからその演出に於ては、どこ迄も、「科」が主である。この「科」が主であるといふ事はつまり所作劇でないといふ事であつて、只その「科」の仕方が、生々しい寫實を避け、或る必要の場合に所作的領域の極めて少しを借りるのである。

かく見て來る時、近代劇は、その主潮をどうしても、物眞似に置くといふ結論に達する。これに對して、我邦舊劇はその主潮を大體に於て、所作事に置いてゐる。これ等の考察は項を更めて述べる事としやう。

舊劇即所作劇論

舊劇は大體に於てその所演の主潮を所作事に置いてゐる。そして寫實的分子は、それを助けるものとして存在する。尤もその種類によつては、寫實が主となり、所作が可なり閑却されてゐるものもある。たとへば、南北ものや、默阿彌物等の所謂江戸歌舞伎の世話物の類の如きは、その形もあまり音樂に合せておどるが如き事は少なく、寫實と、美化との融合した、所謂極り〳〵の美しさをみせるに止まる。で筋にもあまりひどい荒唐無稽の事はなく、所謂「世話」日常の有様が面白くものされてある。でかくみる時、この江戸歌舞伎の世話狂言は、物眞似劇であつて、所作系統のものでない事になる。が、ひるがへつて考へてみる時、一體この世話狂言の藝術的魅力は何にあるのであらう。その文學にか、然りその、所謂「厄拂ひ」調の名白の如きは確に文學的の魅惑であらう。しかしもう一歩ひるがへつて考へる時、この世話狂言の魅惑が實に、役者の魅惑である事に氣がつくであらう。「月もおぼろに白魚の」と云つたところで、「知らざあ云つて聞かせやう」と云つてみたところで、これが、羽左衞門であり、菊之助であるから

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こそ、橘や、田甫の實役が獨り出に出るのである。つまりその魅惑は、目と耳（音）への魅惑であつて、もう一つつまり、それは、美術的魅惑であると云ふ事が出來る。勿論その裏には、その劇的人物の行爲や、やつてゐる事件に對する氣持よさがあるが、この氣持よさも、役者への、視覺的快感がなくては、（形、顏、扮裝）生じて來ない。

でこゝにかういふ結論を得る。江戸歌舞伎の世話狂言も、結局、役者の美に醉はせるために、それを主體として、かゝれたもので、文學は從となつてゐる。

で、役者はその演出を他の舊劇にくらべて比較的に寫實的に行ふけれど、仔細にこれを省察してみる時、それは決して純粹に寫實的なものといふ事は出來ない。人を殺すのに、すぐ殺せるのに、木につかまつたり刀をかついだりしては美しい形を人にみせる。そして其處には、合方はなくとも、間調子（藝術的に快感ある）があつて、つまりは一つの踊りになつてゐる。

で、元來日本の舊劇は、目にて味ふ可きもので、次に耳がその目に味ふ味を助け、頭は＝（つまり筋）一番輕い役をつとめてゐる。即ち一種の美術に似たものであつて、その基調は踊り＝所作にある。

かく說くならば、當然こゝに、日本舊劇の中でも最も重きを成すところの義太夫劇の問題が起らねばならぬ。

義太夫劇は義太夫といふ立派な文學をその基礎として演ぜられる。人情、善惡、道德、等の文學的要素がその主となつて、人に働らきかけるものであつて、これは、主として人形芝居のために書かれただけに、江戸世話狂言の如く、役者をみせる爲めに書かれてない。嵌り役といふものがあるにしても、それは、劇の方から嵌めたのでなく、役者の方から嵌まつて行くのである。實に義太夫は、それだけの權威を持つた立派な文學である。

かくて、舊劇の中一番、文學的背景の多いものはこの義太夫劇であるといふことになる。しかし、かく云つたからとて、義太夫劇が、所作劇でないといふ事にはならない。義太夫劇の所演は全部義太夫といふ音曲の節に乘つてゐる。この點は人形芝居の場合に於ては一層著しい。役者の場合だと所謂寫實派といふものがあつて、この場合は可なり「心」を表はすのに寫實的に演ずる。又斬られたり自刄したものが、死に際に苦しみつゝ物を言ふあたりや、其他喜怒哀樂等の表情など可なり寫實的に如實的にやる。この點は音曲を背景としない江戸世話狂言などより、背景の文學が文學だからの故もあらう、深刻なものがある位である。しかし、それは演出上の一部分であつて、その寫實的演出は必ずすぐほどけて形なり所作的動作の中に融けて行く。又腹藝にしても、又表情の表現にしても、心持ちは一面深くその文學の持つ心持ちと一致し融合してゐながら、一面常に肢體の形なり動きの美的な間拍子を腹に持つてゐる。つまりこの場合役者の藝術的行爲は文學を對照とした物眞似と所作を演ずる舞踊との、擬裝的に融合した一つの境地であると云ふ事が出來る。松王丸が首を實檢する場合、懷紙を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くわへ、兩の手を首補にのせ、眼を閉ぢ、しばしぢつとしてゐるが、簡に其處には微妙な音樂的な間がある。そしてその形は簡に繪畫的に美しい。そしてパッチリと眼を開く。その「靜」から「動」へうつる間の不思議な美しさ。

かくて、義太夫劇は、女形、物眞似と、所作とが有機的に融合した劇であると見る事が出來るが、しかしこれを純粹の舊劇に比べてみるならば、要するに一種の音樂を「地」とする所作劇の一つと見る事も可能である。

元來この日本の舊劇は、女歌舞伎の始めから、「地」即ち音樂に合せて踊る事に創まつてゐる。人形淨瑠璃も、物語に節をつけた「地」に合せて「木にて造りし、でこの坊」を舞はしめたもので、この方には、筋があり、從つて「劇的」な表現もあるけれど大體に於て舞が主であつた。

「歌舞伎」もその後、踊りだけでは單調だし、民衆の「劇」に對する要求にもそふ必要から物眞似をとり入れ、筋ある狂言を演じ、人形淨瑠璃の眞似等をも加味し、終に義太夫劇を歌舞伎の中に加へ更にこれが可なり主要なものと迄さへなつた。

かくて、舊劇は、その基調を所作に置くけれど、それは決して單なる舞踊劇ではない。演劇は、前項に述べた如き、舞踊、物眞似の二要素から成るのであつて、その一方だけの發達で滿足さる可きでない。この二要素の中、踊りの方が、美又は藝術的境地により密接で直接である事は申迄だが、「劇」としては筋を演じ、「心」を表現する、物眞似の域が、より強く要求される。丁度、美的に於ては、裝飾の域が主に對してより直接であるけれど、實際に於ては、物を描寫し、寫生する事がより強く要求されるのと同一で、即ち、繪を描く、又は芝居をするといふ事は一面、美醜を離れて、とも角も見るもの聞くものを再現してみたい要求から起つてゐるからである。即ち、美への要求と再現の要求との二つの中、繪を描く、又は芝居を演ずるといふ、實際的行動の主因となるものは、美への要求よりも再現の要求が先きであり主であるからであると思へる。しかしそれだけでは藝術的要求とは云へないものであつて、こゝに藝術的要求であるところの裝飾への要求、即ち美への要求が加はり一致してはじめて藝術たり得る。

かくの如く、演劇の二要素の中物眞似は、どうしても「劇」の本道となる。即ち劇をやるといふ事は、踊るといふ事よりも、筋を演じ、物眞似をするといふ事が主となる。しかし、演劇が藝術である以上、藝術的要求が其處に興り、美的表現が欲せられるのは又當然である。かくて劇の美的要素である所作が、劇に加はり、これが兩々相伴かし合つて一つの完全なる、演劇が生れて來る事は論をまたない。

かくて、我が舊劇もその原始にあつては、單なる舞踊劇であつたが、（それは可笑味を主としたものであつたらしい。この可笑味、即ち、人の前で人を笑はす所の滑稽を演じてみせると云ふ事も劇の要素の一つである。それは「狂劇」の如く、物眞似の一部ではなく、所作、物

眞似、の兩方によつてそれは生かされるが、この二要素とは別の一つの要素ではある。しかし、これは、所作、物眞似の二要素程に大なるものではなく兩方に含まる可きものであるから、論を複雜にしすぎるといけないので、本論中ではこゝに一寸誌すに止める）それが完全なる劇となる爲めには、物眞似を加へ、更に物眞似が主となるが如くに見える形式に變る必要があつた。かくて舊劇はその基調を所作におき、物眞似を有機的に、所作を以て生かし、兩者が渾然と融合し、生かし合ふところの、云はゞ裝飾的鑑賞の美術として生きて來たのである。

誠にかくの如き、境地を生かした「劇」は世界に二つとはない。支那の劇が稍意識に於てこれに近いらしいが、これは誠に幼稚なもので、深く進んだ藝術的鑑賞眼を滿足せしめる事は出來ない。西洋の歌劇が稍これに近いがこれは舞踊と物眞似が離れ〴〵で渾然と有機的に融和してゐない。近代劇に於ては、物眞似が主で舞踊は全然ない。

かくの如く、舊劇は劇の二要素が完全に有機的に生き合つたところの、世界に只一つしかない本當の演劇であると云ひ得る。

よく、人の云ふ事だが、近代劇を見て、「どうも、芝居を見てゐる樣な氣がしない」といふ事を耳にする。それは勿論その人が近代文學を理解しない無學の人であるからであらうが、しかし、その人の云ふ、「芝居」を見るといふ言には尊重す可き、鑑賞上の尊い經驗が含まれてゐる。即ちこの言は一面、近代文學に對する無智を示すとゝもに、又一面、眞の劇鑑賞上の叡智を示してゐる。芝居らしくないといふ言の中には、芝居になくてならぬもの、芝居を見て、完成された「劇」の感じ、それが缺除されてゐる、さういふ意味に外ならないと思はれるのである。

即ち、江戸人は、不識の間に、その進んだ藝術的官能によつて、完成されたる、演劇を生み、育て、鑑賞して來た、世界に稀なる民族である。芝居を、芝居らしいものに育て、味つて來た民族である。彼等は本當に、芝居の芝居らしさを知る唯一の民族であつたと云つて過言ではない。本當に芝居が芝居らしくある爲めには、如何なる芝居でなくてはならぬかを知る唯一の民族であつたのである。

この「芝居らしい芝居」といふ事は決して、江戸趣味の單なるいゝ氣持といふ樣な輕い感傷ではない。即ち演劇の二要素が完全に調和される事によつて生ずる、劇のみの持てる完成された藝術的陶醉を指すのである。こゝでは觀客は、形と音と、筋と、人情との渾然たる渾一の美に醉はしめられる。而もその味は進み切つたものゝみ持つところの深刻な、精練された無比の味である。

だから、これ等の人々が近代劇を見て、芝居らしくないといふ不滿を抱くのは、一面の眞理である。我々は近代劇には近代劇の價値を認め、これを尊重する道を知つてはゐるけれども、普通の見物の云ふ、「芝居らしくない」といふ不滿の中にも一つの眞理のある事を否定は出來ない。即ち近代劇は「劇」としては、純粹の演劇的要素のみで人

に美なり藝術的感銘を與へるのでなく、文學を融合して、「劇」たり得る。だから、「劇」そのもの丶感銘、即ち劇の劇らしさ、劇のみの持つ藝術感銘としては舊劇の方が完全であり純粹である。かくて「芝居らしさ」といふ點で、近代劇が舊劇に及ばないのは是非もない事で、近代劇には又別の世界があるのである。即ち、寫實を完全に生かして而も、そのまゝ藝術的境地に到り得るのであつて、筋を通じ深き人生の問題を表現する芝居としては又一方に深く徹底し得る、この點、舊劇は近代劇に及ばないのである。

舊劇美の味

（西洋舞踊及び歌劇との對比）

次に吾々は舊劇の美の性質に就て考へてみやうと思ふ。舊劇の美と一口に云つても、其處にはいろ〳〵な審美的味覺がある。かもしこれを總括して云ふ事が出來るならば、「藝術的に高級なる卑近美」と稱へる事が出來る樣に思はれる。

然らばその「藝術的に高級なる卑近美」とは何であるか、この事は卑近美とは何を指して云ふのかといふ事を明かにすれば解る事である。卑近美とは「卑近」といふものゝ持つ、卑近そのものゝ美しさである。一體「美」といふものは、卑近なものではない。少くとも、「下品」なものではない。美とは、前にも述べた通り「靜寂」「無限」「永遠」等の精神的欲求の對照となる可き倫理感を持つものであつて、「莊嚴」「神秘」「嚴肅」「高貴」等の感じが常にこれに添つて味はれるものである。そしてこれ等の感銘は決して下品なるものでなく卑近たるものでない事は言ふ迄もない。だから美術にせよ何にせよ、美を表出せんとするものはいつも下品を避け、卑近を拒み、高尚、典雅を旨とするのが常である。

しかし乍らこゝに注意す可きは美といふものは、必ずしも、高尚、典雅の形をとらなくては表出出來ないものではないといふ事である。即ち、「美」そのものは、結局「高尚」なるものであつて、つまり先述の如き倫理的感銘を持つものであるとしても、それを表はす手段、形式が必ずしも、高尚な感じのものでなければならぬといふ事はない。否むしろ、「美」がより深く、又はより苦がき、又は澁き味に於て、表はれるためには、美と正反對の或る感じを借りて、つまり所謂、逆手を用ひて表はされる事が必要となる場合がある。そんな事をしないでも深い美は生み得る。しかし、さうする事によつて生み得る美がある以上、それは肯定さる可きである。のみならずさうする事によつて生じた美と、さうしないで生じた美と、その美を比較して、その味におのおの異つた味があるとしたら、更に又、もし、逆手を用ひた美の方が、逆手を用ひない美に比べて、味に堪へのあるものであつたならば、この逆手を用ひる道は美を表はす上に一歩進んだものと云ふ事が出來る筈である。

汁粉を造るのに只砂糖のみを入れて造つたのと、少し鹽を入れたの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とではその甘さが非常にちがふといふ事は人のよく知るところである。即ち美を表はすために美と正反對の感じをかりる事はこの理に似てゐると云へやう。美を表はすのに、その形式を逆、典雅、高尚によるものは、ともすればその美が甘くなりやすい。一般に西洋美術にはこの感じが多い。勿論、逆をとらなければ、深い美に到達出來ないといふのではない。高尚、典雅には又高尚、典雅のよき味があり、その道を深く進めば、極致の美に至る事が出來る。しかし、大體に於て、さういふ道の美は、單純である事をまぬかれない。所謂「石」がなく、澁さや、苦さに乏しい。

一體この、料理などの「味」でも、甘いといふ事はどうしても只「甘し」ではいけない。普通の舌には、「甘」くない様なものがやはり本當の味であらう。子供の味覺に「甘し」と感じられるものでは本當の味には至らない。つまり、苦味、澁味等は「甘」の正反對の味であつて、只それだけでは本當に、まづいものであるが、その苦、澁を生かす時、本當の進んだ味が出て來る事が多い。

でこの「美」の問題でも、東洋藝術は多くこの逆手を用ひてゐる。一見卑俗にみへる又は怪奇なる道釋仙人、其他何を描いてもその形が典雅、高尚といふよりも、怪奇、倭少、萎縮、にされてゐる。東洋畫の人物畫の形をみる時、吾々は其處に決して、ギリシヤの典型的な肢體をみる事は出來ない。東洋人の不均齊な形を寫したといふより、もつと極端に、四肢短かく　のび〳〵しない、きうくつな形をみるのである。しかもその形の如何に不思議な美しさである事。

これ等を指して私は、卑近美、又は下品の美といふ。そしてこの卑近美、又は下品の美は美と正反對の感じ、即ち、美の持つところの倫理感と正反對の「醜」の感じをその基調とする事を考へたい。

即ち、美の陽感であるところの、「莊嚴」「嚴肅」「清淨」「永遠」「靜寂」等に對して、「下品」「ふざけ」「猥雜」「現世的」「騒がしさ」等の感じはすべて、非倫理的感銘であつて、醜であり、又惡である。が、これ等の美と反對するところの感じを用ひて生かす美の一境は又實に不思議に複雜で、不思議に深く、澁く、又高いものとなる。

先にも述べた様に、大體に於て、この道は東洋の美術が多く執つてゐる。しかし、東洋の美術の中にも殆どその道によらぬものもあるし、西洋の美術でこの道に從つてゐるのもある。只こゝに注意したいのは、この道を單純にデカダンスの道と思ふのは早計であるといふ事である。デカダンスの道は、美そのものが、「惡の持つ味」「病的なる味」「生命力なき味」で表はれるのであつて、この道は美そのものは、健康であり、高く、深いものである。がくはしくは本論でないからここには省く。

が、大體に於て、西洋風の純美にはこの逆手の味は乏しい。もし西洋の美術の中にこの味がある時はそれは東洋的な味となつて吾々に映ずると云つて過言であるまい。東洋のものは、それが殆ど常であると信との別はあつても、とも角も、澁さ、苦さを必ず持つと云ふ事が出來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。その範圍の中にあつて、典雅的であるのと、野卑、又は卑近的であるのとの別があるのであつて、東洋の美はこれを西洋に比べて、一應この逆手の美の洗禮をうけてゐるといふ事は否み難い事實といふ事が出來る。たとへば、能樂、茶の湯等は典雅の道であり、歌舞伎、浮世繪等は卑近美の道である。しかし、能樂、茶の湯と踊もこれを洋風の純美に比べる時、此處にギリシヤ式な直接法な美への道を見出す事は出來ない。露はではないが、ことぐ\く美への逆手によつて一度抑へられ、複雜化された美を基調としてゐる。

さて、これで私のいふところの卑近美の説明は大體出來た樣であるが、吾が舊劇はこの卑近美を最も代表的に、生かした日本の藝術の一つであるといふ事が出來る。即ち、舊劇の持つ卑近美は、他の日本藝術のどれよりも、最も卑俗的であり、「惡」の色が濃く、グロテスクでエロチックで、猥雜で、世間的で、無智的で、出鱈目である。

私は常から、舊劇が見世物から生れたといふ事に深い興味を持つてゐるが、私は舊劇から、この見世物＝つまり無智な見物の慰みといふ味＝の感じが失はれたら舊劇が舊劇らしくなくなるであらうといつも考へてゐる。がかく云ふと今日の俳優諸子の氣を惡くするであらうが、しかし、私が言ふのは、舊劇を「見世物」だと云ふのではない。

舊劇は出雲の阿國以來、町人の友である。阿國の當初は大名がひいきにしたさうであるが、これが又面白いのである。即ち、當時阿國をひいきにした大名は、下賤から成り上つた、無趣味、無素養な、荒大行である。能も茶の湯も、古雅も何もよくは解らない。さてこそ、肉感的で美しい女のおどりに悦に入つたのであつて、やがて大名に教養が出來、「品」を尚び、典雅を好む樣になると、歌舞伎はいつしか、無智な町人のものとなつたのである。ともかくも、「木にて造りしでこの坊」を舞はした、金平淨瑠璃時代から初代團十郎の荒事創始、それより江戸歌舞伎や、上方淨瑠璃の發達に至る迄、舊劇はいつも町人を主なる客とし、町人的味覺の發達に助けられ、又助けつして、實に微妙な、洗練された、不思議な、クラシツクを造つたのである。

藝術上の美の至極等といふものは、必ずしも、藝術以外のもの、數孤＝つまり學問とか、禮儀とか＝さういふものを要としない事は論をまたない。江戸人の持つた文化はそれである。江戸人は世界にその比を見ない程洗練された趣味を持つてゐた。これは江戸以前からの日本民族の特有性が、三百年の鎖國によつて、熟し切り、發酵し切つたのである。しかし、江戸以前の文化は、上階級、即ち、公卿か、武家のものであつた。徳川時代に入つて、文化は町人のものとなつた。町人は無學ではあるが、その事は感受性と何の關係もない。江戸の町人は武家の權力に對抗するために、金力を以て立つてゐた。あらゆる現世的な贅澤が行はれた。こゝに世界に又と生れない趣味性の發達が生じた。江戸歌舞伎、大阪淨瑠璃はかうして醇化され、洗練されて來た。だから江戸時代に於ける最も江戸的な藝術があるとしたらそれは、「遊び」と「逆手」であると云ひ得ると思ふ。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かくて、舊劇は、どこ迄も、無智的であり乍ら、實に藝術上の深く微妙なる叡智を持つところのクラシックを持つのである。だからもし、舊劇がこの無智感から離れて、利口なものになつたなら、それは味を失つた點となる。彼の活歴なるものはその代表的なものであるが、しかし近來の學藝俳優等なる俳優諸子の演技にもし味が乏しかつたとしたら、私のこれ等の言は正に裏書された譯になるのである。

閑話休題、かくの如く、舊劇の味に先づ、無智の感じを持つ。次に舊劇は決して上品な味を持たないといふ事について考へてみやう。先づ舊劇の所作（踊、型等をふくむ）を審美的に考へてみやう。舊劇の所作は、全然、日本音樂の「間拍子」及び「節」に合はせたものであるが、この日本音樂の「間」及び「節」といふもの丶持ち味は、一種の浮かれ拍子であつて、ヒョイ〳〵〳〵〳〵とか、コリヤ〳〵〳〵〳〵とかいふ風な感じを持ち、のび切らない、押へた様な間である。かう云ふと、雅樂、箏曲、尺八等は如何といふ質問が出るであらうが、雅樂は知らず、箏曲でも尺八でもこれを西洋音樂に比べるなら、その間拍子其他に私の言ふ様なものがある事を必ず見出すであらう。私は音樂の事はまるで無學なので、專門的にこの事を言へないのが殘念だがいつかこの點は學んでみたいと思つてゐる。只こゝでは感じを基としてその味を美的に審議してみるのである。

で、殊に、芝居で用ふる日本音樂は、芝居のために出來たものであつて、その「節」なり、「間」なりが、一擧一動迄に會む事は論を俟たない事實である。かくて舊劇の所作はこの日本音樂に合はせて動くのである。從つてその動き方は、西洋舞踊の様に、のびる處へのび切るといふ形でなく、變にのび切らず、押へてある。そして、極りどころへ來た時、ぐつと極まるのだが、これも、一見、のび切つた形をしても、すつかりのび切るのでなく或る處で、押へてある。即ち、內から外へ出やうとする線の力を、西洋の踊りは常に、放射し放しであるが、日本の踊りは常にそれを押へ〳〵しつゝ、極りどころで、それを充分にメめる。例へば、「俳奴」で、奴が花道へバタ〳〵〳〵と出て來る、その時の形は、これから「シテ來いナ」で極まる迄の前ていのリズムで、やはりへんに押へられた力である。これが七三へ來て、「シテ來いナ」で極まる。その時は充分に內の力を外へ出して動くが、提灯を持つてトンと極まる時はその力を又內へグッとメめてゐる。それから合方でその力がほぐれて、「やつちやしこい」の動きにかわるのだが、その間の感じに常に力をのばし切らず、押へ〳〵た、一種の不思議な間拍子である。もう一つ例を引けば、六歌仙の大伴黑主の幕切の大見得で黑主が顔赤た目をあけて、舞台一杯に手をあげて極まる。（車引の時平公も同例也）一見充分にのび切つた様だが、その手は必ず、內へ曲つて、つまり內の力を外から押へる形になつてゐる。これが西洋の踊なら手先は遠心的に放射的にのばし放しの形に極まるのである。その他、濡事などの極まりの形で片手をのばし、片手を顔のところで握つてひぢを張り、首を、ぐら〳〵とまげて、ガチー

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ソと極まる。あの「間」や、極り方は、一面に舞台一杯にその力を放射しつつその力を又求心的に自分に吸ひよせる、つまり、舞台前面の空氣の力を、自分自身の極まつた、中心へ吸ひよせる力であつて、これは、西洋の踊りにはあまりない。この味はやはり不思議な押へた力であつて、舊劇のみの持つ非典雅の美である。何となれば、動きに於ては、のび切る事は典雅で、高尚である、腰をかゞめた形、猫背、顎をつき出し手をちゞめた形ヒョコ〳〵とした足どり、それ等のものは決して典雅高尚の形でない。これに反して、胸を張り、手足をゆつたりとのばし充分にのばした形は高尚で典雅である。大體に於て、日本人と西洋人の形はこのよき對比を示してゐる様である。支那人の形も日本人よりは典雅であらう。とに角、坐はる國民である日本人は動作がどうしても充分にのび切らぬ一種のいぢけた味を持つて來る。がこの一見いぢけた様な味の如何に渋く苦い事であらう。昔、茶室禮儀、すべて、内へ〳〵と押へる美である。きちんと坐つた日本人の行儀、すべてさうである。

かくの如く、舊劇の所作は、その基調がすでに、押へた、のびきらぬ拍子にのつてゐる。のみならず、更にこの感じを積極的に用ひる事が非常に多い事を注意したい。即ち、舊劇は極めて下品なる所作を敢て用ゐる事が非常に多い。これには劇一幕の中へ悲喜交々にとり交ぜる必要からとてつもない、滑稽じみたものが飛び出して來るといふ場合もある。つまり、御注進の黄色い調子に小さな陣笠を持つた男の形や、所作事などは、極めて思ひ做な間と間と、動きを持つ。これは[illegible]の心を一時換さす爲めのトリックではあるが、吾々はそれを只滑稽と見るよりも其處に來てはじめて、舊劇獨自の興味の充分たる發露に醉ふ事が出來ると云つて過言でない。隣接とつて「チョイ〳〵かぶり」と讃じをかゞめ足先で隣接をちよいと前にのせる形などは興味の典型であらう。

がこれ等は、一つの幕の中へ出て來るものではあるが、それ以上に、徹頭徹尾、この味に終始したものが、所作事などには殊に多い。「三社祭」にしても「升落し」にしても「乘合船」にしても、皆さうである。

がこれは極端に用ひた場合であつて、さもなくとも、舊劇である以上、一幕の中にこの一種の滑稽で卑俗な味の露骨に出た所作の入らぬものは珍らしいと云つても過言でない。義太夫ものならば、例の「ノリ」になつて、ヒョイ〳〵〳〵と調子に合せて動くところなどは殊にこの味が豐かに出てゐる。

更に荒事となると、のつけからこの味が濃い。腹出しだの鯰坊主だのといふ得體の知れぬ化物がゐたり、ヤットコトッチャーウントコナなどゝとなつたり、誠に上品でない事おびたゞしい。

かくの如く舊劇の味は下品の美がその特調をなす。次に舊劇の味は「グロテスクの味を多分にふくむといふ事について考へてみやう。

今も書いた通り、この鯰坊主や腹出し、さては「暫」の鎌倉權五郎で

もウケの公卿悪でも皆、その味はひどくグロテスクである。赤面、赤腔、赤腋の腹出し、鯰坊主の白土の如き顔色、籾のすぢ隈、大刀、シャッチヨコ張つたそのいで立ち、公卿悪の恐ろしい、青又は金隈、それ等のもの丶白、態、立ちふるまい。これ等はこと〲くこの世に見られぬ怪奇極まるものである。その味は濃く、苦かく、デヤッとへんに厚く、しつこい。がこのグロテスクは決して單に荒事のみにあるのではない、江戸歌舞伎のすつきりした世話物などには一寸、このグロテスクは乏しいが、それでも湯かん場の吉三が齋洲殺しのところなどの味や、義平治殺しの泥仕合や、お岩様などの味などは多分にグロテスクの味を持つ。私はずつと前に或る劇評に、稍劇の白いグロテスクと題して、秀調が演じた布引瀧のこまんの死顔の事を書いた事があつたが、正にあれなどは、非常にグロテスクなものである。第一女が腕を生むといふ、アイデヤからして、へんに病的で、怪奇的で、どこか淫虐的なグロテスクの味である。義太夫ものでも、實際的な世話物はさうでもないが金ピカ物といふ時代物になるとその構想からして既にこのグロテスクなものが多い。近松の書いた、時代物の淨瑠璃を讀んでみると到るところにこの荒唐無稽でしかも怪奇なグロテスクがある。

でこのグロテスクとは如何なる味であらうか、云ふ迄もなく、野蠻怪奇の味であつて「美」又は「善」への反對である。だからグロテスクといふ、それ自身は、一種の「醜」であつて、グロテスクが生のまゝであるならば、それは美術とは正反對のものでなければならない。だからグロテスクといふ事自身は、藝術にとつて、いゝ事ではないのだが、これを借りてそれによつてより深く、より不思議な美の世界を出す時、此處には「グロテスク」といふ世界が開ける。たとへば地獄草紙であるとか、百鬼夜行の繪卷とか、西洋ならばゴヤの或る作、ダインチの奇怪なる乞食の顔、ノートルダムの怪像等がそれである。でその味覺は如何といふ事になるが、醜怪を借りたものだけに、異端的で、悪魔的で、野蠻的で濃く、強く、苦がいものとなる。

かくて、我が國の舊劇の味も、やはり、濃く、強く、苦かく、野蠻的で、悪魔的で、異端的である。その味の濃、淡の別はあるが大體に於て、この味の洗禮をうけてゐる事は先づ間違ひない事實と考へられるが此處に注意す可きは、それ等の味は決して「生」のまゝのグロテスクではなく、特に洗れ切りたる江戸人の鋭い鑑賞力に洗練され育まれた生粹の美である事である。これを支那の芝居や、南洋土人の芝居等と混同するものがあれば、その人の審美的味覺は誠にあわれむ可きものと云はなければなるまい。

江戸の初期に六方言といふものが流行し、それが今日でもまだ殘つてゐるが、即ち「何に致すべい」とか「かつかちろべい」とかいふ言だが、これなどはわざ〱田舍言を洒落て眞似たもので、文明の道を行つて更に文明の味を濃く味はうとしたものである。江戸遊事で早くにこれをとり入れた事は誠に當を得てゐるが、その味そのものが、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時に、文明に麻痺されたる野蠻、荒唐無稽、稚拙によつて出來てゐるのである。色彩に就ても、元來文明的な色彩は、どうしてもだんくと淡くなつて行く。原色的であつたり濃厚であつたり、又強い赤色などは原始的なものなのであるが、荒事ではこれを逆に用ひて、弱き部上品の文明の味を一蹴し、一見原始的にみえる味を、意識して生かす事によつて、更に進んだ文明の味を示してゐる。

私は舊劇の持つ、出鱈目さ、荒唐無稽さを誠に面白いものと常に思つてゐるが、江戸人がいくら科學的に無學だつて、あれを本當として感心してゐたのではない。不自然さや、馬鹿々々しさを、百も承知で、否それあるがために、腹をスカシて、面白がつた江戸人の味覺は敬服に値すると思へる。

又私は、舊劇の色彩の中、「赤」を非常に多く用ひる事も非常に面白い事に思つてゐる。荒事は云ふも更、時代物の赤つ面、所作事の山臺、何彼につけて濃い赤が用ひられる。これは只に舞臺の上のみではなく、花道に添つた桟敷には二階と下とに赤い布をかけてある。其處へ赤い花提灯がぶら下る。一體この濃い赤といふ色は、原始的なものであつて、決して上品といふ譯には行かない。幼稚であり、野蠻的な味を多分に持つてゐる。そして異端で、場合によつて血を思はしめ又惡魔的でもある。一面に華やかではあるがそれは決して上品ではなく卑近な味、鄙びた味である。が舊劇はこれをやはり更に進んだ、審美の下に生かし、下テな、しかも香氣高き不思議な美の世界を生むよすがとした。だから私は、今日の洋風の劇場が、舊劇の美を半以上紛失さしてしまつたものだと常に云ふのである。舊劇は舞臺だけ、舞臺ではない。花道はおろか、後の桟敷、うづら、それに其處に坐る美女、さては舊態な見物人、一切合切劇場全體が舞臺である可きだと思ふ。だから或る意味から云つて舊劇に於ては見物人も劇中の一人であると云ふ事が出來る。この云方は少し極端だが、しかし、「成田屋！」「音羽屋」のかけ聲の、間の合ひ方などは正に一つの藝であり、これによつて劇場の空氣は一層劇的な美を増す。又昔にあつては、ひいきの連人だけが「讃め詞」といふものを唱へた。又大きな見連の時などは劇場内の男たちがそろひの風で禮を云つたりした。又名代披露の時の口上と云ひ、とに角舊劇は見物と常に混和し、融合し、一つの空氣を作つてゐた。これが今日の劇場ではもう見られなくなつてしまつた。私はいつぞや幸四郎が帝劇の貴賓席の前で、暫のつらねを云つてゐるのを見て誠に情なかつた事がある。がこれも詮なき事である。話は舊劇の赤色の事であつた。とも角劇場は洋風になり色彩もこの江戸の色を捨てゝしまつた。

次に舊劇はエロチシズムを多分に持つ事に就て考へやう。一體舊劇といふものは、東西の別なく、「戀愛」を取り扱つたもの、多い事は否み難い。これは畢竟といふものは文藝であつて、文藝の取材が多く「戀愛」にあるといふ三段論法的な事情に起因するのであるが、劇の場合にあつてはさういふ事以上に、劇全體に一種のなまめかしさ、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「色氣」といふものが、みなぎつてゐる。筋書の色模様や、ぬれ場等は別としても、舊劇そのものゝ持つ空氣には「色氣」又は一種の淫蕩感がある事は否めない。これは日本演劇の興りが出雲の遊女にあり、色若衆にあり德川初期の淫蕩な衆俗の好みによつて育つたものであるからであらうが、私はこの事を舊劇のために又面白く思ひ、これあるが爲めに舊劇が舊劇であると思ふものである。

一體このエロチックの美といふものは、美としては最高のものではない。がエロチックであるから美ではないといふ事は決して云へないものである。エロチックはデカダンスに近いところもあるが、エロチックだから必ずデカダンスだといふ事は云へない。舊劇のエロチシズムは、デカダンスの分子をも相當に含むけれども、其處には纎細といふ無幾な色や、情痴の生な醜さはなく、深い古典の味や、完成されたる「美」がある。かと云つて、舊劇のエロチシズムは、情痴を、精神化する事はしない。つまり、情痴を「清き戀」に美化して、美と一致させるのではなく、情痴は情痴のまゝで、美となつて人を魅する。この點、ルーベンスや、ゴヤに相通ずる。ルーベンスやゴヤをデカダンスと云ひ得ないと同じ様に舊劇の美をデカダンスと云ひ切つてしまふ事は出來ない。

一體、美術上の美にはいろ〳〵の種類があつて、この淫蕩感も一つの美となり得る。西洋の裸體畫などゝいふものは何と抗辯しても、その元はこの淫猥欲から出たものであつて、元來、淫猥とか情欲といふものは、醜いものであるにかゝはらず、その倫理感を解脱してしまへば、それがもたらす、快樂とか、歡喜といふものは一種の美的感銘をもたらすものである。美術に於けるエロチックの美といふものは、たしかにこの感情であらうと思はれる。がこの美は最高の美の世界でもない。最高の世界はどうしても、「老」の感じを持つ可きである。それは靜寂で、深く澄み渡つた世界である可きである。舊劇の美の世界にこれを求める事は出來ない。舊劇の美は色界の美である。煩惱の美である。浮世の美である。より高き美は、能や茶の湯に求む可きである。しかし、それだからとて、舊劇の美を蔑みする事は出來ない。それはそれ、これはこれである。舊劇の美が美である以上、そして、その美が他に求めて求められぬものである以上、更に、それは、最高、最深のものでないとしても、又別の道に於て、深いものであり、美としてのクライマックスを持つ以上、そして吾々の裏に、その美に陶醉するところの欲求がある以上、これは正に餘まる可きものであらう。故に美は最高のもの一つあればいゝといふものではない。いろいろの美しさが欲しいのである。かういふ見地よりする時、吾が舊劇の美の如きは正に世界に類のない、ユニークな、不可思議な夢幻の世界を持つ、かゝるものが亡びたり、蔑せられたりする事は誠に惜しい。舊劇に美を感じない人は仕方がない。しかし美をその人が感じないからとて、舊劇の美が今日の人々に不用のものと云ふ事は出來ない。美は生きてゐる以上、常に新鮮である。舊劇に新しく美を感じ得ない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といふものがあれば、それはその人の感受性の鈍さや非難さを示すものである。が、これ等については又後項に論じやう。

で、とも角、舊劇の美は、以上の如く、下品の美であり、グロテスクの美であり、エロチシズムの美である。でこれ等を通じて感じられるのは、舊劇の美は「惡の華」とも云はる可き、異端の味を多分に持つものと云ふ事が出來る。即ち舊劇の美は、美や善と反對である。「惡」の感じを借りて、その反對の美を表現する逆手の行き方であつて、それ等は、洗練され、進み切つた、藝術的趣味によつて、充分に意識され、考察されて生じた、完成されるクラシックである。實にかくの如く、複雜で、苦がく、不思議な、味は世界に二つとはない。高尚典雅ではなく、又深淵をみる如く深いものではないが、その强さ、その洗練され方その進み方は、他の藝術の境と必ずしも劣るものではなく、まして他の國の演藝など、比ぶ可くもない。

が、もう一つ、舊劇の美について考へなければならないのは、この舊劇の美がどこ迄も「日本」の美であるといふ事である。これはあまりに當然な事を云ふ樣ではあるが、しかし等閑に出來ない事である。

この點では能も、茶の湯其他日本の藝術すべてさうだと云へるけれど、舊劇の場合は民衆的のものであるだけに、そして世界に類のない三百年の鎖國の中に育ち完成されたものだけに、その味がことに複雜に、又民族的に生きてゐるので面白いと思はれる。

舊劇の隈取りなどゝいふものは支那がその元かもしれない。更に南洋あたりにもその元因をたづねる事が出來るかも知れないが、しかし、一度び日本の舊劇がこれをとり入れ生かしたとなると、如何に、それが「粹」になる事であらうか。一見野蠻とみえる、この顏を彩る樣式は、不思議な完成された、文明な藝術的生命を與へられ、動かす事の出來ない洗練されたる「形」となる。野蠻な音を出したにちがいない蛇皮線が忽ちあの粹な三絃にかへられたと同じ味である。日本音樂は主に劇場に於て發達したが、それは如何に、さびて、澁く、又細かい事であらう。

又、所作又は型の間、形、其他の如何に日本的である事、これも民族的な味の出てゐる事に於て、他の日本藝術より一層、日本獨自といふ感じを深くさせられる。其他色彩、劇の形式、劇場のいろ〳〵の仕來たり、たとへば幕の開閉、拍子木、黒坊、何事によらず、實に日本である。尤もこの日本的といふ事に就て、或る人は、日本的といふ事は舊日本の味といふ事ではあるまい。舊日本も支那其他の外國に感化され混合し育つて來たのだ。徒らに江戸末期の味を回顧してそれに耽り、それを尊ぶ事は、新たに生きる、新しき日本の味を知らず又さまたぐるものだと云つたが、しかし、私をして云はしむればそれは皮相の見である。我々が今更らしく、今日、日本的と感じさせられるのは何の爲めか、何が元因してゐるか、即ち今日の歐化の文化に對照して自然と思ひ出され、なつかしがらさせられるのであつて、新しい時代の日本は勿論、西洋とはちがつた文化を生むであらうが、それにそ

れ、只日本主義と云へば、新しき日本、即ち今後歐洲文化の感化をうけて育つ可き日本の文化に對して、言をかへれば歐洲に對する日本である。だから日本主義なり、日本趣味なりといふ言は意味をなすのであつて、又多少とも美又は趣味の上に心得あるものなら、歐洲の美や趣味と、舊き日本の持つてゐた、美なり趣味との、高低優劣位は解る筈であつて、舊日本の美を慕ふ事を笑ふ事は出來ない筈である。歐化といふ事は、物質的生存の上に致方のない事として認めるのである。今後の日本人のいろ〳〵な幸福の爲めには歐化はむしろ喜ぶ可き事であるのだが、それだからとて、舊日本の趣味の價値を蔑んでならぬといふ法はないのである。趣味と、實益とは或る點へ來ては別れなくてはならない。只吾々の如き趣味や美を生命とするものは惜む可きものは惜しみ悲しむ可き事は悲しみ、蔑む可きものは蔑むのである。

一寸思ひ出したのでこの日本的といふ言について辯明しておいたのだがさて次は、西洋の舞踏や、歌劇と日本の歌舞伎や義太夫劇とを審美的に少し對比してみやう。とは言へ、私は、西洋舞踊や歌劇の極くいいものはまるで見てゐないし、又それ等について何の知識も持たぬものなのであるが、只私の見聞した少數の例に對して、私は私の審美的經驗によつて、或る程度迄確信ある批判を得たと信じられるものがあるので、それをこゝに述べてみやうと思ふのである。だから、この點については自分は、他にまだ〳〵教へられていゝ事を持つてゐる樣に一方思つてゐるのであつて、こゝでは私一個の私見としてのべて何かの參考になればいゝといふ程度の態度でのべさせて頂く事とする。

西洋の歌劇は、役者が同時にすぐれた音樂家であつて、その點、役者としてよりは、音樂家として優れてゐる事を要とする點で先づ劇としては完全なものでない。又歌劇に用ひられる踊りは、大てい高級な所作事ではなく極めて單純であつて、味に乏しい。そして歌つてゐる間は、只、歌のための（少しは筋の爲めの）單純なゼスチュワがあるきりで、美術的な型はない。全體として、一つの美しさを出すけれど、舊劇の如く煮つまつた、味はなく、その美は甘く、低級である。私は知らないが、音樂家に云はしても本當に濃く深い音樂は歌劇には求められず、音樂として獨立した他のものに求む可きである由、だから大體に於て、歌劇といふものは甘いものであるといふ事が云へる樣に思ふ。少くとも私は歌劇を見て、私の審美的要求を充分に滿足さす事は出來ず、その味の甘さに飽きてしまふ。

次に西洋の踊りについてゞあるが、私はアンナ、パブロワ、其他二三の踊り手のものをみたきりだが、中々美しく、又不思議な味を持つてゐる事を認めるが、日本の踊りに比べて、その美の味がやはり甘いといふ事をどうしても否定出來ない。たとへば瀕死の白鳥にしても、如何にも瀕死の白鳥の感じが出てゐるし、それが美術化されてゐるとは思ふが、日本の獅子の舞か、出す獅子王の味とは全く雲泥の差がその味なり表現なり、藝術的完全さなりに認められる。瀕死の白鳥の持つ美は奇麗な美である。しかし、奥行がない。噛みしめても〳〵味が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出るといふ譯ではない。夢幻的たら夢幻的なだけである。意識的であつて、偉大なる無意識さがない。その時みた名は忘れたが一人の男の踊り手の踊りには一種の味がたしかにあつた。それは一寸、西洋の味にしては苦がいところのあるものであるが、もしその味があるとしたらその味は、東洋的な味であつた。日本の踊りのあの不思議な變化と、拍子と、形の味には到底及びもつかない。西洋の踊はよく云へば自由であるが、どうも勝手氣ままで、構成がバラ〳〵であるが、日本の踊はその點型式にしばられつゝ、その縛られる事によつて、より自由に美を生かしてゐる。これは能樂以來日本人が傳へられた傳統を持つからであらうが、その型式を持ち、それを幼少から學び學んで、終に自由を得るところに、常人には出來ない神秘感が生れて來るのであらう。西洋の踊りにしても幼少から學びに學ぶのであらうが、型式といふ點ではどうも日本の方が完成されてゐる樣である。私は今日の自由主義な藝術感を持つ人と違つて、この型式を、覺えに覺えるところから生じる藝術的境地を尊むものである。がそれ等の事はとに角として、先づ第一にどうしても西洋の踊りと、日本の踊りとはその持つてゐる美の性質がちがふ。日本の劇の美については、先述の通りであるが、西洋の美はこれに比べて、逆手を用ひず、さりとて、最高の美を持つといふ點には行かない、所作事で最高の美を表出してくれるのは何と云つても吾が能樂をおいて外にはない。其他、色彩、劇の形式、其他の附屬物に至る迄、日本の舊劇の美は西洋の劇、歌劇等より味が遙く、苦がく、洗練され、進んでゐると思へる。

歌劇、踊りの外西洋の芝居はこれ迄まるで見てゐないから何とも云へないが、只翻譯された西洋の古い芝居などをみると、やはり、脚本や物眞似が主のものであつて、型式の美に乏しく美術的なところは乏しい樣に思はれる。だからこれはこれとして、別の價値を認めていゝ譯である。尤も新しい演劇に比べるとその味は甘くもならうが、シエクスピア等の古典は又文學としても立派なものであるから強ち古いからとて、甘いとも云へなからう。が前にも述べた樣に、劇としての本當の美的魅惑はどうも舊劇が多く持つ樣に思はれる。

以上で大體舊劇の美に就ては語つた樣である。次に吾々は、能と、舊劇の事について少しく考へてみやう。

・能及び能狂言と舊劇

能と舊劇の審美的相異は、丁度、本格美術（宋元を源とする雲谷、狩野等又は古土佐等）と、浮世繪との審美的相異に似てゐる。即ち本格美術が典雅、高尙、幽遠、深玄を旨とするに對し、浮世繪の美は卑近、猥雜、現實等の味を美として表出してゐる。この味は又、俳句と川柳との味の相異とも見る事が出來る。ともに實に日本獨自のものであり乍らその味が根底的にちがつてゐる。

で舊劇の美については前項にくどく述べた通りであつて　能の持ち味に比べてその美が低いものである事は本當であるが、しかしこの事

は舊劇の美が、美として低級なものだといふ事にはならない。美の階級として低い地位にあるといふ事は、その美が低級なものといふ事とはちがふ。より高きものがあるといふ事は、直ちに低級といふ事にはならない。低級な美といふのは、もつと〳〵低い美を指して云ふ可きであつて、洗練と、完成とを持つ舊劇の如きクラシックに到つたものを決して低級といふ事は出來ない。

吾々の美的要求は決して第一義的な美のみを要求するのではなく、いろ〳〵の美を欲しいのである。殊に非現世的な第一義的美を要求すれば一方に現實的な華やかな、遊び戯れる樣な美や、肉體やその欲を肯定する樣な美が欲しいのである。個人的に云へば一方のみを求める事も多からうが、民族的や、人類的に云へば、兩方は同じ樣に求められるのである。

扨て、能と、舊劇の型やその他の具體的な相異から來る審美的批判であるが、これはもう人々が充分に批判し、感じてゐる事だし、私の考へもそれ以外にあまり出ないと思ふから煩をさけて省く事とする。

つまり能はどこ迄も象徴的で簡素で、一心一を本とするに對し、舊劇は寫實的で、能に比べては俗な程形を主とし複雜に流ずる、等の事であるが、これ等は皆尤もの定評であつて、動かす事は出來ないが、しかし、舊劇が能に比べてさうであるといふ事は、それだからこそ、其處に舊劇の、卑近美が生じ、無智な感じを美に生かした不思議な味が生じてゐるのだと云へるのである。決して只單に寫實的で、俗で、形式的だといふのとは少しく異るといふ事は認めなくてはならないと思ふ。即ち舊劇は、前にも述べた通り、全然、所作劇であつて、ことごとく、が美化された動作によつて演じられてゐるのである。殺されゝば赤い血絲を出してみせる。この點能とまるでちがつた安つぽさであるが、しかも、その安つぽさは、一種の稚拙な、無智感の持つ美しさを、進んだ藝術的意識によつて認識され、觀照されて、用ひられてゐるのであつて、さてこそ其處には、又安つぽく、一見俗なるが如き、卑近なしかも、洗練されなくては出來ぬ、舞踊的動作があるのである。

吾々は能の高尚を云々するとゝもに、この舊劇の一見卑俗なる踊り動作の型を注意したいものである。其れは能に比べて一見卑俗である。しかし、もう一度よくこれを見る時、それは單なる生の卑俗ではない。それは實に「美」である。訓練され完成された進んだところの美である。それは、能に比べて低く能の第一義的なのに比べては第二義的のものである。しかし、人間の心を別の世界から美に誘ひ、別の世界の美に醉はしめる。觀賞世界の下戸は知らず、人は茶の湯の後には酒に醉ふ事をも欲する。能が「茶」であれば、芝居は、酒であり、粹なる遊興である。

次に吾々は、舊劇の中、能及び能狂言から轉化したものについて考へてみたく思ふ。先づ能から轉化したものであるが、猩々とか、勸進帳とか、船辨慶とか、あの種のものは私はどうも、どつちつかずの味がしてあまり賛成が出來ない。舊劇の踊りの美といふものは前述の通

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りのものであつて、それが充分に、人を醉はしめ魅し去るにはその本領を觀客の上にも生かしぬいてくれたければならない。さうしなければ舞踊としての自己の藝術境には至らないのだから。故に能は能、芝居は芝居なのであつて、その美がまるでちがふのだから、これを交ぜてしまふと、兩方で殺し合ふ事になつて、生かし合ふ事とはならない。例せば勸進帳にとる。勸進帳といふものは歌舞伎十八番の尤なる一つに數へられる大物であつて、これを演じると誰もの好劇家をうならせる事になるのだが、私の見たところでは誠に味の乾いた、常識的なつまらぬものであつた。渾然とした有機的な藝術的な力に乏しく、へんに片づいたやうなものである。其處には舞踊の生命とする卑俗な美の味がなく、濃さ、色目さがない。しかも能の典雅、高尚の味がなく、又深い「心」の力がない。脚本の内容としてはもとよりつまらぬセンチメンタリズムである。(他の舞踊だつてさうだが)何だか意識的に寄せあつめた造りもの丶感じで、生れ出たもの丶感じではない。長唄の曲としても決して、味のある名曲とは云へない。しかし芝居よりはまだ唄の方がい丶。

どうも半分、活歴を見てゐる樣で、所作と科とがチリ〲で融合してゐないから舞台が有機的に充實しない。團十郎のでも見たらそれは役者の力で可なりに見られるかもしれないが、しかし、團十郎が他の狂言をしたらやはり勸進帳が下らなく見えやう。私は能(安宅)では一度しかみて居ないが、まるで芝居の比ではない。山伏の裝ひか丶るのを義經の止めるところなどは、全く舞台に充實し切つて見せつけぬ程であつた、能は能である、芝居は芝居でたければならない。

尤も、能から轉化した舞踊の中でも、その轉化のされ方によつては可なりの價値の相異が生じる事も事實である。即ち、能風に演じるのと、能からヒントを得て、全然、踊りにしてしまつて、只所々に能を暗示するといふ樣なものは、その能を暗示するといふ事に認識された一種の稚拙感や、見世物感の味が出て、又一寸面白い事もある。道成寺だとか、獅子のものとかはそれであつて、これ等は立派に歌舞伎になつてゐて、卑俗美には一寸乏しいがその踊りの基調はどうしても舞踊の美のそれである。がこれ等も結局舞踊の踊としては上乘のものとは云へないであらう。舞踊の踊りとしては、やはり、供奴とか、勢獅子とか、三社祭とか、ドンツクとか、鳥羽繪とか、六歌仙ものとか、端唄風のものとかあ丶いふものが最も、その美をよく發揮してゐる樣に思へる。

能の狂言を踊りになほしたものも、同じ樣な理由でどうも造りものといふ感じがして、生れたものといふ感じはしない。しかし、狂言は能とちがつて、ずつとその審美的内容が舞踊に近いものがある。否一脈相通ふものがあると云つてもい丶。即ち狂言の味は丁度、足利期又は鎌倉期の古土佐の風俗畫卷をみる樣な味であつて、舞踊を浮世繪の味の祖先となる可き一種の審美を藏してゐるのである。

狂言の美は、卑俗ではないがしかし、決して高尚、典雅をねらつて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はゐない。それはやはり民族的であつて、野趣に富み、諧謔的であり現實的である。その動きは、舊劇の樣に細かく複雜ではないが又、卑俗的ではないが、能の樣に動きの少い事はなく又「心」を主にしてゐる事もない。さうかと云つて中途半端のものでなく、一種古淡で、飄逸で、稚拙でしかも古い明朗の美を持つてゐる。この味はやがて、繪卷物が浮世繪と通じてゐると同じ審美的理由で舊劇と通じてゐると見る事が出來る。出雲の阿國が、念佛踊が人々に飽かれて來た時、直ちに猿若といふおどけをどりを入れたといふ事があるが、このおどけは正に狂言風のものであつたに違ないと思はれる。

だから舊劇の踊りが、狂言を取り入れる事は能を取り入れる程不合理とは云へないのだが、しかし、既に舊劇は狂言ではなく、狂言は狂言、舊劇は舊劇、と各々世界が定まつてゐる上に、舊劇に獨自の舊にい、踊りの世界があるのだから、無理して迄狂言の眞似をするには當らない。尤も前うけの爲めなら仕方もないが、それは別問題となる。がとも角舊劇程、無理でないだけに物によつては相當に面白く見られるものがないでもない。

能と舊劇の事はこれで一と先づすまして次に、舊劇の將來について考へてこの論を終らうと思ふ。

舊劇の將來

舊劇の將來に就て私は悲觀論者である。舊劇が今後何程位迄持續するか、それ等の事については全く私には解らないが、遲かれ早かれ、舊劇は滅亡するものと私には思へる。舊劇の持つ審美を、新しい「心」で新しく味ひそれをもう一度新しく生かす、「新しき舊劇」といふものを、想像出來ない事はない。自分にもし、文藝創作の才能があるならば、そんなものに筆を染めてみたいとも思つてゐる位である。そしてもし、誰れかの手によつて、本當に生きた、さういふものが生れるならば、今後の世紀に於ても、我が舊劇の審美は、變化はしても生きて行ける事だらうと思ふ、その事は喜ばしい事である。しかし、あの完成された、本來の舊劇の美を思ふ時、新しく生れるさうしたものが果して昔のそれと對立出來る程の藝術的な力を得る事が出來やうかと危ぶまれる。

しかし、舊劇の持つ美や、所作や其他は決して徳川期だけの日本人のものではなく、徳川期に來て、やうやく熟し、完成されたものであつて、本來日本人の所有なのであるから、何等かの形に於て、今後も生きて來ないとは斷じられない樣にも思へる。しかし、又一方今後、日本の趣味が多く歐風のそれと變つて行く事を思ふと、純な日本の趣味は段々と日本人の頭から遠ざかり、民族の審美的内容迄が、だんだんと歐化され、混血兒的のものとなつて行く事も否定出來ない樣に思はれる。日本の踊りの拍子や、間や、振り方など、全く民族の本能的なものであつて、これ等は他の民族性とゝもに、底深く生き殘るとは思へるが、しかし、まるで性質のちがふ歐風の審美をも、直ちに迎へ、喜

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に解し、直に行ふ事を見ると、今日の日本民族がそれを欲し、それに同化せんとする事も一つの同じ本能の様に見られる。このまるで相反するが如き、ちがつた審美が、果して本當に美的に調和するものか、混血兒といふものがあるのだからそれを以て調和とすれば、調和と見る事も出來るが、とも角も調和してもしないでも、今後の日本には歐風の審美が充分にまざり、舊日本の審美は純粋には生きる事が出來なくなるといふ事は確の事であらう。或る論者の様に、それでこそ、新しきそして世界的なる日本趣味の基礎が生じるのだといふ風に考へる事も強ち間違つてはゐないが、そして日本人種の藝術的天分は永い後には又何か素敵にユニークなそして最も進んだる、新しき日本趣味を完成するかもしれないが、その事は私には分らない。只解つてゐるのは、たとへ、過渡期だからとしても、あまりにひどい今日の日本人種の趣味である。それはあまりに「生」きたところのなく、あまりに概念的である。古き日本の審美は今日に於て既でに大半死んでしまつてゐる。歐風のそれはまだ充分に日本の本能となつてゐず、内から生きてゐず、借りものである。やがて生きる時が來るであらうが、今日の日本人種は先づ、審美に於て又は趣味性に於ては死せる民族である。

かゝる時、吾々少數のものが、懷古の情にそゝられるのは當然と云はねばならぬ。或る人々は、懷古に退嬰的也、今日を惡しと見るならば、進んで將來の美を建つる事を思へと云ふかもしれない。しかし、その語は本當に美を知つた人の口からは出にくい、概念的な言である。吾等の懷古は「美」を愛するから、美を慕ふからの事である。そして、本當の美を愛するならば、美しかりし時のいろいろを愛し、欲望し、出來るだけ貪欲にこれを味ふ可きである。この事は決して只に古を懷しみそれに耽る事ではない、實にこの事は、又一つの民族の意志であり、本能である。人々が氣のつかぬ中に、少數の人々は、よかつた昔のものを味ひ、體得し、やがて何かを、將來に殘すであらう。もし今日少數の懷古者がゐなかつたら、日本民族はおのれの傳統を失ふ事にならうと斷言しても過言ではない。徒に歐化に耽るものは、時代の子である。時代の子から、古くさいと見られ、退嬰的と見られるものこそ、もつと進んだ、もつと將來の子であるかもしれない。

が氣焰はこの位にして、本論にかへらう。で、とも角今日の日本は審美的に死んでゐるのであつて、舊日本の審美は大半忘れられてしまつてゐる。底に生きる民族性はいつか又華咲く春に會ふとしても、それは餘程變つたものとなる事は否定出來ない。或る見方からすれば、今後の人類の進み方には、差別を無くさうとする方向を感じられる。混成合一の一つの世界的なものを生まうとしてゐる様な氣息をも感じられないではない。交通の四通八達、世界の距離の縮少、世界への雑居國精觀念の減少等の傾向はこの事を語る一つであらう。がしかしそれはもしさうあるとしても遠い〳〵先きの事である。がともかくも、今後の日本の審美が、内から歐風のそれの方につたものとなる事だけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は否み得ないと思はれる。

がこれ等の多少高遠？な理由からでもなく舊劇ももう足元が大分亂れて來てゐる。先づ俳優の問題である。今日の俳優で本當に舊劇の美を舞臺に生かす人は誠に少くなつてしまつた。これは時代の力で如何ともする事は出來ない。舊劇の美はやはり、昔の、役者氣質又は小屋物氣質からでないと本當には生れて來ない。どうもあまり學問をしたり、道德家になつたりしたのではあの味は出し悪い。今日は俳優組合が、協會と更まり、役者が何々委員長などとなる世の中である。

が俳優だとて一個の人格である以上、これの人間的向上を望まないといふ事は正しい事ではない。又社會に、さういふ昔の樣な無智な階級なり、生活のある事を、希望するといふ事も、當を得た事ではない。昔は自然にさういふ人達が生れ、さういふ生活が生じ、その中に生甲斐や誇があつたのである。今日はさうは行かない。今日は自覺の時代、意識の時代である。俳優諸子は自己も立派な藝術家である事を自覺し、意識して、それにふさわしく生きる事を學び覺えるのである。これをいけないといふ事は正に社會問題上から云つても非人道的である。だから、今日以後、昔の役者といふものは、もう生れ得ないのである。尤も下まわり連には無自覺、無賴の人々もあるが、これは又あまりに藝を輕じて、昔日の樣な藝への熱はまるでない。かくの如く、俳優が社會的に向上したと一緒に、舊劇は墮落したのである。

だから舊劇の美は無智によつて、生かされたものと云へる。しかし注意す可きはその「無智」は、社會的にであつて、決して藝術的にではない。智識的又は概念上の無智であつて、藝の實感上の無智ではないといふ事である。それのみか、彼等の稱嘆すべき、藝の上の叡智はその社會的無智から來てゐる事、さういふ生活から自然と滲み出るところのものであつた事を忘れてはならない。たとへば荒事の隈取り一つにしても、學問あり品行方正の君子にはどうしても生み出せぬ叡智である。

で、かくの如き無智的生存は社會道德的に云へば、望ましからぬ事である。舊劇の藝術的叡智が、かゝるところに生ずるものならば、それを、假の美なりとして渇仰する事は社會的には勿論、藝術的立場からしても間違つてゐるのではないかといふ考が生じるかもしれない。しかし、美は美なのである。裸體畫も元を正せば、淫猥な動機から生れてゐる。しかし美は美なのである。

只今後の社會にこの美を求めたり強要したりする事は當つてゐるとは云へない。さてこそ私は、舊劇はこゝからも滅亡に瀕るのだと云ふのである。

只こゝに一つの問題は、更に進んだ叡智を持つ俳優が生れて、これ等の問題を充分理解し、更に意識して無智の味を生かすならば如何といふ問題である。もし今後も猶舊劇の味を生かさんとならばこの法によるの外はない。そしてそれは又別個のよき味を出す事となるかもしれない。しかし又一面、無意識に生れたあの渾沌とした、有機的な味

分析的な味はどうしても或る點迄失はれるであらうと云ふ事も動かし難い事實だと思へる。

のみならず、型もだん／＼と、くづれて行く事であらうし、第一に昔の樣な、藝の修業といふものがなくなつてゐる。これ等の事は、又劇場音樂の上にも云はれる事で、既に、古典はだん／＼と亡びて行くばかりだし、却つて榮へてゐる唄や淨瑠璃も、古風の味は流行せず、新しい、きれい事の片づいた味が飾りつけされる樣になつてゐる。今假に十郎にもしもの事があつたら、本當に踊りを踊らせてくれる長唄といふものは無くなつてしまふであらう。

後にもかくか、もう今日の見物で本當に、歌舞伎劇を見る人は殆どなくなつてしまつた。見物者や、劇通はあつても、本當に歌舞伎劇の美の味を解り、それに醉へる人は誠に少い。今日は大々としたものは解らない。けれんかきれい事か、片づいたものでないと、美しいとは思へない世の中になつた。本當の審美觀を内に持つてゐるのでなく、概念的なのだから、人がきれいだと云ひさうなものでなくては恐ろしがつて奇麗だとは云はなくなつてゐる。こんな譯で、役者の藝でも、如何にも、腹藝ですといふ事が人に解る樣にやつたり、自分自ら熱狂した樣にやつてみせるのでないと、藝術的だと人が思はない。何でも耳や知識で見て、眼で見る客がなくなつたのである。

で、役者の方はさうだが今度は劇場の問題である。歌舞伎は古い芝居小屋を必要とする事は前々項で說いた通りであるが、あゝいふ形式は火事にあぶないし、サラリーマンには不自由だし、今後月給取のみの日本人となつた時には一層不自由だし、第一、新時代の趣味に應しくない。で椅子席となり、食事は食堂で、出方など、いふ邪魔な奴は廢止し、すべて簡易生活を旨とする。この事は、「歌舞伎劇」の爲め以外の一切にとつて非常に結構の事である。只歌舞伎劇にとつては甚だ結構の事ではない。で我が歌舞伎座などは、その中間をとつて、何となく變てこた物を造りあげたが、あゝなると又一層に困る。あの和洋折衷は誠に醜い。だるくて眠くて、舞臺が大き過ぎ、締らない事、おびたゞしい。

一體今日の劇場は只舞臺を大きくすれば、えらいのかと思つてゐる樣であるが、それはこけおどしと云ふもので、舞臺は一つの額縁で、繪の寸法より大きな額ぶちを用ひたら、繪の持つ、放射力は外廓から締める力を失ふから、力が放射されたきりになり、間ぬけのものとなつてしまふ。人間の大サハ大てい寸法の極まつたもので、その範圍で、見得を切るのである。どんな名優だつて國技館やサワラの砂漠の眞中で見得の切れるものではない。近頃の舞臺はそれ程に大きくはないかもしれないが、どうも人間の踊るにはちと間のびがしてゐやう。少くとも歌舞伎の樣な、美術的なものを演ずるには。

先にも述べた通り、歌舞伎にとつては劇場は一つの劇的要素なのである。その要素が失はれるのである。これを以てしても、歌舞伎の生命は既に失はれてゐるのである。これ等の事も、前述の俳優の性格的問題との問題とゝもに致方のない事である。[illegible]、[illegible]にかけた圖ではない

のである。が今の世に舊劇を舊劇らしく演じなくとももう結構なのである。それより火事のない方がいゝし、堂々たる西洋建築がふえる方が都市の美觀とやらにもいゝのだし、又舊劇だけのために、今後の日本人を、座らしめる事は怪しからん事なのである。舊劇は今になくなるのである。そのために劇場や見物が犠牲となる必要はない。すべてが新時代にうつるのである。

だから、吾々は、劇場の、歐風化に對して不平を云ふ權利はないのである。只舊劇の爲めに惜しいなあと思ふだけなのである。せめて、舊劇がまだ相當によく演じられてゐる事を、感謝し、外の不平は我まんす可きである。趣味と實益とのけんかでは、實益が勝つのが世の定法である。地震の最中に茶を立てゝゐる譯には行かないのである。

次に見物の問題である。見物の事に就ては一寸先にもかいたが、今後の日本人はます〳〵その趣味が舊日本から離れて行くと見なければならない。今後育つ若い者には舊日本の事に就ては知識はおろか、その審美さへ解らなくなつて行くと思へる。で舊劇を見る客はます〳〵なくなつて行くであらう。先達て、羽左右衛門が暫を演じた時、腹出しや鯰坊主を見て、後にゐた三人の令嬢たちは始めから、ゲラ〳〵笑ひ通しであつた。まあ、とも角も、可笑しなものには相異ない。外國人なら正に笑ふ道理である。又、これ等はおどけを主としたグロテスクの美であるから、笑つて見るのは、泣いてみたり興奮してみたりするよりは當を得てゐるのだが、ゲラ〳〵と輕蔑し切つた樣に笑ふのは少しおかしい。異人でもそんな風に笑ふのは餘程美的に無教養な人間だけだと思へる。つまり、その笑の中には西洋文明への渇仰と、西洋に對する恥かしさ(祖國の野蠻さの)新時代の誇といふ樣なものがあると私には感じられたが、これも時代で致方のない事である。

がこれ等は、無智な婦人(學問はあるだらうが)たちの事か、今後の一般社會の傾向として、美術よりは文藝又は思想的な事が盛になるといふ事はどうも否定出來ない事實の樣である。勿論、美術も榮へる事であらう。しかし、それは本當に味はれるといふよりは議論され、話されるために見られる傾向になりはしないか、これは多少奇警の言の樣であるが、よく今日の社會の傾向を味ふ事の出來るものなら左こそと肯づく事の出來るものがあると私は思ふ。つまり、今後の社會に、昔の宗教の代りを努めるのは思想、又は文藝でなければならない、舊道徳や、舊宗教はもうだん〳〵と影をひそめてゐる。又それと同時に今後の世界は自覺、意識の世界であつて、今迄意識しなかつた事を意識し、識別し、自覺するのである。で當然今後の人類には、社會問題が一つの大きな對照となる。

で今後の人類はその問題を解決す可き時代に到達してゐるのであつて、これ等の事は、美術や趣味生活とは反對の立場のものである事が多い。人によつては兩者は兩立すると云ふが、私の感ずるところでは、美術の最も高き時代はもう過ぎた。何百年の後は知らず、今の人類の進化の一區切り迄にはもう美術は再び昔日の盛を見せまいと思へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るのである。がこれ等の事は本論ではないからここでは論じてゐられない。只、今後の社會はどうも、美術や趣味よりも文藝が盛となり、「味」の事や「美」の事はあまり深く要求されまいと思はれるのである。で、美や味を主とする、舊劇はます／＼解らなくなる、單に舊劇の美の味が解らないといふのでなく、美そのものが、段々、今後の青年には解らなくなる。「美」とか「趣味」とかいふ言は昔より云はれるであらうけれど、觀念的に言はれゝば云はれる程、その實感は失はれて行くと思へる。

かその代り、いろ／＼の人間の感情や、「心」の問題に對しては昔の人よりずつと敏感になり、批判を持つ樣になつてゐる。つまり美術よりは文藝の時代である。かくて、今後の芝居は、「美」を内容とするものよりは、文藝上の價値を内容とするもの、即ち新劇が榮える事とならう。尤も、當分可なり相當に永い間無智階級の方が多いと見なければならない。しかし、今後の無智階級は、趣味性に於ても無智階級である。其處には傳統的な都會人としての洗練もなく、又社會の落附きもなく、つまり野蠻階級なのである。だからかゝる階級にも、今後舊劇は一層解らなくなる。でこれ等の人々の爲めには、安來節、鐵劇、人情劇、低級映畫等の如き傾向のものが當分榮える事であらう。

又もし、強いて、有識階級の中に、劇に美が求められるといふ場合を考へるとすると、やはり舊劇はもう、役には立つまい。今日純粹映畫といふものが問題になり出したが、これ等は、今後の人達には持つて來いの鑑賞品であらう。何か構成派又は表現派等の樣な傾向のもので、形美ばかりに訴へた、舞踊劇的なものが生れるであらう。

尤もそれ等が生れるのはさう遠い事ではなく（或はもう生れてゐるかもしれない）それと同時代にまだ／＼舊劇の見物は澤山にあり相當に舊劇も榮へるだらうが、要するにそれは時間の問題に過ぎない。時代は變るのである。でかくの如く、舊劇はいづれの見地よりするも、亡ぶ可き機運に接して來てゐるのであるが、又中にはこの舊劇を、時代に應はしく改良して行つてはといふ說をなす人もある。が、これは愚である。舊劇のよさは、舊だからいゝのである。時代に合せたら舊劇の味は死んでしまふ。亡びるものは、美しく亡びさしたがいゝ、時代に合はしたら、その時もう舊劇は半死になるのである。そんな事をしなければまだまだ當分は丈夫である。

が、かく、舊劇が亡びる事ばかり云つてゐるのは景氣が惡い、何んとか一つ、どうせ亡びるにしても、亡び際を立派に、もう一度、正しく本格な舊劇を見る工風はないか、そしてもしそれが出來るなら、舊劇の壽命を相當に永く保たせる事の出來る方法はないか、これに對して私は、一つの空想を持つてゐる。それは、新古典小劇場とも云ふ可き出來る丈け純粹の德川期の芝居小屋を建てる事である。がそれは、只に小屋だけ建てるのではない、會員組織にでもして、舊劇を保護する意味で、少し高い會費をとり、名優諸子に舊劇のために、あまり境界もない舞臺で出てもらふ。又は名優諸子も會員になつてもらつ

て、帝展の樣に、その藝を充分にみせて貰ふ。つまり一寸「能」の樣な風になるのだが、そして、出方、辨當、其他一切を出來る丈け昔の樣にして、充分に舊劇の美が生きる樣にする。

が、かうなると、舊劇は一つの自覺を持つた、高級藝術的味覺を持つて來る事は爭へない。つまり先に述べた樣な、無智の味はどうしても乏しくなる。何となく、一つの研究といふ樣な、學校風なところが生じる。しかし、それはもう致し方のない事である。今更舊劇の俳優に、無智を求めてもそれは愚の外の何物でもない。只、その無智の美を、今度は更によき美の上の智惠を以て、自覺し、味識出來る樣になつてもらふ事が大切なのである。それより外に舊劇の美を、もう一度本當に生かして見る事は出來ない。

私は一介の畫工であるし、生來の物臭太郎なので進んでこの事をやる力もなし、又機運も持たぬが、誰れか心ある人々によつてこの計劃が實行されたら面白からうと思ふ。その時は少々會費は高くとも喜んで會員の一人になるつもりである。しかし、これも、一つの夢想に過ぎないかもしれない。知識的になつたとは云へ、まだ〳〵芝居内の社會にはいろ〳〵な面倒が多いと聞く、餘程の社會的勢力の樣なものゝある人がやるなら知らず、中々まとまる事は難かしい事であらう。只私としては、今後の舊劇はその美を意識し、自覺して、よくそれを研ぎ、練く事のみによつてその生命を續け得るといふ見地から如上の空想をし、それを述べたのである。それにつけても文樂座の燒失は惜しい事であつた。あそこへ入ると、全く小屋から舞臺から丁度いゝ大さで、全體があつさりと有機的に人形芝居の美であつた。人形と人形つかひと、太夫と見物と、小屋と皆一つのものであつた。文樂も落ちたとは云ふものゝ、舊劇程には近代化されてはゐなかつた。これは大衆を相手にしたり、ジヤナリズムにあまり煩らはされなかつたからであらう。獨り淋しく、しかし、古調を守つて、只々昔の樣にやつてゐた故もあらう。(尤もこれは比較の話で、その道の人に云はせると文樂中々世相に媚てゐる由)がこれは全く無自覺の世界の美である。燒失とゝもに、又一段凋落の影を濃くしたかの感があるがこれもいつかは亡びるであらう。只私は、こゝではあの小屋や、藝を思ふにつけ、これを味識し自覺して、あゝいふ風のものを造つたらと思ふのである。

が舊劇も、文樂も亡びるものは亡びるのである。しかし、亡びたからとて、それが、惡いもの、つまらぬものだと云ふ事は出來ない。亡びたものが惡いか、亡ぼした時代が惡いかそれは人々の判斷にまかせればよろしい。吾々はしかし、今日まだ〳〵中々いゝ舊劇を見られるだけでも喜ばねばならない。吾々がそれを喜び、又その失はれる事を今は只惜しむより外ない、否もう一つ吾々はもし出來れば、今見らるる中に出來る丈けこれ等の味を多く味ひそれによつて、己れの中なる美を肥す可きである。それ等は何かの形で後に殘るであらう。人々の知らぬ間にそれが再び生きる時が、何で無いと云へやうか。終りに舊劇が出來る丈け永生きしてくれる事を望んで筆を擱く事としやう。

昭正二年九月十八日脫稿

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

編輯だより

◇本年も餘日いくばくもなし。いろいろの意味で我日本人が本年ほど思想的に深く這入つたことはあるまい。大正八、九年マルクス學が旺になつたときの狀態とは違つて、どうやら人間に洞が一つ出來た感じがする。一面には生活苦がひしひしと迫つてくる。

◇秋はとりわけ美術の季節。神戸氏の「山陽」物と「竹田」物の賣立ては近來の一盛觀を呈した。山陽の筆蹟は風格に巾がなく、氣品に奥がない。竹田ものを一瞥しては「一體畫道は進歩しつつあるのか、退歩しつつあるのか」と深く考へさせられた。

◇ことしは創作壇が殊のほかさびしかつた。どこの大家もつかれが特に目に立つて來た。そして新進の人々もあまりいい作を出さなかつた。さて我々編輯者は此際いかに考ふべきか。そして「時代」はどう進んで行くかを靜かに考へて見たい。

◇世の經濟恐慌、生活不安はマルクス「資本論」の翻譯をいやが上にそそり、玆に一擧十萬を賣盡さしめ、更に數萬部の增刷を重ねしめ、カウツキーの「資本論解說」また洪水の如く全國に推しひろがる　そして社會科學刊「マルクス主義全解」再刷を斷行す　現代思想の現勢を見るべし。

◇現代日本文學全集十一月配本は「武者小路實篤集」である。十二月配本は「幸田露伴集」とする。露伴が一代の文豪であることは玆に說くまでもない、そして一代の名作たる「風流佛」、「五重塔」、「一口劍」、「名和長年」、「對髑髏」、「運命」の各雄篇等悉く網羅す。殊に氏の最長篇にして構想の雄大なる「風流微塵藏」を收容することの出來たのは嬉しい。

◇幕末の偉人「海舟全集」を本社より發行する。大西郷と共に我が大江戸の二大恩人である。「封建日本」より「世界の日本」への恩人である。彼は哲人にして詩人、大外交家にして大軍政家であつた。そして濟俗の如き生活裏の所產は必ず我々に何者かを與へるだらう。一讀すれば胸がすつきりする。

◇「改造」の懸賞小說應募期は本年十二月末日限りです。每度も繰返すことですが、原稿は斷じて返還しませぬからそのつもりで。それから楷書で綺麗に認めて下さい。住所氏名と忘れないやうに。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	五拾錢	参錢
半ケ年	参圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

(定價五拾錢)

昭和二年十一月十八日　印刷納本
昭和二年十二月一日　發行

東京市麹町區内幸町一ノ三 幸ビルヂング
編輯兼發行人　山本三生

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舎

東京麹町區内幸町一ノ三 幸ビルヂング一階
發行所　改造社

振替東京八四〇二
電話銀座 營業部 四五五八 五〇四六
編輯部 一七三三 五五八

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小兒科
X光線科特設
隔離室完備
入院應需

瀨川小兒病院

院長 醫學博士 瀨川昌世
東京市神田區駿河臺御茶の水
電話神田25・四四一番・四四二番

醫學博士 佐野彪太

腦脊髓神經病

佐野内科病院
東京神田區駿河臺（明治大學筋向） 電話神田三四八〇

外科
內科
慢性臟肺外結核科
整形外科
泌尿器科
X光線科

院長 醫學博士 松永琢磨

松永病院

診察 前九―十二 後三―六
東京下谷區省線御徒町驛前 電話下谷一三三〇番

腦溢血
腦梅毒
腦膜炎
不眠症
腦脊髓神經科專門

醫學博士 佐多芳久

虎の門 佐多病院

診察午前 入院隨時
東京芝區明舟町一九 電芝一九一五・二七二四

產科
婦人科
女子泌尿器科
小兒科

院長 醫學博士 大石貞夫 副院長 醫學博士 近江湖雄三 小兒科 醫學博士 藤井秀旭

中洲病院

東京市日本橋區中洲（ナカズ） 電話浪花 四〇九三
電車（濱町中之橋）下車

耳鼻
咽喉氣管
食道科

診察 前九時より 後七時迄
醫學博士 鍋谷傳次郎

鍋谷耳鼻科院

東京京橋區桶町十（市電中橋廣小路下車）
電話京橋（五六）六〇七番

肥胖病
血壓亢進症
糖尿病
心腎臟病
X光線科

醫學博士 倉上由一

倉上内科

診察 自前八時 至後一時
東京赤坂區青山北町四の六六 電話青山二二七六番

神經衰弱
腦病
精神病

院長 ドクトル 齋藤紀一 醫學博士 齋藤茂吉

青山腦病院

電話青山六五二番 四谷六七二番
東京赤坂區青山南町五丁目（市電明治神宮前）
東京府下松澤村松原（玉川電山下下車）

淋病專門
特に慢性淋病

院長專門 醫學士 管野憲一郎

東明堂醫院

東京市京橋區南鞘町二高島屋向通
市電京橋又は中橋廣小路降

內科
神經科
腦脊髓科

醫學博士 小峰茂之 醫學博士 森牛兵衞 醫學士 鈴木雄平 醫學士 小峰茂三郎

小峰病院

王子腦病院 院長 小峰茂之
東京府下瀧ノ川市電飛鳥山線通
電話小石川八二〇・二三〇〇・王子一〇四番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

肺結核の治療とパパヤの果汁

國尾多助

結核病!! 是れは最早個人の問題ではない、國家的の重大問題である。日本國民の經濟的最大損失は、地震や火事や颱風や乃至支那の排日や滿蒙の地位喪失等等ではないのだ。結核の侵害による損失が最も重大で巨額なものである。

七千萬人の同胞中で一ヶ年幾人の結核死亡者を出すかに就て內閣統計官であつた二階堂保則氏が示した計數によると明治四十四年から大正五年迄の五ヶ年平均數に於て、一ヶ年百萬人に就て四千二百三十八人の比例であつた。七千萬人とすると實に二十九萬六千六百四十人の死亡者を出してゐるわけである。而かも是れは醫師の死亡診斷書を以て屆出たものによるもの丶數字で、醫師が結核とせず其他の病名で屆出たものが尙ほ多數存することは言ふ迄もない。故に實際一ヶ年結核病による死亡者數は三十萬人を上るも決してそれを下ることはない。さうして此の恐る可き結核病の豫防撲滅に對しては、政府も個人も注意し努力し銳意此の病害から脫しようとするのであるが、此の統計數字から以後の各年に於て、結核による死亡率は增加する一方で少しも減少の傾向を示さない。歐洲列强に於ては、防滅を講じた爲め次第に減少しつ丶あるのに吾日本のみは增加を示して居る。死亡者數のみが三十萬人もあるのだから、罹病者數は少くとも是れに十倍すると見ても大過はない。即ち日本には平常三百萬人からの結核病者がある次第である。三百萬人の病者が疾病休業により勞働生產力を減殺されるとせば益し容易ならぬ損失で假りに一人一日勞働生產力一圓を失ふものと見ても一ヶ年の喪失數は實に十億九千五百萬圓となる。若し夫れ此の結核罹病者等が療養に要する所一日一人平均一圓なりとするも、此爲め費す所は十億九千五百萬圓となる。故に日本國民は結核菌の爲め奪取し去らる丶所の物質上の損害は一ヶ年二十億圓を下らないことになるのである。以上は眞に概算に過ぎない、近時肺結核の益々猖獗の勢を逞うするより考察し、而して其精確なる罹病者數を求め、是れが爲め其喪失する富を算出せば、必ずや以上の額に數倍するものがあるに相違ない。內輪に見ても恐らく每年五十億圓くらゐは下らないのではあるまいか。一ヶ年五十億とせば、十年に積算せば五百億圓である。是れは實に戲談事ではない、吾國民は畏れても亦怖れざる可からざる次第である。

多數の人々を苦惱させた上に、社會的安寧をさへ脅威し、あまつさへ五十億の富を奪ひ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

去るとあつては、何物よりも此の國民の勁敵を禁戒し豫防し驅逐し絶滅せねばならぬ。宜なり我敬する改造社では九月號に於て之れに關する各專門大家の說を輯載し、以て民衆の啓醒を促されたることや。

今各專門大家の說話を精讀して、其の歸結する所を考察すれば、

一、結核病は年々蔓延しつゝあること

二、結核は亡國病の位置を占めつゝあること

三、結核は決して恐るゝに足らぬこと

四、適當にして完全に而して忍耐氣力ある療養により治癒せしめ得ること

五、療法としては藥物療法、理學的療法等總て有效の度低く自然榮養療法が最も效驗の顯著なること

六、豫防は病菌より逃避し傳染を防ぐ方法は寧ろ效果少く、病菌中に生活し其侵入を受けても之れに抵抗し之れに打勝つ丈けの强健なる體力を養ふを第一義とすること

七、病菌の侵入に打勝つ方法は適當な榮養補給により身體の强健を常時保持するに在ること等である。

即ち結核病に罹つた者としては自然榮養療法を以て之が治癒を求め未だ結核に罹らない人々としては病菌に打勝つ可く常時强健を保持すること

以上によつてのみ、此の國民に悲慘な痛苦と莫大な損失とを與ふるところの結核病は所置し得るのである。此の二つの方法を個人が講ずることに依つてのみ國家民生の最重要問題たる對結核策は解決せられるのである。

果してさうだとすれば、第一に結核病に罹らぬ方法として、病菌に打勝つ可く常時强健を保持することは如何樣にす可きであらうか。それは一般衞生保健法を守るの他に道はない。

一、正規の生活、即ち規律を正しく起臥すること

二、運動强練法の實行

三、榮養補給に注意すること

四、信念ある强健な精神を涵養すること

等を主としてゐる。手短かに言へば感冒にかゝらぬやうな用意を平常に於て、やつてゐることなのである。昔しから『弱みに付けこむ疫病神』といふ諺さへある、結核菌はいつも此の人の弱味をのみ覘つて居る。弱味のないやうに注意すること、それが結核の唯一豫防法である。結核菌は吾々の身邊何處にでも居る、濕潤せる空氣の中にさへ居る。まして人ごみの室内などには何時も充滿して居る、それを恐怖して居つては、人間は全く社會生活を營み得ないのである。故に弱味なきやう强健を圖るより他に途はないことになるのである。

第二には既に結核に冒された人々は、自然榮養療法によつて治癒することが效果顯著だといふ、其自然榮養療法とは何ぞやといふことになる。

自然榮養療法とは藥物等の力をからず、自然力を賴み、自己の天賦の自然良能を助け

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、榮養の補給により治療するの方法である。即ち

一、溫和なる陽光
二、新鮮なる空氣
三、平靜安穩なる精神
四、榮養の補給

之れで病菌を征伐屈伏させるのである。斯くいへば極めて簡單、誰れでも治癒し得るやうであるに、世の中の實際を見ると、決して爾かく容易に治癒せしめることが出來ないのは何故であるか。

勿論結核は治癒し易き疾病である。本人に何等自覺症狀がなく、唯だ少し風邪引きが長過ぎる位な感じだけで、眞物の結核が完全に治つて居る例は非常に多い。多數解剖學者の一致せる意見によれば、結核病でなく他の病氣の爲に死亡した者に就て屍體解剖を行つて見ると百人中九十人迄は、肺部に結核病の治つた跡の瘢痕を殘して居る、故に結核病は百人中の九十人迄は自然治癒を取り得るものであることを證して餘りがあるのである。それほどまでに治癒し易き結核病が、何故に世の中の人々には苦勞の種となるのであるか。新鮮なる空氣、溫和なる陽光、それは無代價で誰れにでも容易に得られる。信念ある確固とした精神、之を得るのは幾らか容易でないが、併し無代價である。榮養の補給は無代價では得られない。歐洲の諺にも『結核の治ると否とは財囊の重いと輕いとに因る』と言つて居る。蓋し財布が重たくて金があらば榮養品が十分に得られ、反對に金がなければ榮養品が得られない、榮養品が十分に供給せられるならば結核は治し、反對にそれが供給せられぬ時は結核は得らないとの意味なのである。まことに其の氣味がないとは言はれぬ、榮養品が治られると否とは治癒の過程に於て大なる差異を生ずるのは爭はれない事實である。併し榮養の補給といふことは嚴正なる意味では、單に榮養品を澤山に口から攝取するといふこと丈けではないのである。寧ろ口から取り入れた榮養品が十二分に消化され吸收されることを意味するのである。故に日新の學說から言へば歐洲の諺は左の如く改められなければならぬ。

結核の治癒すると否とは榮養食物の消化吸收されると否とに因る

斯う改めて考へる必要があるのだ。非常に微しても、金の有り餘つて、榮養品とし言へば金に糸目をつけないで購求し、それをシコタマ食用する人でも結核病の治らない富者もあり、反對に金が乏しくて、思ふやうに榮養食品が買へないでも、立派に結核の治つた貧者もある。元來人間の身體は極めて靈妙に出來てゐて、榮養は或一定量を受入れて身體の養とし、一定量以上の有り餘つたものは、ドシく糞として排出してしまうのである。金にまかせて無暗に食したからとて、其大部分は消化されず排出されてしまつては、身體の榮養としては何等其用をなさないのである。少し食しても其全部が消化吸收されるならば、それで榮養は十二分に保持せられるのである。近頃醫學博士二木謙三博士が、一食主義又は二食主義の養生法を說いて居られる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

博士の說に從へば、十二三貫の成年男子は、一日茶碗に米飯四杯、肉菜一皿で澤山、それ以上は剩餘過分であると言ふことだ。其代り其條件としては、十分に咀嚼するといふことが附加されて居る。これが攝取食物全量を完全消化吸收させる主義なので、完全消化吸收せらるるならば、二木博士の指示分量で恐らく何等の差支はないであらうことは、彼の汽罐の完全燃燒式に見ても分ることだ。人間の身體は畢竟するに蒸汽罐と何等異らぬ。食物といふ燃料を口から供給し、體內で燃燒させ、其發生する溫熱（カロリー）によつて生活の車たる五體を動かせて居るのである。其の燃料が完全に燃燒さへすれば、石炭は案外小量でも汽罐を動かせることが出來るのである。されば榮養食品は攝取如何を問はず、其果して能く完全に燃燒するや否やを見る可きものである。

食物が體內で完全に燃燒することが、結核病治癒の上には最も必要な事である。燃燒するや否や、それが、やがて結核病の治る治らぬに影響するのである。けれども此完全燃燒といふことは非常に困難な問題である。特に病者に取つては、これは頗る困難な事なのである。

何故かといふに、一旦結核病に冒された人は、第一に來る症狀は主として食慾減退である。食慾減退は消化機能の衰へたので、所謂消化器を害せられたのである。最先きに消化器に弛緩を來すからして折角に食した榮養食品も消化されず、吸收されず、其儘に排出されてしまう。結核患者が、得て下痢を起すのは全く之に因るのである。下痢をする、榮養が補給されぬ、從つて身體は衰弱し、體重は減少し、痩せ削られ、脉搏心動が不定又は頻數になり、從つて發熱となり盜汗となり不安となり、遂には不幸な轉歸を取るやうなことにもなるのである。

榮養補給をするだけで、結核病の多くは治癒するのであるけれども、其の補給が、命の有るなしに拘らず、消化吸收といふことであるから、なか〳〵困難であることは以上に說く通りである。

此の點が結核病の治療には最も意を拂はれなければならない重要な、さうして又唯一な治療上の鍵なのである。だから最近の結核病治療法としては、

（一）體溫の異常なる場合に食慾を害してまで安靜仰臥を守らしむべきか？

（二）食慾を害するはよろしからずとして、多少の體溫異常あるも寧ろ輕き運動を許す可きか？

といふことが研究の問題とされてゐるくらゐ、それほど食慾關係即ち榮養補給の方法に就て意を拂はれるやうになつて居るくらゐなのである。

それであり乍ら結核患者は食慾不振で臨牀看護者を困らせるのである。此の場合に若し消化吸收を助ける藥、たしかに利く藥があるならば、此の榮養療法は容易に行はれ、榮養補給の目的は達せられ、病人皆々助かることであるとは、醫家は勿論一般の久しく希望希求してゐた所である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所が世上に消化藥は多いけれども、能く其目的を達するものは尠い。殊に、それらの大多數は澱粉卽ち含水炭素性食物の消化藥であり、其他所謂胃の藥といふものは、重曹、クミチンキ、ゲンチヤナ等、すべて制酸其他一時抑壓への對症的の藥であつて、根本的に胃腸の働きを助け、胃腸に代つて食品を消化してくれるものは殆んど見るを得ないのであつた。魚鳥肉類、卵類、牛乳等の蛋白性食品を消化させる藥も無いではない。古いペプシン以下二三はあるのであるが、それ等は皆完全ではない、卽ち其の成物は酸の中では效果を現はしてもアルカリーの中では效果を認めぬといつたやうに、酸性中でもアルカリー中でも將た中性でも働き得るといふ藥はなかつた。言ひ換へると酸のある胃の中でも、アルカリ性の腸の中でも、何れでも完全に働らき得る藥はなかつたのである。これは醫師は勿論遺憾のことゝし、結核其他消化に關する疾患の治療界で、多年困り拔いて居つた所である。

恐らく斯うした事は、多くの人の餘り深く氣にも留めず、日新醫學の敎ふる結核病の唯一療法たる、自然榮養療法を有效ならしめ徹底せしることが出來ずに、病菌の思ふが儘の跳梁に委せてゐたのであらう、是れは人類として誠に悲むべく、痛むべきことなのである。既に自然が吾等に疾病といふ害敵を與ふる以上は、自然は又吾等に害敵を驅逐する何者かを與へて居るに相違ないとは、太古に於ける吾等の祖先以來、皆これを信ぜんとしてゐる所である。之れを信ずるによつて草を嘗めて藥を敎へたといふ神農氏以來、多くの先哲が吾等に幾多の自然的藥物を發見して現代の吾等に傳へたのであつた。熱に對するアスピリンの原料たる揚曹や若くはキニーネの如き、麻醉作用の阿片（オピウム）の如き、下劑としてのカスカラ樹を初め多くの植物から得る催下劑の如き、現時廣く用ゐられ其効力の認められて居る西洋醫法の藥品も、皆な蒙昧なる原始人より傳へられた所の自然植物よりして精製したものである。現代に於て最も効果の確かであるとして常用せられる所の藥物は、主として原始人の發見によるものであることは、眞に不思議なくらゐな事實である。天が既に吾等に結核病を與へた以上は、又た之れを治する何物かを附與してゐるに相違ない、それが今日迄見當らないのは、未だ〱吾等人類の努力搜求の足らない爲めなのであるとは、曾て或學者によつて稱へられ、又た其努力搜求を慫慂激勵せられた所であつた。併し、結核病に直接作用する藥物は、不幸未だ發見されない。それは結核の病理上、發見されないのが當然らしくも思はしめるものがあるのである。結核菌は多く肺といふ呼吸器に占據する、占據した部位は忽ち結締織で包圍してしまう、其結締織の硬い爲めに血液は其病竈部に通はぬやうになる。故に如何に藥品を飲用乃至注射しても血液の循環によつて其病菌の占據して居る部位へ藥を作用せしめることが出來ない。是れは藥物療法に直接的なものがなく、さうして、自然榮養療法を第一とせねばならぬ理由でもあるのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

併し自然は吾等人類に惠むに、結核病に對する間接乍ら有効に働く藥物を以てしてゐることが發見せらるゝに至つた。それは南洋土人が、酷熱の氣溫の下に、能く其生命を保つに必要な食餌たるパパヤ樹果であつた。

それは今より卅年前のことであつた。十九世紀の末葉の頃、獨逸の或る科學者が、南洋寶庫の視察の旅をした。土人が鳥や獸の肉を或種の植物の葉に包んで一定時間放置した後に取出して食用に供するのを見た。土人に其理由を質問して見ると、斯うして置けば肉が軟かくなるのだといふ。不思議に思つて其植物に就て研究して見ると、其植物の枝葉及幼果には驚くべき蛋白消化力を有する液汁を含んでゐることを發見した。土人は肉食の後には必ず其果實をも食用することを聞知して、苦心研究した揚句、其幼果汁から蛋白消化藥を製出することに成功した。其植物はパパヤと呼ばれる所から、其藥にパパインといふ名を附した。

パパインは啻に驚異すべき蛋白の消化分解力を有つてゐた。普通の獸肉は胃の中では三乃至四時間を費さねば消化しないのであるが、此の藥液中では三十分にして完全に消化し去るのであつた。獸肉消化のみならず、其他にも種々の作用があるだらうと、其後研究が進められたが、總ての蛋白物質は皆な消化分解せられる所から、ヂフテリヤの義膜も之れを塗れば溶解し、顏を洗へば垢が一時に取去られて美しくなり、酒造に應用すれば酒の原料の蛋白が即時分解せられて良酒が三日にして出來上るといふやうな眞に奇蹟的な效果を現すのであつた。

治療界はいふまでもなく此藥を歡迎せうとした。けれども幼果から取出す液汁は極めて少量である、千個の果實を使用して僅かに一ポンドの藥しか得られぬ、千個の果實より液汁を採取するには非常な勞力を要する。殊に熱帶下に於て採取した液汁であるから少時にして醗酵變敗する。製藥の操作は非常に困難である所から、一ポンド九百圓といふ價でなければ市場へ提供することが出來なかつたのである。故に折角に發見された此の天與の靈藥も、遂に普及的に汎く應用せらるゝに至らず、單に消化學の試驗に際し蛋白を分解させる試驗用藥としてのみ、需用されてゐたのであつた。

併し折角に蛋白を完全に消化分解させる天與の靈藥があり乍ら、之れを應用することが出來ないのは殘念至極のことであるとして起つたのが吾が少壯な科學者數氏であつた。其人々は十年に近き歲月を猛烈熱雨の南洋に送つて、以て之れが研究に從事した、化學者のみならず、農學博士も加はつてパパヤ樹の栽培法をも研究して改良を加へたりした。元來パパヤ樹は熱帶直下の植物で吾が臺灣にも琉球にも産するが、これを南洋のものに比すれば非常に其果實が少く且つ豐富ではない。吾が研究隊の一行は多年、マニラに留つて、遂に其處から二十哩奥地の山間に適當な栽培地を發見するに至り、且つ果汁採取法を考案した結果、新工夫のもとに從來よりは極めて容易に採取し精製する方法をも見出して、全く製藥

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上に成功の域に達したのであつた。

パパヤをマニラで栽培するには、苗を植ゑると能く八ヶ月にして生長し果實を結ぶ、併しマニラは例の恐る可き颱風の發源地帶である。日本人たる吾等としては到底想像し得られぬ程の強烈な颱風が吹きまくる結果として折角に植付けたパパヤ樹も颱風の爲め一掃し盡されることすらある。此損害を大概植付の四割と見ねばならない。愈々生長して果實が出來ると、其幼果のやゝ熟期に入らうとする以前に木にある儘に傷を與へて、其傷口にコップをあてゝ流れ出る汁を受容れるのである。此の採取には多く土人が從事するけれども、一人にして一日能く六十果の汁を採り得るものは稀である。さうして其採取した液汁は即時直ちに製藥に所置せねばならぬ、それは液を粉末とする操作で、なか／＼面倒なものである。斯うした幾多の困難な作業の後に出來上つたのが、パパインといふ藥で、これは獨逸人の造つたものよりかも遙かに蛋白の消化分解力が強い爲めに、別にパパイシンの名を與へて、新たに我が同胞の病弱者に提供することになつたさうである。

提供する意味は固より蛋白消化劑といふに在る。これ從來の蛋白消化藥と異つて、酸にもアルカリの中にも能く働き得る完全なものである。故に一般消化不良に應用させたいのであるが、何しろ採取困難にして製藥費の高くつくものであるから、先づ榮養療法を第一とする肺結核患者に頒布して、氣の毒な境遇から免れしめようと期待してゐる。

榮養療法を必要とする結核患者は前にも言つた如く榮養の補給を必要とする、其補給は消化吸收に在る。さうして榮養品は主として肉類等の蛋白性食品より得ねばならぬ。所が蛋白性食品は總じて消化の悪いものである。その上に結核患者は消化力を害せられてゐるから、食物は消化吸收されない。然るに斯うした強力なパパイシンがあるからには、之れさへ用ふれば、食用した蛋白質は胃や腸の力をまたず、忽ち消化分解されて、容易に消化器管の内壁より吸收されて身體の榮養となるのである。

此のパパイシンの消化力に就ては、多くの學者が皆な實驗の結果驚かれてゐる。其一二を記すと、

大阪醫科大學藥物學教授長阪仙太郎博士は

一定の方法により蛋白消化力を精査したるに效力優秀にして他の蛋白消化劑に比すれば其作用確實なるのみならず少量にして能く其效果を致し、酸、アルカリー、又は中性に於て之を營み得る特色は推賞するに足るべし

と賞揚せられ、又東京佐多病院長醫學博士佐多芳久先生は、胃のアトニー患者、神經性消化不良、及食道癌患者等に應用實驗せられた結果、

一、現代最優秀の蛋白消化劑なり

二、總ての消化不良、食慾不進を來す疾患に用ゐて確實に有效なり

三、依て慢性疾患、胃腸病、殊に諸種の結核性疾患の如きは本劑を用ふることによりて蛋白消化を助け、榮養を可良ならし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

め、體力を増進せしめ、病勢を抑制することを得べきを想はしむ

との結論を與へて居られる。其他諸博士も皆異口同音に此のパパヤの果汁の效果に驚いて居られるのである。

パパヤ果は、臺灣産のものが、東京の市場にも來る併し百匁が六十錢といふ高價を呼んでゐる、百匁の果からは殆んど何等有效な蛋白消化量を含んで居らぬ、のみならず食用に供し得る熟果は、既に蛋白を消化し得る力を全然失つてゐて殆んどバナヽと何等效力の差なきものである、單に滋養になるのみで、消化作用は持ち得ないのである。それでも此果物の東京市價を以てパパイシンの一ポンド價を割出すと、實に三千圓となるわけである。斯くの如く果實は驚歎的市價を持つてゐるのである。

パパイシンの消化力は專門家でなくとも素人でも直ぐ簡單に手輕に實驗して見ることが出來る。

○刺身一きれの中にパパイシン○、一瓦といふ少量を入れ、温湯（六十度）二勺ぐらゐを加へて、かきまぜると三分間で刺身が消化されてしまう。

○牛肉を大豆位な大さに切つて、十匁はかりを温湯中（六十度位）に入れ、パパイシン○、二を加へて攪拌すると十分間で消化を始め三十分で殆んど消化され糊狀になり肉の纖維を殘すだけになる。一時間では全く液狀に分解消化されてしまう。

斯程に素人の人々にも明かに消化力の分かる藥は今日迄には絶無である。蛋白消化に於て特に絶無である。

一たび此パパヤ果汁からの製劑が發賣に出來ることが風聞されてから、獨逸及亞米利加等から取引の註文が來るといふのは、本邦人の誇りである。南洋の特産も斯うした科學的研究によりて今後も益々開發せられたいものである。

此のパパイシンこそは、攝取した蛋白性食品を、吾々の胃腸に代つて、完全に消化させ、榮養として容易に吸收させる卓效を有してゐるものである以上は、此藥物の應用によつて、榮養療法は徹底的に行はれるに至り、吾國民の最大重要問題にして又我國民の寶を無暗に掠奪し去る所の彼の忌む可き肺結核も亦甚だ恐るゝに足らず、之れが普及によつて、大に結核の猖獗の勢を殺ぎ、國民死亡率をも緩和することが出來るであらうことは、お互に同胞の爲め慶賀に堪へない所である。

×　×　×　×

因に

此果汁から製出した新製劑パパイシンに、猶ほ澱粉消化劑並に脂肪分解劑等をも配伍し蛋白質のみならず總ての食品を完全に消化せしめるといふ理想の下に『パンゲスチン』といふ新藥を創製して一般の需要に應ずるさうで既に多數肺結核患者に應用して著效を擧げて居るさうである。詳細は廣告欄を參照せらるれば明かである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

肺結核防滅の新劑パパヤ果汁の話

本誌は其九月號に於て結核に包閉された日本に就て專門大家の說話を掲げ以て大に之れが豫防撲滅に裨補する所があつた。

夫れ等諸博士の說を綜合すると、日新の醫學に於ては

結核病は少しも恐るゝに足らず、百人中九十人までは自然治癒を取るものであること

さうして療法としては藥物療法、理學的療法等は著效なく、有效なものは

唯一つ自然榮養療法あるのみなること

が認められてゐるのであつた。

唯一の結核療法たる榮養療法は、溫和なる陽光、新鮮なる空氣、蛋白性榮養品の攝取等であるが、その內蛋白性榮養品攝取の場合、患者は消化力を阻害せられ、食慾減退を來すから、折角に食べた蛋白性食餌も消化吸收されず、反つて下痢の原因となり、遂には胃腸を損じ益々衰弱を加へる。

百人中の九十人迄も自然治癒を取るほど治し易き肺結核に、不治不幸者の多いのは全く此の榮養補給の困難なるに原因する

故に結核の治ると否とは一にかゝつて消化吸收力の健否如何に在るとも言へる。

若し蛋白質を消化せしめる强力な藥物が在つて、胃腸の負擔を輕減し消化力を助成して食物を消化吸收させてくれるならば結核其他總ての衰弱性患者に取つては眞に地獄で如來樣に出逢つたやうなものである。

結核性其他一般衰弱性患者は悉く助かつて治癒の喜悅を得られるのである

幸なる哉、自然は吾等人類に、さうした藥物を惠んでゐる、今日迄は吾等が其惠まれた物を利用しなかつたのみである。それは熱帶樹果、パパヤの未熟果と其樹葉にのみ含まれてゐる所の

蛋白酵素ネオパパイシンである

パパイシンは從來の蛋白消化藥と異り、酸性にも中性にもアルカリ性にも其何れにも耐へて働き得る、多年醫學界の渴仰を滿たした藥物で、胃酸の中でも腸のアルカリ性中でも平氣で働らき得る眞に理想的な蛋白消化藥である。卽ち

大阪醫科大學藥物學敎授醫學博士長崎仙太郎先生は「效力優秀にして他の蛋白消化劑に比すれば其作用確實なるのみならす、少量にして能く其效果を致し、酸、アルカリ、又は中性に於て之を營

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

み得る特色は推奨するに足る』と報告せられ。又東京の佐多病院長醫學博士佐多芳久先生は

ネオパパイシンは現代最優秀の蛋白質消化劑なり……慢性疾患、胃腸病殊に諸種の結核性疾患の如きは本劑を用ふることによりて蛋白消化を助け、榮養を可良ならしめ病勢を抑制するを得ることあるべきを思はしむ

と、詳細なる實驗の結果を報告せられてゐるのである。

結核防滅の捷徑は、學理上よりするも、將た實驗上よりするも、ネオパパイシンの應用か最も有利であることは今や疑なきことゝなつた。ネオパパイシンの服用によつてのみ、蛋白性榮養品たる魚鳥獸肉や卵や牛乳を十分に消化され吸收され、血液となり、筋肉となり、榮養が增進し、能く病菌に打勝つからして、體重增加し、食慾が進み、異常であつた體溫が降下整正し、咳嗽、咯痰、盜汗等の諸症狀も次第に消失して、遂には病菌を征伏し、以て自然治癒を助け、本來の健康に復し、歡喜欣悅の光明世界に復歸することを得るのである。此以外に現代日新醫學の認め、多數實驗の證明する療法はないと確信するのである。

併し蛋白質のみが消化しても、澱粉や脂肪はどうするかと心配する人もあらう、實に左程心配するに足らないのだが、念の爲めに左樣な人々の爲めに、パパイシンを主劑とし、澱粉及脂肪を分解消化する藥品を配伍した所の

パンゲスチン(パパイシンC)

を創製して頒布することにした。是れなら圓滿具足、眞に榮養療法を補助促進藥の理想に恰當したものである。

パンゲスチンの消化力は素人にも直ぐ分明する。豆大に細切した生肉十匁にパンゲスチン〇・五瓦を加へ溫湯中にて攪拌すれば、胃腸なら三四時間を要するもの僅かに三十分間で完全消化される。本劑の效力は斯くして素人にも了解せられるのである。故に

結核性諸疾患。消化器系諸疾患。特に神經性消化不良。小兒消化不良。其他榮養補給を必要とする諸疾患並に其回復期

に應用して回春本復を容易ならしめるのである

用法　每食後〇・六瓦(大人量)
定價　半ヶ月分金七圓。一ヶ月分金拾貳圓。
輸入元　東京丸ノ內パパイシン社

吾社はパパイシン社の製劑を信用すべきものと認め其普及に贊成するが故に、結核號を發行せし因緣より、吾社內に代理部を新設し、一般申込に應ぜしむることゝせり。

發賣所　改造社代理部

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

最新刊

ルイズ・フィスシャー著
荒畑寒村譯

石油帝國主義

（四六判上製）

定價壹圓五拾錢
送料拾八錢

最近十年間の世界經濟の進展は歐亞兩洲に跨がる夥しき石油資源と此れを圍繞する帝國主義諸列强間の石油爭奪を外にしては理解し得られない。暗澹たる經濟的無政府と血腥き政治的紛亂とを國際政局の上にはらみつつ頭のテッペンより足の尖端まで武裝せる帝國主義諸國家間の石油奪爭戰は世界再分割の國際的伏魔殿たる、かのゼノア、チュネーブ其他無數の外交的紛亂の眞因であつた。世界經濟は今や資本主義凋落の深淵に戰慄した。本書は此等石油帝國主義戰裡に於ける世界經濟進展の活舞臺、國際政治的外交問題の眞因を闡明して餘す處なく譯文の平明は內容の深奧と相俟つて、現下かまびすしき帝國主義諸問題解決の寶典として一讀卷を措く能はざらしむるものなる事を疑はない。

發兌
東京市麴町區內幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二番

改造社

社會科學 十月特輯
マルクス主義全解

マルクス主義の普及は今、怒濤の如く國境を飛び越えて、全人類の心臟と心臟とを結ぶ革命的な世界觀となつた。然るに未だ、その唯物辯證法に發するマルクス主義の全體系は、系統的に把握するに甚だ不便を免れない。其處にマルクス主義の骨抜き俗惡化の種々相がある。本誌はマルクス主義の全體系を大衆に容易に把握せしめんとする抱負の下に本特輯を刊行する。解說の該博、行文の平俗なる、これこそ大衆啓蒙の指南車として「あらゆる人民の層の中へ行く」階級的寶典である。

定價金壹圓五拾錢

改造社

再版出來

- 唯物辯證法と唯物史觀……河野密
- 帝國主義論大意……猪俣津南雄
- 無産政黨と勞働組合……山川均
- 階級論……田所輝明
- 資本論入門……エンゲルス
- マルクス經濟學……（山田盛太郎 藤井米三）
- 社會主義の婦人觀……山川菊榮
- 東洋植民地に於ける革命運動の諸問題……キタヤゴロツキー
- レーニン主義におけるマルクス主義の展開……佐野學

- 勞働組合運動の二潮流……荒畑寒村
- 觀念形態一般についてのノート……青野季吉
- マルクス主義農業理論の史的發展……村山藤四郎
- 人口論……淡德三郎
- マルクス・エンゲルスとイギリスの資本主義……西雅雄
- 地代論解說……北浦千太郎
- ロシヤに於ける勞農黨内の論爭……荒川實藏
- 國家理論の一適用……淺野晃
- 民族問題に關する抄見……青山眞一
- マルクス・エンゲルス文獻考證……リヤザノフ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, UCHISAIWAI-CHO KOJIMACHI-KU, TOKIO.

豫約募集

海舟全集

全十巻

我が轉換機の偉人勝海舟は大江戸を兵燹の裡から救出した。浮沈の巖頭にあつた我國を新生日本へと誘導した。己れを空ふして幾十萬、否幾千萬の大衆を光明づけた彼の哲人的行動は日本民衆の永久に忘るべからざるところ。大西鄕をして幕府にも人傑ありと嗟嘆せしめしは偶然でない。彼は哲人にして詩人、俳聖にして聖僧、大外交家にして大豫言者、大財政家であつた。皓々たる人格の光、高邁なる識見、學殖の深度一世に比なき偉人であつた。大悲劇！兵は敗れ、幕府は倒れ、自れは氷川に敗将としての風月に生く。稜々の氣、誇れる常将軍も追ばぬ襟度風懐あり。そのうち、彼は浩瀚なる文想、經綸を遺す。その零墨斷章に至るまであらゆる變革の風雲を含み、經濟、社會、政治の轉換事情を髣髴せしむ。此全集は封建國民より大日本國民となり、世界人となれる我民衆の必ず書架に置くべき書である。

東京市麹町内幸町一ノ三
改造社
振替東京八四〇二番

一代の傑人勝海舟が心血の記録
五十年來嚴封せられし一大文獻

全集書目

第一、二巻　開國起原
第三、四、五巻　吹塵錄、吹塵餘錄
第六、七巻　陸軍歷史
第八巻　海軍歷史
第九巻　海舟日記、鶺の芙の記、建言書類、鷄肋、解難錄、夢碎獨語、海舟詩稿、歌集、隨筆、海舟淸譚、逸話
第十巻　亡友帖、流芳遺墨、追讃一話、印譜、年譜、肖像寫眞、往復書翰集

豫約略規

（配本）昭和三年一月第一巻刊行毎月一回配本
（體裁）菊判上製毎巻平均約七百頁　石井柏亭裝幀
（申込金）金四圓（全拂の方は不要）
（會費）毎月拂金四圓、全拂十巻三十八圓
（送料）一冊に付内地金二十七錢、書留は十錢增
（〆切）昭和二年十二月二十日限り

内容見本　御申込次第進呈

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA